



Agile Product Lifecycle Management

管理者ガイド

v9.3.0.2

部品番号 B61291-01

2011 年 2 月

オラクル社の著作権について

Copyright © 1995, 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

目次

オラクル社の著作権について	ii
第 1 章 概要	1
Agile PLM管理者へようこそ	1
Agile PLMマニュアルの入手方法	1
PLM管理者向けのマニュアル	1
Agile Configuration Propagation (ACP) ガイド	1
Agile PLMスタート・ガイド	1
PLMソリューション固有のユーザー・ガイド	2
Agile Product Lifecycle Managementのソリューション	2
管理者の新機能	3
リリース 9.3 で追加された機能拡張	3
インストール・テストに関する注意	3
第 2 章 管理者スタート・ガイド	5
概要	5
管理者としてAgileクライアントにログインする	5
新規管理者ユーザーを作成する	6
Agile PLMで使用される日時	8
サーバー・レベル	8
クライアント・レベル	8
例	8
管理者ユーザー・インタフェース	8
Javaクライアントでデータをフィルタリングする	9
Javaクライアントの管理者ノード	9
管理機能	13
Javaクライアントの「例」ノード	14
Webクライアントの管理	14
Agile PLM変数	15
デフォルト値変数	15
\$CURRENTREV条件の論理	15
権限マスクの条件変数	16
ワークフローの割当ておよびステータス・タイプの変数	17
ルーティング管理者変数	18
第 3 章 Javaクライアントの管理者機能	19
API名	19
Javaクライアントの「API名」フィールド	19

管理者レポート.....	20
「管理」 ツールバーのユーティリティ	22
ユーザーに電子メールで通知する	22
グローバル置換.....	22
グローバル置換プロパティ	23
履歴の追跡	24
オブジェクト履歴と管理オブジェクト履歴	24
管理者履歴.....	25
管理者履歴のページ.....	26
削除されたオブジェクトの履歴	26
Agileのオブジェクトの削除	26
管理者設定のインポートとエクスポート	28
エンコード・タイプ	28
管理者エクスポート	29
管理者インポート	29
プロセス拡張ライブラリ	30
多言語サポート.....	30
多言語機能でサポートされている管理者データ	31
サポートされている管理者ノード	31
サポートされている事前定義のシステム・オブジェクト	33
多言語機能でサポートされていない管理者データ	33
ユーザー設定	33
システム設定	33
ユーザーが入力する値/文字列.....	33
"01"、"02"、"03" などが付加された属性名	33
多言語用にシステムを設定する	34
第 4 章 Webクライアントの管理者機能.....	35
Webクライアントの管理者の概要	35
ダッシュボードの設定.....	36
ビジュアル・テーマ.....	36
テーマ・オプションを選択する	36
Oracleロゴを置換する	37
スタイル・スキームを変更する	38
16 進形式の色の指定.....	39
レポート・テンプレート.....	40
レポート・テンプレートの管理（適用先の選択肢）	40
動的テンプレートと静的テンプレート	40
レポート・テンプレートの作成	41
BI Publisherでサポートされていないレポート	41
ログの設定	42

- Agileサポート使用専用 -	42
キャッシュ・ヘルス・モニタ	43
キャッシュ・ヘルス・モニタの機能	43
Javaクライアント管理者を使用した自動同期化	44
エラーのログを記録し、デバッグする	45
手動トリガの場合:.....	46
自動トリガの場合:.....	46
Agileのオブジェクトの削除	47
第5章 クラス.....	49
ビジネス・オブジェクトにAgile PLMクラスを設定する	49
Agile PLMクラス構成.....	50
ルーティング可能/不可能なオブジェクト	51
Agile PLMのオブジェクト・タイプ	51
Agile PLMクラスを表示する	51
Agile PLMのインストールされるオブジェクト・タイプ.....	52
Agile PLMのインストールされるルーティング不可能なオブジェクト・タイプ	53
オブジェクト・タイプを無効にする	55
ライフサイクル・フェーズをカスタマイズする	56
ライフサイクル・フェーズを変更する	56
ライフサイクル・フェーズを追加する	57
ライフサイクル・フェーズを削除する	57
サブクラスを設定する	58
作業を開始する前に	59
サブクラスのプロパティを表示する	59
自動採番ソース・プロパティを変更する	59
手動番号割当てを禁止する	60
サブクラス名または説明を変更する	60
「拠点別のBOM」プロパティを変更する	61
新規サブクラスを作成する	61
サブクラスを削除する	62
タブを設定する.....	63
「ページ2」タブについて	63
「ページ3」タブについて	63
タブを表示、非表示にする、または名前を変更する	64
タブの形式を変更する.....	64
フォーム・タブの属性の順序を変更する	65
テーブル・タブの属性の順序を変更する	66
「ページ2」タブまたは「ページ3」タブを設定する	66

「ページ 2」 タブのユーザー作成属性について	66
「ページ 2」 タブと「ページ 3」 タブを設定するためのガイドライン	67
第 1 段階: 「ページ 2」 タブまたは「ページ 3」 タブの属性を設定する	67
作業を開始する前に	68
第 2 段階: タブを設定する	69
見出し属性を使用する	69
「ページ 2」 タブまたは「ページ 3」 タブを削除する	70
属性、ユーザー設定フィールド、および読取りフィールド	71
ユーザー定義フィールド	71
ユーザー定義フィールドを使用できる場所	72
ユーザー定義フィールドが完全にサポートされている場所:	72
ユーザー定義フィールドが一部サポートされている場所:	73
ユーザー定義フィールドを使用できない場所	73
読取りフィールド	73
アイテムと変更で一貫性がある読取りフィールド	74
「BOM」 および「製造元」 タブの読取りフィールド	74
属性を定義する	75
属性のタイプについて	76
属性のプロパティを定義する	77
オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外	81
画像属性	82
属性を設定する	82
属性を変更する	82
複数のタブに共通する属性のプロパティを一致させる	83
デフォルト値を設定する	83
タブの属性を表示または非表示にする	84
フィールド・ラベルまたはテーブルの列名を編集する	84
サブクラスに対しカスタム・アイコンを使用する	84
オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス	85
Agileで生成される簡易アクセス・オブジェクトURL	85
ユーザーが生成するスマート・オブジェクトURLの形式	86
簡易アクセス・オブジェクトURLを使用する	87
第 6 章 文字セット	89
使用可能な文字セット	89
文字セットの作成	90
文字セットの変更	91
第 7 章 リスト	93
概要	93
ルーティング管理者リスト	93
カスタム・リストを作成し、リストに追加する	94
様々な種類のリスト	95

シングルリストのリスト	96
マルチリストのリスト	96
カスケード・リスト	97
動的リスト	97
リストを設定する	97
リストのデフォルト値を設定する	99
Webクライアント_93でのリストの表示タイプ	100
不良モード・リスト	100
カスケード・リストを作成する	100
第8章 プロセス拡張.....	103
プロセス拡張の概要	103
プロセス拡張ライブラリを使用する	104
プロセス拡張をクラスに割り当てる	106
プロセス拡張をワークフローのステータスに割り当てる	106
第9章 自動採番.....	109
自動採番の使用方法	109
自動採番ソースを変更する	109
自動採番ソースについて	110
自動採番ソースを設定する	112
自動採番の接頭辞または接尾辞を変更する	113
自動採番ソースの使用箇所を変更する	114
カスタム自動採番	114
タイムアウト	114
新しい自動採番ソースを作成する	114
作業を開始する前に	115
自動採番ソースを削除する	116
第10章 条件.....	117
再利用可能な条件について	117
再利用可能な条件を検索する	118
再利用可能な条件を表示する	118
条件のウィンドウとタブ	119
新規条件を作成する	119
既存の再利用可能な条件を変更する	121
再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを使用する	121
再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを指定した場合の変更の検索条件	121
対象アイテムの名前における「アイテム」と「部品」の相違	122
対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する	123

\$CURRENTREVと\$LATESTREVをアイテムの条件で使用する	123
「タイトル・ブロック・リビジョン」について.....	124
\$CURRENTREV変数の使用ルール.....	124
\$LATESTREV変数の使用ルール	125
\$CURRENTREVおよび\$LATESTREV条件を使用したアイテム関係の作成.....	126
第 11 章 ワークフロー.....	127
ワークフローで変更管理プロセスを自動化する方法	127
ワークフローを変更する	128
ワークフローの基本.....	128
ルーティング管理者	128
その他のワークフローの基本	129
できるだけ簡潔に.....	130
デフォルトのステータス・ベースのワークフロー	131
ステータス・タイプの定義.....	131
「名前を付けて保存」で新規ワークフローを作成する	133
一般のワークフロー・プロパティ	134
「一般情報」タブ	134
ワークフロー名について	135
ワークフロー条件基準タイプ	135
ステータス条件基準タイプ	136
カスタム・ワークフローを作成し、使用する	137
作業を開始する前に	138
カスタム・ワークフローの例	138
ワークフローを作成する場合のガイドライン.....	139
新規ワークフローを作成する	140
新規ワークフローが有効にされた場合	142
ユーザー・グループに送信する	142
ステータス・プロパティの定義.....	143
終了時に検索条件が適用されない場合は通知する.....	143
手動による次の有効なステータス	143
変更を進める際に送信スリップの内容を保存する	144
以前および現在のCCBメンバーすべてに、ワークフロー・ステータスのコメントと通知を 送信する	144
自動昇格.....	144
自動昇格が失敗した場合は通知する	145
同じステータスの変更内での複数回にわたる自動昇格の失敗に対処する機能.....	146
アドホック承認者/オブザーバ.....	146
却下された場合はステータスを変更する	146
却下された場合は通知する	147

督促期間.....	147
レビュー・エスカレーション期間	148
指定されているエスカレーション担当者	148
承認のためのコメント	149
却下のためのコメント	149
検索条件プロパティの定義	149
承認者とオブザーバ	149
条件使用状況	150
デフォルトの変更分析者/コンポーネント・エンジニア	150
当該ステータスになり次第通知する	151
リリース検証を実行する	151
検証の2つのレベル	152
ステータス検証、または進行の条件に対する現在のステータスの検証	152
リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証	152
必須終了フィールド	154
ワークフローの機能をテストする	154
ワークフローの検証分野	154
テスト時のヒント	155
ワークフローを実働環境に適用する	156
ワークフローの適用に関するヒント	156
ワークフローの適用プロセス	156
アクティブなワークフローを変更する	156
有効なワークフローのプロパティを変更する	157
ワークフローを無効にする、変更する、再度有効にする場合	157
ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できる変更	157
ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できない変更	158
ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする	158
第12章 アカウント規約	161
作業を開始する前に	161
アカウント規約を設定する	161
ロックアウトされたアカウントの管理者リセット	163
第13章 ユーザー	165
新規ユーザーを追加する	165
作業を開始する前に	166
ユーザー名について	167
パスワードについて	167
内部ユーザー・パスワードを変更する	168
管理者のノードとしてのLDAP	169
ユーザー・プロパティを変更する	169

ユーザーのパスワードを変更する	169
ユーザーの役割の割当てを変更する	170
定義済ユーザー・プロパティ	170
第 14 章 ユーザー・グループ	177
新規ユーザー・グループを作成する	177
ユーザー・グループ・プロパティ	179
ユーザー・グループを変更する	180
エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる	181
変更の承認者としてユーザー・グループを追加する	182
ユーザー・グループをパートナーとして設定する	183
第 15 章 サプライヤ・グループ	185
概要	185
プロパティ	185
実行できるアクション	185
第 16 章 役割	187
Agile PLMの役割と権限の概要	187
権限マスクについて	187
役割を理解する	188
「役割」ウィンドウを表示する	189
役割を表示する	189
役割使用のガイドライン	190
デフォルトのAgile PLM役割	190
管理者の役割	191
一般機能に関するAgile PLMの役割	191
Engineering Collaborationの役割	192
Product Collaborationの役割	193
Product Quality Managementの役割	193
Product Cost Managementの役割	194
Product Portfolio Managementの役割	194
レポートの役割	195
Agile Content Serviceの役割	195
Product Governance & Complianceの役割	195
Agile Configuration Propagationの役割	196
役割の例	196
限定された役割	196
役割ベースの機能拡張	197
ユーザー管理者の機能拡張	197
詳細検索のセキュリティ	197
役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス	197
Agile Configuration Propagationを使用して管理設定を復元する	198

セキュリティとメンテナンス推奨プラン	198
データベースのバックアップ手順	199
Agile PLM管理者の設定をエクスポートする	199
レポートを実行する	199
役割を使用する	200
役割を変更する	200
属性の構築とテスト、読取り/変更権限、役割	202
新規役割を作成する	203
作業を開始する前に	203
「名前を付けて保存」を使用して新規役割を作成する	203
新規役割を最初から作成する	204
役割の例を使用する	205
役割の例内の権限マスクの例	205
「名前を付けて保存」を使用して役割の例から新規役割を作成する	206
役割を削除する	206
第 17 章 権限と権限マスク	209
権限と権限マスクについて	209
権限と権限マスクを理解する	209
権限マスクを表示する	210
権限マスクのプロパティを表示する	210
「権限」ウィンドウから実行するタスク	212
役割から権限マスクを削除する	212
役割に権限マスクを追加する	213
デフォルトのAgile PLM権限	213
特定の権限に関する詳細	218
特定の権限の詳細	219
承認者/オブザーバの追加と削除	219
ステータスの変更	219
エクスポート	220
全検索表示	220
認可	220
オーバーライド	221
フォルダ・バージョンのバージョン権限	222
権限委譲（自分）	222
権限委譲（他のユーザー）	223
拠点毎変更の「名前を付けて保存」に関する制限	223
確認通知	223
権限マスクの構成要素	223
すべての権限マスクの要素となる権限、オブジェクト・タイプ、および条件	224
少数の権限が基本となる「適用先」を含む権限マスク	224
権限マスクの図解	225
権限マスクに名前を付ける	225
権限マスクの構成要素 1: 権限	225
権限マスクの構成要素 2: オブジェクト・タイプ	227

権限マスクの構成要素 3: 条件	228
権限マスクの構成要素 4: 属性	228
権限マスクを有効にする	229
権限マスクを変更する	230
権限マスク条件を変更する	230
特定の権限の「適用先」プロパティ	230
管理者権限と適用先機能	231
特殊な管理者権限マスク	232
ダッシュボード管理	234
プロジェクトの要約ページの設定	235
新規権限マスクを作成する	235
作業を開始する前に	235
「名前を付けて保存」を使用して権限マスクをコピーする	236
新規権限マスクを最初から作成する	236
条件と適用先属性のオプションを組み合わせる	237
ディスカバリ権限と読取り権限	239
ディスカバリ権限	239
ディスカバリ権限と拠点	240
ディスカバリ権限とライフサイクル・フェーズ	240
関連するスマートルール	240
ディスカバリ権限およびレポート	240
ディスカバリ権限と読取り権限の関係	241
フィールドレベルでの読取り権限	241
「読取り」権限マスクの「適用先」フィールドを変更する	242
フィールドレベルでの読取り権限	242
フィールド・レベルでの読取りによるテーブルの表示	243
変更権限	244
変更の基本とルール	244
\$CURRENTREVを使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する	245
適用可能なアイテム属性	245
\$CURRENTREV条件の論理	245
特定の使用事例に対する条件の作成	246
ユーザー作成条件を適用する	248
権限マスクの条件変数を使用する	249
第 18 章 その他のユーザー設定	251
ユーザー・モニタ	251
「ユーザー・モニタ」ウィンドウを更新する	251
ユーザー・セッションを終了する	251
ユーザーを削除する/削除を取り消す	252
ユーザー・グループを削除する	252

ユーザー・グループをハード削除する	253
ユーザー・グループの削除を取り消す	253
第 19 章 スマートルール	255
スマートルールの設定を変更する	255
スマートルールの定義	256
添付ファイルの削除を許可	256
PPMから自動インストール	256
見積履歴の自動公表	256
BOM多段階重複	256
承認者が却下した変更のステータスを変更する	257
回答のない変更のステータスを変更する	257
オブザーバが却下した変更のステータスを変更する	257
拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン	257
ファイルをリビジョンにコピーする	258
降格時に承認者を削除する	258
降格時にサインオフから削除する	259
詳細タイム・シート入力	259
オブジェクト・テーブルのディスカバリ	259
結果テーブルのディスカバリ	259
BOMテーブルの表示	260
構造テーブルの表示	260
見出し番号の重複	260
参照指示の重複	261
有効日の順序	261
有効期間の間隔	261
有効期間の重複	262
完了したアクティビティに対するアクティビティとゲートの追加を有効化	262
削除、アーカイブ、および委任に関するコメントを有効にする	262
部品分類と部品ファミリーを同一にする	262
アイテムを先にリリース	262
PSRに対する多数のアイテム	262
PSRに対する多数のQCR	263
製造元部品に複数アイテム	263
材料価格計算フィールドの負の値	263
材料価格フィールドの負の値	263
その他価格フィールドの負の値	263
提案されたプログラムに関してリソース・プール所有者に通知	263
価格ライン有効期間の重複	263

アイテムと関連PSRを含むPSR	263
レッドライン属性	264
変更指示の製造元をレッドラインする	264
未解決アイテムとともにQCRをリリースする	264
リリース済みビジョンが必要	264
ECOを未リリースにする	264
ECRを未リリースにする	265
期限付き変更指示を未リリースにする	265
製造元変更を未リリースにする	265
出荷停止を未リリースにする	265
ワークフロー照合基準属性の変更	265
材料価格フィールドのゼロの値	265
材料価格計算フィールドのゼロの値	266
その他価格フィールドのゼロの値	266
第 20 章 Viewer とファイル	267
概要	267
Viewer とファイルのプロパティ	267
ファイルのページと保持のオプション	268
自動ページ有効	268
ファイル・バージョンの保持	269
レッドライン・ファイルのページ	269
これらのサムネイル画像タイプを直接使用	269
サムネイル生成オプション	270
CAD リビジョン BOM 属性	270
「ファイル関連付け」タブ	271
AutoVue for Agile の「サポートされるファイル・タイプ」を指定する	271
バナーとウォーターマークを印刷する	273
バナーとウォーターマークのプロパティ	275
バナーテキストと位置を指定する	276
第 21 章 通知	277
通知の概要	277
通知のプレリミナリ管理設定	277
デフォルト通知	278
デフォルト通知の属性	278
イベント・ベース通知	279
イベント・ベース通知の属性	280
イベント・ベース通知を使用する	281

通知を作成する	281
通知を削除する	282
プログラムで通知を起動する	282
デフォルト通知およびイベント・ベース通知を使用する.....	283
通知を編集する	283
件名と本文テキストを入力する	283
「名前を付けて保存」を使用して通知を作成する.....	284
第 22 章 全文検索.....	285
全文検索の制限.....	285
全文検索プロパティ.....	286
添付ファイルのインデックス	287
FileLoadの使用と新規ファイルのインデックス	287
「添付ファイル・インデックス」ボタン	287
ストップ・ワード.....	287
第 23 章 私の割当て.....	289
概要	289
カラム	289
第 24 章 単位 (UOM)	291
計測カテゴリと単位を作成する	291
第 25 章 その他のシステム設定.....	293
組織のプロファイル.....	293
通貨換算レート.....	293
第 26 章 ダッシュボード管理.....	295
ダッシュボード・タブを表示する	295
ダッシュボード・タブを追加する	295
ダッシュボード・タブを削除する	295
オプションのタブにテーブルを追加する	296
テーブルにデータを追加する	296
オプションのタブにチャートを追加する	297
オプションのタブに詳細検索を追加する	298
詳細検索のテーブルを設定する	298
オプション・テーブルのカスタム (URL) プロセス拡張を追加する.....	299
タブ内のテーブル行を再配置する	299
オプションのタブを表示する	299
第 27 章 ソリューション固有の管理.....	301
マニュアル	301

管理者の設定可能なソリューション	301
第 28 章 イベント管理.....	303
イベント管理の概要.....	303
事前の設定.....	303
イベント管理ノードへのアクセス.....	303
グローバル・イベント管理.....	304
イベントに関連するシステム全体のプリファレンス	304
「イベント管理」ノード・フォルダ	304
プロセス拡張ノードと通知ノードの概要.....	305
イベント確認通知の構造.....	305
イベント確認通知コンポーネントの相互接続.....	307
すべてのオブジェクト・タイプにある「イベント確認通知受信者」タブ	308
ハンドラ・タイプ.....	309
プロセス拡張ベースのハンドラ・タイプ	309
Javaプロセス拡張	309
スクリプト・プロセス拡張.....	310
通知ベースのハンドラ・タイプ	310
通知マスク	310
「イベント・ハンドラ・タイプ」ノードに関する注意事項.....	310
イベント・タイプ.....	310
デフォルトのイベント・タイプ	311
単一アクションによる複数トリガー	314
\$AGILEUSERというユーザー.....	314
「イベント」ノードでの作業.....	315
イベント・マスクの属性.....	315
イベント・マスクの作成に関するチェックリスト.....	316
イベント・マスクの作成.....	317
「イベント・ハンドラ」ノードでの作業	317
ハンドラ・マスクの属性.....	318
ハンドラ・マスク内の役割.....	318
ハンドラ・マスクの作成に関するチェックリスト.....	319
ハンドラ・マスクの作成.....	319
「イベント確認通知受信者」ノードでの作業	320
確認通知受信者作成時のダイアログでのフィルタリング	320
確認通知受信者マスクの属性	321
トリガー・タイプ: 「事前」と「事後」	323
実行モード: 「同期」または「非同期」	323
確認通知受信者マスクの作成に関するチェックリスト.....	324
確認通知受信者マスクの作成	324
サンプル・イベント確認通知.....	325
イベントの監視.....	326

イベント・ハンドラ・モニター	326
イベント・ハンドラ・モニターの属性	326
イベント・ログ・ファイル	327
オブジェクトの「履歴」タブ	328
イベント・コンポーネントの管理	328
グローバル・イベント管理	328
イベント・タイプを無効にした場合	329
ハンドラ・タイプを無効にした場合	329
イベント・マスクを無効にした場合	329
ハンドラ・マスクを無効にした場合	329
確認通知受信者マスクを無効にした場合	330
選択したイベント・タイプに関する詳細	330
選択したグローバル・イベント・タイプに関する詳細	330
ツール・メニューの拡張	330
スケジュール済イベント	330
選択した汎用オブジェクト・ベースのイベント・タイプに関する詳細	330
「アクション」メニューの拡張	330
オブジェクトの作成	331
オブジェクトの削除	331
ファイル取出し	331
関係の更新	332
テーブルの更新	332
タイトル・ブロックの更新	333
選択した特定オブジェクト・ベースのイベント・タイプに関する詳細	333
ソーシング・オブジェクトのステータスの変更	333
ワークフロー・ベースのイベント・タイプに関する詳細	333
ワークフローの承認	334
ワークフローの検証	334
ワークフローの承認者またはオブザーバの変更	334
ワークフローのステータスの変更	334
ワークフローのコメント	335
ワークフローのエスカレーション	335
ワークフローの昇格失敗	335
ワークフローの却下	335
ワークフローの督促	336
第 29 章 スクリプトおよびサンプル・イベント確認通知	337
Agile PLMのスク립トの概要	337
Groovyスクリプト言語の使用	338
スクリプト・ベースのハンドラの選択	338
ハンドラ・マスクの開発または更新の手順	338
ハンドラ・マスクでのスクリプトの編集	339
スクリプトのログ機能	339
スクリプト・ベースのイベント確認通知の指定に関するチェックリスト	340

スクリプトを使用したサンプル・イベント確認通知	341
アイテムの説明の更新	341
イベント・マスク: [タイトル・ブロックの更新 アイテム]	341
ハンドラ・マスク: [アイテムの説明の更新]	341
確認通知受信者マスク: [タイトル・ブロックの更新 アイテム アイテムの説明の更新]	342
作成ユーザーへのアイテム確定時の通知	342
イベント・マスク: [確定(アイテム)]	343
ハンドラ・マスク: [確定済アイテム]	343
確認通知受信者マスク: [確定(アイテム) 確定済アイテム]	343
変更分析者の設定	343
イベント・マスク: [ワークフローの変更分析者]	344
ハンドラ・マスク: [変更分析者の設定]	344
確認通知受信者マスク [ワークフローの変更分析者 変更分析者の設定]	345
新規部品へのドキュメントの追加	345
イベント・マスク: [部品の作成]	345
ハンドラ・マスク: [新規部品へのドキュメントの追加]	346
確認通知受信者マスク:	347
対象アイテム・テーブル更新時の通知	347
イベント・マスク: [テーブルの更新 ECO]	348
通知マスク: [ECO対象アイテム変更の通知]	348
確認通知受信者マスク: [テーブルの更新 ECO アイテムECO対象アイテム変更の通知]	348
第 30 章 場所およびファイル管理	351
Webクライアント通知を設定する	351
Javaクライアントの通知を設定する	352
Agile PLMにおけるファイル管理	352
Agileファイル管理サーバー	352
ファイル格納庫	353
FileLoadの使用と新規ファイルのインデックス	353
分散ファイル管理	353
「ファイルの複製を最適化」システム全体のプリファレンス	353
分散型環境でAgileサーバーのAutoVueを使用する	353
分散ファイル・マネージャの機能	353
ファイル管理セキュリティ	354
サーバー・セキュリティ	354
クライアント・アクセス・セキュリティ	354
ファイル・チェックサム処理	354
ファイル・マネージャを設定する	356
カスタム・ファイル格納庫を作成する	358
ファイル・マネージャの定義を変更する	359
ファイル・マネージャの定義またはファイル・サーバーを削除する	359
ユーザーの優先ファイル・マネージャを設定する	359
旧バージョンのファイルをパージする	360

添付ファイルのページ・タスクの使用ケース	360
第 31 章 データベース.....	361
データベース設定の構成.....	361
データベースのプロパティ	361
第 32 章 LDAP.....	363
Agile PLMでLDAPに対してWebLogic Serverを設定する	363
Oracle Internet DirectoryでWebLogicを設定する	364
Sun Java System Directory ServerでWebLogicを設定する	365
Microsoft Active Directory ServerでWebLogicを設定する.....	367
LDAPディレクトリでユーザーを作成する.....	369
複数のLDAPユーザー・リポジトリを設定する	369
拡張されたLDAP	369
LDAPとAgile PLMを同期化する	370
LDAP管理のユーザー・プロパティ.....	370
Agile LDAPの設定	371
ディレクトリ・サービスの接続パラメータ	371
定義済設定パラメータ	371
複数のディレクトリ・サーバーのサポート	373
設定スクリプト.....	373
ユーザーとユーザー・グループを同期化する.....	374
第 33 章 システム全体のプリファレンス	375
プリファレンスの変更.....	375
デフォルトのシステム全体のプリファレンス	375
プリファレンスの詳細（一部）	381
Agileドライブ	381
プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする.....	381
パスワードのリセット許可	381
タブとともに値をコピー	382
コンテンツ・サービス待機時間	382
コンテンツ・サービスの最大再試行数	382
参照指示範囲の展開縮小を許可する	382
サインオフ・ユーザー二重識別	383
「言語」タブ.....	383
第 34 章 ライセンス.....	385
「一般情報」タブ.....	385
「モジュール」タブ.....	386

第 35 章 タスク・モニタおよびタスクの設定	387
タスク・モニタ	387
タスクの設定	388
第 36 章 添付ファイルの管理	391
添付ファイルまたはデザインに関する企業のニーズを評価する	391
添付ファイルに関する管理者設定	391
Agile PLMにおけるファイル管理	391
スマートルールが添付ファイルに与える影響	392
ファイルをリビジョンにコピーする	392
拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン	393
プリファレンスが添付ファイルに与える影響	393
ファイル名の接頭辞	393
ファイルの複製を最適化	393
添付ファイルとして保存する	393
プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする	395
「ユーザー・プロファイル」の「ファイル・プロダクティビティ・ユーザー・プリファレンス」	395
添付ファイルに対する役割と権限を割り当てる	396
添付ファイル権限	396
役割における添付ファイル機能権限	397
変更権限と添付ファイル	398
マークアップ・サブクラス	400
マークアップの移動	400
レッドライン・マークアップに関するデフォルトの役割と権限	401
レッドライン・マークアップ権限のガイドライン	402
ドキュメント管理の機能拡張	402
全バージョンの表示	402
添付ファイル・サイズの制限	403
チェックイン・ユーザーの識別	403
URLは最大 255 文字	403
添付ファイルへの簡易アクセスURLを生成する	403
Agileで生成される添付ファイルへの簡易アクセスURL	404
ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLの形式	404
アイテムの添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLの形式	404
ファイル・フォルダへのスマートな簡易アクセスURLの形式	406
プログラム・コンテンツへのスマートな簡易アクセスURLの形式	407
簡易アクセスURLを使用して添付ファイルにアクセスする	408
第 37 章 デザインの管理	409
デザインに関する企業のニーズを評価する	409
デザイン・データ・モデルの目的	409
デザイン・クラスを使用した構造のデザインの利点	410

デザイン・クラスの概要.....	410
全バージョンの表示.....	411
デザイン・クラスのタブ.....	411
「タイトル・ブロック」タブ.....	411
「ファイル」タブ.....	412
「構造」タブ.....	413
「送信スリップ」タブ.....	413
「使用箇所」タブ.....	413
デザインに関する管理者設定.....	414
「構造テーブルの表示」スマートルール.....	414
デザイン固有の役割と権限.....	414
第 38 章 Agile ドライブの管理.....	415
概要.....	415
ファイル管理.....	415
Agile ドライブの有効化.....	416
付録A シングル・サインオンの設定.....	417
PLMにおけるシングル・サインオンの概要.....	417
Windows NTLMを使用したSSOの設定と配置.....	418
SSOのNTLM認証.....	418
Windows NTLM用にSSOを設定する.....	418
IISプロキシを設定する.....	418
NTLM用にPLMを設定する.....	419
NTLMを配置する.....	420
セキュア・プロキシの場合.....	420
透過プロキシまたはプロキシなしの場合.....	420

はじめに

Agile PLMマニュアル・セットにはAdobe® Acrobat PDFファイルが含まれています。[Oracle Technology Network \(OTN\) Webサイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) には、Agile PLMの最新版のPDFファイルがあります。このWebサイトのマニュアルは、その場で表示することもダウンロードして使用することもできます。また、使用しているネットワーク上のAgile PLMマニュアル・フォルダにAgile PLMマニュアル (PDF) ファイルが格納されている場合もあります。詳細は、Agile管理者にお問い合わせください。

注意 PDFファイルを表示するには、Adobe Acrobat Readerのバージョン 7.0 以降 (無料) を使用する必要があります。このプログラムは、[Adobe社のWebサイト](http://www.adobe.com) (<http://www.adobe.com>) からダウンロードできます。

[Oracle Technology Network \(OTN\) Webサイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) は、Agile WebクライアントとAgile Javaクライアントのいずれの場合も、「ヘルプ」>「マニュアル」の順に選択してアクセスできます。さらに疑問点がある場合やサポートが必要な場合は、My Oracle Support (<https://support.oracle.com>) にお問い合わせください。

注意 Agile PLM マニュアルに関する問題について Oracle サポートにお問い合わせいただく前に、タイトル・ページにある部品番号をご準備ください。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800) 446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

Readme

Agile PLMの最新情報は、すべて[Oracle Technology Network \(OTN\) Webサイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) にあるReadmeファイルに記載されています。

Agile トレーニング支援

Agileトレーニングの講義内容詳細は、[Oracle University Webページ](http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html) (http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html) にアクセスしてください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関するの評価や言及は行っておりません。

この章のトピック

- Agile PLM管理者へようこそ 1
- 管理者の新機能 3

Agile PLM管理者へようこそ

Oracle の Agile Product Lifecycle Management (以降は Agile PLM または PLM と表記します) 向け『Agile PLM 管理者ガイド』へようこそ。

Agile PLMマニュアルの入手方法

Agile PLMマニュアルのセットは、次のWebサイトにあります。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>

PLM管理者向けのマニュアル

このマニュアルは、Agile PLM 管理者向けの主要なハンドブックです。PLM でユーザーやビジネス・オブジェクトを設定する際の包括的なリファレンスとなります。『Agile PLM 管理者ガイド』には、管理者ユーザー・インタフェースのほとんどのノードに関する説明が記載されています（管理者ユーザー・インタフェースの詳細は、次の章で説明します）。

ただし、管理者は様々な状況で、次に示す Agile PLM マニュアル・セット内の他のマニュアルを参照する必要があります。

Agile Configuration Propagation (ACP) ガイド

ACP は独立したユーティリティです。管理者はこのユーティリティを使用して、変更した管理者設定をテスト・システムから実働システムに継承できます。ACP ユーティリティには Agile Configuration Propagation ガイドという独自のマニュアルが付属しており、Agile 管理者がこのユーティリティをインストールして使用するための説明が記載されています。

Agile PLMスタート・ガイド

『Agile PLM スタート・ガイド』は、エンド・ユーザー向けの入門書を超えたマニュアルで、すべての Agile PLM ソリューションに共通する機能の詳細が記載されています。Agile 管理者は、次のような PLM の多くの機能について、このスタート・ガイドの参照が必須となります。

- Agile PLM ソリューションで使用される専門用語と概念
- 次のような一般機能
 - 検索

- ワークフロー
 - レポート
 - 添付ファイルおよびファイル管理
- Java クライアントおよび Web クライアントのユーザー・インタフェースと操作
- 通常、PLM 管理者は Java クライアントを使用して Agile システムを設定し、管理します。したがって、このマニュアル（『Agile PLM 管理者ガイド』）を読む前に、『Agile PLM スタート・ガイド』の第 2 章「Agile Java クライアントの操作」を参照してください。
 - Web クライアントを使用するほとんどの PLM ユーザーは、ユーザーの作成などの一部の管理タスクを Web クライアントで実行できます。『Agile PLM スタート・ガイド』の第 3 章「Agile Web クライアントの操作」を参照してください。

PLMソリューション固有のユーザー・ガイド

PLM ソリューションに関するほとんどのユーザー・ガイドには、管理者向けの章（または付録）が含まれています。これらの章には、各ソリューションに固有の設定や構成に関連する説明が記載されているため、自社が購入した各ソリューションについて必ず参照する必要があります。

たとえば、PLM のすべてのインストールには、Product Collaboration と呼ばれるソリューションが組み込まれています。『Agile PLM Product Collaboration ユーザー・ガイド』には、エンド・ユーザーではなく Agile 管理者専用の章があります。PLM の主なソリューションについては、次のセクションに示します。

Agile 管理者は、PLM ソリューションに関するエンド・ユーザー・マニュアルについてもよく理解している必要があります。エンド・ユーザー向けのマニュアルには、Agile 管理者がソリューションの目的やユーザー操作性の内容を把握するのに役立つ有用な情報が記載されています。

Agile Product Lifecycle Managementのソリューション

Agile Product Lifecycle Management (PLM) セットには、Java クライアントまたは Web クライアントからアクセス可能な次の製品ソリューションが組み込まれています。

- **Agile Product Collaboration (PC)** - 製品のライフサイクル全体を通し、社内組織と拡張されたサプライ・チェーンにわたって、プロダクト・レコード情報に関する管理およびコラボレーションを実現します。
- **Agile Product Portfolio Management (PPM)** - プロジェクトと製品情報を製品開発全体で統合することで、製品のポートフォリオとライフサイクル全体にわたるビジネス・プロセスを合理化します。
- **Agile Product Quality Management (PQM)** - 閉ループ方式の是正処置プロセスを使用して、製品デザインに関連付けられた顧客、サプライヤ、製品の品質に関する問題を管理します。
- **Agile Product Cost Management (PCM)** - 製品ライフサイクル全体にわたって製品コストを管理し、製品コストとコスト・プロセスを社内参加者と外部参加者の両方で同期化します。
- **Agile Product Governance & Compliance (PG&C)** - アイテムや製造元部品などにより含まれた、すべてのサブスタンスおよびマテリアルの管理と追跡を行い、企業がサブスタンス制限とレポート要求を満たし、リサイクル可能製品を設計し、適合性コストを最低限に抑え、将来の製品が非適合性を排除できるよう図ります。
- **Agile Engineering Collaboration (EC)** - エンジニアのデスクトップにある CAD デザイン・データを中央の PLM 製品レコードで直接管理することで、デザインと製品両方の BOM 変更プロセスを自動化し、IP 再利用をサポートします。

- **Agile Enterprise Visualization** - 拡張された企業全体で Web を介して元のドキュメント（オフィス、画像、図面、CAD）をビジュアル化、マークアップ、分析することで、元のオーサリング・ツールを使用したりニュートラル・フォーマットに変換する必要性をなくします。

前述の各製品ソリューションには個別のユーザー・ガイドがあり、PQM を除くすべてのユーザー・ガイドには、Agile 管理者向けの章が含まれています。

管理者の新機能

リリース 9.3 で追加された機能拡張

- 管理者における主な機能拡張は、自動プロセス拡張、スクリプト・プロセス拡張および柔軟な通知のためのイベント・フレームワークです。「システム設定」には「イベント管理」ノード・フォルダが追加されました。このノード・フォルダには 6 個の新規ノードが表示されます。詳細は、303 ページの「[イベント管理](#)」および 277 ページの「[通知](#)」を参照してください。
- Web クライアント管理者には多くの新機能があり、ユーザー・インタフェースの再設計が大幅に実施されました。詳細は、35 ページの「[Web クライアントの管理者機能](#)」を参照してください。
- 自動生成サムネイルおよび Agile PLM でのサムネイル表示オプションの詳細は、267 ページの「[Viewer とファイル](#)」を参照してください。
- 複数の新規役割が追加されました。使用可能な役割のリストは、187 ページの「[役割](#)」を参照してください。
- 8 個の新規プリファレンス（Agile ドライブやサムネイル・サポートなど）が使用可能です。詳細は、375 ページの「[プリファレンス](#)」を参照してください。
- プログラム基本クラスがプロジェクトに変更され、業界標準により適合するようになりました。
- **API 名:** 19 ページの「[API 名](#)」（概要の章）を参照してください。
- 「場所」には、オンライン・ヘルプ・マニュアルおよび User Productivity Kit (UPK) コンテンツにアクセスするための「オンライン・ヘルプ・マニュアル URL」フィールドが設定されました。詳細は、351 ページの「[場所](#)」を参照してください。

重要 Agile PLM 9.3 ではポータルはサポートされていません。「ポータル」タブは「場所」から削除されました。

インストール・テストに関する注意

このリリースを実働環境にインストールする前に、指定の開発サーバーにインストールしてテストしてください。開発環境は、正確なテスト結果を提供できるように、可能なかぎり厳密に実働環境をミラー化している必要があります。このリリースのインストールを検証し、最低限の配慮義務の一部として、統合が正しく機能していることを確認することが重要です。開発システムでのテスト中に気づいた問題や疑問を解決してから、このリリースを実働環境にインストールしてください。

管理者スタート・ガイド

この章のトピック

■ 概要	5
■ 管理者としてAgileクライアントにログインする	5
■ 新規管理者ユーザーを作成する	6
■ Agile PLMで使用される日時	8
■ 管理者ユーザー・インタフェース	8
■ Agile PLM変数	15

概要

この章では、Agile 管理者のための基本情報、または管理者ユーザー・インタフェースのノードでは指定されていない機能に関する情報について説明します。

Agile PLM を管理するプライマリ・クライアントは、Agile の Java クライアントです。

Java クライアントを使用するには、最初に、これをコンピュータにインストールする必要があります。Java クライアントは Java WebStart テクノロジを使用してソフトウェアをダウンロードし、これを最新状態に保ちます。Java クライアントのインストールについては、アプリケーション・サーバー別の Agile PLM インストール・ガイドを参照してください。

Web クライアントは Web ベースのアプリケーションです。Web クライアントを実行するには、ブラウザを使用できます。詳細は、Agile PLM Capacity Planning ガイドに記載されています。

Agile PLM クライアントの管理機能を参照するには、ユーザーに管理者権限マスクが与えられている必要があります。admin ユーザー・アカウントは、管理者ノードと設定を閲覧できるように、あらかじめ設定されています。管理者アカウントを使用して新規ユーザーを作成し、管理者の役割を割り当てることができます。詳細は、6 ページの「[新規管理者ユーザーを作成する](#)」を参照してください。

重要 231 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」の情報を参照してください。すべての管理者に関連する権限マスクにとって重要な部分である「適用先」プロパティに関する情報が記載されています。現時点では、このページに説明されているすべての内容を把握する必要はありませんが、「適用先」プロパティについての知識を得ることは重要です。

管理者としてAgileクライアントにログインする

セキュリティ上の理由により、管理者アカウントのパスワードは、自分のみが知り得る内容に変更できます。詳細は、169 ページの「[ユーザーのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

Agile Java クライアントを起動し、管理者としてログインする手順は、次のとおりです。

1. デスクトップの「Agile」アイコンをダブルクリックするか、「スタート」>「Agile 9.3」の順に選択します。または、システム管理者から提供された URL から Agile を起動します。「ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. ユーザー名 **admin**（または **administrator**）とパスワード **agile** を入力します。ユーザー名は大文字と小文字を区別しませんが、パスワードは大文字と小文字を区別します。
 3. 「**OK**」をクリックします。ログイン・プロセスが完了します。次の図のような Java クライアント・ウィンドウが開き、通常はナビゲーション・ウィンドウの前面に「**検索**」タブが表示されます。
 4. ナビゲーション・ウィンドウで「**管理**」タブをクリック（左側）し、管理ノードを表示します。
- 管理者権限マスク（または役割）を割り当てられていないユーザーの場合は、「**管理**」タブが表示されず、「**検索**」タブと「**分析とレポート**」タブのみが表示されます。

注意 Java クライアントの「**検索**」タブと「**分析とレポート**」タブについては、『Agile PLM スタート・ガイド』の「Java クライアントの操作」に記載されています。


Agile Webクライアントを起動し、管理者としてログインする手順は、次のとおりです。

1. ブラウザを開きます。
2. Agile Web クライアントのブックマークがある場合は、それをクリックするか、次のような URL を入力します。

<http://webserver.domainname.com/Agile/PLMServlet>

注意 Web サーバーに対し完全なドメイン名を入力します。Web クライアント URL の大文字と小文字は区別されます。

「**ログイン**」ページが開きます。

3. ユーザー名 **admin** とパスワード **agile** を入力します。ユーザー名は大文字と小文字を区別しませんが、パスワードは大文字と小文字を区別します。
 4. 「**ログイン**」ボタンをクリックします。入力を間違えた場合は、「**クリア**」をクリックしてユーザー名とパスワードを再入力します。
- ログイン・プロセスが完了します。
5. 初めてログインすると、「ユーザー・プロファイル」ページが開きます。必要な情報を入力します。入力完了したら、「**保存**」をクリックします。
 6. この情報の入力を終わると、Agile Web クライアントが開きます。
 7. Web クライアントの管理機能を開くには、メニュー・バーの「**ツールおよび設定**」 ▼を選択し、「**管理**」を選択します。次に、表示されたメニュー・オプションから適切な管理アクションを選択します。

新規管理者ユーザーを作成する

Agile PLM では、役割と権限を使用して、PLM ソリューションや他の機能に対するアクセス権を割り当てます。Agile 管理者には通常、PLM システム全体に対するアクセス権があります。

また、ユーザーには、Agile PLM のサブセットまたは一部を管理できるように、適切な権限を付与できます。権限が限定されたこれらの PLM 管理者は、無条件にユーザー管理者と呼ばれることがよくありますが、アシスタント管理者、役割管理者、ワークフロー管理者など、他の名前も有用です。

注意 このセクションとこのマニュアルの大部分は、管理者権限マスクまたはユーザー管理者権限マスクがあるユーザーを対象にしています。これらは、システムに影響を与える強力な役割です。これらを、管理者という語を含む、PLMの他のソリューション固有の役割（例: ディスカッション管理者やプログラム管理者）と混同しないでください。190ページの「[デフォルトのAgile PLM役割](#)」にある役割の体系を参照してください。

社内に複数の Agile PLM 管理者が必要かどうかに関係なく、プライマリ管理者が作業できない場合に備えて少なくとも1人のユーザーを補助 PLM 管理者として割り当てておくことをお勧めします。


このセクションでは、JavaクライアントまたはWebクライアントを使用し、新規ユーザーに管理者権限を割り当てる方法を説明しています。Agile PLMユーザーの作成方法とユーザー・プロパティの設定方法に関する詳細は、165ページの「[ユーザー](#)」を参照してください。

重要 「適用先」プロパティ（特に、管理者関連の権限マスクで使用するプロパティ）を理解しておくことが重要です。これは、「Javaクライアント」>「管理」ツリーで管理者ユーザーに表示されるノードがこのプロパティによって制御されるためです。次の管理者固有の権限マスクでは、「適用先」プロパティの使用が非常に重要です。管理者（権限マスク）、ユーザー管理者用の管理アクセス（権限マスク）、およびユーザー管理者（権限マスク）。231ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」および233ページの「[管理者アシスタントの構築オプション](#)」を参照してください。

Javaクライアントで新規管理者ユーザーを作成する手順は、次のとおりです。

1. Java クライアントを起動し、admin としてログインします。
2. 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
3. 「新規作成」ボタンをクリックします。「ユーザー作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
4. 「ユーザーID」、「名」、「姓」、「電子メール」、および「パスワード」を入力します。「ログイン・パスワードの再入力」フィールドでパスワードを再入力します。
5. 「OK」をクリックします。新規ユーザーの設定ウィンドウが表示されます。
6. 「役割」リストをクリックし、「管理者」の役割を選択して「OK」をクリックします。
7. 必要に応じてその他のユーザー・プロパティを入力し、「保存」をクリックします。

Webクライアントで新規管理者ユーザーを作成する手順は、次のとおりです。

1. ブラウザで、Web クライアント URL に進み、admin としてログインします。
2. 「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー」の順にクリックします。「ユーザー」ページが表示されます。
3. 「追加」をクリックします。
4. 「ユーザー名」と「ログイン・パスワード」を入力します。「ログイン・パスワードの再入力」フィールドでパスワードを再入力します。
5. 次に、「名前」、「姓」、および「電子メール」を入力します。
6. 「一般情報」ページが表示されます。
7. 「プロフィール」見出しの下にある「役割」リストを開き、フィールドの右側にあるパレットの起動  ボタンをクリックします。

8. 「管理者」の役割を選択し、「OK」をクリックします。
9. 必要に応じてその他のユーザー・プロパティを入力し、「保存」をクリックします。

Agile PLMで使用される日時

サーバー・レベル

オブジェクト関連のイベント（Agile アプリケーション・サーバー（AAS）で記録される）の日時形式は、国際標準に準拠しています。

標準の日付フォーマットは、年（4桁）/月/日（yyyy/MM/dd）です。

標準の時刻フォーマットは、時間（GMT で 24 時間表記）:分:秒（hh:mm:ss）です。

クライアント・レベル

一方、Agile PLMクライアントの日時形式は、「推奨時間フォーマット」、「推奨日付フォーマット」、および「タイム・ゾーン」のユーザー・プロファイル設定によって異なります。詳細は、170ページの「[定義済ユーザー・プロパティ](#)」を参照してください。ユーザーが指定する設定は、日付の保存形式に影響を与えません。

例

オブジェクト関連のイベントは、AAS での発生順に Agile PLM に記録されます。ただし、オブジェクトの「履歴」タブには、イベント発生時点のクライアント現地時間が表示されます。つまり、Agile PLM クライアントによって記録された時間です。

たとえば、Jerry がカリフォルニアのサンノゼで、午後 5 時に Agile オブジェクトを作成したとします。オブジェクトが作成されたサーバーはサンノゼにあるため、そのサーバーでは、オブジェクトの作成時刻は午後 5 時と記録されます。Jerry の「タイム・ゾーン」ユーザー・プリファレンスは、ニューヨーク（米国東部）に設定されています。したがって、Jerry のコンピュータでは、このオブジェクトの「履歴」タブに、ニューヨーク時間である午後 8 時にオブジェクトが作成されたことが示されます。

注意 すべてのユーザーの「タイム・ゾーン」は管理者が設定しますが、ユーザーはこの設定を変更できません。ユーザーはタイム・ゾーンを適切に設定する必要があります。適切に設定されていない場合は、ビジネス・オブジェクトの履歴に、誤った時間が表示されます。

管理者ユーザー・インタフェース

このマニュアルでは、Java クライアントのほとんどの管理者ノードについて説明しています。ただし、第 1 章に記載したように、ソリューション固有のノード（PC、PCM、PPM、ACS、および PG&C）の説明は、それぞれのユーザー・ガイドに移動しました。

Javaクライアントでデータをフィルタリングする

フィルタ・バー（「テーブル検索」と呼ばれることもあります）を使用すると、次のノードでオブジェクトを検索できます。「リスト」、「条件」、「ユーザー」、「役割」、「権限」、「通知」、「イベント管理」、「部品分類」ノード、および「管理履歴」ウィンドウ（「管理」タブ・ツールバーから利用可能）。

Javaクライアントでフィルタ・バーを使用する手順は、次のとおりです。

1. フィルタ・バーの「フィルタ条件」ドロップダウン・リストで値を選択します。
「フィルタ条件」リストは、フィルタ対象となるオブジェクトのタイプにより異なります。たとえば、ユーザーを検索している場合は、「名前」、「姓」、「ユーザーID」、「勤務先電話」、「電子メール」などを選択できます。
2. 「条件」ドロップダウン・リストから「含む」、「先頭から一致する」、「すべて表示」などの演算子を選択します。
3. テキスト・ボックスに検索する値を入力します。
4. 「適用」をクリックします。

Javaクライアントの管理者ノード

次の表には、Java クライアントにある Agile PLM 管理者ノードが一覧表示されています。

Webクライアントでのみ使用できる管理機能については、35ページの「[Webクライアントの管理者機能](#)」を参照してください。

企業では、Agile PLM のビジネス・ソリューションをすべて購入しているとはかぎりません。この場合、一部は非表示となります。

ノード	説明
データ設定	
クラス	ビジネス・オブジェクトとその属性、ユーザー設定フィールド、およびその他のプロパティを定義し、管理します。
文字セット	テキスト属性を管理するために使用される有効な文字のリストを設定します。
リスト	複数のクラス間で使用されるリストを管理します。ユーザーやアイテムなどのオブジェクトの動的リストも含まれます。
プロセス拡張	カスタム・アクションを定義して、ユーザーに応じたワークフローによって起動されるカスタム・アクション、Agile PLM クライアントを使用してアクセスできるカスタム・ツール、カスタム自動採番、カスタム・レポートを作成することにより、Agile PLM システムの機能を拡張します。
自動採番	Agile PLM でのオブジェクトの自動採番に使用する番号ソースを設定します。
条件	検索条件、権限マスク、ワークフロー設定に使用する条件オブジェクトを定義します。

ノード	説明
ワークフロー設定	
ワークフロー	ワークフローを設定、変更、作成し、変更管理プロセスにおける変更の進行状況を追跡します。
ユーザー設定	
アカウント規約	システム全体のパスワードの期限、長さ、固有性を設定します。
ユーザー	システムに新規 Agile PLM ユーザーを追加し、既存のユーザーのプロパティ（パスワード、ユーザー名、役割およびユーザー・グループの割り当てなど）を変更します。
ユーザー・グループ	ユーザー・グループを定義し、ユーザーをグループに割り当てます。
サプライヤ・グループ	見積依頼の処理中にサプライヤを選択します。管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル・サプライヤ・グループを設定します。
役割	Agile PLM でグループや個々のユーザーが実行できるアクションを制御する、デフォルトの役割とカスタマイズした役割を定義します。
権限	ユーザーの役割に組み込まれる権限と権限マスクを定義します。
ユーザー・モニタ	現在ログインしているユーザーを表示し、ユーザー・セッションを終了します。
削除されたユーザー	必要に応じて、削除されたユーザーの削除を解除します。削除されたユーザーのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
削除されたユーザー・グループ	必要に応じて、削除されたユーザー・グループの削除を解除します。削除されたユーザー・グループのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
システム設定	
スマートルール	変更管理プロセスを一貫させるルールを管理します。
Viewer とファイル	Agile PLM オブジェクトに添付されるファイルのプリファレンスを定義し、レッドラインと添付ファイルに Viewer の設定、バナー、ウォーターマークを定義します。
通知	通知のアドレスとコンテンツに使用するテンプレートをカスタマイズします。
全文検索	添付ファイルの索引を管理します。
私の割当て	ユーザーが Web クライアントのホーム・ページの「私の割当て」タブをクリックしたときに表示される内容を設定します。
UOM	単位を管理します。
組織のプロファイル	会社に関する有用な情報を保存します。
通貨換算レート	システム内通貨換算用の通貨換算レート・テーブルを管理します。
ダッシュボード管理	ダッシュボードを有効または無効にし、タブの名前を変更します。
Product Cost Management - PCM ノードについては、『Product Cost Management ユーザー・ガイド』に記載されています。	

ノード	説明
出荷先の場所	見積依頼の価格を定義する際に計算に入れるデータ。
見積依頼取引条件	サプライヤが見積依頼取引条件に電子的に合意するまで、そのサプライヤの見積依頼へのアクセスを制限します。
Product Portfolio Management - PPM ノードについては、『Product Portfolio Management ユーザー・ガイド』に記載されています。	
ステータス・ノード: コスト、品質、リソース、スケジュール	コスト、品質、リソース、スケジュールの分野におけるプロジェクトの目標が、現時点で達成されつつあるのか、現時点では達成されていないのか、目標からかなり外れているのかを報告します。
デフォルトの役割	ユーザーにタスクが委任されたとき、または Microsoft Project とそのユーザーおよび役割が Agile PLM に公表されたときに、どの役割を自動的にユーザーに割り当てるかを指定します。
UI 設定データ	「プロジェクトの要約」ページおよび「コンテンツ」タブのポップアップ・ウィンドウを設定します。
Agile Content Service - ACS ノードについては、Agile Content Service ユーザー・ガイドに記載されています。	
確認通知受信者	転送の詳細をすべて指定したプロファイルを作成します。
送信先	転送の出力ファイルの送信先を定義します。
イベント	転送がいつ実行されるかを定義します。
フィルタ	転送の内容を定義します。
パッケージ・サービス	Agile 対 Agile の通信を行うために Web サービス用のターゲット Agile PLM システムを設定します。これらのフィルタは、Agile PLM のエクスポート・プロセスでも使用されます。
回答サービス	データのリモート受信者からの受信確認。
Product Governance and Compliance - PG&C ノードについては、『Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』に記載されています。	
サインオフ・メッセージ	デklarレーションをバイヤー/顧客に提出する場合に、情報サプライヤが合意し、サインオフする必要があるメッセージを定義します。
適合性ロールアップのスケジュール	システムでスケジュール済ロールアップが実行される頻度、および開始時刻を定義します。
適合性ロールアップのルールの設定	デklarレーションに関するサプライヤの回答の要素を管理します。これらの要素は、適合性ロールアップの結果に影響を与える可能性があります。
サプライヤ・デklarレーションのプロセス拡張	情報サプライヤが受け取るデklarレーション要求のそれぞれのタイプで表示されるプロセス拡張を設定します。 注意 プロセス拡張自体はこのノード・フォルダで定義されません。
含有基準のマッピング	含有基準と「ページ 2」フィールド間のマッピングを設定します。「ページ 2」フィールドには、部品と含有基準の組合せごとに適合性の結果が表示されます。

ノード	説明
イベント管理 - イベント管理ノードについては、303ページの「 イベント管理 」に記載されています。	
イベント	イベント・マスクを作成し、管理します。
イベント・ハンドラ	「Java PX」および「スクリプト PX」ハンドラ・タイプに基づいて、ハンドラ・マスクを作成し、管理します。 3 番目のハンドラ・タイプである通知は、「通知」ノードで作成され、管理されます。
イベント確認通知受信者	確認通知受信者マスクを作成し、管理します。
イベント・タイプ	事前設定済のイベント・タイプのライブラリ。イベント・マスクは、これらのイベント・タイプに基づいています。
イベント・ハンドラ・タイプ	イベント・ハンドラ・タイプのライブラリ。「Java PX」、「スクリプト PX」および「通知」があります。
イベント・ハンドラ・モニター	イベント・ハンドラの起動や実行など、イベント・ハンドラのトランザクションを確認します。
サーバー設定	
場所	Agile アプリケーション・サーバー、ファイル・マネージャ、ポータルの場所を定義します。
データベース	データベースに関するシステム全体のプリファレンスを設定します。
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol システムおよび専用の LDAP サーバーを設定してユーザー・アカウントを作成します。
プリファレンス	Agile PLM システム全体のプリファレンスを設定します。
ライセンス	サーバー・ライセンスは製品に関連します。ユーザー・ライセンスは、Java クライアントおよび Web クライアントの個々のユーザーに関連します。
タスク・モニタ	スケジュールされた特定のタスクの進行状況を管理し追跡します。
タスクの設定	レポートや全文検索の索引作成などの、スケジュールされた様々なアクティビティを管理します。
「例」ノード	
役割の例	すべてのデフォルトの役割の読取り専用コピー
権限の例	すべてのデフォルトの権限の読取り専用コピー
条件の例	すべてのデフォルトの条件の読取り専用コピー

管理機能

Agile 管理者の管理機能は、事業の形態に合わせて Agile PLM を設定し、適合させるために使用されます。管理者ノードを使用することで、ユーザーを管理したり、会社の要求条件に応じて Agile PLM の各部分を調整できます。

- ユーザー、ユーザー・グループ、役割、および権限は、すべて「再利用可能なオブジェクト」です。これらによって、次のタスクなどにおいてユーザー・アカウントが管理しやすくなります。
 - ユーザーを追加/削除する、またはユーザーを停止に設定する
 - ユーザーをユーザー・グループに割り当てる（以前の部署およびグループの使用を統合する）
 - ユーザーに役割を割り当て、個々のユーザー向けに役割をカスタマイズする
 - 他のユーザーに対して、指定されたオブジェクトへの一時的なアクセス権限をユーザーが付与できるようにする
- 1 人または複数のユーザー管理者を作成し、ユーザー・アカウントの管理を分担する
- パスワードの期限、長さ、ルール、ロックアウト、固有性に関するシステム全体のアカウント規約を確立する
- Agile PLM システムがユーザーのアクションにどう応答するかを決定する、システム全体のビジネス・ルールを設定する
- 自動採番ソースを設定し、割り当てる
- 変更をルートするためのワークフローを作成する（各ワークフローには特定のステータスと設定が含まれ、各ステータスには特定の承認者、オブザーバ、必須フィールドが含まれる）
- 既存の Agile PLM クラスのサブクラスを作成し、新規オブジェクト・タイプを作成する
- Agile PLM クラスやサブクラス向けに、新規フィールド（数字フィールドや通貨フィールドも含む）の入ったタブを作成する
- Agile PLM ユーザー、オブジェクト、および管理データに関するレポートを生成する

Agile PLM実装のためのガイドライン

新しい Agile PLM システムを設定する際は、前述の表の一連の管理者ノードに従って PLM を設定します。この順序で各ノードのすべてを設定する必要はありませんが、会社のビジネス・オブジェクト、ユーザー、システム全体の設定を開始する前に、管理者のすべてのノードを理解することが大切です。

ノード・フォルダとノードのツリーが推奨される開始点ですが、包括的または認証されたシーケンスではありません。会社向けに Agile PLM の設定を開始し、そのプロセスが当初理解していた以上に広範囲にわたる場合は、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Oracle Agile PLM 販売代理店にご連絡ください。

Agile PLM を実際に起動する前に、十分なテストを行うことをお勧めします。Agile PLM を実働可能な状態に設定するには、1～数週間かかることもあります。設定に要する期間は、次の要因によって変わります。

- 設定する Agile ソリューションの数（「システム設定」の下にソリューション固有のノードがありますが、各ユーザー用のソリューションの構成は、設定の範囲を超えるプロセスです）
- 作成する Agile 「ユーザー」の数（その「役割」と「権限」を含みます）
- 会社のプロセスの複雑性（「クラス」、「自動採番」、「ワークフロー」、「場所」などのノードに反映されます）

オラクル社コンサルティングの Agile 担当には、Agile PLM のインストールと設定の協力を要請できます。

Javaクライアントの「例」ノード

「例」ノードは、デフォルトの Agile PLM 役割、権限マスク、再利用可能な条件のバックアップを提供する読取専用ノードです。例は有効化できませんが、システムにデフォルトの機能を復元するために使用できます。たとえば、デフォルトの役割の1つを修正し、これが正しく機能していないことを発見した場合は、例を保存して元の役割を復元できます。

例のノードをアクティブ・ノードとして保存する手順は、次のとおりです。

1. 「例」で「役割の例」、「権限の例」または「条件の例」をダブルクリックします。
2. フィルタ・バーを使用して保存する例を表示します。
3. 例をダブルクリックして開きます。
4. 「名前を付けて保存」ボタンをクリックします。「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスが開きます。
5. 新しい名前を入力し、「OK」をクリックします。

例のノードをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. 「例」で「役割の例」、「権限の例」または「条件の例」をダブルクリックします。
2. フィルタ・バーを使用してエクスポートする例を表示します。
3. 例を選択し、「エクスポート」ボタンをクリックします。
4. ファイルの名前を入力し、「保存」をクリックします。

注意 エクスポートしたファイルを別の Agile PLM システムにインポートできます。例をインポートすると、この例はアクティブな役割、権限マスク、または再利用可能な条件となります。管理データのインポートの詳細は、29ページの「[管理者インポート](#)」を参照してください。

Webクライアントの管理

ユーザーに管理者またはユーザー管理者が割り当てられている場合、そのユーザーは、Web クライアントで特定の管理者アクションを実行できます。

ユーザー管理タスクについては、「ユーザー」、「ユーザー・グループ」および「サプライヤ・グループ」タブの下で、「ツールおよび設定」>「アドレス帳」の順にクリックします。各機能については、次の場所に記載されています。

- ユーザー - 165ページの「[ユーザー](#)」を参照してください。
- ユーザー・グループ - 177ページの「[ユーザー・グループ](#)」を参照してください。
- サプライヤ・グループ - 185ページの「[サプライヤ・グループ](#)」を参照してください。

「ツールおよび設定」>「管理」の順にクリックし、フラヤアウト・リストから選択します。各機能については、次の場所に記載されています。

- ダッシュボードの設定 - 36ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照してください。
- ビジュアル・テーマ - 36ページの「[ビジュアル・テーマ](#)」を参照してください。
- レポート・テンプレート - 40ページの「[レポート・テンプレート](#)」を参照してください。
- ログの設定 - 42ページの「[ログの設定](#)」を参照してください。
- キャッシュ・ヘルス・モニタ - 43ページの「[キャッシュ・ヘルス・モニタ](#)」を参照してください。

Agile PLM変数

このセクションでは、システムを設定する際に使用できる Agile PLM 変数をご紹介します。

デフォルト値変数

次の変数は、属性プロパティのデフォルト値を設定するために使用します。

変数	説明
\$TODAY (大文字)	現在の日付 \$TODAY は、テキスト・タイプ属性ではサポートされていません。テキスト・タイプ属性のデフォルト値として\$TODAY を設定すると、時間は GMT で表示されます。
\$NOW (大文字)	現在の日付と時刻 \$NOW は、テキスト・タイプ属性ではサポートされていません。テキスト・タイプ属性のデフォルト値として\$NOW を設定すると、時間は GMT で表示されます。
\$LATESTREV (大文字)	アイテムの最新リビジョンがリリースされているかどうかを定義します。 次の値のみ有効です。 \$LATESTREV = Is Introductory \$LATESTREV = Is Released. 詳細は、123ページの「 \$CURRENTREVおよび\$LATESTREVを使用する 」を参照してください。
\$CURRENTREV (大文字)	オブジェクトの現在のリビジョン \$CURRENTREVの詳細は、次のトピック、123ページの「 \$CURRENTREVおよび\$LATESTREVを使用する 」、および245ページの「 \$CURRENTREVを使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する 」を参照してください。

\$CURRENTREV条件の論理

アイテム条件に\$CURRENTREVを使用すると、管理者は、表示されているリビジョンに基づいた権限の制御を組み込むことができます。複数の\$CURRENTREV条件の組合せを使用すると、管理者は、ユーザーが変更できるアイテムを限定的に定義できます。

\$CURRENTREV 条件は、次の値と「等しい」または「等しくない」となるように設定できます。

- \$LATEST (アイテムの最新のリリース済リビジョン)。
- ステータス・タイプの変数。例: \$STATUSTYPE.RELEASED。
- 特定のワークフローに関連するワークフロー・ステータス。例: デフォルトの変更指示.保留。

□ 初版リビジョンを評価するための特別な値。次の値があります。

- \$INTRODUCTORY_NOCHANGE
- \$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE
- \$INTRODUCTORY_RELEASEDCHANGE

\$CURRENTREV条件の値の詳細は、123ページの「[\\$CURRENTREVおよび\\$LATESTREVを使用する](#)」を参照してください。

権限マスクの条件変数

権限マスク条件を作成する際には、次の変数から選択できます。

変数	説明
\$AFFECTEDITEMTYPE	「対象アイテム」タブまたはフィールドにリストされているオブジェクトのタイプ（サブクラス）を挿入します。
\$ATTRIBUTENAME	「属性ウォーターマーク」フィールドで選択された属性の名前を挿入します (275ページの「 バナーとウォーターマークのプロパティ 」を参照)。
\$APPROVER	ワークフローの承認者の名前を挿入します。
\$CHECKOUTUSER	オブジェクトをチェックアウトしたユーザー。
\$CREATEUSER	オブジェクトを作成したユーザー。
\$CURRENTREV	リビジョン・リストから選択したオブジェクトの現在のリビジョン、または現在表示しているオブジェクトのリビジョン。（前述のトピックを参照。）
\$DEFAULTSITE	アイテムの製造拠点にユーザーのデフォルトの拠点を含めるかどうかを指定します。
\$LATEST	オブジェクトの最新リビジョン。具体的には、リリース済アイテムの最新のリリース済リビジョンまたは未リリース・アイテムの最新の保留中リビジョン（保留中の変更を含む）。\$LATESTは、読取りおよび変更権限でのみ意味をもちます。 \$LATESTは、等式の右側で使用されます。有効な使用方法: \$CURRENTREV (等しい, 等しくない) \$LATEST. \$LATESTに関する詳細は、126ページの「 \$CURRENTREVおよび\$LATESTREV条件を使用したアイテム関係の作成 」を参照してください。
\$LATESTFILEVERSION	最新のファイル・フォルダ・バージョンです。
\$MAINORG	サプライヤ・ユーザーは、自社のみでなく、パイヤー会社の全ユーザーの読取りおよび検出ができます(「\$USERORG」変数が単独で扱います)。サプライヤ・ユーザーは他のサプライヤ組織からユーザーを読み取ったり、検出したりすることはできません。
\$NOTIFY	通知を受信するように選択されたユーザーのデフォルト・リスト。
\$OBSERVER	ワークフローのオブザーバの名前を挿入します。

変数	説明
\$USER	PLM ユーザーの名前を挿入します。「\$USER、等しい、\$APPROVER」などの条件を「変更」などの特定の権限とともに使用できます。
\$USERGROUP	特定のユーザーの「ユーザー・グループ」プロパティに基づいて、PLM ユーザー・グループの名前を挿入します。「ユーザー・グループ」プロパティには、値（グループ名）が指定されています。このため、フィールドがユーザー・グループの管理リストに結び付けられている場合は、条件によってユーザーとユーザー・グループを照合できます。この条件を読み取り権限およびディスカバリ権限とともに使用すると、グループまたはチームにオブジェクト・アクセス権を付与して、制御できます。
\$USERORG	組織を特定する属性（会社またはサプライヤ）とログインしたユーザーの組織との関係に基づいて、条件を作成するために使用します。
\$USERSITE	属性（拠点）とログインしたユーザーに割り当てられた拠点との関係に基づいて、条件を作成するために使用します。

ワークフローの割当ておよびステータス・タイプの変数

ワークフローの割当てを作成する際には、次の変数から選択できます。

変数	説明
\$APPROVER	ワークフローの承認者。
\$OBSERVER	ワークフローのオブザーバ。
\$ORIGINATOR	ルーティング可能なオブジェクトの作成者。

ワークフローを設定する際には、「条件」列にある次の「ステータス・タイプ」の変数を選択できます。

変数	説明
\$UNASSIGNED	未割当てのステータス・タイプ。
\$CURRENTSTATUS	現在のステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.PENDING	保留中ステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.SUBMIT	提出済のステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.REVIEW	レビュー・ステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.RELEASED	リリース済ステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.COMPLETE	終了したステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.CANCEL	キャンセル済のステータス・タイプ。
\$STATUSTYPE.HOLD	中断ステータス・タイプ。

ルーティング管理者変数

ルーティング管理者変数はルーティング可能なオブジェクトの管理を促進します。これらの変数は、「変更分析者リスト」、「適合性管理者リスト」、「コンポーネント・エンジニア・リスト」、「プログラム・マネージャ・リスト」、「品質管理者リスト」、「品質分析者リスト」、「価格管理者リスト」から選択されたユーザーを表します。

変数	説明	関連のルーティング可能なオブジェクト
\$CHANGEANALYST	「変更分析者リスト」から選択されたユーザー	変更指示（ECO）、設計変更要求（ECR）、製造元設計変更（MCO）、期限付き変更指示、出荷停止
\$COMPLIANCEMANAGER	「適合性管理者リスト」から選択されたユーザー	すべてのデklarレーション
\$COMPONENTENGINEER	「コンポーネント・エンジニア・リスト」から選択されたユーザー	製造元変更（MCO）
\$PROGRAMMANAGER	「プログラム・マネージャ」リストから選択されたユーザー	パッケージ
\$QUALITYADMINISTRATOR	「品質管理者リスト」から選択されたユーザー	製品サービス依頼: PR（問題レポート）および NCR
\$QUALITYANALYST	「品質分析者リスト」から選択されたユーザー	品質変更要求: 是正・予防処置および検証
\$PRICEADMINISTRATOR	「価格管理者リスト」から選択されたユーザー	価格変更（PCO）

Java クライアントの管理者機能

この章のトピック

■ API名	19
■ 管理者レポート	20
■ 「管理」 ツールバーのユーティリティ	22
■ 履歴の追跡	24
■ 管理者設定のインポートとエクスポート	28
■ プロセス拡張ライブラリ	30
■ 多言語サポート	30

API名

「API 名」フィールドは、多数の管理者オブジェクトおよび PLM ビジネス・オブジェクトに表示されます。表示されている場合、「API 名」は必須フィールドです。API 名はオブジェクトに対するシステム全体の一意の識別子であり、自動生成が可能です。API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。API 名は、システム識別キーとして機能します。これは、API 名はあまり変更されないのに対して、名前属性は変更されることがよくあるためです。

詳細は、『SDK 開発者ガイド』の「「API 名」フィールドを使用した PLM メタデータへのアクセス」を参照してください。

Javaクライアントの「API名」フィールド

次は、Agile PLM のオブジェクトに対して「API 名」フィールドが表示される場所のリストです。

- クラス > 基本クラス > クラス、サブクラス、タブ、テーブル、属性
- 文字セット
- リスト>リストの値
- 条件
- 自動採番
- 役割
- 権限
- ワークフロー > ワークフロー・ステータス
- 通知
- UOM
- ダッシュボード管理

- **Agile Content Service** > 確認通知受信者、送信先、イベント、フィルタ、パッケージ・サービス、回答サービス
- **イベント管理** > イベント、イベント・ハンドラ、イベント確認通知受信者、イベント・タイプ、イベント・ハンドラ・タイプ
- **例** > すべてのノード

管理者レポート

管理者ノードの現在の設定を表示するために、管理者レポートを作成できます。これらのレポートは、ナビゲーション・ウィンドウの「分析とレポート」タブ > 「標準レポート」フォルダ > 「管理者レポート」サブフォルダで利用できます。これらのレポートは、特に Agile PLM コンポーネントを再設定する際に役立ちます。

次の表には、Agile PLM 管理レポートが一覧表示されています。

レポート	説明
Agile クラス・レポート	すべての Agile PLM クラスの現在の属性設定とデフォルトの属性設定を示します。Agile のシステム・エンジニアが Agile PLM システムをアップグレードする場合に役立つツールです。
検索条件ライブラリ設定レポート	既存の再利用可能な条件とその使用箇所を表示します。
イベント設定レポート	<p>既存のイベント固有のオブジェクトを次のように表示します。</p> <p>イベント: 既存のイベント・マスクのリスト。このセクションの各行は、選択したイベント・タイプで始まり、次にイベント・マスクの名前、その後に他のすべてのイベント・オブジェクト属性が表示されます。</p> <p>イベント・ハンドラ: 既存のハンドラ・マスクのリスト。このセクションの各行は、選択したハンドラ・タイプで始まり、次にハンドラ・マスクの名前、その後に他のすべてのハンドラ・オブジェクト属性が表示されます。</p> <p>注意 通知のハンドラは表示されません。</p> <p>イベント確認通知受信者: 既存の確認通知受信者マスクのリスト。このセクションの各行は、確認通知受信者マスクの名前で始まり、その後に他のすべての確認通知受信者オブジェクト属性が表示されます。</p>
ログイン失敗レポート	システム・ログインおよびワークフロー・サインオフの試行に失敗したものと、各失敗の理由を表示します。
プリファレンス設定レポート	「プリファレンス」と「Viewer とファイル」ノードの現在の属性とプロパティ設定を表示します。
権限マスク詳細レポート	各権限マスクを名前、説明、マスクが有効/無効であるか、マスクがどの役割で使用されるかにより区別して示します。「オブジェクト・タイプ」、「適用先」、「検索条件」の値が利用できます。
役割と権限要約レポート	各役割を名前、説明、役割が有効/無効であるかにより区別して示します。また、各役割に割り当てられているユーザーや各役割の権限マスクの名前や説明を示します。

レポート	説明
スマートルール設定レポート	各スマートルールの現在の設定を表示します。
使用中のサブクラス・レポート	すべてのサブクラスと、その使用箇所を表示します。グローバル検索、再利用可能な条件、ワークフロー、権限、および役割があります。
ユーザー・グループ設定レポート	すべてのユーザー・グループ、割り当てられたユーザー、各ユーザーに対する適切なユーザー・プロパティを表示します。また、各グループのエスカレーション担当者とエスカレーション条件を表示したテーブルも含まれています。
許可された ACL レポート用ユーザー共有リスト	ユーザーに対してアクセスが許可されているオブジェクトおよび関連した役割を表示します。
ユーザー確認通知リスト・レポート	通知を受信するようにユーザーが確認通知しているクラス属性およびアクションを表示します。
ユーザー利用レポート	アクティブな各ユーザーに対して、ログイン回数やオンラインでのログイン時間の合計（分）など、ユーザーが選択した時刻から現在に至るまでの一定期間中の使用状況を表示します。
ユーザー設定レポート	すべてのユーザーおよび各ユーザーのパスワードを除くプロパティを表示します。
ワークフロー設定レポート	既存のワークフローと各ワークフローのステータス・リストのプロパティ（ステータス・プロパティ、検索条件別プロパティ）をすべて表示します。

データベースを変更する場合は、変更前と変更後と比較する目的でこれらのレポートを保存できます。たとえば、Agile PLM システムをアップグレードする計画がある場合は、最初にアップグレードした Agile クラス・レポートを作成して現在のクラス設定の記録を保存しておくことをお勧めします。その後、このレポートをアップグレード後に作成されたレポートと比較します。

管理者レポートを作成する手順は、次のとおりです。


1. 「分析とレポート」タブを選択し、「管理者レポート」ノード・フォルダを展開します。
2. レポートをダブルクリックします。Agile Web クライアントでは、指定されたレポート・ページ、たとえば、「管理者レポート: ユーザー利用レポート」ページが開きます。
3. 「実行」をクリックします。「パラメータの指定」ダイアログ・ボックスが開きます。「ユーザー利用」レポートでは、「開始」と「終了」の時間範囲および情報が必要としているユーザーが必要です。
4. フィールドの入力が完了したら、「完了」をクリックします。メッセージ「サーバーはレポートを生成しています。お待ちください」が表示されます。
5. エンコード・タイプを選択します。デフォルトのエンコード・タイプはユニコード (UTF - 8) です。異なるエンコード・タイプを使用する場合は、そのエンコード・タイプをドロップダウン・リストで選択します。準備ができたなら、「続行」をクリックします。
6. 「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を選択します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: `User_usage072604_3PM.csv`
8. ダウンロードが完了したら、ダイアログ・ボックスの「閉じる」をクリックします。

「管理」 ツールバーのユーティリティ

Java クライアントで「管理」タブをクリックすると、単一の機能を実行するボタン、またはユーティリティやツールを開くボタンのツールバーが表示されます。

- **システム・アクセスを無効にする** - このボタンは、Agile アプリケーション・サーバー (AAS) へのユーザー・コールを中止します。中止する必要がある場合は、「ユーザーに電子メールで通知」ボタンを使用して、システムが使用中止となる時刻と期間をユーザーに通知できます。「システム・アクセスを無効にする」をクリックすると、表示が「システム・アクセスを有効にする」に変わります。
- **クラスタ上すべての管理データを同期** - このボタンをクリックすると、クラスタ内の複数の AAS サーバー間でデータの同期ルーチンが実行されます。PLM 設定で使用している AAS サーバーが 1 つの場合、このボタンは無効です。クラスタ化されたサーバーの導入とメンテナンスについて詳しくは、オラクル社コンサルティングの Agile ソリューション担当者より提供することができます。
- **ユーザーに電子メールで通知** - 22 ページの「[ユーザーに電子メールで通知する](#)」を参照してください。
- **グローバル置換** - 22 ページの「[グローバル置換](#)」を参照してください。
- **管理履歴** - 25 ページの「[管理者履歴](#)」を参照してください。
- **きっかけとなるイベントの無効化** - 328 ページの「[すべてのイベント・トリガーの有効化/無効化](#)」を参照してください。

ユーザーに電子メールで通知する


「ユーザーに電子メールで通知」ボタンを使用し、すべてのアクティブ (有効な) ユーザー、すべてのログイン中のユーザー、または選択した特定のユーザーに対して電子メールでメッセージを送ります。

「ユーザーに電子メールで通知」ボタンをクリックすると、「ユーザーに電子メールで通知」ウィンドウが表示されます。電子メールを次の受信者グループに送信できます。

- **「すべてのアクティブなユーザー」** - 次回 Agile PLM にログインするときに表示される電子メール・メッセージを、有効なユーザー全員に送信します。たとえば、新しいクラス、サブクラス、またはワークフローが使用可能になったことをすべての有効なユーザーに通知できます。
- **「ログインしているすべてのユーザー」** - すぐに受信してほしい電子メール・メッセージを、ログインしているすべてのユーザーに送信します。たとえば、Agile PLM システムがあと 10 分でダウンすることを、ログインしているすべてのユーザーに通知することもできます。
- **「その他のユーザー」** - 選択したユーザーに電子メール・メッセージを送信します。ラジオ・ボタンをチェックし、▼をクリックしてアドレス帳を開き、メッセージを送信するユーザーを選択します。

「コンテンツ」フィールドにメッセージを入力して、「送信」をクリックします。

グローバル置換

「グローバル置換」ボタンを使用して、ワークフローやエスカレーションのユーザーを別のユーザーと置換したり、権限の割当てを委譲できます。この機能を使用すると、ある従業員が退職したり、別の職務に異動した場合など、様々な状況で使用できます。グローバル置換では、次の作業も実行できます。

- あるユーザーがワークフローまたはすべてのワークフローにおいて、承認者、オブザーバー、またはルーティング管理者として設定されている場合に、別のユーザーに一括で置換します。ただし、ユーザーが現在作業中の変更については置換されません。作業中の変更については、手動でユーザーを置換する必要があります。

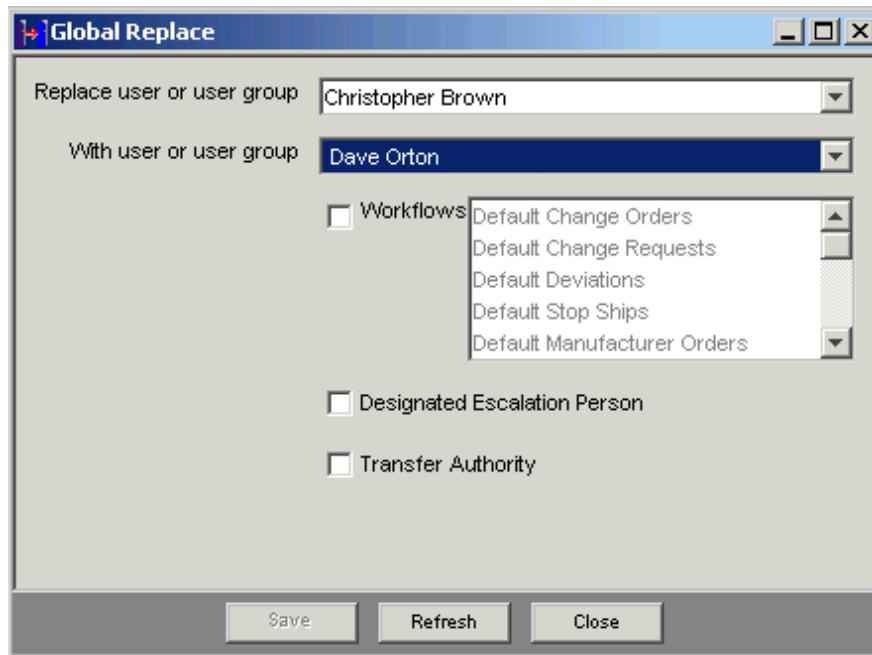
- 1 人または複数のユーザー、またはユーザー・グループに対するエスカレーション担当者を変更します。
- 1 人または複数のユーザー、またはユーザー・グループに対する権限委譲ユーザーを変更します。委譲先ユーザーは置き換えることができますが、委譲元ユーザーは置換えできません。

置換元と置換先のドロップダウン・リスト内のユーザーには、既存のすべてのユーザー・グループが含まれます。「ユーザーとユーザー・グループ」を参照してください。

グローバル置換プロパティ

「グローバル置換」ウィンドウで設定を定義、または変更する手順は、次のとおりです。

1. 「管理」タブ・ツールバーの「グローバル置換」をクリックします。「グローバル置換」ウィンドウが表示されます。



「グローバル置換」ウィンドウでは、次の値を指定できます。

プロパティ	説明
置換元ユーザーまたはユーザー・グループ	置換元ユーザーは、置換するユーザーまたはユーザー・グループです。ユーザーまたはユーザー・グループをドロップダウン・リストから選択します。
置換先ユーザーまたはユーザー・グループ	置換先ユーザーは、置換元ユーザーを置換するユーザーまたはユーザー・グループです。ユーザーまたはユーザー・グループをドロップダウン・リストから選択します。
ワークフロー	ドロップダウン・リストから特定のワークフローを選択します。すべてのワークフローにおいて、置換元ユーザーのすべてのインスタンスを同じ置換先ユーザーに変更する場合は、[Ctrl]を押しながら[Shift]を押すか、[Shift]を押しながらクリックして、すべてのワークフローを選択します。チェック・ボックスを選択すると、指定したワークフローの承認者、オブザーバ、変更分析者（ルーティング管理者）に関して、置換元ユーザーが置換先ユーザーで置換されます。

プロパティ	説明
指定されているエスカレーション担当者	指定されているエスカレーション担当者として、置換元ユーザーが置換先ユーザーで置換されます（「指定されているエスカレーション担当者」を参照してください）。
権限委譲	「置換元」ユーザーの変更を承認、または却下する権限を有するユーザーとして、「置換元」ユーザーが「置換先」ユーザーで置換されます。（222ページの「 権限委譲（自分） 」を参照してください。）

「ワークフロー」フィールドで複数のワークフローを選択している場合は、「保存」をクリックすると、「すべてのワークフローについて<置換元ユーザー>を<置換先ユーザー>で置換してよろしいですか?」という確認メッセージが表示されます。

「置換元」ユーザーがルーティング管理者で「置換先」ユーザーがルーティング管理者ではない場合は、警告メッセージが表示されます。「置換元」ユーザーがデフォルトのルーティング管理者プロパティで使用されている場合（デフォルトの変更分析者など）は、プロンプトで「はい」を選択して続行すると、この機能にはルーティング管理者でないユーザーが記入されます。この結果を希望しない場合は、プロンプトに「いいえ」と答え、より適切なユーザーを「置換先」ユーザーとして選択します。

ルーティング管理者の詳細は、128ページの「[ルーティング管理者](#)」を参照してください。

履歴の追跡

Agile PLM システムは複数の「履歴」を追跡しており、管理者のみが使用できる履歴とすべてのユーザーが使用できる履歴があります。次のセクションで、これらのトピックについて説明します。

- **オブジェクト履歴と管理オブジェクト履歴** - オブジェクト履歴は、そのオブジェクトの履歴のみを示します。オブジェクトとはユーザーと管理者ユーザーが実行したすべてのアクションのことで、管理者が関与するアクションは「管理者履歴」ウィンドウにも一覧表示されます。
- **管理者履歴** - Agile PLM のすべてのオブジェクトの管理アクションを記録します。「管理者履歴」には、削除されたオブジェクトや設定の履歴も記録されます。
- **削除されたオブジェクトの履歴** - オブジェクトが削除されても、履歴は保たれています。このタイプの履歴は、「管理者履歴」からもアクセスできます。
- **以前の管理者履歴** - Agile PLM の以前のリリースで実行されたオブジェクト履歴を表示します。このタイプの履歴は、「以前の管理者履歴」にあります。この履歴に含まれるのは、Agile 8.5 または Agile Advantage からアップグレードしたユーザーに関する内容のみです。

オブジェクト履歴と管理オブジェクト履歴

Agile PLMのすべてのオブジェクトには、「履歴」タブがあり、作成、変更、削除など、実行された個々のアクションすべてが記録されています。「履歴」タブに記録されるデータはオブジェクト・タイプによって異なります。Agile PLM管理者が実行したアクションの履歴は、「管理者履歴」にも表示されます（25ページの「[管理者履歴](#)」を参照）。

すべてのオブジェクトの「履歴」タブには、次の表に示す情報が記録されています。多くの種類の Agile オブジェクトでは、「履歴」タブに追加のフィールドがあります。

プロパティ	説明
アクション	作成、変更、削除などの実行されたアクション。
ユーザー	アクションを実行したユーザー。
クライアント現地時間	アクションが実行された日付と時刻。
詳細	変更後のオブジェクト、プロパティ、またはアクションの詳細。

あるオブジェクトから別のオブジェクトへの割り当てまたは参照を記録するノードの管理オブジェクトに変更を加えた場合は、その参照または割当てを「所有する」オブジェクトに関する履歴が記録されます。次の表を参照してください。たとえば、あるユーザー（オブジェクト）に役割（オブジェクト）を割り当てる場合は、参照される役割オブジェクトをユーザー・オブジェクトが所有することになるため、ユーザー・オブジェクトの「履歴」タブが更新されます。

所有者（履歴が記録されるオブジェクト）		参照、または割当てオブジェクト
役割	所有	権限
権限	所有	条件
サブクラス	所有	自動採番
ワークフロー条件ノード（照合基準、終了条件）	所有	条件
ユーザー	所有	役割

管理者履歴

管理オブジェクトに変更を加えた場合、そのアクションは記録され、「管理者履歴」ウィンドウの下に表示されます。「管理者履歴」には、削除されたオブジェクトや設定の履歴も記録されます。

注意 「管理者履歴」には、ユーザー履歴やユーザー・グループ履歴は含まれていません。

次の表では、「管理者履歴」ウィンドウのフィールドを説明しています。これらのフィールドは、Agile PLM 管理オブジェクトの履歴テーブル・フィールドに類似しています。



フィールド	説明
アクション	作成、変更、削除などの実行されたアクション。
オブジェクト	ワークフロー、権限マスク、条件の名前など、アクションが実行されたオブジェクトの名前。
ユーザー名	アクションを実行したユーザー。ユーザー名はアクティブなリンクです。ユーザーのタブ付きページを開くには、ユーザー名をクリックします。
クライアント現地時間	アクションが実行された日付と時刻。
詳細	変更後のオブジェクト、プロパティ、またはアクションの詳細。

管理者履歴のページ

「管理者履歴」はクリアまたはページできます。

注意 よく知られている「削除」ボタンは、ここでは異なった動作を示します。「管理者履歴」ウィンドウから選択した行単位で履歴を削除することはできません。これは、本来の「ページ」機能として動作します。ページはまた、「以前の管理者履歴」ウィンドウから記録を削除します。

管理者履歴をページする手順は、次のとおりです。

1. 「管理」タブ・ツールバーの「管理履歴」ボタンをクリックします。
2. 「管理者履歴」ウィンドウのツールバーで「ページ」ボタンをクリックします。
3. 「既存の履歴をエクスポートしますか。」という質問に対して、3つのオプションが表示されます。
 - a. エクスポートを行う場合は履歴記録をエクスポート・ファイルとともにページしてください。: 「はい」をクリックすると、「管理者履歴」のすべての記録がページされ、すべてのデータのエクスポート・ファイルが作成されます。会社で検証を行っており、これらのアーカイブが必要とされている場合は、この手順をお勧めします。
 - b. 行わない場合はファイルなしでページしてください。: 「いいえ」をクリックすると、「管理者履歴」のすべての記録はページされますが、エクスポート・ファイルは作成されません。
 - c. キャンセルする場合はページ操作を取り消してください。: 取り消しをクリックすると、操作は実行されません。
4. 「はい」または、「いいえ」をクリックすると、「管理者履歴」のすべての記録はすぐにページされます。検索することはできなくなります。

削除されたオブジェクトの履歴

オブジェクトや設定が削除された場合、そのオブジェクトや設定の履歴は「管理者履歴」に保持されます。ただし、そのオブジェクトや設定に関するデータは、「履歴」タブには保持されません。

たとえば、ワークフローのようなオブジェクトを削除した場合、削除操作を含めた履歴エントリは、「管理者履歴」に保持されます。ただし、そのワークフロー・オブジェクトは存在しないため、そのオブジェクトに対する「履歴」タブは存在せず、そのワークフローに対する個々のオブジェクト履歴もなくなります。

たとえば、1つの役割から、1つの権限を削除する場合のように、1つのオブジェクトから別のオブジェクトを削除する場合、権限の削除はその役割を参照する「管理履歴」に記録されます。

Agileのオブジェクトの削除

Java クライアントと Web クライアントでは、ソフト削除とハード削除がサポートされています。データベース内のオブジェクトをソフト削除した場合、そのオブジェクトは完全には削除されません。ソフト削除されたオブジェクトには、データベース内で「削除済」のマークが付けられ、そのオブジェクト番号や名前が保持されます。ソフト削除されたオブジェクトと同じタイプの別のオブジェクトを、同じ番号または名前で作成することはできません。

注意 Agile 管理者が設定した適切な権限がユーザーにある場合は、ソフト削除されたオブジェクトの削除を取り消すことができます。

検索を実行した場合、ソフト削除されたオブジェクトは、検索結果テーブルに表示されません。ソフト削除されたオブジェクトを検索するには、「**削除済オブジェクト検索**」フォルダで、事前定義の削除済オブジェクト検索を実行する必要があります。

注意 ユーザー・プロファイルの「**検索**」フィールドに「**削除済オブジェクト検索**」が含まれている場合は、「**削除済オブジェクト検索**」フォルダに対するアクセス権があります。適切な権限がある場合は、ユーザー・プロファイルを編集して、「**検索**」フィールドの検索リストに「**削除済オブジェクト検索**」を追加できます。

ハード削除されたオブジェクトは、データベースから完全に消去されます。

注意 ハード削除されたオブジェクトは、削除を取り消すことができません。


Agile オブジェクトのソフト削除、ハード削除または削除取消を実行する条件

- そのオブジェクトに対する適切な削除権限または削除取消権限が必要です。
- オブジェクトが、削除または削除取消を許可される条件を満たしている必要があります。
通常、オブジェクトの削除または削除取消がデータ整合性を失う原因となる場合、削除または削除取消アクションは無効となっています。

オブジェクトの関係および確認通知がすべて削除されないかぎり、そのオブジェクトは削除できません。


特定のオブジェクト・タイプの削除の詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』の Agile オブジェクトの削除に関する項を参照してください。

Javaクライアントでオブジェクトをソフト削除する手順は、次のとおりです。


1. 削除するオブジェクトを選択し、開きます。
2. 「**削除**」ボタン  をクリックし、確認プロンプトに「はい」と回答します。

オブジェクトがソフト削除されます。

Javaクライアントでオブジェクトの削除を取り消す手順は、次のとおりです。

1. 「**削除済オブジェクト検索**」フォルダから適切な削除済<オブジェクト>検索を実行します。
2. 削除を取り消す削除済オブジェクトを開きます。
3. 「**削除取消**」ボタン  をクリックします。

Javaクライアントでソフト削除されたオブジェクトをハード削除する手順は、次のとおりです（適切な権限がある場合）。

1. 「**削除済オブジェクト検索**」フォルダから適切な削除済<オブジェクト>検索を実行します。
2. オブジェクトを開きます。
3. 「**オブジェクトの削除**」ボタン  をクリックし、確認プロンプトに「はい」と回答します。

管理者設定のインポートとエクスポート

管理者の複数のノードで、エクスポートとインポートが使用できます。

- データ設定
 - 条件
- ワークフロー設定
 - ワークフロー
- ユーザー設定
 - 役割
 - 権限

Agile PLM オブジェクトの定義データをファイルにエクスポートできます。Agile PLM オブジェクトの定義データ・ファイルをインポートし、新規オブジェクトを作成できます。例の役割などの例のオブジェクトのインポートやエクスポートはできません。

注意 Agile PLM クライアントの「ツール」メニューから、「インポート」と「エクスポート」ユーティリティを使用して製品データ（Agile PLM システム・メタデータではありません）をインポートおよびエクスポートできます。「インポート」および「エクスポート」のユーティリティは『Agile PLM インポート/エクスポート・ガイド』に記載されています。

重要 テスト・システムから実働システムに管理者データをインポートする場合は、インポートされたデータができるかぎり完全なものとなるよう確認してください。

エンコード・タイプ

ワークフロー・データをインポートまたはエクスポートする際は、エンコード・タイプを選択する必要があります。次のテーブルは、利用可能なエンコード・タイプを一覧表示します。

値	コメント
西ヨーロッパ言語（ISO）	ISO-8859-1
日本語（Shift JIS）	SJIS
繁体中国語（Big 5）	BIG5
日本語（EUC）	EUC-JP
簡体中国語（GB2312）	GB2312
ユニコード（UTF-8）	UTF8


管理者エクスポート

管理者設定のエクスポート機能は、オブジェクト作成に必要なデータをエクスポートします。ただし、すべてのプロパティがエクスポートされるわけではありません。たとえば、権限マスクのエクスポートでは、使用箇所の情報はエクスポートされません。エクスポートされたテキスト・ファイルを確認すると、オブジェクトの各タイプについてエクスポートされたプロパティを判断できます。

管理者データをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. 作業するノードを開きます。「ワークフロー」、「条件」、「役割」または「権限」のいずれかです。
2. エクスポートするオブジェクトを選択します。1つのオブジェクト、またはテーブル内のすべてのオブジェクトをエクスポートできます。「ワークフロー」、「条件」、「権限」ウィンドウには「すべてエクスポート」ボタンがあります。

注意 フィルタ・バーのあるウィンドウ（8ページの「[データをフィルタリングする](#)」を参照）で、ノードのすべてのオブジェクトを表示するには、「条件」ドロップダウン・リストで、「すべて表示」を選択して、「適用」をクリックします。

3. ウィンドウ・ツールバーの「エクスポート」 ボタンをクリックします。
ワークフロー・エクスポートのみの場合は、「エンコード・タイプ」のダイアログ・ボックスが表示されます。上のテーブルを参照してください。デフォルト設定で使用するエンコード・タイプは、「西ヨーロッパ言語（ISO）」です。別のエンコード・タイプを使用する場合は、そのタイプをドロップダウン・リストから選択し、「OK」をクリックします。

注意 後でファイルをインポートする際には、同じエンコード・タイプを指定してください。

4. 通常の「名前を付けて保存」でファイルに名前を付け、ディスクで保存する場所を選択します。識別しやすくするために、ファイル名を変更します。エクスポートするオブジェクト、日付、エンコード・タイプを含めることもできます。例: `ChangeOrderWorkflow072602_ISO.txt`
5. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。エクスポートしたファイルのデータを確認します。

管理者インポート


エクスポートされたテキスト・ファイルをインポートし、Agile PLM システムでオブジェクトを作成できます。

同じ名前のオブジェクトを2つ作成することはできません。たとえば、Agile PLM システムにすでに ABC という名前のワークフローがある場合、ABC という名前のオブジェクト・データ・ファイルをワークフローにインポートすることはできません。既存のオブジェクトを上書きするオプションもありますが、この場合、Agile PLM システムの既存のオブジェクトはインポートされたオブジェクトで置換されます。

一部のプロパティ（たとえばユーザー割り当てなど）は、エクスポートされません。オブジェクト・データのテキスト・ファイルをインポートする場合は、これらプロパティのない新しいオブジェクトを作成します（たとえばユーザー割り当てのないもの）。


注意 インポートする前に、インポートするテキスト・ファイルを開いて、エクスポートされたオブジェクトのプロパティを確認します。

管理者データをインポートする手順は、次のとおりです。


1. 作業するノードを開きます。「ワークフロー」、「条件」、「役割」または「権限」のいずれかです。
2. ウィンドウ・ツールバーの「インポート」 ボタンをクリックします。「ファイルのインポート」ダイアログが開きます。

ワークフロー・インポートのみの場合は、「ファイルのインポート」ダイアログに「エンコード・タイプ」フィールドが含まれます。エンコード・タイプがエクスポートされたワークフローのファイルと一致していることを確認します。

注意 オブジェクトをエクスポートしたときに使用したエンコード・タイプと同じエンコード・タイプを選択してください。同じエンコード・タイプを使用しないとインポート結果の信頼性が低くなります。

3. 「インポートするファイル」フィールドの横にある「参照」ボタン  をクリックして、インポートするファイルを検索し、選択します。「開く」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。インポート処理には多少時間がかかります。インポートしたファイルのデータを確認します。

プロセス拡張ライブラリ

Java クライアントで、「ツール」>「プロセス拡張」、または「プロセス拡張」ボタン 、あるいは「管理」タブ>「データ設定」>「プロセス拡張」を使用して、カスタム・プロセス拡張（イベント・ベースのプロセス拡張（PX）より優先される PX）のライブラリにアクセスします。

Agile PLM システムにカスタム PX が配置されていない場合、「ツール」メニューではカスタム PX は利用できません。ボタンをクリックしても、空のメニューが表示されます。

カスタム・プロセス拡張の設定方法の詳細は、103ページの「[プロセス拡張](#)」を参照してください。Agile PLM システムのカスタム・プロセス拡張の開発方法に関する技術情報は、『Agile PLM SDK開発者ガイド』を参照してください。

注意 イベント管理を導入すると、Java PXハンドラおよびスクリプトPXハンドラを介して、PXをより柔軟に使用できるようになります。既存のプロセス拡張機能はそのままですが、イベント管理を使用すると、通常のユーザー・アクションおよびシステム・アクションによってPXを起動できます。303ページの「[イベント管理](#)」を参照してください。新規PXハンドラの開発に関する技術情報は、『Agile PLM SDK開発者ガイド』を参照してください。

多言語サポート

Agile PLM は国際版アプリケーションであるため、英語以外のラベル・データを入力できます。ユーザーは、クライアント・ユーザー・インタフェースを自分の好みの言語で表示できます。英語はすべてのライセンスに含まれています。Agile PLM では、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、ロシア語、簡体中国語、および繁体字中国語が認証されています。

重要 このサポートされている言語のリストは2010年5月現在のものであり、変更される場合があります。現在のインストールでサポートされている言語については、「プリファレンス」ノードにある「言語」タブを参照してください。

注意 Product Governance & Compliance ソリューションの場合は、Excel でのロールアップ・テンプレートの日本語バージョンが完全にサポートされています。Excel でのロールアップ・テンプレートのローカライズ版は、簡体字中国語、フランス語、およびドイツ語でサポートされています。さらに、JGPSSI デklarレーションを作成するための JGPSSI テンプレートの日本語バージョンも完全にサポートされています。

どのユーザーも、会社のビジネス・オブジェクト（Agile ユーザーも含みます）設定中に言語プリファレンス（<ユーザー・オブジェクト>>「プリファレンス」>「フォーマット・プリファレンス」（見出し）>「言語」）を設定できます。

ただし、PLM の一部としてローカライズ言語を購入している場合は、その言語が「言語」プロパティのドロップダウン・リストに表示されます。

ユーザーの言語プリファレンスを設定する手順は、次のとおりです。

1. ユーザー・プロフィールを開きます。（これは、企業の Agile ユーザーを作成する際に設定されるのが通常です。このタスクは、すでに作成されているユーザー・オブジェクトに関する指示です。）
2. 「プリファレンス」タブをクリックします。
3. 「フォーマット・プリファレンス」で、「言語」フィールドの▼をクリックします。
英語およびその他のライセンスされている言語がドロップダウン・リストに表示されます。
4. 言語を選択して、「保存」をクリックします。その言語で Agile がサポートする要素が表示できるようになります。

ユーザーの言語プリファレンスを変更し、その変更内容をユーザー・インターフェースで表示する場合、該当するユーザーは、ログアウトして再度ログインする必要があります（ログインしていた場合）。

ユーザーは、言語プリファレンスを任意に変更できます（ここでも、ライセンスされている英語以外の言語）。Java クライアントでは、ユーザーはメイン・ツールバーの「設定」ドロップダウン・メニューから「現在のユーザー」をクリックし、前の指示に従います。

Web クライアントでは、ユーザーの「言語」設定へのパスは「個人設定」>「ユーザー・プロフィール」>「プリファレンス」>「編集」>「言語」（「フォーマット・プリファレンス」の下）です。

Agile PLM の言語設定の詳細は、383 ページの「[システム全体のプリファレンス](#)」を参照してください。

多言語機能でサポートされている管理者データ

多言語機能という用語は、ライセンスのある様々な言語の入力を別々に保持できる、管理者による編集が可能なオブジェクトと、エンド・ユーザーの言語プリファレンスの設定に従って様々な言語で表示できる、編集不可のオブジェクトの両方を表します。

オブジェクトが多言語機能でサポートされている管理者ノードを次に示します。ノードがサポート対象としてリストされている場合は、そのノードの作成者が管理者か、ユーザーかは関係ありません。（通常どおり、Agile でオブジェクトを作成できるかどうかは、そのユーザーの役割および権限によって定義されます。）特別な記述がないかぎり、オブジェクトの名前と説明は多言語に対してサポートされています。

サポートされている管理者ノード

管理者が編集できるアイテムには、どの有効な言語でも名前がついています。管理者は、「言語」ユーザー・プリファレンスを設定し、これらのアイテムをユーザー用に別の言語に設定できます。たとえば、会社 A は、日本語が有効な Agile PLM のローカライズ版を所有しています（デフォルトは英語です）。管理者はリストを作成し、そのリストに英語ユーザー用と日本語ユーザー用に別々に名前を付けることができます。言語プリファレンスが日本語に設定されているユーザーには、管理者が設定したとおりに、日本語の名前のリストが表示されます。

次の種類のオブジェクトで多言語がサポートされています。

データ設定

- クラス
- 文字セット
- リスト
- プロセスの拡張
- 自動採番
- 条件

ワークフロー設定

- ワークフロー

ユーザー設定

- 役割
- 権限

システム設定

- 通知（名前、説明、件名、本文）
- 「全文検索」は、日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、フランス語のローカライズ版の添付ファイルでサポートされています。
- ダッシュボード管理
- Product Portfolio Management:
 - スケジュール・ステータス
 - コスト・ステータス
 - 品質ステータス
 - リソース・ステータス
 - デフォルトの役割
- Agile Content Service:
 - 確認通知受信者
 - 送信先
 - イベント
 - フィルタ
 - パッケージ・サービス
 - 回答サービス
- Product Governance & Compliance:
 - サインオフ・メッセージ

- 適合性ロールアップのスケジュール
 - 適合性ロールアップのルールの設定
 - サプライヤ・デklarレーションのプロセス拡張
 - 含有基準のマッピング
- イベント管理

サポートされている事前定義のシステム・オブジェクト

Agile で事前に定義されているオブジェクト（役割の例など、「管理者」で編集できないもの）は、多言語機能で完全にサポートされています。たとえば、「言語」プリファレンスが英語であるユーザーがログインした場合は、「例-管理者」役割が英語で表示され、同じユーザーが「言語」プリファレンスを日本語に設定してログインした場合は、日本語ユーザー管理者が設定した「例-管理者」の和訳が表示されます。

多言語機能でサポートされていない管理者データ

ほとんどの種類の管理者データが多言語機能でサポートされていますが、次の種類の管理データはローカライズ・ユーザー・インタフェースのみで、多言語ではサポートされていません。

ユーザー設定

- ユーザー
- ユーザー・グループ
- サプライヤ・グループ

システム設定

- Viewer とファイル
- 組織のプロファイル
- PCM 出荷先の場所

ユーザーが入力する値/文字列

"01"、"02"、"03" などが付加された属性名

- たとえば、会社 B は、簡体中国語が有効な Agile PLM のローカライズ版を所有しています（英語も所有）。言語プリファレンスが英語の管理者が、ユーザー・グループを作成し、UserGroup_1 という名前を付けたとします。その後、言語プリファレンスが簡体中国語である、会社 B の別の Agile 管理者が、UserGroup_1 の名前を中国語の文字を使用した中国語の名前に変更したとします。この場合、ユーザー・グループの名前は、すべてのユーザーに対して、中国語の文字を使用した中国語の名前で表示されます。これは、言語プリファレンスが英語のユーザーの場合も同じです。

注意 「全文検索」は、日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、フランス語のローカライズ版の添付ファイルでサポートされています。

多言語用にシステムを設定する

どの言語でも、フィールドを設定する際には、設定する言語の言語プリファレンスでログインする必要があります。言語プリファレンスを日本語に設定して日本語で変更し、次に英語で変更する場合は、言語プリファレンスを英語に変更し、ログアウト後、再度ログインしてから進めなければなりません。あるいは、ログアウトしてから、言語プリファレンスが英語の、別の管理者として再度ログインすることもできます。

Agile で多言語機能がどのように言語の設定を扱うかを理解するために、Jim と Jan の例を示します。

- **ケース 1:** 会社 C は、英語バージョンの Agile のみを所有しています。会社 C の全ユーザーのユーザー・インタフェースとビジネス・オブジェクトは英語で表示されます。ユーザーは、言語ユーザー・プリファレンスを別の言語に変更できません。
- **ケース 2:** 会社 D は、日本語が有効な Agile のローカライズ版を所有しています（デフォルトは英語のライセンスです）。すべてのユーザーの言語プリファレンスが日本語になるように会社を設定しました。Jim は自分の言語ユーザー・プリファレンスを英語に設定します。再度ログインすると、今度は Jim のユーザー・インタフェースと自分で作成したオブジェクトが英語で表示されます。Jan は、言語プリファレンスを日本語のままにしているユーザーの典型です。Jim が作成したオブジェクトは、Jan には日本語で表示されます。

- **ケース 3:** 会社 E は、簡体中国語が有効な Agile のローカライズ版を所有しています。管理者は、香港支店のユーザーを、その「言語」ユーザー・プリファレンスが中国語になるように設定できます。香港以外で勤務している会社 E の他のユーザーは、自分の言語プリファレンスを英語のままにしています。ここで、管理者は、部品クラスのサブクラスを作成し、**Modules** という名前を付けます。このサブクラスのオブジェクトは、会社 E の全ユーザーに対して **Modules** という名前で表示されます。これは、ユーザー・プリファレンスでどの言語が設定されているかには関係ありません。

後で、管理者は、**Modules** サブクラスを香港のユーザーのために中国語の名前に変更するとします。管理者は、自分の言語プリファレンスを簡体中国語に設定し、**Modules** サブクラスを中国語の文字の翻訳名に変更します。この結果、**Modules** サブクラスの名前は、言語ユーザー・プリファレンスが中国語に設定された全香港ユーザーに対して中国語の文字で表示されます。しかし、英語ユーザーには、引き続き英語でサブクラス名 **Modules** が表示されます。

- **ケース 4:** 会社 F は、簡体中国語が有効な Agile のローカライズ版を所有しています。管理者は、香港支店のユーザーを、その「言語」ユーザー・プリファレンスが中国語になるように設定できます。香港にいるユーザーは全員、情報（たとえば、オブジェクトの作成など）を中国語で追加します。香港のユーザーがビジネス・オブジェクトを作成すると、会社 F の全ユーザーに中国語で表示されます。これは、ユーザー・プリファレンスでどの言語が設定されているかには関係ありません。

新しいサブクラスを作成した場合は、その名前をローカライズ（翻訳された）形式でシステムに入力できます。ただし、新たに作成されたサブクラス、または他のサブクラスの名前を変更した場合は、ログインした同じ言語（言語ユーザー・プリファレンス）で名前が変更されます。

Java クライアントに英語以外の文字（UI およびユーザー入力テキスト）を表示するには、特定の言語をサポートしているオペレーティング・システム上で実行されていなくてはなりません。そうでない場合は、英語以外の正しい文字が「四角い空白」になるなど、文字化けするおそれがあります。日本語や中国語などの 2 バイトの文字設定では、このようなことがよく起こります。

たとえば、Jan は日本語 OS のコンピュータを使用しているとします。本人が ECO の「説明」フィールドに日本語のテキストを入力します。次に、Jim が英語の OS のコンピュータで Java クライアントを起動し、この ECO を表示すると、「説明」フィールドに入力された日本語テキストが崩れて（四角い空白が入って）表示される場合があります。英語の OS では、日本語文字がサポートされていない場合があります（Windows の英語バージョンでは、日本語文字をサポートするには、Asian Language Pack をインストールする必要があります）。

Web クライアントの管理者機能

この章のトピック

▪ Webクライアントの管理者の概要	35
▪ ダッシュボードの設定	36
▪ ビジュアル・テーマ	36
▪ レポート・テンプレート	40
▪ ログの設定	42
▪ キャッシュ・ヘルス・モニタ	43
▪ Agileのオブジェクトの削除	47

Webクライアントの管理者の概要

Agile Web クライアントには、特定の管理者機能があります。この機能にアクセスできるのは、「管理者」または「ユーザー管理者」の役割、具体的には管理者権限またはユーザー管理者権限が割り当てられているユーザーのみです。

ユーザーおよびグループの管理機能には、Web クライアントの「ツールおよび設定」>「アドレス帳」からアクセスします。他の管理機能は、Web クライアントの「ツールおよび設定」>「管理」フライアウト・メニューにあります。

この章では、Web クライアントに固有の Agile 管理者用のユーティリティについて説明します。次の表に、すべての Web クライアント管理ノードの簡単な定義、および対応する説明への相互参照を示します。

ノード	説明
ユーザーとグループ Web クライアントで、「ツールおよび設定」>「アドレス帳」からアクセスします。	
ユーザー	システムに新規 Agile PLM ユーザーを追加し、既存のユーザーのプロパティ（パスワード、ユーザー名、役割およびユーザー・グループの割り当てなど）を変更します。
ユーザー・グループ	ユーザー・グループを定義し、ユーザーをグループに割り当てます。
サプライヤ・グループ	見積依頼プロセス中にサプライヤを選択します。管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル・サプライヤ・グループを設定します。
Webクライアント管理 Web クライアントで、「ツールおよび設定」>「管理」からアクセスします。	
ダッシュボードの設定	PLMダッシュボードを設定します。36ページの「 ダッシュボードの設定 」を参照してください。
ビジュアル・テーマ	色、フォント・スタイル、サイズの定義など、すべてのユーザーのWebクライアント・ユーザー・インタフェースの表示を設定します。36ページの「 ビジュアル・テーマ 」を参照してください。

ノード	説明
レポート・テンプレート	レポート・テンプレートを作成し、管理します。40ページの「 レポート・テンプレート 」を参照してください。
ログの設定	アプリケーション内のロガーを表示し、設定します。42ページの「 ログの設定 」を参照してください。
キャッシュ・ヘルス・モニタ	管理者データに対するすべての変更が、クラスタ全体に正しく複製されていることを確認します。43ページの「 キャッシュ・ヘルス・モニタ 」を参照してください。

ダッシュボードの設定

ダッシュボードの各タブには、情報をテーブルやチャートに表示する一連の設定可能なウィジェットがあります。管理者は、各タブに表示するウィジェット、およびその表示場所を設定できます。

ダッシュボードの各タブを設定する手順は、次のとおりです。

1. Agile Web クライアントの「ツールおよび設定」>「管理」メニューで、「ダッシュボードの設定」を選択します。
2. 「タブの設定」フィールドで、設定するタブを選択します。選択したタブで使用できるウィジェットが「利用可能なコンテンツ」列に表示されます。
3. 表示するウィジェットを「行」列に移動します。
4. 必要に応じて、方向を示す矢印を使用してウィジェットを並べ替えます。
5. すべてのタブの設定が完了したら、「保存」をクリックします。
6. 設定ウィンドウを終了するには、「閉じる」をクリックします。
7. ダッシュボードを更新して、変更内容を確認します。

ビジュアル・テーマ

ビジュアル・テーマを使用すると、管理者は、企業全体で PLM ユーザーに対して表示されるビジュアル表示（スタイル）を定義できます。この設定によって、Web クライアントの設定と導入されたその他のアプリケーションや企業で使用している色との間で整合性を保つことができます。

テーマ・オプションを選択する

スタイルを定義および変更するには、「ツールおよび設定」>「管理」>「ビジュアル・テーマ」の順に選択します。テーマ・オプションの選択ページが表示されます。このページには3つのフィールドがあります。

ブランド・ロゴ

ドロップダウン・リストにデフォルトのOracleブランド・ロゴがいくつか表示されます。自社のブランド・ロゴを使用するには、web.xmlファイルにグラフィック・ファイルを追加する必要があります。この手順については、37ページの「[Oracleロゴを置換する](#)」を参照してください。別のロゴを追加すると、このドロップダウン・リストに表示されます。

アイコン・モチーフ

このページに表示される Agile の「機械系」、「電気系」および「ハイテク」の記号です。

カラー・パレット

テーマ・オプションの選択ページの「カラー・パレット」リスト・ボックスには、使用可能なすべてのスタイル・スキームが表示されます。アスタリスク (*) 付きのスタイルは、デフォルトのシステム・スタイルであり、変更または削除できません。

ドロップダウン・リストからビジュアル・スタイル・テーマを選択し、次のいずれかのアクションを使用して変更を開始できます。

- 新しいテーマは、「名前を付けて保存」を使用して開発できます。「名前を付けて保存」ボタンをクリックすると、「パレット色の指定」ページが表示されます。

最初に、「名前」フィールドに新しい名前を入力する必要があります。新しい名前を指定せずにシステム・スタイルの要素を変更した場合、新しいスキームは保存されません。識別する名前を入力すると（いずれかのフィールドを変更しているかどうかに関係なく）、新しいスキームを保存できます。

この方法で、デフォルトのシステム・スタイルから新しいスタイル・スキームを作成できます（デフォルト以外のカラー・パレットのスタイルが存在しない間は、これが最初に新しいスキームを作成する唯一の方法です）。

詳細は、38ページの「[スタイルを変更する](#)」を参照してください。

- 「削除」ボタンをクリックして、選択したスタイル・スキームを削除します。

システム・スタイルがフィールドに表示されている場合は、このボタンが無効であることに注意してください。システム・スタイル（名前に「*」を含む）は削除できません。

- 「編集」ボタンをクリックして、選択したスタイル・スキームを変更します。

「編集」ボタンをクリックすると、「パレット色の指定」ページが表示されます。

詳細は、38ページの「[スタイルを変更する](#)」を参照してください。

注意 システム・スタイルがフィールドに表示されている場合、このボタンは無効になっています。前述のように、名前を付けて保存の機能を使用して作業する以外に、システム・スタイルを変更することはできません。

Oracleロゴを置換する

企業ロゴ（またはその他のブランド・イメージなど）を Oracle ロゴのかわりに配置する場合や、ロゴの高さまたは幅を変更する場合は、**web.xml** ファイルを変更する方法が最も簡単です。

デフォルトの企業ロゴをカスタム・ロゴに置換する手順は、次のとおりです。

1. サーバー側にログインします。
2. Oracle ホーム・ディレクトリで **web.xml** を検索します。
3. 特定のパラメータを変更するいくつかのサンプルを次の箇条書きに示します。
 - web.xml のこれらのコード行で、カスタム・ロゴ・ファイルのファイル名を入力できます。

```
<context-param>
  <param-name>cobranding.image</param-name>
  <param-value>logo.gif</param-value>
</context-param>
```

logo.gif の部分のファイル名（拡張子を含む）を変更します。

- web.xml のこれらのコード行で、ロゴの高さを変更できます。

```
<context-param>
<param-name>cobranding.image.height</param-name>
<param-value>25</param-value>
</context-param>
```

 パラメータ値「25」を別の値に変更します。
 - web.xml のこれらのコード行で、ロゴの幅を変更できます。

```
<context-param>
<param-name>cobranding.image.width</param-name>
<param-value>114</param-value>
</context-param>
```

 パラメータ値「114」を別の値に変更します。
 - これらのコード行で、Oracle Agile のウィンドウまたはページのタイトルを変更できます。

```
<context-param>
<param-name>application.window.title</param-name>
<param-value>Product Lifecycle Solution</param-value>
</context-param>
```

 パラメータ値「Product Lifecycle Solution」を別の値に変更します。
 - これに続く web.xml の数行のコードでは、テキストを変更することによりツールチップを更新できます。

```
<context-param>
<param-name>cobranding.image.alttext</param-name>
<param-value>Oracle|Agile</param-value>
</context-param>
```

 この例の「Oracle|Agile」部分に新しいテキストを挿入します。
4. アプリケーション・サーバーを再起動します。
 5. Web クライアントにログインし、変更内容を確認または評価します。

スタイル・スキームを変更する

スタイル・テーマを変更した後は、他のアクションのために次の各ボタンを使用できます。

- 「**プレビュー**」をクリックして、変更したスタイル・スキームをプレビューします。自分のコンピュータでのみ、選択したスキームで Web クライアント・インタフェースが表示されます（他のすべてのユーザーに対しては、現在適用されているスキームでユーザー・インタフェースが表示されます）。

注意 「プレビュー」ボタンは、ユーザーが新しいテーマを作成した場合のみ表示されます。

- 現在のスキームを保存する場合は、「**保存**」をクリックします。この操作では、「名前」フィールドの名前で設定が保存され、そのスキームが「カラー・パレット」フィールドのリストに追加されるのみです（「**保存**」をクリックしても、スキームは Web クライアント・ユーザーに継承されません）。
 保存済かどうかに関係なく、変更中のスキームをさらに変更する必要がある場合は、変更できます。保存したスキームに上書き保存するか、または新しい名前を入力して、新しいスキームとして保存できます。
- 選択したスキームのプレビューをキャンセルするには、「**キャンセル**」をクリックします。テーマ・オプションの選択ページに戻ります。

- 名前を付けたカラー・パレット・スキームを選択した状態で、「適用」ボタンをクリックすると、選択したスキームがシステム全体で最新になります。変更したこのスキームがアクティブなユーザーに表示されるのは、ユーザーの画面が更新されたときか、ユーザーが Web クライアントに次回ログインしたときです。
- 「スタイル・テーマ」リストに新しいスタイルを保持しない場合は、削除できます。

次の表では、「パレット色の指定」ページのフィールドを一覧表示し、Web クライアント・ユーザー・インタフェース（UI）で、各プロパティによって変更される部分について説明します。

フィールド	UI の領域または要素
名前	指定したスタイル・スキームの名前。保存されている各スキームの名前は、「カラー・パレット」ドロップダウン・リストに表示されます。
グラデーション	「グラデーション」または「平坦」では、UI の特定の領域にフィルタが適用されるため、選択した色は濃淡なしか（平坦）、明暗の特性を持つように表示されます（グラデーション）。
（「背景」列）	フィールドの主な色を指定する 16 進値。
（「テキストの色」列）	「明」では、テキスト文字が白になり、「暗」では、テキスト文字が黒になります。
（「サンプル」列）	この色見本では、「背景」に指定した色と「テキストの色」の値を組み合わせた場合の外観が表示されます。
グローバル・ツールバー	Web クライアント UI の上部に表示されるツールバー。
ダイアログ・バー	アクション・ダイアログの上部および下部にある色付きのバー。
ウィジェット・タイトル・バー	ダッシュボード上のウィジェット名が表示される部分の背景色。
選択されたコントロール	選択時の（オブジェクトの）タブまたは（ナビゲーション・ウィンドウ上の）ドロワーなどの領域。
選択されていないコントロール	「選択されたコントロール」で指定された同じ要素（非選択時のみ）。
ハイライトの制御	マウス・ポインタによるポイント時の（ナビゲーション・ウィンドウの）ドロワーおよびドロップダウン・リストの項目。選択時のテーブルの行。
メッセージ領域	情報行内の濃淡（オブジェクトの上部付近）。
背景	前述のフィールドで割り当てられない様々な背景。
スライダ・セパレータ	スライダ・バーの定義を表示するための概要を示す小さい帯状の領域。

16 進形式の色の指定

PLM アプリケーションには、デフォルトのスタイル・スキームがいくつか用意されていますが、企業では多くの場合、Web クライアントに自社のルック・アンド・フィールを指定する傾向があります。管理者は、「パレット色の指定」ページのフィールドのほとんどが 16 進形式であることに気付いています。Web 設計者は様々なツールを使用して、16 進で表す RGB トリプレット（16 進トリプレット）などの Web ドキュメントの要素に対して色を指定します。

「パレット色の指定」ページでは、あらゆる色を 16 進形式で使用できますが、調整された色スキームとそれに対応する 16 進形式の値を生成するには、このような色ツールにアクセスする必要があります。たとえば、この目的については、Adobe の Web サイト <http://kuler.adobe.com/#themes/rating?time=30> が役に立ちます。

レポート・テンプレート

Agile PLM では、既存の標準レポートがカスタム・レポートに統合されているため、Oracle BI Publisher を使用して変更できます。

Oracle BI Publisher を個別にインストールする必要はありません。Agile PLM には次の目的で BI Publisher が組み込まれているためです。

- 標準の Agile レポートの実行
- 標準の Agile レポート・レイアウトの変更（フレックスフィールドの追加など）
- 新規レポートの作成
- Agile PLM SDK を使用したデータの取得、および Agile Java PX を使用したレポートの生成

注意 Oracle Agile PLM に組み込まれているバージョンは、使用制限付きのバージョンのみです。

BI Publisher ツールの詳細およびドキュメントは、次の Web サイトにあります。<http://xdo.us.oracle.com/?tab=doc> (<http://xdo.us.oracle.com/?tab=doc>)。

エンド・ユーザー向けのドキュメントは、『Agile PLM スタート・ガイド』のレポートに関する章に記載されています。

このセクションでは、BI Publisher インタフェースから使用できるエンド・ユーザー・レポートのレイアウト・テンプレートを管理者が準備する方法について説明します。

レポート・テンプレートの管理（適用先の選択肢）

「レポート・テンプレートの管理」は、管理者固有の「適用先」プロパティ（つまり、「管理者」および「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクにあるプロパティ）内の選択肢の 1 つです。

「レポート・テンプレートの管理」を「選択済」テーブルに移動すると、管理者またはアシスタント管理者は、このプロパティを使用して PLM レポート・テンプレート・ユーティリティでレポートのテンプレートをアップロードできます。「レポート・テンプレートの管理」ページを表示するには、**Web クライアント** > 「ツールおよび設定」 > 「管理」 > 「レポート・テンプレート」の順に選択します。

これらのテンプレートは、ユーザーが Web クライアントでレポート機能を使用するときに、割り当てられている権限に従って表示されます。

動的テンプレートと静的テンプレート

テンプレート・モードには、「静的テンプレート」と「動的テンプレート」の 2 つがあります。

静的テンプレート

静的テンプレートをサポートし、ファイルを RTF で生成するのは、BOM 展開レポートと製造元 BOM レポートの 2 つのみです。「BI Publisher を使用」と「レイアウトにテンプレートを使用」の両方のオプションを選択すると、このテンプレートにアクセスします。XML 形式をサポートするモードは静的テンプレートのみです。

動的テンプレート

すべてのカスタム・レポートと大部分の標準レポートでは、**動的テンプレート**を使用してレポートが定義され、PDF、HTML、Excel、Word などの複数の出力形式でレポートが生成されます。

レポート・テンプレートの作成

管理者は、すでに用意されているデフォルトのレイアウトの他に、RTF テンプレートを作成してレイアウトを定義できます。

Javaクライアントでは、「**管理**」>「**サーバー設定**」>「**プリファレンス**」の順に選択します。「レポート用にBI Publisherを有効化」には、「はい」と「いいえ」の2つの値があります。プリファレンスが「いいえ」に設定されている場合は、既存のレポート・レイアウトを使用してレポートが生成されます。プリファレンスが「はい」に設定されている場合は、BI Publisherを使用して複数の出力形式でレポートを生成できます。システム・プリファレンス「**レポート用にBI Publisherを有効化**」の詳細は、375ページの「[プリファレンス](#)」を参照してください。

注意 テンプレートはファイル・サーバーに保存されているため、ファイル・サーバーが停止すると、テンプレートでレポートは生成されません。

1. Web クライアントでは、「**ツールおよび設定**」>「**管理**」>「**レポート・テンプレート**」の順にナビゲートします。
2. 「**作成**」をクリックし、「レポート・テンプレートの作成」ウィンドウを表示します。
3. 名前を選択し、テンプレートの説明を入力します。
4. テンプレートの RTF ファイルの場所を参照します。
5. 次に、「**OK**」をクリックします。テンプレートのオプションのリストにテンプレートが追加されます。テンプレート・ファイルを**取得**して、変更できるようになります。レポートのレイアウトは、Microsoft Office (Word) や Adobe Acrobat を使用して設計することもできます。また、ドラッグ・アンド・ドロップ設計の採用には、BI Publisher の Microsoft Word 用のテンプレート・ビルダ・プラグインを使用することもできます。

BI Publisherでサポートされていないレポート

次のレポートは、BI Publisher フレームワーク・テンプレートでサポートされていません。

- 変更パッケージ・レポート
- 変更メトリックス
- 変更バックログ
- 変更サイクル時間
- 品質メトリックス
- 品質バックログ
- 品質サイクル時間
- 不具合トレンド
- 見積依頼エクスポート
- IP 転送

- プロジェクトの実際のコスト対予定コスト・レポート
- 基準比較レポート
- ポートフォリオ・コスト・レポート
- リソース・プール消費レポート
- すべての PCM レポート

ログの設定

- Agileサポート使用専用 -

「ログの設定」モニタが追加され、Agile サポートでログの設定を迅速に変更できるようになりました。このために、企業の Agile アプリケーション・サーバー（AAS）を停止して再起動する必要はありません。

重要 「ログの設定」ユーティリティは、Agile担当者がユーザーのシステムのトラブルシューティングで使用することを目的としており、問題の自己処置を目的としていないため、様々な設定スクリプトや「レベル」メニューの選択項目については、ここでは説明しません。

注意 Agileサポートからの指示を受けずにログの設定を変更しないでください。

「ログの設定」ノードの使用

1. PLM ユーザーが問題の発生に気付いて Agile サポートに連絡する場合は、PLM システムに対する Web クライアント・アクセスの URL を提供します。システムにアクセスすることによって、データ収集が可能になります。
2. サポート担当者は、問題点と迅速な解決策を識別できる場合は、ログの変更を入力して問題の再発生を試行し、ログの設定をオフにします。モニタを使用すると、システムの AAS を停止して再起動することなく、「Log4J ロギング・レベル」を動的にリセットできます。
 - ページ下部の「簡易検索」フィールドを使用します。デバッグ情報がコンソール・ウィンドウに表示されます。
 - デバッグ情報の収集後、サポートは、調査中の PLM システムを変更せずに「ログの設定」ページを終了できます。
 - 「更新」ボタンをクリックして、ログ・データの表示を随時更新します。
 - 「レベル」列で、適切なクラスのドロップダウン・リストから選択して設定を変更します。
 - 「ロガーの更新」ボタンをクリックして、システムの AAS を停止せずに設定変更をコミットします。
3. サポートでは解決策または回避策がわからない場合は、問題を Agile 開発部にエスカレートできます。
 - Agile 開発部は、問題の発生元が PLM のどの領域であるかに基づいて、特定のログをユーザーがオンにするように、サポートに依頼する場合があります。
 - ユーザーは、AAS を再起動せずにログをオンにでき、サポートによって情報が取り出され、AAS を再起動せずにログをオフにできます。

4. Agile 開発部によって問題がデバッグされると、サポートは次のことを実行できます。

- ユーザーのシステムに戻り、変更を有効にします。
- 提示された修正案をユーザーに伝えます。

キャッシュ・ヘルス・モニタ

Agile PLM では、各クラスタ・サーバーのアプリケーション設定に関連するすべてのデータがメモリーにキャッシュされます。これは、管理キャッシュと呼ばれます。管理キャッシュ・データの変更がクラスタ内のいずれかのサーバーで発生すると、変更されたデータ・アイテムに対するキャッシュを更新するように、すべてのクラスタ・サーバーにメッセージが送信されます。Agile PLM では、このメッセージのブロードキャストに Java Messaging Service (JMS) が使用されます。

一部の変更はクラスタ内のすべてのサーバーに継承されないことが確認されています。この現象はランダムに発生します。したがって、非継承の発生は予測不可能です。発生した場合の解決策は、クラスタ内のすべてのサーバーを再起動することです。この問題に対する別の解決策が、**キャッシュ・ヘルス・モニタ**と呼ばれるユーティリティです。

注意 キャッシュ・ヘルス・モニタ・ユーティリティは、バックアップ・システムとして設計されています。JMS サーバーを使用する現在の方法も、プライマリ・データ同期化メカニズムとしてそのまま使用できます。

キャッシュ・ヘルス・モニタでは、次のアクションが実行されます。

- 変更されたすべての「管理者」ノードおよび現在の同期化の状態を一覧表示する
- 同期化を手動で、または自動的に開始する（44ページの「[Javaクライアント管理者を使用した自動同期化](#)」を参照）
- キャッシュ同期化操作のログ機能をオンまたはオフにする
- キャッシュ同期化操作メッセージが含まれているログ・ファイルを表示する
- 古いエントリをパージする

キャッシュ・ヘルス・モニタの機能

すべての管理者（設定関連）の変更が、新しいデータベース・テーブルに入力されます。サーバーの起動時に、キャッシュ・ヘルス・モニタでは、サーバー時間が最終更新時間（LUT）として記録され、LUT より後に行われたすべての変更が監視されます。手動または自動のトリガが開始されると、LUT 以降のすべての変更が同期化され（すでに同期化されていない場合）、LUT が現在の時刻に更新されます。

クラスタ内のサーバーにアクセスするには、管理者は、アプリケーション・サーバー名とポートを使用して、各アプリケーション・サーバーに直接ログインする必要があります。たとえば、次の 3 つのサーバーが含まれているクラスタがあるとします。

- app1.abc.com
- app2.abc.com
- app3.abc.com

手動で監視および同期化するには、管理者は、次のフォーマットの URL を使用して各サーバーにログインします。

- <http://app1.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>
- <http://app2.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>
- <http://app3.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>

この例では、デフォルトの Oracle Application HTTP ポートである 7777 が示されています。この部分を適切な値に変更してください。

「キャッシュ・ヘルス・モニタ」ページのボタン

「キャッシュ・ヘルス・モニタ」ページには、特定のアプリケーション・サーバー名が一覧表示されます。このリストは、ユーザーの接続先のサーバーの識別に役立ちます。特に、ユーザーがクラスタ内の各サーバーに対して 1 つのブラウザ・セッションを持つ場合に有効です。

「キャッシュ・ヘルス・モニタ」ページのボタンは、次のように、特定のイベントを有効にします。

同期 - 特定のアプリケーション・サーバーのデータを同期化します。1 つ以上のオブジェクトの「ステータス」列に、「未同期」と表示された場合に使用します。「同期」ボタンをクリックすると、同期化が開始され、ステータスが「同期済」に変更されます。

更新 - そのページのデータを更新します。

ページ - データベースの CACHE_SYNC_LOG テーブル内の古いエントリをページします。ページするエントリを選択する時間間隔は、ファイル `agile_home/agileDomain /config/agile.properties` のプロパティ `cache.syncevent.obsoletetime` (分) で設定されます。デフォルト値は、144000 分 (100 日) です。このプロパティの変更を有効とするには、サーバーの再起動が必要です。

「ページ」では、ページの値より古いテーブル内のエントリがすべて削除されます。前述の値の場合は、144000 分より古いエントリがすべて削除されます。

「ログを有効化」 / 「ログを無効化」 - ログ機能を有効または無効にします。トグル・スイッチとして機能します。

「ログの表示」 - 現在の同期化ログを表示します。このログには、同期化プロセス、同期化されたオブジェクト、および失敗（ある場合）に関する情報が含まれています。

Java クライアント管理者を使用した自動同期化

自動キャッシュ同期化を設定するには、管理キャッシュの同期タスクというバックグラウンド・タスクを有効にする必要があります。このタスクは、「Java クライアント」 > 「管理」 > 「サーバー設定」 > 「タスクの設定」で設定されます (388 ページの「[タスクの設定](#)」で説明されています)。

「タスクの設定」ページでタスクをダブルクリックすると、そのタスクに対する「タスクの設定」の「一般情報」ウィンドウが表示されます。管理キャッシュの同期タスクには、次のプロパティがあります。キャッシュ・ヘルス・モニタに固有のデフォルトも記載されています。

プロパティ	説明
名前	設定するタスクの名前。

プロパティ	説明
タスク間隔	サーバーがタスクのステータスを更新した後の定期的な間隔を分で表します。デフォルトは 5 です。この場合は、ノード内の有効なすべてのタスクが 5 分おきに実行されます。
タスクの遅延時間	イベントを開始するまでの遅延時間を分で示します。デフォルトは 0 です。
タスクのルックバック・ウィンドウ	実行可能になったイベントを検索する際にタスク・マネージャが何分前まで検索するかを指定します。デフォルトは 0 です。
タスクの最大イベント数	1 つのサーバーで同時に実行できるイベントの数。デフォルトは 1 です。
タスクの失敗時の再起動	イベントの失敗後にそのイベントを再起動するかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」。デフォルトは「いいえ」です。
タスクのアクセス・サーバーのロード	クラスタ内の異なるサーバーにおいてイベントを同時に実行できるかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」。デフォルトは「いいえ」です。
無効なタスク	タスクが無効（「はい」）か、有効（「いいえ」）かを示します。このプロパティは、タスクの設定およびテスト中は「はい」に設定できます。タスクを有効にする準備が整ったときは、「いいえ」に設定しなおす必要があります。デフォルトは「いいえ」です。

管理者で頻繁に変更を行わない場合、または管理者変更が特定の時間またはスケジュールされた時間に更新される場合は、クラスタの手動同期化がニーズと一致する可能性が高くなります。ただし、管理者で設定を頻繁に変更し、1 日中様々な間隔で入力される場合、この自動の管理キャッシュの同期タスクは、同期化に失敗した際、より構造化されたバックアップとなります。同期化に失敗した場合は、クラスタのサーバーを再起動できるまで、キャッシュ・ヘルス・モニタ（手動または自動）を使用します。

エラーのログを記録し、デバッグする

管理キャッシュ同期化に関連するイベントを追跡するメカニズムを提供するために、すべてのデバッグ・メッセージを記録するログ機能を有効にできます。ログ機能がオフの場合、記録されるのは、キャッシュ・ヘルス・モニタで表示されたエラーと同期化の問題のみです。

管理者オブジェクトまたはビジネス・オブジェクトがクラスタ内のサーバーで変更されると、JMS サーバーは、イベントの詳細を受信し、他のサーバーにメッセージをブロードキャストするためのトリガとなります。

注意 キャッシュ・ヘルス・モニタで、管理者オブジェクトが限定的に監視および同期化される場合（例: 変更基本クラスまたは変更指示クラス）、ログ・メカニズムでは、管理者オブジェクトとユーザー変更ビジネス・オブジェクト（例: 変更された変更指示）の両方に関連するイベントが記録されます。これは、ビジネス・オブジェクトに対する変更のサーバー全体への継承を追跡するために役立ちます。

次の 2 つのメッセージ（各メッセージはタイム・スタンプで開始）がログ・ファイルに記録されます（ログがオンの場合）。

```
2006-09-20 18:14:08,881 HttpRequestHandler-3096409 <Messenger:DEBUG> Sending message
<class:com.agile.pc.cmserver.event.CMBatchEvent, content:Batch events:

event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMObjectEvent, content: object: class: 10000 subclass:10141 id:6010147
version:1 action: 4
```

```
event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMFTSSyncEvent, content: FTS sync object: class: 10000 subclass:10141
id:6010147 version:0

event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMObjectEvent, content: object: class: 10000 subclass:10141 id:6010147
version:1 action: 1

> to <topic:sync_topic> with property <name=APP_SRV_ID, value=6010141>

2006-09-20 18:14:10,222 HttpRequestHandler-3096409 <Messenger:DEBUG> Message was delivered to JMS
topic:sync_topic
```

最初のメッセージでは、変更されたオブジェクトの詳細が記録されます。2 番目のメッセージでは、JMS サーバーがメッセージを受信したことが示されます。次に、JMS はこのメッセージを継承し、次の 3 つのメッセージが元のサーバー以外のすべてのサーバーで記録されます。

```
2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Received message from JMS
server.

2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Message was sent by server with
ID: 6010141, current server id is: 6010121

2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Process event: class name -->
com.agile.pc.cmserver.event.CMBatchEvent, type --> 1, content --> Batch events:

event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMObjectEvent, content: object: class: 10000 subclass:10141 id:6010147
version:1 action: 4

event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMFTSSyncEvent, content: FTS sync object: class: 10000 subclass:10141
id:6010147 version:0

event class: com.agile.pc.cmserver.event.CMObjectEvent, content: object: class: 10000 subclass:10141 id:6010147
version:1 action: 1
```

前述のログ・メッセージを使用すると、同期化されていないデータを追跡できます。

手動/自動（バックグラウンド・スレッド）のトリガが発生すると、ログ機能がオフの場合でも、次のメッセージが同期化対象のすべての管理者ノードに表示されます。

手動トリガの場合:

```
2006-09-20 13:17:39,512 HttpRequestHandler-394365 <ADictionary:INFO> Admin cache sync > invalidate node: admin
objid: 7000 class id: -1 version: -1
```

自動トリガの場合:

```
2006-09-20 13:17:39,512 ApplicationServerThread-149 <ADictionary:INFO> Admin cache sync > invalidate node:
admin objid: 7000 class id: -1 version: -1
```

2 つのメッセージの相違点は、トリガのソースであることに注意してください。手動のケースでは、HTTP リクエストを送信しているため、ソースは `HttpRequestHandler` と表示されます。2 番目のケースでは、ソースがアプリケーション自体（バックグラウンド・スレッド）であるため、ソースは `ApplicationServerThread` と表示されます。

ログ機能は、`agile_home/agileDomain/config` ディレクトリの `log.xml` ファイルを使用して設定されます。

次の要素で、キャッシュ同期化のログが設定されます。

```
<appender name="CacheSyncLog" class="org.apache.log4j.RollingFile
Appender">
<param name="File" value="\${agile.log.dir}/cachesync.log" />
<param name="Append" value="true" />
<param name="MaxFileSize" value="1MB"/>
<param name="MaxBackupIndex" value="10"/>
<layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
<param name="ConversionPattern"
value="%d\t\t\t\t\t; %c{1}:%p>\t%m\n"/>
</layout>
</appender>
```

パラメータ	説明
ファイル	ログ・ファイルの名前とパス。
追加	サーバー起動時に既存のファイルに追加または上書きします。
MaxFileSize	現在のファイルがアーカイブされ、新規ファイルが作成された後の最大ファイル・サイズ。
MaxBackupIndex	アーカイブされる最大ファイル数。

Agileのオブジェクトの削除

Java クライアントと Web クライアントでは、ソフト削除とハード削除がサポートされています。データベース内のオブジェクトをソフト削除した場合、そのオブジェクトは完全には削除されません。ソフト削除されたオブジェクトには、データベース内で「削除済」のマークが付けられ、そのオブジェクト番号や名前が保持されます。ソフト削除されたオブジェクトと同じタイプの別のオブジェクトを、同じ番号または名前で作成することはできません。

注意 Agile 管理者が設定した適切な権限がユーザーにある場合は、ソフト削除されたオブジェクトの削除を取り消すことができます。

検索を実行した場合、ソフト削除されたオブジェクトは、検索結果テーブルに表示されません。ソフト削除されたオブジェクトを検索するには、「**削除済オブジェクト検索**」フォルダで、事前定義の削除済オブジェクト検索を実行する必要があります。

注意 ユーザー・プロファイルの「検索」フィールドに「**削除済オブジェクト検索**」が含まれている場合は、「**削除済オブジェクト検索**」フォルダに対するアクセス権があります。適切な権限がある場合は、ユーザー・プロファイルを編集して、「検索」フィールドの検索リストに「**削除済オブジェクト検索**」を追加できます。

ハード削除されたオブジェクトは、データベースから完全に消去されます。

注意 ハード削除されたオブジェクトは、削除を取り消すことができません。

Agile オブジェクトのソフト削除、ハード削除または削除取消を実行する条件

- そのオブジェクトに対する適切な削除権限または削除取消権限が必要です。
- オブジェクトが、削除または削除取消を許可される条件を満たしている必要があります。

通常、オブジェクトの削除または削除取消がデータ整合性を失う原因となる場合、削除または削除取消アクションは無効となっています。

オブジェクトの関係および確認通知がすべて削除されないかぎり、そのオブジェクトは削除できません。

特定のオブジェクト・タイプの削除の詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』の Agile オブジェクトの削除に関する項を参照してください。


Webクライアントでオブジェクトをソフト削除する手順は、次のとおりです。

1. 削除するオブジェクトを選択し、開きます。
2. 「アクション」>「削除」の順に選択し、確認プロンプトに「OK」と回答します。

オブジェクトがソフト削除されます。


Webクライアントでソフト削除されたオブジェクトをハード削除する手順は、次のとおりです（適切な権限がある場合）。

1. 「削除済オブジェクト検索」フォルダから適切な削除済<オブジェクト>検索を実行します。
2. 検索結果テーブルで1つ以上のオブジェクト行を選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックします。
4. 警告プロンプトの回答として「続行」を選択し、「完了」をクリックします。
5. または、一度に1つのオブジェクトをハード削除できます。
 - オブジェクトを開きます。
 - 「アクション」>「削除」の順に選択し、確認プロンプトに「OK」と回答します。

注意 検索結果テーブルで「ナビゲータ」ボタンをクリックすると、左ウィンドウの  ナビゲータ・ドローワに検索結果オブジェクトのリンクを表示できます。

Webクライアントでオブジェクトの削除を取り消す手順は、次のとおりです。

1. 「削除済オブジェクト検索」フォルダから適切な削除済<オブジェクト>検索を実行します。
2. 削除を取り消す削除済オブジェクトを開きます。
3. 「アクション」>「削除取消」の順に選択します。

注意 検索結果テーブルで「ナビゲータ」ボタンをクリックすると、左ウィンドウの  ナビゲータ・ドローワに検索結果オブジェクトのリンクを表示できます。

クラス

この章のトピック

■ ビジネス・オブジェクトにAgile PLMクラスを設定する	49
■ Agile PLMクラス構成	50
■ Agile PLMのインストールされるオブジェクト・タイプ	52
■ Agile PLMのインストールされるルーティング不可能なオブジェクト・タイプ	53
■ ライフサイクル・フェーズをカスタマイズする	56
■ サブクラスを設定する	58
■ タブを設定する	63
■ タブの形式を変更する	64
■ 属性、ユーザー設定フィールド、および読取りフィールド	71
■ 属性を定義する	75
■ 属性を設定する	82
■ サブクラスに対しカスタム・アイコンを使用する	84
■ オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス	85

この章では Agile PLM システムに組み込まれている定義済ビジネス・クラスについて説明します。また、サブクラスの作成、自動採番ソースの割当て、製品データのタブ付きウィンドウやフォーマット済フィールドの配置の調整などを実行する方法についても説明します。

ビジネス・オブジェクトにAgile PLMクラスを設定する

「クラス」ノードは、Agile PLM のオブジェクトを分類するためのフレームワークを提供します。Agile PLM ユーザーが作成するのはすべてオブジェクトです。管理者は、ビジネス・オブジェクトの新規タイプを定義するか、またはデフォルト・クラスやサブクラスを変更できます。

注意 Agile PLM で利用可能なデフォルト・クラスは、自社が購入したライセンスにより異なります。利用できないクラスは、「クラス」ページでは赤字で表示されます。

各クラスは、アクション（ビジネス・プロセス）の種類やエンティティ（ビジネス・オブジェクト）の種類を表します。各クラスには少なくとも1つのデフォルト・サブクラスがあります。Agile PLM で作成されるすべてのオブジェクトは、サブクラスのインスタンスです。

Agile PLM の設定を開始する前に、自社に必要なオブジェクトのタイプを考慮する必要があります。その上で、要件に応じて Agile PLM を調整できます。たとえば、自社が製造または購入する部品の種類を整理するために、部品クラスに新しいサブクラスを作成することが考えられます。

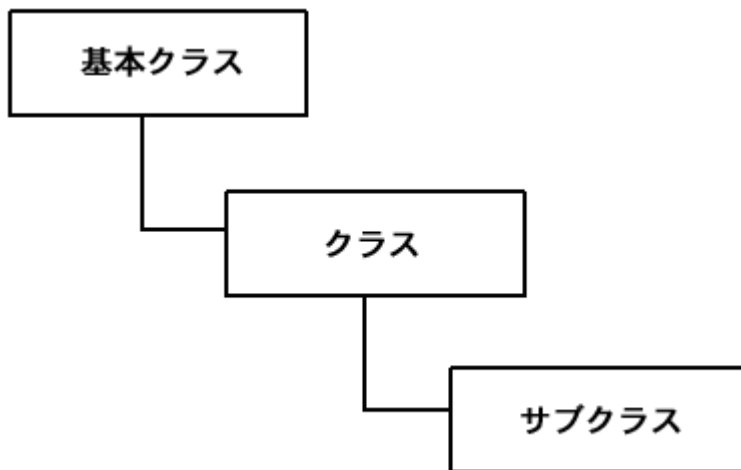
Agile PLM オブジェクト・フレームワークはそのまま使用できますが、次の方法でカスタマイズすることもできます。

- 追加サブクラスの作成
- 必要に応じてクラスやサブクラスを変更
- 必要に応じて、クラス（ページ2）とサブクラス（ページ3）の新規属性を作成

- 属性のプロパティを変更
- 属性やタブを表示または非表示
- テーブル列またはフィールドの並べ替え

Agile PLMクラス構成

Agile PLM クラスには次の3つのレベルがあります。



- **基本クラス** - 最も高いレベルのオブジェクトです。基本クラスは、クラスの親オブジェクトです。基本クラスの作成や削除はできませんが、名前は変更できます。提供されている基本クラスの例には、「ユーザー」、「アイテム」、「変更」などがあります。
- **クラス** - Agile PLM における組織のプライマリ・レベルです。メイン・クラスとも呼ばれています。基本クラスの全プロパティとプロセス拡張を継承しています。クラスは、作成したサブクラスを編成するフレームワークです。クラスの作成や削除はできませんが、名前を変更したり、無効化することはできます。提供されているクラスの例には、「部品」、「変更指示」、「変更要求」などがあります。
- **サブクラス** - 親クラスのすべてのプロパティと属性を継承しています。サブクラスは Agile PLM で特定のビジネス・オブジェクトを説明する情報やデータを整理します。サブクラスは名前を変更できます。「ユーザー」、「自動転送」、「見積依頼」、「見積依頼回答」、「標準レポート」を除くすべてのクラスに、サブクラスを作成できます。「アイテム」、「変更」、「ファイル・フォルダ」の基本クラスから派生したサブクラスを除き、すべてのサブクラスを削除または無効化できます。提供されているサブクラスの例には、「ユーザー」、「部品」、「ドキュメント」、「設計変更指示」、「設計変更要求」などがあります。

注意 クラス（特に基本クラス）の名前を変更する前に、Agile PLMで提供されているデフォルト・クラスについてよく理解してください。クラス名は固有である必要があります。

ルーティング可能/不可能なオブジェクト

各クラスは、特定のプロセスまたはエンティティの種類を表します。

- **ルーティング可能なオブジェクト**は、変更管理プロセスにおける変更、転送、製品サービス依頼などのプロセスを表すクラスから作成されます。これらのオブジェクトは、承認またはその他の入力を行う目的で、ワークフローを介してAgile PLMユーザーにルートできます(127ページの「[ワークフロー](#)」を参照してください)。
- **ルーティング不可能なオブジェクト**は、部品、拠点、見積依頼、ユーザー、価格、レポートなどのエンティティ（項目）を表すクラスから作成されます。これらのオブジェクトには、進行状況を示すためにライフサイクル・フェーズを介してフラグを付けることができます（56ページの「[ライフサイクル・フェーズをカスタマイズする](#)」を参照してください）。ただし、ルーティング不可能なオブジェクト（特に部品とドキュメント）は、ワークフローを介した情報収集プロセスによって変更できることに注意してください。これらのワークフローは、変更指示や変更要求などのルーティング可能なオブジェクトを介して作成されます。

注意 ファイル・フォルダ・クラスにはデフォルトの編集不能なワークフローがありますが、ステータスは「レビュー」のみで他のステータスはありません。このワークフローによって、ファイル・フォルダ・オブジェクトに「送信スリップ」タブが表示されます。このタブでは、承認者によるサインオフおよびファイル・フォルダへのコメントが可能です。しかし、ファイル・フォルダ・オブジェクトにはライフサイクル・フェーズもあり、ルーティング不可能とみなされます。

Agile PLMのオブジェクト・タイプ

PLM では、「クラス」ノードの各行がオブジェクト・タイプになります。オブジェクト・タイプは、基本クラス（テンプレートの種類）、クラス（通常は PLM ソリューションに固有の詳細）、およびサブクラス（編成された固有のグループ）の階層別に整理されます。

たとえば、ECO987 というビジネス・オブジェクトの場合を考えてみます。これは、オブジェクト・タイプ「ECO」（サブクラス）のインスタンスの1つで、オブジェクト・タイプ「変更指示」（クラス）から導出されます。さらに、「変更指示」（クラス）はオブジェクト・タイプ「変更」（基本クラス）から導出されます。

したがって、作成する新しい各サブクラスはオブジェクト・タイプでもあります。「アイテム」および「部品」はそれぞれオブジェクト・タイプで、「コンデンサ」、「レジスタ」などのサブクラスを追加すると、これらもまたオブジェクト・タイプになります。

「オブジェクト・タイプ」は、条件、権限、通知、イベント管理などの PLM 管理分野で重要なフィールドです。これらの管理機能を含む多くの機能で、オブジェクト・タイプは、アクセス対象およびユーザーによる操作対象のオブジェクトの種類を PLM システムに正確に指示するための重要な要素です。

Agile PLMクラスを表示する

Agile PLMクラスまたはサブクラスを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「管理」タブで、「データ設定」の「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 表示するクラスまたはサブクラスをダブルクリックします。
3. ここで、「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。行をダブルクリックすると、そのタブの情報が表示されます。

「一般情報」タブは UI タブの名前と説明、および表示状態を示します。

1 つのタブを開くと、ドロップダウン・リストからこのオブジェクトの他のタブに切り替えることができます。

Agile PLMのインストールされるオブジェクト・タイプ

会社によっては、「クラス」ノードのオブジェクト・タイプ・リストの一部に対するライセンスを取得している可能性があります。

次の表は、Agile PLM にインストールされる可能性があるすべてのオブジェクト・タイプの一覧を示します。最初の表はルーティング可能なオブジェクト、2 番目の表はルーティング不可能なオブジェクトを示します。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
ルーティング可能なオブジェクト: ルーティング不可能なオブジェクトに変更を送信または推奨する手段。これらのクラスには、変更に対する他のユーザーからの承認を得るためのデフォルトのワークフローがあります。これらのクラスからのオブジェクトは、承認なしに変更できます。			
変更	変更指示	設計変更指示 (ECO)	アイテムを変更する指示。アイテムのリビジョンを進めます。
	変更要求	設計変更要求 (ECR)	アイテムへの変更の依頼。
	期限付き変更指示	期限付き変更指示	あるアイテムを一時的に別のアイテムに置き換える指示。
	製造元依頼	製造元変更 (MCO)	製造元、製造元部品番号などの AML (承認製造元リスト) データの変更。
	価格変更	価格変更 (PCO)	公表価格を変更する指示。公表価格のリビジョンを進めることができます。
	拠点毎変更	拠点毎変更 (SCO)	特定の拠点の BOM および AML 情報への変更。
	出荷停止	出荷停止	アイテムを出荷停止/使用停止にする指示。
デklarレーショ ン	サブスタンスのデklarレーション	サブスタンスのデklarレーション	含有基準内のそれぞれのサブスタンスの適合性情報を検索します。
	部品のデklarレーション	部品のデklarレーション	部品レベルの適合性情報とその他の組成見出しレベル情報 (製造元パラメータ) を検索します。
	JGPSSI デklarレーション	JGPSSI デklarレーション	JGP 標準に従って適合性情報 (重量) を検索します。
	均質材のデklarレーション	均質材のデklarレーション	均質材レベルで BOS (含有物質明細) と適合性情報に関する部品の完全な内訳を検索します。
	適合のサプライヤ・デklarレーション	適合のサプライヤ・デklarレーション	顧客と政府機関の規格への適合性を検索します。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
	IPC 1752-1 デクラレーション	IPC 1752-1 デクラレーション	電子製品のジョイント・インダストリ・ガイドライン (JIG) マテリアル組成デクラレーション。
	IPC 1752-2 デクラレーション	IPC 1752-2 デクラレーション	電子製品の均質材組成デクラレーション。
パッケージ	パッケージ	パッケージ	パートナと共有するデータのパッケージ。
製品サービス依頼	PR (問題レポート)	問題レポート	アイテムまたは製品の品質問題。
	不具合レポート	不具合レポート	アイテムまたは製品の品質適合問題。
プロジェクト	アクティビティ	フェーズ、プログラム、プロジェクト、タスク	Product Portfolio Management におけるプロジェクト計画のコンポーネント。アクティビティは、リソースの割当て先となる時系列ベースのオブジェクトです。
	ゲート	DG1、DG2、DG3、DG4、DG5、DG6、ゲート、マイルストーン	Product Portfolio Management におけるプロジェクト管理のマイルストーン。ゲートは、製品開発プロセスの PLM 間の成果物を識別し、プロジェクトのエグゼクティブ・レビューを実施できるようにします。
品質変更依頼	是正予防処置	是正・予防処置	是正処置と予防処置の依頼。
	検証	検証	ビジネス・プロセスの事前レビュー。
転送	自動転送	自動転送	ワークフローによって自動的に開始されるプロダクト・レコードの転送または公表。
	コンテンツ転送	コンテンツ転送 (CTO)	手動で開始されるプロダクト・レコードの転送または公開。

Agile PLMのインストールされるルーティング不可能なオブジェクト・タイプ

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
<p>ルーティング不可能なオブジェクト: これらのクラスのオブジェクトは、Agile PLM ユーザーにワークフローを介してルートされることはありません。ただし、一部のクラスのオブジェクトは、ルーティング可能なオブジェクトからワークフローによって提出され、他のユーザーの承認を経て変更することができます。</p>			

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
顧客	顧客	顧客	その企業のクライアント。
ディスカッション	ディスカッション	ディスカッション	スレッドで表示される非公式なダイアログ。
ファイル・フォルダ	ファイル・フォルダ	ファイル・フォルダ マークアップ	ファイルまたは URL を含むオブジェクト。このクラスには、履歴レポート・ファイル・フォルダを除くすべてのファイル・フォルダ・オブジェクトが含まれます。
	デザイン	デザイン	CAD 環境でデザイン構造を構築できるオブジェクト。
アイテム	ドキュメント	ドキュメント	規格、設計図、製造データなど。
	部品	部品	社内で製造された部品。または、製造元あるいはサプライヤから供給され社内部品番号が割り当てられた部品。
製造元	製造元	製造元	適格な製造元。
製造元部品	製造元部品	製造元部品	製造元によって提供される部品。
部品グループ	部品グループ	部品分類 部品ファミリ アイテム・グループ	質量または組成情報などのプロパティを共有するその他の部品（アイテムまたは製造元部品）のコンテナ。 注意 Agile PLM の以前のリリースで「部品分類」という名前の付いたオブジェクト。
価格	見積履歴	見積履歴	見積依頼回答の入札価格を整理します。PCO による改訂はできません（前述の表の「変更」グループを参照）。
	公表価格	公表価格、契約	組織の製品の価格を整理します。PCO によって改訂できます（前述の表の「変更」グループを参照）。
レポート	標準レポート	管理者レポート、標準レポート	簡単に使用可能な管理者向けのレポート（管理者レポート）とユーザー向けのレポート（標準レポート）には、製品、ソーシング、品質、プロセス、パーソナル、およびグローバルの各レポートが含まれます）。
	カスタム・レポート	カスタム・レポート	社内で作成し使用するレポート。
	外部レポート	外部レポート	Agile PLM の外部で作成されたレポート。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
見積依頼	見積依頼	見積依頼	見積依頼。ソーシング・プロジェクトから収集され、正式な入札のためにサプライヤに送付されます。
見積依頼回答	見積依頼回答	見積依頼回答	入札（自社の見積依頼に対するサプライヤからの回答）。
拠点	拠点	拠点	社内の製造拠点、または会社と緊密な提携関係にある製造拠点。
ソーシング・プロジェクト	ソーシング・プロジェクト	ソーシング・プロジェクト	見積依頼作成の準備作業および複数の見積依頼間での分析機能。
含有基準	含有基準	含有基準	禁止されているサブスタンス（または関連のサブスタンス）およびそのしきい値のリスト。
サブスタンス	サブスタンス	サブスタンス	アイテム、製造元部品、部品ファミリの組成において使用される単一の化学元素。
	マテリアル	マテリアル	複数のサブスタンスからなる化学複合物、サブスタンス。
	サブパート	サブパート	コンポーネントのサブユニット。適合性情報を収集する均質材レベルを取得する際に使用されます。
	サブスタンス・グループ	サブスタンス・グループ	法律の対象となるベース・サブスタンス、たとえば、「鉛および鉛複合物」を含む複数サブスタンスのグループ。
サプライヤ	サプライヤ	ブローカ、ディストリビュータ、部品メーカー、受託製造業者、メーカー代表者	（デフォルトのサブクラスを使用する）PCM および PG&C ソリューションで使用される製造元部品の適格サプライヤ。
ユーザー	ユーザー	ユーザー	Agile PLM システムを使用する個人。
ユーザー・グループ	ユーザー・グループ	ユーザー・グループ	Agile PLM システムを使用するユーザーのグループ（部門、チーム、拠点固有のグループなど）。

オブジェクト・タイプを無効にする

基本クラスを無効にすると、その子クラスおよびサブクラスは自動的に無効になります。クラスを無効にすると、その子サブクラスは無効になります。基本クラス、クラス、またはサブクラスが無効の場合、Java クライアントまたは Web クライアントのユーザー・インタフェースではグレー表示されます。無効になったクラスが利用不可能となる場所の例として、「作成」メニューや検索メニューがあります。クラスが無効の場合、既存の検索および条件は削除および修正できません。無効にされたオブジェクト・タイプの既存のオブジェクトは、Agile PLM データベース内に残ります。

次の基本クラスを無効にすることはできません（これらの子クラスやデフォルトのサブクラスも同様です）。

- アイテム
- 変更
- ユーザー
- ファイル・フォルダ

ライフサイクル・フェーズをカスタマイズする

ライフサイクル・フェーズは、オブジェクトがルーティング不可能な、つまりワークフローに従っていないクラスの有効なフェーズを示します。アイテム、拠点、製造元、製造元部品、価格、ソーシング・プロジェクト、見積依頼、見積依頼回答、サプライヤ、顧客、価格、部品分類、含有基準、サブスタンス、ファイル・フォルダには、すべてライフサイクル・フェーズがあります。

基本クラス・レベルのライフサイクル・フェーズは、クラスとサブクラスにより継承されています。ライフサイクル・スタンプは、自動的に作成されます。その際には、ユーザーがライフサイクル・フェーズごとに指定した名前と色が使用されます。

ライフサイクル・フェーズを変更する

次の基本クラスでライフサイクル・フェーズを変更できます。

- 部品分類
- 顧客
- ファイル・フォルダ
- アイテム
- 製造元部品
- 製造元
- 価格
- 含有基準
- サブスタンス
- サプライヤ

注意 アイテムの「プレリナリ」ライフサイクル・フェーズは、削除したり名前を変更することはできません。拠点、ソーシング・プロジェクト、見積依頼、および見積依頼回答の各クラスのオブジェクトには読取り専用のライフサイクル・フェーズがあり、名前を変更したり削除することはできません。

ライフサイクル・フェーズの設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 作業を行う基本クラスを選択してから、「ライフサイクル・フェーズ」タブを選択します。「ライフサイクル・フェーズ」ウィンドウが表示されます。

2. 変更するライフサイクル・フェーズをダブルクリックします。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
4. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

ライフサイクル・フェーズを追加する

基本クラス、クラス、サブクラスにライフサイクル・フェーズを追加できます。

ライフサイクル・フェーズを追加する手順は、次のとおりです。

1. 作業を行うクラスを選択してから、「ライフサイクル・フェーズ」タブを選択します。「ライフサイクル・フェーズ」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「ライフサイクル・フェーズの定義」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. ライフサイクル・フェーズの名前、API 名、および説明を入力します。名前は 29 文字以内で入力してください。
4. 「有効」フィールドで、ドロップダウン・リストから「はい」または「いいえ」を選択します。
5. たとえば、「BOM ルールにライフサイクル・フェーズを追加」という追加フィールドがあります。「可」、「不可」、「警告」（デフォルト）を選択します。
「不可」を選択した場合、ユーザーはこのライフサイクル・フェーズに現在あるアイテムをアイテムの BOM テーブルに追加できなくなります。
6. 操作が完了したら「OK」をクリックします。

注意 ライフサイクル・フェーズに別の色を選択する場合は、該当するライフサイクル・フェーズ・タブで色を変更します。

ライフサイクル・フェーズを削除する

ライフサイクル・フェーズは、作成されたレベルからのみ削除できます。クラスからライフサイクル・フェーズを削除すると、このクラスから継承したサブクラスすべてからも削除されます。たとえば、アイテム基本クラスでライフサイクル・フェーズを作成した場合は、アイテム基本クラスを後で開いて、そのライフサイクル・フェーズを削除できます。このライフサイクル・フェーズは、部品クラスとドキュメント・クラス、および部品サブクラスとドキュメント・サブクラスからも削除されます。

ライフサイクル・フェーズを削除する手順は、次のとおりです。

1. 作業を行うクラスを選択してから、「ライフサイクル・フェーズ」タブを選択します。「ライフサイクル・フェーズ」ウィンドウが表示されます。
2. 削除するライフサイクル・フェーズを選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックします。
4. ライフサイクル・フェーズの削除の確認を求めるメッセージで「OK」をクリックします。
ライフサイクル・フェーズは削除され、Agile PLM で選択できなくなります。

Agile PLM でアイテムのリリースにすでに使用されたライフサイクル・フェーズを削除した場合、そのフェーズは表示されますが、今後割り当てすることはできません。

注意 アイテムの「プレリミナリ」ライフサイクル・フェーズは削除できません。

サブクラスを設定する

Agile PLM でオブジェクトを作成する際には、最初に ECO、部品、コンデンサなどのサブクラスを指定します。サブクラスは、「**クラス**」ノードに作成され、定義されます。定義された各 Agile PLM クラスには、サブクラスが少なくとも 1 つあります。すべてのクラスにサブクラスを追加で作成できます。たとえば、部品クラスには、コンデンサ、レジスタ、ダイオードなどのサブクラスを作成できます。

デフォルトのサブクラスも使用できますが、新規のサブクラスを定義したり名前を変更することもできます。

次のオブジェクトのいずれかを作成する目的でサブクラスが管理ノードから使用されていないかぎり、そのサブクラスを削除できます。

- 検索条件
- Java クライアントまたは Web クライアントのオブジェクト
- 権限マスク

注意 次のクラスの新規サブクラスは作成できません。

- ユーザー・クラス
- 自動転送クラス
- 見積依頼クラス
- 見積依頼回答クラス
- 標準レポート・クラス

重要 Agile PLM で新規サブクラスを設定するには、慎重な計画が必要です。新規サブクラスを一時的な目的で使用しても、システムから削除するのは容易ではありません。全体的な計画を立てずに新規サブクラスを設定すると、すぐに「やり直し」になる可能性があります。自社のニーズにあわせた全体的な計画を策定する際は、デフォルトのクラスおよびサブクラスを使用して Agile PLM オブジェクトをよく理解することをお勧めします。

作業を開始する前に

新規のサブクラスを作成する前に次の内容について考慮してください。

- サブクラスを作成する対象の Agile PLM クラスは何か。
- 新規サブクラスにどのような名前を付けるか。サブクラス名は固有であり、同じ Agile PLM システムでは 1 回しか使用できません。
- そのサブクラスに固有の製品データを追跡する必要があるか。必要がある場合、そのサブクラスの「ページ 3」タブを設定する必要があります。
- 新規サブクラスに「ページ 3」タブを作成する場合は、「ページ 3」タブを変更できるようにユーザーの役割と権限を調整する必要があります。

サブクラスで自動採番を使用する場合は、次の内容について考慮してください。

- ユーザーに新規のサブクラスへの手動による番号の割当てを許可するか。
- サブクラスに新規の自動採番ソースを作成するか。それとも、既存の自動採番ソースを使用するか。
- 既存の自動採番ソースを使用する場合、どれを使用するか。

サブクラスのプロパティを表示する

サブクラスの設定は、プロパティを表示して確認できます。たとえば、変更指示のサブクラスに割り当てられている番号ソースを確認するには、管理者でサブクラスのプロパティを表示します。

サブクラスのプロパティを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 表示するサブクラスの名前をダブルクリックします。

サブクラスのプロパティが「一般情報」タブに表示されます。


自動採番ソース・プロパティを変更する

自動採番を使用できるサブクラスには、自動採番ソース・プロパティがあります。製造元、製造元部品、および拠点サブクラスでは自動採番を使用しないため、自動採番ソース・プロパティはありません。

Agile PLM 管理者はサブクラスの自動採番ソース・プロパティを変更して、次の操作を実行できます。

- サブクラスの自動番号割当てを必須とし、手動番号割当てを禁止する。
- サブクラスに 1 つ以上の自動採番ソースを割り当てる。
- サブクラスから自動採番ソースの割当てを削除する。

サブクラスで使用する自動採番ソースを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. 「自動採番ソース」フィールドの横にあるをクリックします。「リスト選択者」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 番号ソースを「選択肢」リストから「選択済」リストに移動するには、番号ソースを選択してから右矢印をクリックします。番号ソースをダブルクリックしても移動できます。
複数の番号ソースを選択できます。
5. 「OK」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。
6. 新規の自動採番（自動採番の自動配列で提供されるものよりもカスタマイズされたもの）を作成する場合は、「自動採番の作成」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスの指示に従ってください。詳細は、114ページの「[新しい自動採番ソースを作成する](#)」を参照してください。
7. ユーザーによるオブジェクト番号の手動入力を禁止するには、「自動採番が必要」ドロップダウン・リストで「いいえ」を選択します。詳細は、次のセクションを参照してください。
8. 「自動生成」ドロップダウン・リストで「はい」または「いいえ」を選択します。
9. 「保存」をクリックします。

手動番号割当てを禁止する

特定のサブクラスの自動採番を必須にすると、ユーザーによる番号の手動入力を禁止できます。自動採番を使用できるサブクラスでは、自動採番を必須にできません。

注意 製造元やユーザーなど、複数の Agile PLM サブクラスでは自動採番が許可されません。

特定のサブクラスの手動番号割当てを禁止する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. 「自動採番が必要」ドロップダウン・リストから「はい」を選択します。
4. 「保存」をクリックします。

サブクラス名または説明を変更する

サブクラスの名前は変更できます。Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成にすでに使用されているサブクラスの名前を変更すると、既存のオブジェクトのサブクラスの名前は新しい名前を反映して変更されます。サブクラスに別の説明も入力できます。説明はオプションです。

注意 Agile PLMではすべての文字がサポートされており、Agileのクライアントでは問題ありませんが、サブクラスの名前を変更したり、作成する場合は、SDKで記述された統合やカスタム・アプリケーションで問題が生じる可能性があるため、次の文字の使用は避けてください。

、（カンマ）、.（ピリオド/ドット）、:（コロン）、;（セミコロン）、=（イコール記号）

サブクラスの名前を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. 「名前」および「説明」フィールドに新しい名前や説明を入力します。
4. 「保存」をクリックします。

サブクラスの名前がサブクラスのすべてのオブジェクトで変更されます。Java クライアントでは、新規の名前が「新規オブジェクト」ダイアログ・ボックスの「タイプ」ドロップダウン・リストの選択項目として表示されます。Web クライアントでは、新規の名前が「新規変更指示の作成」ウィンドウの「タイプ」ドロップダウン・リストの選択項目として表示されます。

「拠点別のBOM」プロパティを変更する

サブクラスのプロパティのウィンドウには、「拠点別の BOM」というプロパティがあります。このプロパティの値は、「可」または「不可」です。

- 「可」 - BOM の拠点固有の部分にサブクラスを追加できます。
- 「不可」 - BOM の拠点固有の部分にサブクラスを追加できません。

このプロパティにより、部品サブクラスまたはドキュメント・サブクラスを拠点別の BOM の一部にできるかどうかが決まります。

たとえば、製造アイテム・サブクラスの「拠点別の BOM」プロパティを「可」に設定し、部品サブクラスを「不可」に設定するとします。シンガポール拠点のユーザーは、BOM のシンガポール拠点固有のセクションにどの製造アイテムでも追加できますが、BOM のシンガポール拠点固有のセクションに部品を追加することはできません。グローバル・ユーザーは、BOM のグローバル・セクションに製造アイテムでも部品でも追加できます。

新規に作成された部品サブクラスおよびドキュメント・サブクラスのすべてについて、デフォルト値は、「可」です。

サブクラスの「拠点別のBOM」プロパティを変更する手順は、次のとおりです。


1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. 「拠点別の BOM」フィールドで「可」または「不可」を選択します。「保存」をクリックします。

新規サブクラスを作成する

新規サブクラスを作成する手順を次に示します。59ページの「[作業を開始する前に](#)」を参照してください。サブクラスをユーザーにリリースする前にテストを実行している間は、サブクラスを無効にしておいてください。

新規サブクラスを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規サブクラス」ボタンをクリックします。「新規サブクラス」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. ドロップダウン・リストからクラスを選択します。

4. 「名前」、「API 名」、および「説明」フィールドに入力し、「有効」フィールドで「はい」または「いいえ」を選択します。サブクラス名には固有の名前を付ける必要があります。
5. 「自動採番ソース」フィールドの横にある  をクリックします。選択のダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 番号ソースを「選択肢」リストから「選択済」リストに移動するには、番号ソースを選択してから右矢印をクリックします。番号ソースをダブルクリックしても移動できます。
複数の番号ソースを選択できます。
7. 「OK」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。
8. 新規の自動採番（自動採番の自動配列で提供されるものよりもカスタマイズされたもの）を作成する場合は、「自動採番の作成」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスの指示に従ってください。（このタスクの詳細は、114ページの「[新しい自動採番ソースを作成する](#)」を参照してください。）
9. ユーザーによるオブジェクト番号の手動入力を禁止するには、「自動採番が必要」ドロップダウン・リストで「いいえ」を選択します。（詳細は、60ページの「[手動番号割当てを禁止する](#)」を参照してください。）
10. 「自動生成」ドロップダウン・リストで「はい」または「いいえ」を選択します。
11. 手順 3 で部品クラスまたはドキュメント・クラスを選択した場合は、「拠点別のBOM」を「可」または「不可」に設定します。（詳細は、61ページの「[「拠点別のBOM」プロパティを変更する](#)」を参照してください。）
12. すべての設定を指定したら、「OK」をクリックします。
「クラス」ウィンドウのクラス名の下に新規サブクラスが表示されます。

注意 番号ソースは「自動採番」ノードで作成し設定します。手順については、「自動採番ソースについて」を参照してください。

サブクラスを削除する

保存された検索、オブジェクト、または再利用可能な条件の作成に使用されていないサブクラスは、削除できます。

サブクラスを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 削除するサブクラスをダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. 「削除」ボタンをクリックします。
4. 確認のダイアログ・ボックスで、「OK」をクリックします。
「クラス」ウィンドウのクラス名の下にサブクラスが表示されなくなります。

注意 検索、オブジェクト、または再利用可能な条件の作成に使用されたサブクラスを削除しようとする、そのオブジェクトがすでに使用されていることを示すエラー・メッセージが表示されます。

サブクラスを表示してから「アクション」メニューの「削除」を選択する方法でも、サブクラスを削除できます。

タブを設定する

Agile PLM クライアントでユーザーがオブジェクトを開くと、タブ付きのページ、つまりタブのウィンドウが表示されます。「クラス」ノードから、大部分のオブジェクトのタブを有効（表示）または無効（非表示）にできます。オブジェクトのタブの名前も変更できます。オプションの「ページ2」タブと「ページ3」タブを設定するには、タブが表示されるように有効にします。

大部分のオブジェクトのタブは非表示にできますが、次のタブを無効にしたり非表示にすることはできません。

- すべてのオブジェクトの最初のタブ。具体的には次のとおりです。
 - 変更、パッケージ、PSR、QCR、転送、プロジェクトの「カバー・ページ」タブ。
 - すべての製造元、製造元部品、ユーザー、ユーザー・グループ、拠点、顧客、ディスカッション、価格、レポートの「一般情報」タブ。
 - すべてのアイテムまたはファイル・フォルダの「タイトル・ブロック」。
- すべての変更の「対象アイテム」タブおよびPCOの「対象価格」タブ。
- ディスカッションの「アクション・アイテム」タブ。
- すべての転送の「選択されたコンテンツ」タブおよび「送信先」タブ。実際に、ATOのタブは無効化または非表示にできません。
- ファイル・フォルダ（履歴レポート・ファイル・フォルダではない）の「ファイル」タブ。
- 見積依頼および見積依頼回答の「回答リスト」タブ。
- ディスカッションの「返信」タブ。
- プロジェクトの「チーム」タブと「ワークフロー」タブ。

タブに表示される属性を設定する場合は、そのタブの設定ウィンドウにアクセスする必要があります。75ページの「[属性を定義する](#)」を参照してください。

「ページ2」タブについて

変更指示などの追加情報を記録する必要がある場合は、デフォルトで「ページ2」タブと呼ばれる追加タブを有効化できます。このタブは変更指示クラスのすべてのサブクラスの「カバー・ページ」タブの隣に表示されます。このタブにはデフォルト名の「ページ2」を使用することも、固有の名前を付けることもできます。

注意 Webクライアントでは、「ページ2」の属性は「カバー・ページ」タブの「ページ2」という見出しの下に表示されます（カスタム・タブ名は表示されません）。下方にスクロールすると、隠れている「ページ2」の情報を表示できます。

「ページ3」タブについて

サブクラスに固有の追加情報を記録する必要がある場合は、デフォルトで「ページ3」タブと呼ばれる追加タブを有効化できます。たとえば、「コンデンサ」というサブクラスの「ページ3」タブを設定し、「絶縁体」という名前のフィールド（必要に応じて複数のフィールド）を作成して、作成されているコンデンサ・オブジェクトごとにユーザーが絶縁体に関する情報を記録できるようにできます。このタブにはデフォルト名の「ページ3」を使用することも、固有の名前を付けることもできます。

注意 Web クライアントでは、「ページ 3」の属性は「カバー・ページ」タブの「ページ 2」の属性の下で、「ページ 3」という見出しの下に表示されます（カスタム・タブ名は表示されません）。下方にスクロールすると、隠れている「ページ 3」の情報を表示できます。

タブを表示、非表示にする、または名前を変更する

クラスのタブを表示、非表示、名前変更することで、Agile PLM クライアントのユーザー・インタフェースをカスタマイズできます。

注意 「BOM」タブまたは「製造元」タブを非表示にすると、「BOM のレッドライン」タブと「製造元のレッドライン」タブのボタンも無効化されます。

タブの名前や表示/非表示は、サブクラス・レベルでの設定によって決まります。たとえば、変更指示クラスで「ページ 2」タブの「名前」を「P2」、「表示」を「いいえ」に設定し、ECO サブクラスで「ページ 2」タブの「名前」を「ECO の P2」、「表示」を「はい」に設定した場合、Java クライアントまたは Web クライアントで「ページ 2」タブが表示され、「ECO の P2」という名前になります。

タブを表示、非表示、名前変更する手順は、次のとおりです。

1. 「クラス」ウィンドウで対象のタブを見つけてダブルクリックし、そのタブの設定ウィンドウを表示します。
たとえば、「変更指示クラス」をクリックしてから「ユーザー・インタフェース・タブ」タブを表示し、「ワークフロー」をダブルクリックして、変更指示の「ワークフロー」タブの設定ウィンドウを表示します。
2. 必要に応じて、「一般情報」設定タブに新しいタブ名を入力します。
新しい名前の付いたタブが Java クライアントに表示されます。Web クライアントでは、タブのデータは「カバー・ページ」タブなどの、最初のオブジェクトのタブに表示されます。

注意 コンテンツ転送 (CTO) サブクラスの「ページ 3」タブの名前を変更しても、変更された「ページ 3」タブの名前はコンテンツ・サービスのフィルタには表示されません。フィルタには常に「ページ 3」という名前が表示されます。

3. 「表示」ドロップダウン・リストから「はい」を選択し、Agile PLM クライアントでタブを表示します。
4. 変更が完了したら「保存」をクリックします。

注意 「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを非表示にすると、そのタブで設定した属性はそれぞれ非表示にしないかぎり、Java クライアントまたは Web クライアントの検索の選択項目にはそのまま表示されます。70 ページの「[「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを削除する](#)」を参照してください。

タブの形式を変更する

各オブジェクトのタブでは、2 つの異なる形式のうちの 1 つを使用して Agile PLM クライアントでデータを表示します。

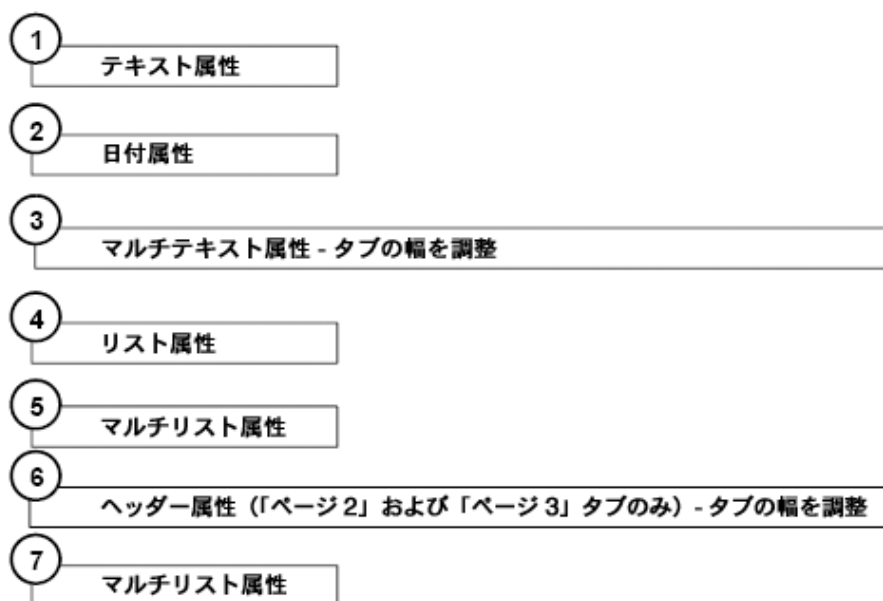
- **フォーム形式** - 属性は行と列の形式でタブに表示され、属性の順序に従って最小の番号から始まり、左から右、上から下の順になります。各属性フィールドにはラベルが付けられます。Web クライアントには 2 つの列があります。Java クライアントでは、列の数はオブジェクト・ウィンドウのサイズに応じて変わります。

- **テーブル形式** - 属性はテーブル形式でタブに表示されます。属性名はテーブルの列の見出しとして表示されます。

フォームとテーブルの両方において、オブジェクトのタブに表示されるオブジェクトの属性の順序を変更できます。

フォーム・タブの属性の順序を変更する

Web クライアントでは、フォーム・タイプのタブの属性は 1 つの列に表示されます。表示される順序を決定できます。最小の番号の属性から始まり上から下に表示されます。マルチテキスト属性はタブの幅を調整します。ヘッダー属性は「ページ 2」および「ページ 3」タブのみに表示されますが、これらもタブの幅を調整します。次の図に、Web クライアントのフォーム・タブでの属性の表示方法の例を示します。



Java クライアントでは属性は行と列の形式でタブに表示され、属性の順序に従って最小の番号から始まり、左から右、上から下の順になります。ユーザーがオブジェクト・ウィンドウのサイズを変更すると、列の数も変わります。1 つのオブジェクト・ウィンドウ内の列の数に関係なく、属性は常に属性順で表示されます。ヘッダー属性（「ページ 2」および「ページ 3」）は、オブジェクト・ウィンドウの幅を調整します。

フォーム・タブの属性の順序を変更する手順は、次のとおりです。

1. クラスの設定ウィンドウの「ユーザー・インタフェース・タブ」タブで対象のタブを見つけてダブルクリックし、そのタブの設定ウィンドウを表示します。

たとえば、「変更指示クラス」をクリックしてから「カバー・ページ」をダブルクリックして、変更指示の「カバー・ページ」タブの設定ウィンドウを表示します。

2. 「属性」タブをクリックします。

3. 「表示属性の並び替え」ボタンをクリックします。「属性の順序の定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。「表示」プロパティが「はい」に設定されているオブジェクトのタブの属性がすべて属性リストに表示されます。
4. 属性名をハイライト表示するには、その属性名をクリックします。
5. ハイライト表示された属性をリストで1つ上に移動するには、上矢印をクリックします。ハイライト表示された属性をリストで1つ下に移動するには、下矢印をクリックします。
6. 希望の順序になるまで、リスト内での属性のハイライト表示と上下移動を続けます。
7. 操作が完了したら、「保存」をクリックします。

指定した表示順に並び替えられた属性が「属性」設定タブに表示されます。

順序の変更を確認するには、Java クライアントまたは Web クライアントでそのタブが表示されるオブジェクトを開きます。タブをクリックしてフォームまたはテーブルを表示し変更を確認します。

テーブル・タブの属性の順序を変更する

Web または Java クライアントのテーブル・タイプのタブでは、属性はテーブルに表示されます。属性名が各列のテーブル見出しになります。フォーム・タブと同じように、テーブル・タブの属性の順序を変更します。

「ページ2」タブまたは「ページ3」タブを設定する

Java クライアントの追加タブを作成できます。追加のタブが有効になっている場合、それらは常に最初のタブまたは2番目のタブの後ろに表示され、デフォルトでは「ページ2」または「ページ3」という名前になっています。タブ名は必要に応じて特定の名称に変更できます。

注意 Web クライアントでは、「ページ2」と「ページ3」の情報は、「カバー・ページ」タブでカバー・ページの情報の下に表示されます。この情報を表示するには、下方にスクロールします。

「ページ2」タブが変更指示クラスなどのオブジェクトのクラス全体に関する補足情報を記録するのに対し、「ページ3」タブはECOやコンデンサなどの個々のサブクラスに関する情報を記録します。

次のセクションでは、「ページ2」タブに組み込まれているユーザー作成機能について説明します。

「ページ2」タブのユーザー作成属性について

「ページ2」タブには、作成権限（読取り権限ではない）を持つユーザーにオブジェクトの作成を許可するユーザー作成属性があります。「ユーザー作成」リストに名前のあるユーザーは、作成した保留中またはプレリミナリのオブジェクトを開いて表示することもできます。

変更指示などの、オブジェクトのクラスのユーザー作成機能を有効にするには、そのクラスの「ページ2」タブでユーザー作成属性を表示状態にする必要があります。この属性は、タブの「ユーザー作成」での名前の表示、および「条件」ノードでの条件の作成に使用できます。

たとえば、読取り権限のサブクラスの条件を「ユーザー作成、等しい、\$USER」に設定すると、現在のユーザーがオブジェクトの作成者である場合は権限マスクが有効になります。ユーザー作成の条件の詳細は、248ページの[「ユーザー作成条件を適用する」](#)を参照してください。

「ページ 2」タブと「ページ 3」タブを設定するためのガイドライン

「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブの設定には、2 つの段階があります。このセクションでは、この 2 つの段階のプロセスの概略を示してプロセスの各手順について詳しく説明します。114 ページの「[作業を開始する前に](#)」も参照してください。

「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを設定するための 2 つの段階の要約を次に示します。

第1段階: 「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブの属性を設定する

1. タブを表示状態にし名前を付ける。
2. 属性を表示状態にし名前を付ける。
3. テキスト属性に長さプロパティを割り当てる。
4. ドロップダウン・リストやデフォルトなど、他の属性のプロパティを割り当てる。

第2段階: タブを設定する

属性の順序を設定する。

次のセクションでは、「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを作成するための手順を詳しく説明します。

第 1 段階: 「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブの属性を設定する

「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを設定する第 1 段階は、次のとおりです。

- タブを表示状態にし名前を付けます。この作業は、「ページ 2」または「ページ 3」の「**一般情報**」設定タブから行います。手順については、64 ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照してください。
- タブに表示する属性を選択して属性を表示状態にし、フィールドや用途を示す名前を付けます。この作業は、「ページ 2」または「ページ 3」の「**属性**」設定タブから行います。

注意 属性の名前は、Java クライアントまたは Web クライアントでの検索条件です。属性に明確で固有な名前を付けると、Agile PLM クライアントでの検索を効率よく行うことができます。システムが稼動状態に入ってから属性の名前を変更すると、既存の検索に影響します。

作業を開始する前に

新しいタブを設定する前に次の内容について考慮してください。

- Agile PLM クラス全体に対する追加のタブ（「[ページ 2](#)」）を作成するか、特定のサブクラスに対するタブ（「[ページ 3](#)」）を作成するか。
「[ページ 3](#)」タブを作成する場合は、ユーザーに特定のサブクラスでの属性の変更を許可する作成権限マスクも作成する必要があります。
- Agile ChangeCAST で情報を ERP システムに転送するか。その場合、転送する情報は「[ページ 2](#)」タブに記録する必要があります。「[ページ 3](#)」タブの情報は ChangeCAST では転送できません。
- タブにどのような名前を付けるか。
- タブに表示する属性はどれか。
- 名前、ドロップダウン・リストの値、デフォルト値、テキスト・フィールドの形式など、各属性のプロパティはどのように設定するか。77ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください。
- Web クライアントでタブに各フィールドをどのように配置（見出しの下で）するか。
- 各テキスト・フィールドの長さの条件（文字数）はどのようにするか。
- タブ順序、つまりユーザーが[Tab]キーを押したときにフィールドが有効になる順序はどのようにするか。（これは属性の順序によって決まります。）

属性の詳細は、76ページの「[属性のタイプについて](#)」を参照してください。

タブを表示状態にし、使用する属性を設定する手順は、次のとおりです。

1. タブを表示状態にし名前を付けます。手順については、64ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照してください。
2. 希望の属性を見つけ、ダブルクリックして設定ウィンドウを開きます。
手順の詳細は、82ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。「[ページ 2](#)」タブの属性に対しては、「変更指示」などのクラスをダブルクリックします。「[ページ 3](#)」タブの属性に対しては、「ECO」などのサブクラスをダブルクリックします。
3. 各属性の新しい名前を入力します。
4. 属性を表示状態にします。「表示」ドロップダウン・リストから「はい」を選択します。
5. 各属性タイプに適切なプロパティを設定します（77ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください）。
 - リスト属性とマルチリスト属性には、リスト選択項目を定義します（97ページの「[リストを設定する](#)」を参照してください）。
 - テキスト属性とマルチテキスト属性には、「最大文字数」と「含む文字」プロパティを設定します。
 - 数値属性には、「最小値」、「最大値」、および「スケール」プロパティを設定します。
 - 見出し属性には、見出し名を入力します（注意: 見出しは Web クライアントでのみ使用されます）。
 - 日付属性には、カレンダー・ユーティリティを使用して「デフォルト値」日付を設定します。
 - 通貨属性には、「デフォルト値」を設定します。

6. 該当する場合は、各属性に対してデフォルト値を設定します。（83ページの「[デフォルト値を設定する](#)」を参照してください。）
7. 属性の設定が完了したら、「保存」をクリックします。

「属性」タブで「ページ 2」または「ページ 3」タブの属性の定義が完了したら、属性の順序を定義してタブの実際の表示方法を設定します。

第 2 段階: タブを設定する

「ページ 2」または「ページ 3」タブに表示する属性を選択し、そのプロパティを設定したら、タブのフィールドを配置する必要があります。そのためには、「属性」設定タブの「表示属性の並べ替え」ボタンを使用します。

注意 属性の順序設定の詳細は、65ページの「[フォーム・タブの属性の順序を変更する](#)」を参照してください。

タブに表示される属性の順序を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「表示属性の並べ替え」ボタンをクリックします。「属性の順序の定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 属性名をハイライト表示するには、その属性名をクリックします。
3. ハイライト表示された属性をリストで 1 つ上に移動するには、上矢印をクリックします。ハイライト表示された属性をリストで 1 つ下に移動するには、下矢印をクリックします。
4. 希望の順序になるまで、リスト内での属性のハイライト表示と上下移動を続けます。
5. 操作が完了したら、「保存」をクリックします。

フィールドのタブの順序

タブ順序とは、ユーザーが[Tab]キーを押したときに Agile PLM クライアントの「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブのフィールドが有効になる順序のことです。

フィールドのタブ順序は、前述の属性の順序によって決まります。

見出し属性を使用する

Java クライアントでは、「ページ 2」タブおよび「ページ 3」タブとして実際のタブが表示されます。しかし、Web クライアントでは、「ページ 2」および「ページ 3」の情報が、オブジェクトの最初のタブ（「カバー・ページ」、「タイトル・ブロック」、「一般情報」タブなど）に表示されます。「ページ 2」および「ページ 3」の情報があるオブジェクトを表示するときは、下方にスクロールして情報を表示します。たとえば、「ページ 2」の情報は「カバー・ページ」の情報の下に表示されます。「ページ 3」の情報は「ページ 2」の情報の下に表示されます。

Web クライアントでは、最初のタブの追加情報をわかりやすくするために、「ページ 2」タブと「ページ 3」タブには、それぞれ 10 個の見出し属性があります。見出し属性を表示状態にし、意味のある名前を付けます。次に、その名前を属性順リストに配置し、後続の属性のグループが記述されるようにします。

たとえば、「ページ 2」の属性順リストは次のように設定できます。

属性順リスト	属性のタイプ
ページ 2	見出し 01
作成者	作成者

属性順リスト	属性のタイプ
作成日	日付 01
コンポーネント・プロパティ	見出し 02
抵抗	テキスト 01
マテリアル	リスト 01
メモ	マルチテキスト 10

カバー・ページの情報に続き、Web クライアントでは次のような形式で属性が表示されます。Java クライアントでは、「ページ 2」および「ページ 3」の各属性（見出し属性も含む）が、「ページ 2」タブおよび「ページ 3」タブに表示されます。

The diagram illustrates the layout of a page with numbered tabs and input fields. The tabs are numbered 1 through 7, and the input fields are numbered 1 through 7. The layout is as follows:

- Tab 1: ユーザー定義 1 (User Definition 1)
- Tab 2: 作成者 (Creator)
- Tab 3: 作成日 (Creation Date)
- Tab 4: コンポーネント・プロパティ (Component Property)
- Tab 5: 抵抗 (Resistance)
- Tab 6: マテリアル (Material)
- Tab 7: メモ (Memo)

「ページ 2」タブまたは「ページ 3」タブを削除する

「表示」プロパティを「いいえ」に変更することにより、Java クライアントと Web クライアントから「ページ 2」または「ページ 3」タブを効果的に削除できます。この変更は、「タブ」ノードおよびタブに対して定義された各「ユーザー定義」の属性で行う必要があります。属性の「表示」プロパティを「いいえ」に変更しないかぎり、タブは Java クライアントまたは Web クライアントの検索フォルダに表示されます。

属性、ユーザー設定フィールド、および読取りフィールド

この章を最初から順に読んでいけば、「属性」という用語についてはすでにご理解いただいているものと思われます。このセクションでは、75ページの「[属性を定義する](#)」の詳細説明の前に、ユーザー定義フィールドおよび読取り属性の 2 種類の属性について紹介します。

Agile PLM クライアントでユーザーがオブジェクトを開くと、タブ付きのウィンドウにフィールドが表示されます。これらのフィールドを属性といいます。これらの属性が各 Agile PLM クラスでどのように表示されるかは、「クラス」ノードで定義します。

Agile PLM クラスに定義する個々のフィールドは、そのクラスのすべてのサブクラスのタブに表示されます。たとえば、部品クラスに定義した部品カテゴリは、コンデンサ、レジスタ、ダイオードなどのサブクラスの部品カテゴリの一部となります。さらに、Agile PLM クラスに「ページ 2」タブという追加のタブを作成すると、タブとその属性はクラス内の各サブクラスにも表示されます。

各サブクラスには、それぞれ固有のフィールドを定義できる「ページ 3」タブ用の設定ウィンドウがあります。これらのフィールドは、そのサブクラスの「ページ 3」タブにのみ表示されます。

ユーザー定義フィールド

すべてのクラスおよびサブクラスに無限数の属性を作成できます。これらの属性は「ユーザー定義フィールド」と呼ばれています。これらは、Agile PLM にインストールされ、あらかじめ定義されたフィールドとは異なります。

ユーザー定義フィールドは「ページ 2」および「ページ 3」タブにのみ作成できます。したがって、すべてのユーザー定義フィールドはクラス（ページ 2）またはサブクラス（ページ 3）に固有なものとなります。

注意 ユーザー定義フィールドはクラス固有のものであるため、クラス固有の権限を必要とします。基本クラス権限（アイテム読取りやプレリミナリ・アイテム変更など）はクラス属性に適用しません。Agile PLMにおける役割や権限の対象は様々ですが、基本的なチュートリアルとして、202ページの「[属性の構築とテスト、読取り/変更権限、役割](#)」を参照することをお勧めします。

クラスにユーザー定義フィールドを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 一例として、「変更指示」クラスをダブルクリックし、「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。
3. 「ページ 2」をダブルクリックし、「属性: ページ 2」タブをクリックします。
4. 「新規作成」アイコンをクリックします。「新規属性」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 新しい属性の名前と API 名を入力します。また、ドロップダウン・リストから属性タイプを選択します。「OK」をクリックします。

注意 属性名には、コロン (:)、セミコロン (;)、または等号 (=) を使用できません。

6. 新規の属性オブジェクトが表示されます。このユーザー定義フィールドは、この例では、変更指示クラスに作成されたすべてのオブジェクトに存在することになります。

ここで、説明、表示、デフォルト値、必須、確認通知に使用可能などの様々なフィールドを記入できます。

サブクラスにユーザー定義フィールドを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 一例として、「ECO」サブクラスをダブルクリックし、「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。
3. 「ページ 3」をダブルクリックし、「属性: ページ 3」タブをクリックします。
4. 「新規作成」アイコンをクリックします。「新規属性」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 新しい属性の名前と API 名を入力します。また、ドロップダウン・リストから属性タイプを選択します。「OK」をクリックします。

注意 属性名には、コロン (:)、セミコロン (;)、または等号 (=) を使用できません。

6. 新規の属性オブジェクトが表示されます。このユーザー定義フィールドは、この例では、**ECO** サブクラスに作成されたすべてのオブジェクトに存在することになります。

ここで、説明、表示、デフォルト値、必須、確認通知に使用可能などの様々なフィールドを記入できます。

ユーザー定義フィールドを使用できる場所

ユーザー定義フィールドには、あらかじめ定義されたフィールドよりも多くの制限があります。ユーザー定義フィールドは、Agile PLM の次の場所でサポートされます。

ユーザー定義フィールドが完全にサポートされている場所:

- **詳細検索**
 - ユーザー定義フィールドを検索条件として使用できます。
 - ... 検索結果の表示/出力に使用できます。
 - ... 検索結果の分類の属性として使用できます。
- **役割と権限**
 - ユーザー定義フィールドを読取り権限の「適用先」属性として使用できます。
 - ... 変更権限の「適用先」属性として使用できます。
- **ワークフロー**
 - ユーザー定義フィールドを必須エントリ・フィールドで使用できます。
 - ... 必須終了フィールドで使用できます。
- **確認通知**
 - ユーザー定義フィールドは、このフィールドが変更または更新されたときに、確認通知に対して使用できます。
- **デフォルトの標準レポート**
 - ユーザーがオプションで「ページ 2」の属性を選択してレポート結果に表示できるレポートでは、ユーザー定義フィールドも選択できます。

- **カスタム・レポート**
 - カスタム・レポートの作成では、ユーザー定義フィールドを検索条件として使用できます。
 - ... レポート結果の表示/出力に使用できます。
 - ... レポート結果の分類およびグループ化の属性として使用できます。
- **Agile Integration Service**
 - ユーザー定義フィールドを AIS の一部として使用できます。
- **Agile Content Service**
 - ユーザー定義フィールドを CTO の一部として使用できます。
- **エクスポート**
 - ユーザー定義フィールドは、サポートされる出力形式でエクスポートできます。

ユーザー定義フィールドが一部サポートされている場所:

- **SDK**
 - ユーザー定義フィールドはプロパティ設定（更新）とプロパティ取得（検索）をサポートしていますが、「作成」はサポートしていません。

ユーザー定義フィールドを使用できない場所

ユーザー定義フィールドは、Agile システム内の次の場所ではサポートされていません。

- **条件**
 - ユーザー定義フィールドは、条件の定義で値として使用できません。
- **DataLoad**
 - ユーザー定義フィールドは DataLoad からロードできません。
- **通知**
 - ユーザー定義フィールドは、通知の件名または本文で送信可能なデータ・タグとして使用できません。
- **ACS**
 - ユーザー定義フィールドは ATO で使用できません。ATO は自動生成され、クラス設定では変更が許可されていないためです。

読取りフィールド

一部のタブの一部のフィールドは、関連オブジェクトに関する情報を表示できます。これらのフィールドは、読取りフィールドと呼ばれています。読取りフィールドに表示されるデータは、現在表示されているオブジェクトに関連する異なるオブジェクトからの属性データの読取り専用コピーです。タブに読取りフィールドがある場合は、必要に応じてこれらのフィールドの有効/無効を切り替えることができます。

読取りフィールドのあるタブの中には編集できないものもあります（たとえば、アイテム・オブジェクト「**変更**」タブ）。ただし、一部の編集可能なタブには、編集可能および読取りの両方のタイプの属性が含まれます（たとえば、アイテム・オブジェクトの「**製造元**」タブ）。読取りフィールドは、読取り専用コピーであるため、タブで編集することはできません。しかし、元の属性が修正された場合、読取りフィールドの読取り専用コピーはこれらの修正を反映します。

管理者の場合、編集可能フィールドと読取りフィールドの両方を含むオブジェクトのタブの設定ウィンドウの「<タブ名>:属性」タブでは、読取りフィールドの名前に、関連オブジェクトの名前が含まれています。たとえば、アイテム・オブジェクトの「製造元」タブでは、「製造元」または「製造元部品」で始まる属性名は、製造元および製造元部品オブジェクト（例: 製造元名および製造元部品メモ）からの読取りフィールドです。

アイテムと変更で一貫性がある読取りフィールド

Oracle Agile PLM では、次のように、管理者が「ページ 1」フィールドと「ページ 2」フィールドを読取りフィールドとして一貫して定義できます。

- すべてのアイテムの P1/P2 フィールドは、「アイテム」>「BOM」テーブルで読取りフィールドとして定義できます（「ページ 2」の見出しフィールドを除く）。
- すべてのアイテムの P1/P2 フィールドは、「アイテム」>「使用箇所」テーブルで読取りフィールドとして定義できます（「ページ 2」の見出しフィールドを除く）。
- ほとんどのアイテムの P1/P2 フィールドは、関連する「変更」>「対象アイテム」テーブルで読取りフィールドとして定義できます。ただし、「ページ 2」の見出しフィールド、および特殊処理のリビジョン関連フィールドである REV.COMPLIANCY_CALC_DATE (ECO および MCO のみ)、REV.COMPLIANCY (ECO および MCO)、REV.INCORP_DATE (今後のリビジョンの ECO のみ、適用されるリビジョンの MCO) を除きます。
- 新規（ユーザー生成）の P2 マルチリスト・フィールドは対象外です。

「BOM」および「製造元」タブの読取りフィールド

アイテムの「BOM」タブとアイテムの「製造元」タブには、編集可能フィールドと読取りフィールドの両方が含まれます。

アイテムの「BOM」タブの編集可能フィールドには、アイテムとその BOM のアイテムとの関係（品質、見出し番号、参照指示範囲など）を記述します。「BOM」タブの読取りフィールドにより、「BOM」タブに一覧表示されたアイテムに関する追加情報（BOM アイテムの「ページ 2」のデータなど）を表示できます。

アイテムの「製造元」タブの編集可能フィールドには、アイテムとその製造元部品との関係（推奨ステータス、参照メモなど）を定義します。「製造元」タブの読取りフィールドにより、製造元または製造元部品に関する追加情報（製造元の住所、製造元部品の「ページ 2」のデータなど）を表示できます。

重要 すべての読取りフィールドと同様、「BOM」タブと「製造元」タブの読取りフィールドはそれぞれのテーブルで編集することはできません。これらの読取りフィールドは「BOM」タブと「製造元」タブでは編集できないため、「BOMのレッドライン」タブまたは「製造元のレッドライン」タブからもレッドラインすることはできません。

参考までに、編集およびレッドラインできるアイテム・オブジェクトの「BOM」タブと「製造元」タブの属性を次の表に示します。

注意	編集またはレッドラインできる特定のフィールドは、ユーザーに割り当てられた役割と権限によっても決定されます。
-----------	---

編集またはレッドラインできるアイテム・オブジェクト BOM テーブルのフィールド	編集またはレッドラインできるアイテム・オブジェクト製造元テーブルのフィールド
BOM 日付 01 - BOM 日付 05 BOM の説明 BOM リスト 01 - BOM リスト 05 BOM マルチテキスト 30、BOM マルチテキスト 31 BOM メモ BOM 数値 01 - BOM 数値 05 BOM テキスト 01 - BOM テキスト 05 見出し番号 アイテム番号 数量 参照指示	AML 分割 (%) 製造元名 製造元部品番号 製造元タブ日付 01 - 製造元タブ日付 05 製造元タブ・リスト 01 - 製造元タブ・リスト 05 製造元タブ・マルチリスト 01 - 製造元タブ・マルチリスト 03 製造元タブ・マルチテキスト 30、製造元タブ・マルチテキスト 31 製造元タブ数値 01 - 製造元タブ数値 05 製造元タブ・テキスト 01 - 製造元タブ・テキスト 05 推奨ステータス 参照メモ

属性を定義する

属性は、Agile PLM クライアントのタブに表示されるフィールドを指します。属性はプロパティを設定して定義します。

各オブジェクトのタブには、独自の設定ウィンドウがあります。必要なタブの設定ウィンドウを表示するには、次の表のガイドラインに従います。

属性またはプロパティのタイプ	設定アクティビティ	実行すること
クラス固有の属性 (「ページ 3」以外のすべてのタブ)	次の属性を定義します。 カバー・ページ、 タイトル・ブロック、 一般情報、 ページ 2、 対象アイテム、 ワークフロー、 関係、 添付ファイル、 履歴、 変更、 BOM、 製造元、 使用箇所、 拠点、 エスカレーション、 選択したオブジェクト、 送信先	「クラス」ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> □ クラス名をダブルクリックします。 □ 「ユーザー・インタフェース・タブ」をクリックします。 □ 設定するタブをダブルクリックします。

属性またはプロパティのタイプ	設定アクティビティ	実行すること
サブクラスのプロパティ	たとえば、「名前」、「説明」、「番号ソース」、「自動採番が必要」、「拠点別のBOM」などに対するプロパティを定義します。	「クラス」ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> サブクラス名をダブルクリックします。 「一般情報」タブのプロパティを設定します。
サブクラス固有の属性 (「ページ3」タブのみ)	次の属性を定義します。 ページ3	「クラス」ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> サブクラス名をダブルクリックします。 「ユーザー・インタフェース・タブ」>「ページ3」タブを選択します。

たとえば、変更指示クラスの「対象アイテム」タブの属性を定義するには、次のように操作します。

- 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
- 「変更指示クラス」をダブルクリックします。
- 「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。
- 「対象アイテム」をダブルクリックします。対象アイテムのタブ付き設定ウィンドウが表示されます。

属性のタイプについて

属性のタイプは、その属性が Agile PLM でどのように使用されるかを示すものです。たとえばテキスト属性は、Java クライアントまたは Web クライアントのタブのフィールドにテキストを入力するために使用されます。Agile PLM で使用される属性タイプを次の表に示します。

タイプ	フィールドへの入力内容
日付	日時を入力するか、ポップアップ・カレンダーから日時を選択します。
見出し	属性グループの上に見出しを表示します。これらのタブでは、一連の関連する属性を識別できます。見出し属性は「ページ2」および「ページ3」で利用可能です。また、これらはユーザー・クラスの「一般情報」および「プリファレンス」タブでも利用可能です。
アイコン	読取専用属性タイプ。オブジェクト・タイプ、オブジェクトに添付ファイルがあること、オブジェクトに製造元があること、オブジェクトに保留中の変更があること、などを示すアイコンをテーブル (BOM テーブルや検索結果テーブルなど) で表示する際に使用します。
リスト	リストからアイテムを1つ選択します。 カスケード・リストからアイテムを1つ選択します。
通貨	金額を入力します。
マルチリスト	複数の選択項目があるリストからアイテムを1つ以上選択します。リストは、カスケード・リストにできます。 注意: マルチリスト・フィールドには、リスト・エントリ数の制限がありません。アイテムの P2 で可能なマルチリスト・フィールド数は15です。
マルチテキスト	複数の行にまたがるテキスト (最大 4,000 文字) のブロックを入力します。
数値	数値を入力します。

タイプ	フィールドへの入力内容
テキスト	1 行のテキストを入力します。入力できるテキストの長さは様々ですが一般には 50 文字以内です。
Agile PLM 管理者は、現在の日付や現在のユーザーなどにデフォルトの値を設定できます。オブジェクトを新規に作成すると、フィールドにはこのデフォルトの値が自動的に表示されます。（83 ページの「 デフォルト値を設定する 」を参照してください。）	

属性のプロパティを定義する

次の表に、属性のプロパティと使用可能な設定、およびその設定の Agile PLM での適用方法を示します。また、各プロパティに適用できる属性のタイプも示します。

注意 「必須」プロパティ（次の表の下方にあります）はよく理解しておく必要があります。このプロパティは、クラスやサブクラスでビジネス・オブジェクトを作成する際に注意する必要がある属性に関して、ユーザーに視覚的なヒントを提供します。81 ページの「[オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外](#)」に詳述されているように、必須のフィールドを使用することで生じるコーナーケースもあります。

注意 オブジェクトを作成するために必要なフィールドに注意してください。これは、Agile ワークフローにある必須フィールドとは異なります。

プロパティ	属性のタイプ	設定	Agile PLM での適用
名前	すべて	管理者により提供	ユーザーに表示するフィールドの名前を最大 40 文字で指定します。 Agile PLM ではすべての文字がサポートされており、Agile のクライアントでは問題ありませんが、属性の名前を変更したり、作成する場合は、SDK で記述された統合やカスタム・アプリケーションで問題が生じる可能性があるため、次の文字の使用は避けてください。 , (カンマ) 、. (ピリオド/ドット) 、: (コロン) 、; (セミコロン) 、= (イコール記号)
API 名	すべて	オブジェクト作成時にシステムにより生成	システム全体で一意的オブジェクト識別子で、自動生成できます。API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。
*タイプ	すべて	該当なし	Agile PLM 管理者は編集できません。 属性のタイプは、日付、リスト、マルチリスト、テキスト、マルチテキスト、数値、イメージ、見出しです。
表示	すべて	はい	Agile PLM クライアントで属性を表示します。ユーザーがこのクラスまたはサブクラスでオブジェクトを作成する際に、この属性が表示されます。

プロパティ	属性の タイプ	設定	Agile PLM での適用
		いいえ	Agile PLM クライアントで属性を非表示のままにします。ユーザーがこのクラスまたはサブクラスでオブジェクトを作成する際に、この属性は表示されません。 アイテムの「タイトル・ブロック」フィールドをすべて無効にできることに注意してください。
リスト	リスト マルチリスト	管理者により提供	ユーザーが使用するドロップダウン・リストに表示する選択項目。ここで入力する選択項目の中には、デフォルト値として設定した値が表示されます。 選択項目が別の箇所で定義されているリスト属性については、このプロパティによって「リスト」が読み取られるため、属性設定ウィンドウでこのプロパティは編集できません。例として、「ライフサイクル・フェーズ」属性の選択項目が「ライフサイクル・フェーズ」ノードで定義されている場合があります。 リストの各エントリは最大 255 文字です。
デフォルト 値	すべて	管理者により提供	オブジェクトの新規作成時に表示されるデフォルト値。リストやマルチリストの場合、デフォルト値は選択リストのいずれかの値であることが必要です (99ページの「 リストのデフォルト値を設定する 」を参照)。デフォルトの変数を使用できるフィールドもあります。 マルチテキスト属性の場合、「システムの最大長」の値は 4,000 ですが、管理者が設定できるデフォルト・テキストは 510 文字に制限されます。Web および Java クライアント・ユーザーは、ビジネス・オブジェクトのこのフィールドで制限を受けません。
検索条件の 有効化	すべて	通常は「いいえ」 (管理者により 「はい」に設定される場合あり)	属性をパラメータ検索の条件として追加することを許可 (はい) または禁止 (いいえ) します。(パラメータ検索については、『Agile PLM スタート・ガイド』に記載されています)。
最大文字数	テキスト マルチテキスト	管理者により提供	フィールドに入力できる最大バイト数を設定します (空白は 1 バイト、改行は 2 バイトとみなされます)。有効な設定範囲は 0 からこの属性で許可されている最大値までの値です (属性の「システムの最大長」プロパティを参照)。 通常、1 文字は 1 バイトですが、一部の Agile インストールは中国語や日本語にローカライズされており、1 文字につき 2~3 バイトを使用することがあります。「システムの最大長」値との関連でこのプロパティの値を設定する際に、この問題を考慮してください。 Agile PLM の多くの分野で様々な属性が見られ、「最大文字数」を属性に基づき別々に設定できるため、類似する属性の「最大文字数」に幅がありすぎると問題が生じることがあります。たとえば、部品番号は、部

プロパティ	属性の タイプ	設定	Agile PLM での適用
			<p>品の「タイトル・ブロック」、(同じまたはその他の) 部品の BOM、変更の「対象アイテム」などで使用される場合があります。こうした類似属性の「最大文字数」を標準値に設定しておくことが理想的です。</p> <p>「最大文字数」を設定する際には、Agile PLM のデータをエクスポートする社内の他のアプリケーションのフィールド長の制限を考慮してください。</p>
*システムの最大長	テキスト マルチテキスト	該当なし	<p>Agile PLM 管理者は編集できません。</p> <p>データ・フィールドの最大文字数をバイトで指定します。これは Agile PLM クライアントのフィールドで許可された最大バイト数を表します。属性の「最大文字数」には、その属性の「システムの最大長」の値より小さい値を指定する必要があります。</p>
含む文字	テキスト マルチテキスト	リストから選択	<p>この設定によって、フィールドで空白が使用できるかどうか、およびどのタイプの英数字を使用できるかが決まります。Agile PLM システムで定義されている文字セットのリストから選択します。詳細は、89 ページの「文字セット」を参照してください。</p>
最小値	数値	管理者により提供	数値フィールドの最小値。
最大値	数値	管理者により提供	数値フィールドの最大値。ゼロ (0) 以上である必要があります。
*順序	すべて	該当なし	<p>この数字は、テーブルまたはフォーム上に属性フィールドが表示される順序を示します。これは、Agile システムにより生成された 0 以上の数字です。「表示属性の並べ替え」ボタンを使用して属性を整理したときに、Agile システムによってこの数字が生成されます。</p>

プロパティ	属性の タイプ	設定	Agile PLM での適用
拠点別の フィールド		リストから選択	<p>「共通」= この属性はグローバルな値から値を継承します。</p> <p>「拠点別」= この属性の値はグローバルな値とは別の値です。</p> <p>このプロパティはすべての属性に適用されるわけではありません。適用されない場合は「該当なし」に設定され、編集することはできません。</p> <p>このプロパティは、適用される属性であってもそのすべてが編集できるわけではありません。そのような場合、プロパティのデフォルト値は「共通」または「拠点別」のどちらかになり編集できません。</p> <p>たとえば、変更指示クラスの「対象アイテム」タブの属性設定を表示してください。</p>
高さ	マルチテキスト	管理者により提供	編集モードのときに表示されるテキスト領域の行数を指定します。（Web クライアントでは、テキスト領域には 4 行が表示されます。）
スケール	数値 通貨	管理者により提供	数値フィールドの小数点以下の桁数。この値はゼロ (0) 以上に設定する必要があります。
*属性	すべて	該当なし	<p>Agile PLM 管理者は編集できません。</p> <p>選択したノードのデータベースの属性名を表示します。「名前」プロパティには Agile PLM ユーザーに表示する属性名を指定します。「属性」プロパティと「名前」プロパティは、多くの場合異なります。</p>
*ベース ID	すべて	該当なし	Agile 管理者は編集できません。属性の変更前のオリジナル・システム ID です。
幅の入力	マルチテキスト リスト （Web クライアント） マルチリスト（Web クライアント）		<p>属性の表示幅を管理します。設定は「中」または「長」です。</p> <p>注意 リスト属性の場合は、「小」という追加設定も使用できます。</p>

プロパティ	属性の タイプ	設定	Agile PLM での適用
高さの入力	マルチテキスト		マルチテキスト属性の表示の高さを管理します。設定は 3～15 の整数です。
必須	すべて	はい	<p>このフィールドは、太字で表示されます。これは、このフィールドを入力する必要があるという視覚的なヒントです。「必須」が「はい」に設定されている属性が、新規作成プロセス（Web クライアント）中に入力されない場合、または編集中に空欄となり、ユーザーがこれを保存しようとした場合（両方のクライアント）は、フィールドに入力するように指示するメッセージが表示され、手順は完了できません。</p> <p>見出し属性を必須に設定できます。（「必須」フィールドが欠落している「クラス」>「ユーザー・インタフェース・タブ」>「ページ 2」>「属性: ページ 2」>「見出し 01」属性には問題点がありました。）</p> <p>81ページの「オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外」を参照してください。</p>
		いいえ	このフィールドは 太字 で表示されません。入力しなくても、新規作成プロセスや編集/保存プロセスが中断されることはありません。
確認通知に 使用可能	すべて	「はい」または 「いいえ」	この属性は、ユーザー（適格な権限のあるユーザー）により確認通知の必要があるかどうかを決定します。確認通知については、『Agile PLM スタート・ガイド』第 5 章「オブジェクトを使用する」で説明しています。
* Agile PLM 管理者はこれらのプロパティを変更できません。			
添付ファイルのファイル・タイプは、ファイル名の最後のピリオドに続く文字によって決まります。そのため、ピリオド (.) で終わるファイル名は使用しないでください。			

オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外

ビジネス・オブジェクトを変更し、変更の一環として別のサブクラスを選択すると、「**オブジェクトのサブクラスを変更します。同じオブジェクト名または番号で操作を続行しますか?**」という警告が表示されます。この警告では、別の危険性に関する注意が喚起されません。別の危険性とは、オブジェクトの元のサブクラスとオブジェクトをこれから割り当てるサブクラスでは、必須フィールドが異なっている可能性があることです。新しいサブクラスに必須として設定されたフィールドは、元のサブクラスでは必須でない可能性があります。しかし、新しいサブクラスの必須フィールドに関するチェックは実施されず、この不一致の可能性についても警告は表示されません。

画像属性

テーブルに画像属性を含めるには、属性の「表示」プロパティを「はい」に設定します。画像属性の「名前」プロパティは、その画像属性が表示するアイコンのタイプを識別します。その名前はエンド・ユーザーには表示されず、変更する必要はありません。

テーブルのどの列に画像を表示するかを指定するには、65ページの「[フォーム・タブの属性の順序を変更する](#)」を参照してください。

属性を設定する

プロパティは、1つの属性に対して設定できても、別の属性に対しては設定できないことがあります。たとえば、「**タイトル・ブロック**」タブの「ライフサイクル・フェーズ」属性の「名前」プロパティは編集できませんが、「**BOM**」タブの「アイテム・ライフサイクル・フェーズ」の「名前」プロパティは編集できます。



Agile PLM 管理者は、設定可能なプロパティを簡単に変更できます。たとえば、変更番号の最大長を 30 文字でなく、15 文字に変更する場合には、変更指示の「**カバー・ページ**」タブの「最大文字数」プロパティの設定を変更します。

注意 Agile PLM の多くの分野で様々な属性が見られ、「最大文字数」を属性に基づき別々に設定できるため、類似する属性の「最大文字数」に幅がありすぎると問題が生じることがあります。たとえば、部品番号は、部品の「タイトル・ブロック」、（同じまたはその他の）部品の BOM、変更の「対象アイテム」などで使用される場合があります。こうした類似属性の「最大文字数」を標準値に設定しておくことが理想的です。

属性を変更する

属性のプロパティを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「**データ設定**」で「**クラス**」をダブルクリックします。「**クラス**」ウィンドウが表示されます。
2. クラスのタブの属性を変更するには、クラス名をダブルクリックします。
 - a. たとえば、変更指示の「**対象アイテム**」タブの属性を変更するには、「**変更指示**」をダブルクリックしてから「**ユーザー・インタフェース・タブ**」タブを選択します。変更指示クラスのタブがすべて表示されます。
 - b. 「**対象アイテム**」をクリックします。「**クラス・タブ**」設定ウィンドウが表示されます。
 - c. 「**属性 | 対象アイテム**」タブを選択します。このタブのすべてのフィールドが表示されます。
3. 特定のサブクラスの「**ページ 3**」タブの属性を変更するには、クラス名の下に表示されているサブクラスの名前をダブルクリックします。
 - a. たとえば、変更指示クラスの「**ECO**」をダブルクリックし、「**ユーザー・インタフェース・タブ**」タブを選択します。ECO サブクラスのタブがすべて表示されます。
 - b. 次に「**ページ 3**」タブをダブルクリックします。「**クラス・タブ**」設定ウィンドウが表示されます。
 - c. 「**属性: ページ 3**」タブを選択します。このタブのすべてのフィールドが表示されます。
4. 変更する属性をダブルクリックします。

5. 属性のプロパティを変更します。プロパティのタイプに応じて、次のいずれかの方法を使用します。
 - テキストを入力します。
 - リストから値を選択します。
 -  をクリックしてダイアログ・ボックスを開きます。
 - 日付属性のデフォルト値の場合は、 をクリックして特定の日付を選択するか、変数を使用します。15ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照してください。
6. 変更が完了したら「保存」をクリックします。

複数のタブに共通する属性のプロパティを一致させる

いくつかのタブに共通する属性がある場合、プロパティにはすべて同じ設定を行う必要があります。

たとえば、アイテムの「番号」属性は、アイテムの「タイトル・ブロック」（つまり「ページ1」タブ）、アイテムの「BOM」タブ（「アイテム番号」属性）、および関連設計変更の「対象アイテム」タブ（「アイテム番号」属性）に表示されます。この3箇所の「アイテム番号」属性には、同じプロパティを設定します。

たとえば、アイテムの「タイトル・ブロック.番号」フィールドでは、「含む文字」のプロパティを「すべて」に設定した場合、アイテムの「BOM.アイテム番号.含む文字」のプロパティも「すべて」に設定し、「**[関連設計変更].対象アイテム.アイテム番号.含む文字**」のプロパティも「すべて」に設定する必要があります。同じ設定にしないと、たとえば対象アイテムを追加しようとしても、Agile PLM クライアントで対象アイテムが追加されず、エラー・メッセージが表示されます。

正しい属性を設定することで、「名前を付けて保存」を使用して新規オブジェクトを作成した場合に、「ページ2」と「ページ3」のデータが正しくコピーされ（たとえば、ECO と MCO の両方の「ページ2」の「プロジェクト番号」フィールド）、「BOM」テーブルにあるアイテムの「ページ2」または関連設計変更の「対象アイテム」タブ（たとえば、「単位」フィールド）から情報を表示できるようになります。

「名前を付けて保存」によるオブジェクトの作成について：サブクラスに必須フィールドが（管理者によって）設定された後、ユーザーが「名前を付けて保存」を実行したときに、いずれかの必須フィールドでソース・オブジェクトにタイプ違反があると、「名前を付けて保存」の操作は、ソースに値がコピーされた状態で終了します。以前は、名前を付けて保存する際に、特定の属性で違反が発生して操作を完了できないことを示すエラーが表示されました。

デフォルト値を設定する

属性に表示されるデフォルト値を設定できます。

デフォルト値の設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 対象の属性を見つけ、ダブルクリックして設定ウィンドウを開きます。
(手順の詳細は、82ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)
2. 「デフォルト値」フィールドに、設定するデフォルト値を入力します。属性のタイプに応じて、変数の入力（15ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照）、テキストの入力、ドロップダウン・リストからの選択、または日付の選択を実行します。
3. 変更が完了したら「保存」をクリックします。

オブジェクトの新規作成時に、Agile PLM クライアントのフィールドに新しいデフォルト値が表示されます。

タブの属性を表示または非表示にする

多くの属性はタブで表示または非表示にできます。たとえば、「**保留中の変更**」タブのフィールドは表示または非表示にできます。また、「**ページ 2**」タブの属性は使用されるまで非表示になっています。

タブの属性を表示または非表示にする手順は、次のとおりです。

1. 対象の属性を見つけ、ダブルクリックします。
(手順の詳細は、82ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)
2. 属性の「**表示**」フィールドで「はい」を選択して、属性を表示状態にします。属性を非表示にするには「いいえ」を選択します。
3. 変更が完了したら「**保存**」をクリックします。
タブの属性が表示または非表示になります。変更内容を表示するには、属性が表示される Java クライアントまたは Web クライアントでオブジェクトを開きます。

フィールド・ラベルまたはテーブルの列名を編集する

フィールド・ラベルまたはテーブルの列の見出しは、属性の「名前」プロパティを編集して変更します。

たとえば、部品クラス・オブジェクトの「**タイトル・ブロック**」タブの属性はラベル付きのフィールドに表示されます。表示されるラベルは、属性の「名前」プロパティを編集して変更します。変更指示クラス・オブジェクトの「**対象アイテム**」タブのフィールドはテーブルに表示されます。テーブルの列の見出し、またはフィールドが属性名になります。テーブルの列の見出しは、属性の「名前」プロパティを編集して変更します。

注意 部品およびドキュメント・クラスの「**タイトル・ブロック**」タブの「**ライフサイクル・フェーズ**」属性名は編集できません。

フィールド・ラベルまたはテーブルの列名を編集する手順は、次のとおりです。

1. 対象の属性を見つけ、ダブルクリックします。
(手順の詳細は、82ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)
2. 「**名前**」フィールドで、編集するテキストをハイライト表示し、新しい名前を入力します。
3. 変更が完了したら「**保存**」をクリックします。
名前の変更を確認するには、Java クライアントまたは Web クライアントでそのテーブルが表示されるオブジェクトを開きます。タブをクリックしてフィールドまたはテーブルを表示し、変更を確認します。

サブクラスに対しカスタム・アイコンを使用する

Agile PLM で提供された、あらかじめ定義されたサブクラスには、デフォルトのアイコンがあります。サブクラス・アイコンは（Java クライアントおよび Web クライアントで）様々なオブジェクト・タイプの違いを示すために表示されます。アイコンは随時置換できます。

デフォルトのサブクラス・アイコンをカスタムアイコンに置換する手順は、次のとおりです。

1. サブクラスを開き、「一般情報」タブで「アイコン」プロパティにファイル名を入力します。
ドキュメントと部品のサブクラスについては、「アセンブリのアイコン」と呼ばれる追加プロパティがあります。これはオブジェクトがアセンブリを表すときに使用されるアイコン・イメージです。
「アイコン」および「アセンブリのアイコン」プロパティで、グラフィック・ファイル名（拡張子を含む）を入力します。例: `electrical.gif`。
2. カスタム・グラフィックはプロキシ・サーバーの 2 箇所、Web クライアントに 1 つと Java クライアントに 1 つ配置する必要があります。使用しているクライアントに応じて、グラフィックが検出されます。
 - Web クライアント - `<webserver_root>%PLMContent%\images`
 - Java クライアント - `<webserver_root>%JavaClient%\lib%\images\custom.jar`

注意 Javaクライアントについては、カスタム・アイコンはcustom.jarファイルに追加する必要があります。JARファイルの更新方法は、JARユーティリティに関するSun社の説明書を参照してください。JARユーティリティに関するオンライン・チュートリアルは、<http://java.sun.com/docs/books/tutorial/jar/>から利用できます。また、様々なZip互換ユーティリティ（WinZipなど）を使用してJARファイルを更新できます。

3. 新しいアイコンを有効にするには、Agile アプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。

オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス

簡易アクセス URL を生成して、Agile オブジェクトまたは Agile 添付ファイルへの直接ポインタを準備できます。

これらの簡易アクセス URL は、他のアプリケーションやファイル（スプレッドシート・ファイル、ワード・プロセッサ・ファイル、組織のイントラネット Web ページ、WIKI ページ、または電子メール）に貼り付けることができます。

簡易アクセス URL を使用した Agile オブジェクトへの簡易アクセスの詳細は、次の説明を参照してください。

- Agile で生成される簡易アクセス・オブジェクト URL
- ユーザーが生成するスマート・オブジェクト URL の形式
- 簡易アクセス・オブジェクト URL を使用する

添付ファイルへの簡易アクセス URL を使用した添付ファイルへの簡易アクセスの詳細は、次の説明を参照してください。

- 403ページの「[添付ファイルへの簡易アクセスURLを生成する](#)」

Agileで生成される簡易アクセス・オブジェクトURL

Web クライアントでは、Web クライアントの「アクション」メニューから Agile PLM オブジェクトの簡易アクセス URL を生成できます。

Agile PLMオブジェクトの簡易アクセスURLを生成する手順は、次のとおりです。

1. Agile PLM Web クライアントにログインし、目的のオブジェクトを開きます。

2. 「アクション」メニューで「URL をクリップボードにコピー」を選択します。
3. URL がクリップボードにコピーされます。コピーされた URL を別のアプリケーションまたはファイル（ワード・プロセッサ・ファイル、スプレッドシート・ファイル、電子メールなど）に貼り付けます。

ユーザーが生成するスマート・オブジェクトURLの形式

Agile スマート・オブジェクト URL 機能は、電子メール、スプレッドシート、ドキュメント、WIKIなどを介して効果的にコラボレーションできるように設計されています。ユーザーまたは自動化ツールによって、Agile の特定のオブジェクトを指し示す可読性に優れた高性能な URL を生成できます。次の形式を使用することで、オブジェクト URL を生成する際、ユーザーは Agile にログインする必要がなくなります。自動化ツールの場合も、この形式を使用してオブジェクト URL を生成できます。

スマート・オブジェクト URL は、Web クライアントから使用可能なオブジェクトに対して使用できます。

スマート・オブジェクトURLの形式

Agile オブジェクトを指し示す URL には、次の形式を使用します。

<http://server:port/VirtualPath/object/ObjectType/ObjectName>

次の表に、スマート・オブジェクト URL のパラメータを示します。

パラメータ	説明
<a href="http://server:port/<VirtualPath>/object/<ObjectType>/<ObjectName>">http://server:port/<VirtualPath>/object/<ObjectType>/<ObjectName>	
server port VirtualPath	Server、port、および VirtualPath で Agile PLM インスタンスを識別します。
object	テキスト「object」によって、URL がオブジェクト URL であることを Agile に示します。
ObjectType	ObjectType は、ECO、部品、製造元、ファイル・フォルダ、プログラム、プロジェクト、アクティビティ、ディスカッションなど、オブジェクトのサブクラス（タイプ）を参照します。
ObjectName	<p>ObjectName は、オブジェクトの一意識別子を参照します。オブジェクト・クラスに従って、一意識別子にはオブジェクト番号または名前が使用されます。</p> <p>注意 製造元部品は、製造元名と製造元部品番号の2つのパラメータによって一意に識別されるオブジェクトの特別なクラスです。したがって、特定の製造元部品を参照する URL には、次の形式を使用します。</p> <p>http://server:port/VirtualPath/object/ObjectType/MfrName/MfrPartNumber</p>

Agile PLM では、オブジェクトの一意識別子に含まれる特殊文字（空白、アスタリスク（*）のような他の特殊文字など）に対応するために、URL に追加される特別なタグ（%20 など）が識別され、処理されます。たとえば、次の URL では、

<http://server:port/VirtualPath/object/Manufacturer/Philips%20Semiconductor>

「Philips Semiconductor」という製造元になります。

簡易アクセス・オブジェクトURLを使用する

ユーザーが簡易アクセス・オブジェクト URL をクリックした場合、ユーザー・アクションは、その URL が Agile で生成された簡易アクセス URL か、ユーザーが生成したスマート・オブジェクト URL かに関係なく同じになります。

1. URL をクリックします。Agile PLM ログイン画面がブラウザ・ウィンドウに表示されます。
2. 必要なログイン情報を入力します。
3. 正常にログインすると、リンクに指定されているオブジェクトが検索されます。

(オブジェクトが見つからなかった場合は、エラーが表示され、ユーザーのホーム・ページに戻ります。)

オブジェクトが見つかった場合は、オブジェクトを読み取る適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証され、オブジェクトの最初のタブ（「**タイトル・ページ**」など）が表示されます。

文字セット

この章のトピック

- 使用可能な文字セット 89
- 文字セットの作成 90
- 文字セットの変更 91

この章では、文字セットのカスタマイズと設定方法について説明します。

使用可能な文字セット

「文字セット」ノードを使用すると、Agile PLM で有効な文字セットを表示および作成できます。

文字セットとは、テキスト属性とマルチテキスト属性の「含む文字」プロパティを管理するために使用される有効な文字のリストです。文字セットは作成および削除が可能です。Agile PLM でサポートされている言語はいずれも文字セットでサポートできます。

次の表に、Agile PLM で提供されている文字セットを示します。これらはデフォルトで有効となっており、変更することはできません。

名前	説明
すべて	すべての有効な文字
すべての文字(小文字とスペース)	小文字のみ (スペースを含む)
すべての文字(大文字、小文字、スペース)	すべての大文字と小文字 (スペースを含む)
すべての文字(大文字とスペース)	大文字のみ (スペースを含む)
すべての子文字(スペースは不可)	小文字のみ (スペースは不可)
すべての大文字、小文字(スペースは不可)	すべての大文字と小文字 (スペースは不可)
すべての大文字(スペースは不可)	大文字のみ (スペースは不可)
アルファベット (すべて)	アルファベット (大文字と小文字) のみ
アルファベット (大文字、小文字、スペース)	アルファベット (大文字、小文字) とスペース
アルファベット (小文字)	アルファベット (小文字) のみ

名前	説明
アルファベット（小文字とスペース）	アルファベット（小文字）とスペース
アルファベット（大文字）	アルファベット（大文字）のみ
アルファベット（大文字とスペース）	アルファベット（大文字）とスペース
英数字（すべて）	英数字（大文字、小文字、数字）
英数字（大文字、小文字、スペース）	英数字（大文字、小文字、数字）とスペース
英数字（小文字）	英数字（小文字と数字）
英数字（小文字とスペース）	英数字（小文字、数字）とスペース
英数字（大文字）	英数字（大文字と数字）
英数字（大文字とスペース）	英数字（大文字と数字）とスペース
数字	数字のみ
数字とスペース	数字とスペースのみ

文字セットの作成

自社の要件に適した文字セットを作成できます。各文字セットは 100 文字まで入力できます。

注意 Agile PLMではすべての文字がサポートされており、Agileのクライアントでは問題ありませんが、統合時やSDKで開発されたカスタムアプリケーションで問題が生じる可能性があるため、オブジェクト（たとえば、インスタンス、サブクラス、属性など）に名前を付けたり、名前を変更する場合は、次の文字の使用は避けてください。

、（カンマ）、.（ピリオド/ドット）

以前の Agile では、特定のユニコード文字、特にカタカナ（これらは有効な XML 名文字ではないため）について問題が生じた経緯があります。Agile PLM は aXML でこの問題に対処しています。

スラッシュ文字 (/) については、SDK ではクエリ言語で特定文字を使用していますが、名前ではなく ID でクラスやフィールドを参照することをお勧めします。フォルダ（検索フォルダなど）に簡単にアクセスするために、SDK では「folder/folder/folder/object」のようにフォルダを表示しています。このように、フォルダ名の中にスラッシュがあると問題を起こす可能性があります。エスケープ・シーケンス (\) を使用できます。

新しい文字セットを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「文字セット」をダブルクリックします。「文字セット」ウィンドウが開きます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「文字セットの定義」ダイアログ・ボックスが開きます。

3. 「名前」、「API 名」、および「説明」フィールドに、それぞれ固有の名前と説明を入力します。
4. 「有効」リストで「はい」を選択します。
5. 「有効な文字セット」フィールドに、セットに含める文字を最大 100 文字入力します。重複する文字は使用できません。
6. 特殊文字を追加するには、「特殊文字」ボタンをクリックし、スペース (^s)、改行 (^p)、またはキャレット (^) を選択します。
7. 作業が完了したら、「OK」をクリックします。

注意 大規模な文字セットを定義して多くの属性でそれらを使用する場合、カスタムの文字セットによってシステムのパフォーマンスが低下することがあります。

文字セットの変更

「文字セット」ウィンドウで作成した文字セットの内容、名前、および説明は変更できます。Agile PLM で提供されているデフォルト文字セットは読取専用です。

文字セットを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「文字セット」ノードをダブルクリックします。「文字セット」ウィンドウが開きます。
2. 文字セットをダブルクリックして開きます。
3. 「名前」および「説明」フィールドに、それぞれ固有の名前と説明を入力します。
4. 「有効な文字セット」フィールドで、文字を追加または削除します。
5. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

文字セットを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「文字セット」ノードをダブルクリックします。「文字セット」ウィンドウが開きます。
2. 文字セットを選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックし、「はい」をクリックして確定します。

注意 文字セットが現在 Agile PLM システムのテキスト属性またはマルチテキスト属性に割り当てられている場合は、削除できません。

必要な場所に適切な文字セットを選択してください。ビジネス・オブジェクトからファイル・フォルダ・オブジェクトにファイルや URL を追加する際に問題が生じる可能性があります。ファイル・フォルダの「ファイルの説明」属性では文字セットが数字で、ビジネス・オブジェクトの「ファイルの説明」属性では文字セットが英文字または英数字の場合は、後者が優先されます。つまり、ファイル・フォルダの「ファイルの説明」（数字）で強制しようとしていた管理は失われ、元の文字セットが保存されます。

リスト

この章のトピック

■ 概要	93
■ ルーティング管理者リスト	93
■ 様々な種類のリスト	95
■ リストを設定する	97
■ カスケード・リストを作成する	100

この章では、リストのカスタマイズと設定方法について説明します。

概要

「リスト」ノードから、リストのコレクション、つまりライブラリにアクセスします。これを使用して、複数のクラスで使用されるリストを管理します。カスタム・リストを定義して、「ページ2」および「ページ3」リストの属性に使用できます。Agile PLM システムでは、多くの属性がリスト構成になっています。属性、プロパティ、テーブルのユーザー設定フィールドおよびセルは、すべてリストにできます。

ルーティング管理者リスト

ワークフローのルーティング管理者に関連するリストは、「変更分析者リスト」、「コンポーネント・エンジニア・リスト」、「価格管理者リスト」、「適合性管理者リスト」、「品質分析者リスト」、「品質管理者リスト」の6つです。これらのリストは、「リスト」ノードから編集することはできません。ユーザーの名前は、指定のユーザーの「リスト」プロパティ（「ユーザー」>「<ユーザー>」>「一般情報」タブ（「プロフィール」領域）>「リスト」）に設定した内容に基づいて、これらのリストに対して追加または削除されます。

「リスト」ノードでは、これら6つのリストの編集可能なプロパティは「表示タイプ」と呼ばれています。このプロパティを使用して、ルーティング可能なオブジェクトの「ルーティング管理者」リスト・フィールドが、ルーティング・ユーザーに対して「リスト」または「検索」のどちらの形式で表示されるかを選択できます。各リストに数人しか含まれない会社規模であれば、ドロップダウン・リストで十分です。大規模な会社で、数十人に及ぶ変更分析者がいる場合は、「検索」形式が便利です。変更指示に対して適切な変更分析者を選択することで、その他の分析者にはその指示に関する通知が送信されないようにできます。

注意 「表示タイプ」フィールドのデフォルトは「リスト」です。

カスタム・リストを作成し、リストに追加する

Lists

Total Number of record: 86

Filter By: Name Match If: Show All Value: Apply

ID	Name	Description	Enabled	Editable	Is Cascading?
18414	Action Status	Action Status	Yes	Yes	No
2249	AML Preferred Status	AML Preferred Status	Yes	Yes	No
4682	AttachType List	AttachType List	Yes	Yes	No
6820	Audit Result	Audit Result	Yes	Yes	No
8934	Buyer	Buyer	Yes	Yes	No
2000000192	Category 10 List	Category 10 List	Yes	Yes	No
2000000189	Category 7 List	Category 7 List	Yes	Yes	No
2000000190	Category 8 List	Category 8 List	Yes	Yes	No
2000000191	Category 9 List	Category 9 List	Yes	Yes	No
730	Change Analysts	Change Analysts	Yes	No	No
411	Change Category	Change Category	Yes	Yes	No
331	Change Function	Change Function	Yes	Yes	No
8223	Changes	All Change Objects	Yes	No	No
12941	Commodities	Commodities for Items	Yes	No	No
750	Comp Engineers	Component Engineers	Yes	No	No
2000004949	Compliance Manager	Compliance Manager	Yes	No	No
4598	Continent	Continent	Yes	Yes	No
365	Country	Country	Yes	Yes	No
8704	Currencies	Currencies	Yes	No	No
2000000107	Customer List	Customer List	Yes	Yes	No
6505	Customers	All Customer Objects	Yes	No	No
2000002155	Declarations	All Declaration Objects	Yes	No	No
18412	Discussion Priority List	Discussion Priority List	Yes	Yes	No
8229	Discussions	All Discussion Objects	Yes	No	No

Refresh Close

リスト・ライブラリのカスタム・リストを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「リスト作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「名前」、「API名」、および「説明」フィールドに入力します。いずれも 255 文字まで入力できます。
4. 「有効」リストで「有効」または「無効」を選択します。
5. 「重ねて表示」リストで「はい」または「いいえ」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。新しい「リスト:<名前>」ウィンドウが開きます。この新しいリストはリスト・ライブラリにも表示されます。
7. 「新規リスト値の作成」ウィンドウが自動的に表示されます。「名前」、「API名」、および「説明」フィールドに入力します。
8. 「アクティブ」リストで「はい」または「いいえ」を選択します。
9. 「追加」または「他の追加」をクリックします。

注意 リストは、リストにリスト・アイテムに移入しなくても作成できます。

リストに値を追加する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ・バーを使用して、移入するリストを表示します。リストをダブルクリックして開きます。
3. 「リスト」タブをクリックします。「リスト:<名前>リスト」ウィンドウが開きます。
4. 「新規作成」ボタンをクリックします。ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. アイテム名、2つのコロン (::) 、API 名、2つのコロン (::) 、アイテムの説明の順に入力します。名前と説明は、それぞれ最大 255 文字ずつ入力できます。形式は、リスト値 (名前) ::API 名::リストの説明、になります。

注意 リストに値を追加するときは、カンマを使用しないでください。

必要に応じて、個別の行に追加リスト・アイテムを入力します。リスト・アイテムの名前と説明は、改行で区切って必要なだけ入力できます。また、リスト・アイテムをメモ帳などのテキスト・エディタからダイアログ・ボックスに貼り付けることもできます。

注意 このダイアログ・ボックスには、4000 バイトまで入力できます。各アイテムの改行に 1 バイトが使用されます。平均的なリスト・アイテムに 20 バイト (空白と改行を含む) が使用される場合、リストには約 200 アイテムを格納できます。「新規作成」を再度選択することで、リスト・アイテムをさらに追加できます。

6. 完了したら、「OK」をクリックします。そのリスト・アイテムがリストに追加されます。
デフォルトでは、リスト・アイテムの「アクティブ」プロパティが「はい」に設定されます。これを非アクティブにする場合は、行をダブルクリックし、「アクティブ」プロパティで「いいえ」を選択します。

複数のリスト・アイテムを一度に追加していくこのプロセスは、「バッチ追加」と呼ばれます。

様々な種類のリスト

ここでは、ユーザーがカスタム・リストおよびオブジェクト・リストを表示する場合に、どのような種類のリストが表示されるかについて詳しく説明します。リスト (シングルリスト) 属性とマルチリスト属性については、49ページの「[クラス](#)」および 52ページで説明しています。

- シングルリストのリスト
- マルチリストのリスト
- カスケード・リスト
- 動的リスト

シングルリストのリスト

シングルリストの属性がセルに表示され、そのリストから1つの値のみを選択できます。次の図は Web クライアントの「時刻フォーマット」フィールドです。これはシングルリストのセルになっています。

Overhead Rate: United States Dollar ▼

United States Dollar
 Euro
 Pound Sterling
 Hong Kong Dollar
 Irish Punt
 Japanese Yen

マルチリストのリスト

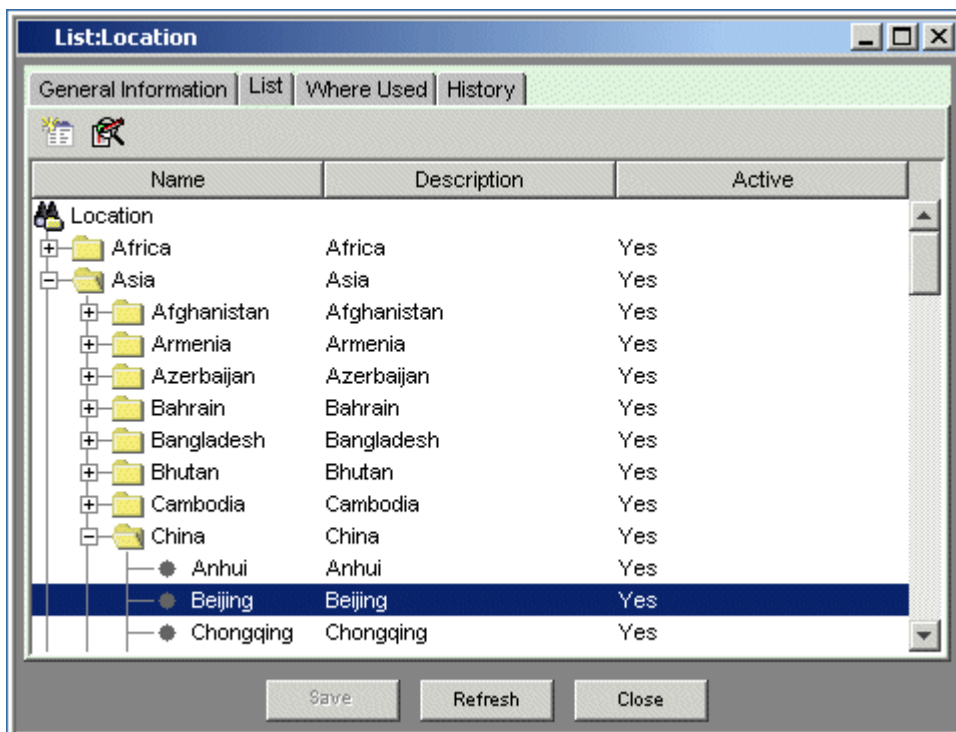
マルチリストの属性がセルに表示され、そのリストから複数の値を選択できます。Web クライアントでは、次の図に示すように「複数の値の選択」ウィンドウを使用し、複数の値を選択してマルチリストのセルに追加できます。

Product Line
 Filter:

+ Name	Description
BioPod	
Common	
Capricorn	
Gemini	
Leo	
LaserSplash	
Ryker Computer Corp.	
Scorpio	
Taurus	
Virgo	

カスケード・リスト

Java クライアントでは、複数の階層レベルを構成するようにシングルリストまたはマルチリストの属性を設定できます。複数の階層レベルを持つリストは、カスケード・リストと呼ばれます。次の図は、「場所」リストの設定ウィンドウ（Java クライアント）です。これはカスケード・リストになっています。このリストは、大陸、国および市町村のレベルに分かれた構造になっています。



注意 「場所」リストは、Agile PLM に付属している唯一のカスケード・リストです。ただし、独自のカスケード・リストも定義できます。

カスケード・リストの詳細は、100ページの「[カスケード・リストを作成する](#)」を参照してください。

動的リスト

Agile PLM サーバーには、静的リストおよび動的リストの両方があります。静的リストは、値の選択項目が変わらないリストです。動的リストは、ランタイム時に値が更新されるリストです。静的リストは変更可能で、新しい値を追加することも、現在の値を破棄することもできます。動的リストは変更できません。したがって、動的リストの「編集可能」プロパティは、「いいえ」に設定されています。

リストを設定する

このセクションでは、Java クライアントでドロップダウン・リストを設定するための手順について説明します。これらの手順は、通常のリストおよびカスケード・リストに適用されます。

リストを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ・バーを使用して、変更するリストを表示します。
3. リストをダブルクリックして開きます。
4. 「一般情報」タブの「名前」または「説明」フィールドを編集します。
5. リストを無効化するには、「有効」フィールドを「いいえ」に変更します。

注意 リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、無効化できません。

6. リスト値（つまり、リスト・エントリ）を変更するには、「リスト」タブをクリックします。必要に応じて値を追加、削除、および変更できます。

注意 リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合、そのリストのリスト・エントリ値は削除できますが、警告メッセージが表示されます。リスト・エントリ値を非アクティブにして、Agile PLM クライアントに表示されないようにすることをお勧めします。

7. 「保存」をクリックして、変更を保存します。

リストを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ・バーを使用して、削除するリストを表示します。
3. リストを選択します。
4. 「削除」ボタンをクリックし、「はい」をクリックして確定します。

注意 リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、無効化または削除できません。

リスト値（リスト・エントリ）を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ・バーを使用して、変更するリストを表示します。
3. リストをダブルクリックして開きます。
4. 「リスト」タブをクリックします。
5. リスト値をダブルクリックして開きます。
6. 「名前」フィールドと「説明」フィールドに入力します。いずれも 255 文字まで入力できます。
7. リストを非アクティブ化するには、「アクティブ」フィールドを「いいえ」に変更します。

注意 リスト値を非アクティブにすることで、Agile PLM クライアントから効果的に隠すことができます。ただし、ユーザーは非アクティブ値も検索できます。

8. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

リスト値（リスト・エントリ）を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ・バーを使用して、変更するリストを表示します。
3. リストをダブルクリックして開きます。
4. 「リスト」タブをクリックします。
5. リスト値を選択します。
6. 「削除」ボタンをクリックします。「ダイアログの確認」に警告（および「削除処理を続行しますか?」のプロンプト）が表示された場合は、「はい」をクリックして削除を続行します。

「リスト・アイテムの削除」ダイアログが表示される場合があります。このダイアログには、リスト・アイテム（リスト・エントリ）は現在使用されており、このアイテムを削除するには、最初にリスト・エントリへの参照をすべて削除する必要があるというシステム評価が示されます。

注意 リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、値を削除できません。ただし、リスト値を非アクティブにし、Agile PLM クライアントに表示されないようにできます。

リストまたはマルチリストの属性で使用されているリストを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. 属性を変更するクラスまたはサブクラスを開きます。
3. 「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。
4. タブをダブルクリックして開きます。
5. 「属性:<テーブル>」タブをクリックします。
6. 変更するリストまたはマルチリストの属性をダブルクリックします。
7. 「リスト」プロパティからリストを選択します。また、「新規リスト」をクリックして、新規リストを作成できます。
8. 「保存」をクリックして、変更を保存します。

注意 Agile PLM オブジェクトに、現在選択されているリストを使用するように設定された属性がある場合、別のリストは選択できません。

リストのデフォルト値を設定する

リスト属性を作成した後は、必要に応じてそのデフォルト値を設定できます。詳細は、83ページの「[デフォルト値を設定する](#)」を参照してください。デフォルト値とは、新規Agile PLMオブジェクトの作成時に、フィールドに対して自動的に選択される値を指します。リスト属性のデフォルト値は、関連するリストの値の1つである必要があります。

注意 マルチリスト属性に対して複数の値をデフォルトとして設定できるのは管理者のみです。

Webクライアント_93でのリストの表示タイプ

ルーティング管理者リストで使用可能な「表示タイプ」の設定は、Webクライアントのリストやマルチリストでも使用可能です。Javaクライアントでは、管理者は、Webクライアントにオブジェクト・リスト属性を「リスト」または「検索」のどちらの形式で表示するかを選択します。「リスト」モードを選択すると、エントリーはドロップダウン・リストに表示されます。「検索」モードを選択すると、エントリーは検索パレットに表示されます。

注意 エントリー数が 250 を超えるリスト属性の場合、Webクライアントではエントリーが「検索」モードで自動的に表示されます。

不良モード・リスト

不良モードは製品サービス依頼（PSR）で使用され、品質問題のレポートの中でアイテムの不良の内容を示します。不良モードは、各アイテムのサブクラス固有の値のリストです。たとえば、顧客がアイテムのサブクラスとして「光学」を作成したとすると、「光学」に対する不良モード・リストが作成され、そのリストには光学式のコンポーネントに固有の問題が含まれます。不良モード・リストには、次の特性があります。

- ドキュメント・クラスまたは部品クラスの新規サブクラスを作成すると、リスト・ライブラリによってそのサブクラスの新規不良モード・リストが自動的に作成されます。
- サブクラスの作成後にその名前を変更しても、関連する不良モード・リストの名前は更新されません。このリストはリフレッシュ後に更新されます。
- 不良モード・リストの「**使用箇所**」タブは、Agile PLM システムでの不良モード特殊処理のために無効化されます。
- 不良モードリストは、対応するサブクラスが削除されないかぎり、削除できません。

このような特性があるため、不良モード・リストは他のタイプのリスト属性には使用しないことをお勧めします。

カスケード・リストを作成する

カスケード・リストには複数の階層レベルがあり、リストの中に複数のリストを作成します。

カスケード・リストの設定は、単一レベル・リストの設定とよく似ています。リストの変更の詳細は、97ページの「[リストを設定する](#)」を参照してください。カスケード・リストには次の追加制限があります。

- カスケード・リストを作成した後は、通常のリストには変更できません。リストが保存されると、「**重ねて表示**」プロパティが読取専用となります。
- カスケード・リスト内の各フォルダには一意の値が必要です。ただし、カスケード・リスト内の異なるフォルダでは同じ値を共有できます。
- カスケード・リストの値は1回に1つずつ追加します。カスケード・リストの値をまとめて追加する方法はありません。
- カスケード・リストには任意のレベル数を指定できます。ただし、実際にはカスケード・リストを4レベル以内に制限するようにしてください。
- カスケード・リストの分岐値として、ノードおよび最終リスト値を選択できます。

カスケード・リストを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「リスト」をダブルクリックします。「リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「リスト作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「名前」、「API名」、および「説明」フィールドに入力します。
4. リストを有効化するには、「有効」リストを「はい」に設定します。
5. 「重ねて表示」リストで「はい」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。新しい「リスト:<名前>」ウィンドウが開きます。
7. リストに値を追加するには、「リスト」タブをクリックします。
8. 「新規作成」ボタンをクリックします。ダイアログ・ボックスが表示されます。
9. リスト・アイテム名、API名、およびリスト・アイテムの説明を入力します。
10. 「追加」をクリックして値を追加し、ダイアログ・ボックスを閉じます。値を保存し、同じレベルに他の値を追加する場合は、「他の追加」をクリックします。

注意	リスト値は常に、カスケード・リストで現在選択されている値よりも下のレベルに追加されます。
-----------	--

11. 値をさらに追加するには、手順 8 から 10 を繰り返します。

プロセス拡張

この章のトピック

■ プロセス拡張の概要	103
■ プロセス拡張ライブラリを使用する	104
■ プロセス拡張をクラスに割り当てる	106
■ プロセス拡張をワークフローのステータスに割り当てる	106

この章では、プロセス拡張のカスタマイズと設定方法について説明します。

プロセス拡張の概要

「プロセス拡張」ノードでは、Agile PLM システムの機能を拡張するカスタム・アクションを定義できます。定義したカスタム・アクションを使用して、Agile PLM クライアントからアクセスできるカスタム・レポート、ユーザー主導型/ワークフロー起動型カスタム・アクション、およびカスタム・ツールを作成できます。

プロセス拡張 (PX) は、Agile アプリケーション・サーバーに配置されている Java クラス、または URL へのリンクのいずれかです。URL は、単なる Web サイトでも、Web ベースのアプリケーションの場所でも構いません。

Agile PLM で利用可能なプロセス拡張は次の 2 タイプです。

- カスタムのプロセス拡張 (カスタム PX) は、「[データ設定](#)」>「[プロセス拡張](#)」ノードで作成する PX の総称です。このタイプの PX は、起動方法に制限があります。このノードは、カスタム PX を保存および管理するための拠点として維持されます。
- イベント・ベースのプロセス拡張 (イベント PX) は、「[システム設定](#)」>「[イベント管理](#)」>「[イベント・ハンドラ](#)」ノードで作成します。イベント・ベースのプロセス拡張の詳細は、303ページの「[イベント管理](#)」にある、309ページの「[ハンドラ・タイプ](#)」を参照してください。

Agile PLM クライアントで利用可能なプロセス拡張にはいくつかの統合ポイントがあります。プロセス拡張は、次の領域から起動できます。

- 「アクション」メニュー
- 「ツール」メニュー
- ワークフロー・ステータス
- 外部レポート
- ダッシュボード - 「ダッシュボード」で統合ポイントとして作成された URL ベースのプロセス拡張は、「ダッシュボード拡張機能」フィールドにリストされ、同時に、「タイプ・リストの表示」を設定した「ダッシュボード」テーブルが作成されます。URL ベースのプロセス拡張の出力は、その「ダッシュボード」テーブルに表示されます。

注意 技術的には、カスタム自動採番ソースもプロセス拡張の一種で、サーバー側のフレームワークもカスタム・アクションと同じものを使用しています。カスタム自動採番ソースの詳細は、109ページの「[自動採番](#)」を参照してください。

プロセス拡張を開発するためにはどのようなツールが必要なのでしょうか。URL ベースの PX には、さらに必要なツールはありません。プロセス拡張ライブラリに希望の数の URL ベースの PX を定義して、クライアントのどこからその URL にアクセスするかを指定できます。

注意 サーバー・プロパティの `agile.sso.expirationTime` を使用して、URL ベースの PX で使用する Cookie の有効期限を管理します。このプロパティのデフォルト値は 86400（秒）で、Cookie の有効期限が 1 日後であることを意味します。管理者は、`<AgileHome>%agileDomain%config` の下にある `agile.properties` にこのプロパティを追加することにより、有効期限を延長または短縮できます。値は秒単位で指定してください。

Agile アプリケーション・サーバーに配置されている Java クラスのプロセス拡張を作成するには、Agile SDK を使用するか、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Agile パートナと協力して、自社に適したプロセス拡張を開発する必要があります。

カスタム自動採番ソースおよびカスタム・アクションを開発および配置するためのプロセス拡張の使用の詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

プロセス拡張ライブラリを使用する

Agile PLM クライアントで使用するカスタム・アクションを定義する場所はプロセス拡張ライブラリです。カスタム・アクションをプロセス拡張ライブラリに追加するときには、そのアクションをクライアントから起動する方法を指定します。

次の表に示すように、Agile PLM にはデフォルトのプロセス拡張が 2 つあります。


名前	説明
パッケージ回答の受諾	パッケージを提出した Agile PLM システムに受諾の回答を送ります。
パッケージ回答の却下	パッケージを提出した Agile PLM システムに却下の回答を送ります。

これらのプロセス拡張を使用して、Agile Content Service (ACS) が Agile 間の通信中に受諾または却下の回答を自動的に送ります。詳細は、Agile Content Service ユーザー・ガイドを参照してください。

Product Governance & Compliance で使用されるデフォルトのプロセス拡張がいくつかあります。詳細は、『Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』を参照してください。

プロセス拡張ライブラリには、プロセス拡張をいくつでも追加できます。

カスタム・アクションをプロセス拡張ライブラリに追加する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「プロセス拡張」をダブルクリックします。「プロセス拡張ライブラリ」ウィンドウが表示されます。
2. 「プロセス拡張ライブラリ」ウィンドウで  をクリックします。「プロセス拡張の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. 次の情報を入力します。

- **名前:** カスタム・アクションの名前を入力します。
- **API 名:** 自動生成されます。
- **説明:** カスタム・アクションの簡単な説明を入力します。
- **タイプ:** URL または内部カスタム・アクションを選択します。
- **アドレス:** Web アドレスを指定します（「タイプ」を「URL」に設定した場合）。
- **内部カスタム・アクション:** リストからカスタム・アクションを選択します（「タイプ」を「内部カスタム・アクション」に設定した場合）。このリストには、プロセス拡張フレームワークを使用して Agile アプリケーション・サーバーに配置したカスタム・アクションが反映されます。カスタム・アクションが配置されていない場合、このリストは空白です。
- **起動先:** カスタム・アクションを起動できる場所を 1 つ以上選択します。次のオプションから選択します。
 - **「アクション」メニュー:** 正しく設定されたクラスの「アクション」メニューからカスタム・アクションを選択できます。
 - **外部レポート:** 外部リソースまたは URL にアクセスしてレポートを作成できます。プロセス拡張が内部カスタム・アクションの場合、外部レポートのオプションは利用できません。
 - **ツール・メニュー:** 「ツール」メニューからカスタム・アクションを選択できます。
 - **ワークフローのステータス (ステータス):** 正しく設定されたワークフローが特定のステータスに入ったときに、常にカスタム・アクションが起動します。プロセス拡張が URL の場合、「ワークフローのステータス」オプションは利用できません。


「アクション」メニューまたはワークフローのステータスからカスタム・アクションを起動するように指定した場合は、サブクラスまたはワークフローを設定してそのカスタム・アクションを使用できます。URL を外部レポートの作成に使用するよう指定した場合は、Agile Web クライアントを使用してレポートを作成できます。「ツール」メニューからアクションを起動するように指定した場合、Agile クライアントでは、常にこのアクションを使用できます。
- **役割:** カスタム・アクションに使用する役割を 1 つ以上選択します。現在のユーザーの役割および権限を使用する場合、このフィールドは空白にしておきます。現在のユーザーの役割および権限を一時的に無視する場合は、1 つ以上の役割を選択します。そのカスタム・アクションが完了した時点で、クライアントは現在のユーザーの役割および権限に戻ります。
- **有効:** 「はい」を選択します。

4. 「OK」をクリックしてプロセス拡張を保存します。

プロセス拡張を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「プロセス拡張」をダブルクリックします。「プロセス拡張ライブラリ」ウィンドウが表示されます。
2. 変更するプロジェクト拡張を開きます。
3. 設定を変更し、「OK」をクリックします。

プロセス拡張を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「プロセス拡張」をダブルクリックします。「プロセス拡張ライブラリ」ウィンドウが表示されます。
2. 削除するプロセス拡張を選択し、をクリックします。

注意 クラス、ワークフロー、または外部レポートで現在使用中のカスタム・アクションは削除できません。カスタム・アクションを無効にすると、非アクティブになります。カスタム・アクションをプロセス拡張ライブラリから削除しても、Agile アプリケーション・サーバーに配置されているカスタム・コードに影響はありません。

プロセス拡張をクラスに割り当てる



カスタム・アクションを Agile PLM オブジェクト（部品や ECO など）の「アクション」メニューに追加するには、そのオブジェクトのクラスを設定します。各基本クラス、クラスおよびサブクラスには「プロセス拡張」タブがあります。クラスに割り当てるカスタム・アクションは、プロセス拡張ライブラリであらかじめ定義しておく必要があります。

プロセス拡張は、クラスおよび基本クラスから継承されます。つまり、基本クラスにプロセス拡張を割り当てると、その基本クラスの下位にあるクラスおよびサブクラスにもプロセス拡張が割り当てられます。

注意 プロセス拡張は、クラス階層の 1 つのレベルにのみ割り当てることができます。たとえば、部品サブクラスに割り当てられているプロセス拡張を、アイテム基本クラスに割り当てすることはできません。

ただし、Agile ポートレットの場合、プロセス拡張コンフィグレータを使用してプロセス拡張を割り当てることができるのは、基本クラス（つまり、アイテム基本クラス）のみで、部品またはドキュメントのクラスやサブクラスに割り当てすることはできません。

プロセス拡張をクラスに割り当てる手順は、次のとおりです。


1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが開きます。
2. 使用する基本クラス、クラス、またはサブクラスをダブルクリックします。
3. 「プロセス拡張」タブをクリックします。
4. ツールバーの  をクリックします。「プロセス拡張の割当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「選択肢」リストでカスタム・アクションを選択し、  をクリックして「選択済」リストに移動します。完了したら、「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして設定を保存します。

プロセス拡張をワークフローのステータスに割り当てる

「保留中」ステータス以外の各ワークフローのステータスには、ワークフローがそのステータスに入ったときに起動するカスタム・アクションを 1 つ以上割り当てることができます。ワークフローのステータスに割り当てるカスタム・アクションは、プロセス拡張ライブラリであらかじめ定義しておく必要があります。

注意 自動転送（ATO）クラスとそのサブクラスは、ワークフロー起動型のプロセス拡張に対応していません。

プロセス拡張をワークフローのステータスに割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ワークフロー設定」で「ワークフロー」をダブルクリックします。「ワークフロー」ウィンドウが開きます。
2. 使用するワークフローをダブルクリックします。
3. 「ステータス」タブをクリックします。
4. 「保留中」以外のステータスを選択します。選択したステータスに対する「条件」プロパティ・テーブルが、ステータス・テーブルの下に表示されます。
5. 「条件」プロパティ・テーブルで、選択したステータスをダブルクリックします。
6. 「プロセス拡張」リストでをクリックします。ポップアップ・ウィンドウが表示されます。
7. 「選択肢」リストでカスタム・アクションを選択し、「>」ボタンをクリックして「選択済」リストに移動します。完了したら、「OK」をクリックします。
8. 「保存」をクリックして設定を保存します。

自動採番

この章のトピック

■ 自動採番の使用方法	109
■ 自動採番ソースについて	110
■ 自動採番ソースを設定する	112
■ 新しい自動採番ソースを作成する	114
■ 自動採番ソースを削除する	116

この章では、Agile PLM オブジェクトの自動採番を管理する方法について説明します。

自動採番の使用方法

Agile PLM では、「**自動採番**」ノードから自動採番のソースを設定できます。たとえば、自動採番ソースの名前やサブクラス割当てを変更したり、必要に応じてシーケンスを拡張することができます。

自動採番ソースに独自の接頭辞または接尾辞を指定することや、新規自動採番ソースを作成することも可能です。不要になった自動採番ソースは、Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていないかぎり、削除できます。

使用可能な自動採番のタイプは、標準またはカスタムの方式があります。。標準方式では、接頭辞、接尾辞、文字セット、使用できる文字数を指定して順序を定義します。カスタム方式では、より柔軟な方法で、プロセス拡張フレームワークを使用して採番シーケンスを定義します。

プロセス拡張を使用してカスタムの自動採番ソースを作成するには、Agile SDK を購入するか、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Agile パートナと協力して、自社の要件に適したプロセス拡張を開発する必要があります。プロセス拡張の詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

自動採番ソースを変更する

どの番号のソースも「**自動採番**」ノードから変更できます。

自動採番ソースを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「**データ設定**」で「**自動採番**」をダブルクリックします。「自動採番」ウィンドウが表示されます。
2. 行をダブルクリックすると、そのソースのウィンドウが開きます（たとえば、「自動採番: 期限付き変更指示番号」ウィンドウ）。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
4. 入力完了したら、「**保存**」をクリックします。

5. 元の設定に戻るかやり直す場合は、「**キャンセル**」をクリックします。ウィンドウの新規設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージが表示されます。キャンセルする場合は「**OK**」を、キャンセルしない場合は「**キャンセル**」をクリックします。

自動採番のプロパティについては、112ページの「[自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。

自動採番ソースについて

自動採番ソースは、Agile PLM クライアントで作成されたオブジェクトの自動採番に使用される、あらかじめ定義された連続した数字による番号です。Agile PLM の各オブジェクトには作成時に番号が割り当てられます。手動で番号を割り当てるか Agile PLM による自動採番を使用するかをユーザーが選択できるようにしたり、手動による番号の割当てを禁止することができます。

Agile PLM 管理者は、次の 2 つの管理ノードから Agile PLM システムの番号割当て規則を設定できます。

- 「**クラス**」ノードでは、特定のサブクラスに特定の自動採番ソースを割り当てます。59ページの「[自動採番ソース・プロパティを変更する](#)」を参照してください。
- 「**自動採番**」ノードでは、番号ソースの名前、接頭辞または接尾辞を付けるか、各シーケンスの番号の数など、番号ソース自体を設定します。どのサブクラスが特定の番号ソースに割り当てられているかを確認し、割当てを設定できます。新規番号ソースの作成や、不要な番号ソースの削除も可能です。

自動採番ソースは、Agile PLM でオブジェクトに自動的に番号を割り当てるときに使用する番号ソースが認識できるように、サブクラスに割り当てられます。Agile PLM のインストール時に、ほとんどのサブクラスに個別の自動採番ソースが割り当てられます。

注意 製造元やユーザーなど、複数の Agile PLM サブクラスでは自動採番が許可されません。

既存の自動採番ソースを表示するには、「**自動採番**」ノードをダブルクリックします。付属の自動採番ソースを使用するか、設定に対して次のいずれかの変更を行います。

- 「**新規作成**」ボタンを使用して、新規自動採番ソースを作成する。
- 「**有効化**」ボタンまたは「**無効化**」ボタンを使用して、自動採番ソースを有効または無効にする。
- サブクラスに 1 つ以上の自動採番ソースを割り当てる。
- 自動採番ソースに 1 つ以上のサブクラスを割り当てる。
- 設定ウィンドウの「**接頭辞**」または「**接尾辞**」フィールドを使用して、自動採番ソースに接頭辞または接尾辞を追加する。
- 設定ウィンドウの「**名前**」フィールドを使用して自動採番ソースの名前を変更する。
- 既存の自動採番ソースのすべての番号が使用された場合に、設定ウィンドウの「**次の番号**」フィールドを使用して番号シーケンスを拡張する。
- 「**削除**」ボタンを使用して、不要な自動採番ソースを削除する。

注意 自動採番が必要な場合の詳細は、60ページの「[手動番号割当てを禁止する](#)」を参照してください。

新規サブクラスを作成する場合は、自動採番用の既存の番号ソースに割り当てるか、そのサブクラス専用の新規番号ソースを作成します。

自動採番ソースは、インストール時に次の表に示したように設定されます。

名前	使用箇所	接頭辞	文字数
自動転送番号	自動転送	ATO	7
検証番号	検証	Audit	5
ブローカ番号	ブローカ	BROKER	5
是正・予防処置番号	是正・予防処置	CAPA	5
部品メーカー番号	部品メーカー	COMMR	5
受託製造業者番号	受託製造業者	CTMR	5
契約番号	契約	CONTRACT	1
コンテンツ転送番号	コンテンツ転送 (CTO)	CTO	7
顧客番号	顧客	CUST	5
デklarレーション番号	デklarレーション	MD	5
デザイン番号	デザイン	DESIGN	5
期限付き変更指示番号	期限付き変更指示	DEV-	6
ディスカッションの自動採番	ディスカッション	D	5
ディストリビュータ番号	ディストリビュータ	DISTRIBUTOR	5
ドキュメント番号	ドキュメント	DOC	6
ECO 番号	設計変更指示 (ECO)	ECO-	6
ECR 番号	設計変更要求 (ECR)	ECR-	6
ファイル・フォルダ番号	ファイル・フォルダ	FOLDER	7
ゲートの自動採番	ゲート	G	5
履歴レポート・ファイル・フォルダ番号	履歴レポート・ファイル・フォルダ	HFILE	5
メーカー代表者番号	メーカー代表者	MR	5
マークアップ番号	マークアップ	MARKUP	7
製造元依頼番号	製造元変更 (MCO)	MCO-	6
不具合レポート番号	不具合レポート	NCR	5
パッケージ番号	パッケージ	PKG	5
部品番号	部品	P	6

名前	使用箇所	接頭辞	文字数
PCO 番号	価格変更 (PCO)	PCO	5
フェーズの自動採番	フェーズ	PH	5
PR 番号	問題レポート	PR	5
プログラムの自動採番	プログラム	PGM	5
プロジェクト自動採番		PROJECT	7
プロジェクト番号	ソーシング・プロジェクト	PRJ	5
プロジェクト番号 - コスト管理			
プロジェクト番号 - 新製品			
公表価格番号	公表価格	PRICE	5
見積履歴番号	見積履歴	QUOTE	5
見積依頼番号	見積依頼	RFQ	5
見積依頼番号 - コスト管理			
見積依頼番号 - 新製品			
拠点毎変更番号	拠点毎変更 (SCO)	SCO	5
出荷停止番号	出荷停止	STOP-	6
タスクの自動採番	タスク	T	5

自動採番ソースを設定する

自動採番ソースには、次の表に示すプロパティがあります。

プロパティ	説明
名前	自動採番ソースの名前です。単にサブクラスと同じであるか、またはその他の特徴（たとえばファスナーやファスナーレッド）を表している場合があります。この名前は変更できます。
API 名	システム全体で一意的オブジェクト識別子で、自動生成できます。API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。
説明	自動採番ソースの簡単な説明です。これはオプションのフィールドです。
有効	この自動採番ソースが、有効（はい）か無効（いいえ）かを示します。デフォルトは「はい」です。
タイプ	「標準」または「カスタム」。デフォルトは「標準」です。カスタム自動採番は、SDK機能のある顧客に対して有効です。この機能により、既存の採番スキームと統合されるプロセス拡張を追加できます。103ページの「 プロセス拡張 」および『Agile SDK開発者ガイド』を参照してください。

プロパティ	説明
接頭辞	標準自動採番のプロパティ。この自動採番ソースで Agile PLM が自動的に割り当てる各番号の前に来る文字。たとえば、Acme000759（Acme = 接頭辞）などです。この接頭辞は変更できます。
接尾辞	標準自動採番のプロパティ。この自動採番ソースで Agile PLM が自動的に割り当てる各番号の後に来る文字。たとえば、Acme000759SW5（SW5 = 接尾辞）などです。この接尾辞は変更できます。
文字セット	標準自動採番のプロパティ。このプロパティに入力した文字セットは、自動採番の作成に使用されます。社内の自動採番にのみ使用できます。文字セットには、a～z、A～Z、0～9 のみが含まれます。特殊文字はサポートされていません。
文字数	標準自動採番のプロパティ。使用する文字数または長さを設定します。「4」を入力した場合、採番は 0001～9999 となります。社内の自動採番にのみ使用できます。上限は 10 のため、このプロパティに指定できるのは、1、2、3、4、5、6、7、8、9、または 10 のみです。
開始番号	標準自動採番のプロパティ。Agile PLM が自動的に割り当てる最初の番号。このプロパティは、任意の「次の番号」と考えることができます。
次の番号	標準自動採番のプロパティ。「開始番号」の値は操作できますが、「次の番号」が示すのは、単に自動採番で次に使用される番号です。
カスタム自動採番	カスタム自動採番のプロパティ。このプロパティは「タイプ」が「カスタム」の場合のみ有効になり（表示されます）。カスタマイズした自社の自動採番システムで値を移入するドロップダウン・リスト・フィールドです。カスタム自動採番リストは、Agile アプリケーション・サーバーに配置されたカスタム自動採番のセットを反映します。

注意 デフォルトのサブクラスについては「自動採番が必要」が「いいえ」で、「自動生成」が「はい」の場合、そのサブクラスにオブジェクトを作成すると番号が自動的に生成されることとなりますが、新しいオブジェクト番号も入力できます。

自動採番の接頭辞または接尾辞を変更する

「接頭辞」プロパティと「接尾辞」プロパティにより、自動採番の前または後に来る固定の文字列や数字が指定されます。たとえば、部品の自動採番の接頭辞が「P」の場合、Agile PLM クライアントで作成される部品にはすべて、「P00678」のように接頭辞「P」が前に付いた番号が割り当てられます。自動採番ソースに接尾辞「00」もある場合は、割り当てられる番号の後に「00」が付けられます。


Agile PLM 管理者は、自動採番ソースの「接頭辞」プロパティと「接尾辞」プロパティを変更できます。この自動採番ソースを使用するサブクラスで作成される新規オブジェクトには、自動採番で新しい接頭辞または接尾辞が付けられます。

注意 自動採番をすでに使用している場合は、「名前」、「説明」、および「有効」以外のプロパティは変更しないことをお勧めします。

自動採番ソースの使用箇所を変更する

「使用箇所」プロパティでは、Agile PLM で特定の自動採番ソースを使用するサブクラスが示されます。このプロパティを変更して、番号ソースを使用するサブクラスを追加することや、サブクラスで番号ソースを使用しないようにできます。

特定の自動採番ソースを使用するサブクラスを表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「自動採番」をダブルクリックします。「自動採番」ウィンドウが表示されます。
2. 行をダブルクリックすると、そのソースのウィンドウが表示されます（「期限付き変更指示番号」ウィンドウなど）。
3. 「使用箇所」タブで、「追加」ボタン  をクリックします。
「クラスを「使用箇所」タブに追加」ダイアログ・ボックスが開き、Agile PLM システムに存在するすべてのサブクラスが表示されます。「選択済」リストに表示されているサブクラスは、Agile PLM クライアントで作成されるオブジェクトにこの番号ソースを使用します。「選択肢」リストに表示されているサブクラスは、この番号ソースを使用しません。
4. 設定を変更するには、サブクラス名をダブルクリックして、他方のリストに移動します。
5. 変更を保存してダイアログ・ボックスを閉じるには、「OK」をクリックします。
6. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。
7. 元の設定に戻るかやり直す場合は、「キャンセル」をクリックします。ウィンドウの新規設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージが表示されます。キャンセルする場合は「OK」を、キャンセルしない場合は「キャンセル」をクリックします。

カスタム自動採番

リストからカスタム自動採番ソースを選択します。カスタム自動採番ソースは、プロセス拡張フレームワークを使用して Agile アプリケーション・サーバーに配置されている場合のみ作成できます。カスタム自動採番ソースを作成する場合は、「カスタム自動採番」ドロップダウン・リストから選択します。カスタム自動採番ソースが配置されていない場合、リストは空白になります。

タイムアウト

自動採番ソースが応答しない場合にタイムアウト・エラーが発生するまでの秒数を入力します。デフォルトは 30 秒です。

新しい自動採番ソースを作成する

必要に応じて、ユーザー定義サブクラス用に新規自動採番ソースを作成できます。

作業を開始する前に

新規自動採番ソースを作成する前に次の内容について考慮してください。

- どのサブクラスで新規自動採番ソースを使用するか。
- 新規自動採番ソースにどのような名前を付けるか。
- 新規自動採番ソースに接頭辞が必要か。接頭辞が必要な場合、何にするか。
- 新規自動採番ソースに接尾辞が必要か。接尾辞が必要な場合、何にするか。
- どのくらいのサイズの番号シーケンスが必要か。

新規自動採番ソースを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「自動採番」をダブルクリックします。「自動採番」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」をクリックします。「自動採番の定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「名前」、「API 名」、および「説明」フィールドに入力し、「有効」フィールドで「はい」または「いいえ」を選択します。

新しい番号ソースを Agile PLM システムに導入する準備ができたなら、「有効」リストの値を「はい」に設定します。このダイアログ・ボックスのデフォルトは「はい」ですが、サブクラスが完全に設定されるまでは、「いいえ」に設定しておくことをお勧めします。

4. 新しい自動採番のタイプを選択します。

「標準」を選択した場合は、自社のニーズにあわせて「接頭辞」、「接尾辞」、「文字セット」、「文字数」、「開始番号」の各フィールドに値を入力します

番号ソースの重複を避けるには、「自動採番ソースについて」で、Agile PLM のインストール時に提供される自動採番ソースの接頭辞リストを参照してください。

「文字数」の設定によって、自動採番で割り当てられる番号の桁数が決まります。たとえば、「文字数」フィールドに「4」と入力すると、このシーケンスで使用できる番号の範囲は 0001~9999 (合計 9,999 個の番号) となります。短期間でシーケンスが最大値に達しないような値を選択してください。

5. 「カスタム」を選択した場合は、「カスタム自動採番」フィールドと「タイムアウト」(秒数)フィールドに値を入力します。
6. 「使用箇所」リストの下矢印をクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、Agile PLM システムに存在するすべてのサブクラスが表示されます。新しい番号ソースを作成しているため、「選択済」フィールドは空白になります。
7. この番号ソースを使用するサブクラスをすでに作成している場合は、「選択肢」リストのサブクラス名をダブルクリックして、「選択済」リストに移動します。この番号ソースを使用するサブクラスを作成していない場合、このステップは完了できません。この場合は、「有効」フィールドを「いいえ」のままにしておきます。
8. 変更を保存してダイアログ・ボックスを閉じるには、「OK」をクリックします。

「自動採番」ウィンドウに新しい名前が新しいオブジェクトとして表示されます。

Agile PLM ユーザーによる、このサブクラスへの手動番号割当てを禁止するには、60 ページの「[手動番号割当てを禁止する](#)」を参照してください。

自動採番ソースを削除する

Agile PLM 管理者は、不要な自動採番ソースのうち Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていないものを削除できます。

注意 自動採番ソースがオブジェクトの作成に使用されている場合、無効化するとそのソースは使用できなくなります。109ページの「[自動採番ソースを変更する](#)」を参照してください。

自動採番ソースを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「自動採番」をダブルクリックします。「自動採番」ウィンドウが表示されます。
2. 削除する自動採番ソースを選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックします。

自動採番ソースが Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されている場合は、オブジェクトが使用中であるというエラー・メッセージが表示され、その自動採番ソースは削除されません。

自動採番ソースが Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていない場合は、削除を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。

4. 「OK」をクリックして削除を確認します。

自動採番ソースが削除され、ユーザー定義サブクラスへの割当てに使用できなくなります。

条件

この章のトピック

■ 再利用可能な条件について	117
■ 再利用可能な条件を検索する	118
■ 新規条件を作成する	119
■ 既存の再利用可能な条件を変更する	121
■ 再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを使用する	121
■ \$CURRENTREVと\$LATESTREVをアイテムの条件で使用する	123

この章では、Agile PLM ワークフローで使用されている条件を検証し、再利用可能な条件を作成する方法について説明します。

再利用可能な条件について

再利用可能な条件は、詳細検索のようなデータベース・クエリです。再利用可能な条件の作成に使用する属性は、詳細検索の作成に使用する属性に類似しています。また、これらはワークフロー・プロセスを通して移動するオブジェクトを識別するためのフィルタや、権限マスクを適用する条件のようでもあります。

「条件」ノードは、再利用可能な条件が保存され、保持されている場所です。このノードからは、Agile PLM ワークフローの構成要素となる再利用可能な条件を作成、削除、修正できます。再利用可能な条件は、エスカレーション担当者やサインオフ権限委譲を定義するためにも使用されます。

再利用可能な条件は、複数のワークフローに割り当てることができ、また1つのワークフロー内の複数のステータスに割り当てることができます。次の条件を定義できます。

- 承認者またはオブザーバの組合せの指定または区別。選択されたユーザーであるかどうか、既存または作成されたグローバル・グループか、あるいはパーソナル・グループかどうか。
- 企業の各製品ラインの指定。
- Agile PLM クラスに対応。
- 他のあらゆる Agile PLM オブジェクト（アイテム、変更、パッケージ、製造元、製造元部品）の属性の組合せに対応。

これらのワークフローに適用される再利用可能な条件の変更はグローバル（つまり、再利用可能な条件を修正すると、対象となるすべてのワークフローに反映される）であるため、システム全体のワークフローの変更を1回の作業で完了できます。

各ワークフローについて再利用可能な条件のリストを指定することにより、どの変更がどのワークフローを使用するかを指定できます。照合基準として適用する再利用可能な条件の詳細は、121ページの「[再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを使用する](#)」を参照してください。

再利用可能な条件を検索する

使用可能な再利用可能な条件を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「条件」をダブルクリックします。「条件」ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むために条件レコードをフィルタします。たとえば、アイテム・オブジェクトに対するすべての再利用可能な条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」でレコードをフィルタします。
(8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

再利用可能な条件のフィルタされたリストがテーブルに表示されます。再利用可能な条件のそれぞれについて、「条件」テーブルに名前、説明、オブジェクト・タイプが表示されます。列見出しをクリックし、テーブルを列に基づいて分類します。

ウィンドウ上部のボタンを使用して様々な再利用可能な条件の管理タスクを実行します。

ボタン	説明
削除	選択された再利用可能な条件を削除します。すでに使用されている再利用可能な条件は削除できません。
インポート	アーカイブ・ファイル (.AGI) をインポートして、新規の条件を作成します。28ページの「 管理者設定のインポートとエクスポート 」を参照してください。
エクスポート	選択された再利用可能な条件に対して、再利用可能な条件データをエクスポートします。28ページの「 管理者設定のインポートとエクスポート 」を参照してください。
すべてエクスポート	再利用可能な条件データをすべてエクスポートします。28ページの「 管理者設定のインポートとエクスポート 」を参照してください。
新規条件	新規の再利用可能な条件を作成します。119ページの「 新規条件を作成する 」を参照してください。

再利用可能な条件を表示する

再利用可能な条件には、すべての Agile PLM クラスまたはサブクラスをオブジェクト・タイプとして指定できます。デフォルトの再利用可能な条件の多くは、権限マスクを定義するために使用されています。

特定の再利用可能な条件を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「条件」をダブルクリックします。「条件」ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むために条件レコードをフィルタします。たとえば、アイテム・オブジェクトに対するすべての再利用可能な条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」でレコードをフィルタします。
(8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)
3. 「条件」ウィンドウで、使用する再利用可能な条件の名前をクリックします。

再利用可能な条件に対するタブ付きウィンドウが表示されます。

「条件」設定ウィンドウの「一般情報」タブには、次の表で説明されているアクションを実行するために使用するボタンが表示されます。

アクション	説明
削除	使用されていない再利用可能な条件を削除します。
エクスポート	再利用可能な条件に関する情報をエクスポートします。28ページの「 管理者設定のインポートとエクスポート 」を参照してください。
名前を付けて保存	再利用可能な条件をコピーして、新規の名前を付けます。 <ul style="list-style-type: none"> 「名前を付けて保存」をクリックします。 表示されたダイアログ・ボックスに新規の名前を入力します。 「OK」をクリックします。

条件のウィンドウとタブ

既存の再利用可能な条件をダブルクリックすると、そのプロパティが右ウィンドウのタブ付きウィンドウに表示されます。「一般情報」タブには条件の名前と説明が表示され、条件が適用されているオブジェクト・タイプが表示されます。「編集」ボタンを使用して名前と説明を編集できます。

「条件」タブには、条件が関連付けられているタイプ（クラスまたはサブクラス）と条件のパラメータが表示されます。これらは、再利用可能な条件の作用を定義する条件です。

注意 すでに使用されている再利用可能な条件は編集できますが、その条件の「名前」、「説明」、「オブジェクト・タイプ」の各フィールドは読取り専用です。

「使用箇所」タブには、再利用可能な条件が検索条件プロパティ、照合基準、権限マスク、エスカレーション、権限委譲のどこで使用されているかが表示されます。「履歴」タブには、再利用可能な条件に関連して実行されたアクションが表示されます。

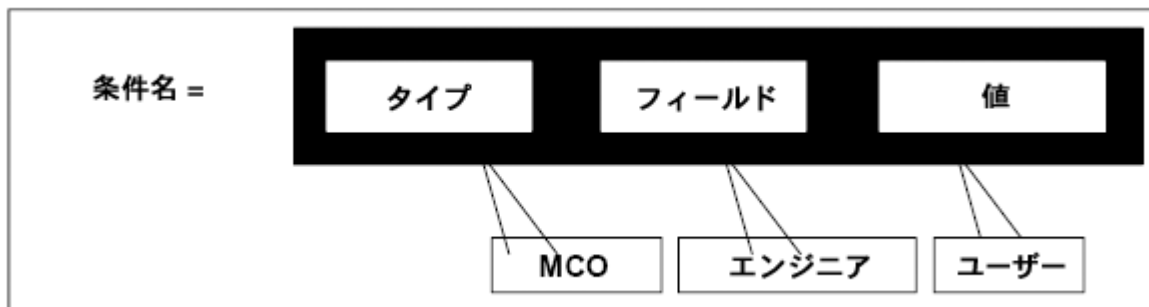
新規条件を作成する

ワークフローや権限マスクのニーズに応じて再利用可能な条件を作成します。再利用可能な条件は Agile PLM で広く使用できるため、その目的や機能を開始時から明確にしておく必要があります。

また、再利用可能な条件の名前を付けるためのシステムまたは規則を作成することをお勧めします。

注意 再利用可能な条件の名前はいつでも変更できますが、ユーザーにはいったんログアウトして再度 Agile PLM クライアントにログインするまで変更後の名前が表示されないため、あまり頻繁に変更すると混乱を招く可能性があります。

命名スキームには、次のようなものが考えられます。



たとえば、「MCO6」よりも「MCO_Acme_July2000」という条件名のほうが、ユーザーにとってもわかりやすくなります。

注意 Agile PLM 管理者が作成した再利用可能な条件は、「権限委譲」ダイアログ・ボックスで「グローバル・権限名」として表示されます。他のユーザーが作成したパーソナルな再利用可能な条件は、「権限委譲」ダイアログ・ボックスで「ユーザー・条件名」として表示されます。

新しい再利用可能な条件を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「条件」をダブルクリックします。「条件」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「条件の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「名前」、「API 名」、および「説明」フィールドに入力し、再利用可能な条件を適用するオブジェクト・タイプを選択します。このリストには、すべての Agile PLM クラスとサブクラスが含まれています。

注意 再利用可能な条件の名前は固有である必要があります。すでに使用されている再利用可能な条件の名前を入力すると、名前の重複を通知するエラー・メッセージが表示されます。

4. 条件の大文字と小文字を区別するには、「大文字と小文字を区別」チェック・ボックスを選択します。大文字と小文字を区別した検索を使用すると、システム・パフォーマンスが向上し、再利用可能な条件の定義方法を簡易化できます。
 - 「値」フィールドにテキストを入力すると、完全に一致するテキストが検索されます。
 - 「大文字と小文字を区別」チェック・ボックスを選択して値を定義すると、Agile PLM システムでは内部データベースの設定を使用してオブジェクトを迅速に検索できるようになります。
5. 「追加」をクリックして、「属性」ドロップダウン・リストから Agile PLM の属性を選択します。使用可能な値は、前の手順で選択した Agile PLM クラスやサブクラスに基づいて変更されます。小さなダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
6. 「条件」フィールドをクリックし、検索演算子を指定します。
7. 「値」フィールドをクリックし、選択したフィールドの値を「属性」リストから選択します。小さなダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
8. その他の条件を追加する場合は、「追加」ボタンを再度クリックし、「And/Or」フィールドで「And」または「Or」を選択します。
9. 「挿入」ボタンをクリックすると、現在ハイライトされている行の上に条件を追加できます。
10. 手順 5 から 8 を繰り返して、再利用可能な条件を完成します。

11. 条件の作成が完了したら「OK」をクリックします。

注意 「オブジェクト・タイプ」フィールドの条件を変更すると、再利用可能な条件全体がリセットされます。再利用可能な条件は、1 つの Agile PLM クラスまたはサブクラス全体で使用できます。異なるクラスやサブクラスに対して使用する場合は、グローバルな条件を別に作成する必要があります。

指定した条件（複数可）を括弧で囲み、検索条件の評価順序を変更するには、「（）」ボタンをクリックします。この「（）」ボタンは、代数方程式における括弧内の公式のような役割を果たし、標準の数式の処理順序に従います。括弧内でグループ化された条件は、他の条件よりも先に処理されます。

既存の再利用可能な条件を変更する

すでに使用されている既存の再利用可能な条件は変更できません。ただし、再利用可能な条件を割り当てられたオブジェクトから削除し、変更して、再び割り当てることは可能です。新規の再利用可能な条件を作成してオブジェクトに割り当て、古い条件をそのオブジェクトから削除することも可能です。「使用箇所」タブには、その再利用可能な条件を使用中のすべてのオブジェクトが一覧表示されます。

既存の再利用可能な条件を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「データ設定」で「条件」をダブルクリックします。「条件」ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むために条件レコードをフィルタします。たとえば、アイテム・オブジェクトに対するすべての再利用可能な条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）
3. 「条件」ウィンドウで、使用する再利用可能な条件オブジェクトの名前をダブルクリックします。
4. 条件設定ウィンドウが表示され、条件に関する既存の情報が表示されます。条件を作成するときの手順で変更します。
5. 入力完了したら、「保存」をクリックします。

注意 いったん権限委譲権限の作成に使用された再利用可能な条件は、その権限委譲を削除した場合も削除できません。たとえば再利用可能な条件リストの最後に表示されるように、削除する必要がある条件の名前を変更することをお勧めします。

再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを使用する

Agile PLM システムで使用する再利用可能な条件とその他の検索条件は、多くの点で類似していますが、大きな相違点がいくつかあります。

再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを指定した場合の変更の検索条件

Agile PLM クライアントで特定のルーティング可能なオブジェクトを選択するには、対象アイテム・フィールド条件が、そのルーティング可能なオブジェクトの「対象アイテム」タブにあるすべてのオブジェクトについて真である必要があります。たとえば、「対象アイテム」の旧ライフサイクル・フェーズがプレリナリに等し

い」という条件を作成した場合は、「対象アイテム」タブのすべてのオブジェクトの「旧ライフサイクル」フィールドが「プレミナリ」である必要があります。「含む」を検索演算子として選択した場合は、「対象アイテム」タブのすべてのオブジェクトの特定のフィールドに、特定の値が含まれている必要があります。

Java クライアントで再利用可能な条件を作成すると、ルーティング可能なオブジェクトの「対象アイテム」タブに表示されているアイテム・フィールド（「部品カテゴリ」など）に対する検索条件を追加できます。

注意 対象アイテムの属性を指定する条件は、権限マスクの作成には使用できません。権限マスクのドロップダウン・リストに表示されない条件は、権限マスクの定義に使用できません。「アイテムの説明を改訂する」も参照してください。

「条件の作成」ダイアログ・ボックスでは、「属性」リストにアイテムそのもののフィールドも含めた「対象アイテム」タブのフィールドが一覧表示されます。これにより、「対象アイテム」タブに表示されているアイテムのフィールドに基づいて、変更を検索する再利用可能な条件を作成できます。このような検索条件を使用するには、「対象アイテム」タブのフィールドが表示されている必要があります。

たとえば、「部品カテゴリ」フィールドが「設計」である「対象アイテム」タブにあるアイテムの変更を検索するには、次の手順に従います。

1. 「データ設定」で「クラス」をダブルクリックします。「クラス」ウィンドウが表示されます。
2. クラス（例: 変更指示）をクリックします。
3. 「クラス」設定ウィンドウで、「ユーザー・インタフェース・タブ」タブをクリックします。
4. 「対象アイテム」をダブルクリックします。「クラス・タブ」設定ウィンドウが表示されます。
5. 「属性」タブをクリックします。
6. 「名前」列で「アイテム・カテゴリ」を検索します。行をダブルクリックして、「属性」設定ウィンドウを表示します。
7. 「表示」ドロップダウン・リストで「はい」を選択します。「表示」プロパティが「はい」に設定されます。

対象アイテムの名前における「アイテム」と「部品」の相違

再利用可能な条件を作成する際には、システムが対象アイテムの名前をどのように解釈するかを理解することが重要です。次の表を参照してください。

名前（一般）	適用先	名前（例）	適用先
対象アイテム.アイテム・フィールド名	部品とドキュメント	対象アイテム.アイテム.P2 Text20	部品とドキュメントの Text20 フィールド
対象アイテム.部品フィールド名	部品のみ	対象アイテム.部品.P2 List03	部品の List03 フィールド

ドキュメント・クラス・オブジェクトのリスト・フィールドとマルチリスト・フィールドは、再利用可能な条件の作成には使用できません。たとえば、「ページ2」タブと「ページ3」タブのリスト・フィールドは使用できません。使用できるドキュメント・リスト・フィールドは、「ドキュメント.製品ライン」と「ドキュメント.サイズ」の2つです。

対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する

デフォルトの変更分析者（またはデフォルトのコンポーネント・エンジニア）は割り当てられた変更を監視して、承認者とオブザーバのリストが完成しているかどうかを確認します。ワークフローによって、ルーティン可能なオブジェクトの対象アイテムの属性に従って承認者とオブザーバが割り当てられますが、ワークフローで自動的に割り当てられなかった承認者を追加できます。

たとえば、Acme 社の各製品ラインに開発中のプロジェクトが同時にいくつか存在するとします。Acme では、「ページ 2」タブ（Agile Java クライアント）のフィールドによって、各アイテム（部品またはドキュメント）が属するプロジェクトが識別されます。Libra 製品ラインのワークフローでは、ECO の対象アイテムに割り当てられたプロジェクトに基づいて、割り当てるデフォルトの承認者とオブザーバが決定されます。

Mary Green は Agile Java クライアントで ECO 333 を作成しました。6 つの Orion プロジェクト・オブジェクト（3 つの部品と 3 つのドキュメント）を「対象アイテム」タブに追加しました。Mary は ECO 333 の作成を完了し、次のステータスに切り替えます。次のステータスでは、変更はデフォルトの変更分析者である Bob Smith に提出されます。

Orion プロジェクトの承認者を選択するために、Libra 製品ラインのワークフローで「対象アイテム」テーブルの各アイテムの「ページ 2」フィールドに「Orion」が含まれているかどうかを確認されます。「対象アイテム」テーブルのすべてのアイテムが Orion プロジェクトに属している場合は、ECO 333 が Bob に提出される時点で、ワークフローに定義された Orion プロジェクトの承認者リストが「ワークフロー」タブに自動的に追加されます。

ただし、「対象アイテム」テーブルのオブジェクトにドキュメントが含まれる場合、Acme では出版部門の Orion チームのメンバーも変更をサインオフする必要があります。サインオフする必要があるドキュメントはすべての ECO に含まれているわけではないため、ワークフロー Libra 製品ラインでは、出版部門のすべての承認者が各 ECO に自動的に追加されることはありません。

変更分析者である Bob は、ECO 333 を確認し、対象アイテムにドキュメントが含まれていることに気付きます。Bob は ECO 333 の「ワークフロー」タブで「承認者の追加」ボタンをクリックし、Orion の出版グループのメンバーすべてを承認者として追加します。Bob は今後のどの「レビュー」または「リリース済」タイプのステータスにも承認者を追加できます。承認者またはオブザーバを追加する際には、ECO が「レビュー」または「リリース済」タイプのステータスである必要はありません。

\$CURRENTREVと\$LATESTREVをアイテムの条件で使用する

\$CURRENTREV と \$LATESTREV は、2 つの強力なシステム変数です。管理者は、この変数を使用して、アイテム（部品およびドキュメント）の特定のレビューおよび特定のワークフロー・ステータス（レビューをベースにした変更、つまり、変更指示、拠点毎変更、製造元依頼に適用されるワークフローのステータス）を対象にして条件を作成できます。

ただし、この機能はきわめて繊細であるため、完全に理解するには、（Product Collaboration の）アイテム・レビューおよびワークフローの知識が必要なことに注意してください。オラクル社コンサルティングの Agile 担当による支援が役立つ場合があります。

これらの変数は、強固な機能と繊細さを併せ持つもう 1 つの分野である権限マスクの条件を作成する際にも使用されます。これらの変数は、第 2 章で紹介されています。15 ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照してください。変更権限を伴う \$CURRENTREV の詳細は、245 ページの「[\\$CURRENTREV を使用して初版レビューでアイテムを変更する機能を制御する](#)」を参照してください。

「タイトル・ブロック.リビジョン」について

現在、「タイトル・ブロック.リビジョン」は条件に使用できません。かわりに、\$CURRENTREV 条件を使用して、ユーザーが選択したリビジョンを識別してください。

\$CURRENTREV変数の使用ルール

\$CURRENTREV 変数は、選択したアイテム・リビジョンに対応する変更（変更指示や製造元変更）のワークフロー・ステータスに基づいて条件を作成する際に使用されます。

\$CURRENTREV 変数を使用する際は、次のルールが適用されます。

- \$CURRENTREV を使用できるのは、アイテム基本クラス（部品とドキュメントのクラスおよびそれらのサブクラスを含む）に属しているオブジェクトに対して条件を定義する場合のみです。
- \$CURRENTREV は、属性リストの値として使用できます。\$CURRENTREV 自体は、値に対して評価されません。条件全体が式として評価されます。
- 「条件」演算子は、「等しい」および「等しくない」に設定できます。
- 「値」は、次の値に設定できます。

値リストは、変更のオブジェクト・タイプに対して作成されたすべての設定済ワークフローで使用可能なすべての Workflow.StatusName 値に加え、事前定義済の変更ステータス・タイプすべてに対する \$STATUSTYPE 変数で構成されます。

注意 この機能に関係する変更タイプは、アイテムの「リビジョン」ドロップダウン・リストに表示されるタイプのみです、つまり、変更指示（ECO）、製造元変更（MCO）、および拠点毎変更（SCO）クラスに属している変更タイプです。ただし、このリストには、他の変更クラス（変更要求、期限付き変更指示、出荷停止、および価格変更）も表示されます。**\$CURRENTREV に関連する式には、ECO、MCO、および SCO 用に開発されたワークフローに関連するステータスのみを使用する必要があります。**

- 条件 **\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.PENDING** は、選択したアイテム・リビジョンと、現在のステータス・タイプが「保留中」の変更が一致する場合に True と評価されます。他のステータス・タイプについても同様に、類似した文を作成できます。サポート対象のステータス・タイプ変数は、次のとおりです。

\$UNASSIGNED

\$STATUSTYPE.PENDING

\$STATUSTYPE.SUBMIT

\$STATUSTYPE.REVIEW

\$STATUSTYPE.RELEASED

\$STATUSTYPE.COMPLETE

\$STATUSTYPE.HOLD

\$STATUSTYPE.CANCEL は使用できません。これは、キャンセルされた変更に関連するリビジョンは、アイテムの「リビジョン」ドロップダウン・リストに表示されず、選択できないためです。いずれの場合も、式 **\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.CANCEL** は、常に False と評価されます。

- 条件 **\$CURRENTREV Equal To 「デフォルトの変更指示.保留」** は、選択したアイテム・リビジョンと、デフォルトの変更指示ワークフローが割り当てられ、かつ現在のステータス・タイプが「保留中」である変更が一致する場合に **True** と評価されます。他のワークフローとステータス・タイプについても同様に、類似した文を作成できます。一般的な形式は、次のとおりです。

<ワークフロー名>.<ステータス名>

<ワークフロー名>.CANCEL は使用できません。

- 前述のワークフロー・ステータス値は、保留中またはリリース済のリビジョンに使用できるすべてのステータスをカバーしています。一方、初版リビジョンには関連する変更がないため、このリビジョンには特別な条件値が用意されています。

アイテムの初版リビジョンが選択されている場合は、考えられる使用事例に基づいて、次の条件の 1 つが **True** になります（次の説明にある保留中の変更という用語は、提出済、レビューなど、リリース前の状態における変更を意味します）。

- **\$INTRODUCTORY_NOCHANGE** - アイテムに対する保留中またはリリース済の変更はありません（「変更」タブは空です）。この条件には、アイテムに対する過去の保留中の変更が、Agile システムによってソフト削除またはハード削除されたケースも含まれます。
- **\$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE** - アイテムはリリースされていませんが、そのアイテムに対する保留中の変更があります。この条件には、アイテムは過去にリリースされているが、リリース済の変更がすべてリリースされていないケースも含まれます。
- **\$INTRODUCTORY_RELEASEDCHANGE** - アイテムに 1 つ以上のリリース済の変更があります。アイテムに 1 つ以上の保留中の変更がある可能性もあります。

これらの 3 つの値のいずれかを含む式では、選択されたリビジョンが初版リビジョンでない場合は常に **False** と評価されることに注意してください。

- ユーザーがアイテムの最新リリースのリビジョンからのみ添付ファイルを取得し、その内容を読んで変更できるような使用事例をサポートするために、**\$LATEST** という別の変数が、**\$CURRENTREV** 式に対して有効な一連の値に導入されました。このような使用事例は、ユーザーによる最新の設計または仕様ファイルの参照が重要な意味を持つ規制産業（医療機器など）にとって重要です。式 **\$CURRENTREV Equal To \$LATEST** は、選択したリビジョンが、アイテムの最新リリースのリビジョンである場合に **True** と評価されます。この式は、選択したリビジョンが初版で、そのアイテムに対して ECO、MCO、または SCO がリリースされていない場合も **True** と評価されます。

式 **\$CURRENTREV Equal To \$LATEST** は、廃止された式「**タイトル・ブロック.リビジョン**」 **Equal To \$LATEST** とまったく同様に機能します。

最新リリースのリビジョンにおけるアイテムの説明に関する動作については、ここで特に説明しておく必要があります。保留中のリビジョンではなく、最新リリースのリビジョンのみ（「**タイトル・ブロック.リビジョン**」 = **\$LATEST**）を変更する権限を持つユーザーがアイテムの説明を変更した場合に、保留中のリビジョンすべての説明をこの新しい説明に更新するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。更新を選択すると、そのユーザーに保留中のリビジョンの説明を更新する権限があるかどうかに関係なく、保留中のリビジョンすべての説明が更新されます。

\$LATESTREV 変数の使用ルール

\$LATESTREV 変数は他の管理者属性で、アイテムの最新リリースのリビジョンに対応する変更指示（ECO/MCO/SCO）のワークフロー・ステータスに基づいて条件を作成する際に使用されます。

\$LATESTREV 変数を使用する際は、次のルールが適用されます。

- **\$LATESTREV** を使用できるのは、アイテム基本クラス（部品とドキュメントのクラスおよびそれらのサブクラスを含む）に属しているオブジェクトに対して条件を定義する場合のみです。

- \$LATESTREV は、属性リストの値として使用できます。\$LATESTREV 自体は、値に対して評価されません。条件全体がブール式として評価されます。
- \$CURRENTREV と異なり、\$LATESTREV を使用して有効な式を作成するには、「条件」フィールドのみを指定する必要があります。「条件」に対して使用できる演算子は、「リリース済」と「初版」のみです。
- 条件**\$LATESTREV Is Released** は、選択したアイテムが、ECO または MCO タイプの変更の少なくとも 1 つについてリリースされた場合に True と評価されます。アイテムは、SCO でリリースする前に、ECO または MCO でリリースする必要があるため、SCO は含まれません。
- 条件**\$LATESTREV Is Introductory** は、選択したアイテムに、リリース済の ECO または MCO がない場合に True と評価されます。

\$CURRENTREVおよび\$LATESTREV条件を使用したアイテム関係の作成

2つのAgileオブジェクト間に、関係と関係ルールを作成するには、「<オブジェクト>.関係.名前」属性（関係を作成するため）と「<オブジェクト>.関係.ルール」属性（関係ルールを作成するため）に適用される両方のオブジェクトに対する変更権限が必要です。244ページの「[変更の基本とルール](#)」を参照してください。

\$CURRENTREV 条件を使用してアイテムの変更を制限するアイテムの変更権限マスクは、アイテム間の関係について選択できるアイテムも制限します。たとえば、条件**\$CURRENTREV 等しい \$STATUSTYPE.PENDING**によって、アイテムの変更権限マスクを制限する変更権限がユーザーにある場合、このユーザーが変更できるのは、「保留中」ステータスの変更があるアイテムのみです。アイテム間の関係について選択できるアイテムも、「保留中」ステータスの変更があるアイテムに制限されます。

アイテムの変更権限マスクで\$CURRENTREV 条件を使用している場合に、アイテム間の関係に対するこの制限を回避するには、次の条件を使用します。

\$CURRENTREV 等しい \$LATEST

この条件を使用して、Item.Relationship.Name という 1 つの「適用先」属性を持つ変更権限マスクを作成するには、次のようにします。

アイテムの変更 \$CURRENTREV 等しい \$LATEST 適用先 Item.Relationships.Name

この変更権限マスクは、ユーザーが 2 つのアイテムにアイテム間の関係を確実に作成できるように、アイテムの変更権限マスクが含まれているすべての役割に指定してください。

注意 関係は、リビジョン固有のものではありません。

ワークフロー

この章のトピック

■ ワークフローで変更管理プロセスを自動化する方法.....	127
■ ワークフローの基本.....	128
■ デフォルトのステータス・ベースのワークフロー.....	131
■ ステータス・タイプの定義.....	131
■ 「名前を付けて保存」で新規ワークフローを作成する.....	133
■ 一般のワークフロー・プロパティ.....	134
■ カスタム・ワークフローを作成し、使用する.....	137
■ ステータス・プロパティの定義.....	143
■ 検索条件プロパティの定義.....	149
■ ワークフローの機能をテストする.....	154
■ ワークフローを実働環境に適用する.....	156
■ アクティブなワークフローを変更する.....	156

「ワークフロー」ノードには、Agile PLM クライアントのユーザーがルーティング可能なオブジェクトを作成して、承認のために送付する際に選択するデフォルトのワークフローが保存されます。このノードから、カスタム・ワークフローを定義および作成することもできます。

ワークフローで変更管理プロセスを自動化する方法

「ワークフロー」ノードには、Agile PLM クライアントのユーザーがルーティング可能なオブジェクトを作成して、承認のために送付する際に選択するデフォルトのワークフローが保存されます。このノードから、カスタム・ワークフローを定義および作成することもできます。

ワークフローとは、ルーティング可能なオブジェクトの作成、変更、レビュー、承認または却下についてユーザーの決定を伴う一連の段階です。Agile PLM ワークフローは、ルーティング可能なオブジェクトが組織の変更管理プロセスを移動する際にたどる自動化された一連のステータスです。（一般的な変更管理プロセスの詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』のワークフローに関する章を参照してください。）

ワークフローにより、変更管理プロセスが様々な面で自動化されます。

- 特定のルーティング可能なオブジェクトで利用できる変更は、すべて設定可能です。ユーザーがルーティング可能なオブジェクトを作成する場合、そのルーティング可能なオブジェクトに対して使用できるワークフローをリストから選択できます。
- リリース済のルーティング可能なオブジェクトのすべての必須フィールドが入力され、「レビュー」または「リリース済」のステータス・タイプのすべての承認者がサインオフすると、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに「自動昇格」します。
- ルーティング可能なオブジェクトの承認や却下は、定義された許可およびその他のチェックの範囲内で行われます。デフォルトの承認者とオブザーバは事前に割り当てることができます。
- ルーティング可能なオブジェクトの作成と進行状況は、電子メールで自動的にユーザーに通知されます。たとえば、承認者が指定期間内に回答しない場合は、催促の電子メール通知が送信されます。

- 承認者が指定期間内に回答しないと、ルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるユーザーのエスカレーション担当者に、ルーティング可能なオブジェクトが送付されます。
- ワークフローに複数の「レビュー」と「リリース済」タイプのステータスを定義すると、ルーティング可能なオブジェクトを複数の承認者とオブザーバのリストに連続してルートできます。
- ルーティング可能なオブジェクトを承認する権限は、一定期間別のユーザーに委譲できます。適切な権限があれば、ユーザーは他のユーザーのサインオフ権限も委譲できます。

ワークフローを変更する

次の手順は、「ワークフロー」ノードにあるワークフローの変更に適用されます。

ワークフローの設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークフロー設定」で「ワークフロー」をダブルクリックします。「ワークフロー」ウィンドウが表示されます。
2. 変更するワークフロー（例：デフォルトの変更指示）をダブルクリックします。「ワークフロー：デフォルトの変更指示」ウィンドウが表示されます。設定タブには次のオプションがあります。
 - **一般情報**
 - **ステータス**：「ステータス」テーブルにはステータスのプロパティが定義され、「条件」テーブルには検索条件プロパティが定義されます。
 - **履歴**
3. 「一般情報」設定タブを選択し、編集するフィールドで新しい値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。「一般情報」タブの2つの「条件基準タイプ」フィールドは、この時点ではそのままにしておきます。
4. 入力完了したら、「保存」をクリックします。

このワークフローのステータス・プロパティ、または検索条件プロパティを変更するには、「ステータス」タブをクリックします。

アクティブなワークフロー（つまり、有効なワークフローまたはルーティング可能なオブジェクトが移動しているワークフロー）の変更については、「アクティブなワークフローを変更する」を参照してください。

注意 ワークフロー・ステータスへの変更は、プロセス拡張（103ページの「[プロセス拡張](#)」を参照）と転送（Agile Content Serviceユーザー・ガイドを参照）にも関連しています。

ワークフローの基本

ルーティング管理者

ルートして承認を得ることができるオブジェクトは、すべて**ルーティング可能なオブジェクト**です。ルーティングと承認のプロセスを監視するユーザーは、ルーティング管理者と呼ばれます。各種ルーティング管理者（次の表を参照）は、管理者によってユーザーに割り当てられた役割です。たとえば、あるユーザーに変更分析者の役割が割り当てられているとすると、そのユーザーの名前は「変更分析者リスト」に表示され、Java クライアントや Web クライアントのユーザーが手動で選択できます。ルーティング管理者は、ルーティング可能なオブジェクトを評価して割り当て、割り当てられたオブジェクトに関する電子メール通知を受信します。

次の表に、ルーティング可能なオブジェクトと、対応するデフォルトのルーティング管理者を示します。

ルーティング可能なオブジェクト（基本クラスを併記）	デフォルトのルーティング管理者
変更: 製造元変更（MCO）および価格変更（PCO）を除くすべての変更: 変更指示（ECO）、変更要求（ECR）、拠点毎変更（SCO）、出荷停止、期限付き変更指示	変更分析者
変更: 製造元依頼（MCO）	コンポーネント・エンジニア
変更: 価格変更（PCO）	価格管理者
デklarレーション（すべて）	適合性管理者
パッケージ	プログラム・マネージャ
製品サービス依頼（PSR）： 問題レポートおよび不具合レポート（NCR）	品質分析者
プロジェクト: アクティビティおよびゲート	PPM プログラム・マネージャ
品質変更要求（QCR）： 是正・予防処置（CAPA）および検証	品質管理者
転送: コンテンツ転送（CTO）および自動転送（ATO）	コンテンツ・マネージャ

その他のワークフローの基本

次に、Agile PLM ワークフローに関するその他の基本情報を示します。

- ワークフローは、固有名、1 つ以上の照合基準、およびステータス・リストまたはステータスの順序で構成されています。有効なワークフローは表示され、Agile PLM クライアントのユーザーが使用できます。
- 各ワークフローは、少なくとも 1 つの照合基準によって修飾する必要があります。照合基準は、ルーティング可能なオブジェクトが従うことのできるワークフローを判断する広義の修飾語句です。Agile PLM では、ルーティング可能なオブジェクトを、すべてのワークフローの照合基準すべてと照合してテストし、ルーティング可能なオブジェクトと一致するワークフローを判断します。
- ワークフローには、任意の数のステータスを含めることができます。ステータス名は編集可能ですが、基礎となるステータス・タイプは編集できません。必須のステータス・タイプは「保留中」の 1 つのみです。ワークフローの最初のステータスは「保留中」である必要があります。「提出」、「レビュー」、「リリース済」の 3 つのステータス・タイプは、各インスタンスに固有名を付けると、1 つのワークフロー内で複数回使用できます。「レビュー」と「リリース済」は最も用途が広いステータス・タイプです。
- ワークフローのステータス・リストにある各ステータスは、ステータス・プロパティと検索条件プロパティで構成されています。
- ステータス・プロパティでは、自動的に実行されるアクションまたは手動で実行されるアクション（あるいはその両方）がいくつか定義されます。ステータス・プロパティでは、割り当てられたユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認、却下した場合、またはレビューすることを忘れた場合に、ルーティング可能なオブジェクトがどのような状態になるかを決定します。
- 検索条件プロパティは、個別に作成され「条件」ノードに保存される、「再利用可能な条件」と呼ばれるフィルタによって定義されます。各ステータスには多数の検索条件プロパティがあります。検索条件プロ

パティは、ルーティング可能なオブジェクトが、ステータスへの移行時または終了時において、再使用の条件に定義された条件を満たしている場合に、自動的にまたは手動で実行される特定のアクションを説明しています。検索条件プロパティは、ワークフロー全体ではなく、個々のステータスに適用されます。

- たとえば、検索条件プロパティを使用して、ワークフローの特定の「レビュー」ステータスに対するアクションを次のように定義できます。あるステータスにルーティング可能なオブジェクトが移行した際に、そのルーティング可能なオブジェクトの「製品ライン」フィールドに、「Libra」が含まれている場合は、特定の承認者セットが割り当てられます。また、「製品ライン」フィールドに「Scorpio」が含まれている場合は別の承認者セットが割り当てられます。「製品ライン」フィールドに「Libra」と「Scorpio」の両方が含まれている場合は、両方の承認者セットが割り当てられます。

できるだけ簡潔に

Agile PLM ワークフローは、自社の変更管理プロセスに豊富なオプションと高い柔軟性を提供する強力な機能です。最良の結果を得るには十分に計画を立て、必要なデータや情報をすべて収集してください。

適切に準備を行うには、Agile PLM ワークフローをカスタマイズする前に、次の3つのステップに従ってください。

1. ワークフローを調整するための情報を収集します。自社に必要な変更管理プロセスを完全に理解して定義しておく必要があります。ワークフローを自動化して正常に実装するには、この段階での作業が非常に重要となります。

重要	このプロセスは、このマニュアルでは説明されていません。コンサルティング・サービスは、オラクル社コンサルティングのAgile担当のコンサルタントが担当しています。このサービスは、ビジネス・プロセスの検証プランやガイダンスの作成を支援します。ビジネス・プロセスの検証中に、ワークフローを提案して実際の状況や一般的な使用例をシミュレーションできます。
-----------	--

2. この章と他の章で Agile PLM ワークフローについて学習します。
 - ステータス・タイプの目的や制限を理解していることを確認します。131ページの「[ステータス・タイプの定義](#)」を参照してください。
 - 最初に、変更せずにすぐ使用できるデフォルトのワークフローを使用します。131ページの「[デフォルトのステータス・ベースのワークフロー](#)」を参照してください。
 - 自社のニーズを満たす独自のワークフローをテスト環境で作成します（次のステップを参照してください）。137ページの「[カスタム・ワークフローを作成し、使用する](#)」を参照してください。
3. テスト環境を確立し、テスト手順を最後まで実行します。新しいワークフローはすべてテストしてください。たとえば、ルーティング可能なオブジェクトを作成し、有効なワークフローを通じてそのルーティング可能なオブジェクトを送付します。どのような場合でも、新しいワークフローが正しく機能することを確認し、必要に応じて変更してください。詳細は、次を参照してください。
 - ワークフローの機能をテストする
 - ワークフローを実働環境に適用する
 - アクティブなワークフローを変更する

ワークフローは、自社のニーズに応じていくつでも作成できますが、最初に、出荷時に設定されているデフォルトのワークフローで使用できる機能を試してみることをお勧めします。あまり多くワークフローを作成しすぎると、後でメンテナンスに関する問題が発生する可能性があります。

デフォルトのステータス・ベースのワークフロー

Agile PLM には、次のステータス・ベースのワークフローが用意されています。

- デフォルトのアクティビティ
- デフォルトの自動転送
- デフォルトの検証
- デフォルトの是正・予防処置
- デフォルトの変更指示
- デフォルトの変更要求
- デフォルトのコンテンツ転送
- デフォルトのデklarレーション
- デフォルトの期限付き変更指示
- デフォルトのファイル・フォルダ
- デフォルトのゲート
- デフォルトの製造元依頼
- デフォルトの不具合レポート
- デフォルトのパッケージ
- デフォルトの価格変更
- デフォルトの問題レポート
- デフォルトの拠点毎変更
- デフォルトの出荷停止

注意 デフォルトの自動転送およびデフォルトのファイル・フォルダは読取専用のワークフローです。変更はできません。

デフォルトのワークフローは、変更なしで使用できます。これらは、すべてのルーティング可能なオブジェクトがワークフローの条件に一致するよう保証しています。また、デフォルトのワークフローを要件にあわせて変更することもできます。デフォルトのワークフローを変更しても要件が満たされない場合は、カスタム・ワークフローを作成できます。

注意 ベスト・プラクティスに従って、デフォルトのワークフロー・セットは無修正、無効な状態で保存しておくことをお勧めします。そのためには、「名前を付けて保存」を使用します（133ページの「[名前を付けて保存](#)」で新規ワークフローを作成する」を参照してください）。

ステータス・タイプの定義

Agile PLM ワークフローは、ステータスのリストによって設定され、各ステータスは特定のステータス・タイプとなります。ワークフローは、「保留中」、「提出」、「レビュー」、「リリース済」および「完了」という 5 つの基本的なステータス・タイプから作成されます。先に進むことに失敗し、保存する必要があるルーティング

可能なオブジェクトは、「キャンセル」と「中断」という2つの特別なステータス・タイプで処理されます。

ステータス・タイプには順序についての依存関係があり、ワークフロー内のどの箇所でもどのくらい頻繁に使用できるかを決定します。これらの依存関係を明確に理解することが、使用可能なワークフローを構築する上で不可欠です。次の表では、ステータス・タイプを定義し、これらの依存関係について詳しく説明します。

ワークフローでは必要な数だけステータスを使用できます。複数回使用できるステータス・タイプは、「提出」、「レビュー」、「リリース済」です。これらのステータス・タイプは異なる名前を付けて異なるステータスを定義すれば複数回使用できます。ワークフローに複数の「レビュー」と「リリース済」タイプのステータスを定義すると、ルーティング可能なオブジェクトを複数の承認者とオブザーバのリストに連続してルートできます。

ステータス・タイプ	定義
ルーティング可能なオブジェクトに対してワークフローが選択される前の状態	
未割当	「未割当」は、ルーティング可能なオブジェクトに対してワークフローが設定される前のデフォルトの初期ステータス名です。
基本ステータス・タイプ（アクティブ）	
保留中	<ul style="list-style-type: none"> 作成者はルーティング可能なオブジェクトを作成中です。 ワークフローは「保留中」ステータス・タイプで開始する必要があります。このタイプは各ワークフローの最初のステータスです。
提出	「提出」ステータス・タイプでは、ルーティング可能なオブジェクトが特定のルーティング管理者に送付され、ルーティング管理者はルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに昇格するかどうかを決定します。
レビュー	「レビュー」ステータス・タイプでは、ルーティング可能なオブジェクトが CCB メンバー（承認者とオブザーバ）にルートされます。すべての承認者がサインオフし、必須フィールドの入力が完了すると、自動昇格がオンになっている場合、ルーティング可能なオブジェクトは自動的にステータス・リストの次のステータスに昇格し、自動昇格がオフになっている場合、ルーティング管理者により手動で移動されます。
リリース済	<ul style="list-style-type: none"> ルーティング可能なオブジェクトが最初の「リリース済」ステータス・タイプになると、ソフトウェアにより一連のチェックが実行され、新規 BOM を使用して対象アイテムの新規リビジョン（ECO）が作成されるか、新規リビジョンにレッドラインが組み込まれるか、製造元部品情報（MCO）が更新されます。 「レビュー」ステータス・タイプと同様に、「リリース済」ステータス・タイプでは、承認者とオブザーバを指定してサインオフのためにルートし、自動昇格できます。 最初の「リリース済」ステータスのみが実際にルーティング可能なオブジェクトをリリースします。異なるステータス名が付けられた、後続の「リリース済」ステータス・タイプは、リリースされたルーティング可能なオブジェクトの追加のレビュー/承認サイクルとなります。 リリース済のルーティング可能なオブジェクトを最初の3つのステータス・タイプに戻すと、ルーティング可能なオブジェクトが未リリースとなり収集された承認が削除されます。対象アイテムがない期限付き変更指示は、未リリースにできます。 <p>注意: Agile PLM では、新しいライフサイクル・フェーズに値を指定しない状態でアイテムのリリースを許可する変更指示ワークフローを設定できますが、設定管理のベスト・プラクティスでは、ECO または MCO でアイテムをリリースするには、その前に、常に新しいライフサイクル・フェーズを指定しておく必要があります。新しいライフサイクル・フェーズを確実に存在させるには、そのフェーズをワークフロー条件の必須フィールドにします。</p>

ステータス・タイプ	定義
完了	<ul style="list-style-type: none"> 「完了」ステータス・タイプはワークフローの最後のアクティブなステータスであり、1 回のみ使用されます。
特別なステータス・タイプ（非アクティブ）	
中断	<ul style="list-style-type: none"> 「中断」ステータス・タイプは、ルーティング可能なオブジェクトをワークフローから一時的に削除し、後で再挿入するための方法を提供します。このステータスは、アクティブな一連のステータスの一部になることはないため、ステータス・リストの最後に追加されます。 「中断」ではルーティング可能なオブジェクトが未リリースになりません。 ユーザーに適切な権限が付与されている場合は、ルーティング可能なオブジェクトを、ワークフロー内で「完了」以外の他のステータスから「中断」に手動で移動できます（「中断」が「手動による次の有効なステータス」プロパティで有効な次のステータスとしてリストされている場合）。そのルーティング可能なオブジェクトは、ワークフローに手動で戻すまで「中断」ステータスのままになります。このような移動には、適切なステータスの変更権限が必要です。
キャンセル	<ul style="list-style-type: none"> 「キャンセル」ステータスは、ワークフローからルーティング可能なオブジェクトを削除する手段を提供します。いったん「キャンセル」ステータスへ移動したワークフローは、再度アクティブにすることはできません。 「キャンセル」は、ルーティング可能なオブジェクトを未リリースにします。 ユーザーに適切な権限が付与されている場合は、ルーティング可能なオブジェクトを、ワークフロー内で「完了」以外の他のステータスから「キャンセル」に手動で移動できます（「キャンセル」が「手動による次の有効なステータス」プロパティで有効な次のステータスとしてリストされている場合）。 <p>注意 ワークフローを「キャンセル」ステータスに移動する権限を割り当てる場合、管理者はユーザーによるエラーが発生する可能性を認識しておく必要があります。キャンセルされたワークフローを再度アクティブにする方法はないため、比較的簡単にワークフローを「キャンセル」ステータスに変更できるという事実を認識して許可する必要があります。</p>

デフォルトのワークフローは変更を加えずに使用できます。ワークフローの使用方法や機能に慣れるまで、変更してないデフォルトのワークフローを使用することをお勧めします。

注意 Agileでは、「名前を付けて保存」を使用して、すべてのデフォルトのワークフローのアーカイブ・コピーを作成することをお勧めします。この作業を行うことにより、デフォルトのワークフローをカスタマイズした場合に、必要であれば変更されていないバージョンに戻ることができるためです。

「名前を付けて保存」で新規ワークフローを作成する

既存のワークフローから新しいワークフローを作成して、新しい名前を付けることができます。これにより、デフォルトのワークフローのアーカイブや、実績に基づくデフォルトのワークフローを基礎としたカスタム・ワークフローを簡単に作成できます。

既存のワークフローから新規（またはアーカイブ）ワークフローを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークフロー設定」で「ワークフロー」をダブルクリックします。「ワークフロー」ウィンドウが表示されます。
2. 新しいワークフローの基礎とするワークフローをダブルクリックします。そのワークフローのウィンドウが表示されます。

3. 「名前を付けて保存」ボタンをクリックし、説明的な固有の名前を入力します。API 名を自動生成します。
アーカイブ・コピーを作成している場合は、使用できないワークフローとわかるような名前、たとえば「EXAMPLE Default Chg Orders」などの名前を付けてください。
4. 「OK」をクリックします。設定ウィンドウのタイトル・バーに新しい名前が表示されます。
5. 必要に応じて情報を変更し、「保存」をクリックします。

新しいワークフローは無効になっており（「有効」プロパティが「いいえ」）、アーカイブ・ワークフローとしてそのままの状態維持できます。また、カスタマイズしたワークフローの作成が終了した場合に有効にすることもできます。

注意 「名前を付けて保存」を使用して作成されたワークフローは無効になっています。カスタム・ワークフローを作成した後は忘れずに有効にしてください。

「ステータスの変更」権限マスクは、それぞれ 1 つのワークフローの 1 つの指定されたステータスに適用されます。「名前を付けて保存」で作成したワークフローを含め、新たに作成し、有効化した新規ワークフローすべての各ステータスに対し、「ステータス変更」権限マスクを作成する必要があります。219 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

一般のワークフロー・プロパティ

「ワークフロー」ノードをダブルクリックすると、「ワークフロー」ウィンドウが開き、利用可能なデフォルトのワークフローと、ユーザーが作成したカスタム・ワークフローが表示されます。

このウィンドウには、「新規作成」、「削除」、「ワークフロー初期設定の編集」、「インポート」、「エクスポート」、「すべてエクスポート」、「有効化」、「無効化」の各ボタンがあります。

「ワークフロー初期設定の編集」ボタンは、次のフィールドを含むダイアログ・ボックスを表示します。

フィールド	タイプ	デフォルト
デフォルトの初期ステータス名	テキスト	未割当
ステータス・スタンプの色	(色) リスト	青

「一般情報」タブ

「ワークフロー」ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックすると、設定ウィンドウの「一般情報」タブが開きます。このタブには「削除」、「名前を付けて保存」、「エクスポート」の各ボタンがあります。次のフィールドで構成されています。

フィールド	説明
名前	ワークフローの名前。各ワークフロー名は固有である必要があります。
API 名	システム全体で一意のオブジェクト識別子で、自動生成できます。API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。
有効	ワークフローを有効または無効にします。有効なワークフローは表示され、Agile PLM クライアントのユーザーが使用できます。

フィールド	説明
オブジェクト・タイプ	ワークフローが適用される、ルーティング可能なオブジェクトのタイプです。変更、CTO、QCR、PSR、プロジェクト、パッケージで利用可能です。オブジェクト・タイプのリストは、50ページの「 Agile PLMクラス構成 」を参照してください。 ワークフローが作成された後、「オブジェクト・タイプ」は読取専用となります。
照合基準	どのルーティング可能なオブジェクトがワークフローに従うかを決定します。「すべての変更指示」など、再利用可能な条件を使用できます。
ワークフロー条件基準タイプ	ワークフローを使用できる変更を決定する照合基準を設定します。このプロパティで、ルーティング可能なオブジェクトが対象アイテムに関する情報を含む1つ以上の再利用可能な条件を満たしている場合の処理を設定できます。 「同一」、「すべて」、「一部」から選択します。135ページの「 ワークフロー条件基準タイプ 」を参照してください。
ステータス条件基準タイプ	対象アイテムに関する情報を含む検索条件プロパティがルーティング可能なオブジェクトに適用される場合の動作を決定します。 「同一」、「すべて」、「一部」から選択します。136ページの「 ステータス条件基準タイプ 」を参照してください。

ワークフロー名について

ワークフローの名前と、そのワークフローの有効/無効はこのレベルで設定されます。デフォルトのワークフローはすでに有効になっています。ワークフローが有効な場合の動作の詳細は、143ページの「[ステータス・プロパティの定義](#)」を参照してください。アクティブなワークフローの変更や問題の修正の詳細は、「アクティブなワークフローを変更する」を参照してください。

管理者がワークフローを作成する場合、「オブジェクト・タイプ」フィールドの選択肢は基本クラスに限定されます。ワークフローの「照合基準」プロパティでは、オブジェクト・タイプ、つまり、ワークフローをイベント・マスクのオブジェクト・タイプとして選択した場合にシステムで選択されるタイプを選択します。イベントの詳細、およびイベントとワークフローの関連の詳細は、303ページの「[イベント管理](#)」を参照してください。

ワークフロー条件基準タイプ

各ワークフローについて「ワークフロー条件基準タイプ」プロパティで再利用可能な条件のリストを指定することにより、どの変更がそのワークフローを使用するかを限定できます。次に、照合基準として適用される再利用可能な条件の例をいくつか示します。

- **すべての MECO - MECO** (機械系 ECO) であるすべての変更を検索します。
- **Scorpio ECO** - ルーティング可能なオブジェクトの「製品ライン」フィールドに「Scorpio」を含むすべての ECO を検索します。
- **Libra プロジェクト** - アイテムの「製品ライン」フィールドに「Libra」を含むアイテムが「対象アイテム」タブに存在するすべての変更を検索します。

たとえば、「一般用」というワークフローを作成し、その照合基準として前述の3つの再利用可能な条件（すべての MECO、Scorpio ECO、Libra プロジェクト）を選択したとします。

例 1: Agile PLM クライアント・ユーザーが、機械系 ECO (MECO) である変更を作成した場合、「一般用」ワークフローの照合基準の 1 つ (すべての MECO) に一致します。「一般用」ワークフローは、変更の「カバー・ページ」タブの「ワークフロー」ドロップダウン・リスト (Java クライアント)、または変更の「カバー・ページ」ページ (Web クライアント) に表示されます。

例 2: ECO の「製品ライン」フィールドに「Scorpio」を含む ECO である変更を作成した場合、「一般用」ワークフローの照合基準の 1 つ (Scorpio ECO) に一致します。「一般用」ワークフローは、変更の「カバー・ページ」タブの「ワークフロー」ドロップダウン・リスト (Java クライアント)、または ECO の「カバー・ページ」 (Web クライアント) に表示されます。

例 3: 変更指示を作成し、アイテムの「製品ライン」フィールドに「Libra」を含むアイテムを「対象アイテム」タブに追加した場合、Agile PLM では各対象アイテムの「対象アイテム」タブの「製品ライン」フィールドを確認します。「一般用」ワークフローは変更の「カバー・ページ」タブの「ワークフロー」ドロップダウン・リスト (Java クライアント)、または変更指示の「カバー・ページ」 (Web クライアント) に表示されます。ワークフローの「条件基準タイプ」プロパティの設定により異なります。

- **同一** - すべての対象アイテムが同一の対象アイテムに基づいた再利用可能な条件 (この場合 Libra プロジェクト) に一致する必要があります。
- **すべて** - 照合基準として複数の対象アイテムに基づいた再利用可能な条件を使用する場合、各対象アイテムは少なくとも 1 つの対象アイテムに基づいた再利用可能な条件に一致する必要があります。ただし、各対象アイテムが同一の再利用可能な条件に一致する必要はありません。
- **一部** - 1 つ以上 (すべてではない) の対象アイテムが対象アイテムに基づいた再利用可能な条件 (この場合 Libra プロジェクト) に一致する必要があります。

「対象アイテム」タブにアイテムを追加し、ルーティング可能なオブジェクトのタブのフィールドにデータを入力する場合、「カバー・ページ」タブの「ワークフロー」ドロップダウン・リストは、そのときに適用される照合基準によって変わります。

ステータス条件基準タイプ

ワークフローの「ステータス」タブには、個別のステータスについて再利用可能な条件が表示されるため、ステータス条件基準タイプは、各ステータスの再利用可能な条件のグループに適用されます。プロパティが Agile PLM クライアントに適用されるのは、ステータスの検索条件プロパティに、ルーティング可能なオブジェクトに関連する対象アイテムの情報 (たとえば、どの承認者またはオブザーバを割り当てるか) が記述されている場合です。

次に、プロパティの値、特徴、例を示します。

- **同一** - すべての対象アイテムが同一の対象アイテムに基づいた再利用可能な条件に一致する必要があります。対象アイテムすべてが同一の再利用可能な条件に一致しない場合、ECO はいずれの終了条件も満たさず、「終了時に検索条件が適用されない場合は通知する」プロパティが適用されます。
- **すべて** - ステータスの検索条件プロパティとして複数の対象アイテムに基づいた再利用可能な条件を使用する場合、各対象アイテムは少なくとも 1 つの対象アイテムに基づいた再利用可能な条件に一致する必要があります。ただし、各対象アイテムが同一の再利用可能な条件に一致する必要はありません。「すべて」では、各対象アイテムに適切な承認者がいることが確認されます。

たとえば、あるステータスの再利用可能な条件に対象アイテムの 1 つが一致すると、特定された承認者が ECO の「ワークフロー」タブに追加されます。各対象アイテムが再利用可能な条件のいずれにも一致しない場合、ECO はいずれの終了条件も満たさず、「終了時に検索条件が適用されない場合は通知する」プロパティが適用されます。

- **一部** - 1 つ以上の対象アイテム (すべてではない) が、各ステータスの検索条件プロパティにある再利用可能な条件に基づいて、少なくとも 1 つの対象アイテムと一致する必要があります。あるステータスの再利用可能な条件に対象アイテムの 1 つが一致すると、承認者が ECO に追加されます。

「ステータス条件基準タイプ」の一般設定（つまり、ワークフローの「一般情報」タブ）は、現在のステータスに関して、再利用可能な条件（「ステータス」タブで、そのステータスの「条件」テーブルにある条件のグループ）と、ワークフロー内の次のステータスに対する再利用可能な条件の両方と照合して検証されます。

たとえば、あるユーザーが、次のような対象アイテムを含む「ECO2」という変更を作成したとします（Java クライアントの場合、「対象アイテム」タブに作成されます）。

- 対象アイテム 1 (AI-1) : 製品ライン = Aries、カテゴリ = 電気系
- 対象アイテム 2 (AI-2) : 製品ライン = Aries、カテゴリ = 機械系

ECO2 の「提出済」ステータス（「提出」ステータス・タイプ）の「ステータス」タブの「条件」テーブルには、次のような再利用可能な条件があります。

- 再利用可能な条件 W (RC-W) : 製品ライン = Aries、対象アイテム.カテゴリ = 電気系、必須フィールド = 変更の説明

次に、ECO2 の「CCB」ステータス（「レビュー」ステータス・タイプ）の「ステータス」タブの「条件」テーブルには、次のような再利用可能な条件があります。

- 再利用可能な条件 X (RC-X) : 製品ライン = Aries、対象アイテム.カテゴリ = 機械系、承認者 = Paul

作成者が変更を「提出」ステータスから「CCB」ステータスに移動するときに、ECO2 の「ステータス条件基準タイプ」（SCMT）プロパティが「すべて」に設定されている場合、AI-1（電気系部品）は RC-W に一致しますが、AI-2（機械系部品）は RC-W に一致しません。RC-X も「提出」ステータスに切り替えると、AI-2 は「提出」ステータスの条件に一致しますが、これは、「検索条件一致タイプ」が「すべて」に設定されているためです。変更は、AI-1 が CCB の RC-X に一致しないため CCB に移動できません。

「ステータス条件基準タイプ」（SCMT）が「一部」に設定されている場合、対象アイテムのどちらか 1 つが各ステータスの条件に一致するため、作成者はどちらの場合でも変更を昇格できます（このケースでは、各ステータスの AI は異なり、1 つは「電気系」で、もう 1 つは「機械系」です）。

「ステータス条件基準タイプ」（SCMT）が「同一」に設定されている場合、RC-X を「提出」に追加した後も、各対象アイテムはそれぞれの条件に一致しないため、ECO2 を昇格できません。AI-1 は RC-W に一致し、AI-2 は RC-X に一致します。

カスタム・ワークフローを作成し、使用する

新しいワークフローは、デフォルトのワークフローの 1 つを新しい名前で作成し（133 ページの「[名前を付けて保存](#)」で新規ワークフローを作成する）を参照）、目的にあわせてステータス・プロパティや検索条件プロパティを変更することで簡単に作成できます。

カスタム・ワークフローを最初から作成することの意義は、ユーザーがワークフローのすべての要素を経験するため、ワークフローが希望どおりの動作をしない場合のトラブルシューティングのポイントがどこにあるかも含めて、全体的なプロセスをよりよく知ることができるという点にあります。

カスタム・ワークフローを作成する場合は、次の内容を指定します。

- ワークフローの名前
- ワークフローの API 名
- 照合基準 - 少なくともワークフローに対して 1 つ
- ステータス・リスト - ステータスの数、ステータス名、ステータス・タイプなど

- ステータス・プロパティ - ワークフローのステータスごとに定義
- 検索条件プロパティ - ワークフローのステータスごとに定義

作業を開始する前に

独自のワークフローを作成する前に、できるだけ慎重に計画を立てることが重要です。このプロセスを最大限に活用するには、次の作業をすべて実行する必要があります。

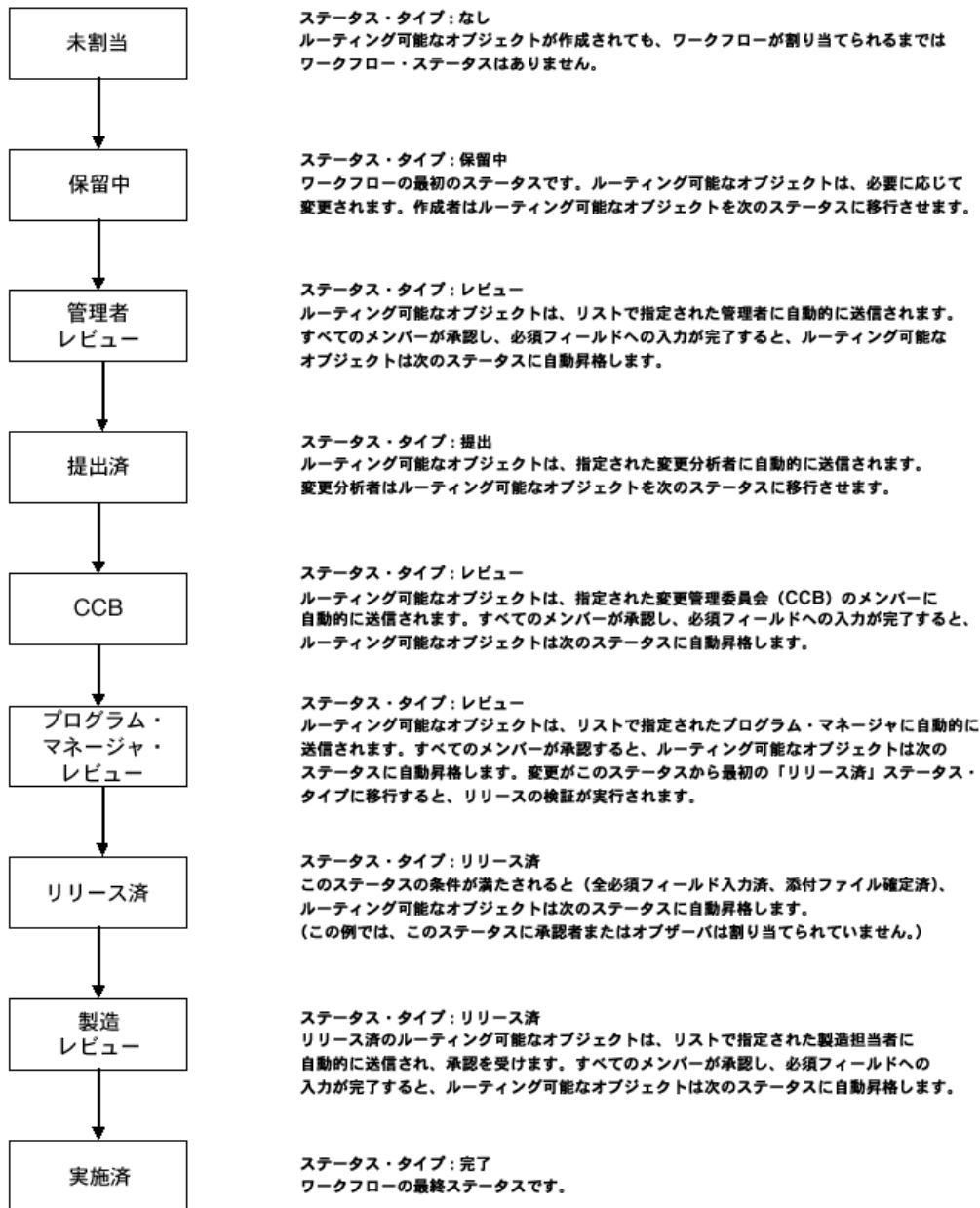
- このマニュアルを読み、ワークフローのドキュメントについてよく理解してください。
- 1つ以上のデフォルトのAgile PLMワークフローを有効にして実際に使用します（131ページの「[デフォルトのステータス・ベースのワークフロー](#)」を参照）。
- 作成する独自のワークフローで何を行う必要があるかを定義する特定の情報やデータを収集します。この内容にはデフォルトのワークフローとは異なる一連のステータスについての情報も含まれます。

カスタム・ワークフローの例

後続の各セクションでは、次の図に示すワークフローの作成方法を説明します。このカスタマイズされたワークフローには、「ステータス・タイプごとにステータスが1つ」という構造のデフォルトのワークフローとは異なる点がいくつかあります。

- 「提出」ステータスは「保留中」の直後に続くステータスではありません。
- 「レビュー」ステータスは3つあります。例として挙げた名前自体よりも、必要な任意の数の「レビュー」ステータスを使用できる点が重要です。
- 「リリース済」ステータス・タイプを使用するステータスは2つありますが、2番目のステータスには「製造計画」という名前が付けられており、もう1つの「レビュー」ステータスのような役割を果たします。
「レビュー」ステータスと「リリース済」ステータスのタイプは、承認者属性や自動昇格属性など多くの属性を共有しています。このため、ルーティング可能なオブジェクトを未リリースにすることなくレビュー・サイクルを追加することが許可されています。ルーティング可能なオブジェクトが「リリース済」ステータス・タイプから「レビュー」ステータスになると、このルーティング可能なオブジェクトは未リリース状態になります。これは次のことを意味します。
 - リリース検証を通じてルーティング可能なオブジェクトを再度リリースできる状態にする必要があります。「リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証」を参照してください。

対象アイテムに割り当てられたリビジョンは無効になります。



ワークフローを作成する場合のガイドライン

次のガイドラインでは、カスタム・ワークフローを構築するために必要な手順を説明します。これらの手順については、次のセクションで詳しく説明します。

カスタム・ワークフローを構築する手順は、次のとおりです。

1. ワークフローによる処理が必要なルーティング可能なオブジェクトの種類を含めて、変更管理プロセスを定義します。

ワークフロー・プロセスの定義については、Agile 担当者または Agile コンサルティング担当者にお問い合わせください。

2. 最初に「条件」ノードで必要な再利用可能な条件をすべて作成します。これらの条件は、システムに対してそのワークフロー独自の特徴を記述するために必要です。
117ページの「[条件](#)」を参照してください。
3. 新しいワークフローを作成して固有の名前を付けますが、有効にはしないでください。有効にするのは、最終段階で行います。
140ページの「[新規ワークフローを作成する](#)」を参照してください。
4. 照合基準については、最低 1 つの再利用可能な条件（「条件」ノードで定義）を選択してください。
5. 新しいワークフローの「ステータス」リストを作成します。
6. 使用できるステータス・プロパティが各ステータス・タイプによって異なることを考慮しながら、「ステータス」タブで各ステータスのプロパティを変更します。
7. 「ステータス」タブの「条件」テーブルに条件を追加し、ステータスの検索条件プロパティ、特に必須フィールド、承認者とオブザーバを定義します。
8. ユーザーに新しいワークフローのステータスの改良を許可するための適切な権限を割り当てます。ワークフローに関連した権限には、承認者/オブザーバの追加、承認者/オブザーバの削除、ステータスの変更、オーバーライド、権限委譲（自分）、および権限委譲（他のユーザー）があります。
209ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照してください。新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータスの変更権限が必要です。219ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。
9. システム全体のワークフロー機能について、スマートルールを設定します。「一般システム設定」を参照してください。
10. 変更したワークフローを有効にしてテストします。準備が整ったら、Agile PLM のユーザーに使用できる旨を通知します。ユーザーは、次回 Agile PLM にログインすると、そのワークフローを使用できます。

新規ワークフローを作成する

次に示すように、名前とステータス・タイプの両方で定義した新しいワークフローのステータスの表を作成すると役立ちます。

ステータス名	ステータス・タイプ
作成	保留中
レビュー - PM	レビュー
提出 - CA	提出
レビュー - CCB	レビュー
レビュー - Sr. PM	レビュー
リリース済	リリース済
レビュー - 製造計画	リリース済
実施済	完了

新規ワークフローを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークフロー設定」で「ワークフロー」をダブルクリックします。「ワークフロー」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」をクリックします。「ワークフローの作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「Taurus ECO」のような固有の名前、および API 名を入力します。

作成するワークフローには、系統的な名前を付けることをお勧めします。命名規則については、119ページの「[新規条件を作成する](#)」、および 225ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。

「一般情報」タブの「有効」フィールドは、この時点では利用できません。新しいワークフローは作成が完了するまで有効にできません。新しいワークフローの作成が完了した場合は、使用する前にそのワークフローを有効にする必要があります。Agile PLM クライアント・ユーザーには、次回 Agile PLM にログインした際に、新しく有効にされたワークフローが表示されます。

4. 「ワークフロー条件基準タイプ」と「ステータス条件基準タイプ」のドロップダウン・リストでは、「同一」を許可（または選択）します。

照合基準は、ルーティング可能な各オブジェクトに使用できるワークフローを検索する際に使用します。Agile PLM は、すべてのワークフローの照合基準すべてをチェックし、ルーティング可能なオブジェクトと一致するワークフローを判断します。たとえば、「すべての Taurus ECO」という名前の再利用可能な条件がワークフローの照合基準である場合、ユーザーは ECO のそのワークフローを Taurus プロジェクトから選択します。

これら 3 つの検索条件プロパティを最大限に活用するためには、様々な要素について十分考慮する必要があります。詳細は、121ページの「[再利用可能な条件で「対象アイテム」タブのフィールドを使用する](#)」を参照してください。

5. 「オブジェクト・タイプ」ドロップダウン・リストから、適切な基本クラスを選択します。
6. 「照合基準」ドロップダウン・リストで、スクロールダウンし、「すべての変更指示」を選択します。
7. 「OK」をクリックします。新しいワークフローが、「ワークフロー」ウィンドウのリストに追加されます。

新しいワークフローの設定を完了するには、「ワークフロー」ウィンドウでそのワークフローをダブルクリックし、定義済みのステータス・プロパティと検索条件プロパティを使用してステータスを作成する必要があります。

新規ワークフローのステータスを作成する手順は、次のとおりです。

1. ワークフローを開き、「ステータス」タブをクリックし、「ステータス」テーブルのすぐ上の「新規作成」をクリックします。「ワークフロー・ステータスの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 適切な名前（例では **Originate**）および API 名を入力します。
3. 「ステータス・タイプ」ドロップダウン・リストで、適切なステータス・タイプを選択します。この例では「保留中」（すべてのワークフローの最初の必須ステータス）を選択します。
4. 「ステータス・スタンプの色」ドロップダウン・リストから、該当するステータスのときに Agile PLM クライアントに表示されるステータス・スタンプのタイプの色を選択します。
5. 「OK」をクリックします。このプロセスをワークフローのすべてのステータスに対して繰り返します。

「ステータス」テーブルにスクロールすると、値を入力する必要のある 2 つのステータス・プロパティ「終了時に検索条件が適用されない場合は通知する」と「手動による次の有効なステータス」が表示されます。

検索条件プロパティを検討する前に、すべてのステータスを作成し、ステータス・プロパティを指定することをお勧めします。しかし、多数の要素を検討する必要があるため、エラーのないワークフローを作成するには、独自の方法や一貫性のある方法を構築することが最も重要です。

新しいワークフローに対する再利用可能な条件を指定する手順は、次のとおりです。

1. ワークフローを開いて「ステータス」タブをクリックし、「ステータス」テーブルでステータス（行）を選択し、次に、「条件」テーブルのすぐ上の「新規作成」ボタンをクリックします。「ワークフロー条件の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「ステータス名」フィールドはグレー表示されており、選択したステータス名が表示されています。「条件の選択」フィールドの下矢印をクリックし、このステータスに対して1つ以上の再利用可能な条件を選択します。
3. 入力完了したら、「保存」をクリックします。
このプロセスを新しいワークフローのすべてのステータスに対して繰り返します。
4. カスタム・ワークフローの作成を完了し、ルーティング可能なオブジェクトに適用できる状態にあることを検証（「ワークフローの機能をテストする」を参照）した後は、そのワークフローを有効にします。ワークフローの設定ウィンドウで、「有効」ドロップダウン・リストから「はい」を選択します。

注意 ワークフローは、新規作成時は無効になっています。カスタム・ワークフローを作成した後は忘れずに有効にしてください。

注意 新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータスの変更権限が必要です。219ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

ワークフローを有効にした後は、Agile PLM クライアント・ユーザーがクライアント・アプリケーションを再起動すると新規ワークフローが表示されます。

新規ワークフローが有効にされた場合

ワークフローが有効になると、システムでは次の項目がチェックされます。

- 最初のステータスは「保留中」ステータス・タイプである。
- 「完了」ステータス・タイプのステータスがある場合は、ワークフローの最後のステータスである（特別なステータスである「キャンセル」と「中断」を除く）。
- ワークフローの照合基準には、少なくとも1つの再利用可能な条件が含まれている。
- ワークフローの各ステータスには、そのワークフローの「条件」テーブルで最低1つの再利用可能な条件が割り当てられている。
- 「キャンセル」または「中断」ステータスがある場合は、ステータス・リストの最後に表示される。「中断」ステータスがある場合は、リストの最後のステータスである。

これらの条件がすべて満たされていない場合はエラー・メッセージが表示され、ワークフローは有効になりません。

ユーザー・グループに送信する

ユーザーは、有効な承認者とオブザーバを使用して、ユーザー・グループ（パーソナル・グループではなくグローバル・グループ）を承認者またはオブザーバとして割り当てることができます。ユーザー・グループを割り当てる管理者またはAgile Webクライアント・ユーザーは、ルーティング可能なオブジェクトをサインオフする必要があるのは1人のメンバーか、または全メンバーかを選択できます。[グループ名 - Any]または[グループ名 - All]を選択します。182ページの「[変更の承認者としてユーザー・グループを追加する](#)」を参照してください。

[グループ名 - Any]（たとえば、[製造 - Any]）がルーティング可能なオブジェクトの承認者またはオブザーバとして割り当てられている場合は、次の条件が満たされています。

- ユーザー・グループに含まれるすべてのユーザーの受信トレイにルーティング可能なオブジェクトが表示されます。
- ユーザー・グループに含まれるすべてのユーザーが電子メール通知を受信します。
- ルーティング可能なオブジェクトを承認する必要があるのは、ユーザー・グループのメンバーのうち 1 人のみです。1 人のユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認すると、ユーザー・グループのすべてのユーザーの受信トレイは更新され、該当する場合、ルーティング可能なオブジェクトは削除されます。

ルーティング可能なオブジェクトをサインオフしたユーザーは、「ワークフロー」タブにサインオフ・ユーザーとして記録されます。

[グループ名 - All] (たとえば、[製造 - All]) がルーティング可能なオブジェクトの承認者またはオブザーバとして割り当てられている場合は、次の条件が満たされています。

- ユーザー・グループに含まれるすべてのユーザーの受信トレイにルーティング可能なオブジェクトが表示されます。
- ユーザー・グループに含まれるすべてのユーザーが電子メール通知を受信します。
- ユーザー・グループのメンバーであるユーザー全員が、ルーティング可能なオブジェクトを承認する必要があります。

ステータス・プロパティの定義

このセクションでは、Agile PLM ワークフローにあるすべてのステータス・プロパティについて説明します。「ワークフロー」ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックし、次に「ステータス」タブをクリックすると、ステータス・プロパティが「ステータス」テーブルに表示されます。テーブル内のステータスをダブルクリックすると、「ワークフロー・ステータス:[ステータス名]」ダイアログ・ボックスが表示されます。

終了時に検索条件が適用されない場合は通知する

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトが現在の条件と一致しない（進行が滞っている）場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: \$CHANGEANALYST（18ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照）

このプロパティは、現在のステータスの検索条件プロパティに定義されている条件と一致しないために、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに進めない場合に、自動的に電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。昇格を許可するための条件がないためにルーティング可能なオブジェクトをワークフローの次のステータスに昇格できない場合、指定されたユーザーは自動的に電子メール通知を受け取ります。

「アドレス帳」ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー・グループ、作成者、承認者（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて）、およびオブザーバ（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて）を追加します。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

手動による次の有効なステータス

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトが次に移動できるステータスには、ステータス・リストの次のステータス以外にどんなものがありますか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: （一般的なデフォルトなし）

「選択肢」および「選択済」ダイアログを使用して、各ステータスに、ルーティング可能なオブジェクトが現在のステータスから移動できる有効な「次のステータス」をさらに定義します。ワークフロー・ステータス・リストの次のステータスは常に有効であると判断されるため、ステータスは「選択肢」リストに表示されません。（当然、現在のステータスが有効な「次のステータス」になることはありません。）「完了」はルーティング可能なオブジェクトの最後のステータスであり、「キャンセル」または「中断」はワークフローの一部ではないため、有効とはみなされません。したがって、これらのステータスについては指定する必要があります。

注意 ワークフローを「キャンセル」ステータスに移動する権限を割り当てる場合、管理者はユーザーによるエラーが発生する可能性を認識しておく必要があります。キャンセルされたワークフローを再度アクティブにする方法はないため、比較的簡単にワークフローを「キャンセル」ステータスに変更できるという事実を認識して許可する必要があります。

変更を進める際に送信スリップの内容を保存する

ユーザーがワークフローを次のステータスに手動で進めると、送信スリップが表示されます。この送信スリップには、承認者、オブザーバ、通知対象ユーザー、およびコメントを記載します。このスリップの完成には数分かかります。ユーザーが「送信」をクリックすると、Agile では、ワークフロー・ステータス自動検証が実行され、問題が見つかった場合はダイアログ・ボックスが表示されます。続行するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。以前は、「いいえ」を選択するとルーティング可能なオブジェクトに戻り、作業の内容がすべて消去されました。このリリースでは、送信スリップの内容が保存されるように修正されました。

以前および現在のCCBメンバーすべてに、ワークフロー・ステータスのコメントと通知を送信する

変更の「レビュー」または「リリース済」ステータスからコメントを送信するときに、ユーザーは、そのコメントを現在のレビュー・ステータスまたはリリース済ステータス（つまり、ワークフローの現在のステータス）のレビューアのみを送信するか、現在と以前の「レビュー」および「リリース済」ステータスのレビューアすべてに送信するかを指定できます。ドロップダウン・ボックス（「レビューアへの通知」チェック・ボックスの後）には、「現在のステータス」と「現在のステータスと前のステータス」の選択肢があります。

自動昇格

次の質問に回答します：システムはルーティング可能なオブジェクトを自動的に次のステータスに昇格しますか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）：いいえ

「自動昇格」プロパティを使用すると、ルーティング可能なオブジェクトは自動的に次のステータスに進むことができます。「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプについて、ワークフローを次のステータスに自動昇格するかどうかを指定できます。

ルーティング可能なオブジェクトが自動昇格の可能なステータスになった場合、システムはすぐにこのオブジェクトを自動昇格しようとします。承認者がおらず、必須フィールドがすべて入力されている場合、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに進みます。通常、ステータスの移行はこれよりも複雑です。たとえば、「レビュー」ステータスには通常 1 人以上の承認者が指定されており、ルーティング可能なオブジェクトを次に進めるには、現在のステータスのすべての承認者が承認する必要があります。必須フィールドによって次のステータスへの自動昇格が簡単にブロックされる場合もあります。

また、「承認者が却下した変更のステータスを変更する」スマートルールを「可」に設定し、承認者の却下がワークフローの自動昇格を停滞させないようにする必要があります。

注意	ワークフローが特定のステータスに入ったとき、自動昇格は 1 回のみ必須フィールドをチェックします。ただし、最後の必須フィールドが移入されると、この事実が登録され、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに自動昇格します。
注意	ただし、自動昇格は、承認者が承認または却下するたびにワークフローをチェックします。まだ承認や却下をしていない承認者がいる場合、ステータスは次へ進められません。最後の承認者が承認または却下したとき、自動昇格機能は前述のスマートルールに基づき評価を行い、それに応じてステータスを昇格します。

ルーティング可能なオブジェクトを承認していない承認者がいる場合でも、オーバーライド権限のあるユーザーはそのオブジェクトのステータスを手動で昇格できます。ルーティング可能なオブジェクトが、承認者や適切な権限のある他の参加者によって却下された場合、そのオブジェクトは「却下された場合はステータスを変更する」（「却下された場合はステータスを変更する」を参照）に定義されているステータスに移ります。これは、自動昇格機能が使用されているかどうかに関係なく自動的に行われます。

自動昇格機能は、オーバーライド権限と次の 2 種類のスマートルールに関連して設定する必要があります。

- 承認者が却下した変更のステータスを変更する
- オブザーバが却下した変更のステータスを変更する

注意 この2種類のスマートルールが「警告」に設定されている場合に承認者またはオブザーバがルーティング可能なオブジェクトを却下したとします。この場合、ルーティング可能なオブジェクトは自動昇格されますが、ルーティング可能なオブジェクトの「履歴」タブに警告が記録されます。

ルーティング可能なオブジェクトの入力時に、そのオブジェクトを次のステータスに自動昇格するかどうかを決定する必須フィールドを定義できます（「必須エントリ・フィールド」および「必須終了フィールド」を参照）。ステータスの必須フィールドは、次のステータスに自動昇格する前にすべて入力する必要があります。たとえば、最後のユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認し、すべての必須フィールドが入力されている場合、ルーティング可能なオブジェクトはただちに次のステータスに進みます。

注意 CTO（コンテンツ転送）のワークフローでは、「リリース済」ステータスより前にプロパティを変更しないでください。たとえば、自動昇格を「はい」に設定するとCTO出力ファイルは生成されません。

自動昇格が失敗した場合は通知する

次の質問に回答します: 自動昇格が失敗した場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: \$CHANGEANALYST（18ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照）

Agile PLM 管理者は「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプについて、自動昇格が失敗した場合に自動的に電子メールで通知を受けるユーザーを指定します。

ルーティング可能なオブジェクトがすべての承認者によって承認されると、システムはルーティング可能なオブジェクトの自動昇格を試行します。自動昇格は次の場合に失敗します。

- 入力されていない必須フィールドがある
- スマートルールの指定が異なる

ワークフローが特定のステータスに入ったとき、自動昇格は1回のみ必須フィールドをチェックします。ただし、最後の必須フィールドが移入されると、この事実が登録され、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに自動昇格します。

自動昇格に失敗すると、現在のステータスの「自動昇格が失敗した場合は通知する」に指定されているユーザーやグループには、失敗を通知する電子メールが自動的に送信されます。

同じステータスの変更内での複数回にわたる自動昇格の失敗に対処する機能

これは、自動昇格の前の失敗以降に新しい承認者が追加された場合に、変更指示が自動昇格に失敗する都度、ステータスの「自動昇格が失敗した場合は通知する」設定に指定されている担当者に通知する機能です。履歴も更新されます。新しい承認者を追加したが、ワークフローの必須フィールドがすべて完成していない場合は、自動昇格に失敗します。

「アドレス帳」ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー・グループ、作成者、承認者（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて）、およびオブザーバ（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて）を追加します。

自動昇格の失敗に関する電子メールは、そのステータスで指定されている最後の承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認した後に自動昇格が失敗した場合にのみ送信されます。システムは、自動昇格失敗の電子メール通知を1通送信します。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

アドホック承認者/オブザーバ

次の質問に回答します: 「アドホック」承認者とオブザーバは、ルーティング可能なオブジェクトがステータスに入ってから追加できますか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: はい

Agile PLM 管理者は各「レビュー」と「リリース済」のステータス・タイプについて、ルーティング可能なオブジェクトがアクティブに進行したときに承認者とオブザーバを追加できるかどうかを定義します。このプロパティが「はい」に設定されていると、承認者の追加と削除権限を持つユーザーは、「レビュー」または「リリース済」ステータス・タイプにあるルーティング可能なオブジェクトの「ワークフロー」タブで承認者とオブザーバを追加または削除できます。ユーザーは、リリース・サイクル中にアドホック承認者/オブザーバのウィンドウでも承認者とオブザーバの追加を促されます。

注意 承認者/オブザーバの削除権限を持つユーザーが、あるステータスではオブザーバを削除できても、次のステータスでは承認者とオブザーバの削除を許可されない場合、次のステータスの「アドホック承認者/オブザーバ」プロパティが「いいえ」に設定されています。

却下された場合はステータスを変更する

次の質問に回答します: ユーザーがルーティング可能なオブジェクトを却下した場合、ステータスは自動的に変更されますか。（そうである場合、適切なステータスを入力します。）

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: （なし）

Agile PLM 管理者は「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプについて、「却下された場合はステータスを変更する」を指定します。ルーティング可能なオブジェクトが承認者または適切な権限のある他の参加者によって却下された場合、そのオブジェクトは、このプロパティで設定されているステータスに進みます。

す（このステータス・プロパティはオブザーバには適用されません）。これは自動昇格機能を使用しているかどうかにかかわらず、自動的に行われます。

注意 却下された場合でもルーティング可能なオブジェクトを昇格するように、このプロパティを設定することは可能です。Agile ではルーティング可能なオブジェクトが却下された理由を調査するまでルーティング可能なオブジェクトを昇格しないことをお勧めします。このステータス・プロパティの設定が null（未設定）の場合は、ユーザーが変更を却下すると、ワークフローはデフォルトのステータス（つまり、ワークフローの次のステータス）に進みます。

却下された場合は通知する

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトが却下された場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: \$CHANGEANALYST（18ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照）

Agile PLM 管理者は「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプについて、「却下された場合は通知する」を指定します。このプロパティでは、ルーティング可能なオブジェクトが承認者またはオブザーバによって却下された場合に自動的に電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。

「アドレス帳」ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー・グループ、作成者、承認者（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて）、およびオブザーバ（ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて）を追加します。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

督促期間

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトが承認のためにルートされてから、承認者がルーティング可能なオブジェクトの承認または却下の電子メールによる催促を受けるまでにどれくらいの時間の余裕がありますか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: 48 時間

督促期間はすべてのワークフローの「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプに指定される期間です。督促期間が経過しても承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下していない場合、その承認者には催促の電子メール通知が送信されます。ルーティング管理者にも同様の電子メール通知が送信されます。この電子メールには、催促の電子メールが送信された承認者のリストが付いています。

既存の値を削除したり、フィールドを空（null）にしておくと、「保存」をクリックしたときに 0 が挿入されます。0 の値はプロパティを無効にするのと同じです。催促の通知は送信されません。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプには、それぞれに督促期間があります。督促期間は時間単位で設定し、ルーティング可能なオブジェクトが「レビュー」または「リリース済」タイプのステータスに入ったときに開始します。ワークフローに複数の「レビュー」と「リリース済」のステータス・タイプがある場合、それぞれに異なる長さの督促期間を指定できます。デフォルト・ワークフローの督促期間は常に 48 時間です。

レビュー・エスカレーション期間

次の質問に回答します: システムがルーティング可能なオブジェクトのエスカレーションを待つ時間はどれくらいですか。

一般的なデフォルト (デフォルト・ワークフローの場合): 96 時間

レビュー・エスカレーション期間はすべてのワークフローの「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプに指定される期間です。エスカレーション期間が終了し、承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下していない場合は、その承認者のエスカレーション担当者に電子メールが送信されます。ルーティング管理者にも同様の電子メールが送信されます。この電子メールでは、ルーティング可能なオブジェクトが指定されているエスカレーション担当者にエスカレーションされている旨が通知されます。通知を受けたエスカレーション担当者は、元の承認者のかわりにルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。

既存の値を削除したり、フィールドを空 (null) にしておくと、「保存」をクリックしたときに 0 が挿入されます。0 の値はプロパティを無効にするのと同じです。催促の通知は送信されません。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

「レビュー」と「リリース済」の各ステータス・タイプには、それぞれにレビュー・エスカレーション期間があります。レビュー・エスカレーション期間は時間単位で設定し、ルーティング可能なオブジェクトが「レビュー」または「リリース済」タイプのステータスに入ったときに開始します。ワークフローに複数の「レビュー」と「リリース済」のステータス・タイプがある場合、それぞれに異なる長さのレビュー・エスカレーション期間を指定できます。デフォルト・ワークフローのレビュー・エスカレーション期間は常に 96 時間です。

エスカレーションはユーザー (または、ユーザー・グループ) の順序にかかわらず、指定されているエスカレーション担当者に対して各ステータスで 1 度行われます。

指定されているエスカレーション担当者

エスカレーション担当者は、「ユーザー」基本ノードの各ユーザーに対して指定できます (「ユーザーとユーザー・グループ」を参照)。これは、特定のユーザーがルーティング可能なオブジェクトをレビュー、サインオフしていない場合に、その催促をするのに便利です。エスカレーション担当者は、「ユーザー・グループ」ノードの各グローバル・ユーザーに対して指定します。

エスカレーションの割当ては、すべて管理者ノードで行います。ユーザーやユーザー・グループに対して、複数のエスカレーション担当者を指定できます。パーソナル・グループにはエスカレーション担当者は存在しません。

レビュー・エスカレーション期間が終了した場合は、承認者のエスカレーション担当者に、承認者がルーティング可能なオブジェクトに回答していないことを通知する電子メールが送信されます。指定されているエスカレーション担当者は、元の承認者のかわりにルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。エスカレーション担当者の名前は、Agile Java クライアントで「ワークフロー」タブと「履歴」タブにサインオフ・ユーザーとして記録されます。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

ユーザーが指定したエスカレーション担当者によるルーティング可能なオブジェクトのサインオフは、いつでも可能 (= 常時) か、エスカレーション期間後にのみ (= エスカレーション後) 可能かを指定します。(170ページの「[定義済ユーザー・プロパティ](#)」を参照。) エスカレーション担当者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下するための適切な権限を持たない場合でも、通知は送信されます。たとえば、あるユーザーの管理者は、指定されているエスカレーション担当者であるが、ルーティング可能なオブジェクト承認プ

プロセスには関与していない場合、その管理者は少なくともルーティング可能なオブジェクトの中断を認識して、適切な措置を講じることが可能になります。

注意 指定されているエスカレーション担当者がグループである場合、ルーティング可能なオブジェクトをサインオフする必要があるのは、そのうちの 1 人のみです。サインオフされると、そのルーティング可能なオブジェクトはグループの他のメンバーの受信トレイには表示されません。

承認のためのコメント

次の質問に回答します: このワークフローが承認された場合、ワークフローの「レビュー」ステータスにはコメントが必要ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: 可

Agile PLM 管理者は、各「レビュー」ステータスについて、承認コメントの入力が可能、必須または禁止かを定義できます。デフォルトの「可」は、そのステータスのワークフローに対してコメントを入力できるが、入力が必須でないことを意味します。「必須」は、承認者がそのステータスのワークフローを承認する際、ワークフローを進めるためのコメントを入力する必要があることを意味します。「禁止」は、承認者がそのステータスのワークフローを承認する際、ワークフローを進めるためのコメントを入力できないことを意味します。

却下のためのコメント

次の質問に回答します: このワークフローが却下された場合、ワークフローの「レビュー」ステータスにはコメントが必要ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: 可

Agile PLM 管理者は、各「レビュー」ステータスについて、却下コメントの入力が可能、必須または禁止かを定義できます。デフォルトの「可」は、ワークフローに対して却下のコメントを入力できるが、入力が必須でないことを意味します。「必須」は、承認者がそのステータスのワークフローを却下する際、ワークフローに対してコメントを入力する必要があることを意味します。「禁止」は、承認者がそのステータスのワークフローを却下する際、ワークフローに対してコメントを入力できないことを意味します。

検索条件プロパティの定義

このセクションでは、Agile PLM ワークフローにあるすべての検索条件プロパティについて説明します。「ワークフロー」ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックし、次に「ステータス」タブをクリックすると、検索条件プロパティが「条件」テーブルに表示されます。最初に「ステータス」テーブルでステータス（行）を選択すると、そのステータスが「条件」テーブルに表示されます。「条件」テーブルで行をダブルクリックすると、「ワークフロー条件: [条件名]」ダイアログ・ボックスが表示されます。

承認者とオブザーバ

次の質問に回答します: このステータスのルーティング可能なオブジェクトを承認/却下または検証するユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: (なし)

Agile PLM 管理者は、ルーティング可能なオブジェクトが「レビュー」または「リリース済」のステータス・タイプに入ったときに自動的に選択されて電子メール通知を受け取るデフォルトの承認者またはオブザーバを指定します。デフォルトの承認者とオブザーバは、ルーティング可能なオブジェクトが「レビュー」または「リ

リース済」のステータス・タイプに入ったときに、ワークフローの属性値と照合基準に基づいて割り当てられます。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「通知」を参照してください。

条件使用状況

次の質問に回答します: ステータスの検索条件プロパティとは何ですか。

一般的なデフォルト (デフォルト・ワークフローの場合): デフォルトの変更指示ワークフローを使用するすべての変更指示

条件とは、特定のステータスにおける再利用可能な条件の動作を指定する条件のことです。各ステータスには、検索条件プロパティで最低 1 つの再利用可能な条件が指定されている必要があります。

ルーティング可能なオブジェクトが特定のステータスを終了する前に条件が確認されます。条件は、どの検索条件プロパティが適用されるかも定義します。複数の検索条件プロパティを 1 つのルーティング可能なオブジェクトに適用することも可能です。

条件は包括的な概念です。詳細は、次を参照してください。

- 117ページの「[条件](#)」
- 228ページの「[権限マスクの構成要素 3: 条件](#)」
- 「詳細検索」プロセスの使用法の詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』の Agile データの検索に関する項を参照してください。この「詳細検索」プロセスは「条件の作成」プロセスに類似しています。

デフォルトの変更分析者/コンポーネント・エンジニア

次の質問に回答します: このルーティング可能なオブジェクトのデフォルトのルーティング管理者はどのようなユーザーである必要がありますか。(18ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照)

一般的なデフォルト (デフォルト・ワークフローの場合): デフォルトのルーティング管理者は選択できます(「保留中」ステータスのみ)。

各ワークフローには異なるデフォルトのルーティング管理者(MCO の場合はコンポーネント・エンジニア、PCO の場合は価格管理者、その他の変更については変更分析者など)を指定できます。「保留中」ステータスの検索条件プロパティでは、各条件に対して、異なるデフォルトの変更分析者を選択できます。デフォルトの変更分析者がいない場合には、それを入力できます。Agile Java クライアントで「**変更分析者**」フィールドが空白になっている場合は、管理者が「\$CHANGEANALYST (または\$COMPONENTENGINEER)」を指定すると、すべての変更分析者に通知が送信されます。

ユーザーに適切な権限がある場合、「**変更分析者**」フィールドを編集できますが、ルーティング可能なオブジェクトが「保留中」から次のステータスに移動するまでは新しい変更分析者は適用されません。ユーザーが変更分析者を選択しても、ワークフローが異なるデフォルトの変更分析者で設定されている場合、ユーザーは警告を受けます。

複数の変更分析者を指定した場合(ルーティング可能なオブジェクトが変更分析者についての複数の条件と一致する)、ユーザーはルーティング可能なオブジェクトが「保留中」から次のステータスに移動したときに警告を受けます。ユーザーには、変更分析者のリストを示したダイアログ・ボックスが表示され、そのワークフローの変更分析者を選択するよう促されます。

承認者とオブザーバの追加の詳細は、122ページの「[対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する](#)」を参照してください。

当該ステータスになり次第通知する

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトが新しいステータスに入ったことを確認する必要がありますのはどのユーザーですか。

一般的なデフォルト (デフォルト・ワークフローの場合): (なし)

「当該ステータスになり次第通知する」プロパティには、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに入ったときに電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。

「アドレス帳」ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー・グループ、変更分析者、作成者、承認者 (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて)、およびオブザーバ (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて) を追加します。

注意 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。277ページの「[通知](#)」を参照してください。

ルーティング可能なオブジェクトがリリースされたことを示す電子メール通知を変更分析者が受け取るかどうかを設定できます。また、「当該ステータスになり次第通知する」プロパティは、手動によるステータス移行に使用するダイアログ・ボックスの「通知」のデフォルトの設定にも使用されます。通知を受けるユーザー (たとえば、作成者、承認者、オブザーバ、変更分析者) を指定できます。

注意 ユーザーにルーティング可能なオブジェクトの「**変更分析者**」フィールドに対するフィールドレベルでの読取り権限がなく、「当該ステータスになり次第通知する」リストにデフォルトの変更分析者が指定されている場合は、「ステータスの変更」ダイアログ・ボックスの「**通知**」フィールドに「権限なし」と表示されます。「権限なし」の場合、有効なユーザーとは認識されないため、エラー・メッセージが表示されます。

リリース検証を実行する

次の質問に回答します: 次のステータスに移動する前にすべてのリリース検証 (スマートルール、必須フィールド) が実行される必要がありますか。

一般的なデフォルト (デフォルト・ワークフローの場合): いいえ

「リリース検証を実行する」の影響を受ける、ユーザーが使用できる検証: ステータス検証とリリース検証

ステータス検証の場合: ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに進めることはできますか。

リリース検証の場合: ステータスの条件はルーティング可能なオブジェクトのリリースをサポートしていますか。

Agile PLM では、ルーティング可能なオブジェクトが最初の「リリース済」ステータス・タイプに昇格すると、自動的に完全なリリース検証が行われます。

Agile PLM クライアント・ユーザーは、「ステータスの検証」ボタンまたは「リリースの検証」ボタン (またはメニュー項目) を使用して、いつでもステータスまたはリリースの検証を行うことができます。詳細は、「検証の 2 つのレベル」を参照してください。

管理者は、「保留中」、「提出」、または「レビュー」の各ステータスで、ルーティング可能なオブジェクトの検証を行うかどうかにかかわらず、現在のステータスから先に進めるかどうかを次のように指定します。

- **はい** - リリース検証が行われますが、必須フィールドが入力されておらず、リリース・チェックとスマートルールの条件が一致しない場合、ルーティング可能なオブジェクトは先に進みません (「リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証」を参照)。
- **いいえ** - ルーティング可能なオブジェクトは検証されずに先に進みます。
- **警告** - ステータスの検証中に、この検証の後にリリース検証を続けるか (「OK」をクリックしてリリース検証を実行するか)、続けないか (「キャンセル」でリリース検証を省略するか) を選択するプロンプトが表示されます。

このプロンプトでは、エラーまたは警告が発生する可能性があります。エラーが当然と思われる状態で警告が表示されるという状態があります。ユーザーにオーバーライド権限がなく、「リリース検証を実行する」が「警告」または「いいえ」の場合、ステータス検証では、警告ではなくエラー（ユーザーが条件を修正する必要があることを意味する）が発生します。

注意 「リリース検証を実行する」を「はい」に設定すると、現在のステータスの条件でルーティング可能なオブジェクトをリリースできるかどうかを検証されますが、検証は累積プロセスではないため、以前または今後のステータスの必須フィールドは考慮されません。

「リリース済」ステータスで自動リリース検証を使用する場合も、前の段階で検証を設定しておく（特定のステータスの「リリース検証を実行する」を「はい」に設定する）、「リリース済」ステータスで検証に失敗したとしても、ルーティング可能なオブジェクトを先に進めることができます。この状況は、「保留中」ステータスでルーティング可能なオブジェクトをレビューした作成者、または「提出」ステータスでルーティング可能なオブジェクトをレビューしたルーティング管理者など、関係する情報を持つユーザーが情報を入力するステータスを通してしまった場合に起こります。リリース検証によって、ステータスに足りない情報があることが検出され、その情報を持つユーザーが情報を入力できます。

たとえば、ECO でリリース検証を実行してリビジョン番号がすでに存在するかどうかをチェックするとします。「保留中」ステータスで、「リリース検証を実行する」を「はい」に設定すると、作成者は正しいリビジョン番号を入力することを求められます。

221ページの「[オーバーライド](#)」に記載されているこのプロパティに関する注意を参照してください。

検証の2つのレベル

ユーザーが使用できる検証には、ステータス検証とリリース検証の2つのレベルがあります。次にこの2つのレベルについて説明します。リリース検証には必ずステータス検証が含まれます。

ルーティング可能なオブジェクトの検証には権限は必要ありません。検証の結果は、クリップボードにコピーし、新しいドキュメントに貼り付けて、印刷できます。

ステータス検証、または進行の条件に対する現在のステータスの検証

ステータス検証は、「進行するための適切な条件について、現在のステータスを検証すること」と考えることができます。

ステータス検証は、ユーザーがステータスの変更機能を使用する場合、またはワークフローによる次のステータスへの自動昇格が試みられた場合に自動的に実行されます。ステータス検証は、「**ステータスの検証**」ボタンまたはメニューの選択肢を使用して、いつでも実行できます。確認項目は次のとおりです。

- 現在のステータスの「必須終了フィールド」が入力されていることが確認されます。
- 現在のステータスが「レビュー」または「リリース済」のステータス・タイプである場合は、すべての承認者によって承認されていることが確認されます。
- 現在のステータスに対する「リリース検証を実行する」プロパティのワークフロー設定が確認されます。「リリース検証を実行する」が「はい」または「警告」に設定されている場合、Agile PLM では、リリース検証も実行されます。

リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証

リリース検証は、「ルーティング可能なオブジェクトをリリースするための適切な条件について、現在のステータスを検証すること」と考えることができます。

Agile PLM では、ワークフロー内でルーティング可能なオブジェクトが最初の「リリース済」タイプのステータスに昇格すると、リリース検証が自動的に実行されます。リリース検証は、「**リリースの検証**」ボタンまたはメニューの選択肢を使用して、いつでも実行できます。

リリース検証では、現在のステータスおよびリリース・ステータスの両方に対してステータス検証が実行されます。

追加の確認項目は次のとおりです。

- ECO（設計変更指示）の場合、「**対象アイテム**」タブの提案された新規リビジョン番号がすでに存在するかどうか
- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、PCO（価格変更）、および MCO（製造元変更）の場合、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後に失われた製造元のレッドラインがあるかどうか
- ECO（設計変更指示）と SCO（拠点毎変更）の場合、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後に失われた BOM のレッドラインがあるかどうか
- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、PCO（価格変更）、および MCO（製造元変更）の場合、別の ECO、SCO または MCO が先にリリースされたことにより競合が発生しているかどうか
- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、および MCO（製造元変更）では、「BOM 多段階重複」スマートルールが「不可」に設定されている場合は、重複した BOM 構造（つまり、あるサブアセンブリに、そのサブアセンブリ自体の BOM ツリー構造の上位レベルから、そのサブアセンブリの親アイテムのいずれかが含まれているかどうか）がチェックされます。（論理的に帰結する場合、重複した BOM 構造は無限に繰り返されることになります。）

BOM ツリーは上から下に評価されます。リリースの検証のエラー・メッセージには、BOM が重複している対象アイテムごとに、BOM ツリーで最初に検出されたアイテムが表示されます。このアイテムの第 1 レベルの BOM テーブルには、ツリー内でより高いレベルに表示されるアイテムが含まれているため、重複した BOM 構造の原因となっています。対象アイテムの BOM ツリーには、重複した BOM 構造のインスタンスが複数存在している可能性があります。検証結果に表示されるのは、最初に検出されたインスタンスのみです。

- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、および PCO（価格変更）の場合は、スマートルールの設定に従って、変更のリベースによって発生したアイテムの重複、見出し番号の重複、および参照指示の重複がチェックされます。（同じアイテムについて保留中の変更が複数ある場合は、1 つの変更がリリースされるときに、残りの保留中の変更がリリースされた最新の変更でリベースされます。）
- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、および MCO（製造元変更）の場合は、アイテムに対する同じ製造元部品の重複がチェックされます。（MultipleItemsPerManufPart は「警告」または「不可」に設定されます。）

（アイテムに対する同じ製造元部品の重複は、そのアイテムに同じ製造元部品を関連付ける複数の保留中の変更があり、その変更の 1 つがリリースされたときに発生します。残りの保留中の変更は、リリースされた最新の変更でリベースされます。これで、残りの保留中の変更には、リリースされたアイテムの製造元テーブルにすでに存在している製造元部品を追加するために、製造元部品のレッドライン変更が残ります。）

- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、および MCO（製造元変更）の場合は、複数のアイテムに対する同じ製造元部品の使用についてチェックされます。（MultipleItemsPerManufPart は「警告」または「不可」に設定されます。）
- （複数のアイテムに対する同じ製造元部品の重複は、複数の変更によって（レッドライン追加またはレッドライン置換で）同じ製造元部品が 2 つ以上のアイテムの製造元テーブルに追加される場合に発生します。いずれかの変更がリリースされると、製造元部品の「使用箇所」テーブルが、新たにリリースされたアイテムを参照するようにリベースされます。これで、残りの保留中の変更には、複数のアイテムで単一の製造元部品を使用できるように、製造元部品のレッドライン変更が残ります。）
- ECO（設計変更指示）、SCO（拠点毎変更）、および PCO（価格変更）の場合は、「アイテムを先にリリース」スマートルールが「不可」または「警告」に設定されている場合に、子コンポーネントがリリースされているかどうかを確認するために、ルーティング可能なオブジェクトがチェックされます。

- チェックアウトされたままのルーティング可能なオブジェクトの添付ファイルがあるかどうかチェックされます。
- 対象アイテムの場合、チェックアウトされたままの添付ファイルがあるかどうか
- 有効日の順序スマートルールと有効期間の間隔スマートルールの設定
- 「対象アイテム」タブのアイテムに、別の保留中のルーティング可能なオブジェクトがあるかどうか
- ECO（設計変更指示）については、対象アイテムの「拠点」タブの「内製/購入」設定と、拠点の「拠点 AML の許可」および「購入に AML が必須」設定が検証されます。詳細は、『Product Collaboration ユーザー・ガイド』を参照してください。

必須終了フィールド

次の質問に回答します: ルーティング可能なオブジェクトや対象アイテムの必須フィールドとは何ですか。
一般的なデフォルト（デフォルト・ワークフローの場合）: （なし）

「必須終了フィールド」とは、ルーティング可能なオブジェクトがそのステータスに進む前に「保留中」、「提出」、「レビュー」、「リリース済」、「完了」ステータス・タイプについて入力する必要がある属性やフィールドです。

必須フィールドには、編集できないフィールドやデフォルトのフィールドがあります。

注意 必須フィールドは、ステータス検証やリリース検証の主要な対象です（「リリース検証を実行する」を参照してください）。デフォルトのワークフローでは、必須フィールドは「レビュー」ステータス・タイプに多くみられます。しかし、カスタム・ワークフローでは他のステータスにも必須フィールドを使用できます。これによりユーザーは、特定の必須フィールドの検証が実行されていることを確認できます。これにより、最初の「リリース済」ステータスで多くの必須フィールドを含む検証の実行を回避できます。

221ページの「[オーバーライド](#)」に記載されているこのプロパティに関する注意を参照してください。

ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに移動するまでに必須終了フィールドに入力がなかった場合は、必須フィールドを示したダイアログ・ボックスが表示されます。

ユーザーに必須フィールドを変更する権限がない場合、適切な権限を持つユーザーが変更を行うまで、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに進みません。

「対象アイテム」フィールドに対して記述される条件の場合、必須フィールドは、一致した条件に基づいて、対象アイテムごとに独立して計算されます。

ワークフローの機能をテストする

ワークフローを使用する前に十分にテストすることをお勧めします。システムの規模によっては、ユーザーの実働環境でもテストを安全に実行できる場合があります。

ワークフローの検証分野

このセクションでは実働環境の内外で確認する必要のあるワークフローのいくつかの側面について簡単に説明します。機能をテストし、ワークフローが変更のプロセスをどのようにサポートするかを理解すると、ワーク

フローを修正する必要がある生じてくることがあります。

ワークフローの機能をテストする場合は、次の項目を確認する必要があります。

- ワークフローと各ステータスに適用される再利用可能な条件
- 各ステータスに対する「手動による次の有効なステータス」の設定
- 各ステータスのステータス・プロパティ
- 各ステータスの検索条件プロパティ
- ワークフローの照合基準と各ステータスの照合基準プロパティでの照合基準タイプ
- すべての必須エントリ・フィールドと必須終了フィールド
- 自動昇格
- すべての通知と承認
- 催促とエスカレーション期間
- スマートルール
- 各役割の権限

テスト時のヒント

- ワークフローをAgile PLMクライアントで使用するには、その前に、ワークフローを有効にする必要があります（143ページの「[ステータス・プロパティの定義](#)」を参照してください）。
- デフォルトのワークフローの修正ではなく、新規のワークフローをテストする場合は、基本的なステータスの変更権限を作成する必要があります。これによって、ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動できます（219ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください）。新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータスの変更権限が必要です。
- ワークフローを有効にした後は、設定の変更が制限されます（「有効なワークフローのプロパティを変更する」を参照してください）。
- より広範な変更を行うには、ワークフローを無効にする必要があります（「ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする」を参照してください）。
- また、ワークフローを無効にしても、ルーティング可能なオブジェクトがワークフローにある場合は、ステータス・リストのステータスの削除や追加など、実行できない変更もあります（「ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できない変更」を参照してください）。テスト対象のワークフローの「名前を付けて保存」を使用して、無効なワークフローを新規に作成すると、より広範な変更を行うことができます。

Agile PLM ワークフローが正しく設定されているかどうかを確認するための機能テストに加え、ビジネス・プロセスと、データ移行システムを確認することをお勧めします。コンサルティング・サービスは、オラクル社コンサルティングの Agile 担当のコンサルタントが担当しています。このサービスは、ビジネス・プロセスとデータ移行の検証プランの作成についてガイダンスと支援を提供します。ビジネス・プロセスの検証では、作成したワークフローを使用して実際の状況を想定したり、一般的な使用例をシミュレートしたりすることなどが可能です。こうした作業は、ワークフローの設定を改良および確認し、変更プロセスを Agile PLM の一環として保管することによって今後の資料やトレーニングの材料として活用できるようにします。

ワークフローを実働環境に適用する

現在 Agile PLM の実装の初期段階にある場合、実働環境は 1 つであり、Agile PLM の最初の設定を適用することは、実働カットオーバー・プロセスに通常組み込まれているものであるため、このセクションは重要ではありません。

ワークフローの適用に関するヒント

ワークフローの適用に関するヒント

- 「ワークフロー」ウィンドウでは、「エクスポート」と「すべてエクスポート」を使用してワークフローをエクスポートし、「インポート」を使用してワークフローをテスト環境から実働環境に移行します。これによって、手動による手順の数を大幅に減らすことができます（28ページの「[管理者設定のインポートとエクスポート](#)」を参照してください）。

ワークフローの適用プロセス

ワークフローの設定を確認した後、ワークフローを実働環境の Agile PLM システムで実装します。次に、ワークフローの適用に関する一般的なプロセスについて段階を追って説明します。

1. テスト環境におけるワークフローの設定の確認を完了します。
2. 次の管理者レポートを作成し、結果をローカル・ドライブに保存します。必要に応じて、他のレポートを実行します。
 - Agile クラス・レポート
 - ワークフロー設定レポート
 - 検索条件ライブラリ設定レポート
 - ユーザー設定レポート
 - ユーザー・グループ設定レポート
 - スマートルール設定レポート
3. ワークフローの設定が正しく記録されていることを確認します。

アクティブなワークフローを変更する

有効になっているワークフローを変更する必要がある場合があります。このセクションでは、その状況と選択できるオプションを説明します。

注意	ルーティング可能なオブジェクトに割り当てられているワークフローは、割当てが取り下げられ、そのワークフローが他のルーティング可能なオブジェクトに割り当てられていない場合でも、削除できません。不要なワークフローは無効にするか、再利用できるように変更することをお勧めします。
-----------	--

有効なワークフローのプロパティを変更する

有効になっており、Agile PLM ユーザーが表示できるワークフローは、進行中のルーティング可能なオブジェクトの有無にかかわらず、変更できます。ワークフローがすでに使用されている場合（ルーティング可能なオブジェクトがワークフローに割り当てられている）、ステータスの追加はできませんが、次に説明されているように、その他の変更は可能です。

注意 有効なワークフローにステータスを追加する場合は、Agile PLM システムで適切な権限や各役割のステータスの変更権限を変更する必要があります。

注意 有効なワークフローにステータスを追加しようとする、そのワークフローの「有効」プロパティは自動的に「いいえ」に設定されます。

ワークフローを無効にする、変更する、再度有効にする場合

ワークフローに適用されているルーティング可能なオブジェクトがない場合、ワークフローを無効にする、変更する、再度有効にすることは問題なく実行できます。（その場合、作業の重複を防ぐため、新しいルーティング可能なオブジェクトを構築している、またはこれから作成しようとしている可能性のあるユーザーに電子メールで通知することをお勧めします。）

ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できる変更

ワークフローが有効になっており、ルーティング可能なオブジェクトがアクティブに進行している場合でも、様々のプロパティを変更できます。次の表で、これらのプロパティについて説明します。プロパティの設定を変更するには、ワークフローを無効化する必要があります。また、変更分析者または承認者は、無効化されている際にルーティング可能なオブジェクトの処理に対して反応することが望ましい場合があります。

ワークフローを無効化する場合は、次のアクションをお勧めします。

- ワークフローが無効化されることを必要なユーザーに通知する。
- ワークフローが有効化された後、すぐに影響を受けたユーザーに再通知する。

ワークフローのプロパティ	各ステータスのステータス・プロパティ	各ステータスの検索条件プロパティ
ワークフロー名	アドホック承認者/オブザーバ 自動昇格 自動昇格が失敗した場合は通知する 終了時に検索条件が適用されない場合は通知する 却下された場合は通知する 却下された場合はステータスを変更する 手動による次の有効なステータス 督促期間 レビュー・エスカレーション期間	承認者 デフォルトの変更分析者/ コンポーネント・エンジニア 当該ステータスになり次第通知する オブザーバ リリース検証を実行する 必須フィールド

ワークフローの プロパティ	各ステータスのステータス・ プロパティ	各ステータスの検索条件 プロパティ
ステータスのプロパティ		
ステータス名		
検索条件プロパティ	ステータスに新しい検索条件プロパティを追加できます。	
注意: 変更された設定によっては、すでにそのステータスにある場合、進行中のルーティング可能なオブジェクトで新しい設定を使用できないことがあります。たとえば、「当該ステータスになり次第通知する」の設定を変更しても、変更されたステータスにすでに存在しているルーティング可能なオブジェクトについて通知は送信されません。		

ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できない変更

デフォルトまたは新規のワークフローでルーティング可能なオブジェクトが作成され、ステータス間の移行が1度でも行われている場合、次の項目を実行できません。

- ワークフローにステータスを追加または削除できません。
- ワークフローのステータスの順序は変更できません。

アクティブなワークフローに、変更が必要な要素がある場合は、「ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする」を参照してください。

ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする

ワークフローのプロセスや多くの要素を完全に設定している場合でも、アクティブなワークフロー（複数のルーティング可能なオブジェクトが適用されて進行中）は必ず修正が必要になるものです。

注意 有効なワークフローに対する変更は、管理者の様々なノードで、検出、調査、修正の必要のある状況を生み出す可能性があります。特に、ワークフロー・ステータスに対する変更は、転送 (Agile Content Serviceユーザー・ガイドを参照) とプロセス拡張 (103ページの「[プロセス拡張](#)」を参照) にも関連しています。アクティブなワークフローを修正する手順は、次のとおりです。

1. このワークフローを使用しているアクティブなルーティング可能なオブジェクトを「保留中」ステータス・タイプにします。

注意 この手順は必須ではありません。小規模な変更の場合は不要な場合もあります（「有効なワークフローのプロパティを変更する」を参照してください）。この注意事項は、変更にかかる時間がかかる場合や、多くのオブジェクトやユーザーが影響を受ける場合に有効です。

2. ワークフローを無効にします。
3. 「名前を付けて保存」を使用して、ワークフローの名前を変更します (133ページの「[名前を付けて保存で新規ワークフローを作成する](#)」を参照してください)。
4. 古いワークフローが異なる目的で使用可能な場合には、古いワークフローの名前を変更します。

5. 新しいワークフローを修正します。
6. 問題が解決されたと判断した場合、ワークフローを有効にします。
7. ルーティング可能なオブジェクトを古いワークフローから新しいワークフローに適用します。

アカウント規約

この章のトピック

- 作業を開始する前に 161
- アカウント規約を設定する 161

Agile PLM へのアクセスに高度なレベルのセキュリティを確保するため、システム全体のユーザー・アカウント規約を設定できます。この規約の機能には、パスワードの有効期限、長さ、固有性、ロックアウトなどがあります。

作業を開始する前に


Agile PLM でシステム全体のユーザー・アカウント規約を設定する前に、次の質問に答えてください。

- LDAPシステムを使用してAgile PLMユーザーを作成するか。LDAPサーバーで「**アカウント規約**」機能を設定できます。169ページの「[管理者のノードとしてのLDAP](#)」を参照してください。
- ユーザー・パスワードの有効期限を設定するかどうか。設定する場合、期間（日数）はどの程度にするか。
- ユーザーがパスワードをいつでも変更できるようにするかどうか。そうしない場合、変更の間隔をどの程度（日数）にするか。
- 許可される最低文字数を何文字にするか。
- 同じパスワードを再使用できないようにするかどうか。再使用できないようにする場合、古いパスワードをいくつまでシステムで管理するか。
- システムへの無許可のログインをシステム全体のロックアウト規約で防止するかどうか。
- ユーザーがロックアウトされた場合に、自分または他のユーザーが通知を受けるかどうか。

アカウント規約を設定する

システム全体のアカウント規約を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「アカウント規約」をダブルクリックします。「アカウント規約」ウィンドウが表示されます。
2. 次の表で説明されているプロパティを設定し、システム全体のアカウント規約を設定します。

プロパティ	説明
アカウント・ロックアウト	システムが失敗したログオンを記憶するかどうかを管理します。このプロパティを「無効」に設定すると、システムは失敗したログオンを記憶せず、「ログオン試行」、「リセット回数時間」、「ロックアウト期間」、および「アカウント・ロックアウト通知ユーザー」プロパティは使用されません。「アカウント・ロックアウト」が「有効」に設定されていると、これらのプロパティは有効となります。
ログオン試行	「アカウント・ロックアウト」が「有効」に設定されている場合に有効になります。 1~999,999,999 の値を入力します。デフォルトでは3回に指定されています。3回目に失敗すると、そのユーザー・アカウントはロックアウトされます。
リセット回数時間 (分)	<p>「アカウント・ロックアウト」が「有効」に設定されている場合に有効になります。1~999,999,999の値を入力します。デフォルトは30分です。30分を経過すると、そのユーザー・アカウントは「ログオン試行」に設定されている許容試行回数に戻ります。</p> <p>注意 ロックアウトされているユーザーで、ロックアウト期間の値がリセット回数時間より長く設定されているユーザーは、リセット回数時間が経過しても引き続きロックアウトされます。他のユーザーは、リセット回数時間が経過するとログオンできます。</p>
ロックアウト期間 (分)	「アカウント・ロックアウト」が「有効」に設定されている場合に有効になります。 1 ~ 999,999,999 の値を入力します。デフォルトは0です。これは、管理者がユーザー・アカウントをリセットするまで、ユーザーがロックアウトされることを意味します。ロックアウト期間とリセット回数時間は、常に両方が使用されるわけではありません。これは、ユーザーがロックアウトされると、これら2つのプロパティのいずれか高いほうの値の期限が切れるまで待機する必要があることを意味します。
パスワード最大有効期間 (日数)	パスワードの有効期間を制限する日数を入力します。デフォルトは0です。
パスワード最短長	この値は、ユーザー・パスワードの最短文字数を設定します。デフォルトは1です。
パスワードの固有性	<p>値0 (デフォルト) は、パスワードを変更する際に、以前使用されたことのあるパスワードの再利用を許可します。同じパスワードの再利用を禁止するには、数値を入力します。この数値は、システムが各ユーザーに対して記憶できるパスワードの数で、再利用を禁止します。</p> <p>たとえば、この値を3に設定すると、ユーザーは4回目のパスワードを設定するときまで、最初のパスワードを再利用できません。ただし、5回目にパスワードを設定するとき、ユーザーは最初のパスワードを使用できるようになります。これは、システムが2つ目、3つ目、4つ目のパスワードを記憶したために、1つ目の記録が消されたためです。</p>
アカウント・ロックアウト通知ユーザー	<p>「アカウント・ロックアウト」が「有効」に設定されている場合に有効になります。ロックアウトされているユーザーが電子メール通知を受信できるようにするには、右側の  ボタンをクリックしてアドレス帳を表示し、通知対象となるユーザーを選択します (複数選択可)。</p> <p>アドレス帳の「ユーザー・グループ」タブでユーザー・グループを選択すると、グループのすべてのメンバーを追加するボタンのみが有効となります。ただし、グループのすべてのメンバーを追加した後に、受信者リストから個別ユーザーを削除できます。</p>

注意 アカウントのロックアウト・ルールは、Agile PLM クライアント（Java クライアント、Web クライアント、ChangeCAST、AIS、ACP、Agile ドライブ、および SDK）に適用されます。

ロックアウトされたアカウントの管理者リセット

「**ログオン試行**」の許容回数を超えて間違ったパスワードを入力したために、ユーザーがアカウントからロックアウトされ、「**リセット回数時間**」に高い値が設定されている場合は、そのユーザーのログイン・パスワードをリセットしてください。この操作によって、ユーザーのロックアウト・ステータスがリセットされ、再びシステムにアクセスできるようになります。

注意 パスワードに関する追加設定（Webクライアント・ユーザー）は、「**プリファレンス**」ノードにあります。381ページの「[パスワードのリセット許可](#)」を参照してください。

ユーザー

この章のトピック

■ 新規ユーザーを追加する	165
■ ユーザー名について	167
■ パスワードについて	167
■ 管理者のノードとしてのLDAP	169
■ ユーザー・プロパティを変更する	169
■ 定義済ユーザー・プロパティ	170

「ユーザー」ノードでは、新規ユーザーに Agile PLM へのアクセス権を付与したり、既存のユーザーのプロパティを変更（ユーザー・グループ、役割、エスカレーション承認設定の変更など）できます。

「ユーザー」ノードでは、Agile PLM の次の側面を表示し、設定できます。

- 新規ユーザーの追加
- ライセンス、役割、拠点、パスワードなどの、ユーザーのプロパティの変更
- ユーザーの無効化または削除

ユーザーの追加プロセスでは、Agile PLM アプリケーションへのアクセスを管理するプロパティを確立する必要があります。たとえば、パスワードによりログインが許可され、役割の割当てによりディスカバリ・ポイント以降の Agile PLM オブジェクトへのアクセスが確立されます。したがって、ユーザーがどのようなアクセスや許可を必要としているかを考慮することが重要です。

重要 使用するPLMシステムとシングル・サインオン（SSO）機能を統合することも可能です。PLMシステムに対してSSOを設定して配置すると、そのシステムにサインイン（たとえば、企業ポータル経由でサインイン）したユーザーには、ログイン・ダイアログが再表示されません（417ページの「[付録A「シングル・サインオンの設定」](#)」を参照してください）。

注意 サプライヤ・ユーザーは、サプライヤに関連付けられている特殊なユーザーです。サプライヤ・ユーザー（つまり、コンタクト・ユーザー）を作成できるのは、管理者ではなく特定のマネージャ役割を持つユーザーです。管理者は、Agile PLM ユーザーに対して「組織マネージャ」または「適合性管理者」の役割を割り当て、このユーザーがサプライヤを作成し、制限された役割を介して RFQ または RFI に回答できるコンタクト・ユーザーをそのサプライヤに移入します。詳細は、『Product Cost Management ユーザー・ガイド』および『Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』を参照してください。

新規ユーザーを追加する

新規ユーザーに関する情報を集めてそのアクセス要件を評価した後は、その新規ユーザーを Agile PLM システムに追加できます。

LDAPシステムで作成されたユーザーは、Agile PLMにインポートし、「更新」ボタンを使用してAgile PLMデータベースで同期化する必要があります。169ページの「[管理者のノードとしてのLDAP](#)」を参照してください。

作業を開始する前に

新規 Agile PLM ユーザーを作成する前に、次の質問に答えてください。

- このユーザーは Agile PLM でどのようなことを実行する必要があるか。そのユーザーに必要なデフォルトの役割は何か。
- このユーザーが Agile PLM で禁止されていることは何か。
- このユーザーはログイン・パスワードと承認用パスワードを別にする必要があるか。
- ユーザー名は、どの Agile PLM リストに表示されるか。
- ユーザーはどの Agile PLM 検索を使用できるか。
- ユーザーは「パワー・ユーザー」かどうか。「パワー・ユーザー」は随時ログインでき、現在のユーザー・プールのメンバーとしてカウントされません。

Javaクライアントで新規ユーザーを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「ユーザー作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「ユーザーID」、「名」、「姓」、および「電子メール」の値を入力します。
4. 「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。「ログイン・パスワードの再入力」のフィールドでパスワードを再入力します。

注意 パスワードでは大文字と小文字が区別されます。たとえば、ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインする場合には常にパスワードを大文字で入力する必要があります。


5. 別の承認用パスワードが必要な場合は、「承認にログイン・パスワードを使用」の選択を解除し、「承認用パスワード」および「承認用パスワードの確認」フィールドに承認用パスワード（新規ユーザーの承認用パスワード）を入力します。
6. 「OK」をクリックします。新規ユーザーの設定ウィンドウが表示されます。
7. 「プロフィール」の下にある「役割」リストをクリックし、ユーザーに役割を割り当てます。ユーザーは役割を割り当てられるまでは、Agile PLM で何も操作を行うことはできません。
8. 「プロフィール」セクションで、必要に応じてその他の値を入力します。これらのフィールドは必須ではなく、後から入力することもできます。
9. 「プリファレンス」タブで、プロパティの値を入力します。通常は、デフォルトの値を使用します。
10. 「保存」をクリックします。

Webクライアントで新規ユーザーを作成する手順は、次のとおりです。

1. 左側のナビゲーション・ウィンドウで、「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー」の順に選択します。
2. 「追加」をクリックします。「新規ユーザーの作成」ウィンドウが開きます。

3. 「ユーザー名」と「ログイン・パスワード」を入力します。「ログイン・パスワードの確認」フィールドでパスワードを再入力します。

注意 パスワードでは大文字と小文字が区別されます。たとえば、ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインする場合には常にパスワードを大文字で入力する必要があります。

4. 別の承認用パスワードが必要な場合は、「承認にログイン・パスワードを使用」の選択を解除し、「承認用パスワード」（新規ユーザーの承認用パスワード）および「承認用パスワードの確認」を入力します。
5. 「名」、「姓」、および「電子メール」の値を入力します。
6. 「保存」をクリックします。新規に作成したユーザーの「一般情報」ページが表示され、編集可能になります。
7. 「役割」リストを開くには、フィールドの右側にある「パレットの起動」をクリックします。ユーザーに役割を割り当てます。ユーザーは役割を割り当てられるまでは、Agile PLM で何も操作を行うことはできません。
8. 「プロフィール」セクションで、必要に応じてその他の値を入力します。これらのフィールドは必須ではなく、後から入力することもできます。「保存」をクリックします。
9. 新規ユーザーのプロパティの追加を確認してレビューするには、「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー」の順にクリックします。ユーザーのテーブルで新規ユーザーID をダブルクリックします。新規ユーザーのページが表示されます。

ユーザー名について

安全上の理由から、Agile PLM のユーザー名は固有のものである必要があります。ユーザー名が固有であるかぎり、同じ名前（氏名）の複数のユーザーを作成できます。

削除されたユーザーと同じユーザー名のユーザー（アクティブまたはアクティブでない）が存在し、削除済のユーザーの削除が取り消された場合には、削除済のユーザーのユーザー名を変更して固有の名前にする必要があります。その削除取消ユーザーに対する他のオブジェクトからの履歴参照は、すべてそのまま残ります。

注意 「ユーザー名」プロパティは、現在は「ユーザーID」と呼ばれています。両方の用語が Agile PLM クライアントおよびマニュアルで使用されていますが、同じものと考えてください。

注意 ユーザーの不都合が頻繁に起こらないように、Agile Account Executiveを使用してライセンス要件を定期的に評価し、必要に応じてアップグレードします。

パスワードについて

新規ユーザーを追加する場合は、ユーザーが初回 Agile PLM にログインできるようにパスワードを割り当てます。初回ログイン後、ユーザーは「パスワード」プロパティの設定とシステム全体のアカウント規約に基づいてパスワードを自分で変更できます。必要場合は、Agile PLM 管理者も後からユーザー・パスワードを変更できます。

「アカウント規約」ノードから確立されたアカウント規約はパスワードの有効期限、長さ、固有性などを管理しますが、「ユーザー」ノードからこれらの設定を上書きする設定も指定できます。ただし、個別のユーザーについて「ユーザー」ノードで指定した設定は、「アカウント規約」ノードで表示されたように、Agile PLM に対して確立されたセキュリティ・ポリシーと定期的に競合しないことをお勧めします。

たとえば、ユーザーに定期的なパスワードの変更を要求する場合、アカウント規約を設定する際に有効期間を指定します。アカウント規約でパスワードの有効期間を 30 日に設定し、ユーザーのパスワード・プロパティを無期限に設定した場合は、そのユーザーのパスワード・プロパティの設定がシステム全体のアカウント規約の設定より優先されます。

より高い安全性を得るために、ユーザーはログイン用と承認用に別々のパスワードを使用できます。詳細は、169 ページの「[ユーザーのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

また、161 ページの「[アカウント規約](#)」を参照してください。

内部ユーザー・パスワードを変更する

Agile PLM には、内部で使用する目的で 4 種類の特別なユーザーがあります。

特別なユーザー	目的
superadmin (内部ユーザー)	全データへのアクセスを取得するために内部で使用されます。
agileuser (内部ユーザー)	全データへのアクセスを取得するために内部で使用されます。
ifsuser (外部ユーザー)	ファイル・マネージャによるアクセスに必要です。
etluser (外部ユーザー)	ETL ツールによるアクセスに必要です。

これらの内部ユーザーの問題は、これらのユーザーが UI を介して表示されないことです。つまり、これらのユーザーは PLM データベース・テーブルには存在しますが、Java クライアントでは確認できません。ただし、パスワードを知っているユーザーは、SDK を介して Agile データにアクセスできます。

管理者は、IFS ユーザー（ファイル・サーバー）、ETL ユーザー（Datamart）、および Agile ユーザーのデフォルト・パスワードを変更できます。

重要 スーパー管理者（superadmin）ユーザーのパスワードは変更できません。

パスワードをリセットする手順は、次のとおりです（例: “ifsuser” のパスワード）。

- 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
- メニュー・バーで「内部ユーザー・パスワード変更」ドロップダウン・リストをクリックします。
- 「“ifsuser”のパスワード変更」をクリックします。「“ifsuser”のパスワード変更」ダイアログ・ボックスが開きます。
- 「古いパスワード」、「新規パスワード」、および「新規パスワードの再入力」の各フィールドに適切な値を入力します。完了したら、「OK」をクリックします。
- ifsuser のパスワードをリセットする場合は、次の手順を実行する必要があります。
 - <AgileHome>%agileDomain%\bin\encryptpwd.cmd を実行して、新規パスワードを暗号化します。
 - 新規パスワードを<AgileHome>%agileDomain%\config の下にある agile.properties、および<AgileHome>%apache-tomcat%\webapps%\Filemgr%\WEB-INF\classes\com\Yagile\webfs\configuration と<AgileHome>%apache-tomcat-6.0.18%\webapps%\webdav%\WEB-INF\classes の下にある server.conf に貼り付けます。

インストール時に ifsuser のパスワードを変更する場合は、手順 2 のみを実行します。

設定の変更を有効にするには、ファイル・マネージャを再起動する必要があります。

管理者のノードとしてのLDAP

管理者には、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を設定する「サーバー設定」ノード・フォルダの下に「LDAP」ノードがあります。「LDAP」を参照してください。

ユーザー・プロパティを変更する

既存ユーザーのフィールドは、「ユーザー」ノードから変更できます。次に、プロパティ設定を変更する一般的な手順を示します。

注意 「ユーザー」ウィンドウ上部のフィルタ・バーの詳細は、8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。

Javaクライアントでユーザーのフィールドを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。
3. フィールドを直接変更するか、リストから項目を選択するか、またはダイアログ・ボックスで変更を行います。
4. 「保存」ボタンをクリックします。

Webクライアントでユーザーのフィールドを変更する手順は、次のとおりです。

1. 検索結果、または「アドレス帳」の「ユーザー」タブから、ユーザー・オブジェクトを開きます。
2. 「編集」をクリックします。フィールドが編集可能になります。フィールドを直接変更するか、リストから項目を選択するか、またはダイアログ・ボックスで変更できます。フィールドを変更します。
3. 「保存」ボタンをクリックします。

ユーザーが次回ログインしたときには、そのユーザーのプロパティに対して行った変更結果が表示されます。しかし、いくつかのプロパティ（「タイム・ゾーン」や「電子メール通知を受信」など）に関しては、いったんログアウトしてから再度 Web クライアントにログインするまでは、プロパティへの変更内容を確認できません。

ユーザーのパスワードを変更する

新規ユーザーを追加する場合はユーザーにパスワードを割り当て、初回にユーザーが Agile PLM にログインできるようにします。初回ログイン後、ユーザーは必要に応じて、Agile PLM でパスワードを変更できます。Agile PLM 管理者もユーザーのパスワードを変更できます。

各ユーザーにはログイン・パスワードと承認用パスワードがあります。1つのパスワードを両方の目的に使用することもできます。

重要 「サインオフ・ユーザー二重識別タイプ」プリファレンスが「ログイン・パスワード」に設定されている場合は、ログイン・パスワードと承認用パスワードを同一にできません。

ログイン・パスワードと承認用パスワードを別にするか、1つのパスワードを両方に使用するかを指定できます。ログイン・パスワードは、Agile PLM へのアクセスを確立する場合に必要です。また、ユーザーが変更などのオブジェクトを承認する場合には、システムにより承認用パスワードが求められます。

承認用パスワードを別にすることにより、セキュリティが向上します。社内でこの種のセキュリティが必要な場合や、適切なユーザーのみがオブジェクトを承認できる（多くの場合、検証の目的）ように保証する必要がある場合は、「承認にログイン・パスワードを使用」を「いいえ」に設定します。

Javaクライアントでユーザーのログイン・パスワードまたは承認用パスワードを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。
3. ログイン・パスワードを変更するための「パスワードのリセット」ボタンをクリックします。
4. 「パスワードのリセット」（または「承認用パスワードのリセット」）ダイアログ・ボックスが表示されます。「ログイン・パスワードのリセット」チェック・ボックスを選択します。新規のログイン・パスワードまたは承認用パスワードを入力します。大文字と小文字が区別されることに注意してください。ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインするときには常にパスワードを大文字で入力する必要があります。
5. 「新規パスワードの再入力」フィールドで、確認のためにパスワードを再入力します。「OK」をクリックします。
6. 表示された確認メッセージで「OK」ボタンをクリックします。

Webクライアントでユーザーのログイン・パスワードまたは承認用パスワードを変更する手順は、次のとおりです。

1. 検索結果、または「アドレス帳」の「ユーザー」タブから、ユーザー・オブジェクトを開きます。
2. ログイン・パスワードを変更するための「パスワードのリセット」ボタンをクリックします。
3. 「パスワードのリセット」ウィンドウが表示されます。新規のログイン・パスワードまたは承認用パスワードを入力します。大文字と小文字が区別されることに注意してください。ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインするときには常にパスワードを大文字で入力する必要があります。
4. 確認のためにパスワードを再入力します。「保存」をクリックします。

ユーザーの役割の割当てを変更する

ユーザーの役割の割当ては、「ユーザー」ノード、「役割」ノード、またはユーザー・オブジェクトから変更できます。

- 「ユーザー」ノードからは、ユーザーを選択し、「役割の割当て」ボタンをクリックすることにより、個々のユーザーの役割の割当てを変更できます。
- 「役割」ノードからは、特定の役割の「ユーザー」タブで、特定の役割に割り当てられたユーザーを表示して変更できます。
- ユーザー・オブジェクトからは、「一般情報」ページの「プロフィール」という見出しの下で役割を編集することにより、個々のユーザーの役割の割当てを表示して変更できます。

定義済ユーザー・プロパティ

次の表に、Agile PLM システムですべてのユーザーに共通のプロパティの一覧と説明を示します。「一般情報」、「プリファレンス」、「エスカレーション」、および「ユーザー・グループ」タブが記載されています。「共有」、「確認通知」、「添付ファイル」、および「履歴」タブは自動的に作成され、それ自体のフィールドやプロパティはありません。

注意 ユーザーのプリファレンスは、すべてのユーザー・オブジェクトの「プリファレンス」タブに表示されています。ユーザー・プリファレンスには、システム関連、フォーマット関連、および表示関連の3つのカテゴリがあります。これらの「ユーザー・プリファレンス」は、「システム全体のプリファレンス」である「管理者」>「サーバー設定」>「プリファレンス」ノードと混同しないでください。

プロパティ	説明（デフォルトには下線が引かれています）
「一般情報」タブ、必須フィールド	
ユーザーID（ユーザー名）	ユーザーのAgile PLMログイン・ユーザーID、またはユーザー名です。これは、Agile PLMアドレス帳で固有である必要があります。最大文字数は 128 文字です。167ページの「 ユーザー名について 」を参照してください。
「名」および「姓」	ユーザーの公開名です。ユーザーの名前を示すフィールドは、システム内で固有である必要はありません。固有である必要があるのは、ユーザーIDのみです（167の「 ユーザー名について 」を参照）。
電子メール	変更の通知/ルートのためのユーザーの有効な電子メール・アドレス。例: danny.design@agile.com 。注意: 「電子メール」フィールドに有効な電子メール・アドレスが入力されていないと、ユーザーは電子メールによる通知を受信できません。
「一般情報」タブ、オプションのユーザー情報	
ステータス	「アクティブ」または「停止」。（これは、それぞれ「有効」または「無効」と同じです。）
タイトル	ユーザーの役職（例: シニア・エンジニア）。
住所フィールド	情報目的のみで、「住所（番地）」、「地域情報」、「市町村区」、および「郵便番号」の4つの住所フィールドを使用できます。「地域情報」フィールドは一連のドロップダウン・リストです。
電話番号フィールド	ユーザーの勤務先電話、自宅電話番号、携帯電話番号（表示のみ）。
ファックス	ユーザーのファックス番号（表示のみ）。
ポケットベル	ユーザーのポケットベル番号（表示のみ）。
電子メール（代表以外）	「電子メール（代表以外）」はオプションですが、このフィールドが入力されていると、ユーザーは両方の電子メール・アドレスで通知を受信します。
「一般情報」タブ（「プロフィール」フィールド）	
役割	ユーザーの役割割当て。このプロパティによって、ディスカバリ・ポイント以降のAgile PLM内のオブジェクトへのユーザー・アクセスが決定されます。デフォルトの役割（管理者がユーザーを作成したときに自動的に割り当てられる）は、「私のユーザー・プロフィール」および「私が作成したオブジェクトを読み取りおよびディスカバリ」です。詳細は、187ページの「 役割 」、および「私が作成したオブジェクトの読み取りおよびディスカバリ役割」を参照してください。

プロパティ	説明（デフォルトには下線が引かれています）
リスト	<p>注意: これらのリストは、次で示すように、ルーティング可能なオブジェクトとそのワークフローに固有なものです。「リスト」ノードでこれらは編集できません。リストへの名前の追加または削除は、ユーザー・プロフィールのこの設定に基づいて行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「変更分析者リスト」は、設計変更の「カバー・ページ」にある「変更分析者リスト」にユーザー名を表示するかどうかを管理します。 「コンポーネント・エンジニア・リスト」は、製造元変更の「カバー・ページ」にある「コンポーネント・エンジニア・リスト」にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。 「適合性管理者リスト」は、デklarレーションの「カバー・ページ」の「適合性管理者」リストにユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。 「価格管理者リスト」は、価格オブジェクト（価格変更、見積履歴、および公表価格）の「カバー・ページ」にある「価格管理者リスト」にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。 「品質管理者リスト」は、品質変更要求オブジェクト（是正・予防処置および検証）の「カバー・ページ」にある「品質管理者リスト」にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。 「品質分析者リスト」は、製品サービス依頼オブジェクト（問題レポートおよびNCR）の「カバー・ページ」にある「品質分析者リスト」にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。
検索	<p>「変更分析者検索」は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーに次の内容を設定するかどうかを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「変更分析者検索」フォルダ 「私の受信トレイ」内の変更分析者検索条件 <p>「コンポーネント・エンジニア検索」は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーに「コンポーネント・エンジニア検索」フォルダを設定するかどうかを管理します。</p> <p>「品質検索」は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーに次の内容を設定するかどうかを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「品質検索」フォルダ 「私の受信トレイ」内の品質検索条件 <p>「コンテンツ・マネージャ検索」、「価格検索」、「プロジェクト検索」、「サプライヤー見積依頼検索」および「ソーシング検索」</p>
ユーザー・カテゴリ	<p>「パワー」、「同時接続」、または「制限付き」。「ユーザー・ライセンス」を参照してください。</p>
承認用パスワードにログイン・パスワードを使用	<p>各ユーザーには、ログイン・パスワードと承認用パスワード（変更の承認に使用）があります。1つのパスワードを両方の目的で使用する場合は、「承認用パスワードにログイン・パスワードを使用」を「はい」に設定します。承認用のパスワードが必要な場合は、「いいえ」に設定します。ユーザーに新規の（大文字と小文字を区別する）パスワードを定義するには、設定ウィンドウ上部の「パスワードの変更」ボタンを使用します。</p>

プロパティ	説明（デフォルトには下線が引かれています）
エスカレーションの指定承認を許可	<p>ユーザーが 1 人以上のエスカレーション担当者（DEP）を特定した場合、この設定によって、そのDEPがルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できる時期が決まります。</p> <p>設定: エスカレーション後 - ユーザーのDEPがルーティング可能なオブジェクトを承認できるのは、そのオブジェクトがエスカレーションされた後のみです 常時 - ユーザーのDEPは、ルーティング可能なオブジェクトを常に承認または却下できます。</p> <p>（エスカレーション担当者のステータスの詳細は、181ページの「エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる」を参照してください。）</p>
ホーム組織	「ユーザー」ノードから作成されたすべてのユーザーの企業のプロファイル名（組織名）と、「サプライヤ・グループ」ノードから作成されたすべてのユーザーのサプライヤ名およびサプライヤ番号。
デフォルトの拠点	「拠点」は、分散型製造に対して使用され、ユーザーが関わる企業のすべての場所を示します。このプロパティのドロップダウン・リストからの選択内容は、「デフォルトの拠点」ドロップダウン・リストに移入されます。「デフォルトの拠点」は、ユーザーの本拠地です。
出荷先住所のフィールド	<p>「ホーム出荷先」は、ユーザーがソーシング活動の責任者となる主な場所です。</p> <p>「認定出荷先」（PCM の以前のバージョンでは「拠点」と呼ばれていました）は PCM のみで使用されており、ユーザーがソーシング・アクティビティを開始できる企業のすべての場所を示します。このプロパティのドロップダウン・リストからの選択内容は、「ホーム出荷先」ドロップダウン・リストに移入されます。</p>
パートナ用プログラム・マネージャ	このユーザーがプログラム・マネージャ（パッケージ・オブジェクトの変更分析者）であるパートナ。183ページの「 ユーザー・グループをパートナとして設定する 」を参照してください。
率のフィールド	「為替手形割引率」、「貸金率」、および「間接費配賦率」の 3 つの率のフィールドがあります。これらのフィールドのドロップダウン・リストには、「通貨換算レート」ノードに入力されたすべての通貨が表示されます。ユーザーの「推奨通貨」から別の通貨を選択できます（「プリファレンス」タブを参照）。PPM で使用します。
コメント	Agile PLM 管理者はユーザーに関するコメントを入力できます。このコメントは、ユーザーが「設定」>「ユーザー・プロファイル」をクリックしても表示されません。
プロジェクト・タイプ	ユーザーが参加できるプロジェクトのタイプです。利用可能な値はプロジェクト・タイプ・リストにより異なります。
地域	ユーザーが属する地域です。利用可能な値は「地域リスト」により異なります。
部門	ユーザーが属する部門です。利用可能な値は「部門リスト」により異なります。
製品ライン	ユーザーがアクセスする製品ラインです。利用可能な値は「製品ライン・リスト」により異なります。
顧客	ユーザーが関連付けられている顧客です。利用可能な値は「顧客リスト」により異なります。
開始年	ユーザーが関連付けられている製品開始年です。利用可能な値は「開始年リスト」により異なります。
カテゴリ 7、カテゴリ 8、 カテゴリ 9、カテゴリ 10	オプションの Product Portfolio Management ダッシュボード・フィールドです。

プロパティ	説明（デフォルトには下線が引かれています）
「プリファレンス」タブ: システム・プリファレンス	
優先クライアント	このフィールドは、ユーザーへのシステム通知に示されるリンクのタイプを管理します。通知のリンク・ポイントになるオブジェクトに対して自動的に開くクライアントとして、Web クライアントまたは Java クライアントを選択します。 重要: Agile の PCM、PG&C、PPM の各ソリューションは、Web クライアントでのみ有効です。主にこれらのエリアで作業するユーザーは、「優先クライアント」を Web クライアントに設定してください。
優先ファイル・マネージャ	ファイル・サーバーのリストから選択します。パフォーマンスを重視する場合は、ユーザーにとってローカル・サーバーとなるファイル・サーバーを選択します。たとえば、米国内のユーザーに対しては、米国内にあるサーバーを選択します。（ファイル管理サーバーの詳細は、352ページの「 Agile PLM におけるファイル管理 」を参照してください。）
電子メール通知を受信	ユーザーがシステムで作成された電子メール通知を自動的に受信するかどうかを管理します。 設定 = 「はい」 または 「いいえ」
ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス	ユーザーが詳細プロダクティビティ・コンポーネントまたは標準コンポーネントにアクセスできるかどうか、もしくは毎回プロンプトを表示するかどうかを管理します。「標準」モードに設定されている場合、未対応ファイルは自動的に開かれませんが、かわりに、ユーザーは「保存」または「開く」のどちらかを選択するよう指示されます。 設定 = 「プロンプト」、「詳細」、「標準」 注意: このユーザー・プリファレンスは、システム全体のプリファレンスの「プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする」が「いいえ」に設定されている場合は、ユーザーの「プロファイル」に表示されません（375ページの「 プリファレンス 」を参照してください）。
「プリファレンス」タブ: フォーマット・プリファレンス	
言語	英語はすべての Agile PLM ライセンスで使用できます。Agile PLM では、ライセンスによって日本語、繁体字中国語、簡体字中国語、フランス語、またはドイツ語を使用できます。
週労働時間の設定	これは今後使用するための設定で、現在の Agile PLM モジュールでは参照されません。 注意: このプロパティは Product Portfolio Management および Microsoft Project スケジュールも含めて Agile PLM モジュールには適用できません。
推奨日付フォーマット	ユーザーに対して表示される日付の形式。デフォルトは MM/dd/yyyy です。
タイム・ゾーン	ユーザーが位置する場所のタイム・ゾーン。
推奨時間フォーマット	ユーザーに対して表示される時刻形式。デフォルトは hh:mm:ss aaa（aaa = am または pm）です。
推奨通貨	ユーザーに対して表示される価格/コストの通貨。デフォルトは米ドルです。このプロパティのドロップダウン・リストには、「 通貨換算レート 」ノードから入力したすべての通貨が表示されます。
数字フォーマット	ユーザーに対して表示される数字の形式です。管理者またはユーザーが形式タイプを選択します（たとえば、千単位の区切りにカンマ、小数点にピリオドを使用するように選択したり、千単位の区切りは使用せず小数点にカンマを使用するように選択します）。各形式の例がドロップダウン・リストに表示されます。

プロパティ	説明（デフォルトには下線が引かれています）
「プリファレンス」タブ: 表示プリファレンス	
推奨開始ページ	「ホーム」、「ダッシュボード」、「ダッシュボード・ファイナンシャル」、「ダッシュボード 私のアクティビティ」、「ダッシュボード・プロジェクト」、「ダッシュボード・リソース」から選択します。
回答編集モード	「基本」、「詳細テーブル編集」、または「詳細ウィザード編集」を選択します。「基本」設定では、ユーザー（一般的には、「バイヤー」企業で働いていない「サプライヤ」）が簡素化された Web クライアント・ユーザー・インタフェースを使用できます。2 つの「詳細」設定では、ユーザーには見慣れた Web クライアント UI が表示されます。これらの設定の詳細は、『PCM Supplier Handbook』および『PG&C Supplier Guide』を参照してください。
静的テーブル・ヘッダー	「はい」に設定すると、テーブル・ヘッダーが追加ページに繰り越されます。
エンコード形式	西ヨーロッパ言語 (ISO)、日本語 (Shift JIS)、繁体字中国語 (Big 5)、日本語 (EUC)、簡体字中国語 (GB2312)、および Unicode (UTF-8) から選択します。
サムネイル	「オフ」または「オン」。「オフ」がデフォルトです。
テーブル表示モード	「標準」または「サムネイル付き」。
検索表示モード	「サムネイルのみ」、「標準」、またはサムネイル付き標準。
タイム・シートの表示	「はい」に設定すると、「タイム・シート」タブが表示されます。デフォルトは「いいえ」です。
「エスカレーション」タブ	
条件 および ユーザーに通知	ユーザーがサインオフすることなくワークフロー・ステータスがエスカレーションの指定期間を超えた場合に通知する個々のユーザーまたはユーザー・グループ（パーソナルまたはグローバル・グループ）を、「条件」および「ユーザーに通知」に設定します。1 人のユーザーは、多様なワークフロー関連の条件に複数の指定されているエスカレーション担当者を割り当てることができます。詳細は、181 ページの「 エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる 」を参照してください。
「ユーザー・グループ」タブ	
グループ名およびステータス	<p>選択したユーザーがメンバーになっているユーザー・グループのリストが表示されます。このリストから、管理者はユーザーに対してユーザー・グループのメンバーシップを追加したり、ユーザー・グループのメンバーシップからユーザーを削除できます。1 人のユーザーが複数のグループに属することができます。これらのフィールドは、このタブまたはユーザー・グループ設定ウィンドウの「ユーザー」タブで設定できます。詳細は、177 ページの「ユーザー・グループ」を参照してください。</p> <p>ユーザーが作成したパーソナル・ユーザー・グループは表示されないことに注意してください。</p>

ユーザー・グループ

この章のトピック

■ 新規ユーザー・グループを作成する	177
■ ユーザー・グループ・プロパティ	179
■ ユーザー・グループを変更する	180
■ エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる	181
■ 変更の承認者としてユーザー・グループを追加する	182
■ ユーザー・グループをパートナーとして設定する	183

「ユーザー・グループ」ノードからは、ユーザーやエスカレーション担当者のユーザー・グループへの割当て、ユーザー・グループの名前の変更、新規ユーザー・グループの作成を実行できます。

また、プロジェクト・チーム、パートナー、部署、部門、課、拠点関連のグループおよびグローバル・グループと割り当てられたユーザーも定義できます。ここでの設定は、Agile PLM のアドレス帳の「ユーザー・グループ」ノードに反映され、電子メール通知の送信に使用されます。

Agile PLM 管理者は、次の2つのノードから Agile PLM システムのユーザー・グループを設定できます。

- 「ユーザー・グループ」ノードでは、ユーザーを作成し、名前を付け、割り当てることによってユーザー・グループを設定します。ユーザー・グループは、Agile PLM のアドレス帳に表示されます。ユーザーが Agile PLM クライアントの「オブジェクトの送信」ダイアログ・ボックスの「宛先」ボタンをクリックすると、アドレス帳が表示されます。アドレス帳でユーザー・グループを選択できます。「ユーザー・グループ」ノードで指定したユーザー・グループの割当ては、ユーザーのウィンドウまたはページの「ユーザー・グループ」タブにも反映されます。
- 「ユーザー」ノードからは、ユーザー・グループの割当てを含むユーザー・プロパティを設定します。「ユーザー」ノードで指定したユーザー・グループの割当ては、「ユーザー・グループ」ノード内にあるそのユーザー・グループのユーザー・プロパティにも反映されます。「ユーザー」ノードに新規ユーザーを追加するとき、ユーザーを1つ以上のユーザー・グループに割り当てることができます。この割当ては、「ユーザー」ノードまたは「ユーザー・グループ」ノードで必要に応じて変更できます。ユーザー・プロパティの変更方法は、169ページの「[ユーザー・プロパティを変更する](#)」を参照してください。



注意 新規に作成したユーザー・グループに、既存のユーザーを割り当てる場合は、各ユーザーの「ユーザー・グループ」プロパティを設定するより、新規ユーザー・グループの「ユーザー」プロパティを設定するほうが簡単です。

旧バージョンの Agile Product Collaboration から Agile PLM にアップグレードし、システム内の既存の組織構造を維持する必要がある場合は、たとえば「部門」、「グローバル・グループ」、「パートナー」などと呼ばれるユーザー・グループのサブクラスを作成できます。

新規ユーザー・グループを作成する

新規ユーザー・グループを作成する前に、現在のユーザー・グループを確認する必要があります。ユーザー・グループ設定レポートを実行します（「分析とレポート」タブ>「標準レポート」>「管理者レポート」ノードから）。レポートには、現在のユーザー・グループと割り当てられているユーザーが表示されます。（レポートの詳細は、20ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。）

Javaクライアントで新規ユーザー・グループを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー・グループ」をダブルクリックします。「ユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタン  をクリックします。「ユーザー・グループ作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「サブクラス」ドロップダウン・リストから、ユーザー・グループ・タイプを選択します。
「ユーザー・グループ」は、ユーザー・グループ・クラスで別のサブクラスを作成していない場合に使用できる唯一のサブクラスとなります。作成されていないタイプの新規グループを指定する場合は、最初に「クラス」ノードでそのグループを作成して、ドロップダウン・リストにグループが表示されるようにする必要があります。
4. 「名前」フィールドに値を入力します。
5. ユーザー・グループが「グローバル」か「パーソナル」かを選択します。
6. 「ユーザー」フィールドの横にある  をクリックします。これにより、アドレス帳が表示されます。「名前」リストからユーザーを、または「グループ」リストから他のユーザー・グループを、「受取人」リストに移動します。
7. 「OK」をクリックします。新規のユーザー・グループ・オブジェクトが表示されます。
この時点から、ユーザーは新規ユーザー・グループ・オブジェクトを使用できるようになります。グループの名前が「ユーザー・グループ」ノードの下に表示され、ユーザー・グループの割当てが「ユーザー」ノード内で更新されます。新規ユーザー・グループ名は、Agile PLM のアドレス帳にも表示されます。

Webクライアントで新規ユーザー・グループを作成する手順は、次のとおりです。

1. 左側のナビゲーション・ウィンドウで、「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー・グループ」の順にクリックします。「ユーザー・グループ」ページが表示されます。
2. 「追加」をクリックします。「新規ユーザー・グループの作成」ウィンドウが開きます。
3. 「タイプ」ドロップダウン・リストから、ユーザー・グループのサブクラス・タイプを選択します。
作成されていないタイプの新規ユーザー・グループを指定する場合は、Java クライアントの「クラス」ノードでそのグループを作成してから、ドロップダウン・リストにグループが表示されるようにする必要があります。
4. 「名前」フィールドに値を入力します。
5. ユーザー・グループが「グローバル」か「パーソナル」かを選択します。
6. 「保存」をクリックします。ユーザー・グループの「一般情報」ページが表示され、編集可能になります。
7. 必要に応じて、ユーザー・グループ・プロパティを入力します。詳細は、179ページの「[ユーザー・グループ・プロパティ](#)」を参照してください。
8. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。次に「ユーザー」タブをクリックします。
ユーザーを割り当てずに新規ユーザー・グループを作成するには、「完了」をクリックします。「ユーザー」タブの「ユーザー・グループ」ページと Agile PLM のアドレス帳に新規ユーザー・グループ名が表示されます。
9. ユーザーをユーザー・グループに割り当てるには、「追加」をクリックします。名前を入力してユーザーを検索するか、または既存のユーザーのリストから検索できます。
10. 1つ以上の名前を選択し、ユーザー・グループのユーザーのテーブルにドラッグ・アンド・ドロップするか、ダブルクリックします。
新規ユーザー・グループの名前が「ユーザー・グループ」ページに表示され、ユーザー・グループの割当てが「ユーザー」ページ内で更新されます。新規ユーザー・グループ名は、Agile PLM のアドレス帳にも表示されます。

ユーザー・グループ・プロパティ

次の表に、ユーザー・グループ・プロパティを示します。

プロパティ	説明
名前	ユーザー・グループの名前を指定します (29 文字以内)。
タイプ	サブクラスを選択します。デフォルトのサブクラスは「ユーザー・グループ」です。管理者は、ユーザー・グループ・クラス内に他のサブクラスを作成できます。それらは、このドロップダウン・リストに表示されます。
説明	ユーザー・グループの説明。
ステータス	ユーザー・グループがアクティブであるかどうかを示します。アクティブなグループはアドレス帳に表示され、アクティブでないグループは表示されません。
グローバル/パーソナル	グローバル・ユーザー・グループは、すべてのユーザーに対して使用できます。パーソナル・グループは、グループの作成者のみが表示して使用できます。
役割	グループに適用される役割は、グループ内のすべてのユーザーに適用されます。
リソース・プール	そのユーザー・グループを Product Portfolio Management オブジェクトの割当て用のリソース・プールとして使用できるようにします。
パートナ・グループとして定義	ユーザー・グループをパートナ (メンバーはパッケージ・オブジェクトを作成して提出できる) にする場合は、「はい」を選択します。ユーザーの「パートナ用プログラム・マネージャ」プロパティを設定すると、有効なパートナのリストにユーザー・グループが表示されます。183ページの「 ユーザー・グループをパートナとして設定する 」を参照してください。
エスカレーションの指定承認を許可	ユーザー・グループが 1 人以上のエスカレーション担当者 (DEP) を特定した場合、この設定によって、そのDEPがルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるか時期が決まります。 設定: エスカレーション後 - ユーザー・グループのDEPがルーティング可能なオブジェクトを承認できるのは、そのオブジェクトがエスカレーションされた後のみです。 常時 - ユーザー・グループのDEPは、ルーティング可能なオブジェクトを常に承認または却下できます。 (エスカレーション担当者のステータスの詳細は、181ページの「 エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる 」を参照してください。)
所有者	ユーザー・グループの作成者を指定します (表示のみ)。デフォルトでは所有者は作成者に設定されますが、ユーザーは変更可能です。
最大ユーザー数	ユーザー・グループに割り当てることのできるユーザーの最大数。 設定: 空白 (デフォルト) - ユーザー数は無制限です。 正の整数 - ユーザー・グループに含むことのできるユーザーの最大数を定義します。この数値はユーザー・ライセンス数を超過できますが、すでにユーザー・グループに割り当てられたユーザー数を下回ることにはできません。

プロパティ	説明
「リスト」、「プロジェクト・タイプ」、「地域」、「部門」、「製品ライン」、「顧客」、「開始年」、「賃金率」、「間接費配賦率」、および「為替手形割引率」	「定義済ユーザー・プロパティ」を参照してください。

ユーザー・グループを変更する

次の手順は、ユーザー・グループのあらゆるプロパティの変更に適用されます。

Javaクライアントで「ユーザー・グループ」の設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー・グループ」をダブルクリックします。「ユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. 特定のユーザー・グループ（「カスタマ・サポート」など）をダブルクリックします。「カスタマ・サポート」ウィンドウが表示されます。ユーザー・グループのタブとして、「一般情報」、「ユーザー」、「エスカレーション」、「添付ファイル」、「履歴」、「共有」が表示されます。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
4. 入力完了したら、「保存」をクリックします。
5. 元の設定に戻す場合や最初からやり直す場合には、「閉じる」をクリックします。新規の設定を保存するかどうかを確認するメッセージがウィンドウに表示されます。保存する場合は「はい」を、保存しない場合は「いいえ」をクリックします。

注意 自社でLDAPシステムをPLMとともに使用し、ユーザー・グループの同期化機能が有効な場合は、同期化されたユーザー・グループの「ユーザー」タブ（つまり、ユーザーがLDAPを介してユーザー・グループに追加されている）で、ユーザーを削除したり追加することはできません。374ページの「[ユーザーとユーザー・グループを同期化する](#)」を参照してください。

Webクライアントで「ユーザー・グループ」の設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー・グループ」の順にクリックします。「ユーザー・グループ」ページが表示されます。
2. 特定のユーザー・グループ（カスタマ・サポートなど）をクリックします。「ユーザー・グループ: カスタマ・サポート」ページが表示されます。ユーザー・グループのタブとして、「一般情報」、「ユーザー」、「エスカレーション」、「添付ファイル」、「共有」、「履歴」が表示されます。
3. 「一般情報」タブの「編集」をクリックします。
4. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
5. 入力完了したら、「保存」をクリックします。
6. 元の設定に戻るかやり直す場合は、「キャンセル」をクリックします。新規の設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージがページに表示されます。キャンセルする場合は「OK」、キャンセルしない場合は「キャンセル」をクリックします。

エスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる

ワークフローのステータスが、サインオフがない状態でエスカレーション期間を過ぎた場合、ユーザー・グループ、または個々のユーザーにその旨を通知できます。これらの通知を受けるエンティティをエスカレーション担当者と呼びます。「エスカレーションの指定承認を許可」プロパティにより、指定されたエスカレーション担当者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できる時期が決まります。

Javaクライアントで指定されているエスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー・グループ」をダブルクリックします。「ユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. ユーザー・グループの名前をダブルクリックします。ユーザー・グループのタブ付きのウィンドウが表示されます。
3. 「エスカレーション」タブをクリックして前面に表示します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。ドロップダウン・リストから、「すべての変更指示」など、エスカレーションの再利用可能な条件を選択します。
5. 「ユーザーに通知」フィールドの横をクリックします。「ユーザーの選択」ウィンドウで、該当するユーザーを「ユーザー」リストから選択するか、他のユーザー・グループを「ユーザー・グループ」リストから選択し、「受信者」リストに移動して「OK」をクリックします。

「保存」をクリックします。エスカレーションが「エスカレーション」タブに追加されます。

変更をキャンセルする場合は、「閉じる」をクリックします。

指定した条件のエスカレーション期間がサインオフされることなく経過すると、選択されたユーザーにエスカレーション通知電子メールが送信されます。

Webクライアントで指定されているエスカレーション担当者をユーザー・グループに割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー・グループ」の順にクリックします。「ユーザー・グループ」ページが表示されます。
2. ユーザー・グループの名前をクリックします。ユーザー・グループのタブ付きのオブジェクト・ページが表示されます。
3. 「エスカレーション」タブをクリックして前面に表示します。
4. 「追加」をクリックします。「エスカレーションの追加」ページで「条件」を選択し、ドロップダウン・リストから、「すべての変更指示」など、エスカレーションの再利用可能な条件を選択します。
5. 「ユーザーに通知」フィールドの横にある「アドレス帳」ボタンをクリックします。選択ウィンドウを使用してユーザーまたはグループを検索し、エスカレーションのユーザーのテーブルにドラッグ・アンド・ドロップするか、ダブルクリックします。
6. 「さらに追加」または「追加」をクリックします（「キャンセル」ボタンもあります）。エスカレーションが「エスカレーション」タブに表示されます。

指定した条件のエスカレーション期間がサインオフされることなく経過すると、選択されたユーザーにエスカレーション通知電子メールが送信されます。

変更の承認者としてユーザー・グループを追加する

Agile PLM ワークフローでは、「レビュー」と「リリース済」ステータスの検索条件プロパティについて、「承認者」と「オブザーバ」の2つのプロパティを入力する必要があります。

選択ダイアログ・ボックスの「利用可能な値」リストから選択できる項目は、「グループの選択」ドロップダウン・リストでの選択内容によって変わります。

「グループの選択」ドロップダウン・リストの選択肢	「利用可能な値」リストから選択できる項目
すべて	<p>「すべて」を選択すると、「利用可能な値」リストには次のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 変数（例: \$CHANGEANALYST）。 すべての Agile PLM ユーザー。 すべてのグローバル・グループ。「Any」および「All」という接尾辞付きで2回リストされます。たとえば、[Sales - Any]を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトがグループ内のすべてのユーザーに対してルートされますが、承認または却下する必要があるのは1人のユーザーのみです。[Sales - All]を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトはグループ内のすべてのユーザーに対してルートされ、グループ内のすべてのユーザーが承認または却下する必要があります。
すべてのグループ	<p>「すべてのグループ」を選択すると、「利用可能な値」リストには次のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> すべてのグローバル・グループ。「Any」および「All」という接尾辞付きで2回リストされます。たとえば、[Sales - Any]を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトがグループ内のすべてのユーザーに対してルートされますが、承認または却下する必要があるのは1人のユーザーのみです。[Sales - All]を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトはグループ内のすべてのユーザーに対してルートされ、グループ内のすべてのユーザーが承認または却下する必要があります。
グループ名	<p>グループ名を選択すると、「利用可能な値」リストには次のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> そのグループのメンバー。たとえば、[Sales]を選択すると、「利用可能な値」リストにはそのグループのメンバーの名前が含まれます。この選択により、グループ・メンバーのサブセットを選択できるようになります。

マルチリストのダイアログ・ボックスを使用するのと同じ方法でこれらを選択します。1つの名前をダブルクリックするか、または複数の名前を選択し、右矢印をクリックしてユーザーまたはユーザー・グループを右側の「選択された値」リストに移動します。「OK」をクリックして「ステータス」タブの「条件」テーブルに戻り、「保存」をクリックして、そのステータスの承認者の割当てを完了します。

注意 [ユーザー・グループ - Any]をワークフローの承認者として割り当てると、ユーザー・グループのどのメンバーもルーティング可能なオブジェクトをサインオフ（グループが指定されたステータスまで移行）でき、個々のサインオフは、ユーザー・グループ全体として適用されます。他のメンバーがルーティング可能なオブジェクトを承認または却下する必要はなく、実行することもできません。グループのメンバーの1人が承認または却下した場合には、そのルーティング可能なオブジェクトは、グループの他のユーザーの受信トレイには表示されません。

ただし、他のメンバーは最初のユーザーの応答後には、ルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。ルーティング可能なオブジェクトをメンバーが却下すると、「現在のものとは異なる CCB（またはリリース済）の前のサインオフを無効にしようとしています」という警告が表示されます。そのユーザーが「OK」をクリックすると、前のユーザーによる承認が無効になります。

ユーザー・グループをパートナーとして設定する

このセクションでは、様々な要素について説明します。これらの要素は、Agile パートナがパッケージを送信し、プログラム・マネージャがそのパッケージの提出を管理できるように設定する必要があります。「パートナー」とは、自社と提携している会社で、パッケージを送信する必要のある Agile ユーザーが定義されている場合があります。または、パートナーとは、自社に対して会社を代表する Agile ユーザーである場合もあります。

注意 「プログラム・マネージャ」という用語は、パッケージ・オブジェクト（パッケージ・クラスのインスタンス）を管理する変更分析者を指します。ここでは、Agile の役割である「プログラム・マネージャ」を意味していません。
また、「プログラム」という用語もプログラム基本クラスには関係ありません。

Agileで使用するパートナーとプログラム・マネージャを作成する手順は、次のとおりです。

1. Agile パートナを定義するには、どの Agile ユーザー（通常は外部のユーザーで、ユーザー・グループに属しています）をパートナーとして定義するかを決定します。各ユーザー・グループ・オブジェクトには、「**パートナー・グループとして定義**」プロパティがあります。「はい」に設定されている場合は、ユーザーの「**パートナー用プログラム・マネージャ**」プロパティの利用可能なパートナー・リストにユーザー・グループが表示されます。
2. パートナには「パートナー」役割を割り当てることができます。この役割によって、パートナーにパッケージの作成と提出の権限を付与します。
3. 1 人以上の Agile ユーザー（通常は社内のユーザー）を各パートナーのプログラム・マネージャとして定義します。「**パートナー用プログラム・マネージャ**」ユーザー・プロパティには、手順 1 で設定したすべての「パートナー」ユーザー・グループが表示されます。各プログラム・マネージャに対してパートナー・グループを選択してください。つまり、1 人以上のパートナー・グループに対し、1 人のプログラム・マネージャを割り当てることができ、他のユーザーは同じ、または異なるパートナー・グループのプログラム・マネージャとなることができます。
4. パートナ用プログラム・マネージャには「コンテンツ管理者」役割が割り当てられている必要があります。これにより、Agile パッケージ・オブジェクトを扱うことができるようになります。前述の注意で述べたように、Agile 役割の中の「プログラム・マネージャ」と混同しないでください。Agile の役割は、PE/PPM ソリューションの機能に関連しています。

サプライヤ・グループ

この章のトピック

- 概要 185
- プロパティ 185

概要

「サプライヤ・グループ」ノードは、承認済サプライヤをまとめることにより、PCM ソリューションに関連しているユーザーが RFQ プロセス中に容易に複数のサプライヤを選択できるようにします。

Java クライアントまたは Web クライアントを使用して、管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル・サプライヤ・グループを設定できます。また、Agile PLM ユーザーは、それぞれの特殊な要件に適合する固有のサプライヤ・グループをパーソナル・サプライヤ・グループとして定義（作成、編集、削除）できます。管理者（ユーザー・プロフィールを作成、変更する権限を持つユーザー）は、各ユーザーのユーザー・レベルのサプライヤ・グループを作成、編集、削除できます。

プロパティ

Java クライアントでは、「ユーザー設定」で「サプライヤ・グループ」をダブルクリックして、メインのサプライヤ・グループ・ウィンドウを表示します。サプライヤ・グループが次のプロパティとともに一覧表示されます。

プロパティ	説明	編集可能	デフォルト
名前	サプライヤ・グループの名前	はい	空
説明	サプライヤ・グループの説明	はい	空
サプライヤ	サプライヤ・グループ内のサプライヤ・リスト	はい	空
タイプ	<p>サプライヤ・グループのタイプ: 「グローバル」または「パーソナル」グループ。</p> <p>注意 Java クライアントでサプライヤ・グループを作成する場合、デフォルトは「グローバル」で変更できません。Web クライアントでサプライヤ・グループを作成する場合は、「パーソナル」を使用できます。</p>	サプライヤ・グループの作成後は編集できない	グローバル
有効	サプライヤ・グループがアクティブかどうか	はい	はい


実行できるアクション

- **作成** - ユーザー管理者は新規サプライヤ・グループを作成できます。
- **編集** - ユーザー管理者はサプライヤ・グループを編集できます。グループにサプライヤを追加または削除する


ために（「サブライヤ管理者」、「サブライヤ・マネージャ」、「サブライヤ・プロジェクト・ユーザー」の役割を割り当てられていたユーザー）、ユーザー管理者がグループからサブライヤを追加または削除できます。

- **有効と無効** - 「編集」モード（Web クライアント）または「サブライヤ・グループ」ウィンドウの上のボタンを使用して（Java クライアント）、サブライヤ・グループを有効または無効にできます。

Javaクライアントでサブライヤ・グループを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「サブライヤ・グループ」をダブルクリックします。「サブライヤ・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「新規サブライヤ・グループの作成」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. 「名前」フィールドと「説明」フィールドに入力し、「有効」フィールドで「はい」または「いいえ」を選択します。
4. 「タイプ」フィールドは、「グローバル」の値が入力された状態でグレー表示されます。（表に記載されているように、「パーソナル」は Web クライアントでサブライヤ・グループを作成する場合のみ選択できます。）
5. 「サブライヤ」フィールドの横にある  をクリックし、サブライヤを「選択肢」リストから「選択済」リストに移動します。
6. 「OK」をクリックし、再度「OK」をクリックします。「サブライヤ・グループ」ウィンドウに新規グループ・オブジェクトが表示されます。この時点からユーザーが利用可能となります。

Webクライアントでサブライヤ・グループを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「サブライヤ・グループ」の順にクリックします。「サブライヤ・グループ」ページが表示されます。
2. 「追加」をクリックします。「サブライヤ・グループの追加」ウィンドウが表示されます。
3. 「サブライヤ・グループ名」フィールドと「サブライヤ・グループ説明」フィールドに入力します。
4. 「サブライヤ・グループ・タイプ」で「グローバル」か「パーソナル」のどちらかを選択します。
5. 「サブライヤ」フィールドの横にある  をクリックします。リストからサブライヤを選択します。

注意 サブライヤ・グループでは選択されたサブライヤが少なくとも 1 つ必要です。

6. 「追加」をクリックします。

Javaクライアントでサブライヤ・グループを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「サブライヤ・グループ」をダブルクリックします。「サブライヤ・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. 変更するグループをダブルクリックします。「サブライヤ・グループ」設定ウィンドウが表示されます。
3. 「一般情報」タブで、ドロップダウン・リストの値を選択するか、または値を受け入れます。「選択済」リストへ、またはリストからサブライヤ・ユーザーを移動し、サブライヤを追加または削除します。
4. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

役割

この章のトピック

- Agile PLMの役割と権限の概要 187
- 役割を理解する 188
- デフォルトのAgile PLM役割 190
- 役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス 197
- 役割を使用する 200

この章では、Agile PLM の事前設定済の役割を使用する方法と、新しい役割を作成する方法について説明します。

Agile PLMの役割と権限の概要

役割と権限を使用して、Agile PLM のビジネス・オブジェクトと機能に対するユーザーのアクセスを管理します。

PLM ユーザーがタスクを実行するには、少なくとも 1 つの役割が割り当てられている必要があります。各ユーザー（またはユーザー・グループ）には、実行するアクションに応じて、複数の役割を割り当てることができます。

Agile PLM には広範な役割と基本権限があらかじめ設定されています。必要に応じて役割を変更したり権限を調整できますが、独自の役割や権限を設定する前に、Agile PLM のデフォルトの役割をよく理解することをお勧めします。デフォルトの役割については後述のリストで説明します。

権限マスクについて

この章では PLM 役割（デフォルトの役割とカスタマイズした役割の両方）について説明し、次の章で権限と権限マスクについて説明します。ただし、最初にこれらの要素について理解しておくことが重要です。（「役割」ノードにデフォルトの役割を表示する手順については後述します。デフォルトの権限の一覧を表示するには、ノード・ツリーで「権限」ノードを展開します。）

次の表に、権限、権限マスク、および役割の定義を示します。

用語	定義	例
権限	ユーザーが実行できるアクション。 権限は構成要素の 1 つにすぎません。権限をユーザーに割り当てるには、条件やターゲット・オブジェクトなどの他の構成要素と組み合わせる必要があります。	管理者（権限） 作成 読取り 変更
権限マスク	特定のビジネスオブジェクト上で実行可能なアクションの条件を定義する一連の条件文。 役割には少なくとも 1 つの権限マスクが必要です。	管理者（権限マスク） デザインの作成、アイテムの作成 デザインの読取り、アイテムの読取り デザインの変更、アイテムの変更

用語	定義	例
役割	<p>変更管理プロセスで同一の機能を果たす1人以上のユーザーに割り当てることができる共通の権限。</p> <p>役割は、権限マスクの調整された集合です。</p> <p>1人のユーザーに複数の役割を割り当てることができます。</p> <p>デフォルトの役割はすぐに使用できるように設定されています。</p>	<p>管理者（役割）</p> <p>変更分析者</p> <p>適合性管理者</p> <p>コンポーネント・エンジニア</p> <p>各役割は、少数または多数の権限マスクで構成されます。</p>

この表から、次のように要約できます。

- Agile PLM でユーザーが実行できるアクション（作成、送信、キャンセルなど）は権限によって異なります。ただし、権限のみでは機能しません。
 - 権限マスクは、権限、再利用可能な条件（前の章を参照）、およびターゲット・オブジェクト（必要に応じて細分化可能）の組合せです。権限マスクは、ユーザーのアクションを管理するためのフィルタとして機能する機能単位です。権限マスクは、役割（デフォルトまたはカスタム）に追加したり、役割に含めずにユーザーに割り当てることができます。
 - 役割は、少数または多数の権限マスクのグループ（集合）です。（「フィールド・レベルでの読取り」のような役割は2つまたは3つの権限マスクで構成されますが、「変更分析者」は10以上の権限マスクで構成されます。）
- 役割を使用すると、変更管理プロセスで共通した機能を果たすユーザー・グループに対して共通した権限を割り当てることができます。
- ユーザーに役割や権限マスクを割り当てると、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後に有効となります。

ここまで Agile PLM の役割と権限の概要を説明しました。以降のセクションでは役割について説明します。権限の詳細は、次の章で説明します。

役割を理解する

デフォルトの PLM 役割は、次の方法で変更できます。

- 既存の役割の名前を変更する。
限定された役割は例外です。また、「管理者」、「私のユーザー・プロファイル」、「履歴レポートの表示」役割の名前は変更できません。
- 「**一般情報**」タブで役割を有効または無効にする。
限定された役割は例外です。また、「管理者」、「私のユーザー・プロファイル」、「履歴レポートの表示」役割は無効化できません。
- 「**ユーザー**」タブで、ユーザーに役割を割り当てる、または役割からユーザーの割当てを削除する。
限定された役割は例外です。また、「管理者」、「私のユーザー・プロファイル」、「履歴レポートの表示」役割では、ユーザーの割当てを変更できません。
- 「**権限**」タブで役割に権限マスクを追加または削除する。
限定された役割は例外です。また、「管理者」、「私のユーザー・プロファイル」、「履歴レポートの表示」役割では、権限マスクの追加または削除はできません。

- 「権限」タブで権限マスクの名前をダブルクリックして、その権限マスクのタブ付きオブジェクト・ウィンドウを表示する。権限マスクのタブ付きウィンドウが表示されているときは、その権限マスクを変更できます。
- 「役割」ウィンドウでは、次の処理は実行できません。
- 権限マスクのオブジェクト・タイプを変更する。
 - 役割（またはその権限マスク）の例、または権限の例を変更する。これらの例には、「例」>「役割の例」または「権限の例」でアクセスできます。

「役割」ウィンドウを表示する

「役割」ウィンドウを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. 役割レコードをフィルタして、検索を絞り込むことができます。
たとえば、「フィルタ条件」を「説明」、「条件」を「含む」、「値」を「変更」にそれぞれ設定して「適用」をクリックすると、変更オブジェクトに関連したすべての役割が検索されます。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）
現在、PLM にあるすべての役割を表示するには、「条件」を「すべて表示」に設定して「適用」をクリックします。
役割のリストがテーブルに表示されます。役割テーブルには、各役割の名前、説明、および有効なステータスが表示されます。

「役割」ウィンドウ内のボタンを使用すると、様々な役割管理タスクを実行できます。

ボタン	アクション
新規	新規役割を作成します。203ページの「 新規役割を作成する 」を参照してください。
削除	選択された役割を削除します。使用中の役割は削除できません。
有効化	選択された役割を有効にします。
無効	選択された役割を無効にします。
インポート	テキスト・ファイルをインポートして新規役割を作成します。24ページの「 オブジェクト履歴 」を参照してください。
エクスポート	選択された役割の役割データをエクスポートします。24ページの「 オブジェクト履歴 」を参照してください。
更新	テーブルを更新して、役割のリストに関する最新の情報を反映させます。

役割を表示する

特定の役割を表示する手順は、次のとおりです。

1. 希望の「役割」のウィンドウで、役割をダブルクリックします。
その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。各役割のウィンドウ上部に表示されるボタンは、「名前を付けて保存」、「削除」、「エクスポート」です。

2. 役割の基本的なプロパティが「**一般情報**」タブに表示されます。これには、「名前」、「API 名」、「説明」、および「有効」が含まれます。
3. 役割に組み込まれる権限マスクが「**権限**」タブに表示されます。
 任意の行をダブルクリックすると、その権限マスク・オブジェクトが開きます。「**一般情報**」タブの「権限」フィールド（変更不可であるためグレー表示）に、その権限マスクの基礎となる基本権限が表示されます。
4. 「**ユーザー**」タブには、この役割が割り当てられているユーザーの一覧が表示されます。「**ユーザー・グループ**」タブには、この役割が割り当てられているユーザー・グループの一覧が表示されます。
 それぞれのタブで、ユーザーまたはユーザー・グループを追加したり削除できます。いずれかのタブでユーザーまたはユーザー・グループを削除した場合、役割の割当て（割り当てられている役割）のみがそのユーザー・オブジェクトから削除されることに注意してください。
5. 「**履歴**」タブには、この役割オブジェクトに対して実行されたアクションの履歴が表示されます。

役割使用のガイドライン

役割を扱う際は、次の手順に従います。

1. 役割と権限の要約レポートと権限マスクの詳細レポートを印刷し、使用中のAgile PLMシステムで現在アクティブになっている定義を確認します。20ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。

注意 権限マスクの詳細レポートは非常に長くなる可能性があるため、印刷する前にレポートを作成して表示することもできます。

2. 197ページの「[役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス](#)」に記載されているセキュリティに関する推奨事項を参照し、それに従ってください。
3. 必要に応じて、この章で説明する手順に従って、役割を変更および作成します。
4. ユーザーを適切な役割に割り当てます。200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

デフォルトのAgile PLM役割

「**役割**」ノードをダブルクリックすると、現在設定されている役割の一覧が表示されます。次の表に、デフォルト設定の役割の一覧と、各役割によってユーザーが実行できる内容の簡単な説明を示します。

ユーザーの任務に応じた数の役割を割り当てることができます。設定された役割をそのまま使用することもできますが、設定された役割をコピー（「名前を付けて保存」を使用）してからそのコピーを変更して新規の役割を作成したり、新規の役割を最初から作成することもできます。

注意 可能なかぎり、新しいものを作成するのではなく、Agile PLMのインストールで設定される役割や権限マスクをコピー（「名前を付けて保存」を使用）して適用してください。権限マスクの組合せの性質はすぐに明らかにならないため、役割については特に既存のものをコピーするようにしてください。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
管理者の役割 <p>次の役割は、Java クライアント（「管理」タブ）および Web クライアント（「ツールおよび設定」>「管理」）の管理者モジュールで作業するユーザーのみに適用されます。</p> <p>管理者の役割を調整する際に重要なのは、管理者権限の「適用先」プロパティです。231ページの「管理者権限と適用先機能」を参照してください。</p>		
管理者	すべてのクラス	すべての管理タスクを実行します。他の特殊な管理者役割（ディスカッション管理者、フォルダ管理者、価格管理者、プログラム管理者、品質管理者、リソース・プール管理者、ソーシング管理者、ユーザー管理者など）の機能はすべて、この役割よりも少なくなります。
ユーザー管理者	ユーザー、ユーザー・グループ	Agile 管理者が定義した管理タスク（作成、変更、削除）を実行します。
一般機能に関する Agile PLM の役割 <p>次の役割は、すべての Agile PLM ソリューションで作業するユーザーに適用されます。</p>		
承認/却下	変更、パッケージ、QCR、PSR、ATO、プロジェクト	ワークフローを使用してルーティング可能なオブジェクトを承認または却下し、アイテムと変更を読み取ります。
私が作成したオブジェクトの読み取りおよびディスカバリ	すべてのオブジェクト	ビジネス・オブジェクトの作成者は、常にそのオブジェクトを読み取りおよびディスカバリできます。デフォルトでは、この役割は有効で、すべての新規ユーザーのプロファイルに含まれます。既存のユーザー（つまり、アップグレードした従来のユーザー）の動作に変更はありません。 ユーザーからこの役割を削除すると、そのユーザーが作成したオブジェクトの読み取りおよびディスカバリはできなくなります。
ディスカッション管理者	ディスカッション	ディスカッション・オブジェクトを作成し、管理します。ディスカッションは、主に Agile PPM と PCM ソリューションで使用されますが、このクラスを他のソリューションで使用することもできます。
ディスカッション参加者 (限定) ディスカッション参加者	ディスカッション	ディスカッションの一部を管理します。（限定）ディスカッション・パートナーは通常、企業外部で働く人となります。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
フィールド・レベルでの 読取り	(他の役割と組み合 せて使用)	この役割 (「フィールド・レベルでの読取り」権限マ スクのみを含む) は、他の役割と組み合わせて使用され ます。ユーザーに割り当てられているすべての役割 で、「適用先」フィールドに読取り権限を強制します。 これによって、ユーザーの機能が少なくなります。
エクスポート	(エクスポート・ユー ティリティへのアク セスを許可)	ユーザーは、ディスカバリ権限と読取り権限を持っ ているオブジェクトをエクスポートできます。(エクス ポート権限マスクのみ含まれます。)
フォルダ管理者	ファイル・フォルダ	ファイル・フォルダを作成し、管理します。詳細は、396 ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。
フォルダ・マネージャ	ファイル・フォルダ	ファイル・フォルダを作成し、管理します。詳細は、396 ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。
すべてのユーザーを マークアップ	ファイル・フォルダ (対象アイテムの添 付ファイル)	ファイル・フォルダまたは変更指示の対象アイテムの 添付ファイルに対して、他のユーザーのレッドライ ン・マークアップを変更します。ユーザーには、ファ イル・フォルダ・オブジェクトまたは変更指示オブ ジェクトに対する読取り権限が必要です。詳細は、401 ページの「 レッドライン・マークアップに関するデ フォルトの役割と権限 」を参照してください。
自分をマークアップ	ファイル・フォルダ (対象アイテムの添 付ファイル)	ファイル・フォルダまたは変更指示の対象アイテムの 添付ファイルに対して、ユーザー自身のレッドライ ン・マークアップを作成および変更します。ユーザー には、ファイル・フォルダ・オブジェクトまたは変更 指示オブジェクトに対する読取り権限が必要です。詳 細は、401ページの「 レッドライン・マークアップに関 するデフォルトの役割と権限 」を参照してください。
私のファイル・フォルダ	ファイル・フォルダ	割当先が作成したファイル・フォルダの読取りを許可します。
私のユーザー・プロファ イル (限定) 私のユーザー・ プロファイル	ユーザー	「個人設定」でユーザー自身のプロフィール・プロパティ を表示および変更し、パーソナル・ユーザー・グループを 作成および変更します。すべてのユーザーに割り当てられ る、Agile PLM システムを使用するために必須の役割です。
(限定) 許可	すべてのオブジェクト	アクセス・コントロール・リスト (ACL) 機能を使用して、 計画的かつ有限的な方法で、ユーザーに役割を与えます。
Engineering Collaborationの役割 次の役割は、Agile EC ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
デザイン・エンジニア	ファイル・フォルダ (デザイン・クラス・ オブジェクト)	デザイン・クラス・オブジェクトおよびデザイン・モ デル構造を作成し、管理します。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
Product Collaborationの役割 次の役割は、Agile PC ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
変更分析者	変更、アイテム、製造元、製造元部品、ファイル・フォルダ	アイテムと変更を作成し、ワークフローを使用して変更のルートおよびリリースのプロセスを管理します。さらに、BOM、MPN、AML を作成し、ファイル・フォルダの参照を管理します。
コンポーネント・エンジニア	アイテム、製造元、製造元部品、製造元依頼 (MCO)	製造元変更オブジェクトを作成し、MCO のルートおよびリリースのプロセスを管理します。
確定者	変更、アイテム、製造元部品、製造元、価格	アイテムおよび多数の機能を基本クラスのリストとともに確定します(この役割は変更分析者と似ていますが、機能は少なくなります)。
アイテム・コンテンツ・マネージャ	変更、アイテム	アイテムを作成し、変更を作成および提出します。
製造元コンテンツ・マネージャ	アイテム、製造元、製造元部品、製造元依頼 (MCO)	アイテム、製造元、製造元部品を作成し、MCO を作成および提出します。
変更(リリース済アイテム)	アイテム	リリースされたアイテムの説明を変更します(この役割には 1 つの権限マスクのみ含まれます)。
パートナ	パッケージ	パッケージ・オブジェクトを作成し、提出します。
製品コンテンツ読取り専用	変更、アイテム、製造元、製造元部品	ディスカバリ、読取り、コメント、取出し、印刷、送信、およびアイテム表示、変更、製造元、製造元部品
Product Quality Managementの役割 次の役割は、Agile PQM ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
組織マネージャ	サプライヤ、顧客	サプライヤと顧客を管理します (PCM ソリューションにも適用されます)。
品質管理者	品質変更要求	是正・予防処置を管理し、プロセスを検証します。
品質分析者	製品サービス依頼	品質問題を提示し、解決策を管理します。
品質分析ユーザー	(品質分析アプリケーション)	PQM ユーザーが品質分析アプリケーションにアクセス (実行、ディスカバリ、読取り) するのを許可します。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
Product Cost Managementの役割 次の役割は、Agile PCM ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
組織マネージャ	サプライヤ、顧客	サプライヤと顧客を作成し、管理します (PQM ソリューションにも適用されます)。
価格管理者	価格、価格変更	PCO を含む価格管理アクティビティを管理します。
価格マネージャ	価格、価格変更	価格オブジェクトおよび PCO の作成を通じて価格情報を管理します。
(限定) 価格調整者	価格、価格変更	価格オブジェクトおよび PCO の作成を通じて価格情報を管理しますが、価格マネージャの役割よりも制限されています。通常はサプライヤに与えられる役割です。
見積依頼マネージャ	見積依頼、見積依頼回答	見積依頼を作成し、見積依頼プロセスを管理します。
(限定) 見積依頼回答者	見積依頼回答	見積依頼に回答します。通常、この役割はサプライヤ・ユーザーに与えられます。
ソーシング管理者	ソーシング・プロジェクト、見積依頼	ソーシング活動を管理します。すべてのソーシング・プロジェクトおよび見積依頼を表示および変更する機能も含まれます。
ソーシング・プロジェクト・マネージャ	ソーシング・プロジェクト	ソーシング・プロジェクトを作成し、管理します。
(限定) サプライヤ・マネージャ	サプライヤ	サプライヤ情報を管理します。サプライヤ自身の組織に限定されます。サプライヤ組織内部でユーザーを作成する機能も含まれます。
Product Portfolio Managementの役割 次の役割は、Agile PPM ソリューションで作業するユーザーに適用されます。(注意: リリース 9.3.0 では、基本クラス「プログラム」は「プロジェクト」に変更されました。ただし、PPM の役割と権限マスクに「プログラム」という用語がまだ使用されている場合があります。)		
エグゼクティブ	プロジェクト	一致カテゴリを持つすべてのプロジェクトへのグローバル読取りアクセスです。たとえば、プロジェクトが北アメリカ地域と関連付けられており、ユーザーにすべての北アメリカに対するエグゼクティブ権限がある場合は、そのプロジェクトを読み取ることができます。
ポートフォリオ分析ユーザー	(ポートフォリオ分析アプリケーション)	PPM ユーザーがポートフォリオ分析アプリケーションにアクセス (実行、ディスカバリ、読取り) するのを許可します。
プログラム管理者	プロジェクト	完全なプロジェクトを作成し、管理します。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
プログラム・マネージャ	プロジェクト	プロジェクトのルートおよびリリースのプロセスを作成し、管理します。
プログラム・チーム・メンバー	プロジェクト	プロジェクトの一部を管理します。
リソース・プール管理者	プロジェクト	リソース・プールを作成し、管理します。
リソース・プール所有者	プロジェクト	リソース・プールを管理します。
タイム・シート管理者	プロジェクト	システムで作成されたすべてのタイム・シートに対する管理タスクを実行します。
レポートの役割 次の役割は、レポートを使用するユーザーに適用されます。		
レポート・マネージャ	レポート	自分が作成していないレポートを含む、すべてのレポートにアクセスし、管理します。
レポート・ユーザー	レポート	新規カスタム・レポートを作成し、ユーザー自身が作成したレポートを管理します。
履歴レポートの表示	レポート、履歴レポート・ファイル・フォルダ	以前に実行したレポートの特定のインスタンスを表示します。これは編集不可な役割であり、レポートのインスタンスがユーザーと共有されている場合には、必ず自動的に割り当てられます。
Agile Content Serviceの役割 次の役割は、ACS ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
コンテンツ・マネージャ	転送、パッケージ	CTO オブジェクト、ATO オブジェクト、およびパッケージ・オブジェクトの作成、変更、ルート、リリース、実装を行います。
Product Governance & Complianceの役割 次の役割は、Agile PG&C ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
適合性管理者	デklarレーション、部品分類、含有基準、サブスタンス	PG&C オブジェクトの作成と管理、PG&C レポートの実行、サプライヤーへのマテリアル・デklarレーションのルートを行います。
(限定) マテリアル・プロバイダ	デklarレーション	マテリアル・デklarレーションの作成と変更を行い、完成します。通常、この役割はサプライヤー・ユーザーに与えられます。

役割	適用先基本クラス (または他の PLM ユーティリティ)	説明
Agile Configuration Propagationの役割 次の役割は、ACP ソリューションで作業するユーザーに適用されます。詳細は、最新の ACP ユーザー・ガイドを参照してください。		
(ACP) 管理者	すべてのクラス	継承タスクを実行します。
(ACP) ユーザー管理者	ユーザー、ユーザー・グループ	ユーザーおよびユーザー・グループに限定した継承タスクを実行します。

役割の例

Agile PLM のインストールには、読取り/書込み可能なバージョンと読取り専用のバージョンの両方で、役割の例または役割の参照コピー含まれています。「例」ノード・フォルダの下に「**役割の例**」ノードをダブルクリックすると、参照コピーが表示されます。これによって、インストール時の役割のデフォルト・コピーをいつでも利用できます。デフォルトの役割を復元するには、「例」の役割のコピーを作成します（「名前を付けて保存」を使用）。

たとえば、インストール時には次の 2 つの変更分析者の役割が提供されます。

- 「**変更分析者**」 - ユーザーに割当て可能な、変更できる（読取り/書込み）役割です。
- 「**例 - 変更分析者**」 - 「変更分析者」役割の変更不可能な（読取専用）参照コピーです。

注意 Agile PLM ユーザーがルーティング可能なオブジェクトのステータスを別のステータス（「中断」から「CCB」など）に移行できないときは、多くの場合、そのユーザーに、これらのステータスを変更するための権限がありません。このような場合には、割り当てられている役割とその役割に含まれる権限マスクを確認してください。

役割の例の詳細は、205 ページの「[役割の例を使用する](#)」を参照してください。

限定された役割

役割の中には、指定されたオブジェクトに対して操作できる範囲が限定されているものがあります。そのような役割の名前の前には、「（限定）」の表記があります。このような役割の目的は、名前の前に「（限定）」が表記されていない同名の役割と同じです。これらは通常、サプライヤ組織のメンバーに割り当てられます。つまり、企業外部で働く Agile PLM ユーザーです。

役割ベースの機能拡張

ユーザー管理者の機能拡張

PLM 役割の「ユーザー管理者」には、「ユーザー管理者用の管理アクセス」という権限マスクが含まれます。その「適用先」プロパティによって、アクセス可能なユーザー関連管理者ノード（ユーザー、ユーザー・グループなど）が決定します。ユーザー管理者は、Web クライアントでユーザー固有の機能にもアクセスできます（「[ツールおよび設定](#)」>「[アドレス帳](#)」でアクセスします）。

「ユーザー管理者」役割には、「ユーザー管理者」という権限（および権限マスク）も含まれます。「ユーザー管理者」権限マスクの「適用先」プロパティには、PLM の役割が表示されます。これは、ユーザー管理者は、PLM ユーザーに対して指定の役割のみを割り当てることができるように設定できることを意味します。

詳細は、230 ページの重要なトピック「[適用先機能](#)」に含まれる、233 ページの「[管理者アシスタントの構築オプション](#)」で説明されています。

詳細検索のセキュリティ

詳細検索セキュリティに、次の 2 つの制限が追加されました。

最初の制限は、ユーザーが任意のタイプの検索（簡易検索、詳細検索、パラメータ検索）を作成する際に、「検索用語」フィールドに適用されます。クラスのドロップダウン・リストに表示されるのは、ユーザーがディスカバリ権限を割り当てられたクラスのみになりました。

同様に、「フィールド」条件（ドロップダウン・リスト）には、ユーザーに読取り権限（またはフィールド・レベルでの読取り権限）がないフィールドは表示されなくなりました。フィールド・レベルでの読取りを確実に制限するために、ユーザーの読取り権限マスクの「適用先」プロパティには、ユーザーが読取り可能なフィールドのみが含まれる必要があります。さらに、ユーザーにはフィールド・レベルでの読取り権限マスクが割り当てられている必要があります（たとえば、「フィールド・レベルでの読取り」役割を割り当てます）。

ユーザーがナビゲーション・ウィンドウの「[検索](#)」タブにある「[ワークフロー・ルーティング](#)」フォルダを表示するには、ユーザーのプロファイル>「[検索](#)」フィールドで、「ワークフロー・ルーティング」を「[選択肢](#)」テーブルから「[選択済](#)」テーブルに移動する必要があります。

役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス

重要 このセクションは、セキュリティとメンテナンスのプランを作成していない場合の潜在的なリスクについて警告し、PLM で問題が発生したときの簡単なトラブルシューティング手順を説明することを意図しています。この問題については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当に相談するか、または Agile サポートにお問い合わせください。

このセクションで説明する推奨プランに従うことにより、セキュリティの侵害や変更管理プロセスの中断、システムを以前のセキュリティ設定に戻す場合の混乱を避けることができます。

注意 このセクションの推奨事項に従わない場合、管理者の知らないうちに、ユーザーが禁止されているアクションを実行できるようになる、ユーザーが必要なアクションを突然実行できなくなる、という重大な結果を招くことがあります。

Agile PLM システムで不正や予期しない改変が発生した場合、基本的な許可を復旧するためにのみ通常のシステム管理を中断することになり、それ自体が新たな侵害につながる可能性があります。

Agile Configuration Propagationを使用して管理設定を復元する

管理者は Agile Configuration Propagation (ACP) にアクセスして、同一バージョンの Agile インスタンス間で設定を継承できます。（「設定」とは、特定の Agile インスタンスにあるすべての Java クライアント管理者ノードの設定内容を指す一般用語です。）1 回の継承で、インスタンスの管理者データを全部または選択した一部を継承できます。

後続のサブセクションでは、管理設定のエクスポートおよび管理者レポートの実行について説明し、発生する可能性がある問題のトラブルシューティングや診断の手順についても説明します。これらの方法により、PLM の実働環境のインスタンスで役割または権限に問題が検出された場合に、管理者モジュール内から問題を解決できます。

ただし、実働環境のインスタンスで役割または権限に発生した問題が深刻かつ広範囲（PLM アプリケーションの他の部分まで）に影響を与える場合は、ACP を使用して継承作業を実行し、正しい（検証済）設定の復元が必要になる場合があります。その場合は、このリリースの Agile Configuration Propagation ガイドを参照してください。

セキュリティとメンテナンス推奨プラン

Agile PLM の役割の機能はシステム全体に大きな影響を与えるため、変更するには十分に注意する必要があります。設定とメンテナンスに関する次の推奨事項に従ってください。

- 役割と権限を設定する作業は、1 名の担当者に割り当てることをお勧めします。担当者を変更する場合は、元の管理者が新しい担当者に次の事項を説明するようにしてください。
 - 役割と権限の設定
 - 変更されたこと
 - 役割と権限に対する変更を追跡するシステム
- 役割または権限マスクの変更や作成を行う前に、役割のエクスポートを実行（「役割」ウィンドウですべての役割を選択して「**エクスポート**」をクリック）し、役割と権限の要約レポートと権限マスクの詳細レポートを実行します。後でどのような変更が特定の結果につながったかを見きわめる必要がある場合に比較できるように、結果を保存します。権限の設定に対する変更のログを記録します。エクスポートの詳細は、24 ページの「[オブジェクト履歴](#)」を参照してください。レポートの詳細は、20 ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。
- 提供された役割と権限を使用して、必要な変更のみ行います。
- 混乱とセキュリティの侵害を避けるには、「アクション - 条件 - オブジェクト・タイプ」権限マスクの命名規則（209 ページの「[権限と権限マスクについて](#)」を参照）に従ってください。少なくともこれら 3 つの基本特定要素を含め、一貫した語順を保ってください。インストール時に提供される権限マスクの名前を参考にしてください。

- いったん役割と権限を割り当てた後では、変更のないようにします。たとえば、設計変更指示がルートされた後に、変更作成者または CCB メンバーのディスカバリ権限を削除すると、作成者または CCB メンバーは通知を受け取りますが、変更は表示できません。
- ユーザーがシステムを使用している間は、役割と権限の割当てを変更しないでください。割当てを変更した場合、ユーザーが Agile PLM クライアントをログアウトし、再起動するまで、一部の変更が完全に有効になりません。

データベースのバックアップ手順

変更を実行する前に、Agile PLM データベース全体をバックアップし、管理者レポートを実行することをお勧めします。データベースのバックアップを使用して、以前のデータベースを再構築できます。変更前と変更後のレポートを比較し、Agile PLM のセキュリティの変更原因を突き止めることができます。

Agile PLM 管理者の設定をエクスポートする

24 ページの「[オブジェクト履歴](#)」の手順に従ってください。役割と権限の現在の設定のバックアップが終了後、レポートを実行します。

注意 設定をインポートする場合は、同じデータベースにインポートすることを確認してください。データベースが異なると、Agile PLM 管理データが一致しません。

レポートを実行する

管理者レポートを実行する場合は、「Roles_072601_3pm.csv」のようにファイル名にレポートの日時を含めてください。レポート・ファイルを保存しておくと、後でレポート同士を比較して変更を追跡できます。

注意 システムのユーザー数によっては、権限マスクの詳細レポートは非常に長くなることがあります (数百ページ)。

役割と権限の要約レポートを実行する手順は、次のとおりです。

1. ナビゲーション・ウィンドウの「分析とレポート」タブを選択します。「分析とレポート」フォルダが表示されます。
2. 「標準レポート」>「管理者レポート」フォルダを展開します。
3. 「役割と権限の要約レポート」をダブルクリック (Java クライアント) またはクリック (Web クライアント) します。「役割と権限の要約レポート」ページが表示されます。
4. 「実行」をクリックします。「添付ファイルの取出し」ウィンドウが表示されます。
5. 「続行」をクリックします。この操作によって、表示されているデフォルトのエンコード・タイプ (西ヨーロッパ言語 (ISO)) が受諾されます。別のエンコード・タイプを使用する必要がある場合は、ドロップダウン・リストから選択し、「続行」をクリックします。
6. 「ファイルのダウンロード」と「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を指定します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: Roles072602_3pm.csv
8. ダウンロードを完了した後は、「添付ファイルの取出し」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

権限マスクの詳細レポートを実行する手順は、次のとおりです。

1. ナビゲーション・ウィンドウの「分析とレポート」タブを選択します。「分析とレポート」フォルダが表示されます。
2. 「標準レポート」>「管理者レポート」フォルダを展開します。
3. 「権限マスクの詳細レポート」をダブルクリック（Java クライアント）またはクリック（Web クライアント）します。「権限マスクの詳細レポート」ページが表示されます。
4. 「実行」をクリックします。「添付ファイルの取出し」ウィンドウが表示されます。
5. 「続行」をクリックします。この操作によって、表示されているデフォルトのエンコード・タイプ（西ヨーロッパ言語（ISO））が受諾されます。別のエンコード・タイプを使用する必要がある場合は、ドロップダウン・リストから選択し、「続行」をクリックします。
6. 「ファイルのダウンロード」と「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を指定します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: **Privmask072602_3pm.csv**
8. ダウンロードを完了した後は、「添付ファイルの取出し」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

注意	システムのユーザー数によっては、権限マスクの詳細レポートは非常に長くなることがあります（数百ページ）。
-----------	---

役割と権限の要約レポートおよび権限マスクの詳細レポートを実行することにより、現在の役割と権限の設定の記録を作成できます。これらのレポートは、Microsoft Excel などの分析アプリケーションで開くことのできる.csv 形式（カンマ区切り）の ASCII テキスト・ファイルです。

ワード・プロセッサを使用して、同じレポートの 2 つのバージョンの比較もできます。セキュリティ設定に対して行った変更が予期しない結果を招いた場合は、これらのレポートを再度実行し、ワード・プロセッサでレポート同士を比較して、変更を確認できます。

役割を使用する

既存の役割を変更することや、新しい役割を作成できます。役割を作成したら、ユーザーに割り当てることができます。このセクションでは、次のような役割管理タスクについて説明します。

- 役割を変更する
- 新規役割を作成する
- 役割を削除する

役割を変更する

役割を開いた後は、その名前、説明、有効化または無効化の設定、権限マスクのリスト、割り当てるユーザーなどを変更できます。「例 - 読取り専用」の役割のプロパティは変更できません。

役割の名前または説明を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. 「名前」フィールドで、一意の名前を入力します（最大 255 文字）。

注意 「管理者」、「私のユーザー・プロフィール」、「履歴レポートの表示」および限定された役割は、名前を変更できません。

5. 「説明」のフィールドで、短い説明を入力します（最大 510 文字）。
6. 「保存」をクリックします。

役割を無効化する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 「無効化」ボタンをクリックします。

注意 役割を開き、「有効」プロパティを変更することで、役割を無効化することもできます。「管理者」、「私のユーザー・プロフィール」、「履歴レポートの表示」および限定された役割は、無効化できません。

権限を役割から削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. 「権限」タブをクリックします。
5. 削除する権限を選択します。
6. 「削除」をクリックして、選択した権限を役割から削除します。
7. 「削除」ダイアログで「はい」をクリックします。

権限を役割に追加する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. 「権限」タブをクリックします。
5. 「役割を追加」をクリックし、「権限の選択」ダイアログ・ボックスを開きます。

6. 「**選択肢**」リストから権限マスクを選択し、右矢印を使用して権限マスクを「**選択済**」リストに移動します。
7. 完了したら、「**OK**」をクリックします。

ユーザーを役割から削除する手順は、次のとおりです。

1. 「**ユーザー設定**」で「**役割**」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. 「**ユーザー**」タブをクリックします。
5. 削除するユーザーを選択します。
6. 「**削除**」をクリックして、選択したユーザーを、割り当てられているユーザーのリストから削除します。
7. 「削除」ダイアログで「はい」をクリックします。

ユーザーを役割に追加する手順は、次のとおりです。

1. 「**ユーザー設定**」で「**役割**」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. 「**ユーザー**」タブをクリックします。
5. 「**ユーザーを追加**」をクリックし、「ユーザーの選択」ダイアログ・ボックスを開きます。
6. 矢印を選択および使用し、「**名前**」リストから「**受信者**」リストにユーザーを移動します。
7. 完了したら、「**OK**」をクリックします。

属性の構築とテスト、読取り/変更権限、役割

Agile の権限モデルは高性能で柔軟性がありますが、複雑でもあります。次のタスクは、属性（事前定義の属性とユーザー定義の属性）、権限マスク、役割をカスタマイズした際に、すべてが互いに作動していることを確認するための簡単な手順です。

属性が読取りまたは変更権限マスクおよび役割と作動するかどうかをテストする手順は、次のとおりです。

1. クラス、たとえば部品クラスで、新しい「**ページ 2**」属性を作成します。この例では、「**部品.ページ 2.Test01**」を作成します。（71ページの「[属性、ユーザー設定フィールド、および読取りフィールド](#)」を参照してください。）
2. 「部品の読取り」と「部品の変更」と呼ばれるテスト権限マスクを作成します。これらをTest01 属性に適用します。（230ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。239ページの「[ディスカバリ権限と読取り権限](#)」を確認する必要があります。）
3. 「部品の読取り」と「部品の変更」権限マスクを「コンテンツ・マネージャ」役割に割り当てます。（213ページの「[役割に権限マスクを追加する](#)」を参照してください。）

4. 「コンテンツ・マネージャ」役割をユーザーに割り当てます。このユーザーは、この目的のために作成したテスト・ユーザーです。（このタスクは、このセクションに先行します。）
5. クライアントをログアウトし、このユーザーとしてログインし、Test01 フィールドの読取りや変更ができるかどうかを確認します。

注意 この手順は、属性、権限、役割を構築し、テストするための概要です。組織を対象として Agile PLM を設定するタスクは非常に大規模になるため、この重要なタスクには、オラクル社コンサルティングの Agile 担当のコンサルタント・サービスを要請することをお勧めします。

新規役割を作成する

新規役割を作成する前に、現在の役割を確認する必要があります。役割と権限の要約レポートを実行して、現在の役割とその権限マスクの一覧を確認してください（199ページの「[レポートを実行する](#)」を参照してください）。

新規役割を作成するには、既存の役割をコピーし、それに必要な変更を加えます（203ページの「[名前を付けて保存](#)」を使用して新規役割を作成する」を参照してください）。最初から新規役割を作成することもできます（204ページの「[新規役割を最初から作成する](#)」を参照してください）。

注意 ある役割を削除した場合、新規役割を作成するときや既存の役割の名前を変更するときに、削除した役割の名前を再び使用できます。

作業を開始する前に

新規役割を作成する前に、次の質問に答えてください。

- 新規役割にどのような名前を付けるか。
- 新規役割にどのユーザーを割り当てるか。
- この役割に割り当てられたユーザーが Agile PLM で何を実行できるようにするか。
- この役割に割り当てられたユーザーが Agile PLM で何を実行できないようにするか。
- 1 つ以上の既存の役割を変更することで意図する結果を実現できるか。
- 最初から役割を作成しなくてもすむように、コピーして変更することのできる既存の役割があるか。

「名前を付けて保存」を使用して新規役割を作成する

既存の役割に新しい名前を付けて複製すると便利な場合があります。

注意 役割の例の 1 つを複製して新規役割を作成することは別のプロセスであり、結果が異なります。両方のプロセスを検討して、どちらのプロセスが要件に適しているかを確認してください。205ページの「[役割の例を使用する](#)」を参照してください。

既存の役割から新規役割を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ・バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 該当する役割をダブルクリックします。その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
4. 「名前を付けて保存」ボタンをクリックします。「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 役割の新しい名前と API 名を入力します。
6. 「OK」をクリックします。

新規役割が新しい名前で作成され、タブ付きのウィンドウが表示されます。新規役割の説明は、コピー元の説明と同じになります。この時点で、説明は必要に応じて変更できます。200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

元の役割に割り当てられた権限マスクのリストは、新規役割にも割り当てられます。ただし、新規役割にはユーザーは割り当てられていません。

たとえば、元の役割にアイテムの変更権限マスクが含まれている場合は、新規役割にもアイテムの変更権限マスクが含まれます。

注意	読取り専用の役割の例には、読取り専用の権限の例が含まれています。「名前を付けて保存」を使用して役割の例のコピーを作成した場合、役割の例から権限マスクがコピーされる方法は、前述の方法とは異なります。詳細は、205ページの「 役割の例を使用する 」を参照してください。
-----------	--


7. 次のいずれかまたは両方の操作を行います。
 - 「権限」タブで、役割に不要な権限マスクを削除します。
 - 「権限」タブで、役割に含める権限マスクを追加します。

権限マスクを追加または削除する方法は、200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。
8. 新規役割を特定のユーザーに割り当てる場合は、200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

新規役割を最初から作成する


役割を最初から作成することが必要な場合もあります。

新規役割を最初から作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「役割の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 新規役割の名前、API 名、および説明を入力します。
4. 役割を有効または無効にするには、「有効」ドロップダウン・リストで「はい」または「いいえ」を選択します。役割の作成中は役割を無効にしておくことをお勧めします。「いいえ」を選択してください。
5. 次のいずれかの操作を行います。
 - 権限マスクやユーザーを割り当てずに役割の作成を終了するには（権限マスクやユーザーは後で割り当てることができます）、「完了」をクリックします。
 - 権限マスクを役割に割り当てるには、「権限」フィールドの横にある  をクリックします。「権限の選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。手順 6 に進みます。

6. 「**選択肢**」リストから権限マスクを選択し、右矢印を使用して権限マスクを「**選択済**」リストに移動します。
7. 完了したら、「**OK**」をクリックします。

注意 ダイアログ・ボックスで「**新規作成**」をクリックして新規権限マスクを作成することもできます。「権限の作成」ダイアログ・ボックスが開きます。236ページの「[新規権限マスクを最初から作成する](#)」を参照してください。（手順 3 から開始します。）新規権限マスクが役割に追加され、権限マスクは、「**権限**」ノードの利用可能な権限マスクのリストに表示されます。

8. 次のいずれかの操作を行います。
 - a. ユーザーを割り当てずに新規の役割の作成を終了するには、「**完了**」をクリックします。役割とその権限マスクの作成中は、この操作を行います。
 - b. 特定のユーザーを新規役割に割り当てるには、「**ユーザー**」フィールドの横にある  をクリックします。アドレス帳が開きます。手順 9 に進みます。
9. 「**名前**」タブからユーザーを選択します。「**グループ**」タブからグループを選択します。次に、右矢印を使用してユーザーとグループを「**受信者**」リストに移動します。
10. 完了したら、「**OK**」をクリックします。
11. 新規の役割の定義が完了したら、「**完了**」をクリックします。

新しい役割名が「役割」テーブルに表示されます。（テーブル内に役割が表示されていない場合は、「**更新**」をクリックします。）必要に応じて権限やユーザーを追加します。手順 4 で役割を無効にした場合は、「**有効**」フィールドが「いいえ」になっています。ユーザーへの役割の割当てを有効にするには、その役割を有効にする必要があります。

役割の例を使用する

Agile PLM には、いくつかの役割の例が用意されており、独自の役割を作成する際に参考または基本にできます。これらは、「**役割の例**」ノードの「**例**」ノード・フォルダの下に保存されています。役割の例は読取り専用であるため、変更することはできません。ただし、「名前を付けて保存」を使用して役割の例のコピーを作成し、コピーを変更できます。

役割の各例は、Agile PLM の初回インストール時に提供される事前設定済の役割の 1 つに対応しています。事前設定済の役割や権限を変更した場合は、役割の例を表示して、事前設定済の役割や権限の元の構造と変更内容とを比較できます。

役割の例内の権限マスクの例

役割の例には、権限マスクの例が含まれています。権限マスクの例も読取り専用であるため、変更することはできません。「名前を付けて保存」を使用して役割の例のコピーを作成した場合、読取り専用の権限の例のコピーが新規役割に含まれます。

たとえば、「例 - 作成者」役割には「例 - ステータスの変更 - 変更の提出」という権限マスクの例が含まれています。「名前を付けて保存」を使用して「例 - 作成者」役割のコピーを作成した場合、新規役割には「例のコピー - ステータスの変更 - 変更の提出」という権限マスクが含まれます。この権限マスクのコピーは、役割の例をコピーする前にはデータベース内になかった新規の権限マスクです。新規役割内のすべての権限マスクは同様の方法でコピーされます。

「名前を付けて保存」を使用して役割の例から新規役割を作成する

役割の例から新規役割を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「例」で「役割の例」をダブルクリックします。「役割の例」ページが表示されます。
2. 役割レコードをフィルタして、検索を絞り込むことができます。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）
3. 「役割の例」ウィンドウで、該当する役割の例をダブルクリックします。その役割の例のタブ付きウィンドウが表示されます。
4. 「名前を付けて保存」ボタンをクリックします。「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 役割の新しい名前と API 名を入力します。
6. 「OK」をクリックします。

新規役割が新しい名前で作成され、タブ付きのウィンドウが表示されます。新規役割の説明は、コピー元の役割の例の説明と同じになります。この時点で、説明は必要に応じて変更できます。200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

新規役割内の権限マスクは、役割の例内の権限マスクの例のコピーです。詳細は、前述の「役割の例内の権限マスクの例」を参照してください。

7. 次のいずれかまたは両方の操作を行います。
 - 「権限」タブで、役割に不要な権限マスクを削除します。
 - 「権限」タブで、役割に含める権限マスクを追加します。

権限マスクを追加または削除する方法は、200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

権限マスクの名前を変更したり、権限マスクの条件や適用先プロパティを変更することもできます。

「権限」タブで権限マスクをダブルクリックして、タブ付きのオブジェクト・ページを表示します。権限マスクのウィンドウを表示すると、次のことができるようになります。

 - 名前または説明を変更する。
 - 権限マスク条件を変更する（「権限マスク条件を変更する」を参照してください）。
 - プロパティに適用する権限マスクを変更する（231ページの「[「適用先」プロパティを表示して変更する](#)」を参照してください）。
8. 新規役割を特定のユーザーに割り当てる方法は、200ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

役割を削除する

役割が不要となり、ユーザーも割り当てられていない場合は、この役割を削除できます。

役割を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。「役割」ウィンドウが表示されます。
2. 削除する役割をクリックします。その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
3. 「ユーザー」タブをクリックして前面に表示します。

注意 ユーザーまたはユーザー・グループに割り当てられている役割は削除できません。役割を削除するには、その前に、ユーザーとユーザー・グループをすべて削除する必要があります。削除する準備が整うまで、割り当てられているユーザーとユーザー・グループへの影響を遮断する必要がある場合は、いつでも役割を無効にできます。

4. 「ユーザー」タブのリストにユーザーが表示されている場合は、テーブルのすべてのユーザーを選択します。
5. 「削除」をクリックして、「ユーザー」タブを消去します。
6. 「ユーザー・グループ」タブについて、手順 3、4、および 5 を繰り返します。
7. 「削除」ボタンをクリックします。

権限と権限マスク

この章のトピック

■ 権限と権限マスクについて	209
■ 権限と権限マスクを理解する	209
■ デフォルトのAgile PLM権限	213
■ 権限マスクの構成要素	223
■ 権限マスクを有効にする	229
■ 権限マスクを変更する	230
■ 新規権限マスクを作成する	235
■ 条件と適用先属性のオプションを組み合わせる	237
■ ディスカバリ権限と読取り権限	239
■ 変更権限	244
■ ユーザー作成条件を適用する	248
■ 権限マスクの条件変数を使用する	249

この章では、Agile PLM の事前設定済の権限および権限マスクを使用する方法と、権限および権限マスクを新規に作成する方法について説明します。

権限と権限マスクについて

この章では、権限と権限マスクの構造について重点的に説明します。Agile PLM でユーザーが実行できるアクション（作成、送信、キャンセルなど）は権限によって異なります。権限と再利用可能な条件との組合せにより、ユーザーのアクションを管理するフィルタの機能を果たす権限マスクが構成されます。権限マスクのグループ化により役割が構成され、これにより、変更管理プロセスで共通した機能を果たすユーザー・グループに対して共通した権限を割り当てることができます。

Agile PLM には様々な事前設定済の役割、権限マスク、再利用可能な条件が含まれています。これらは、それぞれ「役割」、「権限」、「条件」の各ノードからアクセスできます。事前設定済の役割と権限マスクは、必要に応じて変更できます。また、特定の要件に合わせて役割と権限マスクを新規作成できます。

注意 ユーザーに役割や権限マスクを割り当てると、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後に有効となります。

権限と権限マスクを理解する

「権限」ウィンドウを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で、「権限」ノードを展開します。「権限」ノードを展開すると、すべての基本権限（権限マスクのアクション・コンポーネント）がサブノードとして表示されます。
2. 「権限」サブノードをダブルクリックします。「<選択した権限>権限」というページが開きますが、権限マスクは一覧表示されません。たとえば、「管理者」をダブルクリックすると「管理者権限」ページが開きます。いくつかのフィルタ条件を設定する必要があります。「条件」フィールドを「すべて表示」に設

定し、右側の「適用」ボタンをクリックすると便利です。管理者権限を使用する権限マスクがすべて表示されます。

重要 ページ名は、この例の「管理者権限」のように表示されますが、これは、「**管理者権限を使用する権限マスク**」という意味です。

- 返された権限レコードをフィルタすると、権限マスクの検索をさらに絞り込むことができます。この例では、「条件」を「含む」に設定し、「値」に「ユーザー」を指定した新しいフィルタを設定して「適用」をクリックすることで、返された結果がユーザー管理者用の管理アクセスのみに絞り込まれます。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

権限マスク・テーブルの列見出しをクリックすると、列ごとにテーブルを分類できます。

権限マスクを表示する

役割を構成する権限マスクによって、ユーザーが実行できるアクションが定義されます。Agile PLM では、インストールされる役割に対して一連の事前設定済の権限マスクが提供されます。役割には少なくとも 1 つの権限マスクがあります。

特定の役割の権限マスクを表示する手順は、次のとおりです。

- 「ユーザー設定」で「役割」をダブルクリックします。
- 「役割」ウィンドウで、役割をダブルクリックします。役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
- 「権限」タブをクリックします。権限マスクがテーブルに表示されます。

権限マスクのプロパティを表示する

役割を構成する権限マスクにはそれぞれ、管理対象である権限を定義する独自のプロパティがあります。次の表に、使用可能な権限マスクのプロパティを示します。各権限マスクに対してすべてのプロパティが設定可能であるとはかぎりません。

プロパティ	説明
名前	名前（例: 「再開日の変更」）。 255 文字以内の権限マスクの名前です。
説明	510 文字以内の権限マスクの説明（例: 「リリース後の再開日の変更」）。
有効	「はい」または「いいえ」。「いいえ」に設定すると、権限を有効にせずに作業できます。これは権限を設定する際に便利です。
権限（管理アクション）	権限（例: 作成）。 「作成」、「削除」、「変更」、「印刷」、または「読取り」といった、権限（アクション）を特定します。権限マスクには権限を 1 つのみ定義します。 このプロパティは、権限マスクの作成後には編集できません。

プロパティ	説明
権限条件	<p>その権限マスクに対して選択する再利用可能な条件。各権限マスクに対する再利用可能な条件を 1 つのみ選択します。選択した再利用可能な条件によって、権限マスクの 2 つの重要なプロパティが定義されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ オブジェクト・タイプ - 権限マスクの Agile PLM オブジェクト・タイプを特定します。 □ 条件 - 権限を適用する条件を指定します（例: 「カバー・ページ.ステータス、等しい、ステータス・タイプ.リリース済」）。再利用可能な条件では、オブジェクト・タイプに関するすべてのフィールドと条件の値を指定します。
適用先	<p>管理者、読取り、変更、Microsoft Project、または「ダッシュボード」タブ表示の権限のみ。</p> <p>変更権限マスクまたは読取り権限マスクが適用される属性を指定します（例: 「カバー・ページ.作成日」）。239ページの「ディスカバリ権限と読取り権限」および 244ページの「変更権限」を参照してください。</p> <p>管理者権限マスクが適用される管理者ノードを指定します（例: 「ユーザー」）。230ページの「適用先機能」を参照してください。</p> <p>「適用先」を使用する他の権限については、36ページの「ダッシュボード管理」および「PPM固有の権限」を参照してください。</p>
ワークフロー	<p>（ステータスの変更権限とオーバーライド権限のみ）</p> <p>ステータスの変更権限の場合、ユーザーがステータスを変更したりステータス変更アクションをオーバーライドできるワークフローを指定します。</p> <p>オーバーライド権限の場合、「変更前のステータス」プロパティと「変更後のステータス」プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。</p>
変更前のステータス	<p>（ステータスの変更権限とオーバーライド権限のみ）</p> <p>ステータスの変更権限の場合、ユーザーが変更できるステータス（変更前）を指定します。</p> <p>オーバーライド権限の場合、「変更前のステータス」プロパティと「変更後のステータス」プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。</p>
変更後のステータス	<p>（ステータスの変更権限とオーバーライド権限のみ）</p> <p>ステータスの変更権限の場合、ユーザーが変更できるステータス（変更後）を指定します。</p> <p>オーバーライド権限の場合、「変更前のステータス」プロパティと「変更後のステータス」プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。</p>

権限マスクのプロパティを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。
2. 「権限」ウィンドウで、表示する権限マスクをダブルクリックします。権限マスク・ウィンドウが表示されます。

注意 検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

3. プロパティを変更するには、テキスト・フィールドにテキストを入力するか、ドロップダウン・リストを使用します。

注意 「権限（管理アクション）」フィールドは編集できません。

- 完了後、「保存」をクリックします。変更を保存せずに終了する場合は、「閉じる」をクリックします。

「権限」ウィンドウから実行するタスク

「権限」ウィンドウで1つ以上の権限マスクを選択し、適切なボタンをクリックすると、「権限」ウィンドウから様々な権限マスクの管理タスクを実行できます。

ページ・メニューのボタン	アクション
有効化	選択された権限マスクを有効にします。権限マスクが有効になると、「有効」列に「はい」と表示されます。
無効化	選択された権限マスクを無効にします。権限マスクが無効になると、「有効」列に「いいえ」と表示されます。
削除	選択された権限マスクを削除します。
新規	「権限の作成」ダイアログ・ボックスを開きます。236ページの「 新規権限マスクを最初から作成する 」を参照してください。
役割の割当て	1つ以上の役割に権限マスクを追加します。 注意: 役割や権限マスクをユーザーに割り当てる場合、または役割の権限マスクを変更する場合、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後にのみ、変更が有効となります。
エクスポート	選択された権限マスクをテキスト・ファイルにエクスポートします。24ページの「 オブジェクト履歴 」を参照してください。
すべてエクスポート	すべての権限マスクをテキスト・ファイルにエクスポートします。24ページの「 オブジェクト履歴 」を参照してください。
インポート	テキスト・ファイルをインポートして、1つ以上の新規権限マスクを作成します。24ページの「 オブジェクト履歴 」を参照してください。
更新	表示されているテーブルを更新して、最新の情報を反映させます。

権限マスクの名前をダブルクリックすると、権限マスクのタブ付きウィンドウが表示されます。

役割から権限マスクを削除する

権限マスクの「使用箇所」タブで役割から権限マスクを削除する手順は、次のとおりです。

- 「ユーザー設定」で、ナビゲーション・ウィンドウの「権限」ノードを展開します。基本権限の一覧が表示されます。
- 対象となる権限マスクの基本権限をダブルクリックします。その権限のフォームが表示されます。
- フォーム下の「更新」ボタンをクリックします。その権限のすべての権限マスクが表示されます。
- 特定の権限マスクをダブルクリックします。タブ付きのウィンドウが表示されます。
- 「使用箇所」タブをクリックして前面に表示します。権限マスクを含む役割のリストがテーブルに表示されます。

6. 権限マスクを削除する役割を選択し、「**削除**」ボタンをクリックします。
7. 確認のダイアログ・ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックします。役割自体は削除されませんが、役割から権限マスク（実際に開いているオブジェクト）が削除されます。

役割に権限マスクを追加する

権限マスクの「**使用箇所**」タブで役割に権限マスクを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「**ユーザー設定**」で、ナビゲーション・ウィンドウの「**権限**」ノードを展開します。基本権限の一覧が表示されます。
2. 対象となる権限マスクの基本権限をダブルクリックします。その権限のフォームが表示されます。
3. フォーム下の「**更新**」ボタンをクリックします。その権限のすべての権限マスクが表示されます。
4. 特定の権限マスクをダブルクリックします。タブ付きのウィンドウが表示されます。
5. 「**使用箇所**」タブをクリックして前面に表示します。権限マスクを含む役割のリストがテーブルに表示されます。
6. 「**役割の追加**」ボタンをクリックします。「役割の選択」ダイアログ・ボックスが開きます。
7. 役割を「**選択肢**」リストから「**選択済**」リストに移動します。
8. 完了したら、「**OK**」をクリックします。役割自体は追加されませんが、選択した役割に権限マスク（実際に開いているオブジェクト）が追加されます。

注意 202ページの「[属性の構築とテスト、読取り/変更権限、役割](#)」に記載されている簡単なチュートリアルを確認してください。

デフォルトのAgile PLM権限

次の表に、Agile PLM で提供される権限とその定義を示します。一部の権限の有効性は、基本的な読取り権限に依存します。これは、多くの機能を実行するためには、その前に、オブジェクトを開いて読み取る必要があるためです。この表には、権限が有効となるためにユーザーの読取り権限が必要かどうかを示されています。

読取り権限と権限マスクの詳細は、241ページの「[ディスカバリ権限と読取り権限の関係](#)」を参照してください。

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
承認者/オブザーバの追加	ルーティング可能なオブジェクトの「ワークフロー」タブに承認者/オブザーバを追加します。 詳細は、219ページの「 承認者/オブザーバの追加と削除 」を参照してください。	はい
管理者	Java クライアントにログイン後、PLM 管理者機能にアクセスできます。 「管理者」役割には管理者権限マスクが含まれます。この権限マスクは、「適用先」プロパティで選択した値に基づいたノードごとに設定可能です。 詳細は、231ページの「 管理者権限と適用先機能 」を参照してください。	いいえ

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
承認/却下	ユーザーが承認者として指定されているルーティング可能なオブジェクトを承認または却下します。	はい
添付ファイルのレッドライン (自分)	<p>デフォルトでは、この権限は無効となっています。このプロパティは、管理者がワークフロー・ステータスに固有の条件を作成する場合に有効にする必要があります。たとえば、ワークフローが「レビュー」ステータスまたは「リリース済」ステータスに到達すると、ユーザーがその添付ファイルをレッドラインできないようにする場合があります。</p> <p>注意: 添付ファイル・レッドライン・マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う通常の機能は、（ファイル・フォルダ・クラスの）マークアップ・サブクラスと、それに関連する権限マスク（作成、読取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト）によって提供されます。</p> <p>PLMのレッドラインの詳細は、401ページの「レッドライン・マークアップに関するデフォルトの役割と権限」を参照してください。</p>	-
添付ファイルのレッドライン (他のユーザー)	<p>デフォルトでは、この権限は無効となっています。このプロパティは、管理者がワークフロー・ステータスに固有の条件を作成する場合に有効にする必要があります。たとえば、ワークフローが「レビュー」ステータスまたは「リリース済」ステータスに到達すると、ユーザーがその添付ファイルをレッドラインできないようにする場合があります。</p> <p>注意: 添付ファイル・レッドライン・マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う通常の機能は、（ファイル・フォルダ・クラスの）マークアップ・サブクラスと、それに関連する権限マスク（読取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト）によって提供されます。</p> <p>PLMのレッドラインの詳細は、401ページの「レッドライン・マークアップに関するデフォルトの役割と権限」を参照してください。</p>	-
チェックアウトのキャンセル	<p>添付ファイル（ファイルまたはURL）のチェックアウトをキャンセルします。</p> <p>詳細は、396ページの「添付ファイル権限」を参照してください。</p>	はい
ステータスの変更	<p>ルーティング可能なオブジェクトのステータスを移行します。ステータスの変更権限が適用されるワークフローのリストは、選択した条件のクラスによって異なります。</p> <p>詳細は、219ページの「ステータスの変更」を参照してください。</p>	はい
チェックイン	添付ファイル（ファイルまたはURL）をチェックインします。（詳細は、396ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。）	はい
チェックアウト	<p>添付ファイル（ファイルまたはURL）をチェックアウトします。</p> <p>詳細は、396ページの「添付ファイル権限」を参照してください。</p>	はい
コメント	ルーティング可能なオブジェクトにコメントします。コメントは特定のユーザーにメール送信され、履歴に記録されます。（ルーティング可能なオブジェクトの承認や却下の際に提出されるコメントとは異なります。）	はい

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
作成	<p>権限マスクに指定されたビジネス・クラス内に新規オブジェクトを作成します。</p> <p>注意 1: 作成権限は、Agile PLM インポート・ユーティリティのユーザーに必要です。</p> <p>注意 2: 「ページ 2」タブでAgile PLMクラスに対する「ユーザー作成」属性を表示し、有効にすると、ユーザーは読取り権限でオブジェクトを開き、作成できます。248ページの「ユーザー作成条件を適用する」を参照してください。</p> <p>注意 3: ユーザーは、必須フィールドに対して変更権限がない場合でも、オブジェクトを作成する際は、作成権限で必須フィールドに値を入力できます。必須フィールドは、属性プロパティ「必須」が「はい」に設定されているフィールドです。77ページの「属性のプロパティを定義する」を参照してください。</p>	はい
テンプレートから作成	<p>「テンプレートからのプログラム作成」権限マスクで使用され、「プログラム・マネージャ」および「プログラム管理者」の役割に対してデフォルトで有効化されています。</p>	はい
「ダッシュボード」タブ表示	<p>「「ダッシュボード」タブの読取り」権限マスクで使用され、エグゼクティブ、プロジェクト・マネージャ、およびプロジェクト管理者の役割に対してデフォルトで有効化されています。</p> <p>「システム設定」>「ダッシュボード管理」の下に新たに作成されたすべてのダッシュボード・タブでは、Web クライアントのタブを表示するために、この権限が必要です。</p> <p>詳細は、36ページの「ダッシュボード管理」を参照してください。</p>	はい
削除	<p>オブジェクトを削除します。</p> <p>注意: ルーティング可能なオブジェクトは、「保留中」または「未割当」であることが必要です。</p>	はい
ディスカバリ	<p>オブジェクトの存在を把握します。</p> <p>注意 1: 「データベース」ノードで「ディスカバリ権限」の「有効」プロパティを変更した場合は、WebLogic Server を再起動する必要があります。</p> <p>注意 2: 「データベース」ノードでディスカバリ権限が無効になっている場合、基本的な読取り権限があるユーザーは、すべてのオブジェクトを検出できます。</p> <p>詳細は、239ページの「ディスカバリ権限」を参照してください。</p>	いいえ
フィールド・レベルでの読取り	<p>ユーザーが「フィールドレベルでの読取り」検索を実行した場合の特定の動作を制限します。</p> <p>出力列を指定する権限が削除されたことへの対応策に関する重要事項など、詳細は、242ページの「フィールドレベルでの読取り権限」を参照してください。</p>	はい

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
エクスポート	選択されたオブジェクトからデータを抽出し、これをカンマ区切りのテキスト・ファイルまたはPDXパッケージにエクスポートします。この権限の詳細は、220ページの「 エクスポート 」を参照してください。	はい
FileLoad	FileLoad ユーティリティを実行します。FileLoad ユーティリティの詳細は、『インポート/エクスポート・ガイド』を参照してください。	はい
全検索表示	オブジェクトに関するレポート検索結果をすべて表示します。詳細は、220ページの「 全検索表示 」を参照してください。	はい
ファイルの取だし	オブジェクトの「 添付ファイル 」タブからファイルを取得または開きます。ファイルの取だし権限はチェックアウト権限と連携して動作し、添付ファイルをユーザーのコンピュータに送信します。管理者はファイル取だし権限（チェックアウトなし）により、ユーザーがプロダクト・レコードでそれを変更することなしにファイルを取得できるようにします。 詳細は、396ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。	はい
グローバル検索	全ユーザーの検索リストに表示される検索を作成、変更、または削除します。この権限は、ユーザーによる検索および検索フォルダの並べ替えを可能にします。Java クライアントでは、検索フォルダまたは検索をクリックするとき、下矢印ボタンが追加されます。Web クライアントの「検索の整理」ポップアップでは、順序ボタンが追加されます。	いいえ
認可	アクセス・コントロール・リスト（ACL）機能を使用して、計画的かつ有限的な方法で、ユーザーに役割とそれに伴う権限を与えます。	はい
インポート	インポート・プロセスを使用します。インポート・ツールの詳細は、『インポート/エクスポート・ガイド』を参照してください。	はい
確定	「 添付ファイル 」タブで確定ステータスを切り替えます。 注意: アイテムは、初版リビジョンで確定または未確定にできません。	はい
レポートの管理	レポートのスケジュールとレイアウトを変更または削除し、グローバル・レポート・フォルダを作成または削除します。	はい
Microsoft Project	「Microsoft Project」役割と、プロジェクト・マネージャおよびプロジェクト・マネージャの役割の一部をアクセス、使用、または変更します。「Microsoft Project 権限」を参照してください。	はい
変更	オブジェクトのタブのフィールドを変更します。変更権限は、「適用先」属性の設定を使用して割り当てます。 変更権限の様々な側面については、244ページの「 変更権限 」、230ページの「 適用先機能 」、および397ページの「 変更権限と添付ファイル 」を参照してください。	はい

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
オーバーライド	不完全な必須フィールドおよび（サインオフしていない）必須承認者をオーバーライドし、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに移行します。 詳細は、221ページの「 オーバーライド 」を参照してください。	はい
ファイル印刷	「AutoVue for Agile」ウィンドウから印刷します。ファイル表示権限も必要です。 詳細は、396ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。	はい
タブ印刷	オブジェクトのタブから印刷します。	はい
フォルダ・バージョンのパージ	使用しないファイル・フォルダ・バージョンをAgileファイル管理格納庫からパージします。222ページの「 フォルダ・バージョンのパージ権限 」を参照してください。	
読取り	オブジェクトを開いてすべてのタブを読み取ります。 詳細は、239ページの「 ディスカバリ権限と読取り権限 」を参照してください。 読取り権限は、特定の属性の「適用先」プロパティに基づいています。「フィールドレベルでの読取り権限」および230ページの「 適用先機能 」を参照してください。 ユーザーにフィールド・レベルでの読取り権限が割り当てられている場合、読取り権限は、フィールド・ベースでも適用されます。 詳細は、242ページの「 フィールドレベルでの読取り権限 」を参照してください。 注意: 「データベース」ノードでディスカバリ権限が有効になっている場合は、対応するディスカバリ権限マスクが必要です。	はい
承認者/オブザーバの削除	ルーティング可能なオブジェクトから承認者/オブザーバを削除します。 詳細は、219ページの「 承認者/オブザーバの追加と削除 」を参照してください。	はい
リセット	Agile PLMデータベースのチェックサムをリセットし、参照ファイルと一致させます。デフォルトのAgile役割には含まれていない、「ファイル・チェックサムのリセット」権限マスクにある権限をリセットします。354ページの「 ファイル・チェックサムの処理 」を参照してください。	はい
レポートの実行	レポートを実行してスケジュールを設定し、レイアウトを作成します。ユーザー自身のスケジュールとレイアウトを変更および削除します。	はい
名前を付けて保存	別の名前を付けて保存することにより、オブジェクトをコピーします。	はい
送信	開いているオブジェクトに対して、「ファイル 送信」を実行します。対応する作成権限マスクが必要です。	はい
確認通知	オブジェクトの選択された属性が変更されたときに、電子メールによる確認通知を送信します。データベース・ノードのプロパティ「通知の有効化」も「はい」に設定する必要があります。	はい

権限	実行可能なアクション	基本的な読取り権限の要否
権限委譲（自分）	ルーティング可能なオブジェクトに対して自分が承認者（オブザーバではない）である場合、特定の期間について変更を承認する権限を他のユーザーに委譲します。 詳細は、222ページの「 権限委譲（自分） 」を参照してください。	いいえ
権限委譲（他のユーザー）	ルーティング可能なオブジェクトに対して自分以外のユーザーが承認者（オブザーバではない）である場合、特定の期間について変更を承認する権限をその他のユーザーに委譲します。通知の電子メールは、すべて元の承認者にもコピーとして送信されます。 詳細は、223ページの「 権限委譲（他のユーザー） 」を参照してください。	いいえ
削除取消	オブジェクトの削除を取り消します。	はい
未確定	アイテムを未確定にします。	はい
すべてのタイム・シートの更新	選択したユーザーのすべてのタスクを表示し、そのユーザーが各タスクに入力したタイム・シートの詳細を変更します。タスクを表示するためのシステム権限をオーバーライドします。タイム・シートにアクセスするユーザーは、タスクのチーム・メンバーである必要はありません。また、この権限を使用すると、システム内のすべてのユーザーのタイム・シート入力を検索できます。	はい
ユーザー管理者	他のユーザーに割り当てることができる役割を調整するには、この権限の「適用先」プロパティを使用します。	はい
ファイル表示	「AutoVue for Agile」ウィンドウでファイルを表示します。 詳細は、396ページの「 添付ファイル権限 」を参照してください。	はい

特定の権限に関する詳細

次のセクションでは、特定の権限の詳細について説明します。

- 219ページの「[特定の権限の詳細](#)」

この章の後半では（223ページの「[権限マスクの構成要素](#)」から）、権限マスクの構成方法について検討します。後続の各セクションでは、ディスカバリ権限、読取り権限、変更権限、および重要な「適用先」プロパティ（管理者権限および他のいくつかのPLM権限に含まれるプロパティ）について説明します。

- 239ページの「[ディスカバリ権限と読取り権限](#)」
- 244ページの「[変更権限](#)」
- 230ページの「[適用先機能](#)」

特定の権限の詳細

このセクションでは、重要な Agile PLM 権限について詳細に説明します。Agile PLM システムで使用されるあらゆる権限の詳細を包括的に説明するものではありません。権限は単独では機能しないことに留意してください。たとえば、「アイテムの作成」のように権限マスクで引用され、その権限マスクで構成される役割に含まれる場合にアクティブとなります。

注意 添付ファイルの操作に関連する権限については、396ページの「[添付ファイル権限](#)」で説明されています。

承認者/オブザーバの追加と削除

承認者/オブザーバの追加権限によって、ユーザーは特定のルーティング可能なオブジェクトを承認または却下するユーザー、グローバル・ユーザー・グループ、パートナーを指定できます。この権限では、これらのカテゴリをオブザーバとして指定することもできます。オブザーバはルーティング可能なオブジェクトを表示できますが、承認または却下する必要はありません。ただし、必要に応じて承認または却下できます。

承認者/オブザーバの削除権限によって、ユーザーは前述のカテゴリを特定のルーティング可能なオブジェクトに関する承認者またはオブザーバのリストから削除できます。承認者またはオブザーバの追加の詳細は、122ページの「[対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する](#)」を参照してください。

注意 ワークフローの「レビュー」または「リリース済」ステータスで、承認者またはオブザーバを追加または削除するには、そのステータスの「アドホック承認者/オブザーバ」プロパティが「はい」に設定されている必要があります。

ステータスの変更

ステータスの変更は、ワークフロー内で変更を移行する承認プロセスで重要となります。ステータスの変更権限は、権限条件を使用して、ユーザーが操作できるステータス（ワークフロー内の特定のステータスについて、前や後ろに移動できるステータス）を管理します。この権限の目的は、ユーザーが所定の役割で変更できるステータスを指定することにあります。

注意 「ステータスの変更」権限マスクは、それぞれ1つのワークフローの1つの指定されたステータスに適用されます。作成した新規ワークフローの各ステータスに対して「ステータスの変更」権限マスクを作成し、これらを有効化する必要があります。これには、「名前を付けて保存」によって作成したワークフローのステータスも含まれます。つまり、「名前を付けて保存」を使用して他の名前を付けたワークフローでは、そのワークフローを変更したかどうかにかかわらず、独自のステータスの変更権限が必要です。

権限で利用できるステータス・タイプは、権限の作成時に選択するワークフローによって決定されます。また、権限に適用する再利用可能な条件にも影響されます。

ステータスの変更では、複数の「変更前」または「変更後」の設定を定義できます。管理者は、ある役割に対して、変更を複数のステータスから1つのステータスに移行する（たとえば「保留中」、「提出」、「レビュー」から「中断」ステータスへ）権限を指定できます。また、変更を1つのステータスから複数のステータスに移行する（たとえば「中断」から「保留中」、「提出」、「レビュー」ステータスへ）権限も指定できます。

「ステータスの変更」権限マスクを定義する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。
2. 「権限」ウィンドウで「新規作成」ボタンをクリックします。「権限の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. 「ステータスの変更」権限マスクの「名前」フィールドと「説明」フィールドに入力します。
4. デフォルトでは、権限マスクは有効になっています。必要に応じて、「有効」フィールドで「いいえ」を選択して権限マスクを無効にすることもできます。
5. 「権限」フィールドで、ドロップダウン・リストから「ステータスの変更」を選択します。
6. 「条件」フィールドで、リストから条件を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
または、「新規条件」ボタンをクリックして新規に再利用可能な条件を定義します。（119ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。）
7. 「ワークフロー」フィールドで、ドロップダウン・リストからワークフローを選択します。

追加フィールド「変更前のステータス」と「変更後のステータス」がダイアログ・ボックスに表示されます。

注意 「ワークフロー」フィールドで「すべて」を選択した場合、「変更前のステータス」と「変更後のステータス」のフィールドは利用できません。ワークフロー名に「ALL」を選択すると、任意のワークフローの任意のステータスから任意のステータスへの変更をユーザーに許可する「ステータスの変更」権限マスクが作成されます。これは、ワークフローをテストする場合に便利です。

8. 「変更前のステータス」のダイアログ・ボックスで、「選択肢」リストから「選択済」リストにステータスを移動します。完了したら、「OK」をクリックします。
9. 「変更前のステータス」のダイアログ・ボックスで、「選択肢」リストから「選択済」リストにステータスを移動します。完了したら、「OK」をクリックします。すべてのフィールドが完了したら、「OK」をクリックします。

エクスポート

この権限は、Agile ユーザーが選択したオブジェクトからデータを抽出し、そのデータをカンマ区切りのテキスト・ファイル、Microsoft Excel ファイル、PDX パッケージ、または Agile XML (aXML) ファイルにエクスポートできるようにします。

PDX はサプライ・チェーン全体を通じてエンジニアリング情報や製造情報を電子的に交換する際に使用する規格です。PDX パッケージは、Agile eXpress 無料クライアントで表示可能な XML ファイルです。

eXpress Viewer については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

全検索表示

全検索表示権限は検索に適用されません。レポート検索結果に適用されます。「全レポート表示」権限マスクを持つユーザーには、すべてのレポート結果が表示されます。この権限マスクを持たないユーザーには、「検索結果の最大表示数」プリファレンスで指定された最大結果数まで表示されます。また、この権限を持つユーザーがレポート結果を表示する際には、ユーザーに対するすべての権限チェックが無視されます。

認可

特定のオブジェクトに関して別のユーザーに役割を付与できるかどうかは、認可権限によって処理されます。

Agile PLM の共有機能により、ユーザーは 1 つ以上の自分の役割を他の Agile PLM ユーザーまたは特定オブジェクトのユーザー・グループに認可できます。共有できる役割は次のとおりです。

- ユーザーに対して永続的に割り当てられている役割。ただし、この役割は、特定のオブジェクトに関してのみ他のユーザーと共有します。

- 特定のオブジェクトに関してユーザーが（他のユーザーと）共有している役割。
- 役割が共有されているユーザー・グループに属していることで、ユーザーが共有している役割。

指定されたユーザー（または指定されたユーザー・グループのメンバー）は、その役割で許可されたアクションを、そのオブジェクトに対してのみ実行できます。ユーザーが永続的な役割や非限定的な役割を取得することはありません。

ユーザーやユーザー・グループの「共有」タブには、別のユーザーから割り当てられた共有役割の対象となるオブジェクトが一覧表示されます。ユーザーは、「ユーザー・プロフィール」>「共有」の順にクリックすると、他のユーザーと共有しているオブジェクトと、各オブジェクトに対して実行可能な操作を規定する役割が表示されます。また、「ユーザー・プロフィール」>「ユーザー・グループ」>（特定のグループ）>「共有」の順にクリックすると、ユーザー・グループを介して自分が役割を共有しているオブジェクトが表示されます。

オーバーライド

オーバーライド権限では、ステータスの必須フィールドや承認者を無視でき、必須フィールドが未入力の場合や承認者がサインオフしていない場合でも変更を次のステータスに移行できるユーザーを管理します。オーバーライド権限を持つユーザーは、必須フィールドが未入力の場合でも変更をリリースできます。

オーバーライド権限は各ステータスに固有の権限です。ユーザーが変更を次のステータスに移行する権限を持つかぎり、全員の承認が得られていなくても、変更を次のステータスに移行できます。たとえば、ユーザーが変更の「管理者によるレビュー」ステータスから「CCB によるレビュー」ステータスへの昇格はオーバーライドできても、変更の「最終レビュー」から「リリース済」への昇格はオーバーライドできない場合があります。

次のステータス・レベルへの通常の移行で、フィールド、承認者、または必須事項に入力漏れがある場合は、ユーザーに警告が送られます。

注意 オーバーライド権限を持つユーザーは、次のいずれの状況でも、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに昇格できます。

- 必須フィールドがある場合
- 「リリース検証を実行する」が「はい」に設定されている場合
- スマートルールの「承認者が却下した変更のステータスを変更する」が「警告」または「不可」に設定されている場合
- スマートルールの「オブザーバが却下した変更のステータスを変更する」が「警告」または「不可」に設定されている場合
- スマートルールの「回答のない変更のステータスを変更する」が「警告」または「不可」に設定されている場合

スマートルールの「承認者が却下した変更のステータスを変更する」と「オブザーバが却下した変更のステータスを変更する」では、「警告」が設定されていてもルーティング可能なオブジェクトの自動昇格は可能です。つまり、自動昇格を禁止するには、これらのスマートルールを「不可」に設定する必要があります。

却下されたルーティング可能なオブジェクトを昇格するかどうかを変更分析者が決定できるようにするには、次の条件を満たす必要があります。

- そのステータスの「自動昇格」が「はい」に設定されている。
- 前述の 2 つのスマートルールが「不可」に設定されている。
- 変更分析者がこのステータスに対するオーバーライド権限を持つ。

オーバーライド権限では、ステータスの変更権限と同様に、「変更前」と「変更後」の設定が必要です。オーバーライド権限では、「リリース検証を実行する」プロパティが「はい」に設定されている場合でも、ルーティング可能なオブジェクトのステータスを変更できます。唯一の例外はルーティング可能なオブジェクトの初回リリース中です。「リリース検証を実行する」プロパティが「警告」に設定されていると、オーバーライド中にも警告が表示されます。

ユーザーにオーバーライド権限がなく、「リリース検証を実行する」が「警告」または「いいえ」の場合、ステータス検証では、警告ではなくエラー（ユーザーが条件を修正する必要があることを意味する）が発生することに注意してください。

フォルダ・バージョンのパージ権限

ユーザーは、フォルダ・バージョンのパージ（PFV）権限を使用して、未使用のファイル・フォルダ・バージョンを Agile ファイル管理格納庫からパージできます。ファイル・フォルダの「バージョン」ドロップダウン・リストから、ファイル・フォルダ・バージョン番号が削除されます。「フォルダ・バージョンのパージ」権限マスクの作成と定義を行うときに、適切なフォルダ・オブジェクト条件を選択すると、フォルダの特定のサブクラスに対して「フォルダ・バージョンのパージ」権限マスクを作成できます。ファイル・フォルダ・オブジェクトを検出して読み取り、パージするファイル・フォルダ・バージョンを選択するユーザーには、適切な権限マスクが必要です。ファイル・フォルダ・バージョンは、チェックアウトされている場合、レッドラインがある場合、またはビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブまたは「コンテンツ」タブでそのバージョンが使用中の場合は、削除できません。

「フォルダ・バージョンのパージ」コマンドは、ファイル・フォルダ・オブジェクトの「詳細...」メニュー（Java クライアント）および「アクション」メニュー（Web クライアント）に表示されます。

権限委譲（自分）

権限委譲（自分）権限によって、ユーザーは特定の期間中自分の代理として変更を承認または却下できるユーザーを指定できます。権限委譲は、ユーザーがルーティング可能なオブジェクトの承認者である場合に適用され、オブザーバである場合は適用されません。権限委譲（自分）は、元の承認者が休暇をとる場合などに非常に便利です。

委譲先のユーザーは、権限の条件によって異なります。たとえば、プロジェクト A に関するすべての変更が Mary に、プロジェクト B に関するすべての変更が Joe に委譲されるとします。異なる委譲の条件が重複する場合、委譲先として定義された両方のユーザーが通知を受け取り、元の承認者に代わってサインオフできます。

権限委譲は、開始日と終了日で特定される期間中有効です。この期間が経過すると、サインオフ権限は自動的に元の承認者に戻ります。

長期休暇中に複数の委譲先を指定する場合など、ユーザーの権限を複数のユーザーに委譲する必要がある場合、委譲先のユーザーは、次の表に記載されている順番に指定してください。

委譲元ユーザー	委譲先ユーザー	開始日	終了日
Brian Henson	David Goelz	2007 年 7 月 14 日	2007 年 7 月 30 日
Brian Henson	Kevin Clash	2001 年 7 月 31 日	2007 年 8 月 12 日

注意 サインオフ権限の委譲で委譲先ユーザーに指定されているユーザーをシステムから削除する場合は、252ページの「[ユーザーを削除する/削除を取り消す](#)」を参照してください。

権限委譲（他のユーザー）

権限委譲（他のユーザー）権限を使用すると、元のユーザーの代理として変更を承認または却下する権限を、特定の期間、別のユーザーに委譲できます。権限委譲は、元のユーザーがルーティング可能なオブジェクトの承認者である場合に適用され、オブザーバである場合は適用されません。

この権限は、権限委譲（自分）権限を持つユーザーによって指定された委譲よりも優先されます。元の承認者へは、通知の電子メールがコピーとして送信されます。

注意 委譲条件を作成するときは、「**対象アイテム**」タブのフィールドに条件を含めることができます。特定のルーティング可能なオブジェクトを選択するには、「**対象アイテム**」フィールドに指定した条件が、そのオブジェクトの「**対象アイテム**」タブにあるすべてのオブジェクトについて真である必要があります。

たとえば、「対象アイテムの旧ライフサイクル・フェーズがプレリミナリに等しい」という条件を作成した場合は、「**対象アイテム**」タブのすべてのオブジェクトの「**旧ライフサイクル**」フィールドが「プレリミナリ」である必要があります。「含む」を検索演算子として選択した場合は、「**対象アイテム**」タブのすべてのオブジェクトの特定のフィールドに、特定の値が含まれている必要があります。

拠点毎変更の「名前を付けて保存」に関する制限

拠点毎変更（SCO）オブジェクトを作成するために、SCO 以外の変更オブジェクトから「名前を付けて保存」は開始できません。また、SCO 以外の変更オブジェクトを作成するために、SCO オブジェクトから「名前を付けて保存」を開始することもできません。拠点毎変更（SCO）には拠点固有の情報のみが反映され、他の変更タイプ（ECO、MCO など）は拠点固有の情報には制限されないため、「名前を付けて保存」を使用して SCO を作成できるのは、別の SCO から「名前を付けて保存」を開始する場合のみです。「名前を付けて保存」機能を使用する場合、拠点毎変更の拠点固有の情報のみを使用すると、他の変更タイプとは互換性がなくなります。

確認通知

ユーザーは、**確認通知権限**を使用して、オブジェクトにイベントが発生した場合に通知を受けるように設定できます。指定したフィールドが変更されたときに通知を受けるようにしたり、さらに通知の対象となるイベントも選択できます。

特定のクラスのオブジェクトに確認通知を指定するには、そのオブジェクト・クラスに対する確認通知権限が必要です。

ユーザーの「**確認通知**」タブでは、そのユーザーに対して確認通知が有効になっているオブジェクトが表示されます。

確認通知イベントは、電子メールと受信トレイの 2 つのタイプの通知をトリガーします。電子メールによる通知は、ユーザーの「電子メール通知を受信」プリファレンスが「はい」に設定されている場合にのみ送信されます。このプロパティは、ユーザー・オブジェクトの「**プリファレンス**」タブにあります。

権限マスクの構成要素

権限マスクは強い影響力を持つ複雑な機能です。各権限マスクは、いくつかの要素で構成されています。権限マスクの構成要素は次のものを定義します。

- ユーザーが実行できるアクション
- アクションの実行対象となるオブジェクト・タイプ

- アクションの実行対象となるオブジェクトのサブセットを定義するフィルタリング条件
- 特定のオブジェクトの属性を表示する適用先属性（管理者、変更、読取り、Microsoft Project、およびダッシュボード管理の各権限に基づく権限マスクのみ）
- ステータスの変更権限の場合は、ワークフロー、変更前のステータス、変更後のステータス（237ページの「[条件と適用先属性のオプションを組み合わせる](#)」の2番目の図を参照）

すべての権限マスクの要素となる権限、オブジェクト・タイプ、および条件

権限マスクは、ユーザーのアクションを許可または禁止するためのフィルタとして機能します。権限マスクでは、アクションのタイプとそれを許可する条件の組合せにより、Agile PLMでのユーザーの動作を管理します。権限マスクは次の構成要素によって構築され、これらは権限マスクのプロパティに含まれています。

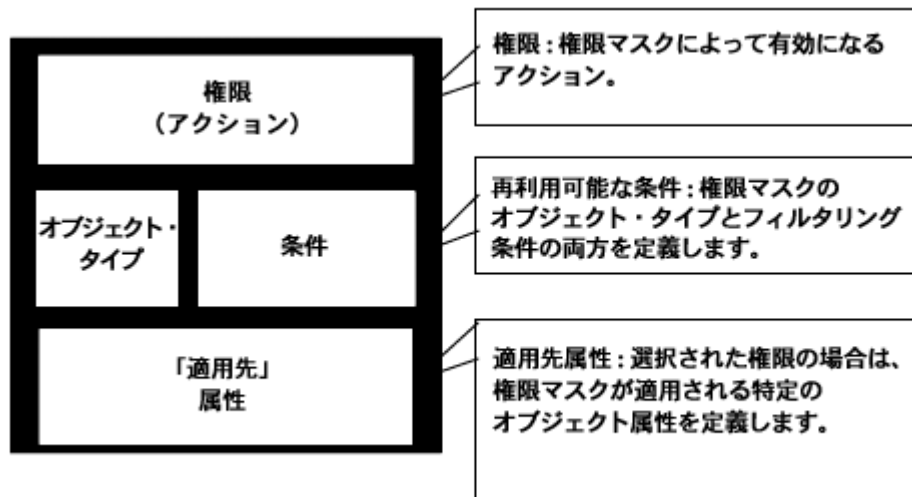
1. **権限**（アクション）（225ページの「[権限マスクの構成要素 1: 権限](#)」を参照）
2. アクションの対象となる**オブジェクト・タイプ**（227ページの「[権限マスクの構成要素 2: オブジェクト・タイプ](#)」を参照）
3. アクションに適用する**条件**（228ページの「[権限マスクの構成要素 3: 条件](#)」を参照）
4. アクションを適用する**属性**（228ページの「[権限マスクの構成要素 4: 属性](#)」を参照）

少数の権限が基本となる「適用先」を含む権限マスク

前述したリストの最後のアイテムは権限マスクの属性ですが、この要素はすべての権限マスクに含まれているわけではありません。PLM権限（管理者、ユーザー管理者、読取り、変更、Microsoft Project、および「ダッシュボード」タブ表示）のいくつかのサブセットが、第4の構成要素、つまり、権限の「適用先」プロパティに含まれている属性を必要とする権限マスクのベースになります。この重要なプロパティの詳細は、230ページの「[特定の権限の「適用先」プロパティ](#)」を参照してください。

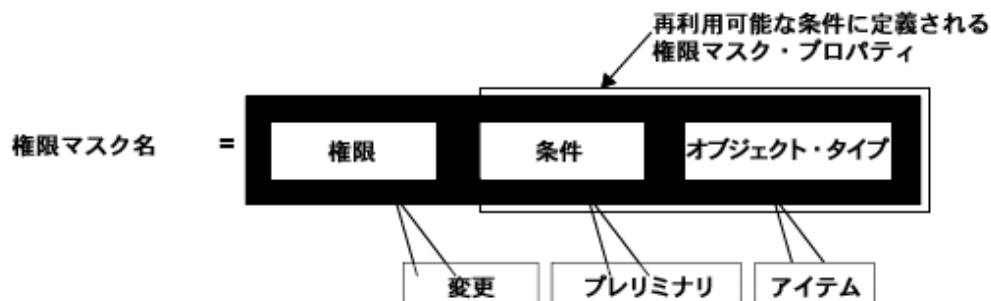
権限マスクの図解

権限マスクは、再利用可能な条件を使用してオブジェクト・タイプとフィルタリング条件を定義します。権限マスクを作成するときは、概略図に示されているように、条件オブジェクトのリストから再利用可能な条件を選択します。



権限マスクに名前を付ける

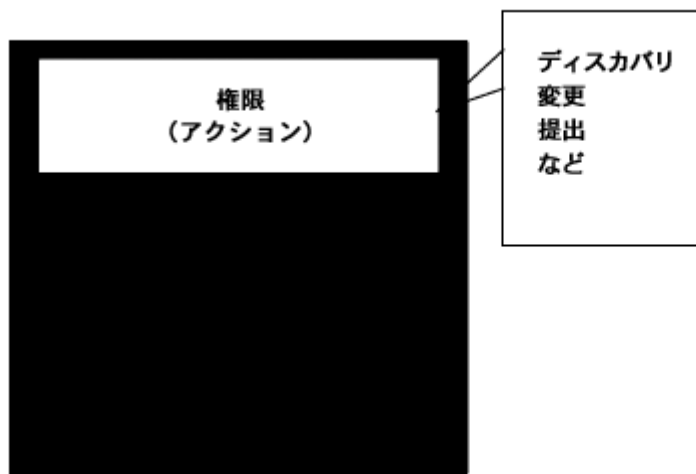
権限マスクに名前を付ける際には、権限マスクの目的と機能ができるだけ明確にわかるように、次の規則が使用されています。



権限マスクの中には、「変更の送信」のように、権限とオブジェクト・タイプのみで構成されているものがあります。

権限マスクの構成要素 1: 権限

権限マスクの基本となる構築要素は権限（アクション）で、これによって、ディスカバリ、変更、提出などが許可されます。Agile PLM システムにおける基本的な権限は、すでに「Agile PLM 権限」で説明しました。



権限の基本的な構成要素は、権限マスクの作成時に定義され、権限マスクの「一般情報」タブに表示されます。次に例を示します。

「変更（設計変更）」権限マスクのプロパティを表示する手順は、次のとおりです。

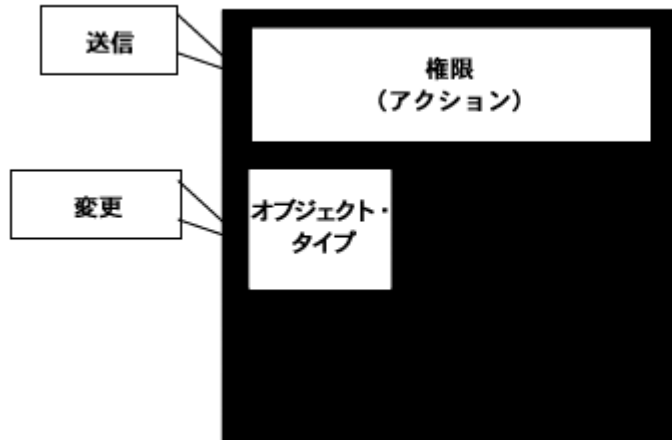
1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。
2. 「権限」ウィンドウ（指定した権限に基づいて権限マスクが実際に一覧表示される）で、「変更（設計変更）」の権限マスクをダブルクリックします。権限マスク・オブジェクトが表示されます。

注意 リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件で権限レコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

3. これで、「一般情報」タブの編集可能なフィールドを変更できます。
「権限」フィールドは編集できません。これは、権限マスクが作成された後は値を変更できないことを示します。また、「権限条件」フィールドは変更できます。
4. 権限マスクの編集可能プロパティの表示内容を確認したら、「キャンセル」をクリックします。

権限マスクの構成要素 2: オブジェクト・タイプ

大部分の権限マスクには、変更基本クラス、変更指示クラス、ECOサブクラスなど、アクションの対象となるオブジェクト・タイプも含まれています。再利用可能な条件を選択した場合は、オブジェクト・タイプも権限マスクの作成時に定義する権限マスク・プロパティとなります。オブジェクト・タイプは「クラス」ノードで定義します。オブジェクト・タイプの詳細は、52ページの「[インストールされるオブジェクト・タイプ](#)」を参照してください。



権限マスクの中には、「変更の送信」（上記）のように、権限とオブジェクト・タイプのみで構成されているものがあります。この種の権限マスクに対しては、フィルタリング条件なしでオブジェクト・タイプを指定する再利用可能な条件（「変更のみ」など）を選択します。

オブジェクト・タイプを使用して、権限の拡大や縮小ができます。次に、変更権限マスクを拡大してすべての変更を含める場合と、縮小して設計変更指示のみを含める場合を示します。Agile PLM オブジェクト・タイプの完全なリストについては、「インストールされる Agile PLM クラス、基本クラス、およびサブクラス」を参照してください。

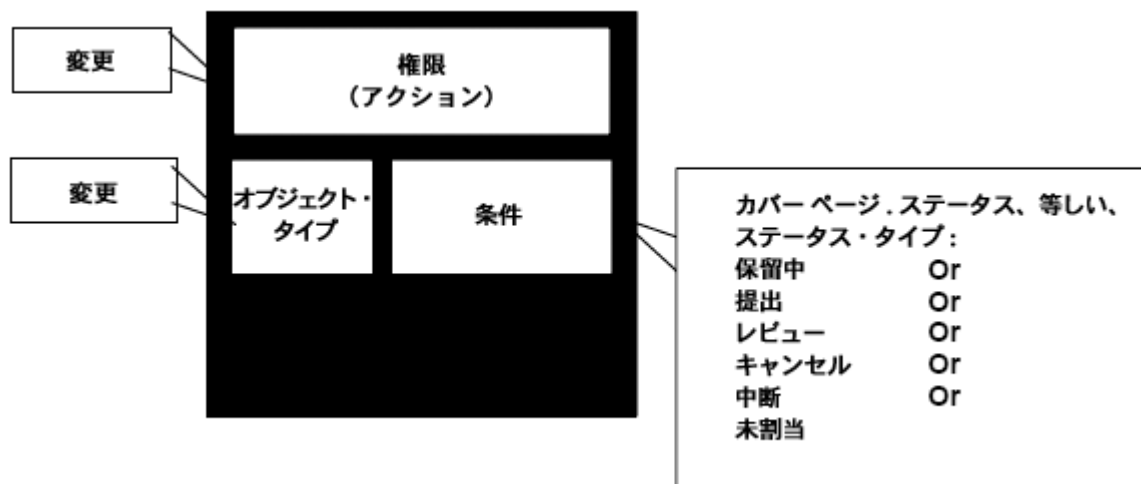
選択する オブジェクト・タイプ	ユーザーが変更できる対象	
	クラス：	サブクラス：
変更	変更指示クラス 変更要求クラス 期限付き変更指示クラス 製造元依頼クラス 価格変更クラス 拠点毎変更クラス 出荷停止クラス	設計変更指示（ECO） 設計変更要求（ECR） 期限付き変更指示 製造元変更（MCO） 価格変更（PCO） 拠点毎変更（SCO） 出荷停止
変更指示クラス	変更指示クラス	変更指示（ECO） （定義済の他の変更指示サブクラスを含む）

選択する オブジェクト・タイプ	ユーザーが変更できる対象	
	クラス :	サブクラス :
設計変更指示 (ECO)	該当なし	設計変更指示 (ECO) (このサブクラスのみを含む)

注意 「アクション - 条件 - オブジェクト・タイプ」という命名規則を使用すると、オブジェクト・タイプは権限マスク名の一部になります。225ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。

権限マスクの構成要素 3: 条件

権限マスクのその他のプロパティは、適用する条件のセット、または権限マスクが作動する条件です。条件は、作成時に再利用可能な条件内で定義します。権限マスクの条件は、権限マスクを作成し、再利用可能な条件をリストから選択する際に定義します。後で別の再利用可能な条件も選択できます。



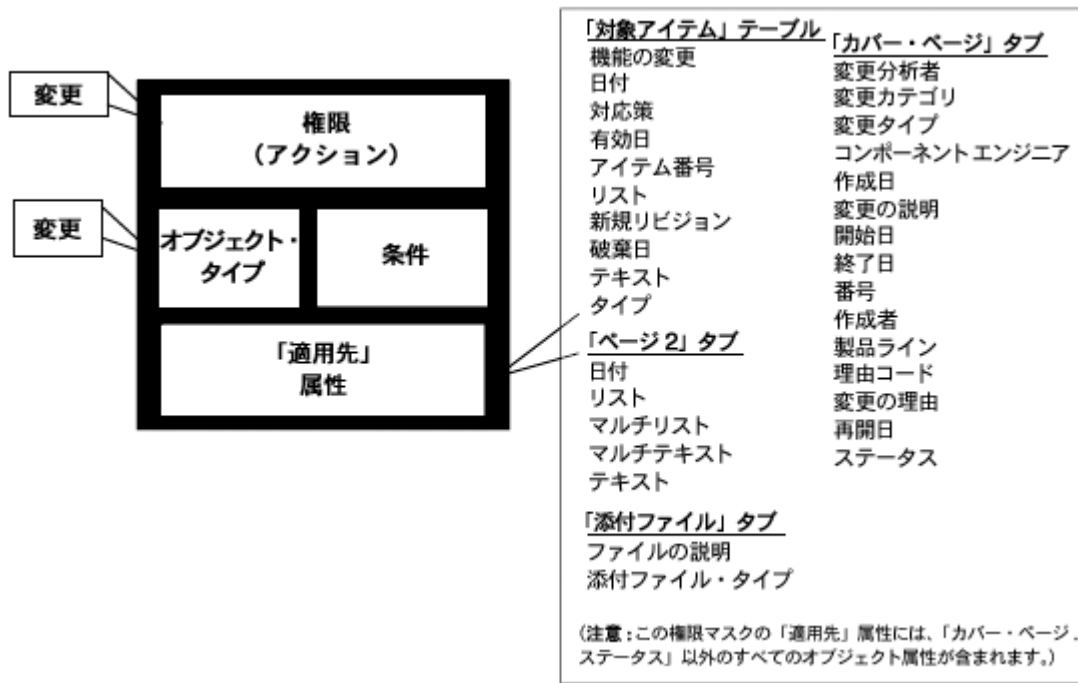
このように特定の再利用可能な条件を使用することで、ユーザーは、その再利用可能な条件に定義されているいずれかのステータス・タイプ（保留中、提出、レビュー、キャンセル、中断、未割当）にある設計変更のみを変更できます。

権限マスクの構成要素 4: 属性

権限マスクのもう 1 つの構成要素は、権限マスクを適用する属性（複数可）です。これらは適用先属性と呼ばれ、「変更」および「読取り」権限マスクでのみ使用されます。適用先属性は権限マスクを作成する際に定義しますが、後で変更することもできます。

「変更」権限マスクは、「カバー・ページ」、「タイトル・ブロック」、「一般情報」などの特定のタブにある属性の変更をユーザーに許可するように設計されています。

たとえば、Agile PLM のインストールで提供される「変更（設計変更）」権限マスクは、次の図に示す属性に適用する（ユーザーによる変更を可能にする）ために設計されています。




これらの適用先属性を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。
2. 「権限」ウィンドウで、「変更（設計変更）」の権限マスクをダブルクリックします。権限マスクが表示されます。前述の概略図を参照してください。

注意 リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件で権限レコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

適用先属性が「一般情報」タブに一覧表示されます。

3. 利用可能な属性値と選択した属性値のリストを表示するには、「適用先」フィールドの横にある下矢印をクリックします。「選択肢」と「選択済」リストが選択ダイアログ・ボックスに表示されます。
4. リストの表示内容を確認したら、「キャンセル」をクリックします。「一般情報」タブのフィールドの表示を終了するには、「閉じる」をクリックします。

権限マスクを有効にする

現在無効になっている権限マスクを有効にする手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。「権限」ウィンドウが表示されます。
2. 有効にする権限マスクをクリックします。

注意 検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）または、「有効」列の見出しをクリックし、「はい」（有効）または「いいえ」（無効）で分類します。

3. ウィンドウ・ツールバーの「有効化」ボタンをクリックします。

これで、無効に設定されていた権限マスクが有効になります。

注意 権限マスクの「一般情報」タブを編集する際にも権限マスクを有効または無効にできます。

権限マスクを変更する

権限マスクは様々な方法で変更できます。このセクションでは、各種変更方法について説明します。

権限マスク条件を変更する

既存の権限マスク条件を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。
2. 「権限」ウィンドウで、変更する権限マスクをクリックします。権限マスク・ウィンドウが表示されます。

注意 検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

権限マスクのプロパティが「一般情報」タブに表示されます。

3. プロパティを変更するには、テキスト・フィールドにテキストを入力するか、ドロップダウン・リストを使用します。
4. 「権限条件」フィールドで、ドロップダウン・リストから別の再利用可能な条件を選択します。
または、「作成」をクリックして新規に再利用可能な条件を定義します。（119ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。）
5. 入力完了したら、「保存」をクリックします。変更をキャンセルするには、「閉じる」をクリックします。

特定の権限の「適用先」プロパティ

適用先機能は、次の権限に基づいて権限マスクに設定されます。

権限オブジェクトの各行は構成要素の権限マスクです。権限マスク・オブジェクト（次の権限に基づく「適用先」プロパティを含む）を開くには、行をダブルクリックします。

- **管理者権限:** 「管理者」と「ユーザー管理者用の管理アクセス」。231ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。
- **ユーザー管理者権限:** 「ユーザー管理者」権限マスクは、ユーザーが他のユーザーに割り当てることができる役割を設定します。232ページの「[特殊な管理者権限マスク](#)」を参照してください。
- **読取り権限:** 241ページの「[フィールドレベルでの読取り権限](#)」および 242ページの「[フィールドレベルでの読取り権限](#)」を参照してください。

- **変更権限**: 244ページの「[変更権限](#)」を参照してください。
- **Microsoft Project権限** (PPM固有の権限) : 235ページの「[プロジェクトの要約ページの設定](#)」を参照してください。
- **「ダッシュボード」タブ表示権限** (PPM固有の権限) : 36ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照してください。

次のセクションでは、管理者固有の権限マスクとの関連を中心にして適用先機能を説明していますが、このセクションの情報は、読取り、変更、Microsoft Project、および「ダッシュボード」タブ表示の各権限に基づいた権限マスクに関連があります。


管理者権限と適用先機能

「管理者」役割は、「管理者」権限マスクと「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクをベースとして作成されます。「管理者」権限マスクは、Java クライアントの管理者ノードへのアクセスを提供し、「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクは、Web クライアントの管理者ノードへのアクセスを提供します。

「ユーザー管理者」役割には、「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクと「ユーザー管理者」権限マスクが含まれています。「ユーザー管理者」権限マスクは、他のユーザーに割り当てることができる役割を定義します（詳細は、233ページの「[管理者アシスタントの構築オプション](#)」を参照）。

Agile 管理者または補佐する「ユーザー管理者」が、それぞれの「管理者」権限マスクまたは「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクの「適用先」プロパティで特定のノードを正しく選択していない場合、そのノードは、管理者ノードの該当するユーザーの表示にリンクされないため、ユーザーはこの機能にアクセスできません。


「表示属性のみ表示」チェック・ボックス

次のタスクでは、「適用先」プロパティが含まれている権限マスクの「**一般情報**」タブを表示します。「適用先」プロパティの下矢印をクリックすると、「**表示属性のみ表示**」チェック・ボックスが表示されます。このチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。「表示」プロパティが「いいえ」に設定されている属性を表示する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。非表示の属性がすべて「選択肢」リストに表示されます。

「適用先」プロパティを表示する

このタスクは、「適用先」プロパティが含まれているすべての権限マスクに適用できます。

管理者権限の「適用先」プロパティを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」ノード・フォルダで、「権限」ノードを展開します。
2. 「管理者」権限をダブルクリックします。「管理者権限」フィルタのダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「条件」フィールドのドロップダウン・リストで、「**すべて表示**」を選択します。「適用」ボタンをクリックします。
4. 使用可能な管理者関連の権限マスクが表示されます。「管理者」権限マスクをダブルクリックします。
5. 「管理者」権限マスクの「**一般情報**」タブで、「適用先」プロパティの下矢印をクリックします。
6. 「**選択肢**」リストには、自分の役割と権限にこの権限マスクが含まれているユーザーが現在利用（表示）できない管理者ノードまたは他の管理者ユーティリティ（グローバル置換など）がすべて表示されます。「**選択済**」リストには、表示されているすべてのノードが表示されます。（「**表示属性のみ表示**」チェック・ボックスが選択された状態になります。管理者権限への影響はありません。）

重要 「選択肢」リストは、権限マスクの性質を反映しています。管理者、読取りおよび変更ベースの権限マスクでは、管理者ノードとユーティリティを選択します。Microsoft Projectと「ダッシュボード」タブ表示ベースの権限タスクでは、別の選択肢が表示されます。36ページの「[ダッシュボード管理](#)」および235ページの「[プロジェクトの要約ページの設定](#)」を参照してください。


「適用先」プロパティを変更する

適格な権限マスクに対して「適用先」属性を選択する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。「権限」ウィンドウが表示されます。
2. 変更する適格な権限マスクをダブルクリックします。権限マスク・ウィンドウが表示されます。

注意 検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

権限マスクのプロパティが「一般情報」タブに表示されます。

3. 「一般情報」タブで、「適用先」フィールドの横にある下矢印をクリックします。選択ダイアログ・ボックスが開きます。
4. 右矢印をクリックして、選択した値を「選択肢」リストから「選択済」リストに移動します。
5. 完了したら、「OK」をクリックします。
6. 権限マスクの編集を完了するには、「保存」をクリックします。

注意 「適用先」選択ダイアログ・ボックスでは、タブに含まれるすべての使用可能なフィールドから選択できます。ただし、選択したフィールドを常に変更できるとはかぎりません。

たとえば、「変更(リリース済設計変更)」権限マスクを作成する際には、「アイテム番号」、「新規リビジョン」、「タイプ」など、「対象アイテム」タブのすべてのフィールドから選択できます。ただし、これらのフィールドは、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後には変更できません。これらの属性は、「適用先」選択ダイアログ・ボックスの「選択肢」リストから選択できるため、必ずしも、それらのフィールドはすべての条件下で変更できることにこだわる必要はありません。

特殊な管理者権限マスク

特殊な管理者権限マスクを作成することも可能です。特にこの権限マスクについては、1人または数人のユーザーに割り当てるため、デフォルトの権限を変更するよりも、個々の状況に応じて変更するほうが安全です。

注意 すでに使用している管理者権限マスクの「適用先」プロパティの変更に關しては、特に慎重に行ってください。たとえば、管理者権限マスクの「適用先」プロパティを変更して権限を除外すると、管理者は「権限」ノードにアクセスできなくなるため、管理者権限マスクを変更して、権限に再適用することが非常に困難になります（このようなシナリオでは「役割の例」が必要となります）。

複数の管理者権限と役割が必要な場合は、既存の管理者の役割および権限を変更したり無効にする前に、新規の役割および権限を十分にテストしてください。

注意 複数の管理ユーザーを任命する際には、会社と与える影響を慎重に考慮し、各ユーザーには特定のタスクを割り当てるようにしてください。これによって、管理タスクを多数のユーザーで分担でき、各ユーザーを特定のタイプの管理タスクに限定できます。233ページの「[管理者アシスタントの構築オプション](#)」を参照してください。

次に、Java クライアントの管理者ノードへのアクセスに関して、ユーザーの「**管理者**」権限マスクの「適用先」プロパティからノードを削除する際の注意点を示します。

- 「**条件**」を削除すると、権限オブジェクトの「**一般情報**」タブ、「**ワークフロー**」ノード、ワークフロー・オブジェクトの「**一般情報**」タブ、または確認通知受信者オブジェクトの「**一般情報**」タブから、条件へのリンクがなくなります。また、「ワークフローの作成」と「権限の作成」のダイアログ・ボックスの「**新規条件**」ボタンが無効になります。
- 「**役割**」を削除すると、「**ユーザー**」ノードまたは「**削除されたユーザー**」ノードから役割へのリンクがなくなります。
- 「**ワークフロー**」を削除すると、条件の「使用箇所」テーブルからワークフローへのリンクがなくなります。
- 「**権限**」を削除すると、条件の「使用箇所」テーブルから権限へのリンクがなくなります。

管理者アシスタントの構築オプション

「ユーザー管理者」役割は、「ユーザー管理者」という権限と権限マスクで機能します。「ユーザー管理者」権限マスクは、「ユーザー管理者用の管理アクセス」とは異なる機能を実行します。

メイン Agile PLM 管理者が、管理タスクについて選択した数人のユーザーによる補助を受けるとします。（管理者を補助する人数と種類は、企業の規模や購入した PLM ソリューションの数などによって異なります。）管理者のオプションは次のとおりです。

- Java クライアントの管理機能へのユーザー・アクセスを許可するには、「管理者」役割を割り当てて、調整します。各ユーザー・オブジェクト（「管理者」権限マスクを割り当てているオブジェクト）で、「適用先」プロパティを使用し、ユーザーが作業できるノードを調整します。
- Web クライアントの管理機能へのユーザー・アクセスを許可するには、「ユーザー管理者」役割を割り当てて、調整します。ユーザー管理者は、Web クライアント>「**ツールおよび設定**」>「**アドレス帳**」、および「**ツールおよび設定**」>「**管理**」を介して管理者タスクを実行します。
 - 「ユーザー管理者」役割では、「ユーザー管理者用の管理アクセス」という権限マスクと、少ないノード数の「適用先」リストが使用されます。各ユーザー・オブジェクト（「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクを割り当てているオブジェクト）で、「適用先」プロパティを使用し、ユーザーが作業できる Web クライアント・ノードを調整します。
 - 「ユーザー管理者」役割は、「ユーザー管理者」と呼ばれる新規の権限マスクも使用します。前述の「適用先」プロパティを表示する」および「適用先」プロパティを変更する」と同じ一連のステップを使用すると、管理者ノード名ではなく PLM 役割の完全なリストが移入された「**選択肢**」リストが表示されます。各ユーザー・オブジェクト（「ユーザー管理者」権限マスクを割り当てているオブジェクト）で、「適用先」プロパティを使用し、他のユーザーに割り当てることができる役割を調整します。

役割を「**選択済**」リストに移動すると、その役割を別のユーザーに割り当てることができるようになります。

インポート・プリファレンス設定の保存（適用先の選択肢）

「インポート・プリファレンス設定の保存」は、管理者固有の「適用先」プロパティ（「管理者」および「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクにあるプロパティ）内の新しい選択肢です。この設定（「選択済」に移動した場合）によって、管理者またはアシスタント管理者は、デフォルトのプリファレンスを PLM インポート・ユーティリティ（Web クライアント>「ツール」>「インポート」）に設定できます。これにより、インポートを実行するユーザーがこのユーティリティを使用する際に、デフォルトのプリファレンスが表示されます。

ユーザーは、インポートのプリファレンスを使用しやすいように再設定できますが、その設定は保存されません。ただし、「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクを任意のユーザーに割り当て、適用先でこの権限マスクを選択することは可能です。これによって、そのユーザーは、インポートのプリファレンスを保存できますが、他のユーザー管理者機能を使用することはできません。

レポート・テンプレートの管理（適用先の選択肢）

「レポート・テンプレートの管理」は、管理者固有の「適用先」プロパティ（つまり、「管理者」および「ユーザー管理者用の管理アクセス」権限マスクにあるプロパティ）内の選択肢の 1 つです。

「レポート・テンプレートの管理」を「選択済」テーブルに移動すると、管理者またはアシスタント管理者は、このプロパティを使用して PLM レポート・テンプレート・ユーティリティでレポートのテンプレートをアップロードできます。「レポート・テンプレートの管理」ページを表示するには、Web クライアント>「ツールおよび設定」>「管理」>「レポート・テンプレート」の順に選択します。

これらのテンプレートは、ユーザーが Web クライアントでレポート機能を使用するときに、割り当てられている権限に従って表示されます。

ダッシュボード管理

「ダッシュボード管理」ノードでは、Agile PLM ダッシュボードの情報表示および動作を設定できます。ダッシュボードは高度に設定可能で、プリファレンスに応じて主要なプロジェクト情報をユーザーに表示できます。

管理者は、システム・レベルのタブを必要な数だけダッシュボードに追加できます。各タブを表示するかどうかは、役割と権限を使用して管理できます。

ダッシュボード・タブは、Agile オブジェクトのコンテンツを生成および表示するように設定できます。カスタム・ダッシュボード拡張機能（DX）を使用すると、外部システムのデータ（たとえば、ERP 在庫番号）を取り出してダッシュボードに表示できます。ダッシュボード・タブ内のテーブルは、詳細検索またはプロセス拡張によって取り出したデータを様々なグラフ形式で表示するように設定できます。また、ダッシュボード・テーブルは、内部または外部の Web サイトを表示するように設定することもできます。

「ダッシュボード管理」内で次の操作を実行できます。

- すべてのダッシュボード・タブを表示および編集する
- オプションのダッシュボード・タブを追加または削除する
- オプションのダッシュボード・タブにテーブルを追加する
- テーブルに対して、次のようなデータの複数ソースを設定する
 - 詳細検索
 - ダッシュボード拡張機能（チャートとテーブル）
 - URL プロセス拡張（PX）からのカスタム・コンテンツ
- ダッシュボード・タブの表示を設定する

プロジェクトの要約ページの設定

「プロジェクトの要約ページの設定」が「適用先」プロパティとして指定されている管理者権限マスクは、プロジェクトの「要約」ページのウィジェットを設定する際に使用されます。「プロジェクトの要約」ページのウィジェットおよびページの構成は、Agile Web クライアントの「[ツールおよび設定](#)」>「[管理](#)」メニューを使用して実行できます。

新規権限マスクを作成する

権限マスクは役割と同様に、簡単に作成できますが、ユーザーのアクセスや許可を変更する際には十分に注意してください。新規権限マスクを作成する前に、現在の権限マスクを確認する必要があります。「[管理者レポート](#)」ノードから権限マスクの詳細レポートを生成し、現在の権限マスクとその条件をリストします（20ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください）。

必要な権限マスクに似た権限マスクがある場合は、新しい権限マスクを作成するのではなく、既存の権限マスクを変更（またはコピーしてから変更）することをお薦めします。既存の権限マスクは詳細に検証され、Agile PLM における動作や相互作用が証明されています。

作業を開始する前に

新規権限マスクを作成する前に次の内容について考慮してください。

- 必要な権限マスクがすでに存在していないか。存在している場合、新しい権限マスクを作成せずに既存の権限マスクを役割に割り当てることができます。また、適切な再利用可能な条件が存在する場合は、権限マスクの「[使用箇所](#)」タブを確認します。
- その権限マスクによって Agile PLM でどのようなアクションを有効にするか。
- その権限マスクによって Agile PLM でどのようなアクションを禁止するか。
- その権限マスクは、どのオブジェクト・タイプに対して動作するか。
- 新規権限マスクにどのような名前を付けるか。「アクション - 条件 - オブジェクト・タイプ」という命名規則に従ってください。
- 新規権限マスクはどの役割で必要か。
- 基本的な「読取り」または「変更」権限マスクを作成する場合、対応する「ディスカバリ」権限マスクも作成する必要があるか。対応する「ディスカバリ」権限マスクがすでに存在していないか。（「ディスカバリ」権限マスクは、新規「読取り」または「変更」権限マスクの作成時に自動的に作成されません。）
- 「読取り」権限マスク以外の場合、その効力は読取り権限に依存するか。
- どのような条件のもとで、その権限マスクを有効にするか。権限マスクの作成時に選択できる既存の再利用可能な条件はあるか。ある場合は、その再利用可能な条件の「[使用箇所](#)」タブをチェックして、必要な権限マスクがすでに存在しているかどうかを確認します。
- その権限マスクは、役割に含まれる既存のマスクと矛盾しないか。
- 役割に含まれる既存の権限マスクを変更することによって、意図する結果を実現できるか。
- 権限マスクを最初から作成しなくてもすむように、その役割または他の役割にコピー（「名前を付けて保存」を使用）して変更できる既存の権限マスクはないか。

次の手順に従って「名前を付けて保存」プロセスを使用することで、新規権限マスクを作成できます。新規権限マスクは最初から作成することもできます。

「名前を付けて保存」を使用して権限マスクをコピーする

権限マスク・ウィンドウの「名前を付けて保存」を使用すると、既存の権限マスクのコピーを作成できます。作成したコピーは必要に応じて変更できます。

権限マスクをコピーする手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。「権限」ウィンドウが表示されます。
2. コピーする権限マスクをダブルクリックします。権限マスク・ウィンドウが表示されます。

注意 検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての変更権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。）

3. 「名前を付けて保存」ボタンをクリックします。
4. 新しい権限マスクの名前と API 名を入力します。
5. 完了したら、「保存」をクリックします。新規権限マスクが表示されます。

新規権限マスクを最初から作成する

新規権限マスクを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。「権限」ウィンドウが表示されます。
2. ツールバーの「新規作成」をクリックします。「権限の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 名前と API 名を入力します。「アクション - 条件 - オブジェクト・タイプ」という命名規則に従ってください。225ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。
4. 説明を入力します。
5. デフォルトでは、権限マスクは有効になっています。必要に応じて、「有効」フィールドで「いいえ」を選択して権限マスクを無効にすることもできます。この操作は、権限マスクの作成中に行うことをお勧めします。
6. 「権限」ドロップダウン・リストから権限を選択します。


選択した権限によっては、入力するフィールドがさらに表示されることがあります。

注意 ステータスの変更権限を選択した場合は、「ステータスの変更」権限マスクの完成の詳細について、219ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

7. 次のいずれかの操作を行います。
 - 権限条件（再利用可能な条件）を必要としない権限マスクの作成を終了するには、「完了」をクリックします。
8. 他のすべての権限に対しては、「権限条件」フィールドで、ドロップダウン・リストから再利用可能な条件を選択します。再利用可能な条件によって、権限マスクのオブジェクト・タイプとフィルタリング条件の両方が定義されます。

または、ダイアログ・ボックスで「新規条件」をクリックして新規の再利用可能な条件を定義します。119ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。

(権限マスクに対するオブジェクト・タイプの選択の詳細は、227ページの「[権限マスクの構成要素 2: オブジェクト・タイプ](#)」を参照してください。再利用可能な条件の詳細は、117ページの「[条件](#)」を参照してください。)

9. 「読取り」、「変更」、または「管理者」権限マスクを作成する場合は、読取りまたは変更権限が適用されるオブジェクトのフィールドを選択できます。(228ページの「[権限マスクの構成要素 4: 属性](#)」を参照してください。)
- 「適用先」フィールドのをクリックします。選択ダイアログ・ボックスが開きます。
 - 左右の矢印をクリックして、選択した値を一方のリストから他方のリストに移動します。
 - 完了したら、「OK」をクリックします。
10. ステータスの変更権限またはオーバーライド権限を作成する場合は、219ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。
11. 「権限の作成」ダイアログ・ボックスの各フィールドが完成したら、「OK」をクリックします。

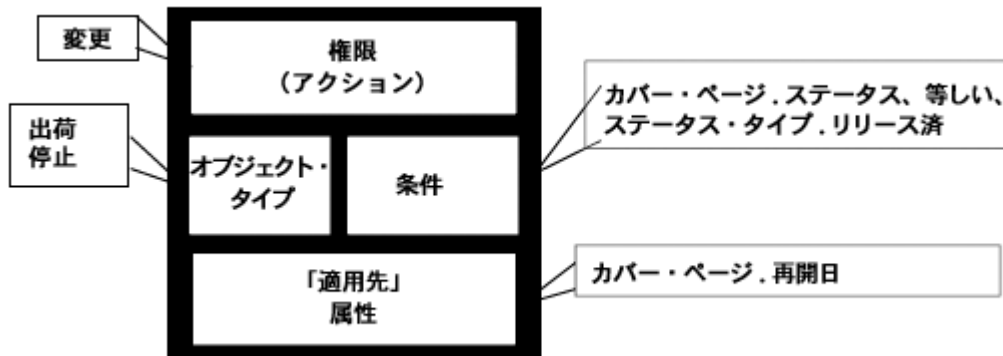
注意 作成中に権限マスクを無効にした場合は、使用する前に必ず有効にしてください。

条件と適用先属性のオプションを組み合わせる

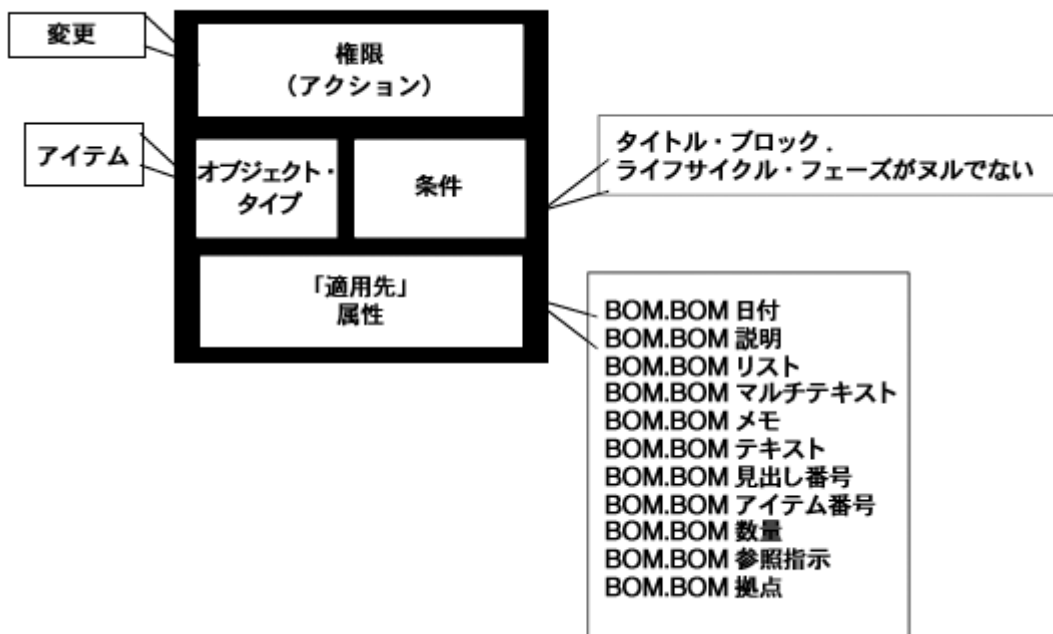
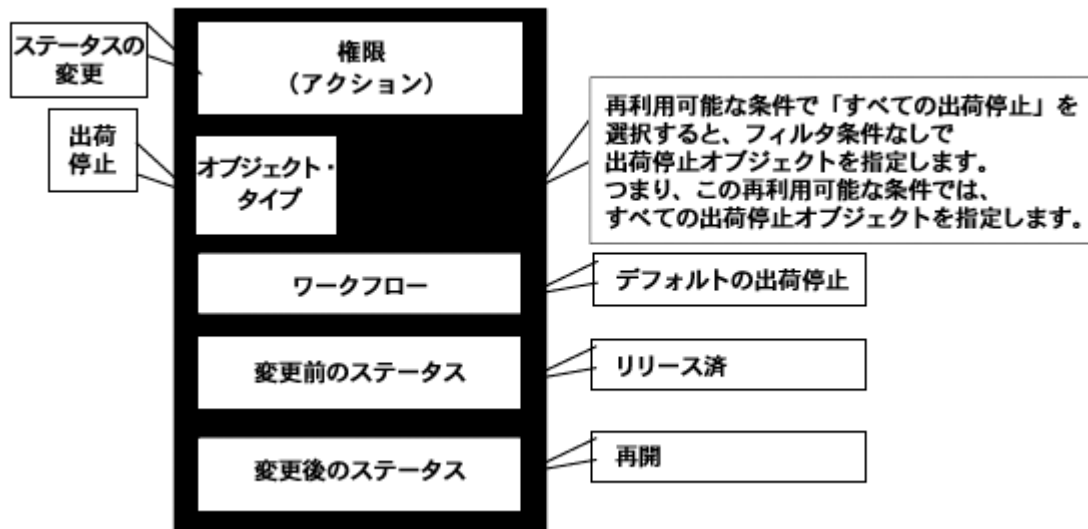
権限マスクを作成または変更する際には、「適用先」および「条件」ダイアログ・ボックスにより、属性のあらゆる組合せを選択できますが、すべての権限マスクですべての条件または属性が有効になるとはかぎりません。適切に機能するように、オプションの組合せを確認してください。

たとえば、「変更(リリース済設計変更)」権限マスクを変更する場合は、「適用先」ダイアログ・ボックスのリストから、「対象アイテム.アイテム番号」フィールドと「対象アイテム.新規リビジョン」フィールドを選択できます。ただし、これらの2つのフィールドは、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後には変更できません。これらの属性は、「適用先」ダイアログ・ボックスで指定できるため、必ずしも、リリース済のルーティング可能なオブジェクトで、それぞれのフィールドを変更できることにこだわる必要はありません。

次に、Agile PLM のインストールで提供される権限マスクとそのプロパティの例を示します。



ステータスの変更権限には、前述の図にある「適用先」プロパティは含まれません。ただし、ステータスの変更権限には、次の図にある「ワークフロー」、「変更前のステータス」、「変更後のステータス」プロパティが含まれます。



ディスカバリ権限と読取り権限

このセクションでは、ディスカバリ権限と読取り権限について詳細に説明します。

「読取り」および「変更」権限マスクは、アクセス可能な個々の属性を指定する「適用先」プロパティによって、他のプロパティの中でも固有の権限マスクになります。（一方、「管理者」権限マスクは、アクセス可能な個々のノードを指定する「適用先」プロパティによって固有の権限マスクになります。）

注意 前章の 197 ページの「[詳細検索のセキュリティ](#)」のセクションでは、ディスカバリ権限、読取り権限およびフィールドレベルでの読取り権限に適用する検索セキュリティの機能拡張について説明しています（このセクションでは説明しません）。

ディスカバリ権限

アウトソーシングや「仮想企業」がますます一般的になる中で、Agile PLM をご使用いただいている各企業では、サプライ・チェーン内の外部企業の従業員に対して自社の Agile PLM データベースへのアクセスを許可する傾向にあります。セキュリティを確保するため、外部ユーザーには直接関連のある情報のみアクセス可能とすることが重要です。たとえば、あるサプライヤに、別のサプライヤが同じ部品を供給していることや、自社がサプライヤの直接の競合会社に同じ部品を供給していることを知られるのは不都合です。

Agile PLM のディスカバリ機能（「ディスカバリ権限」データベース・プロパティ、ディスカバリ権限、「ディスカバリ」権限マスク）は、このようなセキュリティ上の問題に対応するように設計されています。これらの機能によって、ユーザーが Agile PLM で特定のオブジェクトの存在を把握できるかどうか管理されます。

オブジェクト・ディスカバリは次の 2 つの方法で管理できます。

- グローバル・レベルで、「ディスカバリ権限」データベース・プロパティ（「[サーバー設定](#)」>「データベース」）を「有効」または「無効」に設定する。
- 役割のレベルで、「ディスカバリ」権限マスクを使用する。

たとえば、あるサプライ・チェーン・パートナーの従業員には、そのパートナーが供給する部品のみを対象にしたディスカバリ権限がある場合、この従業員は、検索結果テーブルや BOM で、他のパートナーが供給する部品を確認できません（240 ページの「[関連するスマートルール](#)」を参照してください）。

注意 ユーザーに読取りまたは作成権限を付与する場合は、そのオブジェクトに対するディスカバリ権限も付与する必要があります。これにより、オブジェクトの読取りがそのユーザーに許可されます。ユーザーは自分が作成したオブジェクトを常にディスカバリまたは読み取ることができます。

たとえば、「すべての変更指示」という条件で「読取り」権限マスクを作成する場合は、「すべての変更指示」という条件付きの「ディスカバリ」権限マスクもその役割に含める必要があります。

グローバルなディスカバリ管理に対する「ディスカバリ権限」データベース・プロパティの使用の詳細は、361 ページの「[データベース](#)」を参照してください。

Agile PLM 付属の各役割に割り当てられている「ディスカバリ」権限マスクの詳細は、189 ページの「[役割を表示する](#)」を参照してください。

注意 設計変更指示がルートされた後に、変更作成者または CCB メンバーのディスカバリ権限が削除された場合、作成者または CCB メンバーは通知を受け取りますが、変更は表示できません。不都合を避けるため、ディスカバリ権限を割り当てた後は削除しないようにしてください。

ディスカバリ権限と拠点

拠点オブジェクトは、ディスカバリ権限の条件から明確に除外されます。したがって、ユーザーの拠点アクセスを管理するための新しい「ディスカバリ」権限マスクは定義できません。

ユーザーの拠点へのアクセスを管理するには、ユーザー・プロパティを適切に設定してください。Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーを開き、「拠点」および「デフォルトの拠点」プロパティを指定します。

ディスカバリ権限とライフサイクル・フェーズ

見積依頼回答ライフサイクル・フェーズに基づいて、ディスカバリ権限の条件を作成した場合は、Agile アプリケーション・サーバーを再起動してこの条件を使用する検索を実行する必要があります。実行しないと、検索の結果が得られません。

関連するスマートルール

次のスマートルールには、ユーザーがディスカバリ権限を持たないオブジェクトに遭遇した場合の Agile PLM の応答方法が定義されています。

- BOM テーブルの表示
- オブジェクト・テーブルのディスカバリ
- 結果テーブルのディスカバリ

これらのスマートルールとそのデフォルト設定の詳細は、256 ページの「[スマートルールの定義](#)」を参照してください。

ディスカバリ権限およびレポート

管理者レポートは Agile ユーザーには表示されず、実行することもできません。次の情報は、ユーザーが実行できる標準レポートにおける、特定オブジェクトの可用性に関する情報です。

オブジェクトに対してディスカバリ権限を持たないユーザーは、レポートにオブジェクトを含めることができません。ユーザーにディスカバリ権限がない部品は、BOM での表示と同様に表示されます。

管理者が設定している場合は、レポートに警告メッセージが表示されます。また、アイテム番号のみを表示するか、アイテムの説明のみを表示するかを選択もできます。ユーザーはレポートにすべてのアイテムを表示できますが、ディスカバリ権限のないアイテムへのアクセスは認められません。

特定のタイプのオブジェクトについてレポートを実行するには、次の権限が必要です。

- 読取り権限
- ディスカバリ権限

- レポートの実行権限

注意 レポート管理権限のみではレポートを実行できません。

ディスカバリ権限と読取り権限の関係

Agile PLM 管理者は、次の表に示すように、ディスカバリ権限と読取り権限を使用してユーザーの Agile PLM データへのアクセス・レベルを設定できます。

アクセス・レベル	ディスカバリ権限	読取り権限
フル・アクセス	許可	すべてのタブについて許可
限定アクセス	許可	「履歴」タブまたは「ワークフロー」タブについては不許可
ディスカバリのみ	許可	不許可
ディスカバリなし	不許可	不許可

ディスカバリ権限と読取り権限で構成される権限マスクは、次の表に示すように、相互に依存しています。

権限マスクのタイプ	効果とコメント
ディスカバリ	<ul style="list-style-type: none"> □ ディスカバリ可能なオブジェクトの存在を把握できる
読取り	<ul style="list-style-type: none"> □ オブジェクトのディスカバリ権限が必要である □ オブジェクトを開くことができる □ 権限マスクの「適用先」ダイアログ・ボックスで定義されているすべてのタブを読み取ることができる（次を参照）

注意 「読取り」権限マスクを削除または変更しても、「ディスカバリ」権限マスクは自動的に削除または変更されません。


フィールドレベルでの読取り権限

フィールド・レベルでの読取りでは、Agile PLM クライアントのユーザーが、「読取り」権限マスクによってタブ内の各種フィールドを読み取ることができるかどうかが定義されます。各タブの各フィールドはいずれも、ユーザーが読取りできないよう設定できます。フィールド・レベルでの読取りの有効な使用例として、買い手が「ページ 2」タブの「コスト」フィールドをサプライヤに見られないようにする場合があります。

オブジェクトのフィールドを表示するには、次の条件を満たす必要があります。

- ユーザーがオブジェクトに対する読取り権限を持っている。
- そのユーザーの「読取り」権限マスクの「適用先」プロパティにフィールドが表示されている。

たとえば、「権限」ウィンドウでいずれかの「読取り」権限マスクをダブルクリックして表示します。「一般情報」タブの「適用先」フィールドには、読取り権限が適用されるすべてのフィールドが一覧表示されます。

「読取り」権限マスクを新しく作成した場合には、「適用先」プロパティに表示される値はありません。作成時に、「適用先」フィールドのをクリックして選択ダイアログ・ボックスを表示します。オブジェクトのすべてのフィールドが「選択肢」リストに表示されます。左側の「選択肢」リストから右側の「選択済」リストにフィールドを移動して、権限マスクを調整します。

条件で指定されたオブジェクトの「ワークフロー」タブをユーザーが表示できないようにする場合は、「ワークフロー」タブのすべてのフィールドを「選択肢」リストに残す必要があります。「選択済」リストのフィールドのみがユーザーに対して表示されます。これはフィールド・レベルでの読取りの一例です。


フィールド・レベルでの読取り機能は、フィールドレベルでの読取り権限がユーザーにあるかどうかによって影響されます。この権限については、次の「フィールドレベルでの読取り権限」で説明します。

「読取り」権限マスクの「適用先」フィールドを変更する

これは、「読取り」権限マスクに固有のタスクです。適用先機能は、他の少数の権限によって使用されます。詳細は、230ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

「読取り」権限マスクが適用されるフィールドのリストを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「権限」をダブルクリックします。「権限」ウィンドウが表示されます。

注意	検索を絞り込むには、権限マスク・レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての読取り権限マスクを検索するには、権限に「読取り」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。（8ページの「 データのフィルタリング 」を参照してください。）
-----------	---
2. 変更する権限マスクをダブルクリックします。権限マスク・ウィンドウが表示されます。
 権限マスクのプロパティが「一般情報」タブに表示されます。
3. 「一般情報」タブで、「適用先」フィールドの横にあるをクリックします。選択ダイアログ・ボックスが開きます。
4. 左右の矢印をクリックして、選択した値を一方のリストから他方のリストに移動します。
5. 完了したら、「OK」をクリックします。
6. 権限マスクの編集を完了するには、「保存」をクリックします。

フィールドレベルでの読取り権限

この権限によって、Agile PLM管理者は、ユーザーがフィールド・レベルでの読取り制限の対象となっている場合に、特定の動作を制限できます（241ページの「[フィールドレベルでの読取り権限](#)」を参照してください）。「フィールド・レベルでの読取り」役割は、「フィールド・レベルでの読取り」権限マスクのみで構成されます。

ユーザーの役割に、フィールドレベルでの読取り権限が含まれている場合は、フィールド・レベルで（つまり、Agile PLM クライアントの各タブのフィールド）すべてがチェックされます。この権限のユーザーは、自分のコンピュータのパフォーマンスが一部の操作で低くなることに気付く場合があります。これは、ソフトウェアがすべてのフィールドをチェックしているためです。この影響は、検索対象のテーブルに含まれるアイテム（BOM、対象アイテム、結果など）の数によって左右されます。

ユーザーがこの権限を含む役割を持たない場合は、システムによるフィールド・レベルのチェックが行われなため、コンピュータの動作速度に影響はありません。その場合、ユーザーの読取り権限がフィールド・レベルで定義されていても、システムではすべてのフィールド・レベルのチェックは行われません。このチェックは、フィールド・レベルでの読取り権限が有効になっている場合にのみ実行されます。

重要 以前のバージョンの Agile PLM では、出力列の指定権限を使用して、詳細検索の設定時に出力属性を選択できるユーザーを制限していました。この権限は削除されたため、詳細検索ではすべてのユーザーが出力属性を指定することが可能です。ただし、以前に出力列の指定権限を持っていなかったユーザーに対してフィールド・レベルでの読取り権限を割り当てることができます。この操作によって、検索結果が適切にフィルタされます。たとえば、コストなどの機密性の高いフィールドが検索されないようにできます。

ユーザーがフィールドレベルでの読取り権限を含む役割と含まない役割を持つ場合、デフォルトではフィールドレベルでの読取りが有効になります。同様に、ユーザーが有効と無効に設定された 2 つのフィールド・レベルでの読取り権限を含む役割を持つ場合、デフォルトではフィールド・レベルでの読取りが有効になります。いずれの場合も、ユーザーは読取り権限を持つフィールドのみ表示できます。このため、特定のフィールドの表示を禁止するユーザーに対してのみ、この権限を有効にすることをお勧めします。

フィールド・レベルでの読取りが「はい」に設定されている場合、特定の権限やスマートルールに対してシステムは次のように動作します。

- **ディスカバリ権限** - オブジェクトが結果テーブル等に表示されるかどうかを決定します。
- **ユーザーにオブジェクトに対する読取り権限がない** - 結果テーブルなどのオブジェクトのフィールドに「権限なし」が表示されます。これらのオブジェクトの BOM テーブル上の表示は、スマートルールの「BOM テーブルの表示」によって決定されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことはできません。
- **ユーザーに「オブジェクト番号」フィールドと「説明」フィールドに対する読取り権限がある** - 結果テーブル等にオブジェクト番号と説明が表示されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことができます。
- **ユーザーにすべてのフィールドに対する読取り権限がある** - すべてのテーブルにすべてのフィールドが表示されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことができます。

フィールド・レベルでの読取りによるテーブルの表示

Agile の Product Collaboration リリース 7 までは、ユーザーの役割に、フィールドレベルでの読取り権限が含まれている場合は、読み取ることはできないが、検出できるオブジェクトの表示で（「結果」、「使用箇所」、「対象アイテム」、「製造元」の各テーブル内）、対応するすべてのフィールドに「権限なし」が表示され、ユーザーは、これらのオブジェクトを開いてその内容を表示できました。BOM テーブルのフィールドの表示は、スマートルールの「BOM テーブルの表示」によって決定されていました。

ユーザーに、テーブルに関して 6.x の動作を模倣させる場合は、特定のフィールドに対するそのユーザーの役割に、読取り権限を追加する必要があります。読取り権限には、適用先属性としてオブジェクトの番号と説明を含めることができ、これらのフィールドのみテーブルに表示されます。

たとえば、特定のオブジェクト・タイプに対して「内部のみ」や「外部」などの「添付ファイル・タイプ」の値を定義し、社外のユーザーには「外部」に設定されたファイルに対する権限のみを与えることができます。Agile PLM クライアント・ユーザーがそのオブジェクト・タイプに添付ファイルを追加し、それを「内部のみ」に設定すると、社外のサプライヤや下請業者は、そのファイルにアクセスできません。

権限マスク条件で「添付ファイル・タイプ」属性を使用する場合は、指定するオブジェクト・タイプを基本クラス（アイテム、変更、レポートなど）にすることはできません。

注意 「添付ファイル・タイプ」属性を有効にして添付ファイルへのアクセスを制限する場合は、必ずユーザーにフィールドの使用方法を説明してください。このフィールドは Agile PLM クライアントで編集できます。

変更権限

重要な変更権限については、次の「変更の基本とルール」および245ページの「[\\$CURRENTREVを使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する](#)」の具体的な重要事項でほぼ説明されています。また、「読取り」および「変更」権限マスクは、アクセス可能な個々の属性を指定する「適用先」プロパティによって、他のプロパティの中でも固有の権限マスクになります。

変更の基本とルール

変更権限によって、ユーザーはオブジェクトのタブのフィールドを変更または編集できます。変更権限は、「適用先」属性の設定を使用して割り当てます。

注意 オブジェクトを作成する際、ユーザーは、必須フィールドに対する変更権限がない場合でも、作成権限で必須フィールドに値を入力できます。必須フィールドは、属性プロパティ「**必須**」が「はい」に設定されているフィールドです。77ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください。

- 変更権限は、Agile PLM インポート・ユーティリティのユーザーに必要です。
- 権限と関係の変更: ルール（『Agile PLM スタート・ガイド』を参照）を設定せずに2つのオブジェクト間の関係を作成するには、その関係に応じて適切な変更権限を両方のオブジェクトに指定する必要があります。関連する2つのオブジェクト間にルールを作成するには、そのルールに応じて適切な変更権限を両方のオブジェクトにさらに指定する必要があります。たとえば、アイテムの場合、ユーザーには「アイテムの変更」権限マスクが必要で、「関係」タブの「名前」属性と「関係」タブの「ルール」属性がその権限マスクの「適用先」プロパティに指定されている必要があります。
- 「変更（製造元部品）」権限マスクを持つユーザーは、製造元変更または設計変更指示を発行せずに、「製造元」タブに表示されている製造元部品の属性を変更できます。

注意 製造元（AML）情報を適切に変更するには、「製造元.製造元名」と「製造元.製造元部品番号」フィールドの両方に対する変更権限の割当てが必要です。

- 「リリース済」または「実施済」ステータスの場合、変更の「対象アイテム」タブの「アイテム」、「新規リビジョン」、「タイプ（ライフサイクル）」の各フィールドは変更できません。
 - また、その他の変更で、「対象アイテム」タブのアイテム番号フィールドは、「リリース済」、「終了」、「期限切れ」、または「再開」ステータスでは変更できません。
- 「ページ3」タブを変更するには、特定のサブクラスと属性に対する「変更」権限マスクが必要です。

重要 リリース済ECOを変更することで、以前のリリース済リビジョンのライフサイクル・フェーズを変更できるようにAgile PLMを設定できますが、そのような慣習は次の理由でお薦めできません。

- a) 規制の適合性に違反する可能性
- b) システムのデータ整合性問題の可能性

リリース済 ECO を直接変更することによって、リリース済リビジョンのライフサイクルを変更できないようにユーザー権限を設定することをお薦めします。

Agile PLM では、リリース済 ECO の「**対象アイテム**」テーブルの「アイテム・リビジョン」とアイテムの「説明」を変更する許可をユーザーに与えていません。

変更権限は、添付ファイルに関連して利用することもできます。この機能は、397ページの「[変更権限と添付ファイル](#)」で説明されています。

\$CURRENTREVを使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する

条件に\$CURRENTREV を使用したアイテム・オブジェクトの「変更」権限マスクは、リリース済、プレリミナリまたは初版のアイテムを、ユーザーが変更できるかどうかを制御するために使用できます。ユーザーの変更機能をさらに定義するには、複数の\$CURRENTREV 条件を使用して、初版リビジョン、最新リビジョン、および選択したアイテムのリビジョンに関連付けられた変更指示のワークフロー・ステータスを識別します。

適用可能なアイテム属性

ユーザーは、「リビジョン」ドロップダウン・リストを使用して、アイテム・オブジェクトについて特定リビジョンの情報を表示できます。ユーザーに割り当てられた「変更」権限マスクによって、それらの属性を変更できるかどうかが決まります。

- 「リビジョン」ドロップダウン・リストは、Web クライアントと Java クライアントの両方で、アイテムの「**拠点**」タブに対して使用できます。
- 「リビジョン」ドロップダウン・リストは、Java クライアントのアイテムの「**ページ 2**」および「**ページ 3**」タブに対して使用できます。
- Web クライアントのアイテムの「**ページ 2**」および「**ページ 3**」のデータは、「**タイトル・ブロック**」タブに表示されるため、Web クライアントの「**タイトル・ブロック**」タブの「リビジョン」ドロップダウン・リストは、「ページ 2」および「ページ 3」のデータの表示も制御します。

\$CURRENTREV条件の論理

Agile には、アイテムに対する条件で使用可能な特別な変数\$CURRENTREV があります。この変数を使用すると、管理者は、表示されているリビジョンに基づいた権限の制御を組み込むことができます。\$CURRENTREV を使用して作成された条件によって、Agile は、Web クライアントまたは Java クライアントで現在選択されているリビジョンを評価し、一致するかどうかを評価します。つまり、ユーザーが「リビジョン」ドロップダウン・リストでリビジョンを選択すると、その表示されたリビジョンに対して\$CURRENTREV 条件が評価されます。

この機能については、245ページの「[\\$CURRENTREVを使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する](#)」で説明されています。

アイテム条件に\$CURRENTREV を使用すると、管理者は、表示されているリビジョンに基づいた権限の制御を組み込むことができます。複数の\$CURRENTREV 条件の組合せを使用すると、管理者は、ユーザーが変更でき

るアイテムを限定的に定義できます。

\$CURRENTREV 条件は、次の値と「等しい」または「等しくない」となるように設定できます。

- \$LATEST（アイテムの最新のリリース済リビジョン）。
- ステータス・タイプの変数。例: \$STATUSTYPE.RELEASED。
- 特定のワークフローに関連するワークフロー・ステータス。例: デフォルトの変更指示.保留。
- 初版リビジョンを評価するための特別な値。次の値があります。
 - \$INTRODUCTORY_NOCHANGE
 - \$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE
 - \$INTRODUCTORY_RELEASEDCHANGE

\$CURRENTREV条件の値の詳細は、123ページの「[\\$CURRENTREVおよび\\$LATESTREVを使用する](#)」を参照してください。

リリース済リビジョンの定義

リリース済リビジョンは、リビジョンを作成した変更オブジェクト（変更指示または製造元依頼）が、それぞれのワークフロー内で「リリース済」または「実施済」ステータス・タイプとして存在している場合に発生します。リビジョンに括弧が付いていない場合、これは両方のクライアントで発生します。

保留中リビジョンの定義

保留中リビジョンは、リビジョンを作成した変更オブジェクトが、それぞれのワークフロー内で「未割当」、「保留中」、「提出」、「レビュー」、または「中断」ステータス・タイプとして存在している場合に発生します。リビジョンに括弧が付いている場合、これは両方のクライアントで発生します。

注意 「キャンセル」ステータスの変更オブジェクトは、「リビジョン」ドロップダウン・リストに表示されないため、適用できません。

特定の使用事例に対する条件の作成

通常、Agile 管理者による変更権限の制御を必要とする使用事例は3種類あります。これらの使用事例は、必要に応じて条件をさらに拡張できます。

1. 初版のみに変更の拡大を許可する
2. 保留中のリビジョンを対象として変更を許可する
3. リリース済のリビジョンを対象として変更を許可する

1. 初版のみに変更の拡大を許可する

**Items (\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_NOCHANGE OR
\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE OR
\$CURRENTREV Equal to \$UNASSIGNED)**

この文の組合せによって、ユーザーは、アイテムがリリースされていない場合、アイテムの初版リビジョンを変更できます。アイテムに変更がない場合や保留中の変更がある場合があります。アイテムに保留中の変更がある場合、ユーザーは「リビジョン」ドロップダウン・リストで初版リビジョンを選択する必要があります。

多数の「適用先」フィールドがある「アイテムの変更」権限マスクで、この文の組合せが指定されている条件を使用すると、初版での変更権限の拡大が許可されます。一方、リリース済のリビジョンがなく、保留中のリビジョンがある場合は、初回リリース・リビジョン以降の変更権限の拡大が防止されます。

2. 保留中のリビジョンを対象として変更を許可する

**Items (\$CURRENTREV Equal To \$UNASSIGNED OR
\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.PENDING OR
\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.SUBMIT OR
\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.REVIEW OR
\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.HOLD)**

これらの文を使用して条件を記述すると、通常はこの要件が満たされます。この条件は、少数の「適用先」フィールドがある「アイテムの変更」権限マスクで使用します。「リビジョン」ドロップダウン・リストで保留中のリビジョンを選択したユーザーは、選択した保留中のアイテムのリビジョンの特定フィールドを変更できます。

3. リリース済のリビジョンを対象として変更を許可する

**Items (\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.RELEASED OR
\$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.IMPLEMENTED)**

この条件文の組合せは、選択したアイテムのリビジョンをリリースした変更のワークフロー・ステータスが「リリース済」または「実施済」ステータス・タイプである場合に True と評価されます。この条件は、少数の「適用先」フィールドがある「アイテムの変更」権限マスクで使用します。「リビジョン」ドロップダウン・リストでリリース済のリビジョンを選択したユーザーは、選択したリリース済のアイテムのリビジョンの特定フィールドを変更できます。

\$CURRENTREV条件の例

このセクションでは、\$CURRENTREV および \$LATESTREV を使用する 10 の異なる条件文の例を示します。さらに、異なるアイテムのリビジョンに対するそれらの文の評価方法についても説明します。

次の表に、この例で使用する 10 の条件を示します。

条件番号	説明
1	\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_NOCHANGE
2	\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE
3	\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_RELEASEDCHANGE
4	\$CURRENTREV Equal To \$LATEST
5	\$LATESTREV Is Introductory
6	\$LATESTREV Is Released

7	\$CURRENTREV Equal To \$UNASSIGNED or \$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.PENDING
8	\$CURRENTREV Equal To ECO.Released or \$CURRENTREV Equal To ECO.Implemented
9	\$CURRENTREV Equal To Default Change Orders.Implemented
10	\$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_NOCHANGE or \$CURRENTREV Equal To \$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE or (\$LATESTREV Is Introductory and (\$CURRENTREV Equal To \$UNASSIGNED or \$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.PENDING))

次の表に、5つのアイテム（EX-1～EX-5）と、各アイテムのリビジョン履歴を示します。この表は、例のアイテムの「リビジョン」ドロップダウン・リストで特定のリビジョンを選択した場合に、前述の表で示した各条件（条件1～10）がどのように評価されるかを示しています（T = True、空欄 = False）。

アイテム 番号	リビジョン	ステータスの 変更	ステータス・ タイプ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
EX-1	初版	該当なし		T			T	T					T
EX-2	初版	該当なし			T		T	T					T
	(?)	未割当						T		T			T
EX-3	初版	該当なし				T			T				
	A	ECO.実施済	完了				T		T		T		
EX-4	初版	該当なし				T			T				
	A	ECO.実施済	完了				T		T		T		
	(?)	未割当							T	T			
EX-5	初版	該当なし				T			T				
	A	ECO.リリース 済	リリース済				T		T		T		
	(B)	ECO.CCB	レビュー						T				
	(C)	ECO.提出済	提出						T				
	(D)	ECO.保留中	保留中						T	T			

ユーザー作成条件を適用する

ユーザー作成条件の文では、ユーザーの読取り権限がオブジェクトの作成者のみに限定されます。ユーザー作成機能では、読取り権限のないユーザーでもオブジェクトを作成できます。ユーザー作成条件を実装するには、最初に次の両方を表示する必要があります。

- そのクラスの「ページ 2」タブ（64ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照）
- Agile PLMクラスの「ページ 2」タブの「ユーザーの作成」属性フィールド（83ページの「[タブの属性を表示または非表示にする](#)」を参照）

これを実行すると、Agile PLM クライアントでは、当該クラスの「ページ 2」タブの「ユーザーの作成」フィールドに作成者の名前が自動的に表示されます。作成権限を持つすべてのユーザーが当該クラスの空白のフォームを開き、オブジェクトを作成できます。これによって、基本的な読取り権限がないユーザーもオブジェクトを作成できます。ただし、この権限によって、ユーザーの読取り権限の対象が、ユーザー自身が作成した保留中またはプレリナリのオブジェクトに限定されます。

作成権限があるユーザーは、読取り権限を拡大して、自分が作成したすべてのオブジェクトを、その状態に関係なく読み取る対象にできます。このためには、「ページ 2.ユーザーの作成」を指定する再利用可能な条件を使用し、サブクラスに対して「読取り」権限マスクを作成します。「ページ 2」タブと、このタブの「ユーザーの作成」フィールドを表示状態にしてから、さらに次のことを行います。

- 「ページ 2.ユーザーの作成」属性を指定する再利用可能な条件（通常は「ページ 2.ユーザーの作成、等しい、\$USER」）を作成する。
- 作成した再利用可能な条件を指定する権限マスクを作成する。

たとえば、設計変更指示を作成するユーザーに対して、次のような新規権限マスクを作成します。

- **名前** - 設計変更指示の読取り
- **説明** - このユーザーが作成した設計変更指示の読取りのみ
- **権限** - 読取り
- 次の項目を指定する再利用可能な条件を選択または作成します。
 - **タイプ:** 設計変更（ECO）
 - **属性:** ページ 2.ユーザーの作成
 - **条件:** 等しい、\$USER

「製造元」と「製造元部品」の「製造元」タブで「ユーザーの作成」属性を表示することによって、これらのタブに「ユーザーの作成」属性を読み込むことができます。「ページ 2」タブと当該クラスの「ユーザーの作成」属性は必ず表示してください。

権限マスクの条件変数を使用する

再利用可能な条件を作成し、権限マスク条件として使用する際には、次の表に示す変数を使用できます。「条件の作成」ダイアログ・ボックスでは、いくつかの変数が「属性」リストに表示され、その他の変数は「値」フィールドに入力できます。Agile PLM変数の完全なリストについては、15ページの「[Agile PLM変数](#)」を参照してください。

変数	説明
\$CHECKOUTUSER	オブジェクトの添付ファイルをチェックアウトしたユーザー。
\$LATEST	オブジェクトの最新リビジョン。具体的には、リリース済アイテムの最新のリリース済リビジョンまたは未リリース・アイテムの最新の保留中リビジョン（保留中の変更を含む）。\$LATEST は、読取り権限または変更権限にのみ適用されます。

変数	説明
\$CREATEUSER	<p>オブジェクトを作成したユーザー。</p> <p>「ユーザーの作成」を属性（例: 「ユーザーの作成、等しい、\$USER」）として指定するには、再利用可能な条件を定義するときに「属性」フィールドで「ページ 2.ユーザーの作成」を選択します。248ページの「ユーザー作成条件を適用する」も参照してください。</p>
\$PARTNER	現在のサプライ・チェーン・パートナー会社。
\$CURRENTREV	リビジョン・リストから選択したオブジェクトの現在のリビジョン、または現在表示しているオブジェクトのリビジョン。

その他のユーザー設定

この章のトピック

- ユーザー・モニタ 251
- ユーザーを削除する/削除を取り消す 252

ユーザー・モニタ

「ユーザー・モニタ」ウィンドウには、Agile PLM システムに現在ログインしているユーザーが一覧表示されます。このウィンドウには、各ログイン・ユーザーについて、次の情報が表示されます。

テーブル列	説明
ユーザー名	ログイン・ユーザーの氏名。
ユーザーID	ユーザーのログイン・ユーザー名。
ホスト	ユーザーのホスト。
ログイン時間	ユーザーのログイン時刻。

「ユーザー・モニタ」ウィンドウを更新する

「ユーザー・モニタ」ウィンドウは動的ではありません。つまり、ウィンドウが表示された時点でのユーザー・セッション情報が表示されます。最新の情報を表示するには、「更新」をクリックして、ウィンドウに表示されている情報を更新します。

ユーザー・セッションを終了する

「ユーザー・モニタ」ウィンドウを使用して、ユーザー・セッションを終了できます。

Javaクライアントでユーザー・セッションを終了する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー・モニタ」をダブルクリックします。
2. セッションを終了するユーザーを1つ以上選択します。
3. 「セッションの終了」ボタンをクリックします。

ユーザー・セッションは、即座には終了しません。アクティブなユーザー・セッションを終了するには、最長で1分かかる場合があります。「セッションの終了」ボタンをクリックすると、ユーザーは作業を1分間続行できます。セッションが終了すると、ログイン・ウィンドウがユーザーのブラウザに表示されます。

ユーザーを削除する/削除を取り消す

他のオブジェクトに関連付けられているユーザーは、ハード削除またはソフト削除できません。新たに作成した関連付けられていないユーザーは、「ユーザー」ノードから削除できます。そのユーザー・オブジェクトは、「削除されたユーザー」ノードに表示されます。

この処理は元に戻すことができます。「削除されたユーザー」ノードで、削除したユーザーを選択して「削除取消」ボタンをクリックします。ユーザー・オブジェクトはユーザー・ノードに復元されますが、このユーザーを表示するにはユーザー・ノードを閉じてから再度開く必要があります。この操作は、更新ボタンでは実行できません。

誰かが会社を辞めた場合、Agile PLM をもう使用しない場合、またはユーザーによる Agile PLM システムへのログインを防止する必要がある場合は、「ステータス」プロパティを「停止」に設定してユーザー・オブジェクトを無効にします。ユーザーは「ユーザー」ノードに残り、名前は既存のワークフロー、エスカレーションなどに依然として表示されますが、そのユーザーは他のユーザーが選択できるアドレス帳には表示されません。このユーザーは、いつでもアクティブなステータスにリセットできます。

停止したユーザーは、「グローバル置換」を使用して、その名前が使用されているシステムのすべての場所で検索して置換できます（22ページの「[グローバル置換](#)」を参照してください）。

ユーザー・グループを削除する

不要なユーザー・グループがある場合は削除できます。ユーザーが割り当てられているユーザー・グループを削除する場合は、所属するユーザーを削除せずにそのユーザー・グループを削除できます。ユーザー・グループを削除すると、そのユーザー・グループへのユーザー割当ても同時に削除されます。

削除したユーザー・グループは、Agile PLM のアドレス帳からも削除されます。次のような場合で使用中のユーザー・グループは、削除できません。

- Agile PLM クライアントのルーティング可能なオブジェクトのサインオフ・リストに記載されている場合。
- ワークフローの「通知」プロパティ（「ワークフロー」ウィンドウ）に表示されている場合。
- ユーザー、ユーザー・グループ、またはパートナの指定されているエスカレーション担当者として使用されている場合。

注意 ユーザーをユーザー・グループから削除する場合は、「グローバル置換」ツールを使用して、システム内でそのユーザーが使用されている場所をすべて特定します（22ページの「[グローバル置換](#)」を参照してください）。

Javaクライアントでユーザー・グループを一時的に削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー・グループ」をダブルクリックします。「ユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. リストからユーザー・グループ名を選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックします。削除を確認するプロンプトが表示されます。
4. 「はい」をクリックします。そのユーザー・グループは「ユーザー・グループ」ウィンドウに表示されなくなります。

Webクライアントでユーザー・グループを一時的に削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー・グループ」の順にクリックします。「ユーザー・グループ」ページが表示されます。
2. リスト内のユーザー・グループ名をクリックします。そのユーザー・グループのページが表示されます。

3. 「アクション」メニューから「削除」を選択します。削除を確認するプロンプトが表示されます。
4. 「はい」をクリックします。そのユーザー・グループは「ユーザー・グループ」ページに表示されなくなります。

ユーザー・グループをハード削除する

削除したユーザー・グループは、「削除されたユーザー・グループ」ノードに移動します。アドレス帳には表示されませんが、データベースにはまだ存在しています。このグループは、「ソフト削除された」ユーザー・グループと呼ばれます。ユーザー・グループを永久的に削除するには、そのグループを「削除されたユーザー・グループ」ノードから削除します。このグループは、「ハード削除された」ユーザー・グループと呼ばれます。

注意 ハード削除されたユーザー・グループは、データベースから完全に消去されるため、元に戻したり、削除を取り消したりすることはできません。

Javaクライアントで削除されたユーザー・グループをハード削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「削除されたユーザー・グループ」をダブルクリックします。「削除されたユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. ハード削除するユーザー・グループを選択し、「削除」ボタンをクリックします。
そのユーザー・グループは「削除されたユーザー・グループ」ウィンドウに表示されなくなります。

Webクライアントで削除されたユーザー・グループをハード削除する手順は、次のとおりです。

1. クリックします。

ユーザー・グループの削除を取り消す

「削除されたユーザー・グループ」ノードには、Agile PLM システムから削除されたユーザー・グループが表示されます。削除されたユーザー・グループがルーティング可能なオブジェクトの承認者として割り当てられている可能性があるため、削除されたユーザー・グループの把握は有用です。製品の検証記録の履歴全体を維持できます。

ユーザー・グループの削除は取り消すことができます。削除を取り消したユーザー・グループは、アクティブな使用状態に戻り、再度アドレス帳に表示されます。

Javaクライアントでユーザー・グループの削除を取り消す手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「削除されたユーザー・グループ」をダブルクリックします。「削除されたユーザー・グループ」ウィンドウが表示されます。
2. クリックして、削除を取り消すユーザー・グループを選択します。
3. 「削除取消」ボタンをクリックします。
4. ユーザー・グループの名前が「ユーザー・グループ」ウィンドウに追加されます。ウィンドウに表示されたグループを確認するために、「更新」ボタンをクリックする必要がある場合があります。

Webクライアントでユーザー・グループの削除を取り消す手順は、次のとおりです。

1. クリックします。

スマートルール

この章のトピック

- スマートルールを設定を変更する..... 255
- スマートルールの定義 256

Agile PLM スマートルールについては、スマートルールに記載されています。

スマートルールの設定を変更する

スマートルールの設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「スマートルール」をダブルクリックします。「スマートルール」ウィンドウが表示されます。
2. 変更するルールをクリックして、ドロップダウン・リストから設定を選択します。可能な設定の一覧には、次の値が含まれます。
 - 可 - システムはプロセスの実行を許可します。
 - 不可 - システムはプロセスの実行を禁止します。
 - 警告 - システムはユーザーに対し、プロセスが実行されることを警告します。
 - 削除 - ルーティング可能なオブジェクトが最初に却下されたステータスに戻った場合に、「ワークフロー」タブのすべての承認または却下を削除します。
 - 保持 - ルーティング可能なオブジェクトが最初に却下されたステータスに戻った場合に、「ワークフロー」タブのすべての承認または却下を維持します。
 - 表示 - テーブルにオブジェクトを表示します。
 - 説明のみを付けて表示 - オブジェクトとそのサブクラスおよび詳細が表示されます。部品番号や他の値は表示されません。
 - 部品番号とリビジョンのみを付けて表示 - オブジェクトのサブクラス、部品番号、リビジョンが表示されます。説明や他の値は表示されません。
 - 表示しない - オブジェクトはテーブルに表示されません。警告は表示されません。
 - 警告を表示しない - オブジェクトはテーブルに表示されません。タブには、ユーザー権限が十分ではないため x 個のオブジェクトが表示されていないということが表示されます。
3. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。
4. 元の設定に戻す場合や最初からやり直す場合には、「閉じる」をクリックします。保存せずに閉じるかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。変更せずに閉じる場合は「はい」を、そうでない場合は「いいえ」をクリックします。

スマートルールの定義

添付ファイルの削除を許可

設定: はい、いいえ（デフォルト）

「はい」に設定すると、ビジネス・オブジェクト「添付ファイル」タブから添付ファイルを削除するときに、ファイル・フォルダが他のビジネス・オブジェクトで使用されていない場合（つまり、ビジネス・オブジェクトで参照されているファイル・フォルダのバージョンがない）、そのファイル・フォルダは自動的にソフト削除されます。

ユーザーは、適切な検索機能を使用してファイル・フォルダの削除済オブジェクト検索を実行し、ソフト削除されたファイル・フォルダをハード削除（または削除取消）できます。

PPMから自動インストール

設定: 可（デフォルト）、不可、警告

Microsoft Project（2002 および 2003）DLL のユーザー・システム・レジストリへの自動インストールを許可または却下します。これら DLL のインストールは、Microsoft Project で Agile メニューを使用したシームレスな公表を可能にします。会社でアプリケーションを自動的にインストールしない場合や、Agile-MS プロジェクトの接続をシステム全体で設定する場合は、この設定を「不可」にします。

見積履歴の自動公表

設定: 可（デフォルト）、不可、警告

RFQ または回答ライン・データが見積履歴サブクラスのオブジェクトに公表されることを許可または却下します。

BOM多段階重複

設定: 可（Oracle DB 以外のシステムおよびアップグレード・ユーザーの場合はデフォルト）、不可（Oracle DB システムの場合はデフォルト）

Oracle DB に基づいたシステムの場合は、このスマートルールによって、BOM 重複が発生しているかどうかを検証されます。つまり、あるサブアセンブリに、それ自体の BOM ツリー構造の上位レベルから、そのサブアセンブリの親アイテムのいずれかが含まれているかどうかを検証されます。（論理的に帰結する場合、重複した BOM 構造は無限に繰り返されることになります。）

この検証は、変更指示（ECO、SCO および MCO）が「リリース済」に進むとき、リリース検証が実行される時、または現行のステータスに「リリース検証を実行する」が必要となり（スマートルール設定は「不可」と想定）変更が進むことを試行したときに実行されます。

注意 Oracle DB 以外のシステムでは重複を許可しない（チェックしない）ため、このスマートルールは有効ではありません。つまり、これらのシステムで表示されるデフォルト設定は「可」です。

重要 PG&CおよびPCMソリューションでは、BOM重複がサポートされません。いずれかのソリューションを使用している企業では、このスマートルールを「不可」に設定してください。

承認者が却下した変更のステータスを変更する

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

ルーティング可能なオブジェクトの次のステータスへの移動を許可するか、またはユーザーに承認者が変更を却下したことを警告するかどうかを決定します。この設定は、すべての「レビュー」または「リリース済」ステータス・タイプに影響を与えます。

ルーティング可能なオブジェクトがスマートルールを満たさない場合に次のステータスに移行するかどうかを決定できるようにする場合は、「不可」に設定します。オーバーライド権限があるユーザーは、ワークフローのルーティング可能なオブジェクトを昇格できます。このプロパティに関する注意については、「オーバーライド」を参照してください。

注意 ユーザーが却下した後に、ルーティング可能なオブジェクトがワークフロー中で自動昇格しないようにするには、このスマートルールを「不可」に設定してください。「警告」に設定すると、場合によっては、ルーティング可能なオブジェクトが意図に反して自動昇格することがあります。

回答のない変更のステータスを変更する

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

承認者が承認も却下もしていない場合に、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに移行するかどうかを決定します。この設定は、すべての「レビュー」または「リリース済」ステータス・タイプに影響を与え、次のレベルに手動で移動された変更のみに適用されます。自動昇格では、各承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下することが必要です。

オブザーバが却下した変更のステータスを変更する

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

ルーティング可能なオブジェクトの次のステータスへの移動を許可するか、またはユーザーにオブザーバがこれを却下したことを警告するかどうかを決定します。この設定は、すべての「レビュー」または「リリース済」ステータスタイプに影響を与えます。

ルーティング可能なオブジェクトがスマートルールを満たさない場合に次のステータスに移行するかどうかを決定できるようにする場合は、「不可」に設定します。オーバー・ライド権限があるユーザーは、ルーティング可能なオブジェクトを昇格できます。221ページの「[オーバーライド](#)」に記載されているこのプロパティに関する注意を参照してください。

拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン

設定: 可、不可 (デフォルト)、警告

チェックインされた添付ファイルに、チェックアウトされたファイルとは異なる拡張子のファイルを設定できるかどうかを決定します。

注意 アイテムの添付ファイルが「最新-x」で、添付ファイル・フォルダのファイル拡張子を変更されたためにアイテムのチェックアウトされたファイルと異なる場合、このルールは上書きされます。

ファイルをリビジョンにコピーする

設定: コピー、警告付きでコピー、不可、参照（デフォルト）、警告付きで参照

ファイルを新しいリビジョンに自動的にコピーするかどうかを管理します。システムでは、添付ファイルが追加されたときではなく、保留中の変更が作成されたときにのみ、このスマートルールをチェックします。次の設定があります。

コピー - アイテムの新しい保留中リビジョンの場合は、新規ファイル・フォルダが作成され、添付ファイルの新しいコピーが作成されて新規ファイル・フォルダに保存されます。

参照 - 既存のファイル・フォルダが使用され、アイテムの新しい保留中リビジョンの「添付ファイル」タブにこのファイル・フォルダに対する新規参照が作成されます。

不可 - 新しいアイテムの保留中リビジョンは、添付ファイルなしで作成されます。

警告付きでコピー - 「コピー」設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。

アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ・ボックスが表示されます。

アイテムを追加して添付ファイルをコピーする場合は、「追加」チェック・ボックスと「添付ファイル」チェック・ボックスの両方を選択します。

アイテムを追加して添付ファイルをコピーしない場合は、「追加」チェック・ボックスのみを選択します。

警告付きで参照 - 「参照」設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。

アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ・ボックスが表示されます。

アイテムを追加して既存の添付ファイルを参照する場合は、「追加」チェック・ボックスと「添付ファイル」チェック・ボックスの両方を選択します。

アイテムを追加して添付ファイルをコピーしない場合は、「追加」チェック・ボックスのみを選択します。

注意 このルールを「不可」に設定した場合、オブジェクトが変更に関連付けられた後に初版リビジョンに追加されたファイル（リリース済リビジョン A）は、後続のリビジョンにコピーされません。また、新しい変更が作成されても、初版リビジョンに追加されたすべてのファイルは、新規作成されたリビジョンに追加されません。

降格時に承認者を削除する

設定: 保持（デフォルト）、削除

ルーティング可能なオブジェクトが拒否され、前のステータスに戻された場合（つまり降格された場合）に、アドホック（デフォルトではありません）承認者とオブザーバがリストから削除されるかどうかを定義します。この設定は、すべてのワークフローにおけるすべての「レビュー」と「リリース済」ステータス・タイプに影響を与えます。

保持: ワークフローが前のステータス（「保留中」を含む）に戻された場合、アドホック承認者は保持され、再度ワークフローに進んだ場合に変更を見ることができます。

削除: ワークフローが前のステータス（「保留中」を含む）に戻された場合は、アドホック承認者が削除され、そのアドホック承認者を作成者または変更分析者が再度追加しないかぎり、変更を見ることができません。

降格時にサインオフから削除する

設定: 保持（デフォルト）、削除

すでに記録された承認/却下が拒否または前のステータスに戻された場合（つまり降格された場合）、その内容をルーティング可能なオブジェクトの「ワークフロー」タブから削除されるかどうかを定義します。この設定は、すべてのワークフローにおけるすべての「レビュー」と「リリース済」ステータス・タイプに影響を与えます。

保持: ワークフローが前の状態に戻された場合（「保留中」を含む）、すでに記録済のサインオフは保持されます。

削除: ワークフローが前のステータス（「保留中」を含む）に戻された場合、サインオフは削除されます。変更がワークフローに進んだ場合、承認者は再度サインオフする必要があります。

詳細タイム・シート入力

設定: 不可（デフォルト）、可

Product Portfolio Management の「タイム・シート」タブの表示を制御します。

不可: 「タイム・シート」タブおよび関連するすべてのアクションを使用できません。

可: ユーザーの「私の割当て」タブの横に、タスクまたはアクティビティに対する実際の時間を入力するための「タイム・シート」タブが表示されます。「タイム・シート」が有効な場合、「チーム」タブの「実際の時間」にはデータを入力できません。

オブジェクト・テーブルのディスカバリ

設定: 警告（デフォルト）、表示しない

ユーザーにオブジェクトに対するディスカバリ権限がない場合に、「変更履歴」、「使用箇所」、「対象アイテム」、「製造元」、「BOM」、「保留中の変更」の各テーブルに関するオブジェクトの情報の表示を制限します。可能な設定は「警告」（デフォルト）、「表示しない」です。

「データベース」ノードの「ディスカバリ権限」プロパティが無効な場合は、スマートルールも無効です。

注意 この設定が変更された場合、ユーザーは Agile Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。

結果テーブルのディスカバリ

設定: 警告（デフォルト）、表示しない

ユーザーにテーブル内のオブジェクトに対するディスカバリ権限がない場合に、結果テーブルに関する情報の表示を制限します。

「データベース」ノードの「ディスカバリ権限」プロパティが無効な場合は、スマートルールも無効です。

注意 この設定が変更された場合、ユーザーは Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。

BOMテーブルの表示

設定: 警告付きで表示しない（デフォルト）、表示、説明のみを付けて表示、部品番号とリビジョンのみを付けて表示、表示しない

ユーザーにアイテムに対するディスカバリ権限がない場合に、BOM テーブルのアイテムに関する情報の表示を制限します。

注意 この設定が変更された場合、ユーザーは Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。

構造テーブルの表示

設定: 表示（デフォルト）、表示しない

設計クラスのオブジェクトによって作成されたモデル構造の表示を制御します。

見出し番号の重複

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

BOM にアイテムを追加する際の重複した見出し番号の使用を管理します。

このスマートルールは、同じ見出し番号を BOM のグローバルな部分と同じように、BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示するように拡張されています。同じ見出し番号を BOM の拠点別の部分に使用できるかどうか指示します。

例: 「見出し番号の重複」スマートルールが「不可」に設定されている場合:

見出し番号 1 がグローバル BOM の部品 234 に使用されている場合、その見出し番号 1 は、Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。

見出し番号 1 が Milpitas BOM の部品 234 にも使用されている場合、その見出し番号 1 は、Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。

同じ見出し番号は、「見出し番号の重複」スマートルールの設定にかかわらず、BOM の拠点別の部分では複数使用できます。

例: BOM のシンガポール・セクションの部品 123 に見出し番号 1 を使用し、BOM の Milpitas セクションの部品 234 にも見出し番号 1 を使用できます。「見出し番号の重複」スマートルールの設定は、この動作に影響を与えません。

「見出し番号の重複」スマートルールが「可」に設定されている場合は、BOM の拠点セクションにかかわらず、同じ見出し番号を他のアイテムに使用できます。

参照指示の重複

設定: 可、不可、警告

BOM における重複した参照指示の使用を管理します。このスマートルールは、参照指示を BOM のグローバルな部分と同じように、BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示するように拡張されています。同じ参照指示を BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかも指示します。

例: 「参照指示の重複」スマートルールが「不可」に設定されている場合:

参照指示 1 がグローバル BOM の部品 234 に使用されている場合は、その参照指示 1 を Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。

参照指示 1 が Milpitas BOM の部品 234 にも使用されている場合は、その参照指示 1 を Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。

同じ参照指示は、「参照指示の重複」スマートルールの設定にかかわらず、BOM の拠点別の部分では複数使用できます。

例: BOM のシンガポール・セクションの部品 123 に参照指示 1 を使用し、BOM の Milpitas セクションの部品 234 にも参照指示 1 を使用できます。「参照指示の重複」スマートルールの設定は、この動作に影響を与えません。

「参照指示の重複」スマートルールが「可」に設定されている場合は、BOM の拠点セクションにかかわらず、同じ参照指示を他のアイテムに使用できます。

有効日の順序

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

新規リビジョンを、複数の古いリビジョンの日付より前の有効日でリリースできるかどうかを管理します。このスマートルールは、「対象アイテム」テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。

有効期間の間隔

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

対象アイテム中の既存の部品の破棄日とそれに代わる部品の有効日の間隔を管理します。このスマートルールは、「対象アイテム」テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。

有効期間の重複

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

対象アイテム中の既存の部品の有効日とそれに代わる部品の破棄日の重複を管理します。このスマートルールは、「対象アイテム」テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。

完了したアクティビティに対するアクティビティとゲートの追加を有効化

設定: 可、不可 (デフォルト)

PPM アクティビティまたはゲートから完了した (リリース済) アクティビティに新規データを追加する機能を管理します。

削除、アーカイブ、および委任に関するコメントを有効にする

設定: 不可 (デフォルト)、可

Product Portfolio Management での削除、アーカイブまたは委譲アクションの実行時にコメントを記録できるかどうかを制御します。

部品分類と部品ファミリを同一にする

設定: はい (デフォルト)、いいえ

このルールは、PCM と PG&C ソリューションの両方を保有しているユーザーにのみ適用されます。そうでない場合は、このルールは無視してください。

このルールは、従来の部品ファミリ・オブジェクト (PG&C ソリューション) と新しい部品分類オブジェクト (PCM ソリューション) を、両方のソリューションが共有する部品分類オブジェクトとして処理するかどうかを管理します。デフォルトは「はい」です。

部品ファミリと部品分類を別々に処理する場合は、このルールを「いいえ」に設定します。ただし、このルールを有効にするには、部品分類クラスを設定する必要があります。詳細は、「部品グループ:部品ファミリを設定する」を参照してください。

アイテムを先にリリース

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

アイテムの BOM に未リリース・アイテムが含まれている場合に、そのアイテムをリリースできるかどうかを管理します。このスマートルールは、複数の拠点に関係があります。「親」アイテムがリリースされた場合、このルールは拠点の関連付けに対する BOM コンポーネントを確認し、BOM コンポーネントがその特定の拠点に対してもリリースされたかどうかを確認します。

PSRに対する多数のアイテム

設定: 可、不可 (デフォルト)、警告

PSR (問題レポートまたは不具合レポート) とアイテム (部品またはドキュメント・オブジェクト) との関連付けを許可または制限します。

PSRに対する多数のQCR

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

PSR（問題レポートまたは不具合レポート）と QCR（是正・予防措置または検証）との関連付けを許可または制限します。

製造元部品に複数アイテム

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

1 つの製造元部品に複数の親アイテムを設定できるかどうかを管理します。

「不可」または「警告」（デフォルト）に設定すると、変更指示のワークフローがリリース検証を実行したときにアイテムがチェックされます。この機能は拡張されています。詳細は、「リリースの検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証」を参照してください。

材料価格計算フィールドの負の値

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

「材料価格計算」属性への「負の値」の入力を制御します。

材料価格フィールドの負の値

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

「材料価格」フィールドへの「負の値」の入力を制御します。

その他価格フィールドの負の値

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

「その他費用」フィールドへの「負の値」の入力を制御します。

提案されたプログラムに関してリソース・プール所有者に通知

設定: 可（デフォルト）、不可

リソース・プール所有者への「提案済」ステータスのプログラムに関する通知の送信を制御します。

価格ライン有効期間の重複

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

価格オブジェクトと PCO に関する価格ラインの有効期間の重複を制御します。

アイテムと関連PSRを含むPSR

設定: 可、不可（デフォルト）、警告

PSR を対象アイテムと関連 PSR の両方に関連付けることができるか（可）、または対象アイテムか関連 PSR のどちらかとのみ関連付けることができるか（不可）を管理します。

注意 「対象アイテム」タブのアイテムと「関連 PSR」タブのアイテムの間にはビジネス・ロジックはありません（つまり、「関連 PSR」に表示されたアイテムは、親 PSR の「対象アイテム」にコピーされません）。

PSR と QCR の間にはビジネス・ロジックがあります。このため、PSR が QCR に関連付けられている場合、PSR の「対象アイテム」タブとその「関連 PSR」タブの両方からのアイテムは、自動的に QCR の「対象アイテム」タブに作成されます。

レッドライン属性

設定: 可、不可（デフォルト）

Web クライアントでの変更指示と製造元依頼に対するレッドライン・タイトル・ブロックのタブの表示を制御します。

変更指示の製造元をレッドラインする

設定: 可（デフォルト）、不可

ユーザーが ECO から「製造元」タブをレッドラインできるかどうかを管理します。設定が「不可」の場合は、「製造元のレッドライン」テーブルのすべてのボタンが無効になります。可能な設定は「可」（デフォルト）または「不可」です。

未解決アイテムとともにQCRをリリースする

設定: 表示しない（デフォルト）、警告

「対象アイテム」タブのすべてのアイテムが「変更」と関連付けられていない場合でも、QCR を手動でリリースできるかどうか、または自動昇格を使用するかどうかを制御します。

「表示しない」に設定した場合、スマートルールでは、関連する「変更」がすべての対象アイテムにない場合でも、QCR のリリースを許可します。このような QCR は、警告なしでもリリース検証を実行します。

「警告」に設定した場合、スマートルールでは、関連する「変更」がすべての対象アイテムにない場合でも、QCR がリリースされたことをユーザーに警告します。

リリース済リビジョンが必要

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

リリース済アセンブリの BOM 上の対象アイテムがルーティング可能なオブジェクトにある場合に、そのオブジェクトを未リリースにできるかどうかを管理します。

ECOを未リリースにする

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

変更指示を未リリースにできるかどうかを管理します。

ECRを未リリースにする

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

変更要求を未リリースにできるかどうかを管理します。

期限付き変更指示を未リリースにする

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

期限付き変更指示を未リリースにできるかどうかを管理します。

製造元変更を未リリースにする

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

製造元依頼を未リリースにできるかどうかを管理します。

出荷停止を未リリースにする

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

出荷停止を未リリースにできるかどうかを管理します。

ワークフロー照合基準属性の変更

設定: 可、不可 (デフォルト)、警告

注意 いずれを選択した場合も、ワークフローは変更されません。

ユーザーは、属性の値をワークフローの照合基準と一致しない値に変更する場合があります。このスマートルールは、システムが属性の変更を受け入れるかどうかを決定します。

注意 このスマートルールが「警告」または「不可」に設定されている場合は、ワークフローの照合基準に指定されているルーティング可能なオブジェクトの属性を変更しようとするたびに、警告メッセージが表示されるか、変更ができなくなります。ただし、ワークフローの照合基準にアイテムの属性を指定する再利用可能な条件が含まれている場合、ユーザーはそのアイテムの属性の値を再利用可能な条件と一致しない値に変更できます。この場合、警告は表示されません。アイテムの属性が変更された後に、ユーザーがルーティング可能なオブジェクトを変更した場合は、ルーティング可能なオブジェクトがワークフローの照合基準に一致しないという警告メッセージが表示されます。

材料価格フィールドのゼロの値

設定: 可、不可、警告 (デフォルト)

「材料価格」フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。

材料価格計算フィールドのゼロの値

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

「材料価格計算」フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。

その他価格フィールドのゼロの値

設定: 可、不可、警告（デフォルト）

「その他費用」フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。

Viewer とファイル

この章のトピック

■ 概要.....	267
■ Viewerとファイルのプロパティ.....	267
■ ファイルのページと保持のオプション.....	268
■ 「ファイル関連付け」タブ.....	271
■ バナーとウォーターマークを印刷する.....	273

概要

「Viewer とファイル」ウィンドウは、「システム設定」の「Viewer とファイル」をダブルクリックして開くことができます。Agile PLM オブジェクトに添付されているファイルに表示プリファレンスを設定できます。

Viewerとファイルのプロパティ

次の表は、「Viewer とファイル」ウィンドウの「一般情報」タブのプロパティを示しています。いくつかのプロパティについて詳細を説明しています。

プロパティ	説明	デフォルト
自動ページ有効	添付ファイルの古いバージョンを Agile ファイル・マネージャから削除するかどうかを決定します。	いいえ
ファイル・バージョンの保持	このプロパティでは、記録する目的で保持するバージョンの数を指定します。このプロパティを使用するには、「自動ページ有効」プロパティを「はい」に設定します。これらのバージョンにレッドライン付きのバージョンを含めるかどうかは「自動ページ有効」と「レッドライン・ファイルのページ」の設定によって異なります。次の説明を参照してください。	3
レッドライン・ファイルのページ	「自動ページ有効」プロパティの設定に応じて、レッドライン付きのファイルを削除するかどうかを指定します。これは「ファイル・バージョンの保持」プリファレンスより優先されます。	いいえ
アクセスされていない履歴レポートをページする（日数）	自動ページされる前に、履歴レポートに対するアクセスがなかった日数を示します。	30
これらのサムネイル画像タイプを直接使用	この設定では、サムネイルに直接変換されるファイル・タイプのリスト（拡張子名で示されるリスト）が提供されます。	bmp、gif、jfif、jpe、jpeg、jpg および png これらは、デフォルトのイメージ・タイプで、ユーザーはこ

プロパティ	説明	デフォルト
		れらを削除すること、これらに他のタイプを追加することもできません。
CAD リビジョン BOM 属性	管理者はこのフィールドを使用して、ドキュメント・クラス のテキスト・フィールドを有効にできます。これによって、リビジョン文字（A、Bなど）をCADモデリングBOM（構造化BOM）に割り当てることができます。このフィールドの設定プロセスについては、270ページの「 構造化ファイル・タイプとCADリビジョンBOM属性 」を参照してください。	—
アップロード・ファイル・サイズ制限	Java クライアント、Web クライアント、Portal クライアント、および SDK に対するアップロード・ファイルの最大サイズ（MB）を定義します。 デフォルト値の0（ゼロ）は「制限なし」を示します。サイズ制限は、負の整数以外の整数を MB 単位で設定します。ファイルのサイズが大きすぎる場合、Java クライアントおよび Web クライアントではエラー・メッセージが表示されます。 正常にアップロードされたファイル（失敗する前のファイル）はアップロードされたままですが、他のファイル（失敗した後のファイル）はアップロードされません。	0（ゼロ）（ファイル・サイズに制限がありません）

ファイルのページと保持のオプション

次の設定によって、Agile PLM システムおよびユーザーのローカル・コンピュータにおいて、ファイルがページまたは保持される状況が決まります。ページと保持は、チェックアウトとチェックインのルーチンにおいてのみ実行されます。

自動ページ有効

添付ファイルの古いバージョンは、新しいバージョンがチェックインされたときにAgileファイル・マネージャから自動的に削除されます。これはチェックアウトまたはチェックインのルーチン後に行われます。「**自動ページ有効**」が「はい」に設定されている場合、古いバージョンは削除されます。保持するファイルのバージョン数を指定するには、「**ファイル・バージョンの保持**」フィールドを使用します。後述の269ページの「[ファイル・バージョンの保持](#)」、および269ページの「[レッドライン・ファイルのページ](#)」を参照してください。

「**自動ページ有効**」が「いいえ」に設定されている場合、添付ファイルの古いバージョンはAgile PLM システムに保持されます。

注意 自動ページを取り消す操作はありません。自動ページはアーカイブ機能ではありません。

自動ページを有効または無効にする手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「**Viewer とファイル**」をダブルクリックします。「Viewer とファイル」ウィンドウが表示されます。
2. 「**自動ページ有効**」ドロップダウン・リストから「いいえ」（無効）または「はい」（有効）を選択します。
3. 入力完了したら、「**保存**」をクリックします。

ファイル・バージョンの保持

保持するファイルの古いバージョンの数を指定するには、このプロパティを使用します。たとえば、値を「3」に設定すると、ファイルの最も新しいバージョンが3つアーカイブされます。（最新バージョンも保持されます）。このプロパティは「自動ページ有効」を「はい」に設定して使用します。「自動ページ有効」が「いいえ」に設定されている場合は、すべてのバージョンが保持されます。268ページの「[自動ページ有効](#)」、および269ページの「[レッドライン・ファイルのページ](#)」を参照してください。

保持する添付ファイルのバージョン数を指定する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「Viewer とファイル」をダブルクリックします。「Viewer とファイル」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル・バージョンの保持」フィールドに数字を入力します。数字は、現在のバージョンに加え、いくつの添付ファイル・バージョンを保持するかを示します。
3. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

レッドライン・ファイルのページ

「レッドライン・ファイルのページ」フィールドは、「自動ページ有効」の設定に従って、レッドライン・ファイルをレッドラインのないファイルとともに自動的に削除するかどうかを指定します。

「自動ページ有効」が「はい」に、「レッドライン・ファイルのページ」が「はい」に設定されていると、「ファイル・バージョンの保持」に指定された値分のバージョン数が保持されます。それ以前のレッドライン・ファイルはすべてページされます。「自動ページ有効」が「はい」に、「レッドライン・ファイルのページ」が「はい」に設定されていると、「ファイル・バージョンの保持」に指定された値分のバージョン数（レッドラインされたものと、そうでないもの）が保持されます。それ以前のレッドライン・ファイルもすべて保持されます。

前述の268ページの「[自動ページ有効](#)」、および269ページの「[レッドライン・ファイルのページ](#)」を参照してください。

「レッドライン・ファイルのページ」プロパティを設定する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「Viewer とファイル」をダブルクリックします。「Viewer とファイル」ウィンドウが表示されます。
2. 「レッドライン・ファイルのページ」ドロップダウン・リストから「いいえ」（無効）または「はい」（有効）を選択します。
3. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

これらのサムネイル画像タイプを直接使用

この設定では、Web クライアントのサムネイルに直接変換されるファイル・タイプのリスト（拡張子名で示されるリスト）が提供されます。View サーバーの使用は不要です。これは、変換がブラウザによって直接実行され、ファイルの添付直後に実行されるためです。この設定は、サムネイルに使用するイメージ・ファイルを手動で指定する置換機能で利用できるファイル・タイプのリストでもあります。管理者は、サポートされているイメージ・ファイル・タイプをこのリストに追加できます。ラインごとに1つのファイル・タイプ（拡張名で入力）が指定されていることを確認してください。

このフィールドに含まれているデフォルトのリストのファイル・タイプは、次のとおりです。

bmp

gif
jif
jpe
jpeg
jpg
png

サムネイルの詳細は、『Agile PLMスタート・ガイド』の356ページの「[ファイル・マネージャを設定する](#)」および375ページの「[定義されているプリファレンス](#)」を参照してください。

重要 サムネイル・イメージが表示されるのは、Webクライアントのみです。

サムネイル生成オプション

「これらのサムネイル画像タイプを直接使用」にリストされているファイル・タイプがブラウザに正常にレンダリングされるためには、そのファイル・タイプが「ファイル関連付け」タブの「サムネイルの自動生成」列でもチェックインされている必要があります。「これらのサムネイル画像タイプを直接使用」にリストされていないファイル・タイプが、「サムネイルの自動生成」列でのみチェックインされ、ブラウザに正常にレンダリングされる可能性はありますが、View サーバーを使用するため時間を要します。

注意 これらのイメージを正常にレンダリングするには、設定を変更した後にファイル・サーバーを再起動する必要があります。

詳細は、「[Agile Viewer の「サポートされるファイル・タイプ」を指定する](#)」を参照してください。

CAD リビジョン BOM 属性

この値は、「保存」リビジョンを保持するために Agile の EC CAD コネクタの一部として設定される属性を識別します。

「CAD リビジョン BOM 属性」を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「Viewer とファイル」をダブルクリックします。
2. 「CAD リビジョン BOM 属性」ドロップダウン・リストから、CAD リビジョンを保持するために EC インストールの一部としてすでに設定した BOM 属性を選択します。「OK」をクリックし、次に、「保存」をクリックします。

Agile EC CAD コネクタを使用していない場合でも、「CAD リビジョン BOM 属性」を使用して Viewer の固定の BOM 解決を指定する場合は、「CAD リビジョン」に対して指定した BOM 属性内のオブジェクトごとに「リビジョン」フィールドの現在の値を手動で保存する必要があります。

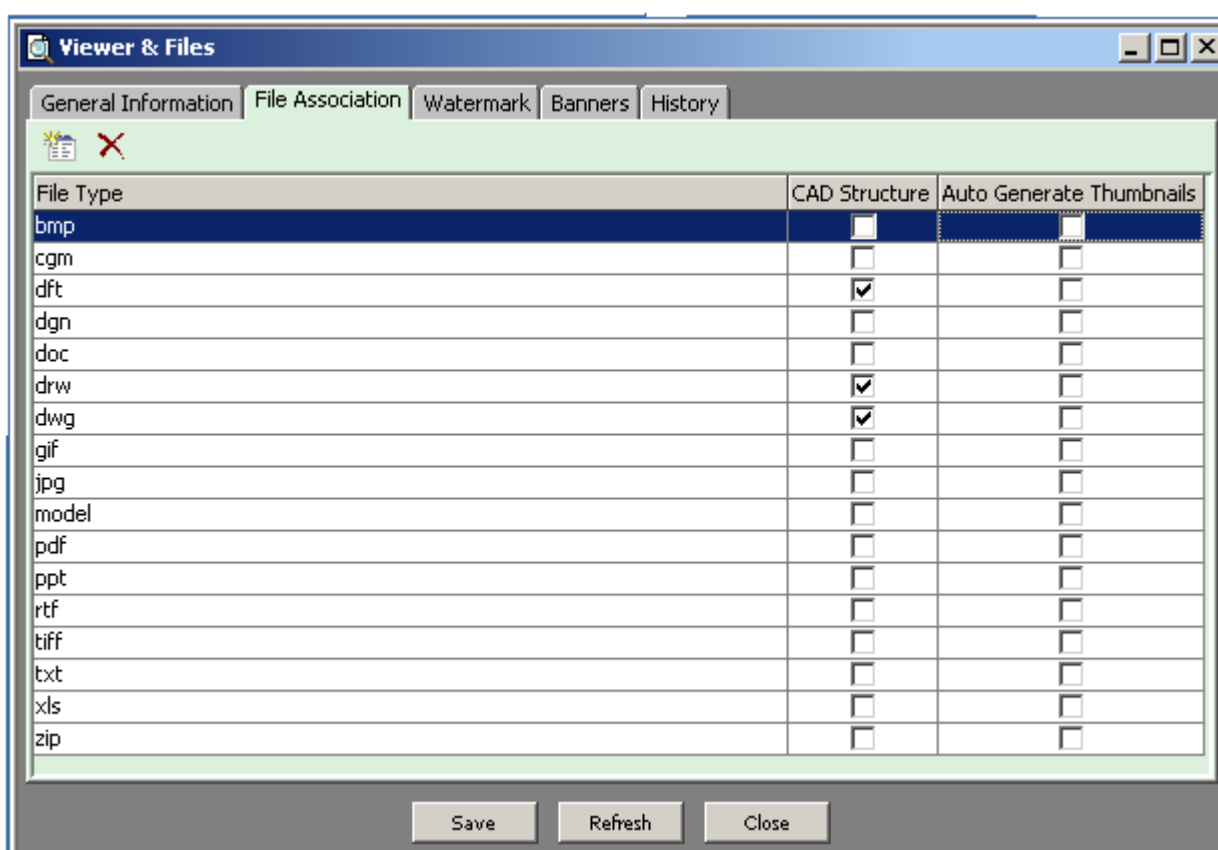
注意 「CAD リビジョン BOM 属性」フィールドを空白のままにすると、標準の Agile BOM 解決が使用され、構造内を移動してファイルを検索する方法が決定します。標準の解決は「浮動」とみなされ、親オブジェクトがリリースされた後でも、子オブジェクトのリビジョンをさらに作成できます。

「ファイル関連付け」タブ

AutoVue for Agileの「サポートされるファイル・タイプ」を指定する

管理者は、「ファイル関連付け」タブの「ファイル・タイプ」リストで、ユーザーが AutoVue for Agile で表示できるファイルのタイプを選択できます。CAD 構造サポートを選択すると、特定のファイル・タイプによって Viewer ではその構造がレンダリングされます。サムネイルの自動生成を選択すると、特定のファイル・タイプによって Viewer では Agile のサムネイル・イメージがレンダリングされます。

注意 添付ファイルを表示するユーザーには、ファイル表示権限が割り当てられている必要があります。



注意 デフォルトでは、すべての「サムネイルの自動生成」チェック・ボックスが選択されていません。

サムネイルの詳細は、『Agile PLMスタート・ガイド』の 356 ページの「[ファイル・マネージャを設定する](#)」、269 ページの「[これらのサムネイル画像タイプを直接使用](#)」および 375 ページの「[定義済プリファレンス](#)」を参照してください。

次の表の「2D」ファイル形式は、管理者の「ファイル・タイプ」リストに自動的に表示されます。現在ご使用のお客様には、アップグレード後に追加のファイル・タイプが表示されます。

ファイル拡張子	ファイル・タイプ
BMP	Microsoft ビットマップ
CAL	CALS Group IV
CGM	コンピュータ・グラフィックス・メタファイル
DGN	Intergraph
DOC	Microsoft Word
DWG	AutoCAD Drawing File v 14, 2000
DXF	AutoCAD Drawing Exchange Format
GIF	Graphic Interchange Format
GP4	2D で表示可能な中立形式
JPG、JPEG	Joint Photographic Experts Group
PCX	Microsoft Paintbrush
PDF	Adobe Portable Document Format
PLT	HPGL & HPGL 2
PPT	Microsoft PowerPoint
PS	Adobe Postscript
SLDDRW	SolidWorks 2D
TIF、TIFF	Tagged Image File Format
TXT	テキスト
XLS	Microsoft Excel
ZIP	Zip

AutoVue for Agileは、OracleのAutoVueビジュアル化ツールとAgile PLMの統合です。AutoVueがサポートするファイル形式の最新リストは、<http://www.oracle.com/technology/documentation/autovue.html>を参照してください。

ファイル・タイプは拡張子別に記載されています。デフォルトでは、「表示」ボタンが有効ですが、ユーザーがサポートされていないファイル拡張子を持つ添付ファイルを選択すると、エラーが表示されます。

注意 中国語、ヘブライ語、スウェーデン語のオペレーティング・システム上で動作するAgile PLMの管理者は、すべてのファイル・タイプ拡張子を「サポートされるファイル・タイプ」プロパティから削除することをお勧めします。これは、これらのオペレーティング・システムではAutoVue for Agileがサポートされないためです。英語以外のオペレーティング・システムでAgile PLMを使用する場合の詳細は、AgileサポートWebサイトを参照してください。

「サポートされるファイル・タイプ」リストにファイルを追加または削除する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」>「Viewer とファイル」>「ファイル関連付け」タブの順に進みます。
2. 「ファイル・タイプ」リストからファイル・タイプを削除するには、ラインを選択し、「削除」をクリックします。
3. 「ファイル・タイプ」リストにファイル・タイプを追加するには、「新規」ボタンをクリックし、新しいラインに名前を入力します。また、[Ctrl]+[C]と[Ctrl]+[V]を使用して、他のファイル・タイプ・フィールド、または別のアプリケーションから、リストをコピーして貼り付けることもできます。
4. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

バナーとウォーターマークを印刷する

「Viewer とファイル」ウィンドウには、「ウォーターマーク」タブと「バナー」タブが含まれています。これらのタブの設定によって、Agile PLM ビジネス・オブジェクトに添付されているファイルのプリントアウトに、バナーとウォーターマーク、およびその内容を表示するかどうかを決定します。バナーとウォーターマークは、AutoVue for Agile を使用して印刷したファイルに表示されます。

印刷に何も表示しない唯一の方法は、「バナー」と「バナーテキスト」の組合せ（および「属性ウォーターマーク・テキスト」/「属性ウォーターマーク・テキスト」）を両方とも空白にすることです。該当するテキスト・フィールドのテキストを削除します。たとえば、「左上バナー」を空白にした場合、不要な「印刷者」が表示されます。これは、「左上バナー・テキスト」から削除されなかったためです。

次の表に、ウォーターマークのプロパティを示します。これらのプロパティは「ウォーターマーク」タブで設定できます。

プロパティ	説明	デフォルトのテキストまたは設定
属性ウォーターマーク	属性ウォーターマーク・テキストの後ろに、この属性の値がテキストとしてウォーターマークに表示されます。	[ドロップ・ダウン・リストから選択します。この値は、\$ATTRIBUTENAME: となります。]
属性ウォーターマーク・テキスト	このプロパティのテキストは、属性ウォーターマークの値のテキストの前に表示されます。	[なし。適切であれば、コロンも含めてテキストを入力します。]
バック・リビジョン・ウォーターマーク・テキスト	アイテム・オブジェクトが最新リビジョンでない場合に表示されるウォーターマーク・テキストです。このプロパティは、部品とドキュメントのバナーとウォーターマークの属性でのみ使用できます。	バック・リビジョン
名前	選択できる Agile PLM ビジネス・クラスをすべて表示します。	[各ビジネス・クラスについて 1 つ]
保留中のリビジョンのウォーターマーク・テキスト	アイテム・オブジェクトが保留中のリビジョンの場合に表示されるウォーターマーク・テキストです。このプロパティは、部品とドキュメントのバナーとウォーターマークの属性でのみ使用できます。	保留中のリビジョン
ウォーターマーク印刷	ウォーターマークの印刷をオン（「はい」）またはオフ（「いいえ」）にします。	いいえ

次の表に、バナープロパティを示します。これらのプロパティは「バナー」タブで設定できます。

プロパティ	説明	デフォルトのテキストまたは設定
名前	選択できる Agile PLM ビジネス・クラスをすべて表示します。	[各ビジネス・クラスについて 1 つ]
左下バナー	プリントアウトの下部、左側、左下バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	[オブジェクト番号]
左下バナーテキスト	左下バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	\$ATTRIBUTENAME:
下部中央バナー	プリントアウトの下部、中央、下部中央バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	アイテム: 最新のリリース済リビジョンのリビジョン[文字] 他のクラスについては空白
下部中央バナーテキスト	下部中央バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	アイテム: 「リビジョン」 他のクラスについては空白
右下バナー	プリントアウトの下部、右側、右下バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	[ワークフロー・クラスの状態、ワークフローでないクラスのライフサイクル・フェーズ]
右下バナーテキスト	右下バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「ステータス:」 [または] 「ライフサイクル・フェーズ:」
左上バナー	プリントアウトの上部、左側、左上バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	[印刷ユーザー]
左上バナーテキスト	左上バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「印刷者:」
上部中央バナー	プリントアウトの上部、中央、上部中央バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	—
上部中央バナーテキスト	上部中央バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	—
右上バナー	プリントアウトの上部、右側、右上バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	[印刷日]
右上バナーテキスト	右上バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「印刷時間:」

ウォーターマークとバナーの設定については、次の点に注意してください。

- 「ウォーターマーク印刷」以外のすべてのプロパティは、独自のテキストで入力できます。
- すべての添付ファイルについて、バナーまたはウォーターマークのプロパティに使用できる設定は 1 つのみです。
- 複数のバナーは作成できません。
- 変数「\$ATTRIBUTENAME:」「属性ウォーターマーク」プロパティまたは「バナー」プロパティで選択した属性の名前を挿入します。
- 「バナーテキスト」プロパティと「属性ウォーターマーク・テキスト」プロパティの中では、変数「\$ATTRIBUTENAME:」の後ろではなく前に独自のテキストを入力できます。

バナーとウォーターマークのプロパティ

印刷するバナーやウォーターマークに表示するテキストを指定する値を設定する場合は、変数と属性（Agile PLM クライアントで表示されるフィールド）のドロップダウン・リストから選択します。次の表では、選択肢を示して説明します。

プロパティのドロップ ダウン・リストの変数	デフォルトの印刷値と制限
有効日 - 破棄日	[有効日]から[破棄日]まで有効。 アイテムにのみ使用できます。「有効日」と「破棄日」は、アイテムの特定 リビジョンを作成した変更の「対象アイテム」タブから導出されます。
ページ番号	ページ[ページ番号] 画像の特定の範囲を印刷する場合は、その範囲も指定します。
ページ番号とページ数	ページ[ページ番号]/[合計ページ数] 画像の特定の範囲を印刷する場合は、その範囲も指定します。
印刷日	[印刷日]
印刷ユーザー	[ユーザー]
最新のリリース済 リビジョン	[最新のリリース済リビジョンのリビジョン文字] アイテムにのみ使用できます。
ウォーターマーク・ テキスト	「ウォーターマーク属性」プロパティ（有効/無効にかかわらず）で指定し た値です。 バナーの変数としてのみ使用できます。
属性	[属性名].[属性値] 選択肢: 添付ファイル.[値]、変更履歴.[値]、ページ 2.[値]、タイトル・ブロッ ク.[値]、カバー・ページ.[値]、一般情報.[値]

ウォーターマークを印刷し、ウォーターマーク・テキストを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「Viewer とファイル」をダブルクリックします。「Viewer とファイル」ウィンドウが表示されます。
2. 「ウォーターマーク」タブをクリックして前面に表示します。
3. 希望のウォーターマークをダブルクリックし、クラスのプロパティ設定を更新します。
4. 「ウォーターマーク印刷」ドロップダウン・リストで「はい」を選択して、ウォーターマーク印刷を有効にします。
5. ウォーターマーク・テキストを選択するには、「ウォーターマーク属性」ドロップダウン・リストで、属性を選択します。この属性の値は、「ウォーターマーク印刷」が「はい」に設定されている場合、ウォーターマーク・テキストとして表示されます。
6. バック・リビジョンおよび保留中のリビジョンにカスタマイズしたテキストを指定するには、「バック・リビジョン・ウォーターマーク・テキスト」、または「保留中のリビジョンのウォーターマーク・テキスト」フィールドで、ウォーターマークに表示するテキストを入力するか、デフォルトのテキストをそのまま使用します。
7. 「ウォーターマーク」タブの変更が完了したら、「保存」をクリックします。

バナーテキストと位置を指定する

Agile PLMオブジェクトの印刷に表示するバナーを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「Viewer とファイル」をダブルクリックします。「Viewer とファイル」ウィンドウが表示されます。
2. 「バナー」タブをクリックして前面に表示します。
3. 表示するバナーの位置（下部の左、中央、右、または上部の左、中央、右）については、ドロップダウン・リストから属性、または変数を選択します。この属性または変数の値がバナーに表示されます。
4. デフォルト・テキストを削除し、新しいテキストを入力する場合は、「左下バナーテキスト」のようなバナーの該当するテキスト・フィールドにカーソルを合わせ、削除するか、またはテキストを変更します。このテキストは「左下バナーテキスト」プロパティの値の前に表示されるため、テキストの最後にコロン(:) を付けます。
5. テキスト・プロパティを変更する場合は、「左下バナーテキスト」のようなバナーの該当するテキスト・フィールドでテキストを削除、または変更し、新しいテキスト、または変数を入力します。
6. 「バナー」タブの変更が完了したら、「保存」をクリックします。

通知

この章のトピック

■ 通知の概要	277
■ デフォルト通知	278
■ イベント・ベース通知	279
■ デフォルト通知およびイベント・ベース通知を使用する	283

通知の概要

Agile PLM には、ユーザーがアクションを依頼された場合、または様々なアクションが実行されたことをユーザーに知らせる場合に、ユーザーに通知を送信する機能があります。

イベント管理フレームワークの導入によって、PLM には現在 2 つのタイプの通知があります。「通知」ノードには、次の 2 つのタイプの通知が格納されています。

- デフォルト通知は、限定された方法でのみ変更できます。このため、この通知は通知テンプレートと呼ばれる場合があります。
- イベント・ベース通知は、管理者ユーザーが作成する通知で、通知の送信方法と送信時期に関する柔軟性と独創性があります。

デフォルト通知は、通知テンプレートで取得されたシステム生成アクションまたはエンド・ユーザー生成アクションに基づいてトリガーされます。デフォルト通知には、編集できない「オブジェクト・タイプ」プロパティがあります。イベント確認通知では、デフォルト通知を使用できません。つまり、使用するには、デフォルト通知に対して名前を付けて保存を実行し、続いて通知マスクを設定する必要があります。

イベント・ベース通知は、構成可能な「オブジェクト・タイプ」プロパティによって識別できます。これらの通知は、「イベント確認通知受信者」ノードに設定されているイベント確認通知によってトリガーされます。

通知のプレリミナリ管理設定

管理者は、通知が送信される前に、データベース設定を有効にする必要があります。「サーバー設定」>「データベース」で、「通知の有効化」プロパティの設定が「はい」であることを確認します。このプロパティが「いいえ」に設定されている場合、PLM では、通知の電子メールまたはメッセージがシステム内のユーザーに送信されません。

個別の通知が送信されるのは、その通知の「有効」属性が「はい」に設定されて有効な場合のみです。通知は、その通知の「通知タイプ」プロパティの設定に従って、ユーザーの受信トレイに表示されるか電子メールで送信され、あるいはその両方で処理されます。「有効」属性と「通知タイプ」属性は、必要に応じて各通知に設定できます。

ユーザーは、Java クライアントまたは Web クライアントに戻るリンク付きで通知を受信できます。さらに明示的には、通知のリンクが指し示すオブジェクトに対して自動的に開くクライアントは、ユーザー・プリファレンスの「優先クライアント」（「ユーザー設定」>「ユーザー」>「<任意のユーザー>」>「プリファレンス」タブ）によって決定します。PPM、PCM および PG&C の各ソリューションで作業する Agile ユーザーは Web

クライアントでのみ操作するため、これらのユーザーについては、「優先クライアント」を「Web クライアント」に設定することをお勧めします。

Agile PLMクライアントに電子メール通知を完全に設定するには、351ページの「[Webクライアント通知を設定する](#)」、および352ページの「[Javaクライアントの通知を設定する](#)」を参照してください。

デフォルト通知

デフォルト通知は、「システム設定」>「通知」ノードに表示されます。デフォルト通知は、管理者が「イベント管理」ノードで設定したイベントに関連付けられていません。また、関連付けることはできません。ただし、デフォルト通知を保存して新規の通知を作成し、その通知をイベント確認通知に関連付けることはできます。詳細は、284ページの「[「名前を付けて保存」を使用して通知を作成する](#)」を参照してください。

デフォルト通知の属性

デフォルト通知の属性	説明
名前	通知の名前、編集不可
API 名	デフォルト通知の API 名は編集不可です。
オブジェクト・タイプ	デフォルト通知のオブジェクト・タイプは編集不可です。
有効	「はい」 = 通知は有効のため、システムによる送信が可能です。 「いいえ」 = 通知は無効のため送信できません。
優先度	デフォルトは「通常」。リストには、「高い」と「低い」が含まれています。
送信者	通知の「送信者」フィールドに表示されるユーザーをリストから選択します。 「送信者」属性で選択できるユーザーは1人のみです。 デフォルトは変数です。\$AGILE は常にドロップダウン・リストにあります。 \$ORIGINATOR と \$SENDER は多くの場合存在します。ルーティング可能なオブジェクトでは、適切なルーティング管理者の変数が存在します（たとえば \$CHANGE ANALYST）。
宛先	「宛先」は、デフォルト通知では常に空白です。
通知タイプ	ドロップ・ダウン・リストから「電子メール」、「電子メールと受信トレイ」または「受信トレイ」を選択します。
件名（およびデータ）	件名を作成する際にデータ・タグを含めると、変更番号、作成者など、通知のトリガーとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。 283ページの「 件名と本文テキストを入力する 」を参照してください。
本文（およびデータ）	本文テキストを作成する際にデータ・タグを含めると、変更番号、作成者など、通知のトリガーとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。 283ページの「 件名と本文テキストを入力する 」を参照してください。

\$NOTIFY では、手動によるルーティングからデフォルト通知ユーザーのみを選択します。自動昇格によってステータスの変更が行われた場合（関係がトリガーされた場合など）、デフォルト通知ユーザーは選択されません。これが、デフォルト通知とイベント・ベース通知によるステータスの変更処理の相違です。

イベント・ベース通知

イベント・ベース通知（管理者が作成またはユーザーが定義）は、「**通知**」ノードで作成されます。管理者が作成した通知には、デフォルト通知に比較してはるかに柔軟性があります。イベント・ベース通知では、サブクラス通知に対する「**ページ 3**」属性（存在する場合）がサポートされています。

イベント・ベース通知は、通知専用のイベント確認通知のハンドラです。（303ページの「[イベント管理](#)」および 309ページの「[ハンドラ・タイプ](#)」を参照してください。）イベント確認通知に設定する通知マスクの例については、347ページの「[対象アイテム・テーブル更新時の通知](#)」を参照してください。

通知は、Agile SDKおよびScript PXハンドラによってもコールできます。（282ページの「[プログラムで通知を起動する](#)」を参照してください。SDKを使用して通知を生成する例については、342ページの「[作成ユーザーへのアイテム確定時の通知](#)」を参照してください。）

アプリケーションで通知がトリガーされると、該当するオブジェクトの「**履歴**」タブでスケジュール済通知が追跡されます。このタブには、トリガーしたイベントと通知、およびその通知を受信する\$NOTIFY ユーザーが表示されます。

管理者が作成した通知では、エンド・ユーザーが送信スリップの「通知」フィールド、「サインオフ」ダイアログ・ボックス、および「コメント」ダイアログ・ボックスに入力した「通知」ユーザーが\$NOTIFY によって選択されます。また、「サインオフ」ダイアログ・ボックスおよび「コメント」ダイアログ・ボックスでは、「チェック・ボックス」ユーザーが選択されます。

さらに、「督促」でデフォルト通知が使用されている場合は、催促される承認者が選択されます。「エスカレーション」でデフォルト通知が使用されている場合は、承認者のエスカレーション担当者が選択されます。

管理者が作成したイベント・ベース通知のみのリストを検索するには、「**システム設定**」>「**イベント管理**」>「**イベント・ハンドラ・タイプ**」>「**通知**」>「**使用箇所**」タブの順に移動します。

注意 デフォルト通知とは異なり、管理者が作成した通知は削除できます。282ページの「[通知を削除する](#)」を参照してください。

重要 通知固有のイベント確認通知の場合、イベント・マスクのオブジェクト・タイプは、通知マスクのオブジェクト・タイプに対して適切である必要があります。通知は、オブジェクト・タイプ（サブクラス）のすべてのオブジェクトに適用されるか、オブジェクト・タイプ（基本クラスとクラス）から導出されます。

たとえば、通知マスクによって変更指示（クラス）が指定されている場合、イベント・マスクはクラスまたはECO（サブクラス）を指定するか、変更指示クラスから導出された他のサブクラスを指定する必要があります。

イベント・ベース通知の属性

イベント・ベース通知の属性	説明
「一般情報」タブの属性	
名前	通知マスクの名前。
API 名	オブジェクトを識別するために外部プロセスが使用するオブジェクトの名前。API名は指定できますが、通知マスクの名前を指定した後にシステム生成の名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。19ページの「 API名 」を参照してください。
オブジェクト・タイプ	<p>オブジェクト・タイプは、指定したタイプのオブジェクトに対するアクションへの通知を限定する場合に使用します。この必須フィールドは、「基本クラス」、「クラス」および「サブクラス」オプションのドロップダウン・リストから選択します。</p> <p>選択したオブジェクト・タイプは、使用可能な「送信者」オプションと属性（「カバー・ページ」、「ページ1」、「ページ2」、「ページ3」）も示します。これらの属性は、通知の「件名」フィールドと「本文」フィールドのタグとして追加されます。さらに、「宛先」オプションで使用可能な一部の変数（例: \$CHANGEANALYST）も示します。</p> <p>オブジェクト・タイプは、ユーザーが定義した通知の「通知の作成」（マスク）ダイアログ・ボックスで変更できます。オブジェクト・タイプは、通知マスクが作成されると編集できなくなります。</p> <p>（この表の上にある「重要」を参照してください。）</p>
有効	<p>「はい」 = 通知は有効なため（イベント確認通知またはプログラムで（つまり、SDK で））送信できます。</p> <p>「いいえ」 = 通知は無効のため送信できません。</p>
優先度	デフォルトは「通常」ですが、「高い」と「低い」があります。
送信者	<p>通知の「送信者」フィールドに表示されるユーザーをリストから選択します。「送信者」属性で選択できるユーザーは1人のみです。</p> <p>デフォルトは変数です。\$AGILE は常にドロップダウン・リストにあります。\$ORIGINATOR と \$SENDER は多くの場合存在します。ルーティング可能なオブジェクトでは、適切なルーティング管理者の変数が存在します（たとえば\$CHANGE ANALYST）。</p>
宛先	<p>「宛先」フィールドに表示されるユーザーをリストから選択して通知を受信します。変数\$NOTIFY およびアドレス帳の特定の受信ユーザーが使用可能です。</p> <p>注意 オブジェクト・タイプがルーティング可能なオブジェクトである場合、受信者の使用可能なリストには、ワークフロー・ユーザーも含まれます。ユーザーのリストには、権限が不足しているために通知を受信できないユーザーも含まれます。</p>
通知タイプ	ドロップ・ダウン・リストから「電子メール」、「電子メールと受信トレイ」または「受信トレイ」を選択します。

イベント・ベース通知の属性	説明
件名（およびデータ）	<p>通知の件名を示す行を作成できます。</p> <p>件名を作成する際にデータ・タグを含めると、変更番号、作成者など、通知のトリガーとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。</p> <p>283ページの「件名と本文テキストを入力する」を参照してください。</p>
本文（およびデータ）	<p>通知の本文テキストを作成できます。</p> <p>本文テキストを作成する際にデータ・タグを含めると、変更番号、作成者など、通知のトリガーとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。</p> <p>283ページの「件名と本文テキストを入力する」を参照してください。</p>
「使用箇所」タブの属性	
名前	通知を指し示すイベント確認通知（マスク）の名前。
説明	通知を指し示す確認通知受信者マスクの説明。
有効	確認通知受信者マスクが有効な設定。
イベント	確認通知受信者マスクに関連付けられているイベント・マスク。
イベント・ハンドラ	現在の通知の名前。常に、現在開いている通知です。これは、その通知が、関連する確認通知受信者マスクのハンドラとして機能するためです。
トリガー・タイプ	通知のトリガー・タイプは、常に「事後」です。323ページの「 トリガー・タイプ: 「事前」と「事後」 」を参照してください。
実行モード	通知の実行モードは、常に「非同期」です。323ページの「 実行モード 」を参照してください。
順序	「無効」。このプロパティは通知に適用されないため、この列にデータは表示されません。
エラー処理ルール	「無効」。このプロパティは通知に適用されないため、この列にデータは表示されません。

イベント・ベース通知を使用する

次のタスクは、イベント・ベース通知に適用され、デフォルト通知には適用されません。

通知を作成する

通知マスクを作成する手順を次に示します。作成された通知マスクは、その内容をイベント・マスクにバインドする確認通知受信者マスクによって指定され、完全なイベント・ベース通知になります。

通知マスクを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「通知」をダブルクリックします。「通知」ウィンドウが表示されます。
2. 「新規作成」をクリックします。
3. 「名前」フィールドに名前を入力します。
4. 名前を入力するか、「自動採番」ボタンをクリックして、必須の API 名を生成します。
5. 必須の「オブジェクト・タイプ」フィールドには、「基本クラス」、「クラス」または「サブクラス」オブジェクト・タイプを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 「有効」を「はい」または「いいえ」に設定します。
8. 「優先度」を「高い」、「低い」または「通常」に設定します。
9. 「送信者」フィールドで、選択したオブジェクト・タイプで使用可能な値（\$AGILE や \$CHANGEANALYST など）を、「基本クラス」、「クラス」または「サブクラス」に従ってドロップダウン・リストから選択します。
10. 必須の「宛先」フィールドで、通知の送信先ユーザーおよびユーザー・グループをアドレス帳から選択します。
11. 「通知タイプ」を「電子メール」、「電子メールと受信トレイ」または「受信トレイ」に設定します。
12. データ・タグ（またはデータ変数）を「件名」または「本文」フィールドに挿入するには、「データ・タグ追加」をクリックします。詳細は、283 ページの「[件名と本文テキストを入力する](#)」を参照してください。
13. 「完了」をクリックします。

通知を削除する

送信マスクは、確認通知受信者が使用していない場合のみ削除できます。デフォルト通知は削除できませんが、有効および無効にできます。

ユーザーが定義した通知を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「通知」をダブルクリックします。「通知」ウィンドウが表示されます。
2. フィルタを使用して削除する特定の通知を検出します。
3. 検出した通知を選択して、「削除」をクリックします。

通知をダブルクリックし、次に「削除」をクリックすることもできます。これによって、設定とプロパティを確認してから通知を削除できます。

注意 ユーザーにすでに送信した通知マスクを削除すると、ユーザーの受信トレイにあるその通知の件名の表示が空白に変更されて、通知の削除が反映されます。

プログラムで通知を起動する

通知は、SDK とスクリプトを使用してプログラムで送信できます。通知起動で使用するパラメータとその使用方法を次に示します。

- **SendNotification:** 通知の送信に使用するプログラム・モジュールまたはメソッド。
- **Notification Name:** 通知の名前。

- **Urgent:** 通知に「緊急」のフラグを付けるかどうかを指定します。値は「True」または「False」のいずれかです。
- **Addressee List:** 通知可能なユーザーのリスト。この値のセットは、通知の「宛先」フィールドに表示されるユーザーのリストに追加されます。この受信者のリストが選択されるのは、「宛先」フィールドに \$NOTIFY が割り当てられている場合のみです。
- **Comment:** 通知テンプレートに割り当てられている場合は、Comment データ・タグに渡されたコメントを参照します。
- **Object:** 定義内で通知に関連付けられているオブジェクトに対応するタイプのオブジェクト。たとえば、ECO オブジェクトを、ECO サブクラスに関連付けられている通知に連結している通知に渡す必要がある場合です（このオブジェクトは、変更指示クラスまたは変更基本クラスに連結している通知に渡すこともできます）。このオブジェクトは、通知の「件名」、「本文」および「宛先」フィールドで使用する変数の値を導出するために使用します。

Agile SDK を使用した通知の送信の詳細は、『Oracle Agile PLM SDK 開発者ガイド』の第 9 章「Agile PLM オブジェクトの確認通知」を参照してください。

デフォルト通知およびイベント・ベース通知を使用する

次のタスクは、デフォルト通知とイベント・ベース通知の両方に適用されます。

通知を編集する

通知を編集する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「通知」をダブルクリックします。「通知」ウィンドウが表示されます。
2. 「名前」または「オブジェクト・タイプ」で通知をフィルタリングします。
3. 編集する通知の名前をダブルクリックします。ウィンドウが表示されます。
4. 属性を適切な方法で（ドロップダウン・リストから選択するか、テキストを入力して）編集します。前述の表を参照してください。
5. データ・タグ（またはデータ変数）を「件名」または「本文」フィールドに挿入するには、「データ・タグ追加」ボタンをクリックしてください。詳細は、283 ページの「[件名と本文テキストを入力する](#)」を参照してください。
6. 「保存」をクリックします。

件名と本文テキストを入力する

「件名」フィールドと「本文」フィールドに値を設定する必要があります。各デフォルト通知には、件名とメッセージの本文のテキストが含まれています。デフォルトのテキストを使用することも、使用するテキスト・メッセージを入力することもできます。

通知の編集または作成中、件名および本文に表示するテキストを入力する際、通知の情報を参照するデータ・タグを追加できます。

使用可能なタグは、通知に関連付けられているオブジェクト・タイプによって決まります。

たとえば、「ECO ステータス昇格、承認者と変更分析者」通知の場合は、件名を次のように作成できます。

[カバー・ページ.変更タイプ][カバー・ページ.番号]は、[変更前のステータス]から[カバー・ページ.ワークフロー]の[変更後のステータス]に移動します。

「変更前のステータス」を件名に含める手順は、次のとおりです。

1. 件名のメッセージの適切な場所に、カーソルを置いてクリックします。
2. 「件名」フィールドの横にある「データ」フィールド・ドロップダウンで、「変更前のステータス」を選択します。
3. 「データ・タグ追加」をクリックします。データ・タグ[変更前のステータス]が「件名」フィールドに表示されます。
4. 件名の行にテキストを入力しながら、複数のデータ・タグを追加できます。

同様に、「本文」フィールドの横にある「データ」フィールドを使用すると、本文テキストにデータ・タグを追加できます。

「名前を付けて保存」を使用して通知を作成する

既存の通知から「名前を付けて保存」機能を実行すると、新しい名前で新しい通知を作成し、必要に応じて値を設定できます。

重要 オブジェクト・タイプにバインドされていないすべてのデフォルト通知テンプレート（「権限委譲」、「作成」、「変更」など）およびProduct Cost Managementの通知テンプレートでは、「名前を付けて保存」機能を使用できません。

「名前を付けて保存」を使用して通知を作成した場合、その新しい通知では、元の通知のオブジェクト・タイプを変更できません。新しい通知は、元の通知のオブジェクト・タイプに自動的に関連付けられます。

これは、デフォルト通知を通知マスクとして再作成し、イベント・ベース通知として使用できる唯一の方法です。

また、元の通知がデフォルト通知の場合、新しい通知の「宛先」フィールドには値が設定されないため、選択が可能になります。

「名前を付けて保存」を使用して新しい通知を作成する手順は、次のとおりです。

1. 開いている通知で「名前を付けて保存」をクリックします。
2. 新しい名前を入力し、API 名を自動生成します。
3. 「一般情報」タブで、「宛先」受信者を入力します。
4. 「保存」をクリックします。

必要に応じて、「通知を編集する」の手順を使用して新しい通知を調整します。

全文検索

この章のトピック

- 全文検索の制限 285
- 全文検索プロパティ 286
- 添付ファイルのインデックス 287

「**全文検索**」ノードから、検索方法および添付ファイルのインデックス管理方法を指定します。この章のインデックス作成に関する情報は、インデックス・ファイルにのみ適用されます。**Web** 検索用のデータベース情報のインデックス作成は、常に同期で行われます。

添付ファイルのコンテンツを検索すると、検索条件に一致するファイルを含むオブジェクトのリストが、検索結果に表示されます。リストに表示されるのは、添付ファイルの最新バージョンのみです。**Agile PLM** の検索設定と日付検索の詳細は、『**Agile PLM スタート・ガイド**』を参照してください。

注意 **Agile** の多言語機能では、「全文検索」は添付ファイルが日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、およびフランス語のローカライズ版の場合に対応可能です。

全文検索の制限

全文検索には次のような既知の制限があります。

- 全文検索は既存の役割と権限に従います。オブジェクトに対する権限がないユーザーが、検索結果でオブジェクトを見ることはありません。
- また、フィールドに対するフィールドレベルでの読取り権限がないユーザーが、検索結果でフィールドを見ることもありません。
- 全文検索は、次の検索についてはサポートしていません。
 - 類義語
 - URL 添付ファイル
 - Viewer (Cimmetry) レッドライン・データ
- 英語以外のテキストの場合、全文検索がサポートされているのは添付ファイルのみであり、派生語検索やコンセプト検索ではサポートされていません。
- 全文検索で返すことができる添付ファイルは、**Microsoft Word (.DOC)** または **Excel (.XLS)** で作成し、保存する必要があります。**.RTF** または **.TXT** 形式で作成された英語以外のテキストの添付ファイルは検索されません（ただし、エンコード方式が **Unicode** の **.TXT** ファイルは検索できる場合もあります）。
- **Agile** ファイル・マネージャのファイル格納庫のファイルには全文検索を使用できます。ファイルは管理者の設定に基づいてインデックス作成されます。
- オブジェクトに複数のファイルがある場合（つまり、オブジェクトに複数のドキュメントが添付されている場合）は、検索テキストを含むファイルが1つのみでも、そのオブジェクト全体が表示されます。どの

ファイルに検索テキストが含まれているかは示されないため、目的の添付ファイルを探すためにすべての添付ファイルの確認が必要になる場合もあります。

全文検索プロパティ

「全文検索」ノードをダブルクリックすると、「全文検索」ウィンドウが「一般情報」タブと「履歴」タブとともに表示されます。次のセクションに、添付ファイルのインデックス作成の設定に関する詳細情報を掲載しています。

プロパティ	編集可	デフォルト	メモ
派生語検索	はい	無効	単語の変化形を検索します。"run" という単語から、ran、runs、running などを検索できます。
コンセプト検索	はい	無効	同じ一般コンセプトに適合する単語を検索します。 "sports" から running, track、basketball などを検索できます。 重要: コンセプト検索は Microsoft SQL Server ではサポートされていません。
インデックス	はい	同期	ファイルの単語が、いつ全文検索で利用可能になるかを示します。 手動 - ユーザーが「添付ファイル・インデックス」ボタンをクリックしたときのみ、ファイルをインデックスします。 スケジュール済 - 指定されたスケジュールに従い、ファイルをインデックスします（次の表を参照）。 同期 - ファイルの追加と同時にファイルをインデックスします。 287ページの「添付ファイルのインデックス」を参照してください。
インデックス・ファイル・タイプ	はい	doc, ppt, pdf, txt, html, rtf, xml, xls	指定したファイルの選択性インデックスを可能にします。カンマでファイル・タイプを区切ります。大文字と小文字は区別されません。デフォルト値は一般的なファイル・タイプを幅広くカバーします。特定の検索のために、フィールドを1つか2つのファイル・タイプのみ含むように絞り込んだ場合は、検索終了後に、任意のファイル・タイプを使用してフィールドに値を再度設定してください。
前回インデックス作成日	いいえ	該当なし	システムの最終インデックス作成日。
次回インデックス作成予定日	いいえ	次に予定されたインデックスが起動している場合は、システム生成	次に予定されたインデックスの生成時間。インデックスが「スケジュール済」の場合のみ。
周期	はい	該当なし	インデックスを実行する頻度を示します。インデックスが「スケジュール済」の場合、有効となります。

次の追加属性は、「周期」フィールドをクリックした際に表示されます。

プロパティ	編集可	デフォルト	メモ
[1 日に 1 度]または [時間単位 X 時間 Y 分]	はい	いいえ	インデックスの実行頻度を指定します。
開始	はい	0:00:00 am	スケジュールの開始時刻を示します。
終了	はい	0:00:00 am	スケジュールの終了時刻を示します。このオプションは、周期が 1 日に 1 度の場合は無効になります。
日数	はい	月 - 金	スケジュールが有効になる曜日。


添付ファイルのインデックス

添付ファイルのインデックスについてシステムを設定する際のベスト・プラクティス推奨があります。

FileLoadの使用と新規ファイルのインデックス

「インデックス」のプロパティが「同期」に設定されており、Agile FileLoad を使用して多数のファイルがファイル管理のファイル格納庫に追加された場合、インデックス・プロセスにはしばらく時間がかかります。このフィールドを「手動」に設定すると、多数のファイルの読み込み速度が増加することが判明しています。または、追加するファイルが大きなドキュメントなどの場合は、「インデックス」プロパティを「スケジュール済」に設定し、インデックス・スケジュールを 3~4 時間に 1 度になるように設定します。ほとんどの新しいファイルが比較的小さい場合は、「インデックス」プロパティを「同期」に設定できます。

「添付ファイル・インデックス」ボタン

ツールバーの「添付ファイル・インデックス」ボタン （「管理」>「システム設定」>「全文検索」）を使用して、まだインデックスされていない新しい添付ファイルを手動でインデックスします。「添付ファイル・インデックス」ボタンは、インデックスが「手動」に設定されている場合のみ有効です。

ストップ・ワード

添付ファイルを検索する際に、システムにより無視される、「ストップ・ワード」と呼ばれる短い共通の単語があります。"the mouse"を検索すると、"mouse"との一致のみが検索されます。大量の検索を実行するとき以外は、この単語を知る必要はありません。単語の一覧は、『Agile PLM スタート・ガイド』の「検索」の章の簡易検索を使用して添付ファイルのコンテンツを検索する項に記載されています。

私の割当て

この章のトピック

- 概要..... 289
- カラム..... 289

概要

このノードでは、ユーザーが Web クライアントのホーム・ページで「私の割当て」タブをクリックしたときに表示される内容を設定します（ユーザーの「推奨受信トレイ・ビュー」ユーザー・プリファレンスが「私の割当て」に設定されている場合は、そのユーザーが Web クライアントを開くと表示されます）。カラムの順序を設定し、カラム名を変更できます。デフォルトのカラムは、「名前」、「ステータス」、「締切日」、「完了率 (%)」、「関連」、「実際の時間」、および「フラグ」です。

カラム

カラムの順序を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「私の割当て」をダブルクリックします。「私の割当て」テーブルの設定が開きます。
2. 「カラムの並び替え」アイコンをクリックします。「順序」ダイアログ・ボックスが開きます。
3. カラム名を選択し、「上方」または「下方」ボタンを使用してそのカラム名をリスト内で移動します（リストの「上から下」は、ユーザー・インタフェースの「左から右」と同等です）。
4. 完了したら、「OK」をクリックします。ダイアログ・ボックスが閉じ、新しい順序を反映した番号が「順序」カラムに表示されます。変更した順序でカラムを表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

カラムの名前を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「私の割当て」をダブルクリックします。「私の割当て」テーブルの設定が開きます。
2. 変更するカラム名のフィールドをクリックします。フィールドが編集可能になります。
3. 新しい名前を入力します。この手順で、他のカラム名も変更できます。
4. 入力完了したら、「保存」をクリックします。新しいカラム名を表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

新しいカラムを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「私の割当て」をダブルクリックします。「私の割当て」テーブルの設定が開きます。
2. 「新規作成」をクリックします。新しい行（Web クライアントのユーザー・インタフェースではカラムを表す）が作成されます。
3. 「カラム名」フィールドに名前を入力します。

4. 「カラム・データ・ソース」フィールドのドロップダウン・ダイアログ・ボックスを使用して、カラムのデータ・ソースを選択します。クラス（「アクティビティ」または「ゲート」）を選択し、「下方」ボタン（次を検索）または「上方」ボタン（前を検索）を使用して検索値を入力します。データ・ソースを選択して、「OK」をクリックします。
5. 「カラムの並び替え」アイコンを使用して、新しいカラムと他のカラムの順序を調整します（「保存」ボタンがアクティブになります）。完了したら、「保存」をクリックして手順を完了します。新しいカラムを表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

カラムを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「私の割当て」をダブルクリックします。「私の割当て」テーブルの設定が開きます。
2. 削除する行を選択します（行の「データ・タイプ」または「順序」カラムをクリックするのが最も簡単な方法です）。
3. 「カラムの削除」アイコンをクリックします。行が削除されます。

注意	デフォルトのカラムは削除できず、「表示」カラムでチェック・ボックスの選択を解除して非表示にすることのみ可能です。
-----------	--

4. カラムの削除が完了したら、「保存」をクリックします。

単位（UOM）

この章のトピック

- 計測カテゴリと単位を作成する..... 291

注意 「システム設定」の「UOM」ノードが表示されない場合は、管理者権限を変更して、「適用先」リストに **UOM** が含まれるようにします。

「UOM」ノードでは、Agile PLM で別の単位を使用するように指定できます。単位は Product Governance & Compliance (PG&C) で重要です。ここでは、製品に含まれる制限された物質の重量と数量を計測する必要があります。

新しい計測を定義し、この測定で使用する単位を指定します。また、Agile PLM システムで定義された既存の計測に対しても単位を指定できます。たとえば、「ドラム」単位は重量の計測に追加できます。体重測定では、16 ドラムは 1 オンスです。

各計測には標準単位があります。すべての単位値は、換算係数を使用して標準単位に標準化されます。新しい単位を定義した場合は、標準単位に対して換算係数を指定する必要があります。たとえば、重力測定の標準単位が「グラム」の場合、アンスへの換算係数は 31.1034 です。

計測カテゴリと単位を作成する

次のタスクは、新しい計測カテゴリおよび新しい単位の作成方法を説明しています。

新しい計測カテゴリを作成する手順は、次のとおりです。

- 「システム設定」で「UOM」をダブルクリックします。「計測」ウィンドウが開きます。
- 「新規作成」ボタンをクリックします。新しい計測カテゴリに対して、「重量」や「数量」などの計測カテゴリのように、「新規計測の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 新しい計測カテゴリの「名前」、「API 名」、「説明」、「範囲一致要因」を入力します。
検索している特定の単位に対して、「範囲一致要因」の検索結果の範囲を拡張します。その目的は、不正確な変換を標準単位へと調整することにあります。
- 「OK」をクリックします。

新しい単位を作成する手順は、次のとおりです。

- 「システム設定」で「UOM」をダブルクリックします。「計測」ウィンドウが開きます。
- 新しい UOM が属する計測カテゴリをダブルクリックします。「計測|<名前>」ウィンドウが表示されます。

3. 「UOM」タブをクリックします。
4. 「新規作成」ボタンをクリックします。「新規単位の作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 次の表に説明されているフィールドに値を入力してください。作業が完了したら、「OK」をクリックします。

「単位」属性	説明
名前	単位の名称。
API 名	システム全体で一意のオブジェクトの識別子であり、自動生成できます。API 名は指定できますが、システム生成の名前を使用すると、内部の整合性が強化されます。
省略形	単位の標準略称。
換算係数	値を標準単位に変換する際に使用される係数。（「標準」の説明も参照してください。）
完全変換	指定された変換が完全である場合は「はい」を選択します。
標準	<p>指定された単位が会社の標準である場合は「はい」を選択します。標準となることができる単位は1つのみです。</p> <p>新規計測カテゴリで作成した最初の UOM は標準である必要があります。この換算係数は1となります。後続の単位値は、指定された換算係数に基づいて標準単位に標準化されます。</p> <p>注意 単位を標準で設定し、適合性関連データを Agile で作成した後は、標準 UOM を変更しないことをお勧めします。UOM の変更は、検索と適合性計算に影響を与えます。</p>
有効	単位が有効かどうかを示します。有効な単位のみが、Agile PLM クライアントのエンド・ユーザーに対して表示されます。

その他のシステム設定

この章のトピック

- 組織のプロファイル 293
- 通貨換算レート 293

組織のプロファイル

「組織のプロファイル」ノードは、組織に関する情報の保存場所として、1箇所を提供します。

組織のプロファイルを定義する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「組織のプロファイル」をダブルクリックします。「組織のプロファイル」ウィンドウが開きます。
2. 名前、住所、電話、FAX 番号、URL、会社通貨、表示名を入力します。
3. 「保存」をクリックします。

通貨換算レート

「通貨換算レート」ノードは、システム内の通貨換算用の「通貨換算レート」テーブルを管理します。使用できる通貨のリストは、Agile PLM のインストール時に設定します。利用可能な通貨のリストの保持については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。「通貨換算レート」ウィンドウのテーブルには、使用通貨および会社の基本通貨に対する換算レートが表示されます。

注意 通貨換算レートは、Product Portfolio Management と Product Cost Management の2つのソリューションのコストに影響を与えます。

通貨換算レートは、選択した企業通貨へ通貨を変換する際に使用されます。企業通貨の選択方法は、293ページの「[組織のプロファイル](#)」を参照してください。

通貨換算は自動プロセスではありません。アイテムの「ページ2」または「ページ3」の通貨フィールドを持つように、システムを設定できます。通貨フィールドの通貨を変更した場合（たとえば、USD から GBP へ）、フィールド値は自動的に新しい通貨に再計算されません。

通貨を追加する手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」で「通貨換算レート」をダブルクリックします。「通貨換算レート」ウィンドウが開きます。
2. 「新規作成」ボタンをクリックします。「通貨を追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「選択肢」リストから1つ以上の通貨を選択し、右矢印を使用してその通貨を「選択済」リストに移動します。

換算レートを入力するダイアログ・ボックスが開きます。

4. すべての「**換算レート**」フィールドに適切な値を入力します。レートは小数点値（たとえば 1.04 や 0.96）で入力します。
5. 「**OK**」をクリックします。新しい通貨の換算レートがリストに表示されます。

通貨の換算レートを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「**システム設定**」で「**通貨換算レート**」をダブルクリックします。「通貨換算レート」ウィンドウが開きます。
2. 更新する通貨をダブルクリックします。「通貨」ウィンドウが表示されます。
3. 「**換算レート**」フィールドで、小数値を入力します。
4. 「**OK**」をクリックします。新しい通貨の換算レートがリストに表示されます。

注意	更新した通貨換算レートを Microsoft Excel ファイルや他のカンマ区切りファイルからインポートするには、「 ツール 」>「 インポート 」を選択します。詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』を参照してください。
-----------	--

通貨の履歴レートを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「**システム設定**」で「**通貨換算レート**」をダブルクリックします。「通貨換算レート」ウィンドウが開きます。
2. 通貨をダブルクリックします。「通貨」ウィンドウが表示されます。
3. 「**履歴レート**」タブをクリックします。「履歴レート」タブには、通貨の日付ごとの換算レートのリストが表示されます。履歴通貨レートは編集できません。
4. 「**閉じる**」をクリックします。


ダッシュボード管理

この章のトピック

■ ダッシュボード・タブを表示する.....	295
■ ダッシュボード・タブを追加する.....	295
■ ダッシュボード・タブを削除する.....	295
■ オプションのタブにテーブルを追加する.....	296
■ オプションのタブにチャートを追加する.....	297
■ オプション・テーブルのカスタム（URL）プロセス拡張を追加する.....	299
■ タブ内のテーブル行を再配置する.....	299
■ オプションのタブを表示する.....	299


「ダッシュボード」タブ表示権限は、「ダッシュボード」タブを設定する際に使用されます。詳細は、36ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照してください。

ダッシュボード・タブを表示する

ダッシュボード・タブを表示するには、「システム設定」>「ダッシュボード管理」ノードをクリックします。デフォルトのダッシュボード・タブのリストが表示されます。Web クライアントに表示されるタブの順序を変更するには、 アイコンを使用してこのリストの順序を変更します。タブにナビゲートするには、タブ名をクリックします。タブの名前と説明を変更したり、タブを表示するか非表示にするかを指定できます。


オプションのタブは、名前を変更して設定できます。

ダッシュボード・タブを追加する

新しいタブを追加するには、「ダッシュボード管理」で  アイコンをクリックします。「ダッシュボード・タブの作成」ダイアログ・ボックスで、名前、API 名および説明を入力します。「表示」フィールドで「はい」を選択します。

注意 必要な数のタブを作成できますが、Webクライアントに表示されるタブはユーザーの役割と権限によって制限されます。ユーザーが特定のダッシュボード・タブを表示できるようにするには、管理者がそのユーザーに「ダッシュボード」タブ表示権限を割り当て、その権限の「適用先」プロパティで必要なタブを選択する必要があります。詳細は、230ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

ダッシュボード・タブを削除する

削除できるのは、作成したダッシュボード・タブのみです。デフォルトのタブは削除できません。新規作成したダッシュボード・タブを削除するには、「ダッシュボード管理」内でタブを選択し、 をクリックします。

注意 タブにアクセスした後は、そのタブを削除できません。削除しようとする、オブジェクトは使用中です。というエラーが表示されます。


オプションのタブにテーブルを追加する

新しいオプションのタブを作成した場合は、そのタブにテーブルを挿入する必要があります。テーブルを追加するには、「ダッシュボード管理」で新しいタブ名をダブルクリックし、「**テーブル**」タブをクリックします。「**ダッシュボード・テーブルの作成**」アイコンをクリックします。

次の表に、テーブル・タイプに関する「ダッシュボード・テーブルの作成」のプロパティを示します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
API 名	API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。	
説明	テーブルの説明を入力します。	
タイプ・リストの表示	テーブルのタイプがリストされます。「テーブル」を選択します。	「チャート」、「テーブル」、「カスタム」、「詳細検索」
ダッシュボード拡張機能 (DX)	テーブル・タイプ・リストに対して作成されたすべてのダッシュボード拡張機能がリストされます。	
表示	Web クライアントで有効にするかどうかを選択します。	「はい」または「いいえ」

テーブルにデータを追加する

新しいテーブルをダブルクリックして「**属性**」タブをクリックし、「**属性の追加**」 アイコンをクリックして新しい属性を追加します。Agile で現在サポートされているのは、テーブル属性の「テキスト」、「数値」、「イメージ」、「日付」、「通貨」、および「リンク」タイプです。

注意 属性は、Agile でサポートされている特定のタイプであることが必要です。DX の作成時に、DX のデータは通貨、数値、テキストなどとしてすでに定義されています。

「一般情報」タブの「カラム」属性で、「**属性**」フィールドは DX に定義された属性名にマップされている必要があります。たとえば、DX の属性名が「Mytext」で、属性タイプとして「テキスト」を選択した場合、「属性」フィールドは属性名「Mytext」にマップされている必要があります。

オプションのタブにチャートを追加する

新規作成したオプションのタブにチャート・タイプのテーブルを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ダッシュボード管理」で、新しいタブの名前をダブルクリックして開きます。
2. 「テーブル」タブで、「新規ダッシュボード・テーブル」アイコンをクリックします。
3. 次の表の説明に従って、テーブルのフィールドと属性を指定します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
API 名	API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。	
説明	テーブルの説明を入力します。	(オプション)
タイプ・リストの表示	テーブルのタイプがリストされます。「チャート」を選択します(「チャート」を選択すると、オプションがさらに表示されます)。	「チャート」、「テーブル」、「カスタム」、「詳細検索」
ダッシュボード拡張機能	チャート・タイプに対して作成されたすべてのダッシュボード拡張機能がリストされます。必要なダッシュボード拡張機能を選択します。	
表示	Web クライアントで表示を有効にするには「はい」を選択します。	「はい」または「いいえ」
チャート・タイプ	表示するチャートのタイプを選択します。	「面」、「棒」、「線」、「円」、「極」、「散布」、「積み上げ面」、「積み上げ棒」、「テーブル」
X 軸	X 軸ラベルを入力します。	(オプション)
Y 軸	Y 軸ラベルを入力します。	(オプション)
表題の表示	チャートの表題を画面に表示するかどうかを指定します。	「はい」または「いいえ」
表題の位置	表題を表示する位置を指定します。	「一番下」、「デフォルト」、「左」、「右」、「一番上」
3-D スタイル	表示を 3 次元にするかどうかを指定します。	「はい」または「いいえ」
ヘッダー	必要に応じてヘッダー・メモを入力します。	(オプション)
フッター	必要に応じてフッター・メモを入力します。	(オプション)

注意 積み上げタイプのチャートの場合、チャートの DX のコードは、必要な数の X 軸および Y 軸の値を使用して作成できます。

重要 「ダッシュボード拡張機能」フィールドにチャート・タイプのDXがすべて表示されるのは、ユーザーにSDKライセンスがあり、DXがチャート・タイプとして作成された場合のみです。チャート・タイプのダッシュボード拡張機能を作成するために、ChartDataModelとChartDataSetの2つのクラスがあります。これらのクラスは、チャートのDXの作成時に使用されている必要があります。チャートのDXは、agile_home/integration/sdk/extensionsフォルダに保存され、「ダッシュボード拡張機能」フィールドにリンクされている必要があります。DXの作成方法の詳細は、『Agile PLM SDKガイド』を参照してください。

オプションのタブに詳細検索を追加する

詳細検索をデータ・ソースとして使用するダッシュボード・テーブルを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ダッシュボード管理」で、新しいタブの名前をダブルクリックして開きます。
2. 「テーブル」タブで、「新規ダッシュボード・テーブル」アイコンをクリックします。
3. 次の表の説明に従って、テーブルのフィールドと属性を指定します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
API 名	API 名は指定できますが、システムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。	
説明	テーブルの説明を入力します。	(オプション)
タイプ・リストの表示	「詳細検索」を選択します。	「チャート」、「テーブル」、「カスタム」、「詳細検索」
ダッシュボード拡張機能		「無効」（詳細検索には適用されません）
表示	Web クライアントで表示を有効にするには「はい」を選択します。	「はい」または「いいえ」

注意 「タイプ・リストの表示」で「詳細検索」を選択すると、詳細検索タイプのテーブルのみに適用されるフィールドがダイアログ・ボックスに自動的に表示されます。

詳細検索のテーブルを設定する

テーブルを作成した後は、新規作成したテーブルをダブルクリックし、「一般情報」タブで「ダッシュボード・テーブルの設定」アイコンをクリックします。

新規の検索を作成するか、保存した検索を使用します。「設定テーブル」ダイアログ・ボックスは、次の点を除いて、Agile の詳細検索機能に類似しています。


- 出力フィールド
 - 「出力フィールド」オプションを使用して、X 軸および Y 軸の値として利用可能なフィールドを選択できます。「出力フィールド」ボタンをクリックすると、「出力表示のカスタマイズ」ダイアログ・ボックスが表示されます。「利用可能なフィールド」リストから必要なフィールドを選択し、左矢印と右矢印ボタンをクリックして、「利用可能なフィールド」リストと「選択したフィールド」リストとの間でフィールド名を移動します。
 - 表示のボタンを使用すると、「チャート」および「テーブル」タイプの表示オプションを選択できます。「チャート」オプションを選択すると、「設定テーブル」ダイアログ・ボックスが表示されます。次の操作を実行できます。
- チャート・タイプを選択する
- チャートの 3D スタイルを選択する
- 表題を表示または非表示にする
- チャートに表示する表題の位置を選択する
- ドロップダウン・リスト（「出力表示のカスタマイズ」フィールドから表示される）から X 軸の値を選択する
- ヘッダー、フッター、X 軸と Y 軸の値のラベルをチャートに付ける
- データ値に対して数学関数（平均、カウント、最大、最小、合計など）を実行する

オプション・テーブルのカスタム（URL）プロセス拡張を追加する

ダッシュボードを統合ポイントとして使用して作成された URL プロセス拡張は、「ダッシュボード拡張機能」フィールドに表示され、「タイプ・リストの表示」のダッシュボード・テーブルが作成されます。URL プロセス拡張の出力は、そのダッシュボード・テーブルに表示されます。

詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

タブ内のテーブル行を再配置する

タブ内のテーブルを再配置するには、「ダッシュボード管理」>[オプションのタブ名]>「テーブル」>「ダッシュボードの設定」アイコン  を選択します。「設定タブ」ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスで、「利用可能なコンテンツ」フィールドからすべてのテーブルを選択して、必要な行に配置できます。行は 3 行のみです。デフォルトでは、新しいタブは「行 3」に作成されます。表示する行の順序に従ってタブを再配置できます。

オプションのタブを表示する

「システム設定」>「ダッシュボード管理」で新規作成したオプションのタブをすべて正しく表示するには、「ユーザー設定」>「権限」>「「ダッシュボード」タブ表示」に移動し、Web クライアントのエンド・ユーザーに対して各タブを有効にします。

「新規」アイコンを選択し、新しい権限名と説明を入力します。「有効」を「はい」に設定します。作成したすべてのタブが「適用先」>「選択肢」フィールドに表示されます。ダッシュボードに表示するタブを選択し、右矢印アイコンを使用してタブを「選択済」領域に移動します。選択したすべてのタブは、ホーム・ページとして設定できます。

ソリューション固有の管理

この章のトピック

- マニュアル 301
- 管理者の設定可能なソリューション 301

マニュアル

PLM ソリューションのユーザー・ガイドには、管理者向けの章があり、各ソリューションに固有の設定や構成に関連する説明が記載されているため、自社が購入した各ソリューションについて必ず参照する必要があります。

たとえば、PLM のすべてのインストールには、Product Collaboration と呼ばれるソリューションが組み込まれています。『Agile PLM Product Collaboration ユーザー・ガイド』には、エンド・ユーザーではなく Agile 管理者専用の章があります。

Agile 管理者は、エンド・ユーザーのマニュアルも理解する必要があります。これは、エンド・ユーザーのマニュアルには、Agile 管理者がソリューションの目的やユーザー操作性の内容を把握するのに役立つ有用な情報が記載されているためです。

管理者の設定可能なソリューション

ソリューション固有のノードおよびサブノードは、次のとおりです。

「Product Cost Management」 ノード・フォルダ

出荷先の場所

見積依頼取引条件

「Product Portfolio Management」 ノード・フォルダ

スケジュール・ステータス

コスト・ステータス

品質ステータス

リソース・ステータス

デフォルトの役割

UI 設定データ

「Agile Content Service」 ノード・フォルダ

確認通知受信者

送信先

イベント

フィルタ

パッケージ・サービス

「Product Governance & Compliance」 ノード・フォルダ

サインオフ・メッセージ

適合性ロールアップのスケジュール

適合性ロールアップの役割の設定

サプライヤ・デklarレーションのプロセス拡張

含有基準のマッピング

注意 Product Collaboration はソリューション・フォルダとして表示されませんが、Agile 管理者による設定が必要なソリューションです。

イベント管理

この章のトピック

■ イベント管理の概要	303
■ イベント確認通知の構造	305
■ ハンドラ・タイプ	309
■ イベント・タイプ	310
■ 「イベント」ノードでの作業	315
■ 「イベント・ハンドラ」ノードでの作業	317
■ 「イベント確認通知受信者」ノードでの作業	320
■ サンプル・イベント確認通知	325
■ イベントの監視	326
■ イベント・コンポーネントの管理	328
■ 選択したイベント・タイプに関する詳細	330

イベント管理の概要

イベント管理を使用すると、Agile PLM ユーザーは、PLM ソリューション全体にわたってビジネス・プロセスを自動化できます。イベント管理フレームワークは、管理者に、Agile PLM を機能拡張するためのプロセス拡張に対する柔軟な代替手段を提供します。

この章では、イベント確認通知のコンポーネントについて説明し、管理者が「イベント管理」の各ノードでこれらのコンポーネントを作成する手順を示します。このマニュアルには、Agile PLM の強力なこの新機能に関連する章が他に 2 つあります。

- イベント・ベース通知は「通知」ノードで作成されます。この通知については、279ページの「[イベント・ベース通知](#)」に記載されています。
- 337ページの「[スクリプトおよびサンプル・イベント](#)」には、スクリプト機能の簡単な概要および設定されたイベント確認通知のサンプルが示されています。

また、『Agile PLM SDK 開発者ガイド』には、Agile 管理者または支援プログラマ向けにイベント・フレームワークの技術資料が記載されています。イベント管理は、プロセス拡張と同様に Agile SDK を活用しますが、PLM ビジネス・オブジェクトとユーザー・アクションに対するより高い柔軟性と特殊性を備えています。

事前の設定

イベント管理ノードへのアクセス

ユーザー独自のユーザー・プロファイルから、管理者権限マスクの「適用先」プロパティを介して「イベント管理」の 6 つのノードすべてに正しくアクセスできることを確認してください。

グローバル・イベント管理

「イベント管理」ノード・フォルダにアクセスできる場合でも、すべての 9.3 PLM インストールでは、イベント機能は最初は無効です。管理者がイベント確認通知を設定し、システムによるイベント管理通知の使用を開始すると、イベント・トリガーは、「管理」ツールバーの「**きっかけとなるイベントの有効化**」ボタンによって有効となります。このボタンを表示して使用できるのは、管理者権限があるユーザーのみです。

注意 イベント確認通知とその様々なマスクは、最初にPLMテスト用システムで作成してテストしてから、実働システムに導入することをお勧めします。十分にテストしたイベント管理設定は、**Agile Configuration Propagation (ACP)**、個別のマニュアルを参照)を使用して、テスト・システムから実働システムに簡単に移行できます。

イベント管理の各レイヤーには広範囲にわたる管理があります。詳細は、328ページの「[イベント・コンポーネントの管理](#)」を参照してください。

最初に有効化したイベント管理は、Agile アプリケーション・サーバーの再起動時に自動的に開始します。この手順を再度実行する必要はありません。

イベントに関連するシステム全体のプリファレンス

システム全体にわたるいくつかのプリファレンスは、イベント管理の複数の側面（Agileスクリプト・ログ・レベル、イベント最大許容ネスト・レベルおよびイベント・モニター・ログ・レベル）を管理するように設定する必要があります。詳細は、375ページの「[定義されているプリファレンス](#)」を参照してください。

「イベント管理」ノード・フォルダ

次の各ノードは、「イベント管理」ノード・フォルダ内のノードです。各ノードの目的を簡単に説明します。



「イベント」ノード -

イベント・マスクを作成し、管理します。

「イベント・ハンドラ」ノード -

「Java PX」および「スクリプト PX」ハンドラ・タイプに基づいて、ハンドラ・マスクを作成し、管理します。

3 番目のハンドラ・タイプである通知は、「通知」ノードで作成され、管理されます。

「イベント確認通知受信者」ノード -

確認通知受信者マスクを作成し、管理します。

「イベント・タイプ」ノード -

デフォルトのイベント・タイプのライブラリです (310ページの「[定義されているイベント・タイプ](#)」を参照してください)。

「イベント・ハンドラ・タイプ」ノード -

デフォルトのハンドラ・タイプのライブラリです (309ページの「[イベント・ハンドラ・タイプ](#)」を参照してください)。

「イベント・ハンドラ・モニター」ノード -

トランザクションのステータスや起動されたハンドラ・トランザクションからの結果 (メッセージやエラーなど) を確認します (326ページの「[イベント・ハンドラ・モニター](#)」を参照してください)。

プロセス拡張ノードと通知ノードの概要

イベント・フレームワークを取り込むことによって、PLM には 2 つのタイプの通知と複数タイプのプロセス拡張があります。次の相違および命名規則に注意してください。

デフォルト通知とイベント・ベース通知

- デフォルト通知は、「通知」ノード内のデフォルトの通知テンプレートです。イベント・ベース通知を配置するまでは、これらの通知が特に役に立ちます。
- イベント・ベース通知は、「通知」ノードで作成されます。PLM 9.3.xで作成された通知は、デフォルト通知よりもはるかに柔軟性に優れています。ほとんどのイベント確認通知は通知専用で、ハンドラに対する通知マスクが設定されています。309ページの「[ハンドラ・タイプ](#)」を参照してください。

カスタム・プロセス拡張とイベント・ベースのプロセス拡張

- カスタム・プロセス拡張 (カスタム PX) は、「データ設定」>「プロセス拡張」ノードで作成された PX の一般名です。これらの PX には起動機能に制限があります。たとえば、オブジェクトの「アクション」メニューに追加できます。カスタム・プロセス拡張は、Java PX イベント確認通知の開発とテストが完了するまで (実働システム以外で) 保持することをお勧めします。
- イベント・ベースのプロセス拡張 (イベント PX) は、「イベント管理」ノードで作成されます。「イベント PX」は、「カスタム PX」と対照をなす一般名ですが、ここでは、さらに特殊な種類のイベント・ベース PX (つまり、Java PX やスクリプト PX) を指します。

イベント確認通知の構造

イベント確認通知は、「管理者が設定したイベント」の単一のインスタンスです。

イベント確認通知は、自動化に対する完全な指示を提供します。これには、アクションの対象となるオブジェクトの種類、実行されるアクション、システムで遂行される結果などが含まれます。

設定され起動準備が整ったイベント確認通知は、次のマスクで構成されています。

イベント・マスク - 自動化が起動される条件を指定します。これには、イベント・タイプ、オブジェクト・タイプ（多くの場合指定しますが、必須ではありません）、その他の属性が含まれます。

ハンドラ・マスクまたは通知マスク - 自動化で意図する結果を記述します。ハンドラ・マスクは設定された Java PX または設定されたスクリプト PX で、通知マスクは設定された通知です。

確認通知受信者マスク - ハンドラをイベントにバインドします。確認通知受信者は、イベント・マスクおよびハンドラ/通知マスクを指定し、イベント確認通知の動作を改善する他の属性と連携して機能するようにします。

... イベント確認通知が起動されると、システムにより設定結果が入力されます。

エンド・ユーザーが PLM で通常のアクションを実行する際、デフォルトのイベント・タイプは 1 日に何十回もトリガーされる可能性があります。ただし、イベント・タイプがトリガーされたときの実行内容に関する情報が、単一（または複数）のイベント確認通知によってシステムに提供されていない場合は、何も行われません。

注意 「イベント」と「トリガーされたイベント」の考え方に注意してください。イベント・タイプはユーザー・アクションによってトリガーされますが、3 つのマスクの組合せが適切でない場合は何も行われません。

「重複」するイベント・マスクは作成できません。つまり、イベント・タイプとオブジェクト・タイプの 1 つの組合せを指定するイベント・マスクは 1 つのみです。ただし、イベント・マスクとハンドラ・マスクは再利用可能です。つまり、これらのマスクは、固有性の高いイベント確認通知を作成するために、多数の確認通知受信者マスクで指定できます。

設定するイベント確認通知ごとに、影響を与えるオブジェクト・タイプ、つまり、サブクラスか、クラス（およびそのサブクラスすべて）か、基本クラス（およびその子孫クラスとサブクラスすべて）かを明確にする必要があります。

注意 オブジェクト・タイプに固有ではないイベント・タイプがいくつかあります。310 ページの「[定義されているイベント・タイプ](#)」の表にある最初のカテゴリが、このイベント・タイプです。

したがって、アイテム基本クラスの「オブジェクトの作成」イベント・マスクは、部品クラスとドキュメント・クラス、およびそれらの子のサブクラスを対象としてトリガーされます。部品クラスの「オブジェクトの作成」イベント・マスクは、その部品クラスのすべてのサブクラスを対象としてトリガーされます。部品サブクラスの「オブジェクトの作成」イベント・マスクは、そのサブクラスのみを対象としてトリガーされ、部品クラスの他のサブクラスはトリガーの対象にはなりません。

マスクを作成するときは、自動命名機能で名前を指定する（そのまま使用、または変更も可能）か、独自の名前を作成できます。たとえば、マスク名には、ビジネス・プロセスやサブクラスを接頭辞として付加できます。

注意 システムで提供される名前は内部規則に従っていますが、一意ではない可能性があります。その場合は、提供された名前を変更する必要があります。

命名システムには、「イベント」ノード・ライブラリに多数のマスクを格納している場合に利点があります。どのような場合でも、用途が一目で理解できるような名前を選択してください。

次に、イベント確認通知に考えられる 3 つのマスクに対する名前の例を示します。

管理者が「コンデンサ・サブクラスからのオブジェクト」を指定するために「オブジェクトの作成」イベント・タイプを作成するとします。イベント・マスクの名前は、次のとおりです。

【オブジェクトの作成 コンデンサ】

各イベント・マスクによって、イベント・タイプ（この場合は「オブジェクトの作成」イベント・タイプ）が指定されます。このイベント・タイプには、オブジェクト・タイプが必要（ほとんどのイベント・タイプにはオブジェクト・タイプが必要）であるため、このイベント・マスクによって、部品クラスのサブクラスである「コンデンサ」が指定されます。

ここで、ハンドラ・マスクが作成されます。

【ECO の新部品】

このハンドラの名前によって、変更指示は、関連付けられている新しい部品を使用して作成されることがわかります。また、このハンドラ・マスクが、部品クラスのサブクラスまたは部品クラス自体を指定するイベント・マスクと共同して作業を実行することがわかります。

最後に、イベント・マスクとハンドラ・マスクを指定する確認通知受信者マスクを、次のように指定します。

【オブジェクトの作成 コンデンサ ECO の新部品】

「コンデンサ」の作成がシステムで認識され、このイベント確認通知が起動されると、確認通知受信者によって特定の指示が用意され、システムでは必要な結果を生成するハンドラが実行されます。

「コンデンサが作成されたため、ここで（自動的に）新しい変更指示が作成され、該当する新しいオブジェクトが ECO に追加されます。」

この自動化によって、ユーザーは ECO を作成してその ECO に部品を関連付ける必要がありません。ユーザーは、単に部品を作成し、その直後に、システムで生成された ECO にその部品が含まれていることを確認します。

デフォルトのイベント・タイプ（310ページの「[定義されているイベント・タイプ](#)」を参照）の名前によって、PLMの自動化されたイベント確認通知の範囲がわかります。このイベント確認通知は、管理者がイベント管理フレームワークで作成できます。

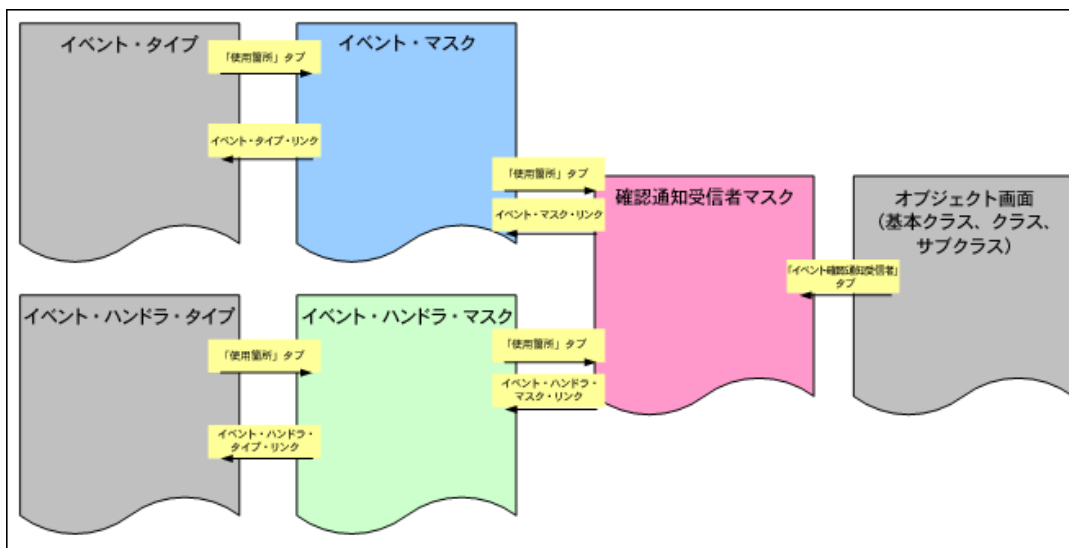
イベント確認通知コンポーネントの相互接続

次の概略図は、「イベント管理」ノードで作成された個々のオブジェクト間の接続を表しています。

たとえば、「イベント・タイプ」ノードからイベント・タイプを開くと、「使用箇所」タブに、そのイベント・タイプを使用するイベント・マスクがすべて一覧表示されます。反対に、「イベント」ノードからイベント・マスクを開くと、「イベント・タイプ」フィールドは、指定したイベント・タイプ・オブジェクトへのライブ・リンクになります。

最も右側の要素「オブジェクト画面」は、任意のオブジェクト・タイプ（「クラス」ノードの各行）を表し、すべてのオブジェクト・タイプにはそれぞれ「イベント確認通知受信者」タブがあり、このオブジェクト・タイプに関連のあるすべてのイベント確認通知受信者が一覧表示されます（これは、指定した確認通知受信者によってイベント・マスク名が指定され、そのイベント・マスクによってオブジェクト・タイプ名が指定されるためです）。

注意 イベント・ベース通知の場合、通知マスクはハンドラです。ハンドラ・マスクと通知マスクとの相違は、これらのマスクが、単に「管理者」の異なるノード（「イベント・ハンドラ」ノードと「通知」ノード）で作成されることに起因しています。



すべてのオブジェクト・タイプにある「イベント確認通知受信者」タブ

「イベント確認通知受信者」タブは、すべての基本クラス、クラスおよびサブクラス（デフォルトのクラスと管理者が作成したクラスの両方）に追加されています。オブジェクト・タイプを指し示すイベント確認通知を作成するときは、「クラス」のオブジェクト・タイプを開き、そのタイプに関連のあるすべての確認通知受信者を、このタブの下に表示できます。

これは、次の値のドロップダウン・フィルタを使用して、アクティブまたは非アクティブな確認通知受信者を確認するための最良の手段でもあります。

- **すべて** - フィルタリング・プロセスの他の条件に従って、アクティブな確認通知受信者と非アクティブな確認通知受信者の両方を表示します。
- **アクティブ** - 3つのマスクがそれぞれ有効な場合、つまり、確認通知受信者マスク自体が有効、その確認通知受信者マスクが指定するイベント・マスクが有効、およびそのイベント・マスクが指定するハンドラ・マスクまたは通知マスクが有効な場合は、確認通知受信者は「アクティブ」にできます。

さらに、イベント管理フレームワーク全体を有効にし（「管理」ツールバーの「きっかけとなるイベントの有効化」ボタンを使用）、関連のあるイベント・タイプ、ハンドラ・タイプ（3タイプすべて）または通知も有効にする（「サーバー設定」>「データベース」>「通知の有効化」を使用）必要があります。

- **非アクティブ** - 確認通知受信者マスクが有効な場合でも、そのマスクが指定するイベント・マスクまたはハンドラ・マスクが無効な場合（または基本のイベント・タイプ、ハンドラ・タイプまたはイベント管理自体が無効な場合）は、その確認通知受信者は非アクティブとみなされます。無効な確認通知受信者も非アクティブです。

「停止理由」フィールドには、非アクティブのフィルタリングによって表示されたすべての確認通知受信者が自動的に入力されます。「停止理由」フィールドには、次の様々な理由が表示されます。

- 確認通知受信者がアクティブな場合は、空白（値なし）になります。
- グローバル・イベント管理コントロールが無効な場合は、「きっかけとなるイベントの有効化」が表示されます。
- イベント・マスクが無効な場合は、「イベントは無効になっています。」が表示されます。
- イベント・タイプが無効な場合は、「イベント・タイプは無効になっています。」が表示されます。

- ハンドラ・タイプ（Java PX、スクリプト PX または通知）が無効な場合は、「イベント・ハンドラ・タイプは無効になっています。」が表示されます。
- 通知自体が無効な場合は、「イベント・ハンドラは無効になっています。」が表示されます。
- グローバル通知が無効な場合は、「通知は無効になっています。」が表示されます。

指定のオブジェクト・タイプで確認通知受信者をフィルタリングする場合、基本クラス、クラスおよびサブクラスの階層は、実質的に次のようになります。

- 基本クラスを開くと、その基本クラスに使用可能なハンドラが（確認通知受信者を介して）表示されます。
- クラスを開くと、そのクラスおよびその親の基本クラスに使用可能なハンドラが（確認通知受信者を介して）表示されます。
- サブクラスを開くと、そのサブクラス、その親のクラスおよびその親の基本クラスに使用可能なハンドラが（確認通知受信者を介して）表示されます。

ハンドラ・タイプ

「イベント・ハンドラ・タイプ」ノードには、使用可能なハンドラ・タイプのライブラリが含まれています。次に示すように、現在、3つのハンドラ・タイプがあります。最初に、この表では、イベント・ハンドラ・タイプに関して使用される用語を明確にします。

ハンドラ・タイプのカテゴリ	ハンドラ・タイプ	マスクの種類	作成および管理の場所	コメント
PXベースのハンドラ・タイプ	Java PX	ハンドラ・マスク	「イベント・ハンドラ」ノード	ハンドラ・マスクを作成する場合は、Java PX およびスクリプト PX のみが選択肢としてドロップダウン・メニューに表示されます。
	スクリプト PX			
通知ベースのハンドラ・タイプ	通知	通知マスク	「通知」ノード	「通知」ノードの「作成」で、通知マスクを作成します。通知マスクは、イベント・マスクおよび確認通知受信者マスクに関連付けることができます。Java PX またはスクリプト PX のハンドラがトリガーすることもできます。

ハンドラ・タイプは、ハンドラの指示で使用する形式を決定します。ハンドラ・マスクや通知マスクは、関連するイベント・マスクが起動されたときに起動する対象を特定します。

プロセス拡張ベースのハンドラ・タイプ

Java プロセス拡張

Java プロセス拡張 (Java PX または jPX) は、Agile アプリケーション・サーバーに配置された Java クラスです。Java PX ハンドラ・タイプを使用すると、コンパイルされた Java コードをトリガーできます。カスタム PX (「プロセス拡張」ノードで作成され保存される) と比較して、Java PX には、目標とする自動化について、より大きな可能性がイベント・フレームワークによって与えられます。

Java PX は、Agile アプリケーション・サーバーのディレクトリ構造に格納されます。Java PX コードの記述および PX の配置の詳細は、『Agile PLM SDK 開発者ガイド』を参照してください。

スクリプト・プロセス拡張

スクリプト PX ハンドラ・タイプ（スクリプト PX または sPX）を使用すると、Agile PLM の新しいプロセス拡張形式で、システム・データベースにコードを直接格納できます。このスクリプトは、常に表示され、ハンドラ・マスクで編集できます。

重要 Groovyは、Agile PLM 9.3.xでサポートされる唯一のスクリプト言語です。

スクリプトは、337ページの「[Agile PLMのスクリプトの概要](#)」で管理者に紹介されています。また、『Agile PLM SDK開発者ガイド』には、スクリプトに関する開発者向けの詳細な情報があります。

通知ベースのハンドラ・タイプ

通知マスク

管理者が作成した通知マスクは、イベント・フレームワークとともに機能します。通知マスクの作成やデフォルト通知の管理には、「**通知**」ノードを使用します。

結果が通知となるイベント確認通知では、確認通知受信者マスクによって、通知マスク（ハンドラ・マスクではなく）が指定されます（例: 347ページの「[対象アイテム・テーブル更新時の通知](#)」）。通知マスクは、Java PXまたはスクリプトPXハンドラによってもトリガーされます（例: 342ページの「[作成ユーザーへのアイテム確定時の通知](#)」）。

ハンドラ・マスク、その属性および関連するビジネス・ルールの詳細は、317ページの「[「イベント・ハンドラ」ノードでの作業](#)」を参照してください。通知マスクについては、277ページの「[通知](#)」に詳細が記載されています。

「イベント・ハンドラ・タイプ」ノードに関する注意事項

ハンドラ・タイプをダブルクリックして開くと、「**一般情報**」タブに少数の属性が表示されます。「名前」、「API 名」および「説明」はすべて編集できません。

すべてのハンドラ・タイプはデフォルトで有効ですが、有効または無効にできます（329ページの「[ハンドラ・タイプが無効の場合](#)」を参照してください）。

ハンドラ・タイプの「**使用箇所**」タブには、次の内容が表示されます。

- Java PX - Java PX ハンドラ・タイプに基づいたハンドラ・マスクがすべて一覧表示されます。
- スクリプト PX - スクリプト PX ハンドラ・タイプに基づいたハンドラ・マスクがすべて一覧表示されます。
- 通知 - イベント・ベース通知マスクがすべて一覧表示されます。

これらの「**使用箇所**」テーブルの各行はアクティブなリンクであるため、直接クリックして特定のハンドラ・マスクに移動できます。

イベント・タイプ

「イベント・タイプ」ノードには、サポートされているイベント・タイプすべてが一覧表示されます。イベント・タイプはデフォルトで有効ですが、いつでも無効または有効に変更できます。328ページの「[イベント・コンポーネントの管理](#)」を参照してください。

自動化されたイベント確認通知の開始点となるユーザー・アクションを確認するには、「イベント・タイプ」ノードのリストを使用します。イベント・タイプはシステムがシステムが「トリガーしている」内容を指定するため、ハンドラ・マスクが起動される PLM 内の位置としてのイベント・タイプの判断にも役立ちます。

各イベント・タイプの名前は、アクション（「Approve」などの動詞）とターゲット（「Workflow」などの名詞）で開始します（つまり「Approve for Workflow」など）。「説明」列見出しをクリックすると、イベント・タイプはターゲット、アルファベット順（つまり、「Workflow」、「Approve for」）、昇順または降順に並べ替えて表示されます。

「使用箇所」タブには、該当するイベント・タイプに関連付けられているイベント・マスクがすべて一覧表示されます。これらの各行はアクティブなリンクであるため、特定のイベント・マスクに直接移動できます。

デフォルトのイベント・タイプ

次の表は、イベント・マスクの作成に使用可能なすべてのイベント・タイプを示しています。デフォルトのイベント・タイプは、それぞれの適用範囲の理解に役立つ次の 4 つのグループに分類できます。

- **グローバル・イベント・タイプ** - PLM オブジェクト・タイプには直接適用されません。
- **汎用オブジェクト・ベースのイベント・タイプ** - すべての PLM オブジェクト・タイプに適用されます。
- **特定オブジェクト・ベースのイベント・タイプ** - 特定の PLM オブジェクト・タイプに適用されます。
- **ワークフロー・ベースのイベント・タイプ** - すべてのワークフロー・オブジェクトに適用されます。

各イベント・タイプの目的は、イベント・タイプをトリガーするユーザー・アクション（右側の列）、およびイベント・タイプの適用先となる PLM の基本クラス（中央の列）ごとに説明されています。

この表の範囲を超えて選択したイベント・タイプについては、330ページの「[選択したイベント・タイプに関する詳細](#)」に記載されています。

イベント・タイプ	適用先 PLM 基本 クラス	イベント・タイプをトリガーする エンド・ユーザー・アクション (またはシステム・アクション、または SDK 経由)
グローバル・イベント・タイプ		
スケジュール済 イベント	(グローバル・イベン ト・タイプは PLM 基本 クラスには直接適用さ れません。)	このイベント・タイプの実行を制御する、イベントのスケ ジュール・タスクがあります。388ページの「 タスクの設定 」 の「イベントのスケジュール・タスク」を参照してください。
オブジェクトの エクスポート		「アクション」 > 「エクスポート」、またはエクスポー ト・ユーティリティが開かれる都度。
ツール・メニュー の拡張		「ツール」メニューからトリガーされるイベント。
権限委譲		権限委譲の追加、削除または変更。
汎用オブジェクト・ベースのイベント・タイプ		
「アクション」 メニューの拡張	すべての基本クラス	リンクまたはアクションの作成、あるいはビジネス・オ ブジェクトの「アクション」メニューからアクティブ化 できるアクション。

イベント・タイプ	適用先 PLM 基本クラス	イベント・タイプをトリガーする エンド・ユーザー・アクション (またはシステム・アクション、または SDK 経由)
オブジェクトの作成	すべての基本クラス	オブジェクトの作成。オブジェクトに「名前を付けて保存」する方法（「オブジェクトに名前を付けて保存」を参照）で作成したオブジェクトは含まれません。
オブジェクトの削除	すべての基本クラス	オブジェクトの削除。
オブジェクトに名前を付けて保存	すべての基本クラス	「アクション」>「名前を付けて保存」によるオブジェクトの作成。現在のオブジェクトのコピーが作成されます。
ファイルのチェックイン	レポート以外のすべての基本クラス（自動転送クラスも除外されます）	ファイル・フォルダのチェックイン（ファイル・フォルダに対する直接的なアクションによるチェックイン、またはオブジェクトの「添付ファイル」タブを介したチェックイン）。「ファイルの置換」アクションはチェックインの一部であるため、ファイル・フォルダに「テーブルの更新」イベントが生成されることはありません。
ファイルのチェックアウト	レポート以外のすべての基本クラス（自動転送クラスも除外されます）	ファイル・フォルダのチェックアウト（ファイル・フォルダに対する直接的なアクションによるチェックアウト、またはオブジェクトの「添付ファイル」タブを介したチェックアウト）。Web クライアントからの「チェックアウト」アクションによって、個別の「ファイル取出し」アクションおよびイベントが作成されます。
ファイルのチェックアウトのキャンセル	レポート以外のすべての基本クラス（自動転送クラスも除外されます）	ファイル・フォルダのチェックインのキャンセル（ファイル・フォルダに対する直接的なアクションによるキャンセル、またはオブジェクトの「添付ファイル」タブを介したキャンセル）。
ファイル取出し	レポート以外のすべての基本クラス（自動転送クラスも除外されます）	ユーザーによるファイルの取出し要求。この要求は、「取出し」ボタンの使用、またはファイル名の選択による取得アクションの起動で発行できます。
関係の更新	すべての基本クラス	オブジェクトの「関係」タブでのユーザーによる関係の追加、削除または直接編集。編集には、関係ルールの変更や行のフィールドの編集が含まれます。
テーブルの更新	すべての基本クラス（ただし、特定のテーブルはサポートされていません）	ユーザーによるビジネス・オブジェクトのテーブルの変更（アイテムの「BOM」タブ、変更の「対象アイテム」タブなど）。詳細および例外は、332ページの「 テーブルの更新 」を参照してください。
タイトル・ブロックの更新	すべての基本クラス	オブジェクトの「ページ 1」、「ページ 2」または「ページ 3」にあるフィールドへのユーザーによる直接編集。
特定オブジェクト・ベースのイベント・タイプ		
ソーシング・オブジェクトのステータスの変更	見積依頼、ソーシング・プロジェクト	ユーザーによる「アクション」>「ステータスの変更」の実行（PCM ソリューション・オブジェクトに対する実行、「ソーシング・プロジェクト」の「見積依頼」タブからも実行）。

イベント・タイプ	適用先 PLM 基本 クラス	イベント・タイプをトリガーする エンド・ユーザー・アクション (またはシステム・アクション、または SDK 経由)
オブジェクトに ついての適合性 ロールアップ	アイテム、製造元部品、 部品グループ、デクラ レーション	手動ロールアップまたはスケジュール済ロールアップ の開始 (たとえば、ユーザーがオブジェクトに対して「ア クション」>「適合性の算出」を実行したとき、または デklarationのワークフローによってステータス が変更 (手動または自動) されたとき)。
確定(アイテム)	アイテム: 部品および ドキュメント	ユーザーによる「アクション」>「アイテム、確定」の 選択。
未確定(アイテム)	アイテム: 部品および ドキュメント	ユーザーによる「アクション」>「アイテム、未確定」 の選択。
バージョン・ファ イルのページ	ファイル・フォルダ	ユーザーによる「アクション」>ファイル・フォルダ・ ページの選択。
ワークフロー・オブジェクト・ベースのイベント・タイプ		
ワークフローの 承認	変更、デklaration ン、プログラム、PSR、 QCR、転送、パッケー ジ、ファイル・フォルダ	ユーザーによるワークフローの承認。
ワークフローの 検証		ユーザーによるワークフローのステータス検証または リリース検証の開始 (「アクション」>「ステータスの 検証」または「アクション」>「リリースの検証」を使 用)。(システムによる検証ではトリガーされません。)
ワークフローの 承認者またはオブ ザーバの変更		ユーザーによる承認者/オブザーバの追加または削除 (「ワークフロー」タブを使用)。送信スリップを介し た承認者/オブザーバの追加または削除の場合、このイベ ント・タイプはトリガーされません。
ワークフローの ステータスの変更		ユーザー・アクション、自動昇格、または関係ルールに従っ た強制変更による、ワークフロー・ステータスの移動。
ワークフローの コメント		ユーザーによるワークフローへのコメント記入。
ワークフローの エスカレーション		ワークフローがステータスのレビュー・エスカレーショ ン期間に定義されている期間より長くサインオフを待 機している状態。
ワークフローの 昇格失敗		システムで開始されたワークフロー・ステータスの昇格 失敗。昇格失敗は、自動昇格または関係トリガーが原因 で発生する場合があります。
ワークフローの 却下		ユーザーによるワークフローの却下。
ワークフローの 督促		ワークフローがステータスの督促期間に定義されてい る期間より長くサインオフを待機している状態。

選択したイベント・タイプの詳細は、330ページの「[選択したイベント・タイプに関する詳細](#)」を参照してください。

単一アクションによる複数トリガー

通常、PLM クライアントでの単一のユーザー・アクションは、1つのイベント・タイプをトリガーします。ただし、PLM には、2 次的なアクションをトリガーするアクションが多数あり、このために、単一のユーザー・アクションによる複数イベント・タイプのトリガーが可能となります。

たとえば、アイテムの「アクション」メニューには「**変更の作成**」があります。ユーザーがこのアクションを選択すると、「オブジェクトの作成」イベント・タイプがトリガーされます。一方、元のアイテムに関連付けられている変更指示が PLM で作成されると、その変更指示によって、変更の「**対象アイテム**」テーブルにアイテムが自動的に追加され、「テーブルの更新」イベント・タイプもトリガーされます。

次に、他の例をいくつか示します。

- アイテムの「アクション」>「作成(デクラレーション)」: 「オブジェクトの作成」イベント・タイプおよび「テーブルの更新」イベント・タイプ (新規デクラレーションの「部品」テーブル) がトリガーされます。
- QCR の「アクション」>「変更の作成」: 「オブジェクトの作成」イベント・タイプおよび「関係の更新」イベント・タイプ (新規変更指示の「関係」タブ) がトリガーされます。
- 変更オブジェクトの「アクション」>「一括変更」: 「テーブルの更新」イベント・タイプ (それぞれの新規変更の「対象アイテム」テーブル、対象となる各アイテムに1つずつ) および「テーブルの更新」イベント・タイプ (各対象アイテムでレッドラインされている「BOM」または「製造元」の各テーブルに対して) がトリガーされます。
- ファイルをチェックアウトすると、「ファイルのチェックアウト」イベント・タイプおよび「ファイル取出し」イベント・タイプがトリガーされます。
- Agile オブジェクト (「ファイル・フォルダ」以外) でファイルをチェックインすると、「ファイルのチェックイン」イベント・タイプおよび「テーブルの更新」イベント・タイプ (添付ファイル) がトリガーされます。添付ファイルのフォルダ・バージョンが最新でない場合はアクションを変更します。「テーブルの更新」イベント・タイプは、フォルダ・バージョンが最新に設定されている場合はトリガーされません。
- 「アクション」>「作成(ファイル・フォルダ)」では、「オブジェクトの作成」イベント・タイプおよび「ファイルのチェックアウト」イベント・タイプがトリガーされます。
- Java クライアントで、2つの URL を単一のファイル・フォルダに追加すると、2つのイベントがトリガーされます (2つの URL を他のビジネス・オブジェクトに追加すると、1つのイベントのみがトリガーされます。ユーザーは2つの URL を Web クライアントの単一のファイル・フォルダに追加することもできます。この場合は1つのイベントのみがトリガーされます)。

\$AGILEUSERというユーザー

次の3つのイベント・タイプは、イベント・マスクで 사용되는場合はバックグラウンドで動作します。

- スケジュール済イベント
- ワークフローのエスカレーション
- ワークフローの督促

これらのイベント・タイプの場合、ハンドラは\$AGILEUSER として起動されます。デフォルトでは、このユーザーは、多数の役割が割り当てられた PLM システム・ユーザーですが、管理者ユーザー・インタフェースでは使用できません (たとえば、ACS で使用されます)。その結果、ハンドラに役割が割り当てられていない場合、ハンドラの実行時には、\$AGILEUSER に割り当てられたこれらの「見えない」役割が使用されます。

「イベント」ノードでの作業

「イベント」ノードは、イベント・マスクを作成および管理するノードです。

イベント・マスクの属性

次の表は、イベント・マスクの「一般情報」タブに表示される属性を示しています。

すべてのイベント・マスクは、イベント・タイプを指定する必要があります。ほとんどのイベント・マスク（グローバル・イベント・タイプのいずれかを指定するイベント・マスクを除く）は、オブジェクト・タイプを指定する必要があります。

注意 システムで生成された名前は、イベント・マスクおよび確認通知受信者マスクを作成する際の便利な機能です。**名前ヘルパー**・ボタンを使用できます。このボタンによって、イベント・タイプとオブジェクト・タイプが連結され、名前と API 名が生成されます（ユーザーが手動で名前を入力する前に選択した場合）。

特定のイベント・タイプとオブジェクト・タイプが選択されると、作成ダイアログにその他の属性が表示されます。この表では、このような属性についても概略を示します。「その他の属性」は、330ページの「[選択したイベント・タイプに関する詳細](#)」にもイベント・タイプ別に記載されています。

「使用箇所」タブには、イベント・マスクを使用するすべての確認通知受信者マスクが一覧表示されます。

属性	説明
イベント・タイプ	イベント・タイプは、イベントをトリガーするユーザー・アクションを分類します。このフィールドは、設定済のイベント・マスクでは編集不可となります。 イベント・タイプ 自体がライブ・リンクであるため、クリックするとイベント・タイプに移動します。
名前	イベント・マスクの名前。名前は指定できますが、その名前にイベント・タイプとオブジェクト・タイプを含めて指定するのが最善の方法です。最初に「イベント・タイプ」フィールドと「オブジェクト・タイプ」フィールドに値を設定した場合は、 名前ヘルパー ・ボタンによって、システムで生成された名前が作成されます（この表の上にある注意を参照）。
API 名	オブジェクトを識別するために外部プロセスが使用するオブジェクトの名前。API名は指定できますが、イベント・マスク名を指定した後にシステムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。19ページの「 API名 」を参照してください。
説明	イベント・マスクについての有用な説明を入力します。説明は検索可能です。
有効	値は「はい」または「いいえ」です。328ページの「 イベント・コンポーネントの管理 」を参照してください。
オブジェクト・タイプ	オブジェクト・タイプは、トリガーされるイベントに対して（ユーザーのタスクにより）実行するビジネス・オブジェクトの種類を指定します。（例外: イベント・マスクのオブジェクト・タイプとしてワークフローが選択されている場合は、ワークフローの最初の照合基準プロパティのオブジェクト・タイプが使用されます。333ページの「 ワークフロー・ベースのイベント・タイプに関する詳細 」を参照してください。） 選択できるのは、イベント・タイプをサポートしているオブジェクト・タイプのみです。 注意: グローバル・イベント・タイプ（スケジュール済イベント、オブジェクトのエクスポート、ツール・メニューの拡張、権限委譲）にオブジェクト・タイプは必要ありません。

属性	説明
ワークフロー	ワークフロー固有のイベント・タイプが選択されている場合にのみ表示されます。333ページの「 ワークフロー・ベースのイベント・タイプに関する詳細 」を参照してください。 システム内のワークフローまたは「<すべて>」のワークフローを指定します。（「<すべて>」は、「ワークフローのステータスの変更」イベント・タイプには使用できません。） 「<すべて>」を選択すると、「オブジェクト・タイプ」属性は編集不可になります。
変更前のステータス	「ワークフローのステータスの変更」イベント・タイプが選択されている場合に表示されます。1つ以上のステータスまたは「<いずれか>」ステータスを選択します。
変更後のステータス	「ワークフローのステータスの変更」イベント・タイプが選択されている場合に表示されます。1つ以上のステータスまたは「<いずれか>」ステータスを選択します。
アクション	イベント・タイプに適したアクションが一覧表示されます。アクションのリストは、選択したオブジェクト・タイプによって変更することもできます。
ソース・オブジェクト	「関係の更新」イベント・タイプに対してのみ表示されます。関係（関係先）のソースとして、1つ以上のオブジェクト・タイプを指定します。331ページの「 関係の更新 」を参照してください。
ターゲット・オブジェクト	「関係の更新」イベント・タイプに対してのみ表示されます。関係（関係元）のターゲットとして、1つ以上のオブジェクト・タイプを指定します。331ページの「 関係の更新 」を参照してください。
頻度	「スケジュール済イベント」イベント・タイプに対してのみ表示されます。ドロップダウンはスケジュール・ユーティリティです（ACSの「イベント」の下にある「スケジュール済イベント」の「頻度」プロパティと同じ）。330ページの「 スケジュール済イベント 」を参照してください。
テーブル名	「テーブルの更新」イベント・タイプに対してのみ表示されます。タブ/テーブルのリストは、選択したオブジェクト・タイプに関係しています。332ページの「 テーブルの更新 」を参照してください。

イベント・マスクの作成に関するチェックリスト

これは、（企業の変更分析者や製品分析者の）質問形式のチェックリストで、イベント確認通知の作成を開始するとき、具体的にはイベント・マスクを作成するときに回答します。

- 自社にインストールされている PLM ソリューション（および Agile ユーザーが実行する定型業務）について、システムの自動化に必要なすべての PLM アクションは何ですか。作成、名前を付けて保存、タイトル・ブロックの更新、テーブルの更新などのアクションを補足するために必要な自動化、またはオブジェクトの他の動作（イベント・タイプで表される）に必要な自動化はありますか。
- トリガーされている指定のイベント・タイプから自動的に発生することを希望する結果は何ですか。
- このイベント・マスクの適用先となる適切なオブジェクト・タイプは何ですか。あるいは、ハンドラまたは通知（この自動化の結果）の適用先は、特定のサブクラスですか、複数のサブクラスですか。ハンドラは、クラスまたは基本クラス（あるいはその両方）のすべてのサブクラスに適用できますか。
- イベントに変更が関係している場合、そのイベントが適用されるのは、どのワークフローですか。すべてのワークフローですか、特定のワークフローですか。

- 考慮する必要があるイベント・タイプ固有のパラメータはありますか。たとえば、オブジェクトの削除アクション・イベント・タイプの場合、ハンドラ・マスクが処理しようとするのはソフト削除ですか、ハード削除ですか。

イベント・マスクの作成

イベント・マスクを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「イベント」ノードを開き、「新規作成」ボタンをクリックします。新しいイベント・マスク・オブジェクトが表示されます。
2. 「イベント・タイプ」フィールドで、ドロップダウンの矢印を使用してイベント・タイプを選択します。310ページの「[定義されているイベント・タイプ](#)」および330ページの「[選択したイベント・タイプに関する詳細](#)」の情報を 사용합니다。
3. 「オブジェクト・タイプ」フィールドで、ドロップダウンの矢印を使用してオブジェクト・タイプを選択します。

無効なオブジェクト・タイプも選択できます。したがって、PLM システム（「クラス」ノード）のすべてのオブジェクト・タイプのステータスについて理解している必要があります。

選択したイベント・タイプがワークフローに適用される場合は、「ワークフロー」フィールドが表示されます。適切なワークフローを選択し、さらに「オブジェクト・タイプ」が有効な場合は、適切なオブジェクト・タイプを選択します。

オブジェクト・タイプの選択によっては「アクション」フィールドが表示されることもあります。その場合は、「アクション」フィールドに値を入力する必要があります。

重要 ハンドラが通知（選択したユーザーに電子メールで送信）のイベント・マスクを作成する場合、そのイベント・マスクのオブジェクト・タイプは、通知マスクのオブジェクト・タイプに対して適切である必要があります。たとえば、通知マスクによって変更指示（クラス）が指定されている場合、イベント・マスクはクラスまたはECO（サブクラス）を指定するか、変更指示クラスから導出された他のサブクラスを指定する必要があります。「関係の更新」イベント・タイプの場合、通知のオブジェクト・タイプは、イベント・マスクのソース・オブジェクト・タイプ（または複数のソース・オブジェクト・タイプがある場合は共通のオブジェクト・タイプ）と一致している必要があります。

4. 「名前」フィールドで、右側の**名前ヘルパー**・ボタンをクリックします。イベント・タイプとオブジェクト・タイプの名前を使用して、イベント・マスクの標準的な名前が生成されます。
5. 自動生成された API 名を受け入れます。独自の API 名を入力することもできますが、システムの名前を使用して命名の整合性に対応することをお勧めします。
6. 説明を入力します。
7. 「有効」フィールドで、「はい」を受け入れるか、「いいえ」を選択します。

注意 無効なイベント・マスクは起動できません。無効なイベント・マスクを指定する確認通知受信者マスクは、そのマスク自体が非アクティブです。

8. 「OK」をクリックし、設定したイベント・マスクを保存します。

「イベント・ハンドラ」ノードでの作業

「イベント・ハンドラ」ノードは、Java PX またはスクリプト PX ハンドラ・タイプに基づいているハンドラ・マスクを作成および管理するノードです。

注意 フィルタでの並べ替えを迅速に行うには、いくつかのヒントがあります（ハンドラ・マスクと通知マスクの蓄積に従ってさらに役立ちます）。
「イベント・ハンドラ」ノードで、「**フィルタ条件**」を「ハンドラ・タイプ」に設定し、「**条件**」を「先頭から一致する」に設定した場合、フィールドには、Java PX（Java PX）またはスクリプト PX（Script PX）ハンドラ・タイプに基づいた「j」または「s」を、すべてのハンドラ・マスクに対して入力できます。
ただし、「イベント・ハンドラ」ノードでは、通知（Notifications）の「n」を入力しても通知マスクは戻りません。かわりに、「イベント・ハンドラ・タイプ」ノードを開いて、通知ハンドラ・タイプを開き、「**使用箇所**」タブの下で該当するリストを検索するか、「**通知**」ノード自体を開きます。

ハンドラ・マスクの属性

次の表は、ハンドラ・マスク内の「**一般情報**」タブに表示される属性を示しています。

ハンドラ・マスクの「**使用箇所**」タブには、ハンドラ・マスクを指し示すすべての確認通知受信者マスクが一覧表示されます。

属性	説明
ハンドラ・タイプ	Java PX またはスクリプト PX。 設定済のハンドラ・マスクでは、このフィールドは編集不可になります。ただし、ハンドラ・タイプはライブ・リンクになります。クリックするとハンドラ・タイプに移動します。
名前	名前を指定するハンドラ・マスクの名前（これらのマスクの他の部分のような名前ヘルパーはありません）。ハンドラの目的または結果を説明する名前をお薦めします。
API 名	オブジェクトを識別するために外部プロセスが使用するオブジェクトの名前。API名は指定できますが、ハンドラ・マスク名を指定した後にシステムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。19ページの「 API名 」を参照してください。
説明	有用な説明を入力します。説明は検索可能です。
有効	値は「はい」または「いいえ」です。328ページの「 イベント・コンポーネントの管理 」を参照してください。
役割	システムでのハンドラの実行時にユーザーのデフォルト役割よりも優先させる 1 つ以上の役割を選択します。318ページの「 ハンドラ・マスク内の役割 」を参照してください。
イベント・アクション	ハンドラ・タイプが Java PX の場合に表示されます。ドロップダウン・リストを使用すると、ユーザーは、システムに配置されて使用可能になっている Java PX のリストから選択できます。 完成したイベント・ベースのプロセス拡張自体が、カスタム PX の配置と同様の方法で配置されることに注意してください。
スクリプト	ハンドラ・タイプがスクリプトPXの場合に表示されます。スクリプト・コードがこのフィールドに貼り付けられます。詳細は、339ページの「 ハンドラ・マスクのスクリプトの編集 」および337ページの「 イベントでのスクリプトの概要 」を参照してください。

ハンドラ・マスク内の役割

ハンドラ・マスク内に指定されている PLM 役割は、ハンドラの実行時にシステムで考慮される役割を決定します。

「役割」属性に役割が指定されていない場合、システムでは、元のアクションを実行したユーザーに割り当てられている役割を順守しながらハンドラが実行されます（元のアクションは、現在の確認通知で起動されたイベント・マスクが指定したイベント・タイプをトリガーしたアクションです）。

一方、「役割」属性に値が設定されている場合、システムでは、該当するフィールドに指定されている役割のみを順守しながら、ハンドラが実行されます。ハンドラが指示したアクションについては、基本的にユーザーの役割よりも優先されます。

ハンドラ・マスクに優先する役割が指定されていないと、ハンドラが指示したアクション（または部分的なアクション）を実行するための十分な権限がユーザーに付与されていない場合は、エラー状態が発生します。

したがって、管理者は「役割」属性を使用して、ハンドラがその指定されたアクションのすべてを完了できるようにします。

ハンドラ・マスクの作成に関するチェックリスト

これは、質問形式のチェックリストで、ハンドラ・マスクの作成時に回答します。これらの項目は、管理者自身と Java ベースの PX および Groovy スクリプト・ベースのプロセス拡張を作成するプログラマとの間のコミュニケーション手段として役立つこともできます。

- イベント・マスクはすでに設定してありますか。処理しようとしているイベント・マスクは何ですか。
- 通知ですか、プロセス拡張ですか。つまり、ハンドラでどのような広範な結果を出す必要がありますか。完全な自動化を完了するためには、システムにどのような指示が必要ですか。
- ハンドラが通知である場合、通知マスクはすでに作成されていますか（「システム設定」>「通知」で）。
- ハンドラがプロセス拡張である場合、このハンドラ・マスクにはどのようなハンドラ・タイプが適切ですか。
- このハンドラ・マスクを駆動することになる Java コード、SDK または Groovy スクリプトは、誰が用意していますか。
- Java プロセス拡張は開発され、テストされていますか。そのプロセス拡張は、Java PX ハンドラ・マスクが認識できるように正しく配置されていますか。
- ハンドラ・マスクの実行に必要な役割は何ですか。PLM アクションを実行するユーザーには、常に適切な役割が割り当てられていますか。

ハンドラ・マスクの作成

ハンドラ・マスクを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「イベント・ハンドラ」ノードを開き、「新規作成」ボタンをクリックします。新しいハンドラ・マスク・オブジェクトが表示されます。
2. 「イベント・ハンドラ・タイプ」フィールドで、Java PX またはスクリプト PX を選択します。

通知は明確にハンドラ・タイプですが、通知マスクは「通知」ノードで作成されるため、ハンドラ・マスクの作成時の選択肢としては提供されないことに注意してください。

スクリプト PX を選択すると、「スクリプト」フィールドが、次のデフォルトの Groovy スクリプトとともに表示されます。

```
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.IBaseScriptObj
// add other import statements here
void invokeScript(IBaseScriptObj obj) {
    //script body starts here.
}
```

3. 「名前」フィールドに名前を入力します。
4. 自動生成された API 名を受け入れます。
5. 「役割」フィールドに、ハンドラの実行を許可する役割を入力します。ここで役割を指定すると、ハンドラの実行時には、ユーザーの元の役割よりもこの役割が優先されます。318ページの「[ハンドラ・マスク内の役割](#)」を参照してください。
6. このハンドラ・マスクをイベント確認通知で使えるようにする場合は、「有効」を「はい」に設定してください。
7. 「スクリプト」フィールドに、このハンドラのスクリプトを貼り付けます。（スクリプトを入力せずにハンドラ・マスクを作成することもできますが、この場合は「有効」を「いいえ」に設定することをお勧めします。）
8. 「スクリプトの検証」をクリックして、スクリプトが正しく実行されることを確認します。
9. 「OK」をクリックし、設定したハンドラ・マスクを保存します。

「イベント確認通知受信者」ノードでの作業

「イベント確認通知受信者」ノードは、確認通知受信者マスクを作成および管理するノードです。

確認通知受信者は、イベント・マスクとハンドラ・マスクを（指定することで）バインドし、自動化の結果に関する明確な「方法」と「時期」の情報を「トリガー・タイプ」（「事前」または「事後」）、「実行モード」（「同期」または「非同期」）、「順序」、「エラー処理ルール」などのフィールドによって提供します。これらのフィールドについては、このセクションの後半で定義します。

イベント・マスクを指定する確認通知受信者は複数作成できます。同じイベント・マスクを指定する2番目の確認通知受信者マスクによって、異なるハンドラ・マスクが指定されます。この場合、イベントが起動されると、複数のハンドラが実行されます。確認通知受信者は、ハンドラの実行順序（順序）およびエラー時の処理方法（エラー・ハンドラ・ルール）を指定できます。

注意 フィルタでの並べ替えを迅速に行うには、いくつかのヒントがあります（ハンドラ・マスクと通知マスクの蓄積に従ってさらに役立ちます）。

「イベント確認通知受信者」ノードで、「フィルタ条件」を「ハンドラ・タイプ」に設定し、「条件」を「先頭から一致する」に設定した場合は、「値」フィールドに Java PX（Java PX）またはスクリプト PX（Script PX）ハンドラ・タイプに基づいた「j」または「s」を入力して、ハンドラ・マスクを備えたすべての確認通知受信者を戻すことができます。このノードでは、「n」を入力することもでき、通知マスクを備えた確認通知受信者が戻されます（「イベント・ハンドラ」ノードとは異なります）。

確認通知受信者作成時のダイアログでのフィルタリング

確認通知受信者マスクを作成すると、2つのダイアログに類似したフィルタ属性が提示されます。ここでは、これらの属性の比較を示します。

- 「イベント」（イベント・マスク）フィールドのドロップダウン矢印で、「イベントの選択」（イベント・マスクの選択）ダイアログが表示されます。このダイアログでは、次のフィルタ条件を指定できます。
 - 名前（イベント・マスク名）
 - イベント・タイプ
 - オブジェクト・タイプ

- 「イベント・ハンドラ」（イベント・ハンドラ・マスク）フィールドのドロップダウン矢印で、「イベント・ハンドラの選択」（イベント・ハンドラ・マスクの選択）ダイアログが表示されます。このダイアログでは、次のフィルタ条件を指定できます。

- 名前（ハンドラ・マスク名または通知マスク名）
- ハンドラ・タイプ
- オブジェクト・タイプ

この 2 番目のダイアログで、「フィルタ条件」が「ハンドラ・タイプ」に設定され、「条件」が「先頭から一致する」に設定されている場合は、「値」フィールドに「j」（Java: Java PX ハンドラ・マスク）、「s」（Script: スクリプト PX ハンドラ・マスク）または「n」（Notification: 通知マスク）を入力すると、このダイアログでは、適切なハンドラ・マスクまたは通知マスクが戻されます。

選択可能なイベント・マスクと選択可能なハンドラ・マスクには互換性が必要であることは（これらのフィルタが暗示しているように）明白です。このことは、確認通知受信者マスクの作成時に一部のイベント・マスクまたはハンドラ・マスクが表示されない理由の説明に役立つ可能性があります。他の互換性の懸念は、「トリガー・タイプ」や「実行モード」などの確認通知受信者属性に伴って発生します。この点については、確認通知受信者属性の定義の表および表の後のセクションに記載されています。

確認通知受信者マスクの属性

次の表は、確認通知受信者マスクの「一般情報」タブに表示される属性を示しています。

確認通知受信者マスクには「モニター」タブもあります。このタブには、「イベント・ハンドラ・モニター」（326 ページの「[イベント・ハンドラ・モニター](#)」を参照）から、現在の確認通知受信者マスクの行が表示されます。

属性	説明
名前	確認通知受信者マスクの名前。「イベント」（イベント・マスク）フィールドおよび「イベント・ハンドラ」（イベント・ハンドラ・マスク）フィールドに指定されている値からシステム生成されます。
API 名	オブジェクトを識別するために外部プロセスが使用するオブジェクトの名前。API 名は指定できますが、確認通知受信者マスク名を指定した後にシステムで生成された名前を使用すると、内部的な整合性が強化されます。19 ページの「 API 名 」を参照してください。
説明	有用な説明を入力します。説明は検索可能です。
有効	値は「はい」または「いいえ」です。328 ページの「 イベント・コンポーネントの管理 」を参照してください。
イベント	この確認通知受信者マスクによってバインドされたイベント・マスクの名前。ドロップダウン矢印を使用して「イベントの選択」ダイアログを表示し、フィルタリングしてイベント・マスクを選択します。 設定されている確認通知受信者マスクでは、このフィールドは（別のイベント・マスクを指し示すように確認通知受信者を変更できるため）依然として編集可能ですが、イベントはライブ・リンクになっています。クリックすると、指定したイベント・マスク自体に移動します。
イベント・タイプ	選択したイベント・マスクから保存された確認通知受信者マスクで表示されます（編集不可）。
オブジェクト・タイプ	選択したイベント・マスクから保存された確認通知受信者マスクで表示されます（編集不可）。

属性	説明
イベント・ハンドラ	<p>この確認通知受信者マスクによってバインドされたハンドラ・マスクの名前。ドロップダウン矢印を使用して「イベント・ハンドラの選択」ダイアログを表示し、フィルタリングしてハンドラ・マスクを選択します。</p> <p>設定されている確認通知受信者マスクでは、このフィールドは（別のハンドラ・マスクを指し示すように確認通知受信者を変更できるため）依然として編集可能ですが、イベント・ハンドラはライブ・リンクになっています。クリックすると、指定したハンドラ・マスク自体に移動します。</p>
ハンドラ・タイプ	<p>選択したハンドラ・マスクから保存された確認通知受信者マスクで表示されます（編集不可）。</p>
トリガー・タイプ	<p>事前 - アクション（イベント・マスクで指定されたイベント・タイプによって記述された）の前にハンドラを起動します。</p> <p>事後 - アクション（イベント・マスクで指定されたイベント・タイプによって記述された）の後にハンドラを起動します。通常適用される設定は「事後」です。</p> <p>323ページの「トリガー・タイプ: 「事前」と「事後」」および 323ページの「トリガー・タイプおよび実行モード」を参照してください。</p>
実行モード	<p>非同期 - トランザクションが完了すると、インタフェース制御はユーザーに戻りますが、ハンドラは異なるスレッドで、バックグラウンドで実行されます。</p> <p>同期 - ユーザーは、インタフェース制御が戻るのをハンドラが完了するまで待機します。ハンドラは同じスレッドで実行されます。</p> <p>「トリガー・タイプ」が「事前」の場合、「実行モード」に指定できるのは「同期」のみです。</p> <p>323ページの「実行モード」を参照してください。</p>
順序	<p>同期イベントの順序を設定する番号（整数）。</p> <p>同期モードの確認通知受信者のみに適用されます。</p> <p>323ページの「順序および実行モード」を参照してください。</p>
エラー処理ルール	<p>「続行」および「停止」の基本的な定義の詳細は次のとおりです。</p> <p>続行 - 同期実行モードでハンドラを実行中にエラーがあった場合、そのエラーは無視されます。</p> <p>停止 - 同期実行モードでハンドラを実行中にエラーがあった場合、元のアクションおよびイベント確認通知は中止されます。</p> <p>実行モードが「同期」の場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ハンドラが「事前」および「同期」の場合 - 「続行」では、残りのハンドラおよびトランザクションを続行できます。「停止」では、残りのハンドラおよびトランザクションが中止されます。 ハンドラが「事後」および「同期」の場合 - 「続行」では、残りのハンドラを続行できます。「停止」では、残りのハンドラが中止されます。 <p>実行モードが「非同期」の場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> 実行モードが「非同期」の場合、「エラー処理ルール」は無効です。イベント確認通知が実行され、PLM トランザクションがすでに発生しているため、ユーザーには正常に完了した結果が表示されます。

トリガー・タイプ: 「事前」と「事後」

「事前」と「事後」は、確認通知受信者マスクの「トリガー・タイプ」属性の設定です。「事前」と「事後」は、それぞれ前と後を示す際に使用される一般的な接頭辞です。イベント確認通知の設定では、イベント確認通知をトランザクションの前に実行するか、後に実行するかを選択する必要があります。

- **事前** (イベント) トリガー・タイプは、ユーザーが要求した PLM アクションに対するトランザクションが開始される**直前**に合図を送ります。事前トリガー・タイプの確認通知受信者は、後続のアクション用にオブジェクトやデータを準備する場合や、オブジェクトやデータを検証する場合に使用できます。
- **事後** (イベント) トリガー・タイプは、ユーザーが要求した PLM アクションに対するトランザクションが完了した**直後**に合図を送ります。事後トリガー・タイプの確認通知受信者は、通知、催促、エスカレーションを実行する場合や、初期のアクション（事前イベント確認通知受信者が遂行したタスクなど）に基づいて検証タスクを実行したり、外部システム統合タスクを実行する場合に使用できます。

通知マスクは、事後タイプのイベント確認通知でのみ処理されます。

ここでは、これらの条件の定義のみを示します。概要については、『Agile PLM SDK 開発者ガイド』の第 24 章「Agile PLM イベントのトリガーおよび処理」を参照してください。

実行モード: 「同期」または「非同期」

イベント・ハンドラは、同期または非同期で実行できます。

通常、非同期は「同時に行わない」ことを示し、同期は「同時に行う」ことを示します。

イベント管理では、非同期ハンドラは、ハンドラが個別のスレッドで実行され、元のスレッドがハンドラの終了を待機しない（つまり、妨げられない）ことを意味します。同期ハンドラは、ハンドラが同一のスレッドで開始スレッドとして実行され、その開始スレッドがハンドラの終了を待機します。

トリガー・タイプおよび実行モード

ハンドラの実行モードの選択肢は、トリガー・タイプの選択によって異なります。

- 事前イベント・トリガーは、同期で実行できるハンドラのみをサポートしています。
 - 事後イベント・トリガーは、同期または非同期の両方で実行できるハンドラをサポートしています。
- 通知は常に、事後トリガー・タイプで、非同期実行モードです。

注意 前述の表の「エラー処理ルール」に記載されている「事前」、「事後」および「同期」について、その意味合いを把握しておいてください。

順序および実行モード

同期モードの確認通知受信者（事前または事後タイプ）の場合は、ハンドラを呼び出す順序の決定に「順序」の値が使用されます。

たとえば、部品を作成しているユーザーに基づいてトリガーする 3 つの確認通知受信者マスクがあるとした場合、これらのマスクは、「アイテム」（基本クラス）、「部品」（クラス）または「部品」（サブクラス）の各オブジェクト・タイプを指定するイベント・マスクが原因でトリガーされていた可能性があります。

システムでは、3 つの確認通知受信者すべてがまとめて評価されます。最初に「順序」の値によって並替えが実行されるため、これらの 3 つの確認通知受信者に 1、2 および 3 を個別に入力すると、どの確認通知受信者を

最初に実行し、次にどの確認通知受信者を実行するかが識別されます。

「順序」に値がない場合または値が同じ場合は、選択している確認通知受信者名がアルファベット順に再度並べ替えられ、ハンドラを呼び出す順序が決定されます。

概要については、『Agile PLM SDK 開発者ガイド』の第 24 章「Agile PLM イベントのトリガーおよび処理」を参照してください。

確認通知受信者マスクの作成に関するチェックリスト

次に、確認通知受信者マスクの設定時に回答する質問をいくつか示します。確認通知受信者マスクの属性は、イベント・マスクおよびハンドラ・マスクの設定時に、すでに考慮されている可能性があります。

- イベント・マスクおよびハンドラ・マスクのサポートに関連する確認通知受信者は用意されていますか。
- この確認通知受信者マスクで指定されるのは、どのイベント・マスクですか。関心のあるイベント・タイプは何ですか。
- この確認通知受信者マスクで指定されるのは、どのハンドラ・マスクまたは通知マスクですか。関心のあるイベント・タイプがトリガーされたときに起動するハンドラはどれですか。
- 使用する必要があるのは、事前または事後のどちらのトリガー・タイプですか。ハンドラで事前または事後を起動する理由は何ですか。
- 使用する必要があるのは、非同期または同期のどちらの実行モードですか。
- ハンドラ・マスクは、どの順序で起動する必要がありますか。
- どのエラー処理ルールを使用する必要がありますか。
- このイベント確認通知のすべての要素が有効であることに確信がありますか。この確認通知受信者マスクがアクティブであることを確認できますか。（308ページの「[イベント確認通知受信者](#)」タブを参照してください。）

確認通知受信者マスクの作成

注意 システム生成の名前は、イベント・マスクおよび確認通知受信者マスクを作成する際の便利な機能です。**名前ヘルパー**・ボタンを使用できます。確認通知受信者マスクを作成すると、選択したイベント・マスク名とハンドラ・マスク名が連結されます（これは、説明を手動で入力する前にイベント・マスク名とハンドラ・マスク名を選択した場合です。この場合は、説明を使用して 150 文字以内で名前が生成されます）。

確認通知受信者マスクを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「イベント確認通知受信者」ノードを開き、「新規作成」ボタンをクリックします。新しい確認通知受信者マスク・オブジェクトが表示されます。
2. 「イベント」フィールドで、ドロップダウン矢印を使用して「イベントの選択」ダイアログを表示します。
「フィルタ条件」および「条件」の条件（320ページの「[確認通知受信者作成時のダイアログでのフィルタリング](#)」を参照）を使用して、イベント・マスクを戻し、その 1 つを選択します。

3. 「イベント・ハンドラ」フィールドで、ドロップダウン矢印を使用して「イベント・ハンドラの選択」ダイアログを表示します。

「フィルタ条件」および「条件」の条件（320ページの「[確認通知受信者作成時のダイアログでのフィルタリング](#)」を参照）を使用して、ハンドラ・マスクまたは通知マスクを戻し、その1つを選択します。

重要 結果が通知（選択したユーザーに電子メールで送信）のイベント確認通知マスクを作成する場合、イベント・マスクのオブジェクト・タイプは、通知マスクのオブジェクト・タイプと同じである必要があります。この段階は、イベント・マスク（手順2で指定）と通知マスク（この手順で指定）がこの条件を満たしていることを確認するよい機会です。

4. 「名前」フィールドで、右側の**名前ヘルパー**・ボタンをクリックします。イベント・マスクとハンドラ・マスクの名前を使用して、標準的な名前と API 名が生成されます。システムで生成された名前が不十分な場合は、その名前を変更できます。
5. 新規の確認通知受信者マスクはデフォルトで有効です。「有効」フィールドは「いいえ」に設定できますが、有効になるまで確認通知は実行されません。
6. 「トリガー・タイプ」フィールドで、「事前」または「事後」を選択します。
7. 「実行モード」フィールドで、「非同期」または「同期」を選択します。
「トリガー・タイプ」が「事後」の場合、「実行モード」フィールドは、「非同期」に自動設定されます。
通知固有のイベント確認通知の場合は、「事後」と「非同期」が適切な設定です。
8. 適切な場合は、「順序」フィールドに順番を指定します。
9. 同様に、「エラー処理ルール」が必要な場合は、ルールを選択します。
10. 「OK」をクリックし、設定した確認通知受信者マスクを保存します。

サンプル・イベント確認通知

次の章では、管理者向けのスクリプトを紹介し、それぞれに適したスクリプトが記述されている5つのサンプル・イベント確認通知を提示します。

- 341ページの「[アイテムの説明の更新](#)」
このイベント確認通知は、すべての部品クラスのサブクラスのいずれかで、ユーザーがビジネス・オブジェクトの「**タイトル・ブロック**」を更新したときに、アイテムの説明を更新します。
- 342ページの「[作成ユーザーへのアイテム確定時の通知](#)」
このイベント確認通知は、アイテム（部品サブクラスまたはドキュメント・サブクラスの任意のサブクラスのインスタンス、したがって、アイテム基本クラスのアイテム）が確定されたときに、通知を作成し、該当する部品またはドキュメントを作成したユーザーにその通知を送信します。この通知は、（後述されている最後の例のように）管理者が作成する通知マスクではなく、スクリプト（スクリプト PX ハンドラ）からの指示で生成されることに注意してください。
- 343ページの（ECOステータスの遷移時の）「[変更分析者の設定](#)」
このイベント確認通知は、ECO のステータスが「提出済」に変更されたときに、変更分析者を自動設定します。

□ 345ページの「[新規部品へのドキュメントの追加](#)」

このイベント確認通知は、部品が作成される都度、ドキュメントを自動的に作成し、アセンブリ BOM にそのドキュメントを追加します。

□ 347ページの「[対象アイテム・テーブル更新時の通知](#)」

このイベント確認通知は、変更の「対象アイテム」テーブルが更新される都度、通知（「**通知**」ノードで作成）を自動的に送信します。

イベントの監視

イベント管理フレームワークには、ハンドラおよび確認通知受信者を監視したり、トリガーされたイベントに関する問題をトラブルシューティングするための手段がいくつか用意されています。

- 「イベント・ハンドラ・モニター」ノードは、イベント・アクティビティのモニターです。詳細は次のとおりです。
- イベント固有のログ・ファイル。327ページの「イベント・ログ・ファイル」を参照してください。
- ランタイム・エラー・メッセージがエラー・ダイアログに表示されます。
- Java PX、スクリプトまたは通知の実行は、オブジェクトの「履歴」タブに記録されます。

イベント・ハンドラ・モニター

イベント・ハンドラ・モニターは、トリガーされているイベントの結果として実行されたハンドラを追跡します。管理者は、起動されたハンドラの数、実行中のハンドラの数を確認できます。各ハンドラについて、管理者は、起動された時期、起動されたイベント・マスク、現在の状態、終了した時期、明示的に戻されたメッセージ、不都合があった場合の例外を確認できます。

システム全体のプリファレンスである**イベント・ハンドラ・ロギング**を設定すると、起動されたすべてのハンドラを記録（すべて）するか、エラーのみを記録（エラー）するか、オフに切り替える（オフ）ことができます。

「イベント・ハンドラ・モニター」ノードを開くときは、フィルタ・バー（テーブル検索）を使用して、既存のイベント・マスクを戻します。「イベント・ハンドラ・モニター」ノードの「**フィルタ条件**」属性は次のとおりです。

- イベント（つまり、イベント・マスクの名前）
- イベント・ハンドラ（つまり、ハンドラ・マスクまたは通知マスクの名前）
- イベント確認通知受信者（つまり、確認通知受信者マスクの名前）
- ステータス
- オブジェクト

イベント・ハンドラ・モニターの属性

次の表は、イベント・ハンドラ・モニターの属性の定義です。各確認通知受信者マスクにはモニター表示があり、該当する確認通知受信者が指定したハンドラのみを対象にして、基本的に同じ情報が表示されます。

属性	定義
イベント・タイプ	トリガーされたイベント・マスクのイベント・タイプ。
イベント	イベント・マスクの名前。
ハンドラ・タイプ	指定したハンドラ・マスクのハンドラ・タイプ。
イベント・ハンドラ	ハンドラ・マスクの名前。
イベント確認通知受信者	確認通知受信者マスクの名前。
トリガー・タイプ	イベント確認通知をトランザクションの前に実行するか、後に実行するか。
実行モード	ハンドラを同期して実行するか、非同期で実行するか。
オブジェクト	イベントをトリガーした特定のビジネス・オブジェクト。
開始時間	ハンドラの実行開始時間（ユーザーのタイム・ゾーンで表示）。
終了時間	ハンドラの実行終了時間（ユーザーのタイム・ゾーンで表示）。
所有者	自分のアクションがイベントをトリガーしたエンド・ユーザー。
ステータス	ステータスの値とその意味は、次のとおりです。 実行中 - ハンドラは進行中です。 完了 - ハンドラは終了しました。 失敗 - ハンドラは終了していません。 キュー - 実行を待機しています。非同期ハンドラにのみ適用されます。 不明 - ハンドラが失敗しましたが、理由は不明です。 通知の送信 - 通知ハンドラのステータスです。
メッセージ	ハンドラ・マスクから戻った結果メッセージ。
スレッド ID	ハンドラが実行するスレッドの ID。
イベント数	ネストされたイベントのレベルを追跡します。つまり、イベントによって（ユーザーのアクションではなく）トリガーされたイベントの数です。ネストされたイベントの最大許容数は、システム全体のプリファレンス「イベント最大許容ネスト・レベル」に定義されています。

イベント・ログ・ファイル

イベント・ハンドラ・モニターに加え、Agile PLM には、イベント・ログ・ファイル（SOAEvent.log）も用意されています。このファイルには、アプリケーションで発生したイベントに関連するアクティビティがすべて記録されます。

このログ・ファイルは **Log.xml** にあり、インストール時に設定されます。「ログ・レベル」は log.xml から設定できます。他の Agile ログ・ファイルと同様に、SOAEvent.log はファイル・サーバーに格納されます。

Log.xml は、<AgileInstallFolder> ¥ AgileDomain ¥ config にあります。

オブジェクトの「履歴」タブ

ビジネス・オブジェクトの「履歴」タブでは、「アクション」列に、プロセス拡張を呼び出したユーザー定義のアクションが、「詳細」列に、ハンドラ名と戻されたメッセージ（オブジェクトに対してイベントがトリガーされた場合）が表示されます。スケジュール済通知もオブジェクトの「履歴」タブで追跡されます。

イベント・コンポーネントの管理

次のサブセクションでは、イベント管理ノードでの「制御の停止」を指定します。

イベント管理ノードでは、複数の行を選択し、1回のクリックで無効または有効にできます。後続のすべて詳細には、無効にする対象と有効にする対象について注意を促す暗黙的な警告が付いています。

重要 イベント確認通知とその様々なマスクは、最初にPLMテスト用システムで作成してテストしてから、実働システムに導入することをお勧めします。十分にテストしたイベント管理設定は、**Agile Configuration Propagation**（ACP、個別のマニュアルを参照）を使用して、テスト・システムから実働システムに簡単に移行できます。

グローバル・イベント管理

管理者ツールバーには、「きっかけとなるイベントの無効化」というボタンがあります。このボタンをクリックして（プロンプトに回答すると）、以降は、同じボタン（「きっかけとなるイベントの有効化」に変わっている）をクリックするまで、イベントはトリガーされません。この「きっかけとなるイベントの有効化」ボタンをクリックした時点で、イベントのトリガーは再開されます。

「きっかけとなるイベントの無効化」ボタンは、管理者ツールバーの他のボタンと同様に、管理者権限マスクが割り当てられているユーザーに対してのみ有効です。

トリガーが無効な場合、現在実行中のトランザクションはすべて完了されますが、新しいイベントはトリガーされません。このボタンによって無効になるのはトリガーのみです。イベントの管理者設定に影響を与えることはありません。

注意 「きっかけとなるイベントの有効化/きっかけとなるイベントの有効化」ボタンは永続的な設定です。システムは、この設定で、前回サーバーが停止したときに使用していたモードで開始されます。

このボタンの設定に対する間接的な変更（データベースの切替えに起因する変更や別の管理者による有効化/無効化など）は、Java クライアントからログアウトして再度ログインするまで適用されません。

イベント・タイプを無効にした場合

イベント・タイプを無効にした場合、そのイベント・タイプを使用しているイベント・マスクの「有効」プロパティは変更されません。ただし、結果として、無効なイベント・タイプのすべてのイベント・マスクは事実上非アクティブであり、そのイベント・マスクを指定する確認通知受信者も非アクティブになります。

このため、たとえば、「ファイル取出し」に基づいたすべてのイベントを 1 クリックで効果的に「停止」できます。

イベント・タイプが無効の間も、そのイベント・タイプのイベント・マスクは作成できます。

このイベント・タイプを再度有効にする（その行を選択して「有効化」ボタンをクリックする）と、そのイベント・タイプに対してトリガーが再開されます。このイベント・マスクを指定する確認通知受信者も、再度アクティブになります。

ハンドラ・タイプを無効にした場合

ハンドラ・タイプを無効にした場合、そのハンドラ・タイプを使用しているハンドラ・マスクの「有効」プロパティは変更されません。ただし、無効なハンドラ・タイプのすべてのハンドラ・マスクは事実上非アクティブであり、そのハンドラを指定する確認通知受信者も非アクティブになります。

ハンドラ・タイプを無効にすることで、そのハンドラ・タイプを使用したハンドラの実行を効果的に防止できます。このため、Java PX ベースのすべてのイベント、スクリプト PX ベースのすべてのイベント、または通知ベースのすべてのイベントを 1 クリックで効果的に「停止」できます。

ハンドラ・タイプが無効の間も、そのハンドラ・タイプのハンドラ・マスクは作成できます。それらのハンドラ・マスクは単に実行されないということです。

このハンドラ・タイプを再度有効にする（行を選択して「有効化」ボタンをクリックする）と、そのハンドラ・タイプに基づいたハンドラ・マスクすべてに対して応答が再開されます。このハンドラを指定する確認通知受信者も、再度アクティブになります。

イベント・マスクを無効にした場合

イベント・マスクを無効にすると、そのイベント・マスクを指定する確認通知受信者が非アクティブになります。

イベント・マスクが無効でも、そのイベント・マスクは変更可能です。無効なイベント・マスクは、起動時に単に応答しないということです。

イベント・マスクを再度有効にすると、そのイベント・マスクに対する応答が再開されます。このイベント・マスクを指定する確認通知受信者も、再度アクティブになります。

ハンドラ・マスクを無効にした場合

ハンドラ・マスクを無効にすると、そのハンドラを指定する確認通知受信者がすべて非アクティブになります。

ハンドラ・マスクが無効でも、そのハンドラ・マスクは変更可能です。

ハンドラ・マスクを再度有効にすると、そのハンドラ・マスクに対する応答が再開されます。このハンドラを指定する確認通知受信者も、再度アクティブになります。

確認通知受信者マスクを無効にした場合

確認通知受信者マスクを無効にすると、その確認通知受信者マスクは即時に非アクティブになり、実行できません。

確認通知受信者マスクが無効でも、その確認通知受信者マスクは変更可能です。

確認通知受信者マスクを再度有効にすると、その確認通知受信者マスクに対する応答が再会され、アクティブになります。

選択したイベント・タイプに関する詳細

このセクションでは、選択したイベント・タイプに関する情報を補足します。この情報は、311ページの「[イベント・タイプ](#)」の表に記載されていません。

選択したグローバル・イベント・タイプに関する詳細

ツール・メニューの拡張

「ツール・メニューの拡張」イベント・タイプは、クライアントの「ツール」メニューに表示される従来の PX に対する既存の機能に類似しています。このイベント・タイプを使用して、「ツール」メニューにイベント・マスクを配置します。

事前および事後の条件は該当しません。したがって、このイベント・タイプのトリガーは事後のみです。

イベント・マスクの名前は、「ツール」メニューに表示されます。「ツール」メニューの PX のリストは、アルファベット順で、従来の PX と新規のイベント・マスクの名前がまとめて並び替えられます。

スケジュール済イベント

スケジュール済イベントを使用すると、選択した時刻にイベント確認通知を実行できます。

イベント・マスクの標準的なフィールドはすべて使用できます。スケジュール済イベントを選択すると、「**頻度**」フィールドが追加されます。このフィールドは、同じ設定の ACS のスケジュール済イベントに類似しています。オブジェクト・タイプは適用できません。

このイベント・タイプに適用できるのは、事後イベントのみです。

タイムスタンプ（表示される時刻）は GMT タイム・ゾーンで表示されます。

選択した汎用オブジェクト・ベースのイベント・タイプに関する詳細

「アクション」メニューの拡張

「「アクション」メニューの拡張」イベント・タイプは、クライアントの「アクション」メニューに表示される従来の PX に対する既存の機能に類似しています。このイベント・タイプを使用して、適切なオブジェクトの「アクション」メニューにイベント・マスクを配置します。

事前および事後の条件は該当しません。したがって、このイベント・タイプのトリガーは事後のみです。

イベント・マスクの名前は、「アクション」メニューに表示されます。

オブジェクトの作成

オブジェクトの作成を開始するには、Web クライアントの「作成」メニューの他に、「アクション」ショートカット（アイテムの「アクション」>「変更の作成」など）、テーブル・アクション、Agile SDK、Agile Web サービスなど、他のいくつかの手段を使用できます。

オブジェクトの作成に使用する「名前を付けて保存」は、個別のイベント・タイプによってカバーされています。

注意 ユーザーが「テンプレートからのプログラム作成」を使用してプロジェクトを作成すると、「オブジェクトの作成」イベント・タイプではなく、「オブジェクトに名前を付けて保存」イベント・タイプがトリガーされます。

「作成」プロセスの途中で必須フィールドに値を入力することは、「更新」アクションとはみなされないため、「タイトル・ブロックの更新」イベント・タイプはトリガーされません。

オブジェクトの削除

「削除」アクションは、Java クライアントでは「削除」ボタンを介して発生し、Web クライアントでは「アクション」>「削除」によって発生します。このアクションは、SDK または Web サービスと呼ばれることもあります。

初めてオブジェクトが削除されると、その削除は、初期（または「ソフト」）削除として認識されます。オブジェクトはデータベースからは削除されず、削除済オブジェクト検索を介して取り出すことができます。削除済オブジェクト検索からオブジェクトを開いた後、ユーザーは、「削除」を再度選択して最終削除（「ハード」削除）をトリガーできます。

その他の属性

□ 削除タイプ – ソフト、ハード

ハード削除をサポートしていない Agile ビジネス・オブジェクトの場合は、イベント自体がトリガーすることはないため、「ハード」を選択しても問題はありません。

見積依頼クラスがサポートしているのは、ハード削除のみです。見積依頼回答クラスは、どちらの削除タイプもサポートしていません。

ファイル取出し

「ファイル取出し」イベント・タイプは、次の場合にトリガーされます。

- ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」テーブルで、ユーザーが「取出し」ボタンを押した場合
- ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」テーブルで、ユーザーがファイル名のリンクをクリックした場合
 - ファイルが表示可能なファイルである場合は、Agile Viewer が起動されます。トリガーされるイベント・タイプはありません。
 - ファイルが表示可能なファイルでない場合は、「ファイル取出し」アクションが実行され、「ファイル取出し」イベント・タイプがトリガーされます。通常、Java クライアントの場合は、ファイル・フォルダ・オブジェクトで「ファイル取出し」イベント・タイプがトリガーされ、Web クライアントの場合は、ビジネス・オブジェクトでトリガーされます。

また、Java クライアントでは、「ファイル取出し」のトリガー数は、「ファイルを 1 つの ZIP ファイルとしてダウンロードする」オプションが選択されているかどうかによって異なります。選択されている場合は、単一の「ファイル取出し」トリガーが起動されます。このオプションの選択が解除されている場合は、複数の「ファイル取出し」トリガーが起動されます。

関係の更新

「関係の更新」イベント・タイプは、ビジネス・オブジェクトの「関係」タブで、関係が追加、削除または直接編集されたときにトリガーされます。編集には、関係ルールも含めて、行の任意のフィールドに対する編集が含まれます。

「関係」使用ケースは、ターゲット・オブジェクトが大きいため、（「テーブルの更新」イベント・タイプではなく）個別のイベント・タイプとして処理されます。つまり、PLM オブジェクトは、他の PLM オブジェクトとの関係を維持できます。

このイベント・タイプは、単に関係ルールに一致しているのみではトリガーされません。たとえば、ECO が「実施済」ステータスに移動したときは、その ECR を「終了」ステータスに設定するという、ECO のルールがあるとします。ECO が「実施済」ステータスに移動すると、ルールの条件が満たされ、Agile PLM では、その ECR を「終了」に移動しようとしています。ECR が「終了」に移動すると、「ステータスの変更」イベント・タイプがトリガーされます。一方、「終了」への移動に失敗した場合は、「ワークフローの昇格失敗」イベント・タイプがトリガーされます。

その他の属性

- **ソース・オブジェクト・タイプ** - ユーザーが「関係」タブを変更したときは、このイベント・タイプをトリガーできるオブジェクト・タイプのリストから選択します。
- **ターゲット・オブジェクト・タイプ** - 「関係」タブの更新結果として更新できるオブジェクト・タイプのリストから選択します。

重要 イベント・マスクが「関係の更新」イベント・タイプに基づいているときに、通知ハンドラに確認通知受信者マスクを設定するためには、「ソース・オブジェクト・タイプ」のオブジェクト・タイプと「通知」マスクのオブジェクト・タイプが一致している必要があります。同じクラス階層で複数のソース・オブジェクト・タイプが選択されている場合、「関係の更新」に基づいたイベント・マスクは、オブジェクト・タイプが選択したすべてのソース・オブジェクト・タイプの中で共通の「通知」マスクにバインドできます。

テーブルの更新

すべてのオブジェクトのすべてのタブが「テーブルの更新」イベント・タイプをサポートしているわけではありません。

トリガーの対象に含まれるもの

- 「テーブルの更新」イベント・タイプは、ユーザーが開始したオブジェクト・テーブルの編集を捕捉します。通常は、アイテムの「BOM」テーブル、変更の「対象アイテム」テーブル、「添付ファイル」テーブルなどが含まれます。
- ファイル・フォルダ・オブジェクトからの一括更新によって、関連アクションに対して「テーブルの更新」が呼び出されます。様々なイベントが、各オブジェクトの「添付ファイル」タブに対してトリガーされます。
- **BOM、製造元または添付ファイル**に対する変更の「レッドライン」テーブルは、変更のテーブルのイベントではなく、アイテムのイベントをトリガーします。
- PCM 固有、PPM 固有または「共益サービス」のオブジェクトの場合は次のようになります。
 - 添付ファイルのみでサポートされます。

トリガーの対象から除外されるもの

- 前述のように、「関係」テーブルはそれ自体のイベント・タイプを保証しています。
- 通常、「テーブルの更新」イベント・タイプには、すべての「使用箇所」テーブルやすべての「履歴」テーブルなどの読取り専用のテーブルが含まれていません。

- テーブルの 2 次的な更新も、主要なアクションが別の場所で実行されているため除外されます（「変更」テーブルや「品質」テーブルなど）。
- ECO のリリース時に、「BOM」テーブルや「製造元」テーブルへの変更によって更新がトリガーされることはありません。トリガーは、変更の「レッドライン」テーブルまたは「ステータスの変更」で使用されます。

その他の属性

テーブル - このマルチリスト・フィールドには、オブジェクトに対して有効、かつイベントに対して有効な関連テーブルがすべて格納されています。これらのテーブルは、イベントに対して実装されると、一覧表示されます。実装されたすべてのテーブルは、管理者内のユーザーに表示されない場合でも、オブジェクトに対しては表示されます。

「<すべて>」のテーブル・アクションはありません。マルチリスト・フィールドとして、ユーザーは複数の値を選択できます。

タイトル・ブロックの更新

「タイトル・ブロックの更新」イベント・タイプは、ユーザーが、オブジェクトの「ページ 1」（つまり、「カバー・ページ」、「一般情報」または「タイトル・ブロック」）、「ページ 2」または「ページ 3」の任意のフィールドを直接編集するとトリガーされます。このイベント・タイプは、ライフサイクル・フェーズを更新するための変更指示のリリースなど、システムによる値の書込みに基づいて、トリガーされることはありません。

変更指示および製造元変更の新機能である属性変更管理は、**BOM** または **AML** の更新とともに一貫して処理されます。「タイトル・ブロックの更新」イベント・タイプは、データの直接入力に起因する場合のみ起動され、属性変更管理でリリースされた変更の場合は起動されません。

変更指示または製造元変更の「タイトル・ブロック」をレッドラインすると、アイテム（変更ではなく）の「タイトル・ブロックの更新」イベントがトリガーされます。イベント・コンテキスト・オブジェクトのプロパティは、更新がレッドラインとして発生しているかどうかを示します。『Agile PLM SDK 開発者ガイド』を参照してください。

LDAP 更新では、「タイトル・ブロックの更新」イベント・タイプは起動されません。

選択した特定オブジェクト・ベースのイベント・タイプに関する詳細

ソーシング・オブジェクトのステータスの変更

PCM ソリューションでは、標準的な Agile ワークフローを使用しません。「ソーシング・オブジェクトのステータスの変更」イベント・タイプは、PCM オブジェクトのステータスに対する様々な変更を捕捉します。

その他の属性

- **アクション** - 通常は、PCM オブジェクトのライフサイクル・フェーズのリストです。
 - 見積依頼のリスト
 - ソーシング・プロジェクトのリスト

ワークフロー・ベースのイベント・タイプに関する詳細

管理者がワークフローを作成する場合、選択できる唯一のオブジェクト・タイプは基本クラスです。イベントは、詳細に定義できるように設計されています。したがって、システムでは、ワークフローの「照合基準」プロパティが使用されています。

すべてのワークフロー・ベースのイベント・タイプでは、「ワークフロー」プロパティがイベント・マスクに追加されます。このプロパティは、次のルールに従っています。

- 「ワークフローのステータスの変更」以外のすべてのイベント・タイプでは、「ワークフロー」の値を「<すべて>」にできます。「<すべて>」が選択されている場合、「オブジェクト・タイプ」プロパティは無効です。
- ただし、クラス・ベースのワークフローが選択されているときに、そのワークフローの「照合基準」プロパティに単一の値が指定されている場合は、その値がイベント・マスクの「オブジェクト・タイプ」として使用されます。
- このワークフローの「照合基準」プロパティに複数の値が指定されている場合は、それらの値を使用してドロップダウン・リストが提供されます。管理者は、このドロップダウン・リストから、イベント・マスクの「オブジェクト・タイプ」を選択します。

ワークフローの承認

その他の属性

ワークフロー - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローの検証

「ワークフローの検証」イベント・タイプは、ステータス検証またはリリース検証を開始するユーザーの他に、SDK または Web サービス経由でも開始できます。（詳細は、『Agile PLM SDK 開発者ガイド』を参照してください。）ステータス変更時に発生するシステム生成による検証では、このイベントはトリガーされません。不具合の情報は、イベント・コンテキスト・オブジェクトに格納されます。『Agile PLM SDK 開発者ガイド』を参照してください。

その他の属性

- **タイプ** - ステータス（検証）、リリース（検証）
- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローの承認者またはオブザーバの変更

このイベント・タイプには、「対象となるステータス」はありません。

その他の属性

- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。
- **アクション** - 承認者またはオブザーバの追加、承認者またはオブザーバの削除

ワークフローのステータスの変更

このイベント・タイプは、ユーザー・アクションに起因して実行されるワークフローのステータス変更の他に、サーバー内での自動昇格、ステータスの変更を強制する関係ルール的一致、および「却下された場合はステータスを変更する」ステータス・プロパティによるステータスの変更などの場合に、ステータス変更を認識します。このイベント・タイプは、ワークフローが特定のステータスから別のステータスに遷移する都度トリガーされます。

事前イベントは、オブジェクトが「変更前」のステータスを終了する前です。事後イベントは、オブジェクトが「変更後」のステータスに到達した後です。ステータス間には有効な状態がないため、イベント・タイプはこのように構造化されています。ステータス変更トランザクションはプログラマにとっては「ブラック・ボックス」です。

その他の属性

- **ワークフロー** - 値は「<すべて>」または空白にできません。選択したオブジェクトに有効なワークフローのリストは 1 つです。ワークフローを選択した後は、「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。
- **変更前のステータス** - 選択したワークフローからのステータスのリスト。「<いずれか>」が有効で、任意のステータスを示します。
- **変更後のステータス** - 選択したワークフローからのステータスのリスト。「<いずれか>」が有効で、任意のステータスを示します。

ワークフローのコメント

その他の属性

ワークフロー - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローのエスカレーション

このイベント・タイプは、（「レビュー・エスカレーション期間」ステータス・プロパティに関して）完了する必要があるシステム・アクションが前提となるため、事前イベントは使用できません。したがって、トリガー・タイプは「事後」のみです。

その他の属性

- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローの昇格失敗

これは、完了する必要があるシステム・アクションであるため、事前イベントは使用できません。したがって、トリガー・タイプは「事後」のみです。

その他の属性

- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローの却下

その他の属性

- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

ワークフローの督促

このイベント・タイプは、（「督促期間」ステータス・プロパティに関して）完了する必要があるシステム・アクションが前提となるため、事前イベントは使用できません。したがって、トリガー・タイプは「事後」のみです。

その他の属性

- **ワークフロー** - このプロパティと「オブジェクト・タイプ」プロパティに値を設定することで、このセクションの最初に記載されているルールが順守されます。

スクリプトおよびサンプル・イベント確認通知

この章のトピック

- Agile PLMのスクリプトの概要 337
- Groovyスクリプト言語の使用 338
- スクリプトのログ機能 339
- スクリプト・ベースのイベント確認通知の指定に関するチェックリスト 340
- スクリプトを使用したサンプル・イベント確認通知 341

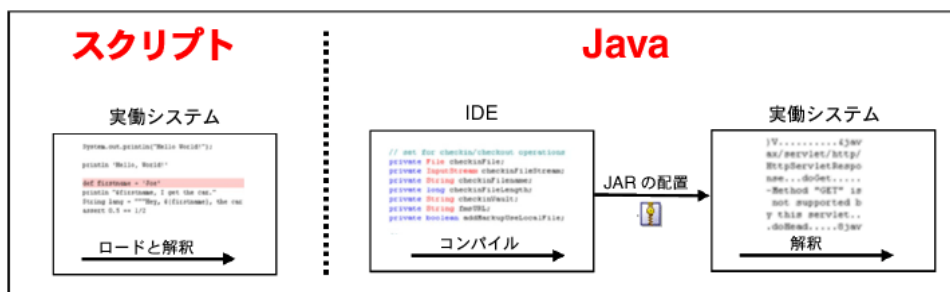
Agile PLMのスクリプトの概要

この章では、スクリプト機能の概要について説明します。このスクリプト機能によって、イベント・ハンドラでは、スクリプトで記述された適切な長さで複雑性を持つ指示を使用できます。スクリプト機能は、PLM サーバー（Agile アプリケーション・サーバー）内で実行するサーバー側のスクリプト・エンジンとともに、**イベント管理**フレームワークに完全に組み込まれています。スクリプト・コードは、データベース内の大規模な文字領域に格納されます。スクリプト API および Agile SDK にアクセスできるユーザーは、SDK プログラムを記述できます。

Agile SDK の使用は、自動化されたイベントの潜在能力を活用するための重要な側面です。『Agile PLM SDK 開発者ガイド』には、PLM イベントに関する SDK プログラム向けの技術情報が記載されています。

この章の後半にあるサンプル・イベント確認通知は、設定されたイベント確認通知を管理者が理解するためのモデルです。このサンプルは、プログラムを記述しない管理者が、Groovy のスクリプトを理解するのに役立ちます（ただし、これらのサンプルはスクリプト記述のチュートリアルではありません）。Agile システム管理者はハンドラのスクリプトを記述できる必要はありませんが、プログラマの支援を受ける場合は、Agile PLM のイベント管理フレームワークを使用して実現する内容を説明する必要があります。

ソース・コードは実行時に実働システムで使用可能である必要があるため、スクリプト・コードは、オブジェクト・コードではなくプレーン・テキストで配布されます。



Groovyスクリプト言語の使用

スクリプト PX ハンドラ・マスクを提供するために、スクリプト記述者は、Groovy でのスクリプトの記述方法、スクリプト API の使用方法、および Agile Java SDK の使用方法を理解する必要があります。

理想的には、スクリプトを提供するプログラマはイベント確認通知およびハンドラ・マスクの基本を理解している必要があります。（前の章の「イベント管理」を読んでいない場合は、309ページの「[ハンドラ・タイプ](#)」および317ページの「[「イベント・ハンドラ」ノードでの作業](#)」から開始してください。）

スクリプト言語は、ユーザーが理解できる変更可能なプログラムを記述するための優れた手段です。このプログラムは、簡単な操作を実行し、他のプログラムの実行を制御します。

Groovy は、Java プラットフォームのための動的言語です。多くの機能は、Python、Ruby、Smalltalk などの言語の影響を受け、Java 開発者が使用できるように Java に類似した構文を使用しています。Groovy の単純化された構文を使用することで、コードの解説と保守が容易になります。

このような理由と他の要因によって、Groovy は、Agile PLM イベント管理フレームワークのサポート対象スクリプト言語として選択されています。Groovy は、Agile PLM 9.3.x でサポートされる唯一のスクリプト言語です。

Groovy を学習するための多くの資料が書籍および電子メディアの形式で提供されています。

スクリプト・ベースのハンドラの選択

通常、スクリプトは、静的なタイプ分け（コンパイル中にタイプがチェックされる）ではなく、動的にタイプ分けされます（実行時にタイプがチェックされる）。次の場合は、Java ベースのハンドラよりもスクリプト・ベースのハンドラを使用または指定してください。

- ユーザー（つまり管理者）が解説可能なプログラムという点で優位性がある場合。
- ビジネス・ロジックを明示的にコンパイルまたは配置せずに更新する必要がある場合。
- ビジネス・ロジックの迅速なプロトタイプが特に必要な場合。検証後は、パフォーマンス向上のために、スクリプト PX から Java PX に変換することもできます。

ハンドラ・マスクの開発または更新の手順

ハンドラ・マスクの開発または更新に必要な手順は、考慮が必要なもう 1 つの要素です。

スクリプト PX ハンドラ・マスクを開発する手順は、次のとおりです。

1. 要件を定義します（後述のチェックリストを参照してください）。
2. Groovy スクリプトを記述します。
3. 完成したスクリプト PX ハンドラ・マスクをイベント確認通知に関連付けます。
4. ハンドラをテストします。

Java PX ハンドラ・マスクを開発する手順は、次のとおりです。

1. 要件を定義します（後述のチェックリストを参照してください）。
2. Java コードを記述します。

3. コードをコンパイルし、PX をテストします。
4. PX を Agile アプリケーション・サーバーに配置します。
5. 完成した Java PX ハンドラ・マスクをイベント確認通知に関連付けます。

スクリプトPXハンドラ・マスクを更新する手順は、次のとおりです。

1. Groovy スクリプトを修正します。

Java PXハンドラ・マスクを更新する手順は、次のとおりです。

1. Java プロセス拡張を更新します。
2. コードをコンパイルし、PX をテストします。
3. 修正した PX を Agile アプリケーション・サーバーに配置します。

ハンドラ・マスクでのスクリプトの編集

スクリプト PX ハンドラ・タイプに基づいたハンドラ・マスクは、効率的なスクリプト・エディタです。

ハンドラ・マスクの「**一般情報**」タブでは、スクリプトをコピー・アンド・ペーストし、管理者で直接編集できます。

いくつかの編集機能が用意されています。特に、「**スクリプトの検証**」ボタンでは、括弧を使用した適切な構文、等号 (=) 記号、単純なテキスト・エラーなど、スクリプト・コードの構文チェックが実行されます。

「**使用箇所**」タブには、このスクリプト・ベースのハンドラ・マスクを使用するすべての確認通知受信者マスクが表示されます。

「**履歴**」タブには、スクリプトの作成や変更の事実など、スクリプトの編集履歴が表示されます。

スクリプトのログ機能

スクリプトのログ機能には複数の異なるタイプがあり、別々にアクティブ化され、ログに記録されます。

- システムのログ機能
 - スクリプト PX ログに記述される情報量は、システム全体のプリファレンス「Agile スクリプト・ログ・レベル」によって制御されます。
- オブジェクトに関連するスクリプト
 - 明示的なログは、サーバー側の LOG4J トレース・ファイルに書き込まれます。
 - PLM ユーザーごとに 1 つのログ・ファイルがあります。ログ・ファイル名は、`<userID>_agileScript.Log` のようになります。
 - ランタイム・エラー・メッセージで、管理者に情報が提供されます。
 - オブジェクトに関連するスクリプトの実行は、オブジェクトの「**履歴**」タブに記録されます。
- イベント・ハンドラ・モニター
 - **イベント・ハンドラ・モニター**によって、実行中のハンドラに関する情報が提供されます。326 ページの「[イベント・ハンドラ・モニター](#)」を参照してください。

- ハンドラ・モニターに対するスクリプト・ログのレベルは、システム全体のプリファレンス「イベント・モニター・ログ・レベル」によって制御されます。

スクリプト・ベースのイベント確認通知の指定に関するチェックリスト

「イベント管理」の章では、イベント・マスク、ハンドラ・マスクおよび確認通知マスクの作成に関するセクションに、質問形式のチェックリストが記載されていました。次に、必要なスクリプト PX ハンドラの説明に使用できるように、これらの質問の一部をまとめて記載します。

- **イベント・マスク:**
 - トリガーされている指定のイベントから自動的に発生することを希望する結果は何ですか。
 - ハンドラ・マスクは単一のサブクラスに適用されますか。ハンドラは単一のクラスから複数のサブクラスに適用されるが、すべてのサブクラスには適用されませんか。
 - イベントに変更が関係している場合、そのイベントが適用されるのは、どのワークフローですか。すべてのワークフローですか、特定のワークフローですか。
 - 考慮する必要があるイベント・タイプ固有のパラメータはありますか。たとえば、オブジェクトの削除アクション・イベント・タイプの場合、ハンドラ・マスクが処理しようとするのはソフト削除ですか、ハード削除ですか。
- **ハンドラ・マスク**
 - ハンドラではどのような広範な結果を出す必要がありますか。完全な自動化を完了するためには、システムにどのような指示が必要ですか。
 - ハンドラがプロセス拡張である場合、このハンドラ・マスクにはどのようなハンドラ・タイプが適切ですか。
 - このハンドラ・マスクを駆動することになる Java コード、SDK または Groovy スクリプトは、誰が用意していますか。
 - ハンドラ・マスクの実行に必要な役割は何ですか。PLM アクションを実行するユーザーには、常に適切な役割が割り当てられていますか。
- **確認通知受信者マスク**
 - この確認通知受信者マスクで指定されるのは、どのハンドラ・マスクですか。関心のあるイベントがトリガーされたときに起動するハンドラはどれですか。
 - 使用する必要があるのは、事前または事後のどちらのトリガー・タイプですか。ハンドラで事前または事後を起動する理由は何ですか。
 - 使用する必要があるのは、非同期または同期のどちらの実行モードですか。
 - ハンドラ・マスクは、どの順序で起動する必要がありますか。
 - どのエラー処理ルールを使用する必要がありますか。

スクリプトを使用したサンプル・イベント確認通知

次のサンプル・イベント確認通知では、いくつかの使用ケースで様々なマスクのモデルが提示されています。これらのサンプルでは、Groovy スクリプトで特定の確認通知結果を推進する方法を示します。

イベント管理は、デフォルト状態で動作する機能として配置されており、PLM 管理者が Groovy でのスクリプトの記述方法を理解している（あるいは学習する必要がある）とは仮定していません。『Agile PLM SDK 開発者ガイド』には、Agile のイベントとスクリプトに関する詳細な技術資料やサンプルが記載されています。イベントの完全な潜在能力は、このマニュアルを使用しているプログラマの支援によって実現できます。

注意 ソリューション・ベースの PLM ユーザー・ガイドには、イベント・フレームワークによるソリューションの強化方法に関する情報が記載されています。この情報は、（『Agile Product Lifecycle Management Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』、『Agile Product Lifecycle Management Product Cost Management ユーザー・ガイド』などの）管理者の設定に関する章または付録にあります。

サンプル・イベントおよび Groovy スクリプトはテスト済ですが、精査と修正を加えずに顧客システムで正確に機能する保証はありません。

アイテムの説明の更新

このケースでは、ユーザーがすべての「アイテム基本クラス」（孫）サブクラスの 1 つから任意のビジネス・オブジェクトの「タイトル・ブロック」を更新すると、アイテムの「説明」フィールドが更新されます。この更新は、PPM でのプロジェクトの目次オブジェクト自動更新など、いずれかの PLM ソリューションの主要ビジネス・オブジェクトで実行できます。

このサンプルでは、このイベント確認通知をトリガーするアクションは、ユーザーが部品の「タイトル・ブロック」を更新する際のアクションです。「説明」に「Testing」という値が設定されているときに、ユーザーが、「テキスト 07」フィールドを「SOA」に、「テキスト 08」を「Project」に変更して保存すると、このイベント確認通知によって、既存の「説明」の値が「Testing SOA Project」に置換されます。ハンドラの実行ステータスは、ハンドラ・モニターから確認できます。

イベント・マスク: [タイトル・ブロックの更新 アイテム]

- イベント・タイプ: タイトル・ブロックの更新
- オブジェクト・タイプ: アイテム

ハンドラ・マスク: [アイテムの説明の更新]

- ハンドラ・タイプ: スクリプト PX
- スクリプト:


```
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.IBaseScriptObj
// add other import statements here
import com.agile.api.ItemConstants

void invokeScript(IBaseScriptObj obj) {
    //script body starts here.
```

```
// get old item description value
oldItemDescription =
obj.getValueByAttId(ItemConstants.ATT_TITLE_BLOCK_DESCRIPTION);

// get the first field from pageTwo
field1 = obj.getValueByAttId(ItemConstants.ATT_PAGE_TWO_TEXT07);
// get the second field from pageTwo field2 =
obj.getValueByAttId(ItemConstants.ATT_PAGE_TWO_TEXT08);
// set the new description
obj.setValueByAttId(ItemConstants.ATT_TITLE_BLOCK_DESCRIPTION,
oldItemDescription + " " + field1 + " " + field2);

// get the new description
newItemDescription =
obj.getValueByAttId(ItemConstants.ATT_TITLE_BLOCK_DESCRIPTION);

// log to Event Handler Monitor
obj.logMonitor( "Old description: " + oldItemDescription + "| " + "New
description: " + newItemDescription);
}
```

確認通知受信者マスク: [タイトル・ブロックの更新 アイテム アイテムの説明の更新]

- イベント: [タイトル・ブロックの更新 アイテム]
- イベント・ハンドラ: [アイテムの説明の更新]
- トリガー・タイプ: 事後
- 実行モード: 同期
- 順序: 0
- エラー処理ルール: 続行

作成ユーザーへのアイテム確定時の通知

このケースでは、アイテム（部品クラスまたはドキュメント・クラスのいずれかのサブクラスのインスタンス、つまり、アイテム基本クラスのインスタンス）が確定されると、通知が作成され、該当する部品またはドキュメントを作成したユーザーに送信されます。

より具体的には、このイベント確認通知をトリガーするアクションとは、ユーザーが部品を作成し、「アクション」メニューから「**確定**」を選択する操作です。

アイテムが「確定済」になると、部品の作成者に通知が送信されます。ハンドラの実行ステータスは、ハンドラ・モニターから確認できます。

この通知は、（このセットの最後の例のように）管理者が作成する通知マスクではなく、スクリプト（スクリプト PX ハンドラ）からの指示で生成されることに注意してください。

イベント・マスク: [確定(アイテム)]

- イベント・タイプ: 確定(アイテム)
- オブジェクト・タイプ: アイテム

ハンドラ・マスク: [確定済アイテム]

- ハンドラ・タイプ: スクリプト PX
- スクリプト:


```
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.IBaseScriptObj
// add other import statements here
import com.agile.api.ItemConstants

void invokeScript(IBaseScriptObj obj) {
//script body starts here.

    // get create user
    createUser =
    obj.getValueByAttId(ItemConstants.ATT_PAGE_TWO_CREATE_USER)

    // send notification
    sendToList = [createUser];
    obj.sendNotification("Notify On Incorporate", false, sendToList,
    "Comments: send from Script handler");

    // log to Event Handler Monitor
    obj.logMonitor( "Notify On Incorporate sent to: " + sendToList);
}
```

確認通知受信者マスク: [確定(アイテム) 確定済アイテム]

- イベント: [確定(アイテム)]
- イベント・ハンドラ: [確定済アイテム]
- トリガー・タイプ: 事後
- 実行モード: 同期
- 順序: 0
- エラー処理ルール: 続行

変更分析者の設定

このイベント確認通知は、ワークフローでステータスが変化したときに、変更分析者を自動的に設定するモデルです。

より具体的には、このイベント確認通知をトリガーするアクションとは、ユーザーが ECO を作成し、リスト（Capricorn、Leo、Pisces、Scorpio、Taurus、Test、Virgo）から 1 つを選択して製品ラインを設定する操作です。変更分析者のフィールドは未記入の状態です。

システムによって（またはユーザーが手動で）ステータスが「提出済」に変更されると、製品ラインに従って ECO の変更分析者が設定されます。ハンドラの実行ステータスは、ハンドラ・モニターから確認できます。

イベント・マスク: [ワークフローの変更分析者]

- イベント・タイプ: ワークフローのステータスの変更
- ワークフロー: デフォルトの変更指示
- オブジェクト・タイプ: 変更指示
- 変更前のステータス: 保留中
- 変更後のステータス: 提出済

ハンドラ・マスク: [変更分析者の設定]

- ハンドラ・タイプ: スクリプト PX
- スクリプト:

```
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.BaseScriptObj;
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.AgileDSLException;
import com.agile.api.ChangeConstants;

/**
 * Sets the change analyst upon setting an ECO to submitted.
 */
BaseScriptObj invokeScript(BaseScriptObj obj) {
    def PRODUCTLINES_ATTID =
        ChangeConstants.ATT_COVER_PAGE_PRODUCT_LINES;
    def CHANGEANALYST_ATTID =
        ChangeConstants.ATT_COVER_PAGE_CHANGE_ANALYST;
    def CMap = [
        'Capricorn':'user1',
        'Leo':'user2',
        'Pisces':'user3',
        'Scorpio':'user4',
        'Taurus':'user5',
        'Test':'user6',
        'Virgo':'user7'
    ]

    def toStatus = obj.getToStatus();
    def workflow = obj.getWorkflow();
    def changeAnalyst = obj.getValueByAttId(CHANGEANALYST_ATTID);

    // update change analyst based on the product lines if the next status
    is CCB and CA list is not filled yet
    if(workflow == "Default Change Orders" && toStatus == "Submitted" &&
        (changeAnalyst == null || changeAnalyst == "")) {
        def productLines = obj.getValueByAttId(PRODUCTLINES_ATTID);
```

```

        if(productLines == null || productLines == "") throw new
        AgileDSLEException("Product Line can't be null, please fill in!");
    else
        obj.logMonitor("Current productlines are " + productLines);
    def productLinesList = productLines.tokenize(";")
    // Set change analyst based on the product lines
    changeAnalyst = CAMap.subMap(productLinesList).values().min();
    obj.setValueByAttId(CHANGEANALYST_ATTID, changeAnalyst);
    obj.logMonitor("||Set change analyst to " + changeAnalyst);
}
}

```

確認通知受信者マスク [ワークフローの変更分析者 変更分析者の設定]

- イベント: [ワークフローの変更分析者]
- イベント・ハンドラ: [変更分析者の設定]
- トリガー・タイプ: 事後
- 実行モード: 同期
- 順序: 0
- エラー処理ルール: 続行

新規部品へのドキュメントの追加

このイベント確認通知は、部品が作成される都度、ドキュメントを自動的に作成し、アセンブリ BOM にそのドキュメントを追加するモデルです。このイベント確認通知は、（このサンプルのように）部品クラスの単一のサブクラス、または（「オブジェクト・タイプ」フィールドに「部品クラス」を設定することで）すべての部品クラスのサブクラスのいずれかに対して設定できます。

より具体的には、このイベント確認通知をトリガーするアクションとは、ユーザーが Web または Java クライアントで部品を作成する操作です。

ユーザーが部品の「BOM」タブをクリックすると、ドキュメントが部品に追加され、部品がアセンブリに変更されたことが表示されます。ハンドラの実行ステータスは、ハンドラ・モニターから確認できます。

イベント・マスク: [部品の作成]

- イベント・タイプ: オブジェクトの作成
- オブジェクト・タイプ: 部品

ハンドラ・マスク: [新規部品へのドキュメントの追加]

□ ハンドラ・タイプ: スクリプト PX

□ スクリプト:

```
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.IBaseScriptObj;
import com.agile.agileDSL.ScriptObj.AgileDSLException;

import com.agile.api.IAdmin;
import com.agile.api.IAgileClass
import com.agile.api.IAgileSession;
import com.agile.api.IAutoNumber;
import com.agile.api.IItem;
import com.agile.api.INode;
import com.agile.api.ITable;
import com.agile.api.ItemConstants;
import com.agile.px.EventActionResult;
import com.agile.px.IEventAction;
import com.agile.px.IEventInfo;
import com.agile.px.ICreateEventInfo;
import com.agile.px.EventConstants;
import com.agile.px.ActionResult;

import java.text.SimpleDateFormat;
import java.util.*;

/**
 *Post event of create item action, create document and add the document into
BOM table of assembly.
 * It's mainly using SDK
 *
 */

void invokeScript(IBaseScriptObj obj) {
    IAgileSession session = obj.getAgileSDKSession();
    IEventInfo req = obj.getPXEventInfo();

    try {
        int eventType=req.getEventType();
        int triggerType=req.getEventTriggerType();
        if(eventType!=EventConstants.EVENT_CREATE_OBJECT &&
triggerType!=EventConstants.EVENT_TRIGGER_POST)
            throw new AgileDSLException("The PX is only applicable for post create
event");
        ICreateEventInfo info=(ICreateEventInfo)req;
        Integer newSubClassId=info.getNewSubclassId();

        IAdmin admin=session.getAdminInstance();
        IAgileClass partclass=admin.getAgileClass(newSubClassId);
        IAgileClass docclass=admin.getAgileClass(ItemConstants.CLASS_DOCUMENT);

        // get the part object
        IItem part = (IItem) session.getObject(partclass, info.getNewNumber());
        if(part==null)
            throw new AgileDSLException("The part is not created:"+info.getNewNumber());
        if(partclass.getSuperClass().getId().equals(ItemConstants.CLASS_PARTS_CL
ASS)){
            IAutoNumber docNumber = docclass.getAutoNumberSources()[0];
```



```

//create a new document
IItem doc = (IItem) session.createObject(docclass, docNumber);
//add the document into BOM table of the new part.
ITable tab = part.getTable(ItemConstants.TABLE_BOM);
tab.createRow(doc);
obj.logMonitor("Succeed to add document '"+ doc.getName() +"' to assembly
 '"+part.getName()+"");
    }
else
obj.logMonitor("The PX is only applicable for creating part object.");
} catch (Exception e) {
e.printStackTrace();
throw new AgileDSLException(e);
}
}
}

```

確認通知受信者マスク:

- イベント: [部品の作成]
- イベント・ハンドラ: [新規部品へのドキュメントの追加]
- トリガー・タイプ: 事後
- 実行モード: 同期
- 順序: 0
- エラー処理ルール: 続行

対象アイテム・テーブル更新時の通知

このイベントは、変更の「**対象アイテム**」テーブルが更新される都度、通知（通知マスクは「**通知**」ノードで作成済）を自動的に作成し、送信するモデルです。

このイベントは、変更指示クラスの単一のサブクラス、（「オブジェクト・タイプ」フィールドに「変更指示クラス」を設定することで）すべての変更指示クラスのサブクラスのいずれかのオブジェクト、または（「オブジェクト・タイプ」フィールドに変更基本クラスを設定することで）すべての変更基本クラスのいずれかのオブジェクトに対して設定できます。

このケースでは、ECO サブクラス（およびオブジェクト・タイプ）のインスタンスの「**対象アイテム**」テーブルが変更されると（常に自動プロセス）、通知が作成され、名前を付けたユーザーに送信されます。通知の実行ステータスは、ハンドラ・モニターから確認できます。

イベント・マスク: [テーブルの更新 ECO]

- イベント・タイプ: テーブルの更新
- オブジェクト・タイプ: ECO
- テーブル名: 対象アイテム

通知マスク: [ECO対象アイテム変更の通知]

- オブジェクト・タイプ: 変更指示
- 通知マスクのスクリーンショット:

The screenshot shows a configuration window for a notification mask. It has three tabs: 'General Information', 'Where Used', and 'History'. The 'General Information' tab is active. The configuration details are as follows:

- Name:** NotifyEcoAffItemChange
- API Name:** NotifyEcoAffItemChange
- Enabled:** Yes
- Object Type:** Change Orders
- Priority:** Regular
- From:** \$AGILE
- To:** \$APPROVER;\$CHANGEANALYST;\$ORIGINATOR;\$OBSERVER
- Notification Type:** Inbox
- Subject:** Affected Items changed on [Cover Page.Number] by [User Name]
- Body:** Affected Items changed on [Cover Page.Number] by [User Name]
Current Affected Items: [Change.Affected Items (Number, Description)]
- Data:** Access URL
- Buttons:** << Add Data Tag

確認通知受信者マスク: [テーブルの更新 ECO アイテムECO対象アイテム変更の通知]

- イベント: [テーブルの更新 ECO]
- イベント・ハンドラ: [NotifyItemECOAffItemChange]

- トリガー・タイプ: 事後
- 実行モード: 非同期
- 順序: -
- エラー処理ルール: -

場所およびファイル管理

この章のトピック

- Webクライアント通知を設定する 351
- Javaクライアントの通知を設定する 352
- Agile PLMにおけるファイル管理 352

「場所」のウィンドウには、Agile PLM 設定のアプリケーションや様々なサーバーの場所に関する情報が表示されます。

「場所」ウィンドウの「**一般情報**」タブでは、次のプロパティに適切な URL を指定できます。

- Web サーバーURL
- Java クライアント URL
- オンライン・ヘルプ・マニュアル URL

注意 これらのプロパティは、IT スタッフから事前に承認を受けている管理者のみが変更してください。

「**一般情報**」タブに表示されるプロパティには、Agile PLM システムのインストール時に設定された編集できないプロパティもあります。

- ファイル・アプリケーション・サーバーURL
- DB サーバー・ホスト名
- DB サーバー・ユーザー名
- 名前（データベース・サーバーの内部名）

Webクライアント通知を設定する

「優先クライアント」プロパティが Web クライアントとなっている Agile PLM ユーザーは、Web クライアントへのリンクを含む電子メール通知を自動的に受信します。Web クライアントの場所は、「**Web サーバーURL**」の設定で指定できます。

重要 AgileのProduct Cost Management (PCM)、Product Governance & Compliance (PG&C) およびProduct Portfolio Management (PPM) ソリューションは、Webクライアントでのみ作動します。主にこれらのエリアで作業するユーザーは、「優先クライアント」をWebクライアントに設定してください。

WebサーバーURLを変更し、Webクライアント通知を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。

2. [http://Web Server:<port>/Agile/PLMServlet](#)の形式で、WebサーバーURLを入力します。

注意 Web サーバーURL の大文字と小文字は区別されます。
ポートは通常、設定可能です。ここで表示されるポートは、業界標準のポートまたはデフォルト・ポートです。Web サーバーが標準 HTTP ポート（80）を使用している場合、URL ではポートは不要です。

3. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

Javaクライアントの通知を設定する

「優先クライアント」プロパティが Java クライアントとなっている Agile PLM ユーザーは、Java クライアントへのリンクを含む電子メール通知を自動的に受信します。Java クライアントの場所は、「**Java クライアントの URL**」の設定で指定できます。

注意 ユーザーはプロキシ・サーバーを介して Java クライアントにアクセスできますが、Java クライアントの URL はメール通知のために Java クライアントが導入されているアプリケーション・サーバー上にある必要があります。

JavaクライアントURLを変更し、Javaクライアント通知を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。
2. アプリケーション・サーバーに適した Java クライアント URL を入力します。

Oracle Application Server:

[http://<appserver>:8888/JavaClient/start.jsp](#)

WebLogic Application Server:

[http://<appserver>:7001/JavaClient/start.jsp](#)

注意 Java クライアント URL の大文字と小文字は区別されます。

3. 入力が完了したら、「保存」をクリックします。

Agile PLMにおけるファイル管理

「サーバー設定」>「場所」>「ファイル・マネージャ」タブの管理者設定は、添付ファイルおよびその元のファイルやコピーがある場所に関連する重要な設定です。この設定については、352ページの「[Agile PLMにおけるファイル管理](#)」に記載されています。

内部チェックサム・ユーティリティは、不正なファイル処理に対するセキュリティ対策です。リセット権限とチェックサム計算プリファレンスについては、354ページの「[ファイル・チェックサムの処理](#)」で説明されています。

Agileファイル管理サーバー

Agile ファイル・マネージャ（AFM）には、ファイル・サーバーとファイル格納庫の2つのメイン・コンポーネントがあります。Agile にファイルが追加されると、ファイル・サーバーによって内部 Agile ID 番号が割り当てられ、ファイル格納庫に追加されます。オリジナルのファイル名ではファイル格納庫に保存されません。マッピング情報は Agile PLM データベースで保持され、ファイル名はシステム全体の「ファイル名の接頭辞」プリファレンスにより変更されます。

ユーザーが Agile PLM クライアントを介してファイルを要求すると（これには「取出し」、「表示」、「チェックアウト」などの権限が必要です）、この要求はファイル・サーバーにルートされ、ファイルの ID が検索され、ファイル格納庫からファイルが読み取られて、ユーザーに送信されます。

ファイル格納庫

ファイル格納庫には、AFM に保存されたすべての添付ファイルが格納されます。個別サーバーやストレージ・デバイスを Agile ファイル格納庫として指定し、添付ファイルやファイルを保存することをお勧めします。これは、クラスター上の各サーバーが同じファイル格納庫にアクセスする必要があるため、アプリケーション・クラスターリングを利用する場合に特に便利です。

FileLoadの使用と新規ファイルのインデックス

「インデックス」のプロパティが「同期」に設定されており、Agile FileLoad を使用して多数のファイルがファイル管理のファイル格納庫に追加された場合、インデックス・プロセスにはしばらく時間がかかります。このフィールドを「手動」に設定すると、多数のファイルの読み込み速度が増加することが判明しています。または、追加するファイルが大きなドキュメントなどの場合は、「インデックス」プロパティを「スケジュール済」に設定し、インデックス・スケジュールを 3~4 時間に 1 度になるように設定します。ほとんどの新しいファイルが比較的小さい場合は、「インデックス」プロパティを「同期」に設定できます。

分散ファイル管理

グローバル企業は地理的に分散していることが多いため、製品内容を効率的に配布するために複数の AFM サーバーを分散構成で導入できます。分散ファイル管理 (DFM) 設定は、リモートからのファイル管理を有効にします。DFM サーバーの導入は、Agile PLM ファイルを必要な場所の近くに配置することでダウンロード時間を短縮し、ユーザーに使用するファイル・マネージャを設定させることができます。Agile PLM は、多くの DFM サーバーをサポートしています。

「ファイルの複製を最適化」システム全体のプリファレンス

2 つ以上のファイル・マネージャがある場合、このシステム全体のプリファレンス（「プリファレンス」ノード）によって、PLM システムは各ファイルを含むファイル・マネージャを追跡できます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします（これはすべての FM サーバーへの最短 "ping" により決定されます）。「有効」または「無効」に設定します。「無効」は、最適化に関する問題を解決するために設定できます。

分散型環境でAgileサーバーのAutoVueを使用する

Agile の AutoVue を使用する場合は、Agile サーバーの AutoVue を各 DFM サーバーにローカルでインストールする必要があります。ローカルの Viewer サーバーは、DFM として同じコンピュータにインストールできます。ローカル・ユーザーがファイヤウォールの外から Agile PLM にアクセスする場合は、DFM 設定でプロキシを使用することをお勧めします。

分散ファイル・マネージャの機能

Agile のファイル管理サーバーはピアツーピア関係です。ユーザーがファイルを要求すると、この要求はユーザーの設定したファイル・マネージャに直接送信されます（356 ページの「[ファイル・マネージャを設定する](#)」を参照）。ファイルが見つかり、ユーザーに提供されます。ファイルがこの場所に見つからない場合、FM はピア・ファイル・サーバーにファイルの要求を送信します。ファイルを持つピア・ファイル・サーバーがこれを返信します。ローカル・ファイル・サーバーは、これをファイル・セキュリティ・ディレクトリに保存し、ユーザーに提供します。

DFM シナリオは次のようになります。カリフォルニアのサンノゼに AAS がインストールされており、日本の東京には DFM サーバーがインストールされているとします。東京サイトのユーザーが表示する添付ファイルを選択します。東京の DFM は、ファイルがサンノゼにあることを検出し、ファイルをダウンロードし、これを東京のファイル格納庫にコピーした後、View サーバーを介してユーザーにファイルを提供します。別のユーザーが、同じファイルの添付ファイルを選択します。ファイルはすでに東京の DFM 格納庫にあるため、他のユーザーにも直接提供されます。

ユーザーは複数のファイル格納庫や DFM サーバーをインストールできます。複数のファイル格納庫は、「サーバー設定」>「場所」>「ファイル・マネージャ」タブで定義できます。各 Agile PLM ユーザーの「プリファレンス」タブで、このユーザーに対する優先ファイル・サーバーを指定できます。

注意 ご利用の Agile PLM システムが複数の DFM サーバーを使用している場合、ユーザーはログイン時に完全なドメイン URL を使用する必要があります。ユーザーが完全なドメイン URL を使用していない場合は、このユーザーがファイル操作を実行する際に、もう一度ログイン情報を提供するように指示されます。

ファイル管理セキュリティ

ファイル・セキュリティには、サーバー・セキュリティとクライアント・アクセス・セキュリティの 2 つのコンポーネントがあります。また、Java クライアントには「ファイル・チェックサムの処理」と呼ばれるユーティリティがあり、ファイルへの不当なアクセスや、それを修正する方法などをユーザーに警告します。


サーバー・セキュリティ

Agile ファイル格納庫の内容は、認証されていないユーザーによる削除や変更から保護する必要があります。そのため、Agile PLM 管理者にのみアクセスを許可することをお勧めします。Agile ファイル・サーバーがユーザーに対してファイルを読み取るため、この操作は個別ユーザーにより実行される必要はありません。よって、クライアントを介してファイルにアクセスするシステム・ユーザーは、Agile ファイル格納庫やファイル・ディレクトリに対する追加権限や読取り権限を必要としません。

クライアント・アクセス・セキュリティ

Java または Web クライアントからファイルにアクセスすれば、ファイルは安全です。ファイヤウォール内でクライアントが実行されている場合、ファイルはファイヤウォール内で転送されるため、外的侵害からファイルを保護します。クライアントがファイヤウォールの外側からファイルにアクセスする場合は、SSL（セキュリティ・ソケットレイヤ）通信プロトコルがサポートされます。

ファイル・チェックサムの処理

ファイル・チェックサムは、ユーザーが不当にアクセスされたと思われるファイル（添付ファイルやビジネス・オブジェクト）に遭遇した際に、Agile がユーザーに警告を送る機能です。Java クライアントと Web クライアントのどちらの場合も、ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブとファイル・フォルダの「ファイル」タブには「チェックサム・エラーあり」 と呼ばれるフィールドがあります。添付ファイル行のファイルにチェックサム・エラーがあるときは、「チェックサム・エラーあり」フィールドが同じ記号を表示します。


「チェックサム」機能のサポートでは、管理者がシステム全体のプリファレンスと権限マスクを使用してファイルの検証を管理できます。

- 「**チェックサム計算**」システム全体のプリファレンスは、添付ファイルに対してチェックサム計算を有効にするか、無効にするかを設定します。デフォルトは「無効」で、このセキュリティ機能は無効となっています。（このプリファレンスが「無効」となっていると、サーバー速度が向上する場合がありますが、「チェックサム」機能を有効化の方が重要な場合があります。）

- 「ファイル・チェックサムのリセット」権限マスクは、リセット権限に組み込まれています。この権限マスクを割り当てられたすべてのユーザーは、チェックサム問題のあるファイルについての通知を受けます。（この権限マスクはデフォルトの Agile 役割には含まれていません。）すべての既存の役割にこの権限マスクを追加できます。ただし、最初にこの権限を特定の役割に追加するか、または「管理者」や「ユーザー管理者」役割に追加することをお勧めします。

通知は、違反ファイルのファイル名、関連性のあるファイル・フォルダ、このファイルをホストしているファイル・マネージャ、ファイルの場所などの情報を提供します。

ファイル・チェックサムのリセット権限の他に、ファイル・フォルダに読取り権限と変更権限を割り当て、ユーザーがチェックサム・エラーを解決できるようにする必要があります。

チェックサム・エラーはファイル・フォルダ・レベルで解決できます。通知リンクを使用してファイル・フォルダを開き、違反ファイルの行の  をクリックし、ダイアログ・ボックスを使用してエラーを解決します。次の 3 つのオプションのうち、1 つをクリックします。

1. **ファイルを削除する** - Agile システムを通して、添付ファイル自体を削除します。ファイルが破損していたり、DFM を通しても復元不可能と判断される場合は、このオプションを使用します。
2. **無効ファイルのみを削除** - このオプションは、チェックサム問題を解決するために使用します。
 - ファイル・ステータスが「無効」となっているファイルをファイル・マネージャから削除します。
 - チェックサム・フラグをリセットします。
3. **新しいファイルをアップロードして、iFS 格納庫の問題のあるファイルと置き換える** - 現在のファイルを新しいファイルと置き換え、チェックサムをデータベースの新しいファイルの値にリセットします。データベースのファイル ID と格納庫のファイル名は変更されないまま残ります。

ファイル・マネージャを設定する

「サーバー設定」>「場所」>「ファイル・マネージャ」タブで、複数のファイル・マネージャを定義できます。

「ファイル・マネージャ」タブをクリックし、「新規作成」ボタンをクリックするか、またはプロパティ・フィールドのいずれかをダブルクリックすると、次の表の4つのフィールドが表示されます。「詳細」ボタンを押すと、他のフィールドが表示されます。詳細ビューから「標準」ボタンをクリックすると、標準ビューに戻ります。

重要 「ファイル・マネージャ」タブに変更を加えた場合、または新規作成した場合は、変更を有効にするために、ファイル・サーバーを再起動する必要があります。

ドキュメントまたはリリース・ノートで URL が指定されている場合は、指定された完全なドメイン名を含めて、大文字と小文字を正確にコピーします。

フィールド	説明
「ファイル・マネージャの作成」ダイアログ・ボックスのフィールドとファイル・マネージャの「標準」表示	

フィールド	説明
名前	ファイル・マネージャのこのインスタンスの非公式名称です。ユーザーやユーザー管理者にとって覚えやすい説明的な名前を使用してください (特に複数の DFM サーバー設定の場合)。この名前は、各ユーザーの「プリファレンス」タブの「優先ファイル・マネージャ」ドロップダウン・リストに表示されます。
API 名	システム全体で一意的なオブジェクトの識別子で、自動生成できます。API 名は指定できますが、システム生成名を受け入れることで、内部の一貫性が強化されます。
ファイル・マネージャ URL	Agile Webクライアントの接続先となるファイル・サーバーのURL。形式は次のとおりです。 <a href="http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/AttachmentServlet">http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/AttachmentServlet
有効	ファイル管理サーバーを有効化または無効化します。今すぐファイル・マネージャを作成し、後から有効化する場合、 「いいえ」 を選択します。
プライマリ・ファイル・サーバー	ドロップダウン・リストから 「はい」 または 「いいえ」 を選択し、このサーバーをプライマリ・ファイル・サーバーにするかどうかを指定します。プライマリ・ファイル・サーバーは、アプリケーション・サーバーと共存します。つまり、同じ LAN 内にあります。 異なるファイル・マネージャを「プライマリ」として設定すると (つまり他のファイル・マネージャがすでにプライマリとして設定されている状態で、このフィールドを 「はい」 に設定する)、このフィールドは自動的にリセットされ、前のプライマリ・ファイル・サーバーは 「いいえ」 となります。
これらのフィールドを表示または編集するには、 「詳細」 ボタンをクリックします。	
ファイル・マネージャ内部ロケータ	使用するファイル・マネージャまたは他のコンポーネント・アプリケーション (Agile SDK など) のファイル・アプリケーション・サーバーの URL。形式は次のとおりです。 <a href="http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/services/FileServer">http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/services/FileServer
Viewer サーバー URL	Agile Webクライアントの接続先となるViewerサーバー (jVue server) のURL。形式は次のとおりです。 <a href="http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueServlet">http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueServlet
Viewer プロキシの URL	Viewerサーバーがファイル・マネージャと通信するために使用するViewerプロキシ URL。ローカル・ユーザーがファイアウォールの外からAgile PLMにアクセスする場合は、DFM設定でプロキシを使用することをお勧めします。形式は次のとおりです。 <a href="http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueLink">http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueLink
Viewer コンテンツの URL	Viewerアプレットがダウンロードされる場所。形式は次のとおりです。 <a href="http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<appserver_virtual_path>/jVue">http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<appserver_virtual_path>/jVue
サムネイル生成	<p>ファイル・マネージャの「詳細」ダイアログのこのエリアでは、2、3 の指定を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 「Vue Server によるサムネイル生成を有効にする」 チェック・ボックス: 選択するとサムネイル・グラフィックが有効になります。 □ Vue Server ホスト: <Vue Server host> □ Vue Server ポート: <Vue Server port> <p>注意 これらの設定を使用してサムネイル生成を有効にすると、メタファイル生成も有効になります。</p>

新規ファイル・マネージャを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル・マネージャ」タブをクリックします。
3. 「新規作成」をクリックします。「ファイル・マネージャの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 上の表で説明されている「名前」、「API 名」、「ファイル・マネージャ URL」、「プライマリ・ファイル・サーバー」のフィールドに入力します。

注意 Agile の AutoVue を使用している場合は、Agile サーバーの AutoVue を各 DFM サーバーにローカルでインストールする必要があります。

5. サーバーをアクティブにするには、「有効」フィールドを「はい」に設定する必要があります。
6. 「新格納庫の追加」ボタンをクリックし、新しいファイル格納庫を追加および設定します。
7. 新規ファイル・マネージャを定義したら、「OK」をクリックします。
ファイル・マネージャの新規インスタンスを作成したら、これを開き、次のタスクで説明されている他のサーバー定義などを追加できます。

カスタム・ファイル格納庫を作成する

Java クライアントを使用して、リファレンスをカスタム・ファイル格納庫にアップロードする場合は、最初に格納庫を設定する必要があります。カスタム格納庫は「読取り専用」であり、ユーザーによる添付ファイルのチェックアウトや変更はできません。Agile FileLoad を使用してファイルをアップロードするために使用されます（『Agile PLM インポート/エクスポート・ガイド』で説明しています）。

カスタム・ファイル格納庫を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル・マネージャ」タブをクリックします。
3. エントリをダブルクリックし、「ファイル・マネージャ」のダイアログ・ボックスを表示します。
4. + ボタンをクリックし、新セキュリティ・ディレクトリを追加します。
5. 「格納庫タイプ」のフィールドで、「カスタム」を選択します。
6. 「説明」フィールドで、格納庫の説明を入力します。
7. 「基本保存先ディレクトリ」フィールドで、ファイルが保存される主な場所を入力します。次のサブセクションを参照してください。
8. 「ページ・ディレクトリ」フィールドで、ページされたファイルが移動する主な場所を入力します。次のサブセクションを参照してください。
9. 「OK」をクリックします。
10. Agile ファイル・マネージャを再起動します。

「基本保存先ディレクトリ」と「ページ・ディレクトリ」フィールド

「基本保存先ディレクトリ」のデフォルトの場所は `files` です。場所は、Storage Area Network (SAN) などの共有ストレージ・ディレクトリである場合もあります。

重要 マップ・ファイルを指定しないでください。かわりに、次のように実際のコンピュータ名とディレクトリを指定します。

[¥¥fileserver¥files](#)

「ページ・ディレクトリ」フィールドは、ページ（削除）されたファイルが自動的に移動する場所を示します。デフォルトの場所は `agile_home¥files¥purge` です。場所は、Storage Area Network (SAN) などの共有ストレージ・ディレクトリである場合もあります。

重要 マップ・ファイルを指定しないでください。かわりに、次のように実際のコンピュータ名とディレクトリを指定します。

[¥¥fileserver¥files¥purge](#)

ファイル・マネージャの定義を変更する

ファイル・マネージャの定義を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル・マネージャ」タブをクリックします。
3. 変更するファイル・マネージャを含む行をダブルクリックします。「ファイル・マネージャ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

正しいサーバー・フィールドをナビゲートしてください。必要に応じて「詳細」ボタンを使用します。

4. 変更が完了したら、「OK」をクリックします。

ファイル・マネージャの定義またはファイル・サーバーを削除する

ファイル・マネージャの定義を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「場所」をダブルクリックします。「場所」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル・マネージャ」タブをクリックします。
3. 変更するファイル・サーバーを含む行をダブルクリックします。「ファイル・マネージャ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

正しいサーバー・フィールドをナビゲートしてください。必要に応じて「詳細」ボタンを使用します。

4. ファイル・サーバーの定義のフィールドで、サーバーのリファレンスも削除できます。

設定済のサーバーを削除するには、行を選択し、「選択した格納庫の削除」ボタンをクリックします。このサーバーに対して権利がある場合は、削除されます。

5. 完了したら、「OK」をクリックします。

ユーザーの優先ファイル・マネージャを設定する

ご利用の Agile PLM システムが分散ファイル管理を使用している場合、各ユーザーは使用する優先ファイル・マネージャを指定する必要があります。パフォーマンスのためには、ユーザーと同じ場所にあるファイル・サーバーを指定してください。たとえば、ユーザーがアメリカにいる場合、中国ではなく、アメリカに位置するファイル・マネージャを選択してください。

Javaクライアントでユーザーの優先ファイル・マネージャを設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ユーザー設定」で「ユーザー」をダブルクリックします。「ユーザー」ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。

3. 「プリファレンス」タブをクリックします。
4. 「優先ファイル・マネージャ」で、リストからローカル・ファイル・マネージャを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

Webクライアントでユーザーの優先ファイル・マネージャを設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツールおよび設定」>「管理」>「ユーザー」の順にクリックします。「ユーザー」ページが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をクリックします。そのユーザーのページが表示されます。
3. 「プリファレンス」タブをクリックします。
4. 「編集」をクリックします。フィールドが編集可能になります。
5. 「優先ファイル・マネージャ」で、リストからローカル・ファイル・サーバーを選択します。
6. 「保存」をクリックします。

旧バージョンのファイルをパージする

Agile PLMシステムで自動パージが有効化されている場合（267ページの「[Viewerとファイル](#)」を参照）、Agile ファイル・マネージャは旧バージョンのファイルを自動的にパージします。バックグラウンド・スレッドは毎日 6:00 am（現地時間）に始まり、どのファイルがパージされるかを決定します。対象のファイルがある場合は、パージされたファイルの場所に日付と時刻で命名されたフォルダが作成され、ファイルがこのフォルダに移動します。パージする必要があるファイルがない場合、フォルダは作成されません。ハードコードされた時間とパージが実際に実行される時間のデフォルトの間隔は変更できます。この間隔は「添付ファイルのページ・タスク」で設定します。388ページの「[タスクの設定](#)」を参照してください。

注意 Agile ファイル・マネージャは、パージされたファイルをシステムから完全に削除することはありません。このタスクは、会社の IT スタッフが実行する必要があります。

添付ファイルのページ・タスクの使用ケース

添付ファイルのページを設定した時間中にサーバーに障害が発生した場合、このタスクはその日に実行されません。たとえば、毎日 6:00 am にタスクが実行される場合、サーバーが 5:00 am から 9:00 am までシャットダウンすると、タスクは実行されません。これは、「タスクのルックバック・ウィンドウ」が 120 分に設定されており、6:00 am から 9:00 am まではこの時間を超えるためです。対応策として、「タスクのルックバック・ウィンドウ」を 180 分より大きい値（この例では 200 分など）に一時的に設定します。これによって、サーバーが再起動したときにタスクが実行されます。

通常、イベントがスキップされないように、「タスクのルックバック・ウィンドウ」（「[サーバー設定](#)」>「[タスクの設定](#)」><任意のタスク>>「[一般情報](#)」ページ）には、「タスクの間隔」の値より大きい値を常に設定する必要があります。

データベース

この章のトピック

- データベース設定の構成 361
- データベースのプロパティ 361

データベース設定の構成

「データベース」ノードでは、Agile PLM のシステム全体のデータベース設定を表示および設定できます。

データベースの設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「データベース」をダブルクリックします。「データベース」ウィンドウが表示されます。
2. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
3. 入力完了したら、「保存」をクリックします。
4. Agile アプリケーション・サーバーを再起動して、変更を有効にします。

注意 「通知の有効化」設定を変更した場合は、すぐに有効となります。その他の「データベース」設定を変更した場合は、新しい設定を有効にするために、Agileアプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。Agileアプリケーション・サーバーを再起動すると、アクティブなユーザーの接続はすべて切断されます。

データベースのプロパティ

次の表は、「データベース」プロパティを表示しています。

プロパティ	説明	デフォルト
ディスカバリ権限	「ディスカバリ権限」を有効にすると、Agile PLM システムのすべての「ディスカバリ」権限マスクが機能します。 無効にすると、すべての「ディスカバリ」権限マスクと「ディスカバリ」に関連するスマートルールが無効になります。 「ディスカバリ」機能を使用していない場合は、このプロパティを「無効」に設定すると、システムの処理速度が向上します。	有効
GUID	会社の Agile PLM データベースに固有の ID。このプロパティは編集できません。	(GUID)
名前	メインの Agile PLM データベースの名前。ノードの名前は、29 文字以内で変更できます。	Agile データベース

プロパティ	説明	デフォルト
通知の有効化	電子メール通知をユーザーに送信するかどうかを設定します。 このプロパティが無効 (=「いいえ」) になっている場合、その他の電子メール通知の設定はすべて無視されます。 この設定は、 イベント管理 に関して特に重要です。「通知の有効化」が「いいえ」に設定されていると、イベント・ベースのすべての通知はアクティブになりません。	いいえ
スキーマ	データベースにログインするために使用するデータベースの「ユーザー名」、すなわちスキーマの名前。このプロパティは編集できません。	(スキーマ名)
サーバー	現在の Agile PLM データベース・サーバーの名前。このプロパティは編集できません。	(サーバー名)
DB バージョン	使用している Agile PLM データベースのバージョン。このプロパティは編集できません。	(DB バージョン)
メール送信元のドメイン	電子メール通知のドメイン名 (例 :mydomain.com)。	(なし)
メール送信元のユーザー	Agile PLM電子メール通知で使用する送信者の電子メール・アドレス。この値は有効な電子メール・アドレスである必要があります (例: AgileAdmin@mydomain.com)。	(なし)
メール・サーバー外部	外部電子メール・サーバーを実行するコンピュータの名前。	(なし)
メール・サーバー内部	内部電子メール・サーバーを実行するコンピュータの名前。	(なし)
顧客 ID	会社に固有の ID。このプロパティは編集できません。	(ID 番号)
年サイクル - 開始月	会社の会計年度における最初の月。	(インストール時に設定)
年サイクル - 開始日	会社の会計年度における最初の日。	(インストール時に設定)

この章のトピック

▪ Agile PLMでLDAPに対してWebLogic Serverを設定する	363
▪ LDAPディレクトリでユーザーを作成する	369
▪ 拡張されたLDAP	369
▪ LDAPとAgile PLMを同期化する	370
▪ LDAP管理のユーザー・プロパティ	370
▪ Agile LDAPの設定	371

多くの企業では、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) システムと専用の LDAP サーバーを使用してユーザー・アカウントを作成しています。「サーバー設定」ノード・フォルダには、「LDAP」ノードが追加されました。「LDAP」ノードを開くと、「LDAP コンフィグレーション・エディタ」が表示されます。管理者は、サーバーを再起動せずに、LDAP 設定（特に検索フィルタ）の変更、その結果のプレビュー、および変更内容の保存を実行できます。

注意 LDAPノードは、デフォルトの管理者ツリーに表示されることはありません。自社でLDAPシステムを使用しない場合、ノードは必要ありません。ノードは「適用先」機能を介して表示されます。231ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。

Agile PLM は、Agile Directory Server Integration Module を介して、LDAP 認証をサポートしています。Agile は、既存のディレクトリ・サーバーと統合して、ユーザーを 1 箇所で管理できます。サポートされている次のディレクトリ・サーバーの場合、この方法は Agile PLM に完全に統合できます。

- Oracle Internet Directory Server
- Microsoft Active Directory Server
- Sun Java System Directory Server

インストール時に、ディレクトリ・サーバー（データベースではなく）を介したユーザー・アカウントの管理を選択した場合は、新規ユーザー（サブライヤ・ユーザーを除く）の追加や特定のユーザー属性の設定は、そのディレクトリ・サーバーを介してのみ実行されます。サブライヤ・ユーザーは、データベースによって認証され、サブライヤ管理者によって管理されます。

注意 Agile管理者には、使用するPLMシステムとシングル・サインオン（SSO）機能を統合する機能があります。SSOを設定してPLMシステムに導入した場合、そのシステムにサインイン（たとえば、企業ポータル経由でサインイン）したユーザーには、ログイン・ダイアログでプロンプトが再度表示されません（417ページの「[付録A「シングル・サインオンの設定」](#)」を参照してください）。

Agile PLMでLDAPに対してWebLogic Serverを設定する

Oracle Application Server は Agile 認証の LDAP サーバーをサポートしています。ただし、Oracle WebLogic Server では、LDAP サーバーをサポートするために、次に説明するタスクでさらに設定を行う必要があります。

Oracle Internet DirectoryでWebLogicを設定する

Oracle Internet Directory ServerでWebLogicを設定する手順は、次のとおりです。

1. 次の URL を入力して、管理コンソール・ページを開きます。
http://localhost:<port_number>/console
2. 左ウィンドウで、「ロックして編集」を選択します。
3. 左ウィンドウで、「agileDomain」>「セキュリティ・レルム」>「AgileRealm」>「プロバイダ」>「認証」の順に選択します。
4. 「新規」をクリックし、OID 認証プロバイダの名前（例: OracleInternetDirectory）を入力します。次に、「LDAPAuthenticator」を選択して「OK」をクリックします。
5. 新規に作成した OracleInternetDirectory 認証プロバイダをクリックし、「制御フラグ」の値を「SUFFICIENT」に変更して、「保存」をクリックします。
6. 現在のページから特定のプロバイダを選択し、次のように項目に値を入力します。
 - ユーザー名属性: cn
 - ログイン例外の原因を伝播: ボックスを選択
 - プリンシパル: cn=orcladmin
 - ホスト: <OID が実行されているマシンの名前>
 - ユーザー・オブジェクト・クラス: person
 - すべてのユーザーのフィルタ: (ユーザー・フィルタ名を指定するか、空白の objectclass=person のまま)
 - ユーザー検索スコープ: Subtree
 - すべてのグループのフィルタ: <グループ・フィルタ名を指定するか、空白のまま>
 - 静的メンバーDN 属性: uniquemember
 - 名前指定によるグループ・フィルタ: (& (cn=%g) (objectclass=groupofuniquenames))
 - メンバーDN 指定による静的グループ DN フィルタ: (&(uniquemember=%M) (objectclass=groupofuniquenames))
 - 取得したユーザー名をプリンシパルとして使用する: (ボックスを選択)
 - 結果タイム・リミット: 0
 - キャッシュ TTL: 60
 - 動的グループ名属性: uniquemember
 - 資格証明: <OID ログイン用に指定されたパスワード>
 - 資格証明の確認: <OID ログイン用に指定されたパスワード>
 - グループ検索スコープ: subtree
 - グループ・ベース DN: cn=Groups,dc=agile,dc=agilesoft,dc=com

- 動的グループ・オブジェクト・クラス: (空白)
 - 名前指定によるユーザー・フィルタ: (&(cn=%u)(objectclass=person))
 - キャッシュ・サイズ: 32
 - 動的メンバーURL 属性: (labeledurl)
 - SSL の有効化: (空白)
 - キャッシュの有効化: (ボックスを選択)
 - 接続再試行制限: 1
 - 接続タイムアウト: 0
 - パラレル接続遅延: 0
 - ユーザー動的グループ DN 属性: cn
 - 静的グループ名属性: cn
 - ユーザー・ベース DN: cn=Users,dc=agile,dc=agilesoft,dc=com
 - 照会先を追跡する: (ボックスを選択)
 - ポート: 389
 - 重複したメンバーシップの無視: (ボックスの選択を解除)
 - 静的グループ・オブジェクト・クラス: groupofuniqueNames
 - グループ・メンバーシップ検索: unlimited
 - グループ・メンバーシップ検索の最大レベル: 0
1. 「保存」をクリックします。
 2. 左ウィンドウで「変更のアクティブ化」ボタンをクリックし、すべての変更をアクティブ化します。
 3. コンソールからログアウトして、WebLogic Server を再起動し、すべての管理対象サーバー（クラスタ内にインストールされている場合）を再起動すると、すべての変更が正常にアクティブ化します。

Sun Java System Directory ServerでWebLogicを設定する

Sun Java System Directory ServerでWebLogicを設定する手順は、次のとおりです。

1. 次の URL を入力して、管理コンソール・ページを開きます。
http://localhost:<port_number>/console
2. 左ウィンドウで、「ロックして編集」を選択します。
3. 左ウィンドウで、「agileDomain」>「セキュリティ・レルム」>「AgileRealm」>「プロバイダ」>「認証」の順に選択します。
4. 「新規」をクリックし、iPlanet 認証プロバイダの名前（例: Iplanet）を入力します。次に「iPlanet Authenticator」を選択して「OK」をクリックします。
5. 新規に作成した Iplanet 認証プロバイダをクリックし、「制御フラグ」の値を「SUFFICIENT」に変更して、「保存」をクリックします。

6. 現在のページから特定のプロバイダを選択し、次のように項目に値を入力します。
- ユーザー名属性: uid
 - ホスト: <iPlanet サーバーが実行されているマシンの名前>
 - プリンシパル: <uid=admin,ou=administrators,ou=topologymanagement,o=netscaperoot >
 - ユーザー・オブジェクト・クラス: Person
 - ユーザー検索スコープ: subtree
 - 静的メンバーDN 属性: uniquemember
 - 名前指定によるグループ・フィルタ:
(|(&(cn=%g)(objectclass=groupofUniqueNames))(&(cn=%g)(objectclass=groupOfURLs))
 - メンバーDN 指定による静的グループ DN フィルタ:
(&(uniquemember=%M)(objectclass=groupofuniquenames))
 - 結果タイム・リミット: 0
 - キャッシュ TTL: 60
 - 動的グループ名属性: cn
 - 資格証明: <iPlanet での認証用に指定されたパスワード>
 - 資格証明の確認: <パスワードを確認>
 - グループ検索スコープ: subtree
 - グループ・ベース DN: ou=agile, dc=agile,dc=agilesoft,dc=com
 - 動的グループ・オブジェクト・クラス: groupofURLs
 - 名前指定によるユーザー・フィルタ: (&(uid=%u)(objectclass=person))
 - 動的メンバーURL 属性: memberURL
 - キャッシュ・サイズ: 32
 - キャッシュの有効化: (チェック・ボックスを選択)
 - 接続再試行制限: 1
 - 接続タイムアウト: 0
 - パラレル接続遅延: 0
 - ユーザー動的グループ DN 属性: <動的グループを使用している場合に指定>
 - 静的グループ名属性: cn
 - ユーザー・ベース DN: ou=agile, dc=agile,dc=agilesoft,dc=com
 - 照会先を追跡する: (チェック・ボックスを選択)
 - ポート: 389

- 静的グループ・オブジェクト・クラス: groupofuniquenames
 - グループ・メンバーシップ検索: unlimited
 - グループ・メンバーシップ検索の最大レベル: 0
1. 「保存」をクリックします。
 2. 左ウィンドウで「変更のアクティブ化」ボタンをクリックし、すべての変更をアクティブ化します。
 3. コンソールからログアウトして、WebLogic Server を再起動し、すべての管理対象サーバー（クラスタ内にインストールされている場合）を再起動すると、すべての変更が正常にアクティブ化します。

Microsoft Active Directory ServerでWebLogicを設定する

Microsoft Active Directory ServerでWebLogicを設定する手順は、次のとおりです。

1. 次の URL を入力して、管理コンソール・ページを開きます。
http://localhost:<port_number>/console
2. 左ウィンドウで、「ロックして編集」を選択します。
3. 左ウィンドウで、「agileDomain」>「セキュリティ・レルム」>「AgileRealm」>「プロバイダ」>「認証」の順に選択します。
4. 「新規」をクリックし、ADS 認証プロバイダの名前（例: ActiveDirectoryServer）を入力します。次に「ActiveDirectoryAuthenticator」を選択して「OK」をクリックします。
5. 新規に作成した ActiveDirectoryServer 認証プロバイダをクリックし、「制御フラグ」の値を「SUFFICIENT」に変更して、「保存」をクリックします。
6. 現在のページから特定のプロバイダを選択し、次のように項目に値を入力します。
 - ユーザー名属性: sAMAccountName
 - プリンシパル: Administrator@enterprise.uab.edu
 - ホスト: 10.176.138.35
 - すべてのユーザーのフィルタ: (objectclass=person)
 - ユーザー検索スコープ: subtree
 - すべてのグループのフィルタ: (空白のまま)
 - 静的メンバーDN 属性: member
 - 名前指定によるグループ・フィルタ: (空白のまま)
 - 照会先に匿名でバインドする: (ボックスの選択を解除)
 - メンバーDN 指定による静的グループ DN フィルタ: (&(member=%M)(objectclass=group))
 - 結果タイム・リミット: 0
 - 資格証明: <ADS での認証用に指定されたパスワード>
 - 資格証明の確認: <ADS での認証用に指定されたパスワード>
 - グループ検索スコープ: subtree

- キャッシュ・サイズ: 32
 - 名前指定によるユーザー・フィルタ: (空白のまま)
 - 動的メンバーURL 属性: (空白のまま)
 - 接続再試行制限: 1
 - 接続タイムアウト: 0
 - ユーザー動的グループ DN 属性: (空白のまま)
 - 静的グループ名属性: cn
 - ユーザー・ベース DN: OU=agile,DC=enterprise,DC=uab,DC=edu
 - グループ・メンバーシップ・ルックアップでトークン・グループを使用する: (ボックスの選択を解除)
 - ポート: 389
 - 照会先を追跡する: (ボックスを選択)
 - ログイン例外の原因を伝播: (ボックスの選択を解除)
 - ユーザー・オブジェクト・クラス: user
 - キャッシュ TTL: 60
 - 取得したユーザー名をプリンシパルとして使用する: (ボックスの選択を解除)
 - 動的グループ名属性: (フィールドは空白のまま)
 - グループ・ベース DN: OU=agile,DC=enterprise,DC=uab,DC=edu
 - 動的グループ・オブジェクト・クラス: (フィールドは空白のまま)
 - SSL の有効化: (ボックスの選択を解除)
 - キャッシュの有効化: (ボックスを選択)
 - パラレル接続遅延: 0
 - 重複したメンバーシップの無視: (ボックスの選択を解除)
 - 静的グループ・オブジェクト・クラス: group
 - グループ・メンバーシップ検索: unlimited
 - グループ・メンバーシップ検索の最大レベル: 0
1. 「保存」をクリックします。
 2. 左ウィンドウで「変更のアクティブ化」ボタンをクリックし、すべての変更をアクティブ化します。
 3. コンソールからログアウトして、WebLogic Server を再起動し、すべての管理対象サーバー（クラスタ内にインストールされている場合）を再起動すると、すべての変更が正常にアクティブ化します。

LDAPディレクトリでユーザーを作成する

Agile PLM システム・ユーザーを作成する場合は、次のオプションがあります。

- **すべてのユーザーを Agile PLM で作成する** - この方法は、Agile 以外のアプリケーション用に LDAP を使用している場合でも有効です。
- **すべてのユーザー・オブジェクトを LDAP システムを使用して作成する** - 基本的なユーザー・データ (ユーザーID、氏名、パスワード、電子メール・アドレスなど) を Agile PLM にインポートしてから、各ユーザーのプロファイルを完成させます。
- **2つの方法を組み合わせる** - Agile PLM を使用するように割り当てられている社員用には LDAP を使用し、社員以外のユーザー (サプライヤ・ユーザーなど) は Agile PLM システムで作成できます。その場合、LDAP アカウントはインポート後に検証されるため、Agile PLM 内でのユーザー・データの調整に伴うリスクはありません。

注意 Agile PLM と LDAP の両方で通常の Agile PLM ユーザー (つまり「パワー」または「同時接続」ユーザー) は作成できません。2つの方法を組み合わせる唯一の方法は、Agile PLM を使用して「制限付き」ユーザーを作成することです。

注意 具体的には、(特に WebSphere 環境で) 同じユーザーID (ユーザー名) を使用して複数のユーザーを作成しないでください。WebSphere では組込み LDAP アダプタを使用してユーザーを認証するため、そのアダプタでは複数のユーザーが同じ ID を持つことが許可されません。

Agile PLM で (制限付き) サプライヤ・ユーザーの役割で作成されたユーザーは、Agile PLM データベースを介して認証されます。

複数のLDAPユーザー・リポジトリを設定する

特定のディレクトリ・サーバーに対して設定手順を繰り返すことで、セキュリティ・ドメインに複数の LDAP ユーザー・リポジトリを設定できます。

AgileAuthenticator 認証プロバイダは削除しないでください。これは、Agile データベースと照合してユーザーを認証する際に使用されます。AgileAuthenticator の「管理フラグ」は「オプション」のままにする必要があります。リストに認証プロバイダ (Sun Java System、Microsoft Active Directory など) を追加した場合、AgileAuthenticator は、リスト内で最初の認証プロバイダである必要があります。

拡張されたLDAP

LDAP情報を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「LDAP」ノードをダブルクリックします。「LDAP コンフィグレーション・エディタ」ウィンドウが表示されます。
2. 「LDAP 設定」タブで、入力する LDAP サーバーを指定する行をダブルクリックします。ここから、新しい LDAP サーバー設定を作成することもできます。
「LDAP の編集」ダイアログ・ボックスに、選択した LDAP サーバーの内容が表示され、変更できます。
3. 変更の入力が完了したら、「OK」をクリックします。
4. 選択した行 (変更した LDAP サーバーの行) で、「プレビュー」ボタンをクリックします。「プレビュー結果」タブでは、LDAP クエリの結果をプレビューできます。

「プレビュー」をクリックすると、サーバーはLDAP 設定を検証します。エラー（クラスタ内の複数 LDAP サーバー間で一貫しないデータ、または複数のサーバーの重複したユーザー、または構文エラーなど）が発生した場合、サーバーは例外をクライアントに返し、ポップアップ・ウィンドウにエラーを表示します。

- LDAP 設定にクラスタ化された LDAP サーバーが含まれている場合、プレビューには1つの LDAP サーバーのデータのみが表示されます。これは、データはクラスタ内で等しいためです。
 - LDAP 設定に複数の LDAP サーバーが含まれている場合、プレビューには、すべての LDAP サーバーの集合データが表示されます。
5. 「保存」をクリックして、変更内容を LDAP 設定に保存します。ここでも、サーバーは LDAP 設定を検証します。エラーが検出された場合は、エラー・メッセージが表示されます。例外が発生すると、「保存」操作を完了できなくなります。

LDAPとAgile PLMを同期化する

Java クライアントでは、「ユーザー」ノード・ツールバーの「LDAP ディレクトリからのユーザーの更新」ボタンによって、LDAP で作成されたユーザーが Agile PLM システムに統合されます。Web クライアントで LDAP を使用する場合は、同じ目的で「詳細」ボタン・メニュー・オプション（「ツールおよび設定」>「アドレス帳」>「ユーザー」）の下にある「ユーザー」ノードで、ディレクトリ・サーバーから更新するボタンが有効になります。

ユーザー・アカウントを Agile PLM にインポートする方法は、ご利用の LDAP ドキュメントを参照してください。

「更新」（または「ディレクトリ・サーバーから更新」）をクリックした後は、Agile PLM で使用するアカウントが自動的に更新され、必要に応じて Agile PLM ユーザーのプロパティを作成して、各ユーザー・オブジェクトを完成させます。

Agile PLM ユーザーと LDAP で作成されたユーザー・アカウントの同期化は、Agile PLM ユーザーのログイン ID が LDAP ユーザー・アカウントのログイン ID と同等かどうかで決まります。Agile PLM システムのアップグレード時には、Agile PLM データベースを介したユーザー認証を前提にしています。

ユーザーを LDAP と Agile PLM の間で同期化するには別の方法もあります。Bin ディレクトリには、migrateUserToDB.bat/sh というスクリプトが含まれており、手動またはスケジュールにより実行できます。このスクリプトは、Java クライアントや Web クライアントの「更新」（または「ディレクトリ・サーバーから更新」）ボタンと同じ役割を果たします。

重要 スクリプトを実行した後は、アプリケーション・サーバーを再起動してください。

LDAP管理のユーザー・プロパティ

会社がユーザー・アカウントに対して LDAP を使用している場合、次のプロパティは常に LDAP により管理されます。これらは Agile PLM では編集できません。

- ユーザーID
- 名
- 姓
- パスワード
- 電子メール・アドレス

- タイトル
- 勤務先電話
- 携帯電話番号
- ファックス番号

注意 Agile PLM ユーザーの作成や管理に LDAP ディレクトリが使用されている場合、デフォルトでは、ユーザーは個別の承認用パスワードを必要としません。ただし、ユーザーについて「**承認にログイン・パスワードを使用**」プロパティのチェックを解除し、承認用パスワードも入力できます。

LDAP サーバーで「アカウント規約」機能を設定できます。詳細は、LDAP システムのドキュメントを参照してください。

Agile LDAPの設定

Agile PLM と自社の LDAP システム間の統合を設定するには、LDAP コンフィグレーション・エディタ（「サーバー設定」>「LDAP」ノード）を使用します。

「**新規 LDAP**」アイコンをクリックし、プロパティ（定義は後述）を入力します。既存の設定（テーブル内の行）をダブルクリックすると、「LDAP の編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。既存の設定を削除するには、削除する設定の行を選択し、「**LDAP の削除**」アイコンをクリックして、プロンプトに従います。

また、複数のパラメータ・セットを定義して、複数のディレクトリ・サーバーとの統合を設定できます。

重要 LDAPコンフィグレーション・エディタのすべての設定は、LDAP管理者に確認してください。

ディレクトリ・サービスの接続パラメータ

接続パラメータには、ホスト名、ポート、プロトコル、アカウント名およびフィルタなどがあります。アカウント名は、同期する際にディレクトリ・サーバーへの接続に使用されるため、適切な権限が必要です。フィルタは、ディレクトリ・サーバーで Agile ユーザーとして定義されたユーザーのサブセットのみを選択するために使用されます。

定義済設定パラメータ

次の表では、「新規 LDAP」設定ページのプロパティについて説明します。


フィールド名	説明
ID	LDAP サーバーを識別する一意の文字列。この文字列は 30 文字未満にする必要があります。また、一旦使用すると変更できません。
説明	サーバー設定に関する情報。
エージェント	認証に使用するディレクトリ・サーバー。有効な値は、SunONEDirectory または ActiveDirectory です。
URL	認証エージェントの URL。
ドメイン	Active Directory Server を<username>@<auth.domain.name>のフォーマットで使用する場合は認証文字列。
ユーザー名	ユーザー名（LDAP 管理者である必要はありません）。

フィールド名	説明
パスワード	ユーザーの暗号化パスワード。
ユーザー・パス	すべての Agile ユーザーが含まれるツリー。このプロパティは、ディレクトリ・ツリー構造のルートに最も近いノードに設定してください。このノードから始まるサブツリーに含まれないユーザーは、Agile システムを使用できません。
検索範囲	「ユーザー・パス」ノードで Agile ユーザーを検索する範囲。有効な値は、ONE_LEVEL または SUB_TREE です。このプロパティを ONE_LEVEL に設定するのは、組織内のすべてのユーザーが「ユーザー・パス」ノードの直下にいる場合のみです。
検索フィルタ	「ユーザー・パス」ノードで Agile ユーザーを検索するフィルタ。これは、<auth.ldap.user.path>と<auth.ldap.user.search.scope>で定義された範囲内で、すべての Agile ユーザーと一致する有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。このフィルタに一致しないユーザーは、Agile システムでは無効なユーザーとしてみなされます。有効な LDAP 検索フィルタは、括弧で囲む必要があります。
メカニズム	ディレクトリ・サーバーでサポートされている認証メカニズム。有効な値は「simple」または「strong」です。
グループ・パス	このプロパティは、ディレクトリ・ツリー構造のルートに最も近いノードに設定してください。これが、グループ検索を開始するパスになります。
グループ範囲	「検索範囲」と同様に、有効な値は、ONE_LEVEL と SUB_TREE です。
グループ・フィルタ	これは、Agile で使用予定のすべてのユーザーが含まれる LDAP グループと一致する、有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。 グループ・フィルタを使用して LDAP サーバーからすべてのユーザーとユーザー・グループを同期化する場合は、「ユーザー・パス」と「検索範囲」を検索フィルタに対して設定する必要があります。 ユーザー・グループの同期化機能を有効化します。ユーザーのタブでは、LDAP に同期化しているユーザー・グループに対してユーザーを削除または追加できません。
グループ・メンバシップ	現在のユーザーが指定のグループ（「グループ・フィルタ」で定義）に属するかどうかを確認する認証に使用します。「%M」を使用して、現在のログイン・ユーザーDNを指定します。
ダイナミック・グループ・フィルタ	これは、Agile で使用予定のすべてのユーザーが含まれる LDAP ダイナミック・グループと一致する、有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。
フェイル・オーバー・リンク	プライマリ LDAP サーバーが失敗したときに、システムがリスト順にアクセスを試行する代替 LDAP サーバーを指し示すリンク。
失敗時の試行	LDAP サーバーが失敗したときに、システムが他のサーバーにアクセスを試行する最大回数を指定します。

フィールド名	説明
LDAP に Agile ユーザーが見つからない場合は無効化	有効な値は、TRUE または FALSE です。 TRUE に設定し、管理者が「migrateUsersToDB -p」コマンドをすると、LDAP から削除されたり、現在の LDAP 検索パス内に存在しないアクティブな Agile ユーザーは無効化されます。

LDAP属性のマッピング

Agile属性をLDAPシステム属性にマップする手順は、次のとおりです。

- 「ユーザー - LDAP 属性マッピング」フィールドまたは「ユーザー・グループ - LDAP 属性マッピング」フィールドで、「追加」をクリックして、新しいエントリを作成します。
- 「新規属性マッピング」ダイアログ・ボックスで、ドロップダウン・リストから「Agile ID」（つまり、属性）を選択します。
- 「LDAP ID」フィールドで、選択した Agile 属性にマップする、LDAP システムの属性の名前を入力します。

たとえば、「日付 09」を「終了日」という属性にマップできます。

複数のディレクトリ・サーバーのサポート

複数のディレクトリ・サーバーを指定することも可能です。これは、Agile にアクセスするユーザーが複数のドメインにいる場合や、フェイルオーバー・サポートを提供するバックアップ・ディレクトリ・サーバーがある場合に役立ちます。

「LDAP の編集」ページで、サポートが必要なディレクトリの数に応じて 1 つ以上のノードを作成します。「プレビュー結果」タブをクリックすると、最初のノードまたはサーバー上のすべてのユーザーが表示されます。ここで、このサーバーのサービスを停止すると、「**プレビュー結果**」には、バックアップ・サーバーまたはセカンダリのサーバーのユーザーが表示されます。（サービスはプライマリ・サーバーに復元してください。）

バックアップまたはセカンダリのディレクトリ・サーバーが設定されている場合、プライマリ・サーバーへのアクセスに失敗すると、統合モジュールはバックアップ・サーバーへの接続を試行します。

設定スクリプト

Agile のインストール中には、1 つのディレクトリ・サーバーを設定できます。インストール後は、追加のディレクトリ・サーバーを手動で設定できます。Agile には、インストール後に設定を有効にする次のスクリプトが用意されています。これらのスクリプトは、`agile_home¥agileDomain¥bin` ディレクトリにあります。

- `encryptpwd - ldapconfig.xml` では、ディレクトリ・サーバー・ユーザーのパスワードが暗号化されている必要があります。このスクリプトは、既存のユーザー・パスワードに基づいて暗号化されたパスワードを生成します。
- `checkLDAPConfig` - LDAP 設定のチェックに使用します。検出されたエラーはすべて修正する必要があります。
- `migrateUserstoDB` - ユーザーを LDAP から Agile データベースに移行するために使用します。このスクリプトによって、既存のユーザーを更新し、データベースに新規ユーザーを作成できます。

ユーザーとユーザー・グループを同期化する

この機能は iPlanet サーバーに適用されます。

- LDAP ユーザー・グループとグループ・メンバーを Agile システムに同期化できます。ユーザー・グループ内の静的ユーザーを同期化する場合は<group-filter>を使用し、ダイナミック・グループ・ユーザーを同期化する場合は<dynamic-group-filter>を使用します。この機能を有効にするには、**agile.properties** ファイルで **auth.ldap.group** が有効 (True に設定) であることを確認してください。

注意	ユーザー・グループの同期化機能が有効な場合は、同期化されたユーザー・グループの「ユーザー」タブ (つまり、ユーザーが LDAP を介してユーザー・グループに追加されたタブ) で、ユーザーを削除したり追加することはできません。
-----------	--

システム全体のプリファレンス

この章のトピック

- プリファレンスの変更 375
- デフォルトのシステム全体のプリファレンス 375
- プリファレンスの詳細（一部） 381
- 「言語」タブ 383

プリファレンスの変更

「プリファレンス」ノードでは、Agile PLM のシステム全体のプリファレンスおよび言語を表示し、設定できます。

注意 システム全体のサーバー設定である「プリファレンス」ノードは、各ユーザー・オブジェクトのユーザー・プリファレンス（「ユーザー設定」>「ユーザー」ノード>[任意のユーザー]>「プリファレンス」タブ）と関係ありません。一部のユーザー・プリファレンスはシステムに関連していますが、これらも「プリファレンス」ノードの設定とは関係ありません。

プリファレンス設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「プリファレンス」をダブルクリックします。「プリファレンス」ウィンドウが表示されます。
2. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
3. 入力完了したら、「保存」をクリックします。

デフォルトのシステム全体のプリファレンス

次の表は、Agile PLM プリファレンスを表示し、説明しています。アルファベット順に表示しています。

プリファレンス名	説明	デフォルト
ユーザーのデフォルト拠点 を新規アイテムに追加	拠点情報を利用する企業は、ユーザーがアイテムを作成するとユーザーのデフォルト拠点が自動的に追加されるようにこのプリファレンスを設定できます。	いいえ
Agile ドライブ	ユーザーが作成したAgileドライブによる、AgileオブジェクトおよびAgile外部のドキュメントへのアクセスを管理します。詳細は、381ページの「 Agileドライブ 」を参照してください。	無効

プリファレンス名	説明	デフォルト
Agile スクリプト・ログ・レベル	Agile システムでのログ機能のレベルを設定します。実働システムは、低いレベル（「オフ」、「エラー」、「警告」など）に設定できます。開発システムは、高いレベル（「すべて」、「デバッグ」、「致命的」など）に設定できます。設定は、「すべて」、「デバッグ」、「エラー」、「致命的」、「情報」、「オフ」、または「警告」です。	オフ
プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする	会社が購入したライセンス・キーで許可されている内容に基づいて、ユーザーが詳細ファイルのアップロードやその他の機能を許可するJavaアプレットにアクセスできるようにするかどうかを管理します。設定は「いいえ」または「はい」です。395ページおよび381ページの「 プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする 」を参照してください。	いいえ
パスワードのリセット許可	パスワードを忘れたWebクライアント・ユーザーがログイン画面のリンクをクリックすると、自動的に新しいパスワードを取得できるかどうかを選択します。381ページの「 パスワードのリセット許可 」を参照してください。	いいえ
セキュリティ保護されていないファイルを許可する	Agile PLM による、セキュリティ保護されていない URL へのポインタの管理を許可します。つまり、添付ファイルが URL となることを許可します（ファイルとは対照的に）。「はい」を選択すると、参照先 URL のチェックインとチェックアウトが無効であっても、URL へのポインタは Agile アプリケーション・サーバーのコンピュータに保存されます。	はい
チェックサム計算	添付ファイルのチェックサム計算を有効化するか、または無効化するかを設定します。設定は「有効」または「無効」です。354ページの「 ファイル・チェックサムの処理 」を参照してください。	無効
コンテンツ・サービスの最大再試行数	転送オブジェクトが最初に送信を試行した後に、失敗した送信先に対してそれ以上送信の再試行ができなくなるまでの、再試行の回数を決定します。382ページの「 コンテンツ・サービスの最大再試行数 」を参照してください。	5
コンテンツ・サービス待機時間（秒単位）	処理する転送オブジェクトをチェックするためにコンテンツ・サーバーが「起動する」頻度を決定します。	300
デフォルト・ユーザー名	ユーザー名を、名前を先に、または姓を先に表示します（適切なカンマを含む）。 「デフォルト・ユーザー名」の設定を変更した場合は、変更を有効にするためにサーバーを再起動する必要があります。	名 姓
URL をハイパーリンクとして表示	テキスト・フィールドやマルチテキスト・フィールドに入力した URL をハイパーリンクに自動的に変換します。 「いいえ」に設定すると、テキスト・フィールドやマルチテキスト・フィールドに入力された URL はプレーン・テキストとして表示されます。Agile の特定の URL フィールドやメール・フィールドは、このプリファレンスで制御されません。それらのフィールドに入力された URL は常にハイパーリンクに変換されます。	はい

プリファレンス名	説明	デフォルト
ユーザーID の表示	ユーザーID (ユーザー名) を表示するかどうかを決定します。 ユーザーID の表示の設定を変更した場合は、変更を有効にするためにサーバーを再起動する必要があります。	いいえ
レポート用に BI Publisher を有効化	レポートを複数の出力形式で生成するために BI Publisher を使用するかどうかを決定します。 「はい」に設定すると、BI Publisher を使用してレポートが複数の出力形式で生成されます。「いいえ」に設定すると、レポートは既存のレポート・レイアウトを使用して生成されます。	いいえ
イベント最大許容ネスト・レベル	スクリプトの実行回数を決定します。設計した操作を完了するためにスクリプトを複数回実行する場合は、この設定を必要な最大許容回数に調整します。ただし、他のスクリプトも複数回実行すると、予期しない影響が生じる可能性があります。	10
イベント・モニター・ログ・レベル	イベント・ハンドラ・モニター（「システム設定」>「イベント管理」）でのログ機能のレベルを設定します。 設定は、「すべて」（起動したすべての確認通知受信を記録）、「エラー」（エラーのみ記録）、または「オフ」（ログ情報を表示しない）です。	すべて
ファイル名の接頭辞	Agile ファイル・マネージャはファイル格納庫に保存されている各ファイルに添付された接頭辞を使用します。各添付ファイルに自動的に追加される識別子を入力します。デフォルトは「agile」です。 注意: このシステム全体のプリファレンスの効果は広範囲に及ぶため、よほどの理由がないかぎり、値を変更しないでください。	agile
ガベージ・コレクション開始時間 (秒)	「ガベージ・コレクション」は、キャッシュの中のアイドル・スレッドを消去するスレッドです。「消去」した後、ガベージ・コレクションはここで設定された秒数に基づき「スリープ」状態となります。300 秒 (5 分間) は合理的な値です。	300
CAD へロード	Engineering Collaboration ソリューションに関連しています。「有効」に設定すると、「CAD へロード」ボタンが表示され、Web クライアントで機能します。次に、デザイン・オブジェクトを設計者の CAD システムにアップロードできます。	無効

プリファレンス名	説明	デフォルト
クエリー結果の最大表示数	<p>詳細検索または簡易検索で表示する検索結果の最大数を設定します。5000 未満の正の整数を指定できます。推奨値は 1000 です。</p> <p>ユーザーの「最大表示行数」プリファレンスがこのシステム全体のプリファレンスよりも少なく設定されている場合、前者の値は後者の値より優先されます。</p> <p>注意: 全検索表示権限は、一般検索ではなく、レポート要求の結果に適用されます。全検索表示権限があるかどうかにかかわらず、すべてのユーザーは、このプロパティに指定された最大数の検索結果を見ることができます。</p>	1000
レポート結果表示最大数	<p>Agile PLM カスタム・レポートに表示する最大オブジェクト数を決定します。これは、標準レポートには適用されません。</p> <p>このプリファレンスは、全検索表示 (FSD) 権限によって上書きされます (「注意」を参照)。</p> <p>このフィールドの上限は 500,000 に増えました (フィールドではカンマは不要です)。</p> <p>検索結果の「Excel へエクスポート」機能 (Java クライアントでは、「検索結果」ページで「検索結果のエクスポート」>「Excel」または「CSV」を選択) で、このプリファレンスが使用されます。このフィールドの数値によって、Excel や CSV ファイルにエクスポートされる結果の最大数が制限されます。(ビジネス・オブジェクトからアクセスする手順: 「アクション」>「Microsoft Excel」>「Excel へエクスポート」と混同しないでください。ビジネス・オブジェクトからの手順では、この設定は使用されません。)</p> <p>注意: FSD 権限を持つユーザーは、レポートの全結果を表示できます。また、この権限を持つユーザーがレポート結果を表示する際は、ユーザーに対するすべての権限チェックが無視されます。FSD 権限を持たないユーザーは、このプロパティに指定された最大数のレポートを表示できます。</p>	50,000
最大実行レポート数	アプリケーション・サーバーが同時に実行するレポートの最大数を定義します。	50
通知待機時間 (秒単位)	送信する通知電子メールをチェックするためにシステムが「起動する」頻度を決定します。デフォルトは 600 です。有効な設定は 30～3600 秒です。	60
通知のタイムアウト (秒単位)	この設定は、通知スレッド内のユーザー・トランザクションのタイムアウト時間です。有効な設定は 30～3600 秒です。	1800

プリファレンス名	説明	デフォルト
オブジェクト・キャッシュ・テーブルのサイズ	オブジェクト・キャッシュ・テーブル (ハッシュ・テーブル) の関連サイズを設定します。これによって、キャッシュでオブジェクトが配布される方法を決定します (小さい値は、1 行当たりのオブジェクト数が多く、大きい値は 1 行当たりのオブジェクト数が少なくなります)。「小型」、「中型」、「大型」テーブルを選択できます (デフォルトは中型テーブル)。ただし、これは、サーバーの実装で使用する内部使用の属性であるため、この設定についてのパフォーマンスに関する推奨はありません。	中型のテーブル
ファイルの複製を最適化	2 つ以上のファイル・マネージャがある場合、PLM システムでは、各ファイルを含むファイル・マネージャを追跡できます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします (最短 'ping')。 設定は「有効」または「無効」です。「無効」は、最適化に関する問題を解決するために設定できます。	有効
最近訪れた場所のフォルダ・サイズ	各ユーザーが保存可能なオブジェクトの最大数を管理します。リストから選択可能な数値は、10、25、50、100 です。	10
参照指示範囲の展開縮小を許可する	参照指示を順序ではなく、範囲で説明することを許可します。382 ページの「 参照指示範囲の展開縮小を許可する 」を参照してください。	縮小
参照指示範囲のインジケータ	参照指示を指定された低および高範囲値の間に表示される記号です。利用可能な記号は、アスタリスク (*)、@ マーク (@)、カレット (^)、プラス (+)、ハイフン (-)、コロンの (:)、セミコロン (;)、チルダ (~)、またはなしです。	ハイフン (-)
週末の督促/エスカレーションの設定	変更のエスカレーション期間および督促期間で、週末を扱う方法 (土曜日または日曜日をスキップ、土曜日と日曜日をスキップ、またはスキップしない [= 両日とも週末とみなす]) を指定します。このプリファレンスは、Product Portfolio Management スケジュールの一部ではありません。	スキップしない
ローカル・ファイルの保持	添付ファイルをビジネス・オブジェクトに追加したり、チェックインするときに、ユーザーのコンピュータ上のローカル・ファイルを削除するか保持するかを決定したり、ユーザーに対してファイルを削除するか (「はい」)、しないか (「いいえ」) をプロンプト表示するかを決定します。 設定は「削除」、「保持」、および「警告」です。 注意: このプリファレンスは詳細アップローダにのみ適用され、標準アップローダには適用されません。標準アップローダでは、このプリファレンスが「削除」に設定されていても、ファイルは自動的に削除されません。	警告
添付ファイルとして保存する	2 つの方法のいずれかでファイルの複製を許可するか、または各ユーザーが方法を選択するように指示されます。設定は「プロンプト」、「ファイルの新規コピーを作成」、「ファイルをコピーしない」、および「既存ファイルを参照」。	既存ファイルを参照

プリファレンス名	説明	デフォルト
	照」です。393ページの「 添付ファイルとして保存する 」を参照してください。	
異なるクラスの BOM として保存	異なるアイテム間で「BOM」タブをコピーする際に、その値もコピーするかどうかを指定します。 「名前を付けて保存」プリファレンスの詳細は、381ページの「 タブとともに値をコピー 」を参照してください。	値をコピーする
異なるクラスの製造元として保存	異なるアイテム間で「製造元」タブをコピーする際に、その値もコピーするかどうかを指定します。	値をコピーする
異なるクラスのページ 2 として保存	異なるクラス間で「ページ 2」タブをコピーする際に、その値もコピーするかどうかを指定します。	値をコピーする
異なるクラスのページ 3 として保存	異なるクラス間で「ページ 3」タブをコピーする際に、その値もコピーするかどうかを指定します。	値をコピーする
異なるサブクラスのページ 3 として保存	異なるサブクラス間で「ページ 3」タブをコピーする際に、その値もコピーするかどうかを指定します。	値をコピーする
サインオフ・ユーザー二重識別タイプ	承認/却下サインオフ（ユーザー自身のサインオフ、エスカレーションまたは権限委譲による別のユーザーのサインオフを含む）で二重識別、つまり「第 2 のサインオフ」が必要かどうかを制御します。 設定は「該当なし」（デフォルト）、「ユーザー ID」、および「ログイン・パスワード」です。「該当なし」を選択した場合、二重識別は必要ありません。「ユーザー ID」または「ログイン・パスワード」を選択した場合、サインオフするには常に二重識別が必要です。 詳細は、382ページの「 サインオフ・ユーザー二重識別 」を参照してください。	該当なし
しきい値（秒単位）	設定された値以上の時間、ログイン・ユーザーのセッションがアイドルだった場合、オブジェクトで実行する特定のシステム・アクション（クリーン・アップやリセット・タスク）のタイミングを設定します。有効な設定値は 30～3600 秒です。	300
サムネイル・サポート	Web クライアントで Agile オブジェクトをサムネイル表現で表示できます。	無効
企業ユーザーに対する Web クライアント・タイム・アウト	Agile でセッションが終了するまで、Web クライアントで企業ユーザーがアイドル状態になる時間（分）を決定します。	25
サプライヤ・ユーザーに対する Web クライアント・タイム・アウト	Agile でセッションが終了するまで、Web クライアントでサプライヤ・ユーザーがアイドル状態になる時間（分）を決定します。	25

注意 Agile PLM システムのプロキシ・サーバーでは、1500 秒（25 分）のデフォルト接続タイムアウトが設定されています。プロキシ・タイムアウト設定の変更方法は、Agile PLM インストール・ガイド for Windows の Agile Web コンポーネントのインストールと設定に関する項を参照してください。

プリファレンスの詳細（一部）

このセクションでは、システム全体のプリファレンスの一部について説明します。

Agile ドライブ

「Agile ドライブ」プリファレンスを有効にすると、管理者は、Agile ドライブ・システムにアクセスして、使用しているコンピュータ・システムから、Agile オブジェクトの添付ファイルをファイルやフォルダの形式で管理できます。このために、Agile アプリケーションを起動する必要はありません。Agile ドライブは、Agile の分散ファイル・マネージャをネットワーク・ブレースとしてシステムに接続します。これによって、Agile オブジェクトの添付ファイルに対してコピーや削除などの Explorer 同様の操作を実行できます。詳細は、「[Agile ドライブの管理](#)」および Agile Drive ユーザー・ガイドを参照してください。

プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする

このプリファレンスは、詳細ファイルのアップロード、複数ファイルのダウンロード、および Excel 統合 (PG&C) を可能にする Java アプレットにユーザーがアクセスできるかどうかを管理します。「いいえ」に設定された場合、ユーザーそれぞれのユーザー・プロファイルには「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」が表示されません。「はい」に設定された場合、ユーザー・プロファイルには「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」が表示され、独自の方法を選択できます。

- このプリファレンスは、添付ファイルの管理について、次の機能を許可します。システム全体のプリファレンスは、各ユーザーの「ファイル・プロダクティビティ（ユーザー）プリファレンス」とともに機能します。
 - 詳細ファイル・アップローダ
 - チェックアウトの場所に基づいた自動チェックイン
 - Web クライアントの Zip ファイルではなく、個別ファイルのダウンロードを許可
- このプリファレンスでは、Microsoft Excel ベース・クライアントを Agile PG&C に統合できます。これによって、サプライヤ・ユーザーは、Microsoft Excel を使用しながら適合性情報をバイヤーに提供できます。

パスワードのリセット許可

「パスワードのリセット許可」プリファレンスでは、パスワードを忘れた Web クライアント・ユーザーが自動的に新しいパスワードを受信できるかどうかを選択できます。デフォルト設定は「いいえ」です。ユーザーは管理者に連絡し、パスワードをリセットする必要があります。パスワードを忘れた Java クライアント・ユーザーは、必ず管理者に連絡し、新しいパスワードを受け取る必要があります。

「パスワードのリセット許可」が「はい」に設定されている場合は、「パスワードを忘れた場合」リンクが Web クライアントのログイン画面に表示されます。「プリファレンス」はシステム全体の設定であるため、すべての Web クライアント・ユーザーがこのリンクを見ることができます。ユーザーが「パスワードを忘れた場合」リンクをクリックして、ユーザー名とメール・アドレスを入力すると、新しいランダム・パスワード（7 文字）を受信できます。ユーザーが再度 Web クライアントにログインすると、新しいパスワードを選択するよう指示されます。

タブとともに値をコピー

いくつかの「名前を付けて保存」プリファレンスは、異なるクラス間で「名前を付けて保存」を使用してオブジェクトをコピーする際に、「BOM」、「製造元」、「ページ 2」、「ページ 3」タブから値をコピーするかどうかを決定します。デフォルトでは、値はコピーされます。

注意 「名前を付けて保存」を使用して値をコピーする場合、いくつかの例外があります。ソース・オブジェクトの属性が存在しない場合、またはターゲット・オブジェクトで使用されていない場合は、名前を付けて保存するプリファレンスが「コピーされた値」に設定されていても、その属性はコピーされません。また、属性がリストの値で、ソースの属性のリストIDがターゲットの属性のリストIDと異なる場合は、名前を付けて保存するプリファレンスが「コピーされた値」に設定されていても、その値はコピーされません。

コンテンツ・サービス待機時間

「コンテンツ・サービス待機時間」プリファレンスは、システムによる転送オブジェクトの処理頻度を管理します。たとえば、設定が 300 の場合は、処理する転送オブジェクトの有無が 300 秒ごとにチェックされ、未処理のオブジェクトに対して処理が開始されます。

コンテンツ・サービスの最大再試行数

「コンテンツ・サービスの最大再試行数」プリファレンスは、最初に送信を試行した後、転送オブジェクトが失敗した送信先に対して何回再試行を行うかを決定します。たとえば、設定が 5 の場合に、転送オブジェクトが送信を 1 回試行したとします。その試行が失敗した場合、転送オブジェクトは以後 5 回まで再試行します。最後の再試行後は、それ以上送信の再試行はできなくなります。

参照指示範囲の展開縮小を許可する

このプリファレンス (RDAREC) は、編集モードでないときに、BOM テーブルでの参照指示の表示方法を決定します。このプリファレンスが影響を与えるのは、Agile データベースに保存されている参照指示データのユーザー・エンド表示のみです。

- **展開** - 参照指示範囲を展開形式で表示します。各参照指示は一覧表示され、範囲は縮小されません。たとえば、**R1** で始まり、**R5** で終わる参照指示範囲は次のように表示されます。

R1, R2, R3, R4, R5

- **縮小** - 参照指示範囲を縮小または連結形式で表示します。参照指示範囲（連続した 3 つ、またはそれ以上の参照指示）は、最初の参照指示、参照指示範囲インジケータ、および最後の参照指示によって示されます。たとえば、**R1** で始まり、**R5** で終わる参照指示範囲は次のように表示されます。

R1-R5

サインオフ・ユーザー二重識別

FDA の規制を受ける会社などでは、変更指示を承認または却下するときにユーザー識別の二重認証を要求する企業ポリシーを設けている場合があります。「サインオフ・ユーザー二重識別タイプ」プリファレンスは、承認/却下サインオフで二重識別、つまり「第 2 のサインオフ」が必要かどうかを制御します。

この設定は、デフォルトおよびカスタムの全ワークフローの「レビュー」および「リリース済」ステータスに適用されます。つまり、ユーザーが「サインオフ」ダイアログ・ボックスに入力すると、ワークフローが「レビュー」または「リリース済」ステータスに移行する前に、システムで電子署名が検証されます。このプリファレンスは、すべての状況、つまり、ユーザー自身のサインオフ、ユーザー・グループのメンバーとしてのサインオフ、エスカレーションまたは権限委譲による別のユーザーのサインオフ、または複数のサインオフ職責の組合せに対応しています（サインオフの UI オプションの詳細は、『Agile PLM スタート・ガイド』のワークフローに関する章を参照してください）。

管理者は、「第 2 のサインオフ」機能が正しく認識されるように、設定の組合せに注意する必要があります。

このプリファレンスを「該当なし」（デフォルト）に設定した場合、すべての立場のユーザーは、1 回のサインオフのみ要求されます。サインオフで要求されたパスワードは承認用パスワードです。これは、サインオフ・プロトコルにおける第 1 レベルのセキュリティを表します。

他の 2 つの設定（「ユーザーID」および「ログイン・パスワード」）の場合は、サインオフを行うユーザーに対して二重識別を要求できます。この設定の場合、ユーザーは、ユーザーID（ユーザー名とも呼びます）またはログイン・パスワードの入力も要求されます。

このプリファレンスを「ログイン・パスワード」に設定する場合は、すべてのユーザーの「承認用パスワード」にログイン・パスワードを使用」プロパティを「いいえ」に設定する必要があります。すべてのユーザーの「承認用パスワード」にログイン・パスワードを使用」プロパティを「いいえ」に設定した場合のみ、ログイン・パスワードを設定できます（一括設定を行う場合は、SecondSignature.Zip というスクリプトについて Agile 担当者にお問い合わせください）。

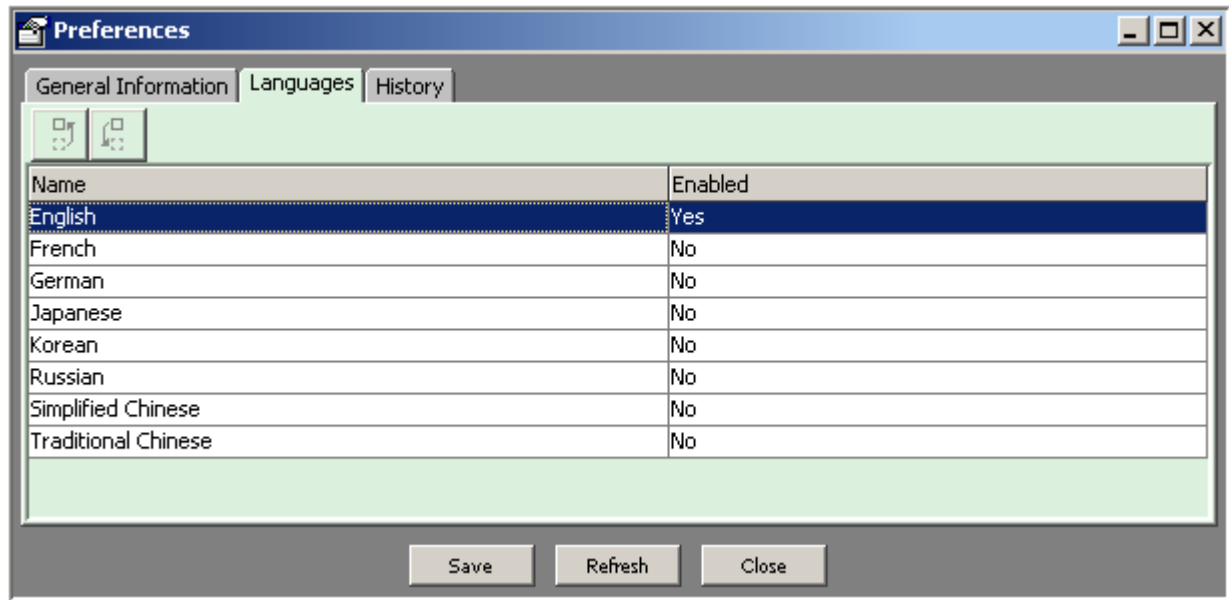
このプリファレンスを「ユーザーID」に設定する場合は、ユーザーID の表示プリファレンスを「いいえ」に設定する必要があります。

「言語」タブ

「言語」タブには、Agile システムで使用可能な言語が一覧表示されます。管理者は、一度に 1 つ以上の言語を選択し、「有効化」または「無効化」ボタンを使用してその言語を有効化または無効化できます。

注意 デフォルトでは英語が有効で、英語を無効にすることはできません。

このタブには2つの列があり、言語名、およびその言語が現在有効か無効か（「はい」または「いいえ」）が表示されています。



重要 このサポートされている言語のリストは2010年5月現在のものであり、変更される場合があります。現在のインストールでサポートされている言語については、「プリファレンス」ノードにある「言語」タブを参照してください。

必要な設定の適用が完了したら、「保存」をクリックします。この時点で、変更を適用するにはサーバーの再起動が必要であることを警告するメッセージが表示されます。

Agile PLM サーバーでは、有効な言語の翻訳済ラベルやフィールドが正常にロードされます。管理者履歴は、有効な言語でのみ生成されます。

注意 言語に関するユーザー・プリファレンスは、有効なシステム言語に限定されます。

Agile PLMの言語設定の詳細は、30ページの「[Javaクライアントの管理者機能](#)」の章を参照してください。

ライセンス

この章のトピック

- 「一般情報」タブ 385
- 「モジュール」タブ 386

「ライセンス」ノードは、「サーバー設定」の下に表示されます。このノードには、社内の Agile PLM ライセンスの設定に関する情報が表示されます。

Agile のユーザー・ライセンスは、「一般情報」タブに一覧表示されます。ユーザー・ライセンスは、Agile PLM 管理者によって各ユーザーに割り当てられます。割り当てられたユーザー・ライセンスと割り当てられた役割および権限の組合せによって、ユーザーが実行できるタスクが決まります。

ライセンス情報を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「サーバー設定」で「ライセンス」ノードをダブルクリックします。「ライセンス」ウィンドウが表示されます。
2. 「一般情報」、「モジュール」、または「履歴」タブをクリックします。

「一般情報」タブ

Agile PLM には、「名前付き」（以前の「パワー」です）、「同時接続」、および「制限付き」の 3 タイプのユーザー・ライセンスがあります。

制限付ユーザーは、会社外部の人間（代理店やサプライヤ）で、Agile PLM システムへのアクセスが制限されているユーザーです。

名前付きユーザーと同時接続ユーザーは、それぞれの役割と権限、および会社のライセンスに基づいて、同じ Agile PLM 機能にアクセスできます。

主な相違点は、名前付きライセンスを持つユーザーは同時接続のカウントに含まれないことです。したがって、名前付きユーザーはいつでもシステムにログインできます。「名前付き」または「制限付き」以外のすべてのユーザーは、同時接続のカウントに含まれるため、同時接続数の限度に達した際にはシステムからロックアウトされることがあります。

各ユーザー・プロファイルの「ユーザー・カテゴリ」フィールドには、そのユーザーに割り当てられたユーザー・ライセンスが表示されます。詳細は、170ページの「[定義済ユーザー・プロパティ](#)」を参照してください。

「ライセンス」ウィンドウの「一般情報」タブには、次の表に示す情報が表示されます。この情報は編集できません。

「名前」フィールド	説明
名前付きユーザーのカウント	アクティブなユーザーの数を示します。
制限付きユーザーのカウント	割り当てられた制限付きユーザー・ライセンスの数を追跡します。

「名前」フィールド	説明
同時接続ユーザーのカウント	会社が購入した「同時接続ユーザー」ライセンスの数を示します。同時接続ユーザーも、会社が購入したすべての Agile PLM アプリケーションにアクセスできますが、同時接続のカウントに含まれるため、同時接続数の限度に達した際にはシステムからロックアウトされることがあります。
ユーザーの合計カウント	会社が作成した全タイプの PLM ユーザーの数を追跡します。

「モジュール」タブ

Agile PLMのライセンスで最も大きい変更は、Agileのサーバー・ライセンスが削除されたことです。従来は、Oracleのライセンス・キーを <http://licensecodes.oracle.com/agile.html#PLM> で取得し、インストール時に入力していました。

このバージョンでは、管理者は、「ライセンス」ノードの「モジュール」タブを使用して、会社が購入した PLM ソリューションを単に選択するのみです。これによって、会社の事業に関連のある PLM クラスおよび他のソリューション・ベースの機能が有効になり、関連のないクラスや機能は無効になります。

Product Collaboration については、ドロップダウン・リストから「はい」を選択します。次に、これ以外の各ドロップダウン・リストを開き、「はい」または「いいえ」を適切に選択します。完了した後に保存」ボタンをクリックすると、あなたの組織が選択したモジュール[PLM ソリューション]に対する契約ライセンスを有していることを確認してくださいというメッセージが表示されます。モジュールの選択を有効にするには、システムを再起動する必要があります。

Product Portfolio Management (PPM) は、Product Collaboration (PC) を使用せずに操作できる唯一の PLM ソリューションです。ただし、PPM のみを使用している会社でも、今後は、PC を使用する可能性があります。

重要 会社が購入していないPLMソリューションを有効化することは可能ですが（「ライセンス」>「モジュール」で「はい」を選択）、購入していないソリューションを使用して業務を進めることはお薦めできません。会社では、オラクル社コンサルティングのAgile担当と緊密に連携して業務を行い、いずれかの時点でサポート・サービスが必要になる可能性があります。しかし、会社が購入していないPLMソリューションからビジネス・オブジェクトを導入したり作成している最中に問題が発生した場合は、会社や管理者が必要とするPLMサポートを受けるのが困難になります。

会社が購入した PLM ソリューションを有効化する際に問題が発生した場合は、Agile PLM 担当にお問い合わせください。

タスク・モニタおよびタスクの設定

この章のトピック

- タスク・モニタ 387
- タスクの設定 388

タスク・モニタ

「タスク・モニタ」ノードを使用すると、スケジュールされた特定のタスクの進行状況を追跡できます。これには、次の機能が含まれています。

- レポート・タスク - 実行がスケジュールされている標準レポートおよびカスタム・レポート
-
- 注意** 管理者レポートは、スケジュールできません。
-
- ユーザー・タスク - ディレクトリ・サーバー（例: LDAP サーバー）からユーザー・リストを更新
 - 全文検索タスク - 全文検索の添付ファイルのインデックス
 - 添付ファイルのページ・タスク - DFM サーバーにおける添付ファイルの定期的なページ
 - PPM 固有タスク - 複数のアクティビティ・タスク
 - PCM 固有タスク - 複数の RFQ 通知タスク
 - PG&C 固有タスク - スケジュール済適合性ロールアップを管理するために追加された適合性ロールアップ・タスク

「スレッド・ステータス」ドロップダウン・リストを使用すると、次の条件に一致するタスクを表示できます。

- 「すべて」 - すべてのタスクを表示
- 「スケジュール済」 - スケジュール結果の生成時にスケジュールされたタスクを表示
- 「実行中」 - 現在実行中のタスクを表示（デフォルトのフィルタ）
- 「完了」 - 正常に実行されたタスクを表示
- 「失敗」 - 実行時に失敗したタスクを表示
- 「タイムアウト」 - 完全に実行される前にタイムアウトになったタスクを表示適合性ロールアップ・タスクはタイムアウトにできません。



注意 スレッド・ステータス条件（「すべて」を除く）はすべてのタイプのタスクには適用されません。たとえば、レポートタスクは、選択された「スレッド・ステータス」が「すべて」または「完了」の場合のみ、「タスク・モニタ」ウィンドウに表示されます。

次の表は、「タスク・モニタ」ウィンドウのプロパティを示しています。プロパティは読取専用です。

プロパティ	メモ
名前	スケジュールされたレポートの名前（標準またはカスタム）。他のすべてのタスクに対しては Null になります。
タスク・タイプ	レポート・タスク、FTS タスク、添付ファイルのページ・タスク。
所有者	レポート・スケジュールの作成者の名前。他のすべてのタスクに対しては Null になります。
実行時間	タスクの開始時間。
ステータス	タスクの現在のステータス: スケジュール済、実行中、完了、失敗、タイム・アウト。

「ページ」ボタンは、「タスク・モニタ」ウィンドウに表示されるタスクを削除します。「ページ」アクションは、選択したタスクのうち、指定した日付範囲に当てはまるタスクのみに適用されます。

「タスク・モニタ」からタスクをページする手順は、次のとおりです。

1. 「スレッド・ステータス」を選択し、特定のタスク（すべてのタスクや完了タスクなど）を表示します。
2. 1つ以上のタスクを選択します。
3. 「ページ」ボタン  をクリックします。
4. 「開始日」と「終了日」の値を指定します。日付範囲に当てはまるタスクがページされます。  ボタンをクリックし、各フィールドの日付と時刻を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

タスクの設定

「タスクの設定」ノードを使用すると、レポートや全文検索の索引作成などの、スケジュールされた様々なサーバー側のアクティビティを管理できます。タスクは完了前にタイムアウトにはなりません。

名前	説明	デフォルトの間隔（分）
ディレクトリ・サーバーからユーザー・リストを更新	Agile PLM ユーザー・リストをディレクトリ・サーバーからの情報で更新します。	1440（1 日）
レポート・タスク	実行するスケジュール済のレポート・タスクがあるかどうかをチェックします。ある場合は、バックグラウンドでレポートを作成してファイル・サーバーに保存し、レポートの所有者と共有ユーザーに電子メール通知を送信します。	30
アクティビティ概要タスク	PPM ソリューションで、次週にスケジュールされているアクティビティのリストを認識し、所有者に概要形式で通知します。	ユーザー定義
全文検索スケジュール	全文検索機能のファイルに含まれるコンテンツのインデックスを作成します。	600（10 時間）

名前	説明	デフォルトの 間隔 (分)
添付ファイルの ページ・タスク	古いファイルを特殊フォルダに移動し、データベースのメタデータをクリーン・アップします。システムは 6:00 am (現地時間) にこのプロセスを開始するようにハードコードされています。1440 のデフォルトの間隔は 24 時間後にプロセスを再開します。このタスクに対して入力された別の値によって開始時刻が変更されると、新しい間隔で再開します。添付ファイルのページ・タスクの使用ケースについては、360ページの「 添付ファイルのページ・タスクの使用ケース 」を参照してください。	1440 (1 日)
アクティビティ・ リマインダ・タスク	PPM ソリューションで、今日開始するアクティビティのリストを識別し、所有者にこれらのアクティビティを通知します。	ユーザー定義
アクティビティ・ ヘルス・タスク	PPM ソリューションで、すべてのアクティビティのヘルスを更新します。これらのアクティビティに対する実際の長さ、変動、予測変動も更新します。	2
適合性ロールアップ・ タスク	PG&C ソリューションで、適合性ロールアップの計算を実行します。 注意: Product Governance & Compliance サーバー・ライセンスが無効で使用不可の場合でも、このタスク・リストには「適合性ロールアップ・タスク」が表示されます。	30
明日が締切の通知 タスク	PCM ソリューションで、サーバーが新規の RFQ 関連通知をチェックする頻度を設定します。	2
管理キャッシュの 同期タスク	「Web クライアント」>「ツール」>「管理」>「キャッシュ・ヘルス・モニタ」を使用して、サーバーを同期化します。	5
イベントの スケジュール・タスク	このタスクの設定は「スケジュール済イベント」イベント・タイプを使用する開始済イベントのサポートで実行されます。	30
適合性移行タスク	このタスクは、従来のすべての組成を「完全公表」、「一部公表」、または「未公表」の 3 つのカテゴリに分類します。 注意 PG&C ソリューションでは、9.2.x リリースでアップグレードする場合に、このタスクを有効にして 1 回実行します。実行後は、このタスクは不要になり無効にできます。	1 (このタスクはアップグレード担当者が 1 回のみ実行)

「タスクの設定」ページでタスク (行の任意の場所) をダブルクリックすると、そのタスクの設定に関する「一般情報」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、次のプロパティが表示されます。これらのプロパティを変更して新しい設定を保存できます。

プロパティ	説明
名前	設定するタスクの名前。
タスク間隔	サーバーがタスクのステータスを更新した後の定期的な間隔を分で表します。 イベントがスキップされないように、通常、「タスクのルックバック・ウィンドウ」には、「タスクの間隔」の値より大きい値を常に設定する必要があります。

プロパティ	説明
タスクの遅延時間	イベントを開始するまでの遅延時間を分で示します。
タスクのルックバック・ウィンドウ	<p>実行可能になったイベントを検索する際にタスク・マネージャが何分前まで検索するかを指定します。</p> <p>「タスクのルックバック・ウィンドウ」を一時的に再設定する方法を含む使用ケースについては、360ページの「添付ファイルのページ・タスクの使用ケース」を参照してください。</p> <p>イベントがスキップされないように、通常、「タスクのルックバック・ウィンドウ」には、「タスクの間隔」の値より大きい値を常に設定する必要があります。</p>
タスクの最大イベント数	1つのサーバーで同時に実行できるイベントの数。
タスクの失敗時の再起動	イベントの失敗後にそのイベントを再起動するかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」
タスクのアクセス・サーバーのロード	クラスタ内の異なるサーバーにおいてイベントを同時に実行できるかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」
無効なタスク	<p>タスクが無効（「はい」）か、有効（「いいえ」）かを示します。</p> <p>注意: 指定したタスクを実行するには、このプロパティを「いいえ」に設定する必要があります。また、別のタスクに対してこのプロパティを変更した場合、システムを再起動する必要はありません。</p>
タスク開始時間	<p>タスクの正確な開始時間を指定できます。たとえば、毎朝8時にアクティビティ・リマインダ・タスクまたはアクティビティ概要タスクが開始されるように指定できます。</p> <p>注意: 時間をリセットした場合は、変更を適用するためにサーバーを再起動する必要があります。</p>

「タスクの設定」ウィンドウでタスクを無効化する手順は、次のとおりです。

1. タスクをダブルクリックして開きます。
2. 「タスクの無効化」リストで「はい」を選択します。
3. 「保存」をクリックします。

添付ファイルの管理

この章のトピック

■ 添付ファイルまたはデザインに関する企業のニーズを評価する	391
■ 添付ファイルに関する管理者設定	391
■ 添付ファイルに対する役割と権限を割り当てる	396
■ ドキュメント管理の機能拡張	402
■ 添付ファイルへの簡易アクセスURLを生成する	403

添付ファイルまたはデザインに関する企業のニーズを評価する

Agile PLM 管理の他の分野と同様に、最も重要なステップは管理者のプロパティ設定前にあります。企業による添付ファイル、ファイル・フォルダ、およびデザイン・モデルの使用をサポートする全体的なポリシーを決定する必要があります。

企業の目標を定める際は、次のような要素を評価します。

- 企業では CAD デザインやグラフィック・ファイルを作成するか。作成する場合は、デザイン・クラスから作成します。次の章を参照してください。
- 企業では、添付ファイルおよび添付ファイルの集合を整理して追跡する必要があるか。必要がある場合は、ファイル・フォルダ・サブクラスから構築する必要があります。
- Agile の添付機能に関して考慮する必要がある他の特別な目的や使用方法があるか。
- ファイル・フォルダは非表示にするか、または表示可能にするか。
- 添付ファイルの名前の付け方。添付ファイルの命名は、指示されたシステムで行うか、または整理されたシステムで行うか。または、ユーザーによる添付ファイルの命名を許可し、ユーザーが特定の添付ファイルを検索するためにファイル・フォルダを使用することを許可するかどうか。

添付ファイルに関する管理者設定

このセクションには、様々な管理者設定 – スマートルール、システム全体のプリファレンス、ユーザー・プリファレンス – を集約しています。添付ファイルに付随する役割や権限は、次のセクションで説明されています。管理者の機能の詳細は、ノード別の章を参照してください。

Agile PLMにおけるファイル管理

「サーバー設定」>「場所」>「ファイル・マネージャ」タブの管理者設定は、添付ファイルおよびその元のファイルやコピーがある場所に関連する重要な設定です。この設定については、352ページの「[Agile PLMにおけるファイル管理](#)」に記載されています。

内部チェックサム・ユーティリティは、不正なファイル処理に対するセキュリティ対策です。リセット権限とチェッ

クサム計算プリファレンスについては、354ページの「[ファイル・チェックサムの処理](#)」で説明されています。

スマートルールが添付ファイルに与える影響

ファイルをリビジョンにコピーする

「ファイルをリビジョンにコピーする」スマートルールは、新しいリビジョンへの添付ファイルの自動コピーを管理します。新しいリビジョンとは、アイテムを変更の「対象アイテム」テーブルに追加すると作成される保留中のアイテム・リビジョンです。このスマートルールがチェックされるのは、添付ファイルが追加されたときではなく、保留中の変更が作成されたときのみです。可能な設定は、「コピー」、「参照」（デフォルト）、「不可」、「警告付きでコピー」、「警告付きで参照」です。

次の表は、次の例のような場合に、各設定がどのように機能するかを示しています。

- 部品 55、リビジョン B、「添付ファイル」タブテーブルには、添付ファイル Test.txt、バージョン 3 が表示されています。

ファイル名 = Test.txt、ファイル・フォルダ = Folder004、フォルダ・バージョン = 3

- 部品 55、リビジョン B は変更オブジェクトの「対象アイテム」タブに追加され、保留中リビジョン C が作成されました。

設定	しくみ
コピー	<p>アイテムの新しい保留中リビジョンに対して新規ファイル・フォルダが作成され、添付ファイルの新しいコピーが作成されて新規ファイル・フォルダに保存されます。</p> <p>したがって、保留中リビジョン C が作成されると、「添付ファイル」タブ・テーブルにはリビジョン B と同じ添付ファイルが表示されます。つまり、リビジョン C はリビジョン B と同じ添付ファイルを継承します。</p> <p>ファイル名 = Test.txt、ファイル・フォルダ = Folder004、フォルダ・バージョン = 3</p>
参照	<p>既存のファイル・フォルダを使用して、アイテムの保留中リビジョンの「添付ファイル」タブに、このファイル・フォルダに対する新規参照が作成されます。</p>
不可	<p>保留中のリビジョン C が作成されると、「添付ファイル」タブ・テーブルは空になります。添付ファイルの参照はコピーされません。</p>
警告付きでコピー	<p>「コピー」設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</p> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ・ボックスが表示されます。アイテムを追加して添付ファイルをコピーする場合は、「追加」チェック・ボックスと「添付ファイル」チェック・ボックスの両方を選択します。アイテムを追加して添付ファイルをコピーしない場合は、「追加」チェック・ボックスのみを選択します。</p>
警告付きで参照	<p>「参照」設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</p> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ・ボックスが表示されます。アイテムを追加して既存の添付ファイルを参照する場合は、「追加」チェック・ボックスと「添付ファイル」チェック・ボックスの両方を選択します。アイテムを追加して添付ファイルを参照しない場合は、「追加」チェック・ボックスのみを選択します。</p>

このスマートルールを「不可」と設定した場合、オブジェクトが変更に関連付けられた後に初版リビジョンに追加されたファイル（リリース済リビジョン A）は、後続のリビジョンにコピーされません。また、新しい変更が作成されても、初版リビジョンに追加されたすべてのファイルは、新規作成されたリビジョンに追加されません。

拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン

このスマートルールは、チェックインされた添付ファイルが、チェックアウトされたファイルとは異なる拡張子のファイルを持つことができるかどうかを決定します。このスマートルールは、すべてのビジネス・オブジェクトに適用されます。

ビジネス・オブジェクトの添付ファイルが「最新-x」のときに、添付ファイル・フォルダのファイル拡張子を変更され、このためにビジネス・オブジェクトのチェックアウトされたファイルと異なる場合、このルールは上書きされます。

プリファレンスが添付ファイルに与える影響

システム全体のプリファレンスについては、375ページの「[システム全体のプリファレンス](#)」に記載されています。

ファイル名の接頭辞

Agile ファイル・マネージャはファイル格納庫に保存されている各ファイルに添付された接頭辞を使用します。管理者は、各添付ファイルに自動的に追加される識別子を入力できます。デフォルトは「agile」です。

ファイルの複製を最適化

2 つ以上のファイル・マネージャがある場合、PLM システムでは、このプリファレンスによって各ファイルを含むファイル・マネージャを追跡できます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします（これはすべての FM サーバーへの最短 "ping" により決定されます）。

設定は「有効」または「無効」です。「無効」は、最適化に関する問題を解決するために設定できます。

添付ファイルとして保存する

「名前を付けて保存」のプリファレンスに関する利用可能な選択肢の詳細です。「名前を付けて保存」を使用して新しいビジネス・オブジェクトを作成すると、同じ添付ファイルが含まれます。ここで、ファイルの新しいコピーを作成して（新しいファイル・フォルダを含む）、元のビジネス・オブジェクトに添付されていた同じファイル・フォルダを再使用するか、ファイルをコピーしないか、またはユーザーが「名前を付けて保存」操作を実行するたびに、これらの方法から 1 つを選択できるようにするか、いずれかの方法を選択します。

企業のビジネス慣習に最も適した設定を選択してください。

注意 このプリファレンスは、次の表で説明されているものを除き、「ファイル・フォルダ」オブジェクト自体には適用されません。

Product Portfolio Management オブジェクトの場合、このプリファレンスは現在のオブジェクトの添付ファイルに対してのみ適用されます。すべての子タスクには継承されるわけではありません。このプリファレンスが適用されるのは、PPM テンプレートから新しいプロジェクトを作成する場合です。

次の表は、次の例のような場合に、各設定がどのように機能するかを示しています。

- オブジェクト ABC には、次の添付ファイルが含まれています。

ファイル名 = Test.txt、ファイル・フォルダ = Folder004、フォルダ・バージョン = 3

- ユーザーはオブジェクト ABC を開き、「名前を付けて保存」を使用してオブジェクト XYZ を作成します。

設定	しくみの一例
ファイルの 新規コピーを作成	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、Test.txt の新規コピーが新しいファイル・フォルダに添付されます。オブジェクト XYZ の「添付ファイル」タブには、次の内容が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ ファイル名 = Test.txt □ ファイル・フォルダ = Folder013 □ バージョン = 1 <p>Test.txt の新規コピーはファイル格納庫で作成され、新規フォルダ (Folder013、バージョン 1) が作成されます。</p> <p>最終的な結果 (バージョン 1 内のファイルの新規コピー、新規ファイル・フォルダ) は、オブジェクト XYZ の「添付ファイル」タブで、「追加 ファイル」ボタンを使用して添付ファイル Test.txt を追加した場合と同様です。</p>
既存ファイルを参照	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、元のオブジェクト ABC と同じ添付ファイルを再利用します。オブジェクト XYZ の「添付ファイル」タブは、オブジェクト ABC の「添付ファイル」タブと同じで、次の内容が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ ファイル名 = Test.txt □ ファイル・フォルダ = Folder004 □ バージョン = 3 <p>この結果 (ファイル・フォルダの添付ファイルが再利用される) は、ユーザーがオブジェクト XYZ の「添付ファイル」タブの「追加 検索」ボタンを使用し、オブジェクト ABC を検索し、その添付ファイル (Test.txt、Folder004、バージョン 3) を選択して添付ファイル Test.txt を追加した場合と同様です。</p>
ファイルをコピー しない	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、添付ファイルは元のオブジェクト ABC からコピーされません。</p> <p>最終的な結果として、新規作成されたオブジェクト XYZ には添付ファイルが含まれず、このオブジェクトの「添付ファイル」タブは空になります。</p>
プロンプト	<p>ユーザーは、次のいずれかの「添付ファイルとして保存」方法を選択するよう尋ねられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 既存ファイルを参照 □ ファイルの新規コピーを作成 □ ファイルをコピーしない <p>「名前を付けて保存」操作が実行されるとき、Agile PLM は常に各ユーザーにメッセージを表示します。ただし、元のオブジェクト ABC に添付ファイルがない場合 (添付ファイル・テーブルが空の場合)、メッセージは表示されません。</p>

プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする

このプリファレンスは、詳細機能を許可する Java アプレットにユーザー（特に Web クライアント・ユーザー）がアクセスできるかどうかを管理します。PPM と PG&C ソリューションに対する特定アプリケーションの他に、このプリファレンスは添付ファイルに関するシステムの動作を、次の 3 つの方法で向上させます。

- Web クライアントでは、詳細ファイル・アップローダが利用できます。
- 自動チェックインは、Web クライアントのチェックアウトの場所に基づいています。
- Web クライアントの 1 つの Zip ファイルではなく、個別ファイルのダウンロードを許可します。

注意 Java クライアント・ユーザーは、このプリファレンス設定にかかわらず、これら詳細添付ファイル機能に常にアクセスできます。

このプリファレンスが「はい」に設定されている場合、エンド・ユーザーは、自分の「**ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス**」属性にも適切なユーザー・プロファイルを設定する必要があります。

このプリファレンスが「はい」に設定されており、Web クライアント・ユーザーが詳細添付ファイル機能にアクセスできない場合は、そのユーザーのユーザー・プロファイルを確認してください。395 ページの「[「ユーザー・プロファイル」の「ファイル・プロダクティビティ・ユーザー・プリファレンス」](#)」も参照してください。

設定	結果
はい	「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」の属性は、ユーザー・プロファイル「 プリファレンス 」タブに表示されます。ユーザーは、この内容を「詳細」、「標準」、または「プロンプト」に設定できます。「詳細」または「プロンプト」に設定すると、Web クライアント・ユーザーは詳細添付ファイル機能にアクセスできます。
いいえ	「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」の属性は、ユーザー・プロファイル「 プリファレンス 」タブに表示されません。Web クライアント・ユーザーは、詳細添付ファイル機能にアクセスできません。

「ユーザー・プロファイル」の「ファイル・プロダクティビティ・ユーザー・プリファレンス」

注意 「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」はユーザー・プリファレンスであり（厳密には、各ユーザー・オブジェクトの単なる属性）、システム全体のプリファレンスではありません。このプリファレンスは、システム全体のプリファレンス「プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする」と組み合わせて使用されるため、ここで説明します。ユーザー・プリファレンス「**ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス**」は、「プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする」が「いいえ」に設定されている場合、ユーザーの「プロファイル」には表示されません。

ユーザー・プロパティについては、170 ページの「[定義済ユーザー・プロパティ](#)」に記載されています。

このユーザー設定は、ユーザーが詳細プロダクティビティ・コンポーネントまたは標準コンポーネントにアクセスできるかどうか、もしくは毎回プロンプトを表示するかどうかを管理します。利用可能な設定は「プロンプト」、「詳細」、「標準」のいずれかです。デフォルトは「プロンプト」です。管理者はすべてのユーザーの値を設定できます。各ユーザーはそれぞれのユーザー・プロファイルの設定を変更できます（この場合、システム全体のプリファレンス「プロダクティビティ・コンポーネントのダウンロードを可能にする」が「はい」に設定されていることを前提とします）。

注意 『Agile PLM スタート・ガイド』の「添付ファイル进行操作する」の章には、エンド・ユーザーによるユーザー・プロファイル「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」の設定方法と各設定の動作説明が記載されています。

ユーザー・プリファレンスが「標準」モードに設定されている場合、未対応ファイルは自動的に開かれませんが、代わりに、ユーザーは「保存」または「開く」のどちらかを選択するよう指示されます。

注意 必要な場所に適切な文字セットを選択してください。ビジネス・オブジェクトからファイル・フォルダ・オブジェクトにファイルや URL を追加する際に問題が生じる可能性があります。ファイル・フォルダの「ファイルの説明」属性では文字セットが数字で、ビジネス・オブジェクトの「ファイルの説明」属性では文字セットが英文字または英数字の場合は、後者が優先されます。つまり、ファイル・フォルダの「ファイルの説明」（数字）で強制しようとしていた管理は失われ、元の文字セットが保存されます。

添付ファイルに対する役割と権限を割り当てる

Agile PLMの役割の詳細は、187ページの「[役割](#)」に記載されています。権限の詳細は、209ページの「[権限と権限マスク](#)」に記載されています。新しい役割と権限を作成する前に、目的を慎重に評価してください。カスタマイズされた役割と権限を作成する必要がある場合でも、常にデフォルトの役割と権限マスクで目的を達成することをお勧めします。

次のセクションでは、添付ファイルの機能を実現するための権限に関する情報を提供します。

添付ファイル権限

一部の権限を使用すると、ユーザーは添付ファイルに対して操作を実行できます。ここでは、この権限を「添付ファイル権限」と呼びます。「フォルダ管理者」または「フォルダ・マネージャ」の役割を与えられたユーザーは、次の情報をレビューする必要があります。

次の権限によって、添付ファイルにおけるユーザーの操作が可能となります。

- チェックイン
- チェックアウト
- チェックアウトのキャンセル
- ファイルの取出し
- ファイル印刷
- ファイル表示
- 変更

重要 ファイル取出し権限はチェックアウト権限と連携して動作し、添付ファイルをユーザーのコンピュータに送信します。チェックアウト権限はあるがファイル取出し権限がないユーザーは、ファイルがチェックアウトされたことを履歴で確認できますが、そのファイルはそのユーザーにダウンロードされていません。管理者はファイル取出し権限（チェックアウトなし）を使用して、ユーザーによるファイルの取出し（ファイルを開く、表示する）を許可できます。ただし、ユーザーは、プロダクト・レコードでファイルは変更できません。

ユーザーがビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブからすべての添付ファイル動作を実行できるように、権限マスクと役割を作成できます。これによって、ファイル・フォルダ・オブジェクトに直接アクセスする必要がなくなります。このため、ユーザーがビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブからすべての添付ファイル動作を実行できる場合でも、ファイル・フォルダ・オブジェクトはユーザーに表示されません。

注意 ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブから行われる添付ファイル動作は、参照ファイル・フォルダ・オブジェクトで実行されます。たとえば、「添付ファイル」タブで添付ファイルをチェックアウトすることは、実際には参照ファイル・フォルダでチェックアウトすることになります。しかし、ユーザーに適切な添付ファイル権限がある場合、ファイル・フォルダ権限は必要ありません。

ただし、添付ファイル権限は、必要に応じてファイル・フォルダ・オブジェクトに直接適用できるため、ファイル・フォルダ・オブジェクトに対する権限は、これらのオブジェクトをアクティブに維持するユーザー用に保持してください。これらのユーザーは、ファイル・フォルダ・オブジェクトを検索して開き、ファイルのチェックインやチェックアウトを「ファイル」タブで行い、ファイルの印刷や表示を実行できます。ただし、ファイル・フォルダに関してすべてのユーザーにこのような幅広い権限を与えないでください。いずれにしても、これらの役割はユーザーに正しい機能を与えることはできません。

通常のユーザーにとってより有用なのは、ビジネス・オブジェクトの特定クラスまたはサブクラス（または必要に応じて特定オブジェクト）に対する添付ファイル権限です。製造元部品に対する添付ファイル権限があるユーザーは、添付ファイル・テーブルで選択された「フォルダ・バージョン」が最新バージョンであれば、製造元部品の「添付ファイル」タブで添付ファイル動作を実行できます。ユーザーの添付ファイル権限が製造元部品のサブクラス（例: レジスタ）に関連している場合、そのユーザーはすべてのレジスタの「添付ファイル」タブで添付ファイル動作を実行できます。ただし、ここでも添付ファイル・テーブルで指定された「フォルダ・バージョン」が最新バージョンであることが前提となります。

最新バージョンが選択されているかぎり、ユーザーは（現在のオブジェクトの「添付ファイル」タブから）チェックインやチェックアウトを実行したり、他の添付ファイル動作を実行できます。

したがって、製造元部品に対してのみ添付ファイル権限を持つユーザーは、その製造元部品の「添付ファイル」タブから添付ファイル動作を実行できますが、アイテムの「添付ファイル」タブからは実行できません。

要約すると、添付ファイルを使用するユーザーには、ファイル・フォルダ・オブジェクトに対する権限は不要ですが、処理するビジネス・オブジェクトに対する権限（クラス、サブクラス、または特定のオブジェクトを指定する権限とともに）は必要です。ユーザーはファイル・フォルダ・オブジェクトを作成、チェックイン、チェックアウトできますが、これは、そのユーザーにビジネス・オブジェクト添付ファイル機能権限がある Agile PLM クラス、サブクラス、またはオブジェクトに関連している場合のみです。

役割における添付ファイル機能権限

デフォルトの役割の中には、通常その役割で処理するオブジェクト・タイプ（その役割で作成や変更を行うように設計されたオブジェクト・タイプ）に対して、前述のすべての添付ファイル権限を持つ役割があります。これらの役割には、他の関連オブジェクト・タイプに対するファイル機能（取得、表示、印刷など）がある場合もあります。

たとえば、「アイテム・コンテンツ・マネージャ」役割には、アイテムおよび変更に対する 7 つの添付ファイル権限すべてが含まれています。また、製造元、製造元部品、価格オブジェクト（つまり、アイテムの「製造元」と「価格」タブに表示されているオブジェクト）に対するファイル取出し、ファイル印刷、ファイル表示の各権限（チェックアウトとチェックインはなし）も含まれています。

「アイテム・コンテンツ・マネージャ」役割の例に従って、ユーザーが Agile PLM システムのアクティビティに関連するすべてのオブジェクトの添付ファイルを取得、印刷、表示できる役割を作成できます。また、チェックイン/チェックアウト権限を、作成や変更が可能なユーザーのみに制限することもできます。ファイル・フォ

ルダ・オブジェクトに対する権限を含む役割では、ユーザーの添付ファイル機能を同レベルの精度まで制御できません。

変更権限と添付ファイル

変更権限によって、ユーザーはオブジェクトのタブにあるフィールドを変更または編集できます。変更権限は、「適用先」属性の設定を使用して割り当てます。

Agile PLM では、「変更」権限マスクの「適用先」プロパティを使用して、特定のユーザー動作と添付ファイル機能を決定し、管理します。たとえば、あるユーザーの役割に部品に対する「変更」権限マスクが含まれており、「適用先」プロパティに「**部品.添付ファイル.ファイルの説明**」の属性が含まれている場合、そのユーザーは、オブジェクトの「**添付ファイル**」タブで「ファイルの説明」フィールドを変更できます。この同じ変更動作は、参照ファイル・オブジェクトの「**ファイル**」タブの「ファイルの説明」フィールドも変更しますが、ファイル・フォルダ・オブジェクトの変更権限マスクは必要ありません。

次の表は、「変更」権限マスクの「適用先」プロパティと、それぞれが管理する添付ファイル動作を示しています。

注意 次の表では、「ファイル・フォルダ」または「ビジネス・オブジェクト」を、「適用先」属性列のクラスまたはサブクラスに対するプレースホルダとして使用しています。権限マスクの実際のクラスまたはサブクラス名は、権限マスクに指定されている再利用可能な条件によって決定されます。（223ページの「[権限マスクの構成要素](#)」を参照してください。）「注意」列に記載されている権限マスク例を表示する場合、「適用先」プロパティはその特定の権限マスクに対して適切です（たとえば、「製造元部品.添付ファイル.ファイル名」）。

「注意」列には、ユーザーに動作を提供する権限マスクを示す権限マスク例が、少なくとも 1 つは記載されています。この表は、権限マスク例の完全な一覧ではありません。「変更」権限マスクが不要な場合は、必要な権限マスクのみが表示されます（「例 - チェックイン（ファイル・フォルダ）」など）。ユーザーの動作を有効にするためには、複数の権限マスク（変更権限マスクに加えて）が必要です。これらはすべて一覧表示されています。

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは役割/注意の例
ファイル・フォルダ添付ファイル動作				
ファイル・フォルダにファイルを追加	変更	ファイル・フォルダ	ファイル.ファイル名	例 - 変更（ファイル・フォルダ）
ファイル・フォルダからファイルをチェックイン	チェックイン	ファイル・フォルダ		<p>例 - チェックイン（すべてのファイル・フォルダ） （条件 = 例 - すべてのファイル・フォルダ）</p> <p>例 - チェックイン（ファイル・フォルダ） （条件 = 例 - 自分がチェックアウトしたすべてのファイル・フォルダ）</p>

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは 役割/注意の例
ファイル・フォルダ からファイルを 削除	変更	ファイル・ フォルダ	ファイル.ファ イル名	例 - 変更 (ファイル・フォルダ)
<p>ファイル・フォルダ役割の例:</p> <p>例 - ファイル・フォルダ・マネージャはユーザーに独自のファイル・フォルダ・オブジェクトで作業する権限を与えます。</p> <p>例 - ファイル・フォルダ管理者はユーザーにすべてのファイル・フォルダ・オブジェクトで作業する権限を与えます。</p>				
ビジネス・オブジェクト添付ファイル動作				
ビジネス・オブジェ クトに新規添付 ファイルを追加	変更	ビジネス・ オブジェクト	添付ファイル. ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)
検索でビジネス・ オブジェクトに添 付ファイルを追加	ディスカ バリ	ビジネス・ オブジェクト (検索対象の ビジネス・オ ブジェクト)		たとえば、ユーザーが製造元部 品に追加する添付ファイルから アイテム・オブジェクトを検索 している場合は、そのユーザー が要求します。 例 - ディスカバリ (アイテム)
	変更	ビジネス・ オブジェクト	添付ファイル. ファイル名	例 - 変更 (製造元部品) 「例 - コンポーネント・エンジ ニア」役割には、これらの権限 マスク例が含まれ、ユーザーが 「追加 検索」を使用してアイ テムを検索することによって、 製造元部品に添付ファイルを追 加できるようにします。
ビジネス・オブジェ クトに1つのファ イル・フォルダ内の 複数の添付ファイ ルを追加し、「フォ ルダの説明」を指定	変更	ビジネス・ オブジェクト	添付ファイル. ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)
	変更	ビジネス・ オブジェクト	添付ファイル. フォルダの説 明	例 - 変更 (製造元部品)
ビジネス・オブジェ クトで添付ファイ ルをチェックイン	チェッ クイン	ビジネス・ オブジェクト		例 - チェックイン (製造元部 品)
ビジネス・オブジェ クトから添付ファ イルを削除	変更	ビジネス・ オブジェクト	添付ファイル. ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは役割/注意の例
ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブで「ファイルの説明」を編集	変更	ビジネス・オブジェクト	添付ファイル・ファイルの説明	例 - 変更（製造元部品）
ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブで「フォルダの説明」を編集	変更	ビジネス・オブジェクト	添付ファイル・フォルダの説明	例 - 変更（製造元部品）
ビジネス・オブジェクトの「添付ファイル」タブのバージョンを表示	読取り	ビジネス・オブジェクト	添付ファイル・ファイル名	例 - 読取り（製造元部品）

マークアップ・サブクラス

注意 添付ファイルのレッドライン・マークアップおよびファイル・フォルダのアドホック・レッドライン・マークアップは、AutoVue for Agile で作成、変更および表示します。

添付ファイルのレッドライン・マークアップを保存するには、ファイル・フォルダ・クラスのマークアップ・サブクラスを使用します。様々な種類のユーザーに適切な権限マスクを割り当てることによって、特定のユーザー（例: ベンダー）は各自のマークアップのみを表示および変更できますが、他のユーザーが作成したマークアップは表示できません。

マークアップ・サブクラスの権限マスクの詳細は、401ページの「[レッドライン・マークアップに関するデフォルトの役割と権限](#)」を参照してください。

Agile PLM では、マークアップ・サブクラス・オブジェクトは、マークアップ・オブジェクトに対する読取り権限があるユーザーに表示されます。たとえば、ユーザーがファイル・フォルダ・クラスのオブジェクトを検索すると、検索結果には、マークアップ・オブジェクトが含まれます。ただし、検索結果に含まれるレッドライン・マークアップ・ファイルを表示できるのは、そのレッドラインが関連付けられているアイテムの添付ファイルまたはファイル・フォルダのファイルを表示しているときのみです。マークアップ・サブクラス・オブジェクトの「ファイル」タブからレッドライン・マークアップを表示しようとすると、AutoVue for Agile を開くときにエラー・メッセージが表示されます。

239ページの「[ディスカバリ権限と読取り権限](#)」も参照してください。

マークアップの移動

マークアップの移動は、マークアップ・ファイルを基本ファイル間で移動（コピー）するために AutoVue 内でサポートされている汎用機能です。ユーザーは、以前のリビジョン（変更ベースのマークアップの場合）または以前のバージョン（アドホック・マークアップの場合）からマークアップを移動でき、これによって、後続のリビジョンまたはバージョンで行われた変更が、最初にマークアップに作成されたコメントに対応しているかどうかを確認できます。

この機能は、ファイル・フォルダ・クラス（ファイル・フォルダおよびマークアップ・サブクラスのオブジェクト）および新規デザイン・クラス（デザイン・サブクラスのオブジェクト）の両方で使用されます。次の 2 タイプのマークアップを使用します。

- 変更ベース - 変更の「添付ファイルのレッドライン」タブからのマークアップ
- アドホック - ファイル・フォルダまたはデザインの「ファイル」タブからのマークアップ

以前のリリースまたはバージョンのマークアップで、基本ファイルの拡張子が同一の場合は、移動するマークアップを選択できます。たとえば、バージョン 1 が `file_v1.pdf`、バージョン 2 が `file_v2.pdf` の場合です。

レッドライン・マークアップに関するデフォルトの役割と権限

Agile PLMでは、ファイル・フォルダのマークアップ・サブクラスを使用して、AutoVue for Agileで作成された添付ファイルのレッドライン・マークアップを保存します。マークアップ・サブクラスの権限マスクのデフォルト・セット、および「自分をマークアップ」と「すべてをマークアップ」の2つのデフォルトの役割が用意されています。PLMをアップグレードした場合は、役割の例「例 - 自分をマークアップ」および「例 - 他のユーザーをマークアップ」を参照して、これらの役割を作成する必要があります。400ページの「[マークアップ・サブクラス](#)」も参照してください。

注意 「自分をマークアップ」と「すべてをマークアップ」のデフォルトの役割は、「添付ファイルのレッドライン（自分）」（ARS）と「添付ファイルのレッドライン（他のユーザー）」（ARO）の各権限を置き換えるものです。ARS および ARO 権限は無効になり、ARS と ARO の権限マスクも無効です。ただし、すでに割り当てられている ARS または ARO のカスタム権限マスクは削除されないため、マークアップ・サブクラスの権限マスクまたは役割を使用してレッドライン機能を作成および割り当てるときは、ARS と ARO の権限マスクを参照できます。

ユーザーはマークアップ機能を使用して、次のタイプのレッドライン・マークアップを作成および変更できます。

- 読取り権限がある変更指示オブジェクトの対象アイテムについて、添付ファイルのレッドライン・マークアップを作成および変更できます。
- 読取り権限があるファイル・フォルダ・オブジェクトについて、アドホック・ファイル・フォルダのレッドライン・マークアップを作成および変更できます。

「自分をマークアップ」役割によって、ユーザーは変更指示の「対象アイテム」タブから添付ファイルをレッドラインできます。また、ファイル・フォルダの「ファイル」タブにあるファイルをアドホック・レッドラインできます。変更または削除できるのは、自分が作成したレッドラインのみです。「自分をマークアップ」役割の権限マスクは、「自分をマークアップ」の条件「ページ2.ユーザーの作成、等しい、\$USER をマークアップ」に基づいています。

「他のユーザーをマークアップ」役割によって、ユーザーは変更指示の「対象アイテム」タブから添付ファイルをレッドラインできます。また、ファイル・フォルダの「ファイル」タブにあるファイルをアドホック・レッドラインできます。変更または削除できるのは、他のユーザーが作成したレッドラインのみです。「他のユーザーをマークアップ」役割の権限マスクは、「すべてのマークアップ」の条件に基づいています。

次の表は、マークアップ・サブクラスの各デフォルト役割におけるデフォルト権限マスクを示しています。

「自分をマークアップ」役割	「他のユーザーをマークアップ」役割
自分のマークアップの読取り	すべてのマークアップの読取り
自分のマークアップを変更	すべてのマークアップを変更
自分のマークアップをチェックアウト	すべてのマークアップをチェックアウト
自分のマークアップをチェックイン	すべてのマークアップをチェックイン
マークアップの作成	マークアップの作成

レッドライン・マークアップ権限のガイドライン

次のルールとガイドラインは、レッドライン・マークアップ機能に適用されます。

- ユーザーに特定マークアップ・オブジェクトに対する読取り権限がない場合、関連するレッドライン・マークアップは AutoVue for Agile のマークアップ・パネルに表示されません。
- ユーザーに AutoVue for Agile のマークアップ・パネルに表示された特定マークアップ・オブジェクトに対する変更権限がない場合、AutoVue for Agile のマークアップ・パネルは無効になり、ユーザーは表示されたファイルのレッドライン・マークアップを編集できません。
- ユーザーに「マークアップの作成」オブジェクト権限マスクがない場合は、AutoVue for Agile で新しいマークアップを作成できません。
- 「管理」>「設定」>「データ設定」>「クラス」で、「ファイル・フォルダ」クラスに対して、「ページ 2」の「ユーザーの作成」属性を有効にする必要があります。デフォルト値は \$USER です。この属性は、各レッドライン・マークアップの所有権を判断するために使用されます。
- マークアップ・サブクラスと他のすべてのファイル・フォルダ・サブクラスとの間で権限マスクを区別するためには、ファイル・フォルダの「作成」、「読取り」、「変更」、「チェックアウト」、および「チェックイン」権限マスクで、特定のファイル・フォルダ・サブクラス（例: マークアップ・サブクラス、ファイル・フォルダ・サブクラス）を指定する条件を使用する必要があります。これによって、マークアップ・サブクラスに固有の一連の権限マスクを使用できます。マークアップ固有の権限マスクが割り当てられるのは、レッドライン機能を付与する必要があるユーザーのみです。

これとは対照的に、ファイル・フォルダ基本クラスまたはファイル・フォルダ・クラスを指定する条件に基づく権限マスクは、すべてのファイル・フォルダ・サブクラスに適用されるため、（ユーザーにマークアップ・サブクラスの権限マスクを割り当てないことによる）レッドライン機能の制限ができません。つまり、ファイル・フォルダ基本クラスまたはファイル・フォルダ・クラスの条件に基づく権限マスクは、常にマークアップ・サブクラス・オブジェクトに適用されます。
- マークアップ・サブクラスのデフォルトの権限マスクは、広範囲に定義された再利用可能な条件（「すべてのマークアップ」と「自分をマークアップ」）に基づいています。ただし、マークアップ・サブクラスの権限マスクを作成する際は、これらの条件に制限されません。たとえば、リスト属性またはマルチリスト属性を有効にし、その属性の設定に基づいてマークアップ機能を判断する条件を作成できます。

ドキュメント管理の機能拡張

ここでは、添付ファイルに関連する最新の機能拡張について説明します。

全バージョンの表示

標準の「アクション」メニューに追加された最も重要なアクションは、「全バージョンの表示」です。「全バージョンの表示」アクションは、ファイル・フォルダおよびデザインのオブジェクトで使用できます。

「全バージョンの表示」ユーティリティでは、個々のデザインやファイル・フォルダのバージョンが追跡されるため、ファイル・フォルダ構造やデザイン構造が拡大に伴って非常に役立ちます。各バージョンには、次の内容が表示されます。

- 承認済: ワークフローでファイル・フォルダまたはデザインを承認したユーザー。「承認待ち」アイコン（まだ承認していないユーザー）も含まれます。
- チェックイン日

- チェックイン・ユーザー: バージョンにチェックインし、デザインの「**構造**」タブ、およびデザインまたはファイル・フォルダの「**添付ファイル**」タブを表示できるユーザーを取得します。
- 変更情報、ラベル (ユーザーが入力済)
- リビジョン、改訂日

多くのフィールドの内容は、オブジェクトの「**タイトル・ブロック**」タブから取り出されます。

「**表示**」ドロップダウンを使用すると、デザインの選択したバージョンを迅速に**表示**したり、2 つのバージョンを選択して視覚的に**比較**できます。

添付ファイル・サイズの制限

管理者は、「**システム設定**」>「**Viewer とファイル**」>「**アップロード・ファイル・サイズ制限(MB)**」でアップロードできるファイルの最大サイズを設定できます。この設定によって、Java クライアント、Web クライアント、ポータル・クライアント、および SDK のアップロード・ファイルの最大サイズ (MB 単位) が定義されます。

デフォルトは 0 で、「制限なし」を意味します。正の整数を指定して、サイズ制限を MB 単位で設定します。Java クライアントおよび Web クライアントでは、ファイル・サイズがこの制限を超えると、ユーザーに対してエラー・メッセージが表示されます。正常にアップロードされた (アップロードに失敗する前) ファイルはアップロードされたままですが、他のファイル (アップロードに失敗した後) はアップロードされません。

チェックイン・ユーザーの識別

「チェックイン・ユーザー」フィールドは、ファイル・フォルダやデザインの「**タイトル・ブロック**」タブ、およびすべてのビジネス・オブジェクトの「**添付ファイル**」タブに表示されます。このフィールドでは、指定のバージョンにチェックインしたユーザーを識別できます。

このフィールドは、プロジェクトのコンテンツのタブには表示されません。

URLは最大 255 文字

添付する URL の長さは最大 255 文字です。

添付ファイルへの簡易アクセスURLを生成する

添付ファイル URL を使用すると、次の操作を実行できます。

- アイテム・オブジェクトの添付ファイルに対する URL を生成する
- ファイル・フォルダ・オブジェクトのファイルに対する URL を生成する
- プロジェクト・オブジェクトの「**コンテンツ**」タブにあるファイルに対する URL を生成する
- Agile から別のアプリケーションに URL を貼り付ける
- Agile アプリケーションの外部でファイルを開く

添付ファイル URL は、アイテム、アクティビティおよびファイル・フォルダから、次の 2 つの方法で生成できます。

- Agile PLM コマンドを使用して URL をクリップボードにコピーする

403ページの「[Agileで生成される添付ファイルへの簡易アクセスURL](#)」を参照してください。

- スマートな添付ファイル URL を理解しやすい形式で手動入力する

404ページの「[ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLの形式](#)」を参照してください。

この URL 形式を使用すると、参照先のオブジェクトやファイルを識別できます。理解しやすい形式であるため、ファイルの配置場所を認識している場合は、Agile システムにログインしなくても、特定の添付ファイルを指し示す独自の URL を生成できます。

Agileで生成される添付ファイルへの簡易アクセスURL

Web クライアントでは、オブジェクトの「添付ファイル」タブ、アクティビティの「コンテンツ」タブ、およびファイル・フォルダの「ファイル」タブから、添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成できます。そのためには、次のいずれかを実行した後で「ショートカットの取得」をクリックします。

- 「添付ファイル」、「コンテンツ」または「ファイル」タブから 1 行のみ選択し、その行のファイルに対応するフォルダを指し示す URL を生成します。
- 「添付ファイル」、「コンテンツ」または「ファイル」タブですべての行を選択し、そのタブにあるファイルのコレクションを指し示す URL を生成します。

注意 オブジェクトの URL を生成するには、そのオブジェクトに対する読取り権限が必要です。

注意 「添付ファイル」、「コンテンツ」または「ファイル」タブで複数の行を選択すると、「ショートカットの取得」リンクは無効になります。

URL がクリップボードにコピーされます。コピーした URL を別のアプリケーションまたはファイル（ワード・プロセッサ・ファイル、スプレッドシート・ファイル、電子メールなど）に貼り付けます。

ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLの形式

ファイルの配置場所を認識している場合は、Agile システムにログインしなくても、理解しやすいスマートな URL 形式を使用して、特定の添付ファイルを指し示す独自の URL を生成できます。

ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式は、オブジェクト・タイプによって異なり、次の 3 つのメイン・カテゴリに分類されます。

- （404ページの）[アイテムの添付ファイルへの簡易アクセスURLの形式](#)
- （406ページの）[ファイル・フォルダへの簡易アクセスURLの形式](#)
- （407ページの）[プログラム・コンテンツへの簡易アクセスURLの形式](#)

アイテムの添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLの形式

アイテムの添付ファイルに対するスマートな URL は、次の形式で生成できます。

[http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/\[Revision/ChangeNumber\]/files/Folder/<FolderNumber>/\[<FileAction>\]](http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/[Revision/ChangeNumber]/files/Folder/<FolderNumber>/[<FileAction>])

または

[http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/\[Revision/ChangeNumber\]/files/<FileName>\[/<FileAction>\]](http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/[Revision/ChangeNumber]/files/<FileName>[/<FileAction>])

ここで、

<Server:Port>/<Virtual Path> 要素	Agile インスタンスを識別します。
link	テキスト「link」は、URL を Agile サーバーへの特別な添付ファイル URL として識別します。
ObjectType	アイテム、ファイル・フォルダ、またはプロジェクト/アクティビティのサブクラスを参照します。
ObjectNumber	オブジェクト・タイプの実際のオブジェクト番号を参照します。
Revision	リビジョンに対応する変更番号を指定してアイテム・リビジョンを識別します。
ChangeNumber	アイテムのそれぞれのリビジョン（リリース済や保留中）を識別します。番号を指定しない場合は、最新のリリース済リビジョンが添付されます。番号を指定せず、アイテムにリリース済変更がない場合は、初版リビジョンが添付されます。
Folder	オブジェクトが実際のファイルではなくファイル・フォルダであることを示します。
FolderNumber	選択した行に関連するファイル・フォルダを識別します。取り出されるファイルのバージョンは、アイテムの特定リビジョンに基づいた最新バージョンです。
FileName	指定したアイテムのバージョンに添付された特定ファイルの名前を参照します。
FileAction	取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。 URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。

アイテムの特定のリビジョンに、「添付ファイル」タブの同じフォルダ内にある複数のファイルが含まれており、そのファイルが別のバージョンのフォルダから参照されている場合、フォルダベースの URL は、そのアイテム・リビジョンの「添付ファイル」タブから実際の添付ファイル・セットを反映できません。

アイテムの添付ファイルに対してユーザーが生成する URL の例は、次のとおりです。

- <http://myappserver/mycompany/Link/Document/DOC0001/files/Folder/Folder001>
DOC0001 の最新のリリース済リビジョンに添付された Folder001 内の全ファイルを含む ZIP ファイルが返されます。
- <http://myappserver/mycompany/Link/Document/DOC0001/files/Folder/Folder001/VIEW>
DOC0001 の最新のリリース済リビジョンに添付された Folder001 内の全ファイルが Viewer に表示されます。

アイテム・オブジェクトの添付ファイルへのスマートな簡易アクセスURLに関する制限

アイテム・オブジェクトの添付ファイルを取り出す際は、次の制限事項が適用されます。

- アイテムの特定のリビジョンに、「添付ファイル」タブの同じフォルダに属する複数のファイルが含まれており、それらのファイルが別のバージョンのフォルダから参照されている場合、フォルダベースの URL は、そのアイテム・リビジョンの「添付ファイル」タブから実際の添付ファイル・セットを反映できません。たとえば、アイテム P0001 があり、そのアイテムのリビジョン A に 2 つの添付ファイル P0001_3dmodel.dwg と P0001_specs.pdf があり、両方とも Folder1 に存在しているとします。DWG ファイルはファイル・フォルダのバージョン 2 から参照され、PDF ファイルはファイル・フォルダのバージョン 5 から参照されていると想定します。この場合に、次の URL を指定したとします。

<http://server:port/<VirtualPath>/link/Part/P0001/Revision/C0001/files/Folder/Folder1>

Folder1 のバージョン 5 またはバージョン 2 のいずれかに含まれるすべてのファイルが返されます (結果は予測不能です)。

一方、次の URL を指定したとします。

<http://server:port/<VirtualPath>/link/Part/P0001/Revision/C0001/files/ALL>

アイテムのリビジョン A に属するファイルの完全なセットが返され、このセットには、Folder1 のバージョン 2 からの P0001_3dmodel.dwg および Folder1 のバージョン 5 からの P0001_specs.pdf が含まれています。

- アイテムの「添付ファイル」タブで参照されているファイル・フォルダの履歴バージョンからファイルを返す、アイテム・ベースの URL は生成できません。ただし、これを実現するために、ユーザーはフォルダベースの URL を生成できます。
- 次のような URL を指定したとします。

[http://server:port/<VirtualPath>/link/ObjectType/ObjectNumber\[/Rev/ChangeNumber\]/files/FileName\[/FileAction\]](http://server:port/<VirtualPath>/link/ObjectType/ObjectNumber[/Rev/ChangeNumber]/files/FileName[/FileAction])

同じ名前 (ファイル名とファイル拡張子が同じ) の 2 つのファイルが添付ファイル・テーブルに存在し、ユーザーがファイル名を使用して URL を生成した場合は、最初に検出されたファイルのみが取り出されます。アイテムの「添付ファイル」タブにあるファイルへのアクセスに ALL オプションを使用し、添付ファイル・テーブルに同じ名前のファイルが複数存在する場合、または、ファイル・フォルダのすべてのファイルを返すように URL を生成し、同じ名前のファイルが複数存在する場合は、同じ名前のファイルが複数存在することを示すエラーが表示され、ファイルの有効な ZIP アーカイブは生成されません。

- プロジェクトの「コンテンツ」タブにあるファイルへのアクセスに ALL オプションを使用し、同じ名前のファイルが複数存在する場合は、同じ名前のファイルが複数存在することを示すエラーが表示され、ファイルの有効な ZIP アーカイブは生成されません。

ファイル・フォルダへのスマートな簡易アクセス URL の形式

ファイル・フォルダに対するスマートな URL は、次の形式で生成できます。

[http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/files/<FileName>\[/</version>\[/<FileAction>\]\]](http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/files/<FileName>[/</version>[/<FileAction>]])

ここで、

<Server:Port>/<Virtual Path> 要素	Agile インスタンスを識別します。
link	テキスト「link」は、URL を Agile サーバーへの特別な添付ファイル URL として識別します。
version	ファイル・フォルダの特定バージョンを識別します。値には、数値または文字列を指定できます。デフォルトは LATEST です。

FileName	<p>フォルダ内の特定ファイルの名前を参照するか、文字列 ALL によってフォルダの特定バージョン内の全ファイルを添付します。</p> <p>フォルダの特定バージョン内に同じ名前のファイルが複数存在し、ファイル名に基づいて URL が生成されている場合は、ファイルの最初のバージョンのみが添付されます。同じ名前のファイルが複数存在するフォルダへのアクセスに ALL 値は使用できません。</p>
FileAction	<p>取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。</p> <p>URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。</p>

ファイル・フォルダの添付ファイルに対してユーザーが生成する URL の例は、次のとおりです。

- <http://myappserver/mycompany/Link/FileFolder/Folder0001/files/abc.txt/1>
Folder0001 のバージョン 1 から abc.txt ファイルが取得されます。
- <http://myappserver/mycompany/Link/FileFolder/Folder0001/files/ALL/VIEW>
Folder001 の最新バージョン内の全ファイルが Viewer に表示されます。

プログラム・コンテンツへのスマートな簡易アクセスURLの形式

プロジェクトおよびアクティビティの「コンテンツ」タブにあるファイルに対するスマートな URL を生成できます。「コンテンツ」タブでは、任意のオブジェクトを有効なコンテンツとして指定したり、「添付ファイル」タブと同様に、外部ファイルを追加することができます。ただし、「コンテンツ」タブでは、添付されたファイルに関連するフォルダ・オブジェクトが有効なコンテンツとして保存されます。このため、取り出す際は、フォルダ全体を添付する必要があります。

「コンテンツ」タブにあるファイルに対するスマートな URL は、次の形式で生成されます。

[http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/content/Folder/<FolderNumber>\[/<FileAction>\]](http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>/content/Folder/<FolderNumber>[/<FileAction>])

ここで、

ObjectType	プロジェクト・オブジェクトのサブクラスを表します。
ObjectNumber	プロジェクト・オブジェクトの識別子を表します。
content	「コンテンツ」タブを示します。
Folder	特定のフォルダを取り出すことを示します。
FolderNumber	「コンテンツ」タブから取り出すフォルダの番号を参照します。フォルダの最新バージョンが常に取り出されます。
FileAction	<p>取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。</p> <p>URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。</p>

簡易アクセスURLを使用して添付ファイルにアクセスする

添付ファイルへの簡易アクセス URL をクリックまたは開くと、ログイン・ポップアップが表示されます。添付ファイルを表示するには、Agile システムにログインする必要があります。次に、Agile PLM では、URL に指定されたファイルまたはファイル・セットを取得または表示する適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証されます。添付ファイルは、サポートされているすべてのブラウザ、AutoVue for Agile、またはファイルが作成されたアプリケーションで表示可能です。

例:

1. 電子メールで、添付ファイルへの簡易アクセス URL をクリックすると、Agile のログイン・ポップアップが表示されます。
2. 必要なログイン情報を入力します。

ファイルを読み取って表示するための適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証されます。

注意	URL がファイルのコレクションを返し、ユーザーに 1 つ以上のファイルに対する適切な取り出しまたは表示権限がない場合は、返されるコレクションからそれらのファイルが除外されます。ただし、適切な取り出しまたは表示権限のある残りのファイルを含むファイルのコレクションがユーザーに返されます。
-----------	---

デザインの管理

この章のトピック

■ デザインに関する企業のニーズを評価する	409
■ デザイン・データ・モデルの目的	409
■ デザイン・クラスの概要	410
■ デザイン・クラスのタブ	411
■ デザインに関する管理者設定	414

デザインに関する企業のニーズを評価する

Agile PLM 管理のその他の分野と同じように、最も重要なステップは管理者のプロパティ設定前にあります。この章は、前の章にある最初の質問にユーザーが肯定的に回答していることを前提にしています。

- 企業では CAD デザインやグラフィック・ファイルを作成するか。作成する場合は、デザイン・クラスから作成します。

デザイン・クラスは、ファイル・フォルダ基本クラス内のビジネス・クラスです。

デザイン・クラスで作成されたオブジェクトには、ファイル・フォルダと同じプロパティと動作が多数あります。デザイン・クラスは、Engineering Collaboration (EC) ソリューションで使用するよう拡張されています。そのため、この章ではこれらの相違点を重点的に説明します。391ページの「[添付ファイルの管理](#)」の章には、ファイル・フォルダ基本クラスに関する基本的な詳細が記載されています。

注意 Agile PLM へのデザイン構造の配置には、Agile EC 統合が必要です。つまり、CAD デザイン・グラフィック・ファイルを十分に使用するには、統合アプリケーションが必要です。このアプリケーションでは、デザイン・オブジェクトの自動チェックアウトとチェックイン、デザイン構造の親から子へのバージョンニングの追跡と更新などを実行できます。Agile EC の詳細は、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

デザイン・データ・モデルの目的

デザイン・クラスは、明示的なバージョンによってデザイン・オブジェクト間の構造（「デザイン構造」と呼びます）をサポートし、CAD ツールとの統合をサポートしています。デザイン・オブジェクトは、ファイル・フォルダとよく似ていますが、いくつかの追加機能と、デザイン・オブジェクトの目的を実現するための特別な機能を備えています。

デザイン・クラスは、特に CAD ユース・ケース向けには設計されていないドキュメント・クラスおよび DocuBOM データ・モデルを使用して、PLM に存在していた制限を克服します。次の 3 つの主要な問題は、デザイン構造によって解決されます。

- 構造解決策の容易な取得
 - デザイン間の構造情報は、必要に応じて CAD 環境で取得できます。一方、DocuBOM 構造は、固定し

た構造解決策を直接サポートしていません。

□ データ・ナビゲーションの大幅な機能拡張

- デザイン・オブジェクトの構造は明白で、ナビゲートは容易です。一方、部品 BOM とドキュメント BOM の組合せは、Agile ユーザー・インタフェースでのナビゲートが困難です。

□ 変更管理プロセスに対するオーバーヘッドの軽減

- Product Collaboration ソリューションでの完全な変更管理プロセスには、多数の CAD ユース・ケースについて過剰なオーバーヘッドがあります。

デザイン・クラスは新規のインストールでは有効になりますが、PLM のアップグレード時は無効になっています。インストールのアップグレードでは、Agile 管理者がデザイン・クラスを有効にする必要があります。

デザイン・クラスを使用した構造のデザインの利点

前述の CAD 環境に対する利点の他に、次の利点があります。

- PLM 内での CAD データの容易な認識。CAD データは CAD に表示されるように表示されます。
- ユーザーは、部品名を二重に使用できます。これは、デザインと部品がオブジェクトの個別のクラスであるためです。
- CAD エンジニアによるデザイン・オブジェクトの検索が容易になります。
- 単一オブジェクトの使用には、次のような利点があります。
 - 変更履歴が個別の変更オブジェクトではなく、デザイン・オブジェクト上にある
 - デザイン・ファイルが個別のファイル・フォルダにない
 - バージョン固有の使用箇所
 - バージョン固有の送信スリップ
- デザイン・クラスによって、次のバージョンの Agile Engineering Collaboration が有効になり、PLM モデル構造に組み込まれている機能が取得されて利用されます。

デザイン・クラスの概要

デザイン・オブジェクトは Java クライアントから開くことができますが、これにより Web クライアントが開き、ユーザーは Web クライアントで排他的にデザインを使用します。

「チェックアウト」ボタンがあります。ユーザーは、デザインをチェックアウトしないとデザイン構造を変更できません。

デザインの親バージョンは子バージョンを明示的に指し示しているため、ユーザーは、バージョンをチェックアウトして子をアップグレードし、変更を反映するためにその子を親にチェックインして戻す必要があります。CAD では、1 つの部品に対して複数のモデルが存在している場合があります（たとえば、単一オブジェクトについて 20 または 30 のバージョンがある場合があります）。しかし、Product Collaboration では、部品は単一の構造に割り当てられます。さらに、このシステムでは、すべての子部品をチェックインせずにデザイン構造を確認できます。

子部品をチェックアウトしたエンジニアはその部品をチェックインして戻す必要があります。つまり、そのエンジニアは、部品を BOM を再結合するためにチェックアウトをキャンセルすることはできません。キャンセルしようとすると、「このバージョンは使用中のためキャンセルできません。」というエラー・メッセージが表示されます。

「バージョン」ドロップダウン・リストの機能によって、チェックアウトしたバージョンは増分されてカッコ内に表示されます (例: [4])。これによって、ユーザーは、オブジェクトをチェックインして戻したときの新しいバージョン

ン番号を常に確認できます。この機能は、ファイル・フォルダとデザイン・クラスの両方に適用されます。

全バージョンの表示

標準の「アクション」メニューで、最も重要な追加アクションは、「全バージョンの表示」です。「全バージョンの表示」アクションは、ファイル・フォルダとデザイン・オブジェクトで使用できます。

「全バージョンの表示」ユーティリティは、各デザインまたはファイル・フォルダのバージョンを追跡するため、ファイル・フォルダ構造やデザイン構造の増大時に非常に役立ちます。各バージョンには、次の情報が表示されます。

- 「承認済」。ワークフローでファイル・フォルダまたはデザインを承認したユーザー。「承認待ち」アイコン（まだ承認していないユーザー）も表示されます。
- 「チェックイン日」
- 「チェックイン・ユーザー」。バージョンをチェックインしたユーザーが表示されます。これは、デザインまたはファイル・フォルダにある、デザインの「構造」タブと「添付ファイル」タブにも表示されます。
- 「変更情報」と「ラベル」（ユーザーが入力した内容）。
- 「リビジョン」と「改訂日」。

これらのフィールドの多くは、オブジェクトの「タイトル・ブロック」タブから取り出されます。

「表示」ドロップダウンを使用すると、選択したバージョンのデザインをクイック表示したり、2つのバージョンを選択して視覚的に比較できます。

デザイン・クラスのタブ

デザイン・オブジェクトのタブには、「タイトル・ブロック」、「ファイル」、「構造」、「送信スリップ」、「関係」、「使用箇所」および「履歴」があります。これらのタブのほとんどについては、後続のセクションで説明します。「関係」タブと「履歴」タブについては、『Agile PLM スタート・ガイド』で説明されています。

「タイトル・ブロック」タブ

デフォルトでは、デザイン・オブジェクトの「タイトル・ブロック」タブには、次の表に示すフィールドが表示されます。「タイトル・ブロック」タブに表示する有効なフィールドは管理者が決定します。

Web クライアントでは、この「タイトル・ブロック」タブに、「ページ 2」および「ページ 3」という 2 つの追加セクションをデフォルトで表示できます。Agile 管理者は、カスタム・クラス・フィールドを「ページ 2」セクションに、カスタム・サブクラス・フィールドを「ページ 3」セクションに追加できます。Agile 管理者は、これらのセクションを有効にするかどうかを決定し、名前を決定します。

フィールド	説明
番号	デザイン・オブジェクトの番号で、ファイル・オブジェクトの作成時に入力されます。
タイプ	このデザイン・オブジェクトのサブクラス。このフィールドは、Agile システムの設定に従って、デザイン・オブジェクトの作成時に自動的に入力されます。
ライフサイクル・フェーズ	現在のライフサイクル。リストから選択されます。
説明	デザイン・オブジェクトを説明するテキスト。

フィールド	説明
バージョン	デザイン・オブジェクトの現在選択されているバージョン。
最終変更日	デザイン・オブジェクトが最後に変更された日付。
チェックアウト・ステータス	デザイン・オブジェクトが現在チェックアウトされているか、チェックインされているかを示します。
チェックアウト・ユーザー	デザイン・オブジェクトをチェックアウトすると、そのデザイン・オブジェクトをチェックアウトしたユーザーが表示されます。
チェックアウト日	デザイン・オブジェクトをチェックアウトすると、そのデザイン・オブジェクトのチェックアウト日が表示されます。
チェックアウトした場所	チェックアウト・ユーザーの「ファイル・プロダクティビティ・プリファレンス」が「詳細」に設定されている場合は、チェックアウトした場所が自動的に入力されます。
「チェックイン日」	デザイン・オブジェクトをチェックインすると、そのデザイン・オブジェクトのチェックイン日が表示されます。
作成日	デザイン・オブジェクトが作成された日付。
ラベル	指定したラベルを保持するバージョン固有のテキスト・フィールド。
コンポーネント・タイプ	デザインが表すコンポーネントのタイプが表示されます。
サムネイル	デザイン・オブジェクトのサムネイル・グラフィックに関する情報が表示されます。サムネイルの有効または無効は、システム全体のプリファレンス「サムネイル・サポート」と「ユーザー・プリファレンス」の設定によって決定されます。
リビジョン	デザイン・バージョンの対象リビジョンを保持するバージョン固有のテキスト・フィールド。
改訂日	デザイン・バージョンに関連する改訂日を保持するバージョン固有の日付フィールド。
チェックイン・ユーザー	現在選択されているバージョンをチェックインしたユーザーを示すバージョン固有のフィールド。自動的に入力されます。

「ファイル」タブ

デザインの「ファイル」タブで使用できるアクションは、ファイル・フォルダの「ファイル」タブで使用できるアクションと同じです。同様に、この2種類のオブジェクトの「ファイル」タブに関する権限もほとんど同じになります。ただし、ユーザー・アクセスを最も効率よく制御するために、権限はファイル・フォルダ基本クラスをベースにしないでください。この基本クラスは、ファイル・フォルダとデザイン両方のクラス・オブジェクトの「ファイル」タブに適用されます。

デザイン・モデル・オブジェクトに対して「ファイル」タブのアクションを実行するエンド・ユーザーには、適切な「変更」権限マスクが必要です。396ページの「[添付ファイル権限](#)」で、特に、397ページの「[変更権限と添付ファイル](#)」にある表の「ファイル・フォルダ添付ファイル動作」を参照してください。

重要 ファイル・フォルダ基本クラスに基づく権限マスクを使用している場合、割り当てられているユーザーには、ファイル・フォルダ・クラス・オブジェクトおよびデザイン・クラス・オブジェクトの両方に対して同じ変更、チェックイン、チェックアウトなどの機能が指定されます。これら2つのクラスに対して個別のタイプのアクセス権を付与する必要がある場合は、ファイル・フォルダ・クラス（またはサブクラス）、あるいはデザイン・クラス（またはサブクラス）に基づいて、権限マスクを作成して定義する必要があります。

「構造」タブ

デザインの「構造」タブは、デザインの「タイトル・ブロック」タブまたは「ページ 2」からの読取りフィールドをサポートしています。

「ファイル」タブと同様に、「構造」タブを編集できるのは、オブジェクトがチェックアウトされているときのみです。

構造内では、親によって子のバージョンが明示的に指定されます。

多段階ドロップダウンを使用すると、構造を**展開**または**縮小**できます。

AutoVue for Agile では、デザインの「構造」タブおよびファイル・フォルダの「添付ファイル」タブをサポートしています。

注意 ファイル・フォルダ（ファイル・フォルダ・サブクラスおよびマークアップ・サブクラスのオブジェクト）には、「構造」タブがないため、これらのファイル・フォルダはモデル構造に挿入できません。一方、添付ファイルを使用できる場所（つまり、ファイル・フォルダ・オブジェクト）では、デザインを使用できます。

複数のアイコンは、次の状態のデザインを示しています。

- チェックアウト済
- 添付済
- 最新バージョン
- 添付ファイルあり

「送信スリップ」タブ

「送信スリップ」タブは機能的にはバージョン固有です。デザイン・オブジェクトでのサインオフでサインオフされるのは、そのオブジェクトの固有のバージョンのみです。

承認者とオブザーバの追加と削除は、デザイン・オブジェクトがチェックインされているときのみ実行できます。承認者を追加または削除して、サインオフ・アクションを実行するユーザーには、デザイン・オブジェクトに対する適切な権利マスクが必要です。

「使用箇所」タブ

「使用箇所」タブの 2 つのテーブル（「添付ファイル」テーブルと「デザイン」テーブル）には、このデザインに関連するファイルが表示されます。

「使用箇所」のテーブルは、「構造」タブの列と読取りフィールドを継承しています。

デザインに関する管理者設定

このセクションでは、便宜上様々な管理者設定を集約しています。管理者の機能の詳細は、ノード別の章を参照してください。

「構造テーブルの表示」スマートルール

スマートルール「構造テーブルの表示」では、非表示（CAD 以外のビジネス環境に適切）または表示の選択肢が提供されます。

デザイン固有の役割と権限

デザイン・エンジニアは、デザイン・クラス・オブジェクトの作成、アクセス、管理に適応した役割です。

デザイン・ビジネス・オブジェクトに関する権限と権限マスク（「構造」タブでの権限と権限マスクを含む）には、Agile PLM ディスカバリおよび読取りモデルが使用されます。

承認者を追加または削除して、サインオフ・アクションを実行するユーザーには、デザイン・オブジェクトに対する適切な権利マスクが必要です。

注意 CAD と Agile PLM を組み合わせた統合アプリケーションで作業する各 CAD ユーザーは、Agile PLM ユーザーでもある必要があります。各 CAD ユーザーには、デザイン・モデル・オブジェクトに対してチェックアウト、変更、チェックインなどの各アクションを実行できる適切な PLM 役割と権限が必要です。CAD と Agile PLM の統合アプリケーションの詳細は、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

重要 ファイル・フォルダ基本クラスのレベルで記述された権限マスクは、ファイル・フォルダ・クラス（ファイル・フォルダとマークアップ・サブクラス）とデザイン・クラス（デザイン・サブクラス）の両方に影響を与えることに注意してください。CAD環境に適応した権限マスクは、デザイン・クラスのレベルで入力してください。

Agile ドライブの管理

この章のトピック

- 概要 415

概要

Agile ドライブはシステム拡張機能です。この機能を使用すると、ユーザーは、Agile PLM アプリケーションを起動せずに、Agile オブジェクトのファイル管理操作を実行できます。Agile ドライブは、Agile の分散ファイル・マネージャをネットワーク・プレースとしてシステムに接続します。これによって、Agile オブジェクトの添付ファイルに対してコピーや削除などの Explorer 同様の操作を実行できます。Agile ドライブでは、Agile オブジェクトがフォルダとして表示され、添付ファイルはそのフォルダ内のファイルとして表示されます。

ファイル管理

Agile ドライブを使用すると、添付ファイルとして Agile オブジェクトに関連付けられているドキュメントや図面などのファイルで作業を実行できます。ユーザーがファイルで実行できるアクションは、次のとおりです。

- ファイルの表示/読取り
- ファイルの保存
- ファイルの更新/編集
- ファイルの削除
- ファイル・プロパティの表示
- ファイルの追加
- ファイルの移動
- ファイルのコピー

ユーザーがフォルダで実行できるアクションは、次のとおりです。

- フォルダ・プロパティの表示

Agile ドライブの有効化

Agile ドライブを有効にする手順は、次のとおりです。

1. 「システム設定」 > 「プリファレンス」に進みます。
2. 「Agile ドライブ」 ドロップダウン・リストから、「有効」を選択します。
3. すべての分散ファイル・マネージャを再起動します。

注意 デフォルトでは、Agile ドライブは「無効」に設定されています。

Agile ドライブを有効にすると、そのアクセス権は読取り専用になります。

必要な設定を構成し、ユーザー向けに Agile ドライブを設定し、Agile ドライブを使用してアクションを実行する方法の詳細は、Agile Drive ユーザー・ガイドを参照してください。

シングル・サインオンの設定

この章のトピック

- PLMにおけるシングル・サインオンの概要..... 417
- Windows NTLMを使用したSSOの設定と配置..... 418

Agile PLM では、PLM システムにシングル・サインオン（SSO）機能を統合できる可能性があります。

PLMにおけるシングル・サインオンの概要

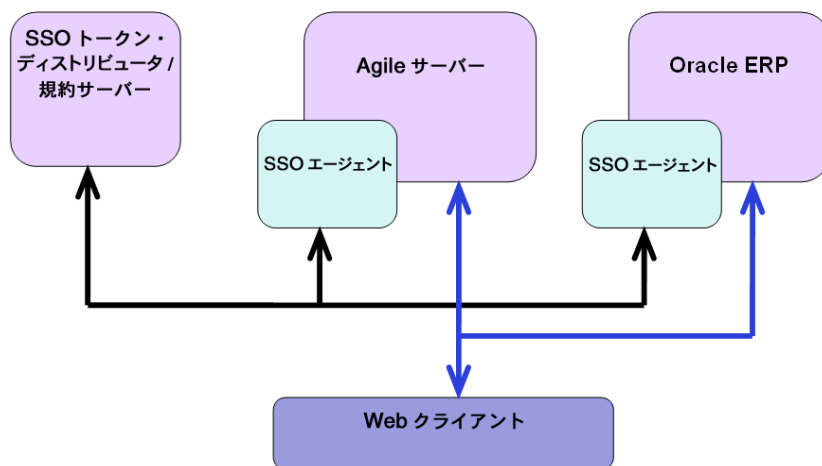
PLM システムに対して SSO を設定して有効にすると、そのシステムにサインイン（たとえば、企業ポータル経由でサインイン）したユーザーには、次のような場合、ログイン・ダイアログでプロンプトが表示されません。

- Web クライアントを起動する場合
- 電子メール通知の URL をクリックする場合
- 顧客のサプライヤが Microsoft Excel ベースの解決策をデklarレーションから起動する場合
- Web クライアントがタイム・アウトした場合

注意 SSO は Web ベースのソリューションで、Agile Web クライアントに対してのみ有効にできます。SSO は、Java クライアント、Java クライアントの管理者モジュール、または Agile SDK から設定または適用することはできません。

シングル・サインオンは、集中セキュリティ管理、他のビジネスおよび研修アプリケーションと統合され、Agile Web クライアント環境におけるユーザーの生産性を向上させます。

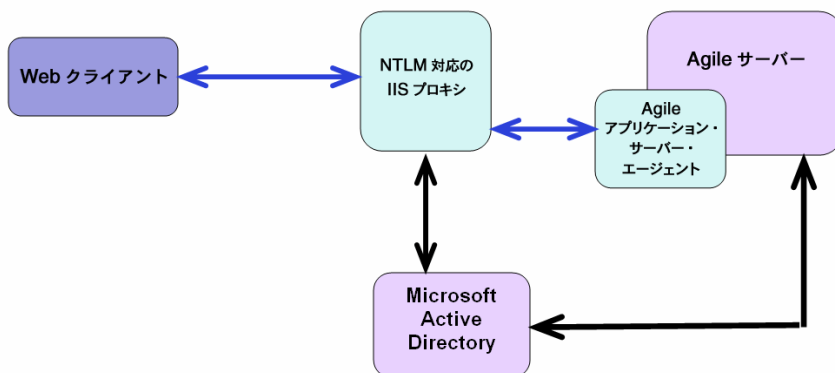
後続の各セクションでは、Agile PLM におけるシングル・サインオンの概要を説明し、続いて、Windows NTLM を使用して SSO を設定および配置する手順を説明します。



Windows NTLMを使用したSSOの設定と配置

後続の各セクションでは、シングル・サインオン用に NTLM を設定して配置する手順の概要を説明します。

SSOのNTLM認証



Windows NTLM用にSSOを設定する

Microsoft Windows NTLM は Agile PLM に対して認定されています。自社のニーズについてオラクル社コンサルティングの Agile 担当に相談してください。

IIS プロキシを設定する

Internet Information Services (IIS) をプロキシ・サーバーとして使用して、シングル・サインオン用に Windows NTLM を設定する手順は、次のとおりです。

注意 この設定の前提条件は、IIS を実行している Windows サーバーが Windows ドメインに接合されていることです。Microsoft Active Directory は、Windows 2000 以降、Windows ドメイン・コントローラの名前です。

1. Windows 2003 で、「スタート」>「設定」>「管理ツール」>「IIS マネージャ」の順に選択します。
2. ローカル・コンピュータを選択して右クリックし、「プロパティ」に進みます。
3. 「ディレクトリ セキュリティ」タブを選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. 「匿名アクセスを有効にする」の選択を解除して「統合 Windows 認証」を選択し、「適用」をクリックします。
6. IIS サービスを再開します。

NTLM用にPLMを設定する

NTLM を使用して SSO 用に PLM システムを設定するには、次の各操作を実行してください。

A. 次のファイルを編集します。

oracle_home/j2ee/home/config/jazn.xml

- 次の要素をコメント・アウトします。


```
<!--property name="idm.authentication.name" value="JavaSSO" />
<property name="idm.token.assertter.class"
value="oracle.security.jazn.sso.SSOCookieTokenAssertter" />
<property name="idm.token.collector.class"
value="oracle.security.jazn.sso.SSOCookieTokenCollector" />
<property name="idm.token.type" value="HTTP_COOKIE" />
<property name="idm.token.collector.cookie.1" value="ORA_OC4J_SSO" /-->
```
- 次の要素を追加します。


```
<property name="idm.authentication.name" value="AgilePLM-SSO" />
<property name="idm.token.assertter.class"
value="com.agile.admin.security.oracle.TokenAssertterImpl" />
<property name="idm.token.collector.class"
value="com.agile.admin.security.oracle.TokenCollectorImpl" />
<property name="idm.token.type" value="HTTP_REQUEST" />
<!-- SSO Type, can be one of following values: SECURE-PROXY, SITEMINDER,
NTLM /-->
<property name="agile.security.sso.interceptor.type"
value="SECURE-PROXY" />
```

B. 次のファイルを編集します。

oracle_home/j2ee/home/application-deployments/Agile/orion-application.xml

- 次の要素を追加します。


```
<jazn-web-app auth-method="CUSTOM_AUTH" />
```

C. 次のファイルを編集します。

<OraHome>/j2ee/home/applications/Agile/APP-INF/classes/agile.properties

- 次の要素を変更します。

```
agile.sso.cookie.name = CMSession
```

変更後

```
agile.sso.cookie.name = oproxy_username
```

注意 このクッキー・プロパティ名の設定によって、ユーザーは、OAS のアイドル・セッション・タイムアウト期間後の正しい動作を設定できます。

D. Agileを再起動します。

NTLMを配置する

次に、NTLM で可能な SSO 配置例を示します。1 つはセキュア・プロキシの場合、もう 1 つは透過プロキシまたはプロキシなしの場合です。

セキュア・プロキシの場合

この配置では、プロキシ・サーバーで認証が行われるため、プロキシ・サーバーを使用している企業にお勧めします。

この配置での要求フロー

1. ユーザーがブラウザを起動して Agile PLM (例: <http://agileplm.xyz.com/Agile/PLMServlet>) にアクセスします。
2. NTLM 対応の IIS サーバーが、資格証明についてブラウザにチャレンジします。
3. NTLM ハンドシェイクに成功すると、要求は、ユーザー情報とともに Agile アプリケーション・サーバー (AAS) エージェントに到達します。

NTLM は接続ベースの認証プロトコルです。クライアントとサーバー（またはプロキシ）間の新規ソケット接続ごとに、HTTP 要求の送信と HTTP 応答の返信による資格証明の交換が必要です。

4. AAS エージェントが、ユーザー情報をアプリケーション・サーバー・セキュリティ・フレームワークに渡します。
5. ユーザーによる Agile アプリケーションへのアクセスが許可されます。

この認証は、クライアントが HTTP POST 要求を送信するたびに発生します。そのため、認証は、確立したユーザー・セッションの間でも再発生する可能性があります。

透過プロキシまたはプロキシなしの場合

この配置での要求フロー

1. ユーザーがブラウザを起動して Agile (例: <http://agileplm.xyz.com/Agile/PLMServlet>) にアクセスします。
2. サーバーにインストールされている Agile アプリケーション・サーバー (AAS) エージェントが、資格証明についてブラウザにチャレンジします。

3. NTLM ハンドシェイクに成功すると、AAS エージェントがユーザー情報をアプリケーション・サーバー・セキュリティ・フレームワークに渡します。
4. ユーザーによる Agile アプリケーションへのアクセスが許可されます。

